f

M98

3

FER 3

1967

DATE DUE

DATE BORROWED

L

}

!

5

` .

複

明治四十三 年 三 月廿一日印刷

明治四十三 年 三 月廿五日 發 行

製TH

許

編 輯 代表者

行

者

右代表者

者

印 刷 所

社

女

東京市京橋區宗十郎町十五番地

東京市京橋區宗十郎町十五番地
武 廣 和 雄
吉
松
草
東京市京橋區 南鍋町一丁目二番地
株式會社隆文館
雄
古 城 貞
(肥後文獻叢書第三巻奥付)
肥後文獻叢書第三巻 終

宿の僑居にて
神の道を説給へることをよろこほひてよめる
を見よ
和田巖足集補遺

明治己酉の年の立春

彌原 しての

居因僑年中

さ立て春遺已後北の野坂のをちのこも千鳥聲たにかはせ道遠くても

のれ西の集

補のめり

6全

のの共日た厳

のろ足

田

今足て録利

熟女の中

首

み抄ろ

集二た

にりき

へら其の

ばて

厳って

置

中冊

もろつて

三

輯

よは

此の編

が

一

わかれても君くま川の水さいへはかたみにけふはむ苅利鎌のか口のやき鎌のつがの間も見ん魂あひの友

すひて呑む

さよふ浪のいつち由幾計無

に導けよ君

此字不明

神の命の命もちあだしをいむへらか齋斧とりてた

ますら雄の心振起し天に座

もろこしに有しむかしのますら雄か身も しらぬわ

かれちに男さひすさか りを逆立髪のつきしふ

くりてよめる哥一首井短歌ひと哥

生れ出つつあらたまの年の八千年しき玉の醜の数に

井口盆方か蘆北にわかれ行を求摩川の岸にお王當つみの沖津白玉たまたまも國のおやなる皇國に

語りこさより行末も過行 にもかにかくおもひそ

出る清水汲井口のあそ君も吾もかたみに今は白髪の

もかたみに今は白髪の

山の山人水島の島の島守とこしへにかくてあらむさ

くれのおもおもひ渡りて馬車手携りて月花もともに

めはしを蘆北の醜の御楯の御幾守とよさしの隨意處

から野坂の浦にあひきする蟹の綱手の引わかれ

れしゆけは村千鳥只立おくれ劍太刀はけるもの

まさ桂太きこころもわれ人の身にしみ渡る川風にい

ましこりて只一むきになかこのむのみのすさひにし

か魂の靈しきしらにうつを身の手業たわすれ曇夜の

おもひ惑ひてありきぬのあり經る民を磯浪のうつて

もおかす言擧せぬ御國にはあれご言擧せん時此時と

はやすく物を伐なす首槌はいしつついもち島の子を

くたくか如(葛城の一言ぬしの一言にのり辨して懸

まくは受けれても 皇神の御政事の廣道の道の大道

ゑや君島の松のたねて千とせの春のなさに

のに輯の和か也田一たがをにに宮濱雄しろす

長き齢をもろ人のかきよむさへそ靜心なき

さ人もうらたぬ

なり

君か身ののみして

に老を養ふ水に酔

しも

むかし我釣て放ちし白龍の行方をしらに鎌倉の見越

の岬の磐崩の悔とはなしに玉くしげふたたひつりて

つれつれのなさにせなさくま川の千尋の潭に垂る

る乳のむなしからす提廣鰭の魚の力のひこ闘らひ此

方彼方と河も狹に狂ひ廻ほり岸陰に騒くを見れはい

(婆君の年瀝ぬらむかと思へるなりきあはれあは

れ何はあれどもにもにも勝る河のさち得つさよ

ろこひ折こそあれわか好き友の辛川のよの長人の壽

のうたけの庭の御肴に是をたにさておくりつる共脊

の肝

は途に面隠す銃にし代て常富廼富の箱縮転

向ふ心静け(春秋にとめるをほかむうみの子のつと

ふ莚の中におき提豐神酒爲酌玉うきとなるぞ奇しき

しししもの膝折伏てもらへるもろ人を奴力大海を

渡る鯨魚のいさましくしか潮飲む有さまのあさすを

せささ千代も八千代も

こしほそのすかるななこし玉くしげ二つの瀧皷か流をよめる

弓取

草と名をや負布世之

よめる

れる花も散へく、 うてなさへ根さへたゆへみ大丈夫 歌はまほしく
舞にしもかなてまほしき瀧の音阿波禮

も、思ひ惑ひて、みすず刈信濃の眞弓捨しより七一六

はたき

りおつる水の煙し朝霧の山打きらし夕雲の空に棚引

遠近にところきわたりはたたかみききの良く光る神

みのおそろしく深潭の千尋の底に雨ふらす もなは

りたたなはる五百津岩村に眞霧ふく鬼もすむめり瀧

のへの道行人もおほかたは太刀の堅めしつか重

荷をかてのやすらひもわこそいこはねかくはかり靈

に雄々しく勢ひの烈しき限り向角の競へる中に豊な

る瑞穂の國に玉たすき懸の宜しきうましねを他田の

山の落瀧津名におふ磐戸の磐たたす 少彦名のか

むほかひほかひ狂ほし豐つかひほかひたらはしみき

かむさなすやうだけの音なして岩切通し瀧壺に落る

は月に打狸の戯時守のいそしむ業もうまこりのあ

やなく思はえしつたまきいやしと聞此瀧の鼓の音

のみ天に澄み谿間に答へわれ知らを歌に温克の盃の故よしを顕しかねて心静延齢とい

ふことを和田嚴足集補遺

うつそみの人にはあ

ら生ふる早苗などてかくしけれる稲ぞ夏だけて秋 らすて、下彍のつらをに懸る秋の花露も蹴れて色も

のたり穂のやつかほの秀のすさひに白玉のいほつつ あやににほふなりけりあはれあはれ箭にやむ猪も荒

ごひのうるはしきをしねぇなれば芦原の中津 皇國 熊も力競はは、たはやすく、むた手に捕むさつをら

にふさはしき美都能由幾てふみなをさへくだし賜 賜も、握りもちたるさつ弓を強ひてしひかは、はさま

雪秀詞並短歌

おく霜の霜野迺原に狩暮し明日とて踊る狩人の馬の

しりへゆしまし云聲こそたて詠瑞のを

弓取草をよめる

雲のゐる山の白虎嘯かは白雨ふる風ともならましも

遠山の夏の雲といふことをよめる歌反歌

はなまだき、はなにまがひて、打わたす、峯に朝立ち

打むかぶ”山に夕ごり、梓弓、はるのこころもともす

れば、まごはしけらく、ありさまをたなひきかへて此

頃はうつくし妻の黛の遠山の端にたぐつぬの眞白の

虎の眠る如雲こそ起れ、みな月の照日をいたみ千町

田の田面のひらも裂而有を、夕立雨や降り来ると下

よろこばひ風流士の花待渡る思ひゆも増れるものを

心なき天津雲て千磐の動きもやらず吹風をなみ

反歌

大雪の降ぞ去年は見し瑞穂の種の有も知ら

すて

反謌

ひてゆたかなるためしにひかむ梓弓末の世遠く玉葛

絕ることなくちまちたもさなだもおちずまきつがむ

たねは此種うゑつがむ稻ぞ此稻まがねふきびのつ

むがりあつまなる陸奥山に花咲しくがねしろがねま

かがやく眞玉はあれご、くさぐさの質のおやは、豊

うけの、みめぐみしるく、あたまもる、うべなうべ

な、かく生ひ出しいなだねを賜るまゝに庭雀、おざ

りあがりてよろこぼふおほみたからぞくはしほこ、

ちたるの國の國の本なる

長歌

水無月の十日あまり二日山下素長が家に集ひ

あだにねいとさむる物こそあ

菊の池の学萃ならでまかなくに何をさておのづか りけれそを何とかへり見すれば松を時雨の笠にきて

したおもしろしささ波や

又

名に聞たる住の江

さなかの 船の

富士の白雪水無月の

ふりつむ如くじきてこそ

又戀

かふせて打ねふる

な鵜鶘

なたこなたにみそささぎ

又

彼縢

方折

h

朝おしあけ四方の山

一夜の程に雪ふれり

折るもあたらし見ぬ人に

夫

袖かけながらますらをも

又冬

惜又 紅葉

又

肥後文獻叢書第三巻

見せまくもしもみぢ葉に

方

おもひ惑ひぬ二かたに

振 放

如の意

ふりさけ見れば虎の

何をさ噛みに悩む爲そ

夜

萬葉に例あり 向

こさひの牛のむかつぬを

雪の日くらし飛渡る

葉みな月の望に沿われは其の

望にけぬれは其の夜叉

ばわれは戀ひわたれ

あらら 松風 おさたてて

眞帆に片帆にふきわたる

一日しゑや

峠によしやぬるるさも

土産

志賀唐崎の旅のつご

闗屋の前に、船泊てたりしに、やや日の暮は

つる頃より、辰巳の風、いよよ吹強りしかば、

打渡す、女島に並ひたるけふこまりといへる

浦に、碇をおろしぬ、夜もすから雨風をかかる野分に浦の名の、けふさまりたるさつまふね、

あまの身知らぬうきねして、いかにわふらむこしき

右の哥を、いささか縮めて、今様となし、ふ

づくゑを叩きて、うたひしを、左に記す

野は野分、海ははやての、烈しきに、漂ひながら.

けふこまりたる、薩摩船、明日の身しら

浦の名の、

ぬ 浮寝して、いかにわふらむ、是や此、 けふさまり

たる、甑のおほふね、

やみ

なかりしかば、船人を憐びてよめる、

速 風

は

去年の葉月もちきのふさいふ日より、石の

關屋守にさされて守りをり、同二十日の夕片

まけて、雨降出風も烈し、折しも薩摩國、甑

嶋の船、入來り、さしきの津にはえ入らず、

今朝のふさ思ひけり

さめのまにまに日をよめば

一にひろいれて

ゆめにゃ見るさひるいして

過し櫻をけだしくは

南河

琴さればなげきさきだつけだしくはここの下麺に妻や

なくかねさ

花打つ音かまに聞ゆ也

花

らりた心隣の家にうはな

叉

を

つばらな

なみさいふ

りうな皇

ふこり

みたしもあへす森風は

御製歌

ない蕨折る兒の袖ひくを

人にはあらで枯

何を持 ばな見には來む

山櫻てか足曳の

花あはせん御唐人に

とらへば

製

うつしよの

試がは天曳人

に

荻のやけはらかきわけて

叉 早蕨

八重の一重は藻煙なりとは今ぞ知る

鹽火の

うしろめだしさよく見れば

叉 春風

菰

柳の糸を刈りこもの

まづ目に見ぬぬきて

眠るに似たれたがかめる

折返し

合歡

ひて眠れるさあてら集妬後事 加

打う武

くな見てな神足

ねう 元古

さは嫐にみ妻記

の妻に櫻

りい歌

うふに

ち前見

いた

狂

人の心をくるほせり

うら安く

酒ひゑひたるすさび草ふけゆりも花さけば

秋こそ穂に一枝をりていざ見せむ

文月たてさ逢ふ星の

違

愛

渡りの爲さかさささきは

七一三

も

一つそふ

夜ただむかひて此年身におもひ出ぞ直

月影に

雲だににもなき名におふ今霄一村の

っかへもあへぬ橋姫の まよびきなせる三日の月

眉渡

立

乂 初秋三日月

は出もせめ

隈となりて村すすき

夏のにひ毛の荒態の

勿

うら珍しき月の輪の

同しにうたけせむ

叉

心

まゆりもいてやゆりあびて

ねぶかもこ

眞 震

萬葉に例あり

ねぶの花こそそも

藤山振もちりす炊もあたらししみづくむ

ゆめ玉川になこぼして

井手の山吹露をだに

又夏

大宮人のこまにかふ

又駒さめていき水かはむ云々

人間惑八重かすみ

須磨の浦廻にわひて

荒山に茂れや千松しか齢をはいくらも君に奉るかね

狩人

やかて今年のにはつ鳥

こぞにのこして啼これは

のし

寄松祝

夢おどろかす羽たたきは

去 年

かほしあがるあかさきに

橘のかけふむ道にありかよふ人草滋き君か御代かも

曉

驚

寄道祝

波の下にも春ぞたつ

あしかひで入れす

四方の海の外のねみしもうへしこそなへて長め神の一難波の浦にさす汐の

廣鉾

かつ滿隠すなきさには

もあるかも

初春

ゆふしてて神に手向るいつ樫のいつより安きみよに

社頭凧

のらしく

にさける

言さかの神のみこさやかくはかり安かれてよこさ ますらをか弓に矢さして待としもしらぬはおそき物

妖怪

にひばりに蘆菅生ひぬ八千鉾の神の御霊は今もかははも

らす

君ならて外に上ぬ鷲の尾のそかひにおきし父母等

神祇

は剝見し

あそ

海士のかるもにすむ虫にたくふ身もわれから猫の皮 大御いめを畏み畏み合せつつ功くすしきくすの木の

隠士出山

浮雲のうまのふつまを乗りかたみ振さけて見る故郷 狩人かも

の空

おひそめの千篦の五百篦はすすきなす野に立双る御

すらん

七二一

降りて父天にかへらぬ春の雪急きてのみや消ねむさ

しかるへみ

ささらかた錦のうら旅衣着初し袖の花ふふきおもひそいてつ打拂家人の我を松風心なく旅のやどりのゆめおどろかす 味村の狂激の水けふけふりはたてと立も騒かす

中送日

水鳥近馴

を酒にさかへてかはさはや

身はまし智はおそし久望の月を心の馬のはなむけ萬代をるむちの六十へてのをや重ねん

影中松風

龜のかたに

別路に心くまなき月影寄月餞別

けたの崎なみふすわにを打橋の只渡こしそ此の

鵂鶹まなひの窓のこもり火は暁かけて影隈もなし

鬼

まなはしら

曉灯

くとも吉

旅人の袖ふきかへす秋風にぬ島か崎の浪さわくなりまなほにし世をしたらは大路行こさひの牛のそ

ふ人の櫻を折し見習ひに雪のさきたる軒の松が枝遠方の嵐や松にさわくらん雲はあさなき夕暮の

浦松風

牛

山家松

夕眺望

き津島みゆ

木高き

るやとりを尋ねれは嶺にふる松そ寐くら出てて汐路はるけく飛わしのいかくるる島さ

嶺松

あらわし

朝眺望

住江の浦風に霧晴れてみどりこたかきあらゝ松原かも

そも

名所松

ま玉手の玉手さしきいをなさす神の夜床の衾ふゆき

憂き旅を忘るる月も幾度か満てはかけし春と秋に

衾

はかへし見し糸のみたれのくる

代こそ思ふ

後朝戀

みつねさしいやさかんこを根こしもて植る心は八千

のみこそ

松を植て

たてあり恨はいはて逢瀬には見越の崎のくゆさ

絶後會戀

逢ひみてはなくへき物を我なからこさわりしらぬ心 せみ

なりけり

子のまゆに籠らねとわれ戀わひぬ心音蜂

母

逢增戀

こひひぬ

愛しきやし人まつさよのふくらくをなくさめ顔の山 利鎌もて蟹のかりもにすむ虫の我からなりぬ戀の奴に

ほこさきす

の月影

深夜待戀

ははきやし妹にあふちの花口口ささやかにてらす夏

わたらむ

月前戀

大船のたのむしなかりせばあはてる世をいかて

めやも

雨とふり雲とうつろふ習とて浪たた越ゆる木のまつ山 尋ねあはぬ心を汲みて妹しらは門へに杉はうみさら

契不逢戀

尋不逢戀

變契戀

怒りにはふさはぬ物を野坂のもとなひりへりあな 忘貝千貝八千貝ひりふさもあはぬ思ひはわすれかね

うつせ貝

つも

不逢戀

契空戀

我もいて後瀬をかけて山川の友ねのをしの炙りおか きそのよの床におす我紐をけさしも妹かざりだ

はや

くらんか

へしやは

契戀

うなゐ兒か手にはなあたり轉しを雪見る友のなかる めにけり

依雪待人

おもう兒をけふ三熊野の濱ゆふの百重の一重なくさ

なす雪の一ひら妬しさやもてなする浦の白浪

見戀

ひとひらを物に譬はは莚なす雪の折敷伊勢の濱荻

浦雪混浪

海邊雪

くらん

暮もあへぬ歳の日数をよそに置のむら竹

てあたりを春の何急

年内立春

ふ人もなきわかやさのかよひちを写してささす門

山家雪

りさ

住江の神の齋垣の雪深しそれかあらぬかあらら松原とめ果てて見等
申さく御迎の御馬引たてて松蔭にあ

此の程の日並のすさひ狩人も鷹もつかれて踊る夕暮

鷹狩歸路

隣にも朝戸おし開き我如くあはちふ聲すけさの大雪

置く

白龍の空にかくるを見もあかぬ程にや雪は庭につも 明日立てむ金戸の松の瑞ねさへつちにつく迄雪の降

れる

はしに

らん

年雪年深

またるる

關守は馴れて物とも聞さらめあはれ淡路の夕浪千鳥 馬のあおとさととしいつか轟くと雪のたねより友を

たての厳樫の下尋ねきて今やつとへる雪のあら駒

雪ふかみ下萠あへぬにひ草をよきてや駒のたもとほ

與の波よるひるとなく雪ふれり立かはるべき春まと

社頭雪

玉垂の遠の家村きりこめてこさひの牛のこゑ幽なり

遠村霧

千鳥

玉(かね千々につらぬる鱗なす龍とかかやく涙の月影

の朝霜

磯にふり浪はくたけて帰れとも我は踊らしをさや ふせ庵のきその夜寒も諾なりしおきこそかくせけさ

けみ

霜藏家

水邊見月

月から長柄の橋を家苞に包む袖もか見ぬ人のためうつつより夢路にかよふ間使は風におさなふ落葉な

夕汐の昇る濱名の橋柱たちまち得たり立待の月

落葉驚夢

月照古橋

あな囂と落葉の窓を明て見る亘りの森の相寂しも

見れ

遠近落葉

家路には手馴の牛を先たててわか小山田の月をこそ

れの庭

田家月

一つちり二つかすそひ風まれて落葉のつもるゆふく

の月

夕落葉

花ならはしをしてこそ姨捨のやま路は越ん秋の夜

紅葉もて酒温めし庭の跡にうたた鷄の霜あさりする

名所月

初冬

現身の世のさかしらをうきくもにたくへてこよの月

はみてしか

逢坂の關路に雨のそほふれは牽こそまさへ霧原の駒 秋毎にをしみな
れても長月の暮行けふは物そかなしき

晴夜月

九月

雨中駒迎

さすらへる人の袂の露けきは千鳥の跡を見るなり

水邊納涼

夏草のねこの山風吹落て浪野のはらの尾花玉まく

光神なりはためける海の面に鯨のたてし汐煙はも

風動野花

海夕立

みる

夕立のはららく雨に濟やかてなかるる庭の面かも

八千草のにほひいてたる秋の色を蟲の垂衣かかけて

白雨

しきいしきわたらふ富士の山

おろしの風

草花告秋

する氷室のあさいやきや

跳り上る鯉の廣族花にふり池の道の散るもあたらし 破れつるゆめよりやかて秋たちてうたた恨る荻のさ

氷室

荻告秋

さて

名にも似す立ちこそかぬれみはかしを鋼の池の蓮見

鏡か池處からこそ花蓮身の盛りうつす少女と見幽栖秋來

立廉のにひものあやの胸分の星も見わかぬ根白高萱：

池上蓮

秋

夏草滋

うら若きわか撫子の間使はあなおほつかな事へあへ見し花は昨日の程と思ふ間に青葉の山に甘くらしの

んかも

鳴く

山蟬

人のもとに撫子を遺すさて

せむ

射目たてて富の小川を渡るとて苅らぬ菖蒲の袖にか 荒金の地さへ書は日にさけついさ石川にゆふすすみ

をれる

ゆれ

物の音はすたく鬼にもあらさりぎ世に立わたる秋の

初風

咲そむるくらな色の女郎花なかなか秋をつけぬ花

かは

水邊菖蒲

池杜若

雞に

むか股にひちかきよせて鳴澤の澤のふけ田に早苗 敷妙の枕はまかてねぬなはくるよ契らむ庭の水

る見ゆ

夜水鷄

探早苗

澤に螢をやす浮蓴菜夜深く人を繫き留めてき

苗取るなり

螢照水草

あさりせし蟹の手業はあさもなくにひばり小田に早

汐の泡の輝くかけを友と見て波の穗近く螢さふ見ゆ

早苗

海上螢

時鳥夜半のつつみも打さして聞けは初音の山郭公

深夜時鳥

飛ぶ宇治の螢は橋姫のくし党の玉さみやはまか

澤

ほとときす富士の雲間に鳴聲を裾野につるる山おろはぬ

しの風

淺澤に機張廣き錦なすたてぬきしけくほたる飛見ゆ

とく聞くと誰れに語らむ時鳥夏もいまきの岡の初聲

山時

ぬれて干す時間もそなき旅衣袖の湊の五月雨のころ

橋螢

岡時鳥

湊五月雨

時鳥

ふる

うたかたきらし八重立雲浦五月雨

尋ぬるもあなおほつかな五月間!ふの山の山時鳥ゆな

浦時

池の面ににほひれる杜若きそひかりする袖に摺ら

巻

尋鶴公

七〇六

肥後文獻叢書第三の哀ききしる海士もなし野坂の浦の山時鳥

わひてすむ浦の苦屋のつれづれをなくさめ顔になく

も日並べて長居の浦に五月雨を

和田嚴足集補遺

七0五

春の日を長したのみたのみきて過にし程は昨日花と見て欺かにし雲にはうしろめたくも侍郭公

待郭公

送春如昨日

夏

なかなかにこりてなつけは時鳥思ひあかれる聲聞か

めやも

時鳥

花ちりて山ほとときすまつ程のたゆまつくこか藤はの庭

さくらむ

暮春藤

森かけにあやなきやみやなからまし卯花白きよみ

霍公鳥尋ぬる程の木隠れに匂へる花や春はささめし

暮春花

かも

路卯花

藤なみさ衣にきそひてしみたてる荒山小松乏しきろ

にふくみて

藤埋松

若かへて何かは秋におこるへきそめんにしきをした

めり

若楓

咲朧のなみのすさひに此の比は松の嵐のおとたゆむ

欲得

かきろひも匂ふはかりに岩間照尾照峯照躑躅花咲くそに鳥の衣きそへり夏木立眞玉さはまきはけむ太刀

松上藤

新樹

躑躅

すれ

いま

彌生はかり病にふして

そおもふ

咲くを待ち散るを惜し花過きて春は昨日の心地こそ

さきしちるとは人傳にききつつ幾日打こや

すらん

雪見て老たる駒にまかすれば足搔に匂ふ路の卯花

足占問方こそしらね白雪のちまたまとはし咲る卯花

杜卯花

草香江にまたうら若き蓮葉の心浮たつ春のあけほの

はしつる

いくはくもあらぬ櫻のさかりこてかくそ下送日

へらむ

花雪ならは老たる駒にまかせても花ちりしける道はか

柄の山

道落花

旅をうきものとはなさか思ひけむ花見てこゆるあし

夕されは繋ける駒の餌乞の足掻にさへも花の散しく

中花

夕落花

花にあかてくるる莚に油火をさたにも月のいはせさ葛城の山路峻しみ振さけてよそにこそ見れ花の白雲

人のいひければ

月前見花

花の白雲と云ふを下の七文字におきて歌よめ

山かけのふりぬる寺も花さけはすままくほしきやさ なし

そこそおもへ

ますらその心たらひに花はみむ醜の御楯は命はか

かも

ちりぬれは枝にかへらぬ櫻たに昔の花にありこせぬ

河花

寄花懷舊

關の名にかけてなこそと春風をなこめもあへす花散まよひ散にし花の俤のかはひらこちふ蟲を飛なる

しきちる

花面影

關路花

らを

蛹かゆく横山にふす緒にもか朝夕みてむみやまさく ぬ人をまつらさよ姫いきかへり花のひれたにふり

花前待人

深山花

こせぬかも

稲むしろ河添柳しきちれは流るる花を若鮎潜めり

古寺花

ひやかの遊

江上春曙

和田嚴足集補遺

七〇三

春雉思子

たらしに

帰るかりつれてはいな

れてはいなて草枕旅寝のゆめをなさ驚か限もなく花こそさけれ端山つみお(山つみのかさし

かね

花滿山

算みさしの日数を旅の宿りにて忘れしめる雁 しも

旅宿歸雁

櫻花ををりにををりささらかたにしき着粧る山し乏

るかりかね

山花如錦

こゑよりもつはささきにかくれける霞の空をかへ

にけり

雁

くれのおもおもひしあれは雪見し八尾の花に寄立

春雨は軒の葱を傳ひさしつららとなりぬ葱なからに

見山花

なり

みむ

春雨のふりしくけふのつれつれを慰めかほに蛙なく 花のぬき柳のたての高機を春の日くらしおりはへて

春雨

白妙の花よりしらむ山のはにかたふきかかる山のは あへぬ雪に霞の匂ふにも面影より花のまたるる

の月

初入の霞隔てて待乳山待程とほき花盛かも

櫻柳交枝

春曉月

初春待花

早蕨

へさぬ

彌生へて子日のぬへに来て見れば小松かもさに萌る ささすなく呼子鳥何しかもちりにし花はよひもか

樹陰早蕨

曉呼子鳥

にいてぬらん

もゆらん

春されはしのふの岡のさわらひもしのひかねてやほ子をおもふ春のききしの心ゆや野はおしなべて草の

岡早蕨

春されは雪にふしたる村竹のおきたつ園にうくひすめかけぬらん

のなく

荒駒のはらはふのへはい(はくのあみもてみどりそ

竹裏鶯

春草

百濟野と名にこそおへれ鶯のなく音は何かこちたか

るへき

すかねのにとりもつなかぬ駒の尾の春の柳はうちな

ひきけり

野鶯

春柳

花にあかてかへる山路の遠近に夕方まけて鶯そなく

せめ

夕鶯

春の野の梅をこきれし我袖の香をこそけふの家苞に

れり

梅留袖

朝戸あけて只みいつれは孤高ねの松にかすみかか

春風

嶺樹露

鬼神にあらぬ物から目に見ぬ梅か香つれて渡る

立かへる年のことほきことさらにいはてもかほの鶯

の聲

沖津藻のなはりの山の梅か香の風の手駒の馬にのり

鶯入新年語

依風知梅

あまきらし昨日をけふと降る雪の御代の花さく白銀 里の子ら大宮人に梅さけは言問ひかはす折もあり鳧

の山

里梅花

元日雪

荒駒のくゑはららかすあかきより村かかる春の野

の雪

和田嚴足集補遺

春雪

七〇二

肥後文獻叢書第三巻

伊豆足か家の集

むだ一つがの木の彌つぎに、語りいつがむ”

くずしき君を、遠つおやのいさを、久堅の天地の

ならぬ、桶の

わたす和田のみさきの、並小松なみ

をつつにも向ふが如く、おもほへてした戀つゝ打

に、今だにもむこのわたりに、立霧をいぶき靡かし、

す、世の人のしぬび渡りていたなげくおきその風

かへらぬ人を、新玉の年の五百年、許多の春秋おち

百ふねのさもへならぶる、湊川淵瀬はあせて一岸の浪

に草はむ駒の、口やますこさし長さ、人なさかめそ」

向ふ心もしぬに、思ひいでてうたへる歌を、春の野

し、このあその御霊なるらし、おむかしき其古へを、

に、いちじるくたてしくこさも、此君のいきほひなら

に、ならびなきくしきいさをを一つがの木のいや艦々

宮の守りとも盾もならし、いにしへゆ今のをつ

島の大和心を、鏡如さぎ明らめて、三芳野のよしのの

ちず、従へるうからこさん、此君の操にならひ、敷

すり、よる浪の立もかへらね、うみの子もはらからお

もせず、君こそは武庫のうらまに、打さらし磯もとゆ

に、語らひてますら健男の、ならひさてかへり見

き心を、つくしてよゆめふことを、山菅のねもころ

垣のふりにし郷に愛子をかへしやるさて、皇べに赤

公らな苑他も九治りをさ人五年楠あも三こ天

四て河は十校島羽手年當五 たわ二の六

年訂豐田にのろ百 むた年あ乙

六を太眞渡作なに寫細家けばばれ

澤のむ公かの厳羽路は年 にくも

足さ五ての

霧翁は月祭作

自の安ころな

筆言田十こら

のの貞五日よき本を

知方日は翁にした前其例橘伊豆足か家の集終

宇 野 東 風能

しか野

字

東月明しにりて月す九

多に二百

所風盛りして落名前か

沼ものの

實

甚落に

幅の

のてにば

名

になく世ら

然

なた戰保

荎苑

苑らむ

得、路

さあ

蓬索ま

百年祭もれ明う

若十右

作貞

こむ

しぶ

ふらすや

正ば

な

年

き歌

え鏡

今保

こそ

ばたねがの

らし世

明治三

貞死あ五

すき

べく解

鳥

落日

すずこも世

こ月

うまこりの

日寫畢

加郎足ろさり祭 くし月にニ

天保六乙

八や未

物原三

世を

如此いふは此君のうから和田正遠の裔橋嚴足

高麗劍和田の御崎の白浪に幾代の人の袖湍すらむ

天翔り君こそみらめ大王の敷ます國のやすきこの

て千々になげかむ

ふりし世に君がなげきしなげきをやなげきいつぎ

らす

遠つおやしきてし忍ふ心とや折ふし君が夢にみゆ

反歌

七〇〇

うら安の名におふさ、やしましろしめしゝを、 ささびの鳥待がごと、まちさりて奉らむと、大かた

禍つ日の神の荒びは、すべもなくうれたき物か、み に思ひ頼みて、稲舟のいなみ給へば、従いる軍人さ

なものおなし氏なる、足利と新田のあそは、大君 うべなひて馬とりつなぎ、 ま草かひあるは水か

へ

の醜の御楯さ、にほ鳥の相ならばして、大みかご守 ひ、おひそ矢も太刀をもきて、鳥の只思ひ立、追

らすべきを、中々に互にうらみ、箏ひてはては

しひ語

しかむ人しなければ、古の志のおよなが、

しも、おほけなく御仇となれる、足利のしれたる人 りひ難みこそ、いそ涙のうつておきしが、いく

を、一たびは遠き國べに、たはやすく追伏せつるを、 ばくの年をもへねば、足利のきたなき人ら、しらぬ

しなが鳥いきもつきあへぬ、其程にみあだことごと、 火つくしの海ゆ、朝びらき千船は千舟、つらなべて

馬の蹄いつくすきはみ、船のへのいはてむかぎり、 眞梓しゃぬき、和田のはら渡らふさきは、眞帆はれ

いしき(取つくしては、梓弓末の世かけて、大御 は千島もみず、いはつれは涙もかくり。船競いふ

閩安うらましき、そこをしも思ひはかりて、楠のあ な棚打ちて、津の國に漕近つけは、眞金ふく吉備の

そのみやたび、荒小田を返すぐも、いきごほり足 道ゆも、みな月のひざめはららぐ、夕立の雲かおこ

もあかゝに、いざなはしすゝましかごも、共時の軍 るさ、みるまでにこゝらの軍、あざもひて既に責め

の君に、ましつらく義貞朝臣は、職業の討勝つまゝ くど、都にははゆまつかひし、しきなみのしきてし

に、仇をしもあだとももはず、あぐらぬてのらしけ れば、其仇をうさのつかひ、大命かぶるまゝに、

らくは、おさつ日もきのふもふも、馳はせてあな 打向大逵、共道に出てたゝしつる、そが中に

やむ駒に、鞍着せてもとな遑はすば、涙のよる磯の 此君ひとり、天津神直日の神の、世の禍を直し給は

さきく、眞鴨つく島の崎おらず、大王のしきます む、時をしもあり待ちがてに、つばさなす鳥にはあ

隣は、おしなべて遠のみかごのさきもり等守らひらねご、うつし世を飛立ぬべく、一すじに思ひ立たし

をれば、足利が勞れ軍を、荒山のこぬれにすめる、むして、花ぐはし花の親なる、櫻井のうまやの道、あし

をば岩根も打置、有馬等を蓑さり着て、しれず山 雀踊りあがりて、よろこぼひ皇御軍は、駒なへて

ごに野行、一日には千人かへらひ、一夜には八千人 の眞砂を、あわ雪のくゑはらゝかし、唯わたり蹴れ

にけて、人もなき宿となれば、旅の上に雀友よび、 入ぬれ鎌倉の軍人等は、折こそあれたのみおもへ

鳥とふおほをそ鳥そ、打群てあさりはしける、かく いくさ君を盡して、千萬の軍と共に、河内な

る、

しも成ぬるほどに、いでましの御舟しはてゝ、 かり 千早の山に行向ひ責にせむれご、楠のくずしき

宮をつくらし玉ひ、 ましませしはゝきのに、劍太 軍、魂を千引の石に、 たぐへつゝ人の數こそ、高麗

刀名和のともがら、播磨ゆは赤松かむれ、吾妻には つるき若木の花のおよび折りかぞふるばかり、少

にひた足利の、人々ら軍を起し、内日刺都の内も、 なけれ心健くて、國々の皇みくさの、鑑さも親さも

もろの國べもなべて、別の亂れにみだれ、戰 なりて、日をふればひをふるまゝに、かつらぎの

のあるが中にも、高時がありかをしめて、わたる 彦眞弓、つよかり聞ける、やたこごも心たゆみ

相摸の國に、たつのまのあがくあがきに、鞭を打は て、春の日の光に當る、うすらひの跡なく成れば、

せにはせつつ、押よせて新田のあそが、 やからうか 八隅知し吾大王の行宮を定め玉ひし、伯耆なる船

らしが命さへ、いのちともおもはぬばかり、村鳥の の上より、ふなあがりかへりいでまし、大御供春待

すゝみへば、秋田刈鎌くら人も、やみじしのかへ つけて、咲花のゑまひさかばん、さゝらがた錦きそ

り見もせず、戰へばいづこをさして、まさりおさり、 ひて、御船路は浦の八十うら、浦まおちず楫の音高

いふべくもあらぬ、時にしも新田の君は、すめろき く、大路ゆは道のもっくま、行駒の鉛のこひいき、

の神の帝に、いそしみて仕へまつれる、眞心のもは 紅の塵ふみたてゝい日とふ天の足日に、九重の

らなれかも、和田つ海の神のちはひに、常はしも味都にいらし、宮桂底つ岩根に、ふさして大内山の

田の千尋の、底ふかみ船こぎ渡る、稲村のの潮を、雲の上に匂ひあまれる、葉廣のゆづまつばき、てる

はろぐの沖に退け、見も馴れぬ干潟となれば、庭 花のひだりてりゐまし、しか葉なすひろりゐまして、

六九八

る軍は、須磨人の焼くてふ汐のからくしてにげか 落る小橋さ共に、彌人等けふりかくもの、谷かげ

へりけり、かくしもたばからねつる、其後はいよゝ の旅さなりけり。かゝれごも更に新たに、くはゝれ

かしこみ、葛城の高間の山に、ゐる雲のよそにのみ る軍しあれば、そをしも思ひたのみて、此山を堀く

こそ、氣ならべて守りをりしが、いたづらにまもり つがへし、はてだに仇はこらむ鋤いほち

もげで、飛騨人をこゝたくつぎへ、斧の音つゝの 取持だちつゝ口なる人は、軍してしりなる人ら、

ひゃきし、霰ふうかしましきまで、たてゝ目をふ さなく夜さもいはず、ひさむきにすきはねしかば、

るまゝに、風の音の還すめろぎの、世にし高田の宮 尾一つをば平らになしぬ、しかはあれご岩根ここし

に、宮人の仕へまつるさ、朝夕に有りかよひけむ、 き、高ねをば神ならなくに、限り有る人の力に、い

古しへのみけの小橋の〟いひもえず名づけもしらぬ かでかもほりつくすべきかにかくに思ひめぐらし.

かけはしを作りいでつゝ、大綱を千づな五百づな、 はからへば計るまにく、防ぐべくたばかりまけて、

うちはへて引起すさまは、大空に立はばかれる、虹 戦へばたゝかふごとに、吾妻人たゝかひまけて、武

さのみ思ひまごへば、見るがうちに倒れかゝりて、 藏人雄々しさいへご、さがみ人健しさいへご、軍せ

草か山た〟越路なす、谷の上に棚橋渡し、いちはや む心はなくて、相共に語らひけらく、ちゝのみの父

きらこさぐ、飛鳥のい行箏ひ、此山の四方をか は老いたり、はゝそはの母はやまひて、たかん)に打

くみて、七里のうちに有りし、軍ごもこゝに集ひ こやせしを、玉章の使だにこず、今はしもいかにか

て、天雲の五百重累り、 ほごくに渡りさしぬれ、 すらむ、みぎり子をわざもか、朝夕になぐさめか

神無月空にしらえぬ、時雨のあめ降もふまで、し ねて、我をのみ戀ひつゝあるらむ、こなみがうみし

くくに油をそぎ あめの火を放てるまゝに、嵐

我目ほりわび

の子、うはなりがうるさめも、

さへ吹きまきぬれば、まさかりに燃えもてゆけご、 なきすらん、行きてみむいざさしいへば、おのもお

人さはに競ひかゝりて、踊るべきよぎちなみ、焼のもしたに諾なひ、鎧をばこのねにぬぎうて、弓矢

肥後文獻叢第三巻

橘伊豆足か家の集

にまろばす石は、いかりの落るが如く、よみにま

すやくさの神の、おきしきていさくが如く、おひた

てる並木押なみ、たゃなつ!岩根ひゃかし、荒海の

岸打波の、磯にふりさ霧にたちて、散々にさへく

にけ、人の上にうちたふれ、馬の上にうまかき伏

せて、草むさんかばねは積みて、谷彌谷平らに成り

ぬかくてこそ楠の朝臣を、健してもささり有り

も々の人らこさん、見驚き聞もおごろけ、然

れごも身も棚しらぬ、東人命もしゑや、 朝霜のけな

ばけなゝと、目やひはかくてたゝかひ、夜はよは唯

責めしかごかにかくにひかねて、 いくさごもつ

ごひに集ひ、相ともにはかりにはかり、 沖津波へな

み頻寄り、さたの浦の定めにけらく、今日よりは軍

はせずて、いさゝけき高城を仇も、三栗の中にかく

みる、稲莚川のさつをか、もるといへる網代の魚の、

のがるべきよざちをおかず、ひた守りにまもらひを

らば、人勞れ食物盡きて、せむすべのたさきもしら

に、打いてむ時を待ちて、むだ手に只さりてむと、

月彌月海士の小舟の、水馴ざをさしてなすべき、

もなくまもれるまゝに、思ひやるたづきもがもさ、

世の中の千々の遊びの、数々の何は有れごも歌う

ひ石をしかくみ、うかれ女にほたりさらしめ、青

よしならの小か、遠々し越にまかりて、さふる

子をさ問ひしが如、草枕旅のやごりに、若草の妻ま

きわたり、ぬば玉のよるひるさいはず、酒みつぎう

たげ戯れ、笛の音も琴のひゃきも、松風の音にたぐ

ひて、聞につ眞木立山に、にぎはへる都なしけり、

かくてこそ高城の内は、火もて焼水もて潰し、ひた

ふるに責討つよりも、中々にさぐらの鳥の羽たゝ

きもせぬ心ちして、なぐさ慰むかたも、なかりしが

いでゝ童の、戯れのたばかりまけて、諸人の眠りさ

まさむ、いざやさて茶をたかね、小山田のそほどに

ゝたる、つはもの形を作り、朝まだき眞霧が中

に、立置きて山彦ごよめ、さけばひ遠箭放てば、圍

いさはやく謀りしが如、楠等飢

みたるをそ人が、

につかれて、打出づいざこうてんご、岸陰にせき

まで、着粧たる鎧の袖をつらねつゝ駒はせよすれ、

高きより射出づる矢は、風雅のみ雪さ亂れ、たぶて

さへ霰さふりて、千曳に打ちくだから、夏野行男

鹿の角の、つかの間にもしらず、ほろぼさん残

六九七

のたかみもとらず、取弓に箭をだにさず、いたづ おのが身のほごをもしらに、あはれ籠りて有り

らに引返しぬれ、沖べよりみちくる汐の、しが跡に けり、此仇をこの軍もて、磯浪のよせ戰は、あら

ゆきかはらして、八ちまたにもしみゝに、水枝さ

鳥の子をくふつゝい特打つより

鷲の雀追ふなす、

し實さへ花副、 葉さへ霜にしぼまぬ、橋の氏人集 も獪や早けむ、ねがはくは今日一日だに、 ますらを

へ、高城さふたかきはあれご、高峰×ふ高嶺のなか の心振起し、楠等遁けずもあらぬか、大いなるいさ

に、とりよろふちはやの山に、千早振神にはあらず を顯はし、劍横刀名をし立てむと、あざわらひまづ

て、皇の神のみいづを、かがやかしきたなきやたこ、 ほころへる、軍ごも野にも山にも、みちくて時に

こさぐに討げむ、ここはかりうまく定めて、こ もあらぬ、秋の花しが色々に、張りたてる旗の靡き

もらへば吾妻にあらく、しき人ら聞ば驚き、あげつ は、遠かたの嶺にかゝれる、白雲を綾に彩り、くは

らひからひけらく、唐の虎ちふ神は、 うゑてあら し鉾輝くさまは、村山の雪の光にてりかはす月さ

む程こそあらめ、し物をしにをしては、 いやた もみにつ、矢さけびのごよむごよみは、千よろづの

けく成もてゆきて、打渡す見越の崎の、磐ぐの悔 雷なして、天地に轟きわたり、痛矢串飛かふさまは、

もしるし、あらじさて起す軍は、はゆまちにうみ 浪速江の汐風はやみ、芦が花盛にちると、みるまで

をなしゝ いきてさきついくさし、逢坂の關路にしげくれ、高きよりはなてる大木、しく!

こらしぬれ、むかつぬの打向ひたる、軍ぎみ男さび を過ぎて、日をふればしりつ軍は、あしかひの足か

すさ、しがきをる鎧もぬがず、しがはける太刀も

たもとほり宿りて

ら山の、深山ちの坂のかなたに、

かすて、ここあげせず仇にあひては、若芦の取ひし 有けり、かくばかり多き軍を、大海のしきよる浪の、

がまく、心には火さへもつゝ、み熊野の浦まに匂 千五百重にちはやの山を、打かくみ其いくさごも、

ふ、濱木綿のもゝへにもへご、月の中の桂ならずは、 こもりぬの下におもはく、いさゝけき是の高城に、

山鳥のをろの鏡に、向ひたる心地のみして、燒太刀」いくばくもあらぬ軍を、たすけこむ人さへなきを、

奥の、足の岩根こしき、荒山の八十隈がくり、

入たゝしたごらしませば、打きらし降村雨に、山の

名の笠も収へぬ、こゝちしていでましぬれば、ま

へつぎみ百官も、水鳥の立の騒ぎに、黄葉の散まど

ひつゝ、行宮におほましませど、まわりの人もかよ

はず、御軍をめし給へごも、百たらす八十人とだに、

いくさあさもひたらむ、國人はいまだまらず、

御心をいたみうれたみ、かにかくにおもほしつか

れ、みねませる御夢のうちに、よりたゝす楠の大木

を、霊しさおもほし玉ひ、つとめてまかし玉ふと、

御使を河内の國の、おきつ藻のなはりの山の、奥ふ

かくつかはし玉ひ、木津川の片淵かけて、引網の

めよしによし、なまよみの甲斐の荒駒、にはにた

笠置が

はんの、御心しまし(つるを、世の禍はすべなき

物か、さをしかの入野の芒、音たてゝ吹としもなき

秋の風めたらひそめて、いさはやもほに顯るれ、世

の人等青蠅なしつゝ、夕星のかゆきかく行、 ひむが

しに西にうつろひ、かけともにそこもにはしり、さ

わたれは大禍つ目の御心をたゝなごめかね、大宮

を立いて玉ひ、空みつ大和の國の、天

て打ちてさを、心引心もいまだ、引みねば大御心

に、大船のたのみおもほし.鳥が鳴あづまの軍

追跡へしこさむけん、ことはかりとはし玉へば、

日の吾御子が、みくさ

御答をまをし玉はく、高光

もて天に射向ふ、やたこらを討たしは、後つ

ひに亡さまくは、疑ひも何か有べき、然れども年

月経つゝ、戰は軍のならひ、あるはあるはまけな

む、かしこけごわれなけなくに、鹿子自物只獨だに

正成し生てし有りさ、ほのかにもきかし玉は、我

大君物なおぼしそ、聞にあけに歸らひ、さもし

火の赤き心を、赤坂の城にこもりをり、一度は時い

まだし、奥山にうまくかくろひ、ひとたびは時き

ますらをの

にけりさ、國もせに軍をいだし、

をたけび、たけはひ戰ふさまは、天雲をほろにふみ

あたし、あまちゆく麗のもころ、鳴神のはため

して、前っぺに有さしもへは、後りつべに行た>

かひ、吹風の跡なきが如篝火のもゆる影のみ、山

はしも生駒の高峰、海はしも難波のうらの、浦回お

ちず天つ星かも、けだしくは蘆屋の里に、所がらみ

だれてすだく、螢ともあやまつばかり、遠近にだき

六九五

楠公五百年祭

寄鏡述懷歌三首並短歌四首

吾はいざ謀計とも白浪の返すぐもうら面白し

嘉永六年彌生の廿二日御關守橘まゆり

すら雄たちをいたくゑはしめたるはやがて身まがれ

る孔明生る仲達を走らしめしに同じとおもへること

を人々は歸り果たる跡の御關屋の窓のもとに樫の實

の獨居り聲打揚けて笑つゝよめる

大令醉

百

即

欲

ほりするわかともがらにおのつから相似たる處ある

にやしかるにけふ既に腐れたる鯨の生とし生たるま

大將

敗く

死

死

といふも名たゝるいくさざみなりしかごもうま

所計

肥後文獻叢書第三巻

死

を残し置きつゝにかむざりぬさて其のひざりし事

をばぁたの方には隠しおきつゝ其謀計を行ひしかば

其仇くはからえて軍敗れ逊奔りたりと漢籍に見えたり共

敗れたる軍君の名は仲達となもいへる故其事を彼國

の諺にかむざれる孔明生る仲達を

むざれる孔明生る仲達を走らしむとなもい

へる又からうたに甚く酒を呑ことを長き鯨のものな

ことを長き鯨のものな

は吸ふが如しとも譬へたりかにかくに鯨は酒を

吾 徒

雪のつもれるまゝに、御内の人等こさぐ打麻

うみにうみしな、皇の神の命し、長くも小松か

の、うれたましなげかし給ひ、そをしも討ちたま

ウッ

懸もあやにき天照日の大神の、大御影うつし給

はし、神風の伊勢の國なる大宮に鎮りいまし、さく

すゞの五十鈴の川の、萬世にいや澄わたり、久かた

の天地の共、玉垣の内つ御國も、言嘩で四方の夷も

隔なくまねくてらせる 御鏡は神にしませば、岩く

やすいとも恐こみ、玉だすき掛てもいはず、みなそ

こふおみのかみさ、見し人のかたらひぬれば、聞

人のいひい艦々 新玉の年の五百年、世の人の語ら

ひわたる。楠のいさをくずしき、この遠き昔を

淺茅はらつばらにもへば、なげきこそさきたわけ

れ、平の高時さいひし、しれ人は吾妻にありて、ち

はやぶる荒ぶる神に、こひつかひすさべる業し、降

東の市の巷に、あきしこり人こそさやげ、西の市に

人こそごよめ、市人等ごよみにごよみ、まそ鏡もと

な買すば、まさやけき人のかぐみは、楠の木のくず

しきあそを、萬世の鏡とを見ね、諸人をゆめ、

六九四

橘伊豆足か家の集

六九三

の方を見れは言嘲ぐ唐しの八重の汐路目もおよばずむとする時まで
もなほまめたちてあかき心を盡し計

病

放

こりゃく

さけ

さすがふろしきもさほして圓居す此處より遠く南

席 敷

まど

鯨の故によりてはからずも我れ人いたく酔へるにつ

切

天翔來座む大海みの底なるものいふ獸も波の穗にや

かりきまさむ

不斗

さ(心強くて今は大作の旅人のまへつきみもや

ふことなく徒然を忘れて遊び暮しぬされば腐りたる

甕の腹みてたゝへてば眞木桂太き心ぞしたにそゝ 山々も無しかくて吾も酔ひ人々もうらけて日おも

れる

喉栗の三島なにどいつへに向ひても面白からぬ浦島

何方

色を移せるに似たりそれより此方は瑞枝さす松江の

くて

見かね宇土の横山うさからぬくはし女の熊の

ふ買のすさびにむなしきみかむなしきほたりもなく

空

買ひ吾も負けじと買

隼人の薩摩白

欲 得

り

疾く迎退きて御關屋に立寄皆曰く胸のこゝちいさ

きくべからずおのも面を背け鼻に袖を覆ひそ古

を歴ぬらむ潮に浸りて有りたればこそもころゝ

もころゝ

がね刀を入れて新に切破りたる折のわるぐさきばえ

わろし酒も賀恵みてよさ乞ふ已れる人々と同しこ

ちしすれは闇はしく有合酒を出し酌かはすまゝに

ほごく呑盡さむすれば人々も湛へ足らはして末さかりにもえうたけねばした面白

の山々 長崎の牧も見えたら西の方は天

くさの樋島あるは棚底嵐口なにごも村々に見に渡り

北はむか見し高ねこそむらむら雲に隔り

海の島々流けく見ゆ近きあたりには白髪の汐識の

むらしらたつの浪間を分けて天に登らんとする勢

打渡す向ひの方は名にしおふ汝島神の齋へる松か

枝に懸る白浪をおのが羽色にまがへつゝ飛渡る村鳥

さへ所がら又たぐひなき鷺の浦櫛形山からぶねの礎

浮ひ出む吾も人もうらたぬしされ御關屋の裏は宴

すべき所にあらねば山の上遠視の庭こゝよけむ

けて唐のむかし物語をならおもひ出てたるそくの孔

明玄徳を輔けて大きなるいさをを立彼國世々に押渡

れて好きいくさぎみなり

すともならび無きばかり

しが惜むにかひなくやみこやしてほどくみまがら

忠 意

丹

ば右の掟の外なるべし汝かあま懈逅ひりひ得たるな

れば心まかせに取るべしされご御關屋の前には置難

し海神の宮ゐの山の裾入江のあたりに繫き置きてよ

さいへば庭雀躍騰りてよろこぼひのともさやに曳

音

たまさかに

何かあらんしかるに鯨は公の定ありて火の道の

ち五島平戸の浦の外にては猥りに捕るべきものにあ

らずされぞ譬鯨なりとも異さつ大魚のくひさしなら

て

肥 前

誉類

は

ひき

待つるさまはひらひ待つる魚にもい 増りた

掖 腹

魚なにごにもや有らむわきはらのあたりをたかにお

ふせたる馬をも彎通すべく喧破りたるが八重の汐路

に浮び漂ひ流行を拾ひ得てふりはへし業の鯛さへ松

魚さへえ釣らず己がむれのつりぶね三般して綱ひき

かけやゝにひこづらひっさ申すかれこゝに先

下司して見しむるに折しも曇る夜のことにはあり河

風は烈し燭火も吹きけち明松の火も吹かして何さ

もさだかには見えわかねご曳船のさ等しき大

魚の片への

かくひつくしたる也さまをす

先判

如此

おのれまづこさわり 日かく大なる魚は鯨を置きれむ村はも男もみなも蟻といへる虫の如く群がり来てくち

後方

へしりへに立廻ほりつ、見るほどに商人さへ來りて

即て此鯨を買取り切り屠れりかゝる折しも吾住む

木の友だち西の大人を始さしの名に懸のよろしき

不破某西岡某宮島某林某なにご淇外相識る人々打連

大魚見にさて来れるに此魚かく成りて幾らの日

さへえ知らぬ巨魚あがりたるよし傳へて老も若き

躬

ホ

しも潮は引きたり濱の眞砂の上に伏せす

の大さは立懸りたる人の胸のあたりに等し躬のE

五尋ばかりあり實にも左の骨の露はるゝ斗し

らを喰盡しても狹に出たり此大魚をしも

る者ありて是はながすといへる鋭の子なるが生か

二″年ばかりになれるなるべししか喰殺

かまつといふ魚のし業なるべしいかに大なる鯨に

も此高松附ては殺さずてはえ置かぬさ也鯱牙は虎

のの如にて口甚隠しもごも猛き魚なれ鯨に

らぶれはさのみ大きなる物にはあらずなにご今見る

が如く詳らかに語る程に近き村々里々より北浦に名

たて据

きもてゆきぬつこめて明の朝其所に行きて見れば折

使の指木より公事の御ふみ持て來つさ答ふ其はお

の過にし月の十日より九日より畏み籠り居つれご

ほや

き

りおなふもの有誰ぞご問へば松江の扉にわだてる

五月の十日の夜いたく更けたるに眞震が門をおそぶ

つき

見なゝむ。 うゑたらむ。 千鰐五百鰐の後より。

実親へ。わが知らめやも。

J=(

にけらく。秋かけて。心足らひに。さやけき。

は。こゝろ空也。 沖津楫。 眞栫引折。へ

櫂掻はね。いざいなせ。さしいへば。

ひきり

酒出て。ますみの鏡。曇なき。空に心を。神の石

人に知らねぬ。楽びも。半ならねば、松江の

海士。吾に告らく。 水底に。肌に飢たる。鰐もを

り。心黒き。 もあり。月に向へば。汝

つく

な

なかは

くちり

春は過。秋はいまだし。霧も無く。霞もこめぬ。

夏の夜の。にはも解けき。海の面に無小ぶね。

夢夢中によめる一首

ゆめねち

或夜靜なる海の面にをぶねを浮てさやけき月を見る

ゆみま

うけ

み靈添りて。獵矢さし。射るまでも無く。ひし。

犬も狐も失せて。跡なくなれば。今はとて君

さつや

にぞ返す。櫛橋の。くしき翁の。くしきけ眞弓。

彌生の甘日餘り一日といふ日より平石の御關屋守り

に當りて守り居り其夜皆人を彩よこの鐘打なす頃し

も斗石の海士三人廣庭にうなねつきてけふしも思

ひもす沖のさなかにて大きなる魚を拾ひ得たり其

六九一

カリイシ

酔のすさひの獨言

花押

嘉永さいふ年の二させ五月十餘一日

橘

植つれて貧しき宿の甘甘草匂ひし無しと人な咎そ

かくさ

まど

ば記名しおふせぬ

しるしふみ

右のごもは日の日擦りをりつる程によめるなれ

を開きてなほ畏みをれり

かしこ

ひら

如此はうたひつれご我子いまだ御ゆるし無れば門牛

かなこなかな

さこよもの長鳴鳥もまだきなけ日一日の金戸ひ

らかむ

かなど

はっかひっひ

なきなきり

雀踊もあかるべくおぼんて

すぐめおこり

ころ

すこ

おのれがかしこみはゆるし給ひぬされご重ねて仰ご

とあらむまでは吾君の御目のあたりには恐みて出

でぬさまに意を得たてまつれとのことなりしかば

少しばかりは心おちてうれしきこさかぎり無し庭

かしこ

かさ

の。夜晝わかす。 ますらをの。守る心に「此の。

かしくよろしきにかきたる書ざまの朽損ねたらむ

かき

一年江門に持行きたりしを江戸人の見てのふるめ

ごぜゑど

あめふら

たわらに清潭と真震さが像をさへ畫加へたるを清潭

るを我友福田名に高きかきなるか其歌書るか

方さい

古き武夫也 弓を清潭に返しゝ時詞よみておくりつ

れる。身ならしの。弓はあれども。晝の戸に。

我宿の

ひし事有りき弓は元櫛橋の物なりし 櫛橋翁の

くしはし

ひ。夜はも。狐潜めり。眞震らが。朝夕と

が丸木弓を借り置きて庭の面の放鳥を窺ふ狐をねら

とも弓に削るべき木得安からず眞震む 久米

はなちこり

志

弓さいふこと前にあけつらへる道の論びに似又よろし

も弓のみいひつるを殘木弓世に多く成りて丸木

木の弓を

あさよひ

あれども今此五月の頃なにごは昔しの丸木弓枯

いぬばらば

ひる

葎かきつの。放鳥。盗み喰むと、書はもっ

かぐら知るべし扨此繼木弓は離るゝわづらひぁればい

はなちこり

備ふ

人々笑殺へるまで書たる文字はら讀ねごも詞は空に

さはつぐ事にて繼母又まゝのつざ橋なにざいふにて

無く弓を引くに付けて弓損ねまゝきの離るゝ事也ま

ま、はっ

此引きはなつは弓を引きたもちて矢を放つ事にては

いき・か

そら

かな

瓶を揺さいふことなかれていへり

いたくわら

酢のすさびにふみでを走らしたるなればいか成鳥の

ありあふ

さもすればさほやこもすればさいふに古へ射る時用ひたりし

は逢はぬ心を

なるこり

懸けて見つべく装はし置きたるを

釘なにごの如くふつゝかにて識がたきも却に面白し

さて壁な弓也箭を疾おくりて勝れて能き造りさまの弓也され

なか

よみ

ふごにもごもともすればまき離れ安し故古き戀の歌に

いかにせむまゝきの弓のさもすれば引きはなちて見たる事ありきしかるに此詞おのれが筆の跡ながら

あごゝも見わき難く讀なづみたるを共席におもひ出て聊耻償 ひぬ如此からくして思ひ出たる

なれば今もなほわすれぬをこゝに書つけて人の笑に

垣内

犬葡匐さむ時雨零ば。雨に損ね。夜の門に。い

む折し露もおかば繼木放れて。須磨の蟹の。

ふ鹽のから鹽の辛き戀する。わび人の。した

憂からむさみづくし。久米のあそが。櫛橋の。

翁ゆ得たる。短ゆふ。短きほこの。たつか弓。

よげにしあれば。稲ふねの。否と言せごかにかく

に。弓のゆかりに。押借りて。手に取ならし。ぬは玉

橘伊豆足か家の集

六八九

ふらむ。花道。目にこそ見ね。香をだにも。ほ

れる。弓にぞ有ける。

らの。廻りの。み池もあやに。今もかも。喉にほ

ならぬは。まゝきはなれていたづらの物さしな

もごは

ながこのむ。 は言痛し。しかはあれど。古きかは

戀すさふ。人ならなくに。肝向ふ。心儘にも。ね

ころた

或日のつれぐによめる一首

まさ

ひこうた

吹荒ぶ音に立てよ家の風松の二葉の末の八千代にに損ねて繼木放れたり口すさぶ

産めりさ告こせり

或日小ぼこの弓を取出て引ならし見るに此程の長雨

奈良山の兒手柏を折頭挿人に見せばや蟻の群

をっか

反歌

こざもごま

を問來る人の何事をか爲すといへるに縫ひさして答

の物ち

さない

も隣

た

其のO

しろま

あさよび

食持

聊

あたら

ひのぬねこ。唐猫 潜に。叢の。

くま

しのびのび

九こ

すかる

やひこ

のにおくらむ。風も吹かぬか。

こころ

或日のつれぐに見る儘をよめる二首

笹がにの。糸に隠れる。蝓もよ。健きすがる。

笹蠣を。劍もて整。絡ともに。地に落るを。 庭雀。

翔來りて。速啄き。喰もあへ

ふたうた

ま・

こざめぐ

め行きかよはし歩よりゆかば浦々おちず崎々さす

往きめぐり昔よりあたる筑紫とこそいへ共るべ

き處々をも見知置又舟に乗りては漁がてら島の八十

島磯の百隈隼人の薩摩のなか近くをも縦横に遭廻

り速汐の處々をも損はむ岩の瀬の處々をも明らめ

てむと思へれば馬も殊更に脊足の強きを撰びふねも

脚速く浪を切るを造らむと心を配り如此畏み籠り居

るものからいたづらに月日をおくるも惜専ら此頃

は船の帆同しく柱なにご縫削り營む事をのみ朝夕の

手業させりされぱけふしも遊帆といふものを綴れる

鳥を捕りて失ぬれ。残りたる。蜘哩

蟻ちふ虫の見出管。限も知らぬ。其が

群り來り。或は引き。或は捧げて。穴中

ていにけり。あはれあはれ。た

得たる。

を、己猫は。えも不食。誘って、睦しく。もの

せる業は。今の世の人に勝れる。 蟲ぞ。

いつか此奧帆張揚けて大海を縦に横にも漕廻らむ

松村某が妻はおのれが妻の妹也五月の四日男の子を

木はむかしも無きにはあらねど後の世専ら用る

ふまに。すがの根の。根足ばやぞ。稚かりし、いまには馬を人の名負せたるきみの山にも進

ます

もろ

の先を争はむ事元心に

にほ

なち

常世より少彦名の御使の喰持來つる鶴渡の稲

夏虫の。火虫の衣。 着装はし,天のかみの。ふ

さいへる稲のわたるを見てよめる二首

わたし

もふにつるわた

反謌

或日のつれぐに鶴渡

にや

今

つるわたし

はや。大工はや。盆方は。 前つ轍。眞震らは。

つ轍。こさひの牛。さしもなく。 牛童追さし

もなく。行きめくる。車はや。 小車はや。言語

りごとも。古乎婆。

のみたまは。つねさらす。幸ひ給へる。御幸ひに。

こをば

剣の。屑さへ見ねば。 何時の間に造る車ぞ。

いり眞震

みちは

たなっ

あま

くすしきたくみ

うるさへ。やゝゝゝに。敬へ給ひし。二神の。

たく

神の功は。荒金の。地蹈毎に。足の。山におも

ひで。浪のよる。浦に所慕、味の。霊に尊く。

なべて世の。國津御民の。崇まへる。神にし座を、

いかさまに。おもほしけめか。 常世べに。飛去ま

して。其の。御身は 皇國に。 まさねども。

める古へぶり一首

うまこり

如此歌ひしは人の上なりしを其盆方しも錦を着てふ

ひさうた

ち行きけむ。

國堅まりぬ。かたまれる。國のまほらに、

吾人の。衣手寒き。河風に。いざよふ波の。いつ

われひこ

六八八

いさほ

工ば。友千鳥。立おくれたる。ここちして。太き心も。

眞

引わかれ。こさつ鄕にし。ひけ島の汝がひけ行け

にし里に帰りおのれ又遠き堺にさすらふ事をよ

およ。奇敷工の音の。登々な毛をねば。

雲の遠從。 天翔。翔渡らふ。鶴村の。喉持來つ

る。稲ばねを、植生しぬれ。蘆原の。みづ穂の國の。

名におくる。御國からかも。歳毎に。廣ごり。

共苗は。眞孤のもころ。八束穂は。木綿しでなせ

る。うましねの。常世の。まる來しも。此大

神の。惠なるらむ。

或日のつれぐにおちは〱おのれ蘆北につかはさる

るは全く醜の御楯也されご鉾ゆけなにごの業は歳老

いて人ねうけて寄來し神は。八千餘の。神の命。。

相並ばしかたみに。相計らし。海べには。蘆を

おふし、河べには。眞管を植ゑ。慮がねの。根這

にまかせすされぱみさき

橘伊豆足か家の集

數をはる。思ひやらむこ。松江の海。清き島迺に。

船よせて。辛さ戀すら。忘るさふ。貝はあれども。

しま。

去年の春花散果し、つれぐに。世の憂ことも。

ちりはて

皐月の朔日濱ゆふをよめる二首

さ

蓬生に交りてにほふ百合見ればゆりあはぬなし許

多戀しも

反謌

つはら

おぼつかなし。淺茅原、委曲に見れば。其名さ

其名さ

へ草ふけ百合の。ゆりもあはぬ。友の目戀し。

さのゆかりに

非翠の青葉隱りの。我宿に。友の目を欲床の

上に。默止をり難み。庭の面を。たち廻れば。苅

の。亂あひたる。蓬生に。 にほひ出たる。花や何。

其明日曇は霽ねご朝の間雨はやみたり置きし百合

の花ひもごく長き短き二首

火とも成水とも成ていそしめや折焚のみの柴とお

もはて

汲しつゝ戯によめる

くま

問人の目言しかれねばつれん)をこそなぐさむれ食

人の名

物精る者さへ無くていとわびししばといへる量に水

めこさ

芦北の醜の御楯の。 崎守さ。よざしの随意に。處

から。野坂の浦に。あびきする。泉郎の綱手の。

六八七

ショ

井口のあそ。君も吾も。互に今は。白髪の

山の山人。水島の島の島守、長へに。如此てあ

らむさ。馬車。手携りて。 月花も。共にめでした。

突きし聞る。 故事を思ひ出筒かにかくに。

過こしかたも、ゆく末も。懸けてぞおもふ。

別路に。男さびすさ。逆を。逆立髪の黒髪の。

かふり

唐に有りしむかしの。大夫が。身もしらぬ。

もろこし

ますらを

うた

のへにて餞別に調ひし識

たな

うまのはなけ た

或日のつれぐにこしかたを思へば源盆方今の真震

らが身と同じく芦北のさきもりに移さし時求摩川

ますかた

ひ

三熊野の遠き濱べの家づとに持ちてや恋した人の

‟1

まさ

玉にも。勝りて阿里計利。

反詞

目輝く。玉はあれども。疊有る。岩間に生ふる。

濱木綿を根こじにこじて。我宿の。庭のに。

植ゑつれば。榮茂らひ。花開きて。其が名をお

へる。百重なす。思ひやるべき。 なぐさには。貝に

た・なは

擲合是も彼も髻放ち衣は海松の如くわゝけ泥もて造

れる人の如くに成れる市人ら群り集ひて見る者

かまびすしかし今朝なむ告

る人有ける其やたこらを呼出て其事を尋ね問へば正

しく告げたる人の言の如し何事無時すらかゝるをこ

ひち

あご・りはな

ちあひ

くひな

互に罵り合しに後に にはいた怒りたゝむきを揚げて

おちほで

程は

かつよし

昨日眞震が家の奴ら掟置きつることを破りて出歩行

いでありき

白黒の色箸明きひは世に正しかる戯ぞ是

此日も石のひにて暮れぬ

人々又

集ふ

あた

霄毎の水鶏と共に我門を叩きて間はむ風流士得

みやび

反歌

おとなふは。何ぞ聞は。背さらす。愛しき水鶏

の。たゝくなりけり。

其明日も又雨降る人々集ひて一日石を圍み燈火とも

す限りて踊り去ぬ雨はしめやかに打降り二首

の間ぞ。人も問來し。青山に。日がくりぬれば。

静なる。軒の玉水。だまくも。我眞木の戸に。

肥後文獻叢書第三

其明の日も雨降り昨日の石の敵無くは無とてるが市中にて松井勝敬

井勝敬が家の奴さひ出始の袋負ひて從ひ行しかばかへらす日にけに
ありて

また

折しも今一人の奴は大西が族を送らしめて松橋の浦

までをふねのさらしそれより陸に上りては大西が

奴の重荷をえたへすさわぶるを助けむさて其を分ち

やつこ

放ちやる心さへいざ白雲のよるべもなくて立や惑

はむ

ば家のやたらには殊更に掟て無用にはな出歩行ぞ

言問も高くなせぞと堅く戒め置きつるを背きたれ

其科轢からす眞震が家にはえ置難しさ云聞えつ

の時ならましかば行なづむ駒にはあらねご心には火

さへ燃えて鞭うちつべくおもひしかも其席にて身

のいさまをやりて只やらひしかばはし鷹の拳の下の

溫鳥の放えたらむが如くいづちさもなく出去りぬ如

一此て未程もあらねば松井が方より右り奴を暫

貸してよ尋ぬべき事有りといひおこせたりしかと共

はきのふ我家にて掟を破れるまゝに如此々々はから

ひて今は我家のものにはあらすさかへり言しつかく

やらひはやらへるものから彼がたづきなからむ事は

憐びおもへるまゝに

あはれ

みき

わくめこり

11945

六八六

の業はふべきことなるに捨て今は重き慎の中なれ

おきて たっち

六八五

橘伊豆足が家の集

昨日今日時知がほの五月雨はしなどの風になぎ晴

妻兒共も言こそ問はね玉かけてやおもふ人の船

路を

ク

和謌二首

此處にして盡ぬ別れは惜けれど同し雲ゐの月をこ

そ見め

つき

雲のめづらふもいとはじなふ嵐のざらめ

やは

ふか

たら

うき

反詞

ふたうた

はら

つばらかにふみ書て笹の小笹の露に添へておくる二

ふる

ひさめ

あぢむら

に明し暮したりつるをけふしも全く晴れたりごも見

ごは

りいざ見にゆかむとて出立をいましめがてら

よ

なす

島の古城の跡まで漲れりと人々いひあへち

よるき

又此程降續たる雨に求摩川の水増りて野上の原よりもあれば歸るべきたづきもなく心ならずも眞震が家

おもひきや女島の松を朝夕に水馴磯馴む友と見む 其明日は雨やみぬ大西が蜚此程は日毎に雨降りて

とは

々は風さへ添りぬれはははろぐの道の長老たる

115

あさよひ みない なれ

めやも

こゝに心うごきて

ぁしには赤およばねごとなれたる木立類ひ無しこ

おさに聞つかれ日は暮つ行へは還し家路戀老いて勞れて駒も蹉

さばかりの洪水は見馴たる此處の里人は物としもお

もはねご客人はめつらか也家づさに能き語り種なめ

味村のさわたる人のあひに河の堤の端麗な努

又来る日も雨やまずいともつれぐなる打しも大矢

野菜が元よりしばくも間すおぼつかなしなにご

えねご又大雨なにごの打零べくもあらねば海路は!

はも静なるべし眞震が去年の冬作らし置きる

の小舟しあれば是に乗りて松橋の浦まで渡り夫より

彼方は歩よう行くべしいで舟出せむしがよけむさて

伐に出立行きぬかれこゝに残りゐてよめる二首

たらちねの母が養ふこに。あらねども。眉こも

b如。こもりゐて。名残も盡す。朝鳥の。只立人

を。あさもよし。紀の闘守が。 たつか弓。引きも止

めす。かな戸べに。送りもあへす。行水の過ご

しやり筒。樫の實の。一人二人の。家人さ。打向

みて。さふ言も無し。

右の謝によみつる女島はしも紫の名高の浦にあら 真木今はかき抱くばかりに成りて元つ松の神さびた

むらさき な たか うら

跡絶えなむことをなげきて誰にか有けむ植繼たりし

浪の共女島の松により立たば千年の枝に玉藻懸れり

秋たゝば道遠く共蘆北の女島に来ませ我も酢がね 如此詞ひし其木は其後枯たりしかば名にしおふ松の

けふはかくて日暮ぬ

みつされご酔るかいさ

むとこそおもへ。

反詞

かへしうた

合り簡。千年の下枝。敷妙の。枕にまきて。

はは潜松の深緑。おもひ深めて。異津浦。異津島根

〇〇あけのひ

かへ

かたにしきうら

たさひみ

ごさつ うら

らく

まく

松

謌ひけ 島の磯に来て見れば。咲めくれる。白波の。

をぶねつらなへなみ騒く。 野坂漕廻。味澤ふ

は

こきたみ

うはなり

こなみ

ふさ

現し御神の御政事に同じかへらざる事汗の實して

年經るや女島の松の深みざり下枝は浦の波にひた

碑に残れり

へねごも一本の松もこも名にかく雲の上人の御歌さ

いしふみ

いるが如く懸まくもあやに恐き

に此御歌の如く也むかし眞震らも蘆北に遊びし時

此松がねにて

火の國は。いづくはあれど。蘆北のですが 。

さはにあれば。そこし見か欲り。 沖津藻葉。 探さ

は無しに。へつ藻葉。 求としもなく。おもふごち。

如しかに

くに言を入るべきにあらすしかるを讒言聞え上た

る人を押顯すなにごいふ事は共司にもあらずして御

政事を論ふなり其は吾敷島の道にあらずおのれ心の

愚きは生れ得たるなればせむすべなし赤心報國さい

ふをもて根さし磨かまくおもへるはやまさ心也其は

眞木の柱の太くをしく飛躍人の打黒縄の直くすが

(じからむさこそおもへなごて前妻と後妻さが互

に恨み妬ふか如き煩らはしき業には渡るべきごいへ

ば其人諾なへるにや物いはず成りぬ故こゝに潜島を庶莫

さら形錦の裏は返し見じ糸の蹴れも物うかるべき はよしゑやし。譬見すさも。海神の。宮に一夜

其明日雨ふりきりていても徒然なるまゝにまれ人

をなぐさむべきたづきもなく白き黒き石を圍み或は

古き書籍なにご取出て讀まれ人は其を聞ながら酒の

橘伊豆足か家の仕

六八三

さいは、玉だすき懸てますもいさく恐こけれど

にまれ空言にまれ既にごごごし成りては右りに

皇御の大御てぶりに從ひまつるにこそ共をいかに

かねたりされば讒言

さいふ天の下の御政事を國

にむくふ

ふて

らず只

みさりこご

あまね

わらひっき

大将軍の仰給へるはあづかりまし給へるなれば即

現し御神の御政事に同じさらぬだに吾君の仰ござ

しいは、火水をも問さけ御よざしの随意い

へまつるべきを増て上より下に遍く通りたる赤心

君の仰ごとはやがて東に座大将軍の仰給へる也此

あづま ますお

皇ましくき

又東照かむみおやの命の御末々今の大将軍御政事を

ざるにはあらねば古へ大宮人の健く雄々しかりし御

有さまの俄に縺れるは此唐土渡りより此方の事にて

されご後世も北島顯

やさかのなげき歎べき事ならすやと 二のきみ

家の如き古へに立

さて其唐の道又佛の道共に同じ道の中に

あづかりまし給ひ専ら外國の術とならし給ひ赤き

御心もて

増大将軍も

いくさきみ

おほいく

みかさみ

々に現神の御代にいそしみ事へ奉るよしを話へり

瀬にさでさし渡山川もよりてつかふる神の御代かも

神も大御につかへまつるさ上つ瀬に鵜川たち下つ

大君は神にしませば赤駒のはらばふ田細鉾千足の國の名に負ひし御國ぶり下津方には残ら

今きた

今奉見が如し御語あれ春同

ㄣˇ打

ごもこに略けり

あっまてる

の殺

万葉

そましませ

太刀の鋒を首さいふ 首槌の太刀は太刀の鋒の槌などの如く大當今天の下に天津日繼知食皇命はやがて現し神に

なろたいふ也古への一種の太刀の名也古へも物のよく切るな

ㄩてふつの御なにごいへる事もあれご此首槌の太刀は切る

にあらず打べき力の強からむ爲に先槌の

事をむこう

如く作れる 古事記にも日本書紀にも切殺しさは見にす

き出たり御爲業の荒々しく雄々敷まし

も彌ちまたに蹈わかれたり又共が中に爲つる跡はお

のが向々にして同からず或は沖津藻のなばりのすさ

び木を抱きて焼或は諫ひて心をさかん或は西の山

べに蕨盡て飢なにごいひ盡すべきにあらず異なるふ

しにしも行あはねはいづれをか撰みいづれにか従む

されは吾常さして蹈べき道とて異ざまの道あるにあ

都さなし 又大

君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせすかも 同長哥上

是は現御代を神の御代さいふのみならず山の神川の神も共

御岡に報い給ふ事を柿の木のいや々に天の下の

國々に博へ給ふ御掟を受給へる吾

のしからしむると敷島の道

正しき説みくに

君を護り又公々百官を逃れるとては一首も無し是

おき

くたけ

神日本伊波禮彦命首槌の横刀をも八十るが輩をこ

や そ さ

へ

如此嘲給ひしはいかに又もとも古短きすべて五千に近ししかるに其が中に

にあけれ

い

皇御國の古へをおもふにならの葉の歌ぶみの謌長き

やつめさす出雲郷るが能る横刀つゝらさ糖頭身無

歌に

から、たのま萬葉

さぶみ

うちたま

こゝに

うた

いつ

皇御さ唐山さの國がらの差別をかりごこ

さみ

。

ひさくに

へすめたま

りさや申し奉む大宮のにこそげをも刀をも宮人

すくなからす

ゆり

事の助さし給ひしに後には共道々によりてなか

また まつら おはらや

給へ

みころ をうしな

よきこころ

かしこ

たち

深み草の盛りに喉にほひたらむが如くなりけらしさ

たま あしきごころ

みかきちら

の御代より後の事也さて漢土の道佛の道

れおころ

人の行を道さいふことは

名 ら

たま・き

りなりし代にしもあらばこそよきこざもあらめ沖津

かしこ

おほみ

皇御 佛

ほけ

り道々多き故に共道共にまがは道佛の道なにご他國の道渡て

ぬ爲に

國の大御てぶりを取別てさいひ又作處にい

ふ名を假て此處にも道とはいひ初し也是は日本書紀

難波の長柄の宮の御巻に出たりされば今の世の如く

ちはらみをさ

も好處をば取り給ひ悪處をばうつて御

わづらひ出来事も不少なむもこも後々殊更に

人の心さがし立たるは全く他國の道々の罪なるべし

そしりつか

考ふるに

詩經の中に君を譏司々をそしれる詩いくらと

いふ數を知らずなむあるを吾

へたる随唐なにごの頃にて花やか

藻のもこも衰

なりしさまをめづらしみうっし給へるなれば彼國の

ふりをして宮人の御垣すにも張たる弓は無禮

弦をかけず玉鄉の太刀には眞厚を入れず負背矢には

筈を入給ふなにご打見たるさまは露を含める

れご懸まくはいとも恐けれど元

れご懸まくはいとも恐けれど元の御心を失はし達の御身に添給へれ強も無き弓眞身も無き太刀何の

用ふる嘘があらむいにしへ

日本健命の謀計給ひて出雲猛るを討給ひし時の御

にて御がらとごとに打殺し給ひしさま又葛城のそつ彥の射矢た

に古への御てぶりの残れる處なりかししかるを中っ は安く楯を通しゝさまなにごになば手弱女の處女

代唐土に三の船を渡らし給ひし御代も有き彼の盛さびたらむが如くなりけらし

橘伊豆足か家の集

のりづ

事

は言に出打揚て調へばなぐこゝちす眞震が師長

の主の教へ給ひしはおほかたは右に同じけれご聊こ

となるさまにも心得らぬ真はさまれかくまれ調

人の心邪ならば識も直く安らかには歌出難かる

ハー

土たの

のづ

やまさふみ

みきり

有しかむなから こあけ

道あるが故に道といふ言なく道といふ言なければ道

ままひのお

したが

かりけり

如此よまれたるに従ひぬ此歌にいへる如くおもふおもふこと調へば
なぎぬ言魂の幸ふしるし正し共處を鈴屋翁あげつらひて直日靈とい
へる書に誠は

き心あるべきをも知らず暫く鈴屋翁の

みは寅さ同じくてみ山み谷み空なにざいふすべて此たぐひ也

其家有りと聞くされごおのれ 傳をし得ねば深

山路田路なにごの物に行足の蹈處をこそちとはいひ

つれ其路に譽詞のみさいふ言を添たる也

たへ

後世種々に論ひて既に言魂の傳といふ事さへ始りて

ほめこさば

あけっち

ふみど

ったく

ゆく

の

神もこさぐに幸あへのやも將言魂さいふ事

千萬の軍らふさも言擧せず捕て来へき男さぞおもふ

さきはひ

さ歌へりありもあらぬもさがしら言の多からむにい

宇合筑紫の節度使に遣さろ、時橋虫磨のよめる話

うまかのまつざみ

1

皇御國の事を稱て神長柄言言舉さは言葉に出してかにかくに言舉る事也

チハックニ

さして今の世にいふ道々しき言舉もなく

皇御國は言少(空賢だぁたるふしなく行厚き事を欲下青人草に至る迄穏に樂く世を渡る外無りしかば

し傅とふ御國から也做古き欺に

をひくさ

さかしら

ここは

につかへ奉りて言痛きさがしらの業も無く上臣よ

やまさ心の花の如しすべて又

こちた

もは

ちかね

各

佛の道には心を尊ぶも有也唐土の道にも是に似たるあり

にさいは、八十件男おのも其氏姓を重みし大君

ふま

天津神の霊なる人の身何事にか心のうつり動かざら

む共感り動くおのづからなる心の言葉ににほひ出た

るを謌さはいへる也かれやまと心は謌の根ざし謌は

べしかい髭が行横人の道ばかりそめにも蹈す悪ら

皇御國の古へ未唐土の道佛の道なにごの渡らざりし

程は人の行をさして道といふ名は無りし也其をいか

からなから

擧せぬ言魂の幸國云云

也けりさいひ溢れたら上の件に山上良臣の御

謌を出して神長柄言擧せぬといへるもやがて此こ

どをさしていふ也神長柄とは神の道に従ひて

からの道あるいふ也と日本書紀に釋おかれたり

其神の道といふことも古へは無き事ならしを漢土の

六東の山の端より空さりげなく夕月さし出たるに有 か

しき極うなれご程もなく雲晴風靜りぬれば跡も無く

かぎ

を

動き篁なにごは末葉地にもつくばかり起伏靡き

たか

うらは つち

はためきて風交に大雨はらぎ降れば大樹の

さめ

かきまぜ

雲ゐ棚引見るが中に電光目を射るが如く八種の神鳴

いなびか

萬の事も心の感動くぞおのづからなることわりな

は其意を得ずなむ其は事の大なる小さきほどは

どにうつり動くぞ活とし生る人のおのづからなる

心なりける譬は、今夏の日の照のすさびに荒がねの

地さへ割け暑さいたへ難き頃しも遠の高峯より

ひさおき

うごかさず

ひミ

あや

うつりうご

の月夜はいふも更也楽しきにも愛だきにも其外

あけっちは

りこご

み たま

身の人や見るらむ蘆北の野坂の遠の小簑

はぬぞさいへるに答へむさして先よめる

讒言聞え上たらむ人を言顕はさむはおのれもやがて

芸人のなしゝ業に近し共は敷島の日本心にあらじい

でわがおむかしむ自らなるやまさ心と吾 皇御

の大御てぶらさを論む懸まくも霊長き 高みむ

すびのかむ御霊によりて人にし生れ出たるもの春の

花秋りけるさる漢土人の心を不動といへるを世の人

の成し難き好事のかぎりこのみ一向におもはむは眞

震らる大木の梢もい靜に涼しげなるは

の見る處也しかるを大風にまれ夕立風に

かぬ艸木もあらばなとかは人怪ま

は人怪まざるべき其

全く死る人に同じかるべし

またかむされ

ひさ

おや

ひこむき

一向に心を動きゃらむは枯れる木冷たる灰に等し

かばね

等が斧もて伐も捨べきもの也されば夕立

分にも烈しきには震動き涼風には程々に

そ草木の常なるべけれされご折にふれて

つり動くば草木の末葉の如く不動日本心

根又身木の如し是は鎌倉の見越のの岩のひた崩

えにく懸りとも動くべきにあらずされご共も父

いかにせむ時の來りて割雷にも裂盡さえ火にも焼亡

さわなば其はまがつひの荒びの極みさのみぞおもひ

はたすべきしが心を不動る方に心を動しもて行きて

全く思ひ果し心を不動るに至るぞやまと心の不動に

は有けるさればならのはのぶみの詞にも海ゆかば

みづくかばね山ゆかば草むす屍大君のへにこそ死

めかへり見はせじなにごよめるも其心なるべきにや

ほぎ

かっち

かけ

みこし

うごかざ

うらは

くさき

ぬ樹不祥ぬ草とて秣苅童らが利鎌

くさき

ゆふたつかせ

無 涼風の吹來れは今程は豊み渡りて震動き靡つ

人皆

ゆり

ነብ

*八口

橘伊豆足が家の集

による

もろ人と共に混む畏みは世の恨みのおやにある

こちねち

今の世の風俗にてはなかにおほけなきさまにや

ならはし

雷神なにご

の目かく天降たらんが如く畏みれば謌よまむも

ひさ

ご蒙りしかばひたかしこみに畏むばかりなり

なるかみ

勝り

たる家づさならむけふかゆかむ 明日かよけむなに

ごいひへる程に右の

ちま

ひろ

おさつ ひ

り道は遠し是彼と押移ひて其うから族擧りては未來

はた

ひき

うつろ

いまだこ

から

おしやざらしを此春はしも花盛ならん比必間來なましさか

ねていひおこせたりしかご其頃はしもおのれが方に

蘆分小舟障る事ありて心ならずも程を延しぬされば

ふりはへて思ひ立たる事にしあればいかでなか空に

して止べきごて大西がうからやから將心あひの友を

も一人二人誘ひて一昨日とふ日眞震が元に来りたり

家人ら互に始めて相見たるもあり又は年久しく相見

ざらしもあればよろこびあへる事はいふばかり無し

されば櫻はちり藤山振も過ぬれご白島の清き荒磯に

ふねよせて時じくの雪の厳をも見てまし神さび渡る

水島の渚に打群て櫻貝をも拾ひてば現し花にもき此時もあるじのお
のれも客も警は人々おらひなむと言に出てはえ歌はす心中返し奉の

ごと申さて雪の伏木に隠るさいふ荒熊の籠りをれる

群名さへやがて熊谷の某身は如世初に言出たるを世に佞たる人ら二人三人謀計て

上るより如此成れる事は一郷の人舉て知れる

なれば物憂き宇土の名におへるたはれ島廻にあさり

する海士ならなくに浪の 衣着たらむは無用なる

六七九

業ならずや 其人らを言顯はして身の塵は拂

願景

こそり

ふたり みたりはかりごちそ

ごひあら

又或日我籠居を間來る人の中に或のいへらく此度

歌へり

のれが罪を得たる事は跡もなき空言をこの女の假

里にあ

めやかにふみしていひおこせたるに答ふ

書中

仰ごと有して風に聞ていとおぼつかなしもしは夢か

とばかり驚きつ夢ならば疾覺よかしなご言葉いとま

ほのか

こもり居ればゝ

心ならずもの間すき

これな

おほかたは夜おとづる郭公わが住里はぞ鳴て

北は夜かす保公の鳴渡

如世て籠りるに其の肌の日足も仕を又家づさの櫻貝をも拾はずなれる心を

家づさにいでさ眞袖はかけまくもあな折惡敷花の

つかへ かへ まつらん

ひろ

ぺき

入居は過にし年おのれが娘をしも彼家にやりてよ

きだにつまづき安き、ひざもかねてしらす、富

仰ごとを蒙りき罪ありても良き

加れる卯月の十日まり九日おのれ將養へる我子共に

世をうみを渡る船もが、現世を過きむ駒もが、船

長謡短詳日詠々草

はよまれし歌につきてよめる歌

ろしぶみ

ながきか

見む

佐敷に在りけるとき小野篁のおもひきけこの宇士の松山うとからぬ友の間居の空をだに

あかずのみおもふ物から秋のよの望の月のあかき

ちかごと

くに

熊本なら夜の歌合の例をしてかへすてき其のお

契

ならの世のふりにし父を我はもよさもさのみこそ朝海士の子のさやくさやきにうき里も事やは足らぬ月

ゆふに見れ

を見る目に

萬 葉 集

はた思ひ出て、むかし ぬばゆ、

野の松

^^

水島の浦の、浦千鳥ぢさりを友さ、島つとりのすみ渡

名取松

おろし、塞き日をいこひもあへず、北の野坂の

からさきの松をしぐれの笠にきてひるのにしきの家 しを我よも今は、黒髪にしら髪まじり、白髪の山の

づさにしつ

あのねを雪もて作る、心ちしておそくも物は、學ひ

旅 時 雨

吹風も玉のをどこのおとやせむよゝのためしを曳馬

>のためしを曳馬

荒磯かくれに、舟よせて釣や鱸の、廣はたの

やひなの

わかれにおころへて海士の縄たきいさりせむさ

らば浪立な努、駒ならばあはやくすぎね、物がめ

せすさふ神も、おほかたにゆるしてさほせ、天雲の

たちかさなれる、くらき夜はさらにもいはず。さな

此折しも大西某が元より人さはに

のが常世に踊りふす身にしあれごもの多かる世としつれ

ゝこそ夏のよをあか

ほ時鳥聲頻

シ

ろよのつき

月前花

しきむしあり夏の夜のさやけき月に風流士のあこが

れ出て此陰にをし物あさり彼隈に這虫まきて天地の都の大路のまこ
さひうししが行なす春の日のあゆみ

風

遲

盜人のゑれる穴ゆや通ひきてうまいよめる

蝦蟇を初秋風をよめる

狼のすだく荒野の山櫻花見つゝ居りがうかはくらに潜みをるらむ

吾しらめやも

はらわたをきなし叩きてあらひていかばかり心清

おなじくせこうか

してむかしき神やからの辛きいこひ空賢のそむ

ぞきて元のご腹にさめぬあはれあはれさかしき

たゝきをこぞにのこしてつげわたるはここしの虫や神世より吾皇のならはしの腹の中までみそざ

あかさきの鳥

いつたりのうたに

眞清水の

ほとゝぎすなれもたぐひそ風流士のまとみのむしろてまさな人たふれの葉に欺かる鹽を食つゝあし物の

鳴豐めこそ

身や苦しむる腹わたの在りのこ

に洗の夢をもの白も

の驚かせればしき妙の枕おしゃけ惜してさらむと

すれご閨の中にむざねはなくて庭の面の萩こそさや

げかへなうへそそも目に見にぬ秋の初庭もせにすうる建石放れ石双べる中のやり水の流に

かよふ蹈石の苔むす下のいさらけきうつ本の裏をさ

こよべの洞さしゝめてあら玉の年の八十年渡るく

間にあらくもよしき物もよこひさけず風のそよ

かす日ぐらしのもぬけのかも活物の動けばやがてさ

し匂ひ舌打ならしかゝのめざ蜈蚣の口の焼鎌の

もからす腰細のすがるの尻の刺きばのさすごく

す月の澄空に嘯きうら安の顔かき撫て朝なくお

この本はいつをくれごも知らぬ間に花に睡れるおほ

とゝぎす獨かたりも面白みたみじかうた

もみぢ葉を巻きてよせくるさゝら浪いやしくくにもがうむをのいつぎいつぎ整聞やこそ夏のよくたち

昔こはしも

おちかへりても千曳なすおいしのあそが室ぬちにい

短 歌

しましきまで山のあらしい吹さやがし村雨の落る木

の葉し谷川の流落に浮び岩間くき早瀬を流れ水のむ

た平瀬行きたみうすらひの氷渡れる河淀にしがらみ

なしつ其水のよごむがごとくもみぢ葉のいよるが如

くもちさりのかけてさめていすきにしたほしき人

を今もみてしか

あしびきの山ほさゝぎすあら玉のはや年のはに鹿子

をきゝてよめる歌 #短歌

大石眞磨が家につぎひて歌よみける夜時鳥の整

さむ

タキチ

ますらをの試がてら虎じものすごくみ山に短歌

とりし皇國のおもひ巴天須がなくもこそあらめ

秋たけて冬來向へば足の荒山はそしがうれをか

加茂翁の三靈祭に落葉深水さいふ事をよめる詞もまたす八尾こえたわけのぼり言せずしかをゝ

#反哥

に間ひかり松が枝の地につくまでふるゆきのきゆる

右の詞は古へ風なり

も思ひなほこりこゝたくのうらみしあれば足曳の山

鈴はや、

しきのみかくしびさへたらひてあれどくれのお

しなつ彦神のみことのいぶき如風をも吹かし手力の

のこちふ神は岩がねのこゝしき嶽をしが床と伏

巴提須か虎をされるかた書きてさてよめる

いづくにかいこもりたる、しゝぐしろよみにかあら

む、日差方の天にかあらむ、よみにあめにあらむさ

きぐいしかむさしたにはもへど、 たづねむさし

たにはもへご、道よゆく馬はあれごも、海よゆく舟

はあれごも、船出せむ海ひも知らず、誰のまも道ゆ

きしらにこそ、山たつのむかへばゆかぬ、鈴はや

かくろひて百たらすやそのけのをさらす手にさり

ひしぎ夕さらずさ嘴にかみて健びては岩ねかきさき

安寢しな

しもの聞きゝつ友がきをもさなや戀むこよひのみ

橘伊豆足が家の集

九月の二日筑前國人岡部春平明日其國に踊ると

てとひ来つるに馬のはなむけによみておくりけ

ろうた井 反歌

不知火つくしの海は時しく涙はごよみ打より風こ

さわげ其浪のしきよるむた其風のあらぶるなへん

みしぶね流來つもすめをいたくかしこみ浦人に

目をだにいまだ合はせねば千尋の海にじもの唸り

正體

入ぬれたのみつる舟は奪はえよるべなみむさねもと

らえしものいはひろがみはるこりのさひづら

ひけりぬば玉のくろき追いぬじものおそき夷しが

に幸く歸らばさらにもうたまゐて手童およびさ

わて笑はゆなゆめ

四言

「四言

夷船の流來し時の歌

いくばくのかあきぬがささせりさもこれの木蔭に

豊しかめやも

哥

袂にかよひ荻が花いまだもさかす初雁も鳴渡らねば

まだきにも秋かも立つと曇り夜のおもひまごひて夏

草のしなぶるしらに堅庭の割くらくしらに日ぐらし

の鳴幕すなべ卅日くらしつ

六七五

長月の二十九日鈴屋の大人のみたま祭りに作る

あふみのおき川まぬくさ、大宮におさなふ鈴、大殿に

ゆらぎしすゞ、五十鈴ありさはきけご、鈴ありさ

はいへど、懸まくもあやにかしこし、神風の伊勢の

なる、鈴の屋の鈴のをこそ、まさやかにきかま

ほれ、鉛はや其鈴はや、 いづくにかいかくりたる、

春まちてここよこふる雁がねにたぐはぬ君ぞすべ

もすべなき

反

哥

玉だれの岡部のあそばさなみはるさかしらごさをあ

られふりあなかしましさの耳にもふれず皇國の大

御手ぶりをおむかしむやま心し入紐のおやしかり

けりそこゆゑにあひみるからにはらからのうるはし

みつゝ永き夜のふくらくらに月影のかたふくしら

にかたらへさかたりもあかねばけならべてあひ見ま

ほしこもりぬのしたにはもへご鴻なくふりにしさ

その名にかきいきの松原まつ人のあらむもしらず

ひもさかぬ妹もぞあるらんしかれこそ常世の空き

ぞの夜に鳴きわたりつる初雁の春をしまてごしひて

さめね

遠近の高ねをつたふ夕立の雲にそのこる花のおもはあれごいより立ちたるいつかしがこぬれぞしげみ

かげ

しみさふる木立をふかみ渡る日のかげさへみにす梢

春べは花をちかざしあそびつるぬべの秋はぎしたな より吹おろす風はさや!に音を立てつ蜻蛉の

風ませに夕だつ雨も櫻花にほふ春べはよざてこそいつはあれご不二の高ねのみ雪さへ消ゆさふけふは

ふれ

てれ日のあつき極みぞ暑き日のいたきかぎりぞしか

暑と云題を設けてよめる謌一首井短哥

見ゆ

水無月の望の日河上健雄か家に小集ひて樹蔭忘

花と見ておもひゃらなん夏山のは山の雲の雲とのみ

花にそ有けい

咲初てちり過ぐるまでわれはもよ花の奴と成りてしこもりぬのしたにまちつゝひさをわたるは春の

有りけり

月の夜に見つる櫻のおもかげをともすごもしに思ひ 櫻木をかたにゑるごふたくみらを打ころすべきくぶ

いてたり

つきもがも

年魚ならば鶏やつかつげてせめもせむ山川の瀬にち 年はつと人こそさやげふるゆきの散にし花をわすれ

花はも

てもへや

ふりしく

なり

櫻花ちりて流れ山川にときのすぐれは鵜川たつちる花を雪さしみべくちる花のおもかげなして雪の

霍公鳥夜た來鳴くは春花におくれし事を悔ゆるに黄葉さみゆきと二つむかふとも櫻はなほやけたらざ

かあらむ

なむ

ほとゝぎすしばきぬおそざくら尋て見むのた 花をのみのつるものとしおもひつる櫻のうら葉もみ

のみたわたり

たびにけり

づかしも

てくらむ

*七三

橘伊豆足か家の集

昨日みし花の面影夢にさへうたゝ見につゝ長しつほとゝぎす何事あれや春花のさきのさからにおくれ

櫻には努心をよ梅のはなこづたひちらし鳴きしうぐ あらたへの夢山吹の花はあれどちらぬともとは櫻は

ひす

もはず

うぐひすはもるにかあらむひるはも日のことぐさちりまよび過きにし花のおのかけのかはひらさちふ

くらに來鳴

虫ぞさふなる

四言

白玉をいほつつぎへてみたりもこれのさくらにあ ほつより落ちふらはせる下枝にし關だにすゑむ山

にしかめもやも

ざくら花

まかゝやく玉とくがねさほりせずば花を見つゝみ友だちのみむとちぎりし明日をだにすぎなはしゑや

きをしをさむ

花は散るらん

百年のいのちいきすば一年をうつらぬ花のかげにある花はまてとふことをなきぞ一言ぬしの神や

そばむ

のらしゝ

人のいのちかざりしあれば春花のさけるあひだはつ 馬にかくふもたしもがもうつり行花のこすゑに懸て

きて 將宴

ごめん

はるさめし花のちるべく打ふればきぞもこよひも安 おざりあがる駒はおしてもさゝめてむ散行花ぞすづ

寢しもをす

もすくなき

てましぞ

乗るこまのあがくそゝぎもにほふまて花のながるゝ

春の山川

春山にふすしゝにもか峯に尾にいゆきかへらひ花み

かりかも

櫻ばな

しらぬひつくしのわたを村山にかつぎたるなす花ざまつほどのこゝろ長きにくらぶれはうつろひ安き

ひはせむ

四言

かも

四言

吾妹子が袖ふる山のさくら花こさらにこそ常わす 何のいまありてかもな桜のさきのさかりに異こ

花を尋ねむ

らめやも

小初瀬はにはつ鳥かけのたれをのはちりつゝ

きせむ

あき人はなてかひんなきひんがしの市のさやぎに花村してる難波すが笠いほちもが雨打ちそゝぐ花に

な

しも

ば月影に花をしみれば短木綿みじかきこよのふくらく霰うつあら松原 まつばらにみれごもあかぬ山櫻

らぬかも

霞たちかけおぼしき春のよのつくよの櫻見れさあ 櫻花千五百のはるをくりたゝねめづともあかね色に

こそあれ

櫻花わがのるこまのあを駒のにほふばかりに花のち 春雨の雲より上に咲きたらば花に心をわかくだか

しく

めや

花見すとすさぶ心にくらべれば駒のあがきもおそく雨のその夜たゝ聞ゆる春はしも夢にも花のちらまく

ざりける

おもふ

馬のあおとさゝとし聞ゆおもふごちぬべの花見に行春雨は今もふらなんわがやごのふゝめる花の咲出て

かむとすらん

ぬまに

時しくに櫻の花も咲きたらば人は老いて世をやわ櫻がりゆくさのみちに處女あへり花のさかりはいま

たらん

にか有けん

耳なし

ぬかも

香久山の花のにほひはことさらにあひ箏はんうねび

櫻花にほふ比のみさかしらの多かるよともおもほへ

らね

ざるらん

みたに八十ありおきつものなはりてさける

たれしかも櫻をめでぬ人あ

橘伊豆足か家の集

春花のわすらねしめぬわすれぐさ摘みつゝもこなし さかしらをいかにいさへや櫻花あたしにはにほは

六七一

はさくらめ

こぐさ

櫻花ちりてくちにし淺茅原なごくたしめししこのしうるはしき御國の色を言舉げせずしめさんさこそ花

しも

玉と成りこそ

ねもごろにわがひりふがねさくら花ちるさもくたす 櫻咲端山おく山くりさゝね花にこもりてあらくしょ

126

見る人を

淺茅生のしぬのかりくひかりくひにあしふますないほしめてからまくもをし山菅のすがの所に櫻花

六言

櫻はな

さぬばり人のしらなく

らく

言をこそ山櫻さへうち甘さす都もまねく花にこも 春山はこのものもに花咲きていつへをめでむよし

なら人ぞさかしらはするしかはあれご花はめでつ 春の日はこゝら長けご櫻花めでつゝふればみしかく

歌は歌ひき

おもほゆ

よからん

りなる

いたづらの都はしらす島山のさくらはいまぞ花さか 朝戸出に花をしみたるけふにしもいつか増りて朝日

しづきてか玉さかならん浪のよる磯山ざくら花ちりこむさしの春咲出む花をこそわすれぐさとはいふべ

まがふ

かりけれ

るがこさ

しこぐさ

島山の花はさきたりたくひれの鷺こかもめもむれる 花はしも散過きにしをわずらわぬ櫻もやがてしこの

ざ出でむ

このし草

ならぬちまたもあらぬ都べは花にしあらぬくまさ

へもなし

のきぬにつくなすめにつくは春の山べの山

島山の花を見がてら沖津ごりかもちふふねをいさこ

櫻花ちるをしみずばなか!~に帰らむさこそはい一足引の山の櫻はよし綱を心にはへてあをよしけむか

ぬらめ

なくに

みよしぬのよしぬのさくらをつゝにはいまだみなくねもごろに櫻は見なむ一させに二たびにほふ花なら

に夢に見ぬけり

去年の春おひ見しまゝにけふ逢へる友としおぼゆ山我がしめし櫻の枝にすゃかけて木傅ひちらすとりを

櫻花

しもらむ

霞立これの山間セ入立てはにほひよろしき山ざくら 櫻花咲きたるころは山守がしけこきおやもすみうか

ばな

らめや

しに

青山に日はかくるとも櫻花つき夜とふたつ今しまし山守はしめてか見らむ櫻花ねこしにこして植さはな

みむ

長き日を花の木のまゆ大白のかゝやくばかりあそび櫻さくかたの茅生にまさぬして人替われも歌をこ

くらしつ

そうたへ

ユフツ・

じの花

るらし

歌さはに歌ひ出つるも櫻とふくずしき神のしはざな櫻にはいかで袖をもかけぬべきつさにはしらん丹つ

櫻花かざしにさせる風流士の丹摺の袖もいろけたえ あしなへさめしひにある道にまれ花見に行くはい

はざりけり

おしてるや難波のさきのならび濱ならぶ色なき山櫻 あはれふ言をおきてはさくら花先いひいでむこさ

はな

のしらなく

みるからにまうらたのしも花ぐはし櫻は花の神にか 琴ひけばうらたのしさは春花のさき出でぬほどのこ

あるらん

さにぞ有べき

*七〇

橘伊豆足か家の集

**九

釧つく手野の神杉一本はかれすてのこれ手野の神杉ぞありける

ぬか

久方のあめの木だねもはきて咲くはさくらの花に

が影を友さ見るがね八代の鏡が池はあせすもあら

櫻の歌

ゆるかも

うれたさ

月花のなからむささを中々にまきて住ままくおもほ

つゝみなく踊らむ君をしらとりのさば山松のまつが

八代にされける時春臣に贈れる

反 歌

のたか

ふ友と君も見まさね

富士の雪ちるかと見にて青雲の中より落つる眞白ふ 夜は月なけなくに月花を君と見るがね月花をあひ

眞山こそ五百重かさな春されば花なけなくに秋の

しらす

すて無詮丈夫の何かおもはむ海路こそ千重浪

けれ

の長手をくりたゝねたねいよせむたささきさへ知ら

ウラ

高機にかくざはすれご春鳥の聲のあやこそおられざ

下こほしけむしかはあれご神にしあらねば玉鉾の道

生ふし乗駒になすさもいかでたゝゆきてたい立歸り

モトナ

れる

大海の深き心にあらそひて雲のそぎへに山のそゝ

綾といふ事を

海外 山

・けり

大伴旅人の君はまさねごも月待つほどのともはあれ遠くしあればもろこしのちふ神に飛鳥のつはさ

浪のよる磯田のあそ君が行くあづまの國は雲はな

よめる井短歌

獨酌一盃酒

磯田の克直か大江門に行きうまのはなむけに

ぬべき

うつそみの人なるいれや隠沼の下の水に成りはて

カクレス

朝夕にあひかたらはむそこゆゑにかねてぞおもふ這

蔦のわかれむのちは花見ても意さぶしけむ月みても

おもひやる戀のたづきに植ゑし木は木高くしげく成

忍

梅が枝の地につくまで吹きすさぶしなど長への御い

きかしこし

野分

荒野なる尾花まき越秋風にしゝまつそやもそよさな

なゆめ

野秋風

みしらが貢たへるとこがむ四方の海べに浪立つ

せぬかも

海

四さしかのかれず鳴かね秋は鹿

記

み山べのささの量にまじらひて心なぐさにしひゝり

ひむ

も

山里に椎拾處

汝おきて妻はなしとふ神言をさらに互に言出つる

カタモ コチデ

カムゴト

答へつ

あひおもふ

神代にし出でかへらまくほしといへば各々はうべさ

軍士たけび雄たけび男さび身をたなしらぬこひもす

るかな

思ふごちかたらふ

寄 軍 戀

代とぞ思ふ

眞山木の伏木になはる荒熊の人になしらね隱妻ゆめ 瑞枝さしいやさからこそ根こしもて植うる心は八千

寄 獸 戀

松を植ゑて

かあらぬか

見がてら

たつ日のほごしおぼゆ露霜のおきてなげきし森 秋の海はにはも靜けしかけて夜たあそばむ月を

秋水浮舟

初 黃 葉

六六八

りけり

にけるかも

肥後文獻叢書第三巻

ここはの花にありこ

伊豆足か家の集

赤駒を打ちてさをひきひきもみでこゝろを人に聞え

つるかも

いひばしむ

人とはぬ山田の田ゐにいへをれは物こひしきの聲の

みぞきく

をつゝにしあはすてふれば盗人の至りたるあるもた

のまねにけり

みそらには月照りたらひ軒端にはきゝのさやけき松

風の音

月前松風

松へごしこの村鳥金戸べの山田のをしねぬすみ

はむ

山 家 鳥

らむ

繁本ゆふ葛城山にのぼりたち一言ぬしのよごとたば

名所山

すま人のやくふ鹽をからしさは我こふらくをしら

ぬ言鴨

うつゝより夢路にかよふ間使は風におさなふ落葉な

六六七

落葉鶩夢

酒のまむ友だちもがもしく!に雪の降る夜は淋し

きものを

夜

べく

まつぶさによそひたゝさぬ春山の霞男人も見る

妻向に行んする人に贈る

夜もすがら時雨空は跡もなく今朝は寒けき木枯の

かせ

朝

貴人のあはれとおもふ月影のしげこきをやにさすか

こぼしさ

貴賤憐月

らん

荒磯浪巻きもてよする片よりの玉藻や戀のたぐひ成

片

かぎろひの夕だつく ・もの薄色ににほふやみねの黄柴

なるらん

秋夕雲

甚 戀

妹か門かへりみすれは赤駒のあかくをしていたゝ

互 別 戀

眞空の月の光も大殿の玉のよそひにてり そはり

きり

夕

月

禁あひよばふ聲夏草のねこの山風吹落ちて浪野のはらの尾花玉まく旅人の袖吹きかへす秋風に奴島がさきのなみさはぐ

行人隔霧

野花

浦松風

風動よかる

現身の世のさかしらを浮雲にたぐへてこよの月は見いかでかく手弱き兒らが葛城のそつ眞弓こゝろつ

てしか

寄 弓 戀

晴 夜 月

にしなし

て

秋來ぬと鳴きて渡らふ初は世の長人にふふしも 仙人になれて朽ちにしの柄に我名はなりぬ現身

寄斧 戀

詠 雁

む

けずば

暁のかけろ鳴なりたびごろもむれ見ばをしきいざ出 打羽ぶり八尾越乞山ごりのはつをのからみもなか

ツチ コエコウ

烏 戀

旅 宿 鶏

寄 かも

みてる

大伴の津守が占につげねぎも人言しげくなりにける いてましをしたまちがほに秋の奴の千草の露ぞ玉敷

野草露茲

せり見ゆ

肥後文獻叢書第三巻

ぞおもふ

六六六

てたゝは隔てぬ旅人の分入る山にかをる中 橘伊豆足か家の集

日をまねみ遠々てくらべむ

五月雨晴

寄山述懐

の夢

ちぬらし

はるさればかきなす琴の玉琴の音にさへかよふわだつみの五白津桂もかくばかりすがの所にしみ立

鶯聲和琴

水樹有趣

けらずや

山川の瀬すべる年魚を嶋つ鳥鵜やつかつけてくはし末つひによりあはん水も岩に踊り千々に砕けて落に

めに逢ひつ

寄 瀧 戀

けり

けり

しをとめらが手ごとにもたるかたまさへにほふははるなよ竹のうら葉にのこる夕立の露もすゞしく月夜さ

雨後夏月

すみれ

はふけ

さかしらの入立ちぬべくおもほへぬ苦に埋る岩がながくらむたんてこそ中々に聞くもさやけき松風

ねのみち

古 岩苔埋路

寺

本立こそいはひもさほれにほひこそ櫻にしかね卯の

花の色をし奪ひ橘の香をしあらそひ村山のみ雪しけ

つゝ櫻花開出むほどのうち弓弦たゆまいつきて春風

の吹きのまにく玉簾の遠近かけて風流士の真袖に

うつれはしきこの花

飛なり

白川の水 上

からん

本ノ

将 軍

さて新玉のいやさしぐにみやびたる花とはなりぬ

すめらきの大御軍をあとは、たれかをゝしき心付

いざよふ浪の陰みてさてもこのもにほたる

のすみれなりし越の白山しらねごも尊き人を行き雨に朽ちぬる菅菜を先さいでゝ干まく

六六五

りとふ花を奈良人は酒にもうかべ宮人は折りてもか

荒山の谷の雪消ははる風の音にたぐひてたき落の山にも植ゑてみつわさしくしなればあわ雪のち

けり

をば園にもおふし足引

反 ハウ

ふこちたきものを誰人かこゝに作りて國はしもの

ことぐ島はしも嶋のさきざき貴人も賤の奴も赤根

さす日よみ月よみかしのみの一年をしも椎柴のしひ

て定むるしかれこそ月日暮れつゝ荒玉の年まつほご

のいとまなき心すさびにあてかびの足ゆは行けど村

肝の心も○○○朝鳥のあらそふがふりかくま

しきまで百不足八十の巻に真蠅如さやぎたりけりか

くのみしさやぎも○○○からなくても世の中の業

にあれこそいなむしろ川添柳行水に従ひわたれしゑ

や世に無さもありなむ春立ば春はしるきを岩間霞

引鶯の初聲さそふ風の共谷の岩間ゆ打出つる雪消に

増る水なけなくに

歌

める謌井短歌

河上健雄家かに小集て梅風遠薫といふことをよ

ットヒ

しよしも

獨 居 戀

おへごく馬にかきつ虻しもののやつこしかき

つかひけら

サハエナス

奴

ウマ

別無書戀

まむ

こよべに雁わかれにし人のつかひをなにた

人のゑりたる穴に關守をおきてとゝめむ人のおも

詠春風春水一時來謌一首井短歌

古へにありこもきかぬ言さへぐからのてぶりの暦

逢 夢 戀

橘伊豆足か家の集

六六四

かけ

肥後文獻叢書第三巻

の大路ゆくことひの牛のむかつぬの妹に向ひてあらく

風のこの里の神の世に定め給ひし男か弓端女の手

末の外にしもえみしのゆ高光日の御子の大御威

稜をかけてかしこみ大船の船腹不干毎年に棹楫おか

す貢せし茂ぐじ薬の中の木實民草婦利附錄

成人の日、駒かひ姫の御事は、 中村正尊がはせ

るふみに委しく載せたり、たゞ駒をかひ給ふ事の

みにあらず、その除おしはかるべし、此歌に

ひの手馴の鹿毛とあれば、甲斐のよりいでたる

を、手飼になづけたるかげの馬さきこねたれご

少女子がかひのなれのかげみればうせし翁のこま ひたして

はものかは

お

ほちの御心も、なぐさみ給ひて、老のを楽しみ

給ひけりさなむ、

戀しき

なへるをもなげかず、又得たるをも喜ばざりしか

ご、このおほちは、かの翁には心ざまおとり給ひ

にけるにや、失ひしのちは、その事をのみぞなけ

きにければ、ひめの御心にも、 やすからぬ事にお

ぼして、いかにもしてよき馬を得ばやさのみ、思

つけ給ひしかごも、今よりまづしくおはしけ

れば、人の爲めにやさはれて、あるは衣をたちぬ

ひ、またいひしらずいやしきわざにもたへ忍びて、

つかはれ給ひしかば、人もいたうあはれがりて、

鏡など興へにけるを、年月貯へて、つひによき馬

を買得て、おほちに奉り給ひければ、それより六六三

民草婦利附錄

古城貞吉覆校

宇野東風校

考

神のます女じまの松のしづ枝には浪のしらゆふかけ

ぬ日はなし

年ふるやめじまの松のふかみどりしづ枝は浦の浪に

殿

女 島 松

風

早

おもかげは雲井の月にしのばれて共にみしょの人ぞ

かひの國は、良馬を出す國なれば、そのまこ

は、甲斐のこまにか有りけん、さつま馬にか有り

けん、只良きこま買得たるを、國の名にそへ、又

草飼水かひたるにもそへていへるにや、言葉はそ

の宜しきにしたがふものゆゑまことをみたるには

いたらざるべし、その毛色も、又かげにや有りけ

ん、かす毛にや有りけん、影形のかげにそへてい

へるなるべし、正尊が書をよみたらん人、又此う

たをみてうたがふ事有るべからず、

あらたに郡のつかさにうつれる人に、おくりける

うた二首

讀入しらす

霜枯れて春待ちわびし蘆北のあしの下根や下にもゆ

らん

蘆北郡

ともつき終りて松をうゑられける時のうた、

山となる磯の堤に松うゑて千年の末も浪はこさじな

貢物またここふる秋もあらじ耕す民の力つくして

斯くて民の力を盡しけるを、 稲津の神いたくあは

れみて、公に申してみくらの錢いだして、民に興へ一

られしかば、皆喜びて、此さもは海山の石を引きも

てつきたれど、公の金のともなりといへりければ、

海の石山の土もてつくめれさつくはこかねの堤なり

けり

かみつ瀨の清き流れをくむからに心にこれる民だに

もなし

のの末に山のきはみにすむ民も皆おり立ちてつくつ一

つみかな

はら

こは成りける、もろこしの馬を失ひし翁は、うし

駒飼の姫は、御かぞいろはやく身まかり給ひての

ち、ひとりのおほちによくつかへて、御心をつく

し給ひしかば、御名世にかくれなくぞ、聞給ひ

にける、かのおほち馬を好みて、めて給ひけるに、

馬のにたろ

そのこまはしり

にければ、おほちい

はしおさいふ

たう惜みて、つねに忘れ給はず、此事のみぞ物思

駒かひの姫

此郡は、國の都をさる事いと遠くして、里の習も

おのづからあしきたの名にたがはぬ民こそ、多か

りけめ、まへのうたにほめたるを、この歌にはい

ましめたるなり、道しあるよは、今の君の御うつ

くしみを、むなしからしむる事なかれ、思ふな

るべし、

蘆北の悪しきを書きにうつせがひうつせば移る道し

有る世に

或人の日、郡の民. さきの司の、からき政に苦し

みて、後の司の、深き恵を希ひたらんさまを、お

しはかりてよめるにや、質によみがへりたらんこ

ちこそ、すべかめれ、

なみの打磯邊の堤今よりは動かぬ國の固めにぞつく

ひにけるかな

某の下司に、いざはらあしきをここなん有り

いたつらにしぬる命をながらへてうれしき世にも逢

へなり

神さいふ事をかしらに置きて、

ら民のにくみしこさ、かくなんありける。

今よりは紙このてら身につけじ川しわたれはわ

このぶし

いはむ

しにもいきも君が心に任すれば神や云はむ佛さや流れよる水のみく
すにかくろひてかしらなあけそそ

かのけにけち、民をいたはる心なして、稲津の

神のいましめ給ひしかば、畏まり居たりけるに、

民また彼が名を呼びかへて、そこの石ぶしさぞ云

ひたりける。

しがな

にけり

ともなき黑髪のとけぬ恨はいふか

けづるさもはね馬にねたき男を打のせて心ちよげにもおさして

きく

わざもこが贈りし餅の甘ければ辛きしわざも忘られ

になひかね引きかねにける石よりも君が心の角ぞは

くいも

我せこがからき思を慰めて甘きもちひを贈りてしがな

けはしくも晝飯くふ間もおそしさや杖ふり立てて怒

歌の整聞くはなつかし唐衣たちぬふ手さへ忘れてぞ ひもなし

けふいくかくしけの小櫛さりもみず身を八代の堤つげしき

めや

らじを

しぬ命いくとし云へば佛とも薄さもなどか仰がざら る君かも

あくるちゝ母の撫てし我身ぞあらちをのあらきたぶさの杖

なふれそね

石ける、ともすれば腹だちて、杖をふり立てつゝ、怒

けるにおそれて、うたを作り、それが名をば

けにけちさなん呼びければ、 うたの頭に置きて、

いなつのつゝみてふ堤はあれど嬉しさを袖につゝみはこれの

君聞召して深くなげかせ給うける除りに、誰れか 白糸の夜こそもたちのはめ堤つく日はいくかもあ

なからん

ら友さちなぎ、一方ならずかなしめる人の心なる

べし、

わざもこはけふも堤をつきはぎの衣たちぬふひまや

て戀ひつゝ

あなたふと君は神かも佛かもしぬる命を救ひ給へば

まし物を

或人の日、父母を流し妻子を失ひ、 あるははらか

浪のうつ磯遊の蘆のあしも手も岩にくだけてふせる なに寄りては

こは誰

たをやめの我身にしあれどいぐひ打石をも引かむせ

熊川や木綿葉の提水にて浪のそこなる岡のへの松

たらちねの行衛をさへばしら浪の八百の汐合に立ち

さはぐみゆ

萩原の秋の田の稲津の神のなかりせばしぬる命を誰れかた

すけん

きなるべし、堤を

熊川の水かさまされる五月雨に松江の城は沖の中島

めしはいまれなる年になん.

この水を治めてむやこ宜ひければ、稲津某承りて、

何れの年にか有りけん、卯月五月の雨久うふりつ

し云へる言も傅るになむ、

しぬるを吊ひ、生けるあはれみつゝ、堤をつき

て、田畑のあれたるも、うねを正して、よくご

ゝのへければ、民皆喜びて、神の如く佛のやうに

うやまひけり、則うたへるうたを、萩原さもつき

の歌といふ、そのうたにいくらく・さもつきさは、堤

もさいへるは此の民の言葉にして、つ

こもかれていへろになむ、

らんは、いかにぞや、水清ければ、すめるいを少

ゞきて、萩原の堤(つれにければ、松江の城、岡

の里、皆淵もわかず成りにけり、家を流し身を流

したる人、いくらばかりさも知らず、古に斯るた

ゆく川の水は父の里母の家にきくはまことか

わだつみのもくづとならば諸共に我れも水泡さけな

塘つく少女いさまなみ花すり衣袖まくりして

萩原や妻こひかねて鳴鹿の聲きくらんか堤つくいも

哀なり妻懸ひかねて鳴鹿も人目堤を中に隔てて

赤のたすきあるの前垂誰だに知られぬ人を懸け

民草婦利附録

伊形の質

遲くうゑ早くうるも天地の時を松江の里の小山田

成人の日、天の時をまち、つちのよろしきにした

かへるは古のへなるべし、

ある人の日、此里の民、年のはやきには、卯月に

田をうゑ、おそきには、五月にうる卯月、

五月田さぞいへりける。

順

まつる比にもなりぬ八代の卯月のみたは今や植う

らん

卯月田の歌

高 伊形の質

蛙なく聲しきるなり小山田のなはしろ櫻いまか散る

らん

蛙のなくを聞きて

こら水まかせてよ小山田の苗代櫻咲そめに鳧

或人曰、宮地の里に一樹の櫻あり、里人此花の咲

初むるを見て、年のはやきおそきをしる、是をな

はしろ時のしるしとするなるべし、

順

高

本

これぞうた人の心ならんかし、この後もみななぞ

らへ知るべし、

いさや本成人の日、かくれてふせりさいへご、すなはちあ

きらけしからのうたに聞えたるは、時の民、

世の政に苦しみて、身をおくにせきさまを云へ

るにこそ、明かに淵のうろくずを、うかひ見た

六五九

質

木綿葉川たゝふる淵のそこ清みに伏すいをの數も

見えけり

或人の日、いみじき薬湯なり、

あみてんさて、

蘆田鶴のすだつひなごの内にこそ千代

湯はあれ

のふてふ薬

質

ひなこにゆきて、湯或人の日、つきはぎは、此里にてそむる布の名な

り、よく雨露のうるほひをのぞくものなれば、み

しろ衣につくるべし、

ツキハギノミノシロゴロモホスマナミコ/サミダ

レニクチャシスラム

イニ

さみだれに袖やくちなむつきはぎのみのしろ衣ほす

隙ぞなき

読人知らず

民草婦利 終

らん

たるなり、先生、學業人物の事は、世の知れる

所なり

佐吉 識

スナホ

伊形庄助、名は質、字は大素、玉名郡木葉の産な

其居所の上なる山を雨山と云ふ、其山の巖壁

を猿と云ふ、因て靈雨山人號す、 又猿の民

加へて、魚の誤を糺すといへども、又只暗中摸

索するのみなり、其真面目は、大村が藏本に照し

見るべし、

甲寅の春三月二日、再此一冊を讀み、漫に朱字を民草婦利附錄

肥後文獻叢書第三卷

質、又素とも書かれたり、後山本郡の岩野にも暫

居住せり、因て又岩野の民などとも書かれた

り、根元民籍より出でたる人なる故、民とは書か

れ本傳目錄植柳惣左衛門

ある人の日、この事、中村正尊があらはせる書に

くはしく見わたり、 この人いやしき民なるを

た人のうやうやしく書きたるは、まぎらはしげに

聞侍れご、いま人の世にしていはい、いやしき

民にこそあらめ、久方の天津御くらゐをいは、

質にうやまひたふさむべきことにあらざらめや、

伊形の質

老の身も若かへるてふすまひ草まけぬ心の種やぎる

うやなぎの里にすめる人、御はらからおはしまし

けり、よく御親につかへ給うければ、いみじき御

聞え、世にかくれなくなむおはしたりけり、 その

御父わかくより、すまひを好み給ひければ、御はら

から耕の暇には、すまひとり給ひてぞ、御父の御

心をなぐさめ給ひにけるとなむ、

八代の郡

六五八

民草婦利

右民草ぶりと云ふ一冊は、安永天明の頃にやあ

けん、伊形の庄助が書集めたりしを、大村源内勝長、手つから寫し持てるを、文化の中頃にや、りうけ讀みたりしに、心さまりしふしぐも多かりければ、寫し取りて我物にせばやさ、思ひつ打過ぎたり、今の大村長より、彼一冊取返さんさ、云ひこしけるに臨んで、伐に寫し取るべき暇なく、さりとてた”に返さんは本意なければ、予か召仕のをのこどもに跳べて、拙き筆もて書寫成人の日、年の暮に鬼やらひ豆を、月の數火にやきて、よくやけたるを早さし、やけぬをあめふるとして、明年のいましめをなすさかや、

つねあつ

今よりは聖のみ代に習へさやふ民の畔ゆつるらん

まめのためしのうた

讀入しらず

鬼やらふ豆を火に焼き空へばてれるくもれるしるき月々

ますますにすなほならん事をことほきて、

て、必此一首は、集中に加ふべきよしちかひたり

しも、いつしかなき跡の、昔語りとは成行きしな

りと、大村が予にかたりしも、やがて五十年にもな

りぬべし、嘉永六年癸正八月盡日、七十三佐吉、

六五七

伊形此歌を見て、ゆきのみにしてさは、みがく矢

さきの白きこと、雪の如しと云へるにやさ尋ねけ

れば、歌の表はさもあらん、其の質は靭の身にし

と訳せる也と答へければ、伊形ます 感吩-

静なる世にも忘れず武士の磨く矢先はゆきのみ

にして

形作らんとせしを聞きて、大村一首を詠じて、

中に加へん事を乞ふ、其の歌に云、

集

因に云、此民草ぶりは、 士農工商の部類を分かち

て、夫々の歌共を集めんさて、先此一冊を伊形が

作り出たしけるを、大村いちはやく寫取りぬさて、

ほこり顔にて、手にせられしなり、此一冊の次

には、士ぶりさかものゝふぶりとか云へるを、伊

さしめぬれば、其の誤も少からす。然れども其の

大概は推して知るべきなり、ほ復た大村が善本

をかりて、寫取るべき事にこそ、

或人の日、質がさるかけの山にすめる頃、山人のむ

猿がけの質

あらちのかるやむじなの裘ころしも塞き老人の

ため

住むや誰れ朝けの煙一すちに雪にうもれぬ山かげ

の庵

ち

よ

ご

つ ねあ つ

庵近きそばのかけ道埋れて妻木にかよふ雪の山人

或人の日、やゝふかくなりゆく事を戒めて、 か

くしめしたるになん、さつてゝと云へるも、いへ

のをのこをさしたるなるべし、

猿がけ翁 藤

さつても雪のふる日はやすむべし寒からぬ間に薪

とりおけ

餉

からのうたにも、かれいひをもてあやまてるよし

いへるにや、 これ女のうたなるべし、

をも取りなば、終には人にうまれぬべきを、い

ましめたる言葉なるべし、凡民のうつくしみをう

しなへるは、いさゝかなるよりおこれる事なれば

肥後文獻叢書第三卷

萬代も盛ゆる國のさきつ風恵に朧(四方の民草

君の御うつくしみをかうふりて、民のこゝろも、

大君の恵の露し深ければ民の草葉もいや茂りゆく

津田つね篤

貧しき民をにきはし給はんさて、御を開かせ給

ひける、御うつくしみをことほき奉りて、

或人の日、此歌も前に同じ、是はもの丶ふの歌な

るを、此所にのせたるは、事のつひでによれる事

なるべし、

じなをかるを見てよめるにや、冬のいさまにまか

せて、けものをかりて、そのしゝむらをやしなひ

さし、その皮を衣につくりて、冬をふせぐたより

とするになん、からのうたにも、一の日こゝにむ

じなかるといへり、一の日は、十餘り一月の日

をいへるなり、さればこの國の霜月なり、年いた

う寒くなりゆくまゝに、老をやしなふそなへをし

たるなるべし、

間

霜深き八重山越えているしゝも老を養ふたらちねの

ため

六五五

利

柴人

日暮るれば谷より谷に成人の日、これ里のことわざなり、わが家に火の

しき

きはこふとも

しげる

眞柴かる賤が袂や寒からし山路しぐる風のはげ

みぞれふる猿かけ山の寒き日にぬれ あこなが薪取

るなり

くるしき、

山深く通ひなれてもうれわさの重きたきゃやみには 妻木こる道さへ今朝は埋れて雪こそ積れ深山邊の里

こり つみて冬ごもりする遠の

里人

さなん、書爾于茅、 夜爾索綯さ云へるからの歌の

心を、やはらげたるなるべし、

豆

智

深山柴雪ふらぬ間に安

或人の日、此歌は高本の順が、民に代りてよめる

れやそのなは

家のわらはぎもに、 なばなへらん事をすゝめて、

暇なく運ぶや民の貢物治れる世ぞ賑ひにける

或る>

の男が運ぶ貢のいさ讀入しらず

ぞしら

なさに豊かなる代の秋明けたらはちかりに行かんいざや子ら此夜の程にね

人の日一家ののこの柴かりに行きける折ふし

も、雨風いたう塞かりければ、思ひやりてよめる

さかや、自ら民のみとして、 しづさよみしは、我

家ののこをさしたる言なるべし、谷より谷によ

びかはしさよめるは、いさむつまじきさま、目に

見わたる心地なんしける。友だちのまことあるみ

ちの、柴かりにおもひたるは、國のをしへのひろ

まりにけるしるしならんかし、

妻木こるが袖こそ寒からめ朝霜白き山かげの道

こころ道さへ絶て此頃は煙も立たぬ雪のやま住

木葉の呼びかはし友いさなひて踊る

或人の日、あごなさは、女のわらはの名なるべし

思ふ中たゆといふなりたきさしのほたをなこひそお

けぬるとき、人にこはん事は、かたみにさるべき事

ながら、火をこふにこさよせて、たきさしのほた

松井有樂

ふきあへ川風の誘ふ 時雨に嘆く舟

らすをかへさむさて、わらはべのことわざにも、

間

伊形の質

べる舟の時雨に逢ひたるを見て、

山鹿の奥より高瀬の御くらに、みつぎものをはこ

くに

都に、みつぎをはこべるものに逢ひたり、さらぬ

だにかゝる山路は、越えうかるべきほごなるを、

身にはおもにを負ひながら、いさゝかくるしげも

見に侍らぬは、君のみつぎとおもへるゆゑならん

かして、そのものにかはりて、思ふらん心をの

べ侍りぬ、

2

蒔の種をもかはむ群鳥門田をおへば園田にぞ付く

でも

秋のすゑ狩にいにけるみちにて、山の奥より國の

とも打かけてよとぞいへる、飛行くほどに、すこし

おくれたるをも、はや追立の言葉となん聞へし、

はじめてみつぎ奉る日、おほみき給れるを喜びて

貢物をさまる國の豊みきはくむさもつきじ萬代ま

日はなし

跡のからすの巣のやけたり、はや行きて、水なり

しき

麥たねを蒔きにし日より小山田に鳥追民の立たぬ

己が住むならなくに旅鳥よその種なに盗むらん

或人の日、姿といへるものは、冬より夏にいたり

て、みのれるものなれば、そのほごのかてにとぼ

しからん事を思ひて、まつぞ久しきさはよめるな

り、鳥追ふ民といへるは、だねをまきそむるこ

ろ、多くの鳥のむれ來て、そのたねをついばむを

うれひて、田畑ごさにかしなご立てぬれぞ、

それにもおそれずなれる、おどろかさんとて、

田の畔に立居て、さらなごうちならす事、 かり

追に同じかるべし、旅がらすご云へる事は、この

國のからすにもあらで、よその国よりもむれ來れ

有るをいふなり、このからすは、八百萬のか

すもしらず、うちむれたれば、人にもおそれずし

て、田畑のたねも、時の間にはみつくすものな

れば、分けてにくむべきものなり、さればそのか 貢物さまもふみ越ゆる山路も難からな

君か爲め運ぶ貢は岩根

六五三

民 草 幬 利

吹くまゝに夜寒もまさる秋風を恨みながらや衣打 秋の田の刈穂の跡に植ゑて實らん春を待つぞ久

聲

讀入しらず

秋風の身に寒き夜は宿ごとの思ひ(にころもうつ

をもかつぐすきかへして、なたねの種まくな

ぎ、いそがはしきを云へるなるべ

、

或人の日、よるさへにいねもやらで、きぬ秋の田もかはして

木葉の茂

夜もすがら蟲も鳴くなり草の戸におるしづはたの聲らん

いふさへに、鳴つけければ、

淺芽生の宿は夜寒の露更けてあさのさ衣うちやわぶ

夜更けぬるまできぬおりける折しも、はたなり知られて

なる

打たゆむひまこそなけれあま衣たへぬ夜塞のほごも

寒き夜のつりさせぞ蟲もなく

讀人不知

影寒み八月長月長き夜にうちもたゆまぬがさ衣

夜更けてつゃりさしの鳴ければ

更くるまで月にねぬ夜も知られけり霜を重ねて衣

打聲

軒つき同じ里の秋風も身にしむかたや衣打覽

秋風の袖に覺て涼しきは是やみにしむ始めなるら 此頃は夜塞催す小山田のいねずや賤が衣うつらん

も ち

いもがかす破衣の豐

持

をおり

居たるは、つぐりさせていひしものつまにや有

けん、實に貧しきものしわざこそいさなけれ、

からのうたにも、衣だになくば、何をもてかは歳

ををへんとぞつくりたりけるの刈穂の跡のつかの間も民の仕業のいとまな

の身や

或人の日、秋のいねをかり取りし跡に、ほいな

莖のつかばかりのこりたるをばかりほの跡のつ

かのまとはよみたるにや、きのふけふかりにし田

小夜更けてきね音すなり場のあすのまうけのけし

牛駒のはみも豎けきなみやこぞの粟がら今年のひ

へがら

な

すゝめ申さん

小山田のかりほの跡のひつち草年に二度みの3秋か 相杵のうた

或人の日、そばの花のくろみ行くは、みのるを云

へる也、みになりてくろくみゆるを、はへのさま

るというは、ささのこざわざなるにや、すでには

へのさまりたれば、みをとらん事ほどなかるべし、

なごいへるはつねの言葉なり、

かつぐにくろみそひゆくそばの花すだくはへこぞ

あやまたける

山ばたに雪かもふると見るまでにしきて咲けるはそれる身を

ばの花かも

立ちなびく烟もしるし豊年の民の竈の秋の夕暮

或人の日、難波の宮のふるさをさりいでたるも、

小夜更けて搗く

すなほ

君が世は民の竈もそひて畑にぎはふ遠近の里

いたづらにはあらで、その世のさまをもおもひよ

そへたるうたなるべし、

おやの親のたねを傳へているがこの子のこの末もむ

つび合ひにけり

はつ芋を煮て親の霊にすゝめ奉りて、その餘りを

子うまごごもにもとらすさて

思ふごちつかる身をもなぐさめてきふししらぬ

成人の日、これにはあけのうたなり、門田もしく

は園田をつきかためて場として、そのめぐりに

稲をつみ置きて穂をこぐなり、かくてもみをくら

にさめはて、そのにはをはらふを、にはあけ

とは云へる也、にわあけのいはひには、さけもち

ひなごまうけて、田長よりわらはにいたるまで、

もてなす事也、

まづしさは何思ひけんけふは只酒ももちひもあきた

にはあげの今日のちひのひえぬまにまつは田長に

あすははやにはあげせんとわざもこがもちひの栗を

ねつくらし

或人の日、今の君、御政を開召してより、年々に 君が世は賑民の煙にもなびき合ひたる里のむら竹

のみき

ち

よ

隣のかみ深き恵に百かばねこよにませさやしくこかしこしな君が恵の時津風民の草葉の末も靡きて

みき奉る。

いかたの質

りしよしをきゝてよめるなるべし、

成人の日、このふたうたは、里々の民の君を祝ひ奉

らし

境野意明

こそ祈れ

小畠里邑

君が爲め千代も八千代も八束穂のほにほすてふ年

なるらん

しき

去年よりも今年はかろ き貢物除り有る世の秋ぞ楽

大槻清之

千代に

とほぎにたる、是その時のうたなりさぞ、

我君にけふ奉るとよみきはかむしやそへん千代に八

みつぎ物をはぶき給ひて、民をつかひ給ふ事も、

みな時のいさまをもて、つかひ給ひしかば、國た

國の守をことほぎ奉れるうた

のさまなるべし、

なだあり、かしこにおちたる穂あり、これやまめ

成人の日からのうたにも、こゝにをさめたるい

げき

の利なうといへるも同じ心ばへにてゆたかなる世

みいたう喜びて、耕すわざに力を整し、 たなつ物

よくみのりにけるを、君のみめぐみなりさて、早

田の初穂もて、酒にかむし、もちひをつきて神祭

の如くにぞまつりたりける、此事誰がしいだしけ

るともしらず、皆里々に停へて、君の千年をぞこ

風吹けば穂むけのなみのかたよりになびくや民の心

此時民も仰ぎてまつりごと直れる君が世をふ

きらくしひごのかみの、やしなへるおほんめ

を仰ぎてや、百のかばねの、たなつ物さりよそひつ

ゝ、たなつ物よくすをつくり、すにかみて謡ひつゝ

木葉の茂

ほがけの日よめる

或人の日、是旋頭歌なり、

ぎてかさましを

晩田岩野の質が妻

さねて

、

もりわびぬ山田の庵の夜をこの稲かりに行給ひしあした、露霜いたう深

木葉の里の茂

の里

幾夜かも門田のいねのかりそめにむすぶ庵にもり明朝な夕な賤が手業のいなさも秋ぞにぎほふ小山田

すらん

松井有樂

つ ね

へるにや、

雨や

わぶらん、

此秋は民の袂も敷をひふせぐべき便もあらぬ秋やうきがわらやの露もし嬉しくも神もうくらん君が代のゆたけき民の秋の穂

づくも

かけは

す な

ち

よ

のかり庵

まへに

ますらをは我ながら露しぐれもりやわふらん小田 君が代の千代の頁のはつ穂がけかけてぞ祈るのみ

てたちやならべん千重の稲倉

或人の日、いなぐらとは、いねをかりつみたるう

へに、とまふきたるといへるにやらん、

うきわざにたへつゝかも明すかりほの庵の或人の日、秋の田のよくみのりて、君のみつぎを

滞りなく奉らん事は、ひとへに神の御めぐみなり

さて、早田の初穂いがきにかけ奉りて、またこ

む秋のみのりをもいのれるを、はつ穂がけてはい

かりければ、衣を遣すさて詠る塞みかたしく袖に霜をか

或人の日、まへのうたは、みな思ひやりてよめる

に、此歌は自らをまもりてよみたれば、かへし

うたににたる哉、

かる君が袂をぬらす露霜寒けくばいもか衣をぬ

賤の女が拾ふ田の面の落穂さへほ餘り有る秋ぞ豊

民 草 婦 利

六四九

ゆたけき

中山

八束穂にさそふる稲も畔ゆづるむかしにかへるぞ田

秋塞きつねあつ

(露ももる庵に明し兼ねたる賤か小山

秋風

雨の夕は

わせおくて千町八千町八つか穂のしなへゆたかにな淋しさよ小田のかり庵のうすけふりそれさへしめる

び(も >

ち

لو

木々はまだ染まぬ山田の秋風に色こき稲の露ぞしぐな口落す

明日よりはむろの早わせかりほさんけふは山田のみ

よ

山本

ぞふく

はると田面の穂なみ打なびきとし有る色の秋風

をしねほす田面の夕日かげ暮れて時雨の空のなびく

緒方敬房

こよ も ち

千町田に

も

木葉の茂

かりけり

岩の民

だれ合ひにけり

こゑ

穂にいづる門田の稲葉色づきて豊なる代の秋風のひく馬にくつこよく入れよあせ路の早田の穂なみみ

讀人しらす

みのれる故なりさぞ、

此秋も酒作らんときびのほのうつむくみればうれし

我心秋の穂なみに寄せしより門田の面に立たぬ日成人の日、くつことは、口籠なり、ほそづなにてあ

みを結びて、馬の口にひき入るゝを云ふなり、みち

のゆきゝに稲穂なご、くはさじさするそなへなり、

緒方知古

豊なる世にすむ民のよろこびも穂にあらはるゝ穂の

よななり

此秋は野分の風のふかじさやもす鳴をはや聞きつ

民草も時をたがへず降雨の恵にかゝる世こそしら

ろれ

ち

粟になふほしのあるこのたはみこそ年ある秋のしる

しなりける

讀入しらず

山畑の朝しめり粟蒔きて夕立つ雲をまたぬ人なし

大濱やながすはらかの雨催に雲こそかれしまばら

の嶽

じを

或人の日、梅田ぐみ姿と云へる諺あり、梅の多く

なりたる年は、稲よくみのるとし、茱萸のよくな

りたる年は、麥よくみのるしるしとするなりと云

へり、

岩野の里の質

五月雨は早もはれなん、山本の岩野が原に粟まかま

梅の實の枝もたわゝになりしより秋のたのみも頼も

しき哉

ひくいも

成人の日はつきたゃれくら立つるといへること

わざあり、たゃれさは、雨のふりつきて、つち

のたゃれたるといへるなり、これ年のゆたかなる

しるしをいへり、萬のたなつ物のうるひて、よく

讀入しらず

いざこざもそま木きりおけくら立てむ八月の空に雨

ぞふりしく

々の田のもの露をよすがにてほにあらはるゝ稲妻

の影

つね つ

此秋は小田のかり庵にうちなびくいな葉のくもぞわ

きて色こき

木葉の里の茂

秋風に稲葉の雲も立ちそひてけぷりにきほふ小山田

の里

ち

よ

成人の日もずの壁をはやく聞きつる年は、 野分

せぬよしこはざにいひならはせり、 からのう

たに、八月なくもずありといへるにや、このはつ

きは、この國の水無月に當れりこぞ、

成人の日、是もあるじの、田子を戒めて云へるな 稲葉こそ目さすばかりになりにけれ心して引け田草

六四七

さのぼると思ふ心の怠りにうゑし山田や草にあれ 君が田のあこす水にまかすれば我田もいたくうる

なん

ほひにけり

かへらんとするを戒めて、あるじのかくいひ

たるなるべし、

あけはまた田草ひきてむいざやこら夜の暇に水まか

せてよ

成人の日、やさひの田子のさのぼりのいさまに、

ひくいも

まいづゝに奉りて祈る事なり、井には水を祈り、

かまにはいひにたくべきを祈るぞ聞えし、

田草引く比な忘れをしばし只やさひのたこはいなば

いぬさも

洗ひにしもすそもいまだかはかぬに又袖ひちて田草

或人の日、〈ゆむとは、苗の根ざしたるをいへる

なり、緑の色まされるは、根のくゆみたるしるし

なりとぞ、これ田草をひくべきしるしなり、根の

いまだくゆまざるに、つちを動かしぬれば、苗な

やみて色きはむなり、くゆみてのち久しくつちを

うごかさざれば、草の根にからまれて、苗やする

なり、始めてうゑし時より、みどり一入深くなり

ぬるを見て、皆おり立ちて草をひく事なりとぞ、

里の翁の語り侍りき、

そ祈れ

成人の日 さのぼりの日、苗をもてかへりて、 か

まつる

つゝ井津の上に早苗を手向置きて水うけ草の水をこ

いで遊ぶ事なり、

とみ草のさし有る秋を祈りつゝ飯だくかまに苗たて

小山田の緑も深く成りにけり植ゑて早苗の根やくゆ

むらん

歌にも、はなはだ大いにすさむる事

なかれ、云へる心ばへなるべし、

のぼりぬれば、人をたすけてううるなり、 一里皆

うゑはてぬる後は、かたみに行きかよひて、酒な

ごたうべて遊びたはふる事、三日四日の間なり、

女ははじめてくしけづり、かたちよそほひて、も

ごち相つぞひて、るべし、唐のおのれ先にさ

てぬ

成人の日、これさのぼりの明日よりは足あらひてむのころ田つるなり

うなるこよ小篠をりもて打はらへうしのそびらにあさのぼりし里の少女子眼あれや川に出でこあゆ

ぶ付きぬなり

ますらをは小田のあらしろかきさして柳がもとにう 田の神に昨日まつりしおほみきのおしろのみきにけ

まやすむなり

ふも酔ひにけり

田の神のおろしのみきに早少女も田長もいたく酔ひさのぼりのけふの蔵の嬉しきは牛に馬にも米はませ

にけらしな

つき

いへるにやらん、

田うゑたり

われはしも初田うゑたり人みなのうゑがてにする初

の身や

早苗さるやさひの田子の数々にけこのそなへも暇な

或人の日、いなてとは、いねのつかね絡を云ふな

やふらん

らずして

讀入しらず

苗は

つねあつ

末かけて秋のたのみぞしられけるうへもつくさぬ賤 或人の日、田をうゑはてゝにかへるを、さのぼ

が早苗に

りともいひ、又あしあらひともいへるにや、けが

日は暮れぬとも

よ

れたる足をあらひて、やすらへるなるべし、 是は

田長の田子をはげまして、つかへるさまなり、

讀入しらず

つかぬべき秋のいな手のたらしさやけふうゑわたす

苗賤の女の節立たぬ間と急くらし取手暇なき小田の早

わきもこがけこのそなへぞ豊かなるいくら計の田子

り、里の諺に、なへたらずは、いな手たらすと云

へる事あり、秋のいねの多くて、つらね緒のたら

ぬを云へり、苗のたらぬを、中々ことほぎてかく

もけふ植ゑは歌なり、民草婦利

かつ

わせたくて同し縦の早苗草千町をひろみ植渡すなり

松 村 昌 條

千町田の線の早苗遅れじさ取手数多に急ぐ賤の女

なる秋も知られて今日幾日山田の早苗されどつき

な

松村昌條

せき入る山田の水に夕月の影うつる迄早苗取るなり

賤の女が袖もほしあへず時ぞや夕暮かけて早苗取

るらん

るなり

ほりかつな

急がぬも田子の心や五月雨のはれておくての早苗

打なびき一つみごりの若尚も先取からに早苗をぞし

る>

津田つね篤

薄きこきが門田の若苗にわせもおくても色ぞわか

木村さよもち

おやみなき雨もいとはす里の子は植て早苗の秋や

待つらん

六四五

こゝかしこつく小笠のそれよりも殴りてみゆる小

田の若なへ

つねあつ

つきせずも田面に残る若早苗引にあまたの神はみゆ

れど

是 常正根

けふ幾日みゆれとつきぬ千町田にさなへ取る

た少女子

千町田に猶ほぞ殴りし賤の男が手玉もゆらにされる

さなへは

篤

つね

らるゝ

少女子がさりぐ植うる早苗にもなる世の時ぞし

小山田に取れごも盡きぬ早苗にそ豊なるべき秋ぞみ

えける

豊なる秋も知られて少女子が取手にきほふ小田の若

苗

つねあつ

せぬ

るなり

ぞざる

稲種を天のさなだにうゑ初めしためしを今に早苗 海士人のしほたれみなど田に又ぬれ添へて早苗を

緒方知古

西岡維則

小山田のしづがぬれぎぬそひて日をふる雨にさな

へ取なり

さのよび聲

あすよりは初田うゑむとよもすがら早少女やとふを

千町田にすげの小笠のかすみんてゆたかなる世のさ

なへとるなり

西岡維則

じきさまなるべし、まめを食ひ水を飲みて、うる

を忘れたる人なるべし、

或人の日、貧しきを楽しみて、 いもせの中いと睦

津田つねぁつ

田のはら

山畑のあかざにましる豆の葉も君と吾としつみはや賤のめがさし有る秋をたのみてやさ苗さるらん千町

しば

木村とよもち

めるさまかくなん

或人の日、天照す御神の、 いなだねを天のさな田

に植ゑそめ給ひし事は、日本紀にみゑたるにや、

今にそのたねを傳へて民を養へるは、彼の御神の

御めぐみの、世々に絶せぬを喜びて、そのもご

を忘れぬ心より、かくよめるを、愚なる民は、只

己かしわざさのみ思ひて、御神のうゑそめ給ひし

事をもしらぬは、神の御惠の、只此事のみにしも

あらで、極めて大いなる故、さしてそれも

なづけ難くこそあらめ、

成人の日、けしねのむしろ打しめりかたつき姿をほし

ぞわづらふ

五月雨はけし*四四

俄にはいで來がたきによりて、かくいましめ云へ

る事なるべし、

ねのむしろさは、 かてをほしたる

むしろなり、片づき姿とは、の皮はあからさま

にはつきはがしがたき物なれば、先なかばばかり

つきて、後再び搗く事なれご、まづしき民は、片

づきをもくらふものなるべし、しづの女のまづし

きに苦六四三

せき入れし水もこゝりの色見にて種蒔にけりしづ

或人の日、あらしろさは、津田恒篤

田の苗代

行水をこなたかなたにせき分けてしめはへにけり小

らん

が

いくばくの田を植わんさかますらをが昨日も今日も 小田のますらを

る苗代

若なへもすぐめがくれになりにけりあらしろいそげ

讀入しらず

牧 正 正 聽

はしろ

すなり

降雨にせき入る水もますらをが心にかなふ小田のな

小山田のしめ引きはへて祈りつゝ君に貢のたねおろ 雨降れは苗代小田の蛙さへ水を心にまかせてや鳴く

此里は山方流

寛 るかな

らの里

ますらをが苗代小田にせく水もまかせやすきや川づ

讀人しらす

小田の苗代

けふぞうつなる

ますらをかまかする水のひきくもげにあらそはぬ

苗代

た小山田の杉の木かげにしめはへて持

づなと云へるとなん、

苗代

水口祭る里の神主

木葉のすなほ

あすよりは水つゝまんさますげ生ふるあら田の面は

なつものおろすは多し小田原豊なる世のしづが

荒小田のにひばり路も水越えて種まく頃に成りにけ

かけてせく水をたよりに急ぐ小田の苗代

小山田やあせゆく水を引分けてこなたかなたにまつ

種おろすあらくすきかへしたる

ままにて、いまだなだらかならぬを云ふなり、そ

の田に水をせき入れて後、馬くはもてかきなだら

して、苗をううべくするを、あらしろかくと云ふ

さなん、人も馬もいたく力をつくせる事なれば、

もあれ、なはしるにしくべき草をなづけて、皆し

島崎のさらしの布は有りさいへといもが手織ぞいや

して

中々に涼しくもあり夏衣いもが手織のおさ あらく

或人の日、しづなと云へるは、わらびのうらとけ

谷の藤野邊のわらびもうらとけてしづなさるべき時

老か身の身よくかたよくよめのこのたちぬふはきは來にけり

れごあかぬかも

しき

山姫の己かさやなつ引の手引にさらす滝の白糸

老らくの身に輕かれ婦のこのおりにし布の袂涼 立田姫手染の糸のいく千入山の錦をおりはへてみる

歌は、旋頭歌なるべし、

或人の日糸

山姫の車のもりに引きかけてよるてふ糸は滝の白糸

見て、

猿の勘

成人の日からのうたにも、葛ののびてなかつ谷

山口の瀧のほとりにて、女共の糸くりけるを

ぞかりにし

苧をこその古苧にうみそへて此夏衣おりきてん

かも

山鹿せんと我

夏山の麓の眞葛誰がかりこし我せこがに清げなる

岩野の質か妻

葛かりに行きて後よめる

にうつれるを、こゝにかりこに煮てすゞしさな

し、あらぬのこなすと云へるは、古の聖の御きさ

きの たらちねの家におはしけんほご、女のしわ

ざをつとめ給ひしさまを、みづからよませ給ふさ

かや、 きさきさならせ給ふ御身にだに、斯る事を

し給ふは、女のもとを忘れ給はぬ御心ならんかし、

さればいやしきもの妻子などは、まいてしばら

くもおこたらざらまほしきことになん、けだし此

我せこが山別衣おらんさてよりにぞよりし瀧のし

ら、猿崖の南にある瀧を、山口の瀧と云へ

るにや、車のもりは、山口の里にあり、山別衣お

らんこよみしは、糸くりの女がかへし歌なるべし、

持

たるいひならはせり、そをとりて苗代にしきて、

こやしにすることなれば、わらびにもあれ、藤に

民草 婦 利

とは

木葉のすなほか母

思ひきやしつはたぬのを七夕の雲の錦に立ちそへん

手引の糸のあらしき絹をお出でたるを、思

ひがけずも國の守御覽せさせ給ひて、いとをかし

きものにやおほしたりけむ、御衣に調せさせ給ひ

けるよし、仰せ下されけるに、守の御身にふれさせ

給はん事はおほけなくさらにもいはじ、女房たち

のにしきにあける御めうつしには、さぞなむさし

とも見給ふべきを、御手づからたちぬはせ給はん

こと、思ひやればはづかしくて、

或人の日、此歌はこがひ糸くりといひし女の歌な

るべし、姿もよしとは、わか男のよくつとめたる

を云ひ、こがひもわたりさは、みづからのさいは

ひを喜びて、ちゝはゝにつげまゐらせしになん、

此をここあれば、此妻もありけるにこそ、

たらちねはやすくいまさね姿もよしこがひも得たり

安く座さね

と云へるは、たはふれの言葉なり、たはふれたる

にて、たのしめる世のさまをしるべし、

六四一

民の戸の煙にも見よなつ引のいともかしこき君の

恵は

成人の日、かの絹を奉りければ、君御喜の除り、

すなほが母に、敵かつげ給ひて、有りがたき仰ご

さなご聞させ給ひきさなんかくてそのよしを

めぐらしして、野の末山の奥の民までも、知ら

せ給ひしかば、聞くものみな喜びて、絹をおる事、

始めてひろまりにけりとなむ、

御きぬの袖ををかみ奉りて 木葉のしげる

大君の御袖を掩ふなれば立ちよるかげのたのもし

き哉

伊形の質か日、是我民たりし時、たらちめのよめ

しなり、かのきぬいさみじかくて、 君は御たけ

高くおはしければ、御そにはかた袖たらざりけり

さて、又おりつぎて奉るべきよし、仰ごと有りけ

るに、我にかはりてよめよさて、よませけるにかく

なん

伊形の質

國民をはぐむ君がみそなればはたばり廣くおらま

し物を

スナホ

成人の日、なべて刈取る頃にはあらで、朝け夕け

のまふけに、かつぐかるをば、けしねがりと云

へるとなん、けしねさはけしいねなり、けは朝け

夕けのけに同じ、いねの事なり、しはやすめの言

けしねにもからば刈らなん山ばたのひなたの姿はび

は色にして

或人の日、春のかてにとぼしくて、姿のほにいづ

る間を待かねつゝをのこは葛の根をほり、女は

菜をつみてくらせる程、いさあはれなり、くづね

と云ふべきを、かつねと云へるは、よこなまれるに

やあらん、里の習にやあらん、いづれもおなしか

なの通なるべし、

時鳥間をつくればや鋤鍬をかけたる門も鳴渡るらん

山ばたの大麥色づく今よりやの心の葛根はほらずも

あらなん

より、鳴きそむるものなれば、その比ほひ、水も

やゝぬるみて、蛙のこの生るころなれば、それ

をくひて、人をやぶらん事をいましめたるものな

らんかし、都にはかゝる戒もなきにや、夏にいた

て芹をくらふ人も有るなり、

成人の日、我つまのおのがしわざを、よくつとめ

たるをあばれみて、よめるなるべし、はなのかつら

わざもこが花のかつらもあれにけりこがひ糸くりい

まなの身や

或人の日、是姿の穂がけの歌なり、穂がけと云へ

るは、まづかりたる初穂をば、神のみづがきにか

けて手向とし、さて飯にきて親のみたまにすゝ

め、その餘をおの?~くらふ事なり、 からばし

は、青竹をわりてからめたるが、鳥などの口ばし

の如くなるをもて、変稲なごをすできるものな

り、此事からきしわざにあれご、事終りて後は、

中々に喜びとなれりとなり、さばかりからきめを

みずば、いかでか此のあらんやさ、思ひかへし

たるなるべし、

からばしのからきしわざにこぐ姿もけむつかしさは

何思ひけん

葉にして、ねはいねなり、さればいひにたくべき

いぬを云ふなり、いねにもさつきたる言葉にして、

姿にもにもかよひ云ふ事となれるになん、是貧

しき民のさまなり、

六四〇

民草婦利

或人の日、つゝ穂と云へるはいねなどからは

にてこぎ、あわをからさほにてうちちらしたる

がつちにおちて取りあげがたきをそのまゝふみ

かよひて、けがれたるゆゑに、あしもとのつゃほど

はいへるなう、こと終りてのち.土産共にかきよ

せて、たはらに入置きたるを、春になりてくひ物

のこぼしき頃、取いで水にゆりて、土塵をさり

て、もちひにもつき、いひにもたくなり、物習ふ子

になくはせそさいへるは、里のことわざなり、其

の故は、足下にふみけがれたるものなれば、そを

くひたる兒は、おのづから心おさるさまになりて

物をもおほへすとなり、これをさなき兒ともの

おいさきをことほぎて、たふとみ云へるなん、い

有がたき親の心なり、伊形のすなほがいさけな

くて、ちゝの家にありし時、田がへすをのこごも

にさらすさて一つゝほのもちひをつきたりしを、

女のわらはがつきにもりて、すなほが前にさゝげ

ければ、母のおどろき、それなまゐらせそ、つゝ

ほなりて、ことさらにつきもうけたるに、さり

かへてすゝめられしを、すなほがあやしみて、な

或人の日、里の諺に、時鳥の初音を聞きし日、

芹をばつまぬものなりさいへる事あれば、少女子

を戒めたる歌なり、思ふに時鳥は、春の末夏の始

六三九

女子よ芹をなつみそ今朝のあさけ山時鳥なきぬち

ふなり

筐にはみちもみたすもかへらばやこうゑぬさや

待つらん

さめら

いくばくのはこかへばか野を遠み眞桑求むる里の

たらちねのかふこや飢ゑぬ枝ながら眞桑取りもてい

そぐ少女子

少女子は櫛笥の小櫛さしもあへす親にこふこのまぐ

は取るなり

ご彼らと、ここにはし給ひにけむさいひたりけ

れば、をのこは君にもつかふべし、おいさきめで

たきものなれば、かくするそこ答へられしに、あ

なもたいなしや、わらはも民なりさいふに、耕も

また君につかふるにあらざらめやと聞きしも、い

はけなき心にとまりて、わすれがたくなんかたり

きさかや、

へるは、春まだ

ものならふこになくはせそあしもとのつゝほのいひ

を親はくふとも

わざもこがつゝほ蓬つむらん

てよめるなり、

とする頃、己が身をやせしめて

飛行かんて、たなつ物ははきけん

らん

はなの朝箱

成人の日立空いつしかに野邊のおたねもく立ちぬ今はなふりそ見渡せば野べは菜種の花盛さぞな小蝶のうれしかる

やくゝ立ちて、花もとく咲出づるほご、又さえか

へりて、一度の雪箱に逢ひぬれば、 はなもくきもみなうふれて、つひにみのりもやらず、くたちゆくものなれば、そをおそる>ゆゑ、いちはやくく立ちぬるをば、中々にいさへる事なり、雁鵠のわさはひは、のぞかばなさかのぞかざらん、雪箱のわざはひにいたりては、いかはせましや、とにもかくにも、民の心づかひこそ痛ましけれ、

なき

きにあたゝかなれば、只一夜ふた夜の程にも、は

や

*カリク

或人の日、うち男の歌は、田がへしをすゝむる言

葉なり、春の始に木のはもちて、民の家ごとにいたりて、この歌をうたひて、田をうつまねをする事あり、 いにしへ八代の郡にて、いづも

の大社にみさしろを奉りし時、彼の人来たりて

みさしろにたねをまきそめしより、民の事をはじ

めきとかや、その言葉の郷にのこれるなるべし、

の田の菜の葉むれはむ雁鵠おへごもさらず立空やなきといへるは、かり追のうれ

ひたる歌なり、今はなふりそ云へるは、〈立

のいちはやきに、春のさんかへらん事をおそれた

ろ歌なり、そぁ(かり追さいへるは、春のかり

のかへらんまで、 栄の葉のみ

はむ事あれば、其のかりをおごろかさんさて、な

ま竹をさらにして、あわたしく打ならすをい

ふなり、く立のいちはやきと云昔誰野にも山にもみちのぐのこがねの花のたねをま

或人の日、今はかりくヾゐのうれひもなく、雪霜

のわざはひにもあはで、花のさかりなるを、喜び

のもちひつかんやとけふは野のへ

に民 草 婦 利

六三七

おらんかも

八雲たついづもの、おほみたの田長い来たり、

のうた

うち男身老い

にけるかな

成人の日、きさらぎのはじめつかたより、 あら田

をすべて返して、たねおろすべき時をまつほど、

うららなる日にからし、しめやかなる雨にうるほ

しつゝ、草根もややくちて、土さへいたく肥らぬ

るを、天の時にしたがひ、地のよろしきによりて、

人の力をつくすとこそ云ふへかめるを、まづしき

民の獨なご住めるは、力たらすして、草にあれぬ

るまで、鋤のこすも多かりけり、時におくれて、

小草花咲くまであらしたるさま、目に見る心地し

ていさあはれ深し、

、

今は又世につかはれぬからすきのからくて我思はぬものを

又口、あげまきの童が、牛を引きながらぬ

は、仰いでは天にはおず、ふしては土にもはづる

事なきになるかな、

たらちねの爲めに田がへすからすきのうしさは更に

小山田

木村 豊

のか仕業を

成人の日からきにたくて、つとめにおこたらからすきのからくて過きし年月もうしとはいはずお 田はつくるてふ

よめるさな

ん、君が爲めをおもはで、たらちねのといへるは、

いまだいけなくて、ほみつから、田畑をうけ

つくれるに、力足らざれば、みつき物には心なく

て、只父をたすけむとの思なるべし又日、八十年餘の翁が、 おのが子うまごなどの耕

すを見て、田のくろにふしながら、 よめるをなん

老の身の、耕にたへぬなげきたるなるべし、

吾がせこはかの山畑に麻蒔きついつしかいもが布に

賤の男がまだすきのこすかたへには小草花咲く春の

みしろのおほみたうゑん、おほみたの西のせまち

も、大ちまち東のせまちも、大千町中のせまちの、

みとしろにみしめ引きはへたなつけふまきそめ

吾がせこよ特ひの牛はしぬさいへごいたくなわびそて、君が代を減ひぞまつる萬代までに、

たり

さつてゝはいつちへゆくぞ足の山鹿の市に馬かひ

サッテの

にゅ

或人の日、これ民のなべており立つころなれば、

二月の初なるべし、からのうたにも、四の日あさ

をあくさつくりたりしは、此國のきらきにあた

質

れるさかや、これは伊形のすなほが、 山本の郡岩

野が原に耕したりし時の歌なり、

田がへすをのこどもに、かれいひおくりけるに、

くろまめをそへてやるさて、 岩野の民すなほ

あれしその去年の田のくろまめにうて茅か下根のし

たくつる迄

朝日さす池の心もうちとけて氷を出づるなみの浮草

吹くも稍長閑けき春の河風に汀の氷さけにけらしも

或人の日、からのふみにもこち風凍をとくと云へ

るは、きさらぎの始なるべし、 これや田をすくべ

きはじめなるべし、

よ も ち

などおこりいでけがたきに、家を引たふすべ

きためなりと云へり、春のいまあるにまかせて、

このそなへをなせるなるべし、

肥後文獻叢書第三巻

「注解下に見

よめる。

都の人の歌枕見んこてつくしへ下りけるが、岩

のがはらを過ぐるとて、耕すをのこどものいさま

なきを見て、 うしおもふも力なの世やさいへる

ふることを、打ちすんじける、のこ共聞居て

或人の日、伊形の質が、猿崖山に生ける比、夜更

けてくは音のしけるをあやしみて、人に問ひけれ

ば、となりのをここの、田をうつなりさいふを、

きってよめるになん、

ルカケ

おくれじと苗代いそぐ賤の男や夜さへいねずあら田

うつらし

木葉の民しげる

春の田をかへすぐも思ふ哉君にみつぎの秋の頼を

成人の日、上にうつくしみふかき君しおはしませ

ば、下にかくすなほなる民もありけり、

あはれにも今朝うまれたる馬の子の御竈の前を三度

めぐりて

或人の日、此歌はかへし歌なるべし、

馬買にゆかは若草かり置きて我はまたむへはやく來

まさね

六三六

民 草 婦 利

成人の日から人の河をぬく戯とは、このをすゝれる事は、七種のあつ物をなめ初の心に同

しかるべし、但民の家にては、竹の管を数々きり

て、たなつ物の名、おのおの書つけて、かゆのか

ふるなり、火

しらるゝ

或人の日、年の始十日餘り五日の朝けに、白かゆ

しらかゆのためしの管の數~にみのりみのらぬ秋ぞ

國のむつきの日に當れりこなむ、

成人の日、これはすきおろしの歌なり、年の始十

初ま 新玉の年の緒なかくよるつなはゆたかなる世のため

では、又すくことなしとかや、からの歌にも三一しにそ引く

入れてにる事あり、これをばためしさは云

ふなり、さてその管の中に、かゆのみてるみたさ

るを見て、年のみのりみのらぬをしるなり、みて

るみのりさし、みたさるをみのらぬとして、そ

のみてるにしたがひて、たねをまく習なり、みの

みのらぬは、人のちからにはよらで、天地のし

わざなれば、わたくしにはからずして、たなつ物

の神に問ひまゐらする心なり、私に計らぬが

のつゝしみなるべし、

つなひきのうた

まに打かへ明日よりはこぞのあら田

におろしてむ

そのうしにまぐさよく日除りひと目さいふにあたりて、田をかへすわざ

を始むる事あり、此をすきおろしさ云へる事は、

去年より壁にかけ置し鋤をさりおろし、田をすき

そむる故なり、これをすくこさわづかに一うね、

あるひは二うねにしてやみね、あるじかはらけを

まうけ、妻はもちひなごとゝのへて、田長のか

へるをまちて、ことほぎをなす、これをすきおろ

しの凧と云へるなり、かくてのちきさらぎのの日こゝにすくさぞ作りたりける、三の日は、此

つな引

の遊ににたり、北國にては、むつきのもちの夜、

又は葉月にもひくことなり、民の家々よりなはを

出だし、大つなにより合せて、ともがらを西東に

わかちてこれを引くに、ひきかちたらんかたは、

たなつものよくみのりて、年だかなるよし云へ

り、此つな引をはりてのち、その里の長なる者の

家に納め置きて、 事あらん時にもちて、下は民草のはつかなる者に至るまで、皆之を

或人の日、まづ摘はやすさよみたるは、君を先さ

己を後にするの心を、あからさまにもわすれぬ

ゆゑ賤の女が、野の若菜をつみはやすを、是や

おものと思ひなしたるにこそあらめ、歌の心ば

への、まことよりいでたるを思ふに、此人國の政

をたすけしより、下の心を動かして、上に向はし

めしはじめにも有けんかし、よはひをのべにと云

へるは、若菜によせて親をことほぎたるなり、そ

もそも若菜をつみてことほぎをのぶることは、上

ざま人のみ、歌には多く聞わたれご、下ざまなる

ものは、ひものゝぼしきによりて、若菜をも

つみあつむるなるを、ゆたかなるさまにもてなし

て、ことほぎたるこそ、親につかふる人の心には

あめれ、野のひるやよもぎあざみなごいへるは、

まづしきさまを有のまゝによみ出でたる歌なり、

七種の若菜の事は、むつきの上の子の日に、こ

れをあつ物にしてなめそむれば、萬のやまうをの

ぞくさて、上はすべらきのたふさきをはじめ奉

てぞ摘む

なめ初る習とはなりにけり、しかはあれど、年に

一度七種をなめんに、萬のをのぞくべきこざわりはあらざめるを、上ざまなる人には、いかにおぼしてかなめ給ふらむ、この事をつくづく思ふに

御膳

御身常にあらかにおはしまして、あさゆふのおものなど、いみじううるはしきのかぎりをつくし、酒肴にもあき給ふものゆゑ、御身はいたう肥えふさらせ給うて、御はらわたもたれくちなんさし給ふほぎなれば、さまざまの御なやみも、これよりぞいでくめる、されば初子の日のみにもよらず、折にふれ時にしたがひつゝ、菜の葉くさびらなごいへる、味のあわあわしきめでさせ給ひて、御身もすこしやせ給はんほごならましかば、御やまひもおのづからのぞかせ給ふべく、かつはおごりをまし給はじの御戒さもなるべきにや、けだし下様なる者は、やまうのためにしもあらねど、年のなりはひのたらざらむ事を、種々のなの葉など

取まじつつゝ、 うゑをまぬかれぬべきよすがさぞ

すなる、これ一年のはかり事を、春のはじめにいま

しめたるものならんかし、

六三四

民草婦利

*三三

さ人にはいひても野のひるや蓬あざみもつくし

正

蒜

讀人知らす

ふらし

べども、皆小弓矢をたばさみ相っ

ごひて、西東にこもがらをわかち、よくいるもの

をにらみて、射手の頭さして、つぎつぎに従へり、

さてはまといふものをなげかはして、 我前を過る

ほど、そを射さめたるをほまれさするにや、はま

のとき事、飛鳥もおくれぬべくみゆるに、我おく

れじと放てる矢は、雨の如くにて飛びみだれたり、

かくてあたりあたらぬを正して、勝まけをあらそ

へるもいいごまし これ里のわらはの歳にはあ

れご弓矢の道を忘れぬは、おのこの志なるべし、

かつ

是ぞこの君におもの初めや先つみはやす若葉な

るらん

牧

或人の日、手まり歌を聞き、小弓の遊を見て、

れて

る、里のわらはの煙まで霞につく山本の里

初春の花鳥ごろも嬉しくも遊ふ處女の袖を連ねて

成人の日、はな鳥ごろもは、はなどりをゑかける

衣なり、袖をつらねてつとひ遊へる、 ゆたかなる

世のさまなるべし、

春といへば嬉しき物をまり小弓わらは遊に老も忘

類なるべし、

打なひく賤が朝け己をつゝしめる身の老いたるをもしらず、遊び戯れたるさま、い

わけなきわらべに同じ、是をや古の民とも云へり

める。 そもそも手まりをもて遊べる事は、ひなも

都も同じかるべけれど、歌の言葉」のひなびたる

こそ、さて中々にいとをかしく、ふるめかしけ

れ、小弓の事は、都にもたって久しく聞え待らぬ

を、此國にはなほのこりて、春の始のわらは遊に

ぞしける、この事を思ふに、古の小弓のながれに

はあれど、その遊のさまは、おのづから此國の習

ひさして、都の遊にはことなるそなへになむ有け 七種長閑なる日影に出てゝあまもいそなつみつ

たらちねの飴をのべにつむものは老いせぬ年の若菜

なりけり

讀人しらす

なりけん、さればにや、今此國のいたう富

榮て、君の御心は、やすくたひらけく、民のつ

めも怠ることなくて、おのかしわざをたのしめ

るは、かゝるうたの心ばへの、すゑ通りぬるしる

しにこそあれ、

はつ綱のうた

成人の日、國の貧きを憂ひて、年のゆたかならん

事をいのり、末にはしれる民ををして、もとに

かへれる道をいさなへるは、この人の常に志思へ

春立ける雪のいたう降りたりければよめる

堀

名

秋にみむ民の貢もふる雪のためしゆたけき春のは

つ空

君をあふがざらめや浪風もさまるみ世の春を迎づな

へて

ひければ、しかじかのよしを、人の答奉りけるに、

いたうあはれがらせ給ひて、からき政をあらため

おもきみつぎものをはぶき給ひて、人屋をごきの

けさせ給ひしかば、國民喜びにたへずして、かくよみきさなん、

成人の日、年の二日、家の主を始さして、田長小童にいたるまで、八整の鳥を聞より起出でて、わらをうちつなをねる、 あるじの妻もごくおきて、餅ひなごやきて、つなねりのをはるを待ちて、 これをすゝむるを、はつ綱の凧とは云ふなり、さてその縄を、さまざまの花の形に結ひたれて、あるは壁にかけて、牛馬の鞍にも飾るなり、ひきずなは、牛馬の小鞍よりかけて、からすきをひくつなをいふ、になはとは、馬に物をおほせむ時、からめつくべき縄なり、口もさはひきづななり、はなやりは田をすく時、牛馬をつかる手縄なり、 のちのうたに云へるひきづなは、はじめて貢物を奉る時、引縄をも改めてつくべき事なれば、まつねり置きて、常には用ゐぬ縄なり、是君をうやまひ

此綱は我にはあらず君がためはこぶ貢のこまのひき

春田す(牛の引緒にねりそへよに細口もとはなやり

の綱

新玉の年の初綱よりかけてにぐら小鞍の上にはな

さで

六三二

ふりひし床の氷もとけにけり君かひかん

得て

かりの春を待

イニすひし

一夜あけて民の窓の末々もにきはふけふり春にかす

めり

牧 正

こぞの冬、水田のひとやをやめられしを、人々喜

びあへりける、年の始によめる

成人の日、歳の旦に山に入りて、木をきる事有る

をことほきて、若木さりと名付けたるになん、共

木をは祝ひをさめて、つねにしもたかず、う月さ

月の比、はつたうゑのかま木にだきそむるを、其

のことほきするにや、是れ民の事は、ゆるく

すべきにあらざめるをしめして、年の始より、お

のがつとめにおこたらす、遠くはかりて田うゑを

いましむるをもて、さしたるなるべし、

に春の若木をとりそへて千代のはつたの竈木に

そたく

若木こりの歌とて諦める

讀人知らず

民草婦利

年毎或人の日、冬の沼田に、あらがきゆひまはして、

上はかしらをさすばかりに炎を掩ひ、下は脛を過

るまで水をせき入れて、秋の貢のとゝこほりぬる

民をば、その中につなきこめて、せめはたれ 事

ありしを、水田の人屋とはいひしとかや、さらぬ

だに夜塞の風の堪へがたきに、はらひもあへすお

霜を、夜の衣のうすきにかごち、はだへに迫り

てむすふ氷に、沼のうきねの浮世を恨みて、魂も

けぬるばかりに思ひわびぬれごみのらぬ年に逢

ひぬれば、いかはせましや、家にのこれるはら

からなご、 思ひやりつゝかなしみにたへして、

はかりかうはからひて、家をひさき身を貰りて、

やうやうさつくなへるもあれご うるべき家もな

く、まいてこどもはらからももたぬ身には、罪あ

がなふべきたつきもしらず、手づから首しめ

命たえぬるもありけむかし、今の君、御政をきこ

しける始の年にや有けむ、鷹がりをかごにし給

ひ、こゝかしこゆきめぐりつゝ、民の苦しみ思ふ

らん事を、見そなはしきこしめし給ふに、かの人

屋を見かめさせ給ひていあやしみ間はせ給

六三

二十九日には祭禮百味を備へ流鏑馬有り昔領知に 菊池風土記終

好古代に

は賊臣純友追討之功を以て従三位大納言鎮守府將

に叙管し伊豫國を賜り宇和部の城主たり橘朝臣

公光代には八王七十四代鳥羽院御宇保安三年勳功

を以て公の一字を賜り是よりして代々實名に公字

を用来るなら其後謙倉頼朝公の代出秋田郡之

内所々添たまはる橘朝臣公業代に頼經將軍より替

地として肥前杵島郡長島庄大隅閩種が島豊前國副

田庄肥後國球摩郡久米鄉を賜り此時より九州に來

肥前國長島に居城公業鎌倉に化へて軍功有り橘

朝臣公治代には室町家につかへて軍功をし度々

感狀を賜り橘朝臣公村初て氏を澁江を改む其弟三

人別て牛島中村中橋を名乗る勅許行事は澁江家斗

に傳へて末家には附属せず此行事傳來相承をひて

橘姓嫡流之證據とする所なり杵島郡三法方鄉潮見

山大明神上宮は正一位橘朝臣諸兄卯也中宮は泉大

明神島田丸也下宮は澁江牛島中村三也是余が先

和也神靈にして社司社僧守之今以退轉なく九月

河海之事に付ては俗の

今に本家に持

天地元を神に御附属の勅許有り 御綸旨を賜る

他其後水部乃主として代々勅許行事相承仕子孫の

外に傅る事なし 「知れる所今此に省 橘朝臣下宮は祇司守之縮時計
社地潮見山は佐嘉御領分

也麓の村を溝の上と云蓮の池御領分也橋朝臣古城貞吉覆校

宇野東風校

能登方より頂戴して歸國する事也公重子澁江九兵

衛子澁江與治右衛門與治右衛門子澁江藤右衛門藤

右衛門子澁江壽右衛門壽右衛門子澁江平之允之

允子澁江貞之允貞之允子澁江宇内澁江壽左衛門弟

澁江儀平治別宅仕儀平次子澁江儀三右衛門其子澁

江時之允

大村石膳 當時大目附役 澁江惠門同橘右衛門澁江善

助同主水同國佐嘉領水神社司澁江隼人長崎水神社

司澁江能登今に親施のしたしみをうしなはす古紅

毛人長崎同姓方之御守璽を受て船中不思儀の難を

ぬかれしより今に年々紅毛人渡海安全の御璽を

公重

代に御當國に来る當時肥前の同姓は大村候御家中

君之御名字拜領

海法印さ

て有し時のこと(民今祭て祭禮の供物今以應院

より贈り来る上宮は感應院守之 常時院主を亮

中尾豐前

同清九郎

一師々戸伯耆———盛田庄兵衛

-藤田六郎兵衛

一同清藏

同

河野文左衛門 益田彌三右衛門

同

同

高木嘉次良

山内五兵衛

五代

-白石忠右衛門

甚三郎弟子

同

高木治兵衛

一高木治兵衛一高木甚三郎福島彌市兵衛 弟子

四代

三代

治兵衛清入

高木甚三郎

二代

讓音

———竹友

-高木治兵衛

一階春日

深川先祖

丹齋

下川丹波守

藤田清休

一-「中村七良右衛門-

奈良

彦五郎

千野笛之系圖

大和京都住

名賀村與市右衛門 同彦兵衛

-

高木甚三郎||

一加藤一人六二九

皇三十一代 敏達天皇五代之後胤葛城王王屬を

憚り願に因て天平年中人皇四十五代聖武天皇より

橘姓を賜り橘朝臣諸兄公稱正一位井手左大臣是

也夫より二代の後裔従四位下島田丸兵部大夫此代

に和州三笠山春日大明神御鎮座に付營造之奉行職

冥感微妙の事有之人皇四十六代稱徳天皇より

天地元水神行事

澁江氏

我家の事みづから書載せるはいかとおもひぬれ

ごも郡中の事委しく書記するからは謙譲してもらし

置くもおほやけならされぱいなみがたし此巻の末に

書記するものなり

眞源院様之御時御扶持御取上開地拜領惣兵衛子傳

七此代に又々高五石三人扶持拜領傳七千又助又助

子傳七傳七子次郎右衛門次郎右衛門子傳吾

一妙解院様御國御入部之翌年藤右衛門子 惣兵衛被

召出,地方高五石三人扶持拜領

刑部さ云人伊勢國にて伊勢六郎左衛門弟子に

成り鞍の事委傅を受け刑部子藤右衛門清正公に

代へ中小姓を相勤む此時清正公の氏を憚り氏を佐

藤と改む

御鞍師

佐藤氏

妙解院様御拜領被遊御入國の折節小倉にして高

木與五郎事御耳に被爲出さるべき旨被仰

渡御入之上浪人分にて十人扶持拝領させられ

候て與五郎を改名治兵衛と可名乗旨被仰付其

後島原御陣の時御供被仰付」彼地にて軍陣方の笛

勤めし所に御凱陣の上 御城に被召大功の儀を

傳受いたし居候て御重に思召上させられ候ヶ

の節は何時も召連らるべく候間共旨相心得武具等

覺語仕居可申尤笛一通子孫に傳置可申被仰

付,候米五拾俵毛氈貳枚拜させられ候事

一貞源院様御代にも御懇に被仰渡」

の笛傳受して加藤肥後守忠廣公に

仕ふる内亂舞かたの笛も稽古可有よし被仰付

漢竹の笛御手つから拝領有り其後忠廣公の御家老

下川左衛門召つれ上京有て下川丹齋弟子に付け能

方一巻の笛不殘傳愛して三巻の秘書迄請取しさ

也京都滞留の内忠廣公御改易にて罷下し折から豊

前小倉に到着の所に御當國を

此代

池家に仕へ程なく菊池家斷絕に及ければ浪々の身

成り當郡深川村に居住す其子孫高木與五郎 純

橋城石軍陣方石之内拾五石并田地開共に嫡子治兵衛三代目に被

ﾚ爲拜領 ｨ 將又子甚三郎笛の稽古無油断いた

し候様に被付誠に笛に於ては比類もなき家

柄にして今に至まで業を守りて失はす

妙解院様御自筆に而名之文字を被遊候を坂崎清

左衛門木村古準を以て御渡被下泰三 頂戴 二代

甚三郎に譲音家督田開共に拜領させられ江戸御國

之御用數十年勤む然處年寄候に付御断申上候に付

隠居被仰付甚三郎被下置候御合力米貳拾

御目見被„仰付 六人扶持拜領寛文三年治兵衛甚三

郎父子共に江戸御供被仰付彼地にて御用度々

被仰付御褒美として金子拾兩宛每年拜領甚三郎

儀前髪を取可申被仰付於江戸」 元服其刻御

能被仰付候て御紋付の呉服壹重并長上下壹具拜

領其後治兵衛年寄候に付隱居被仰付名を讓音さ

相改可申旨被仰出之

一妙應院樣御代寬文元年六月三日爲御合力米」貳拾

石宛拜領同六日御能 被„„仰付,首尾能相勤 爲 御

褒美 御帷子壹井麻上下壹具拜領翌寬文貳年の秋

田開地拜領子息甚五郎十六歲の時

小國住下城播磨守惟秀爲現世安穩後生善處

于時永德二天建

逆修善根花翕正香

現幸□德後主

神前山正高寺墓

一高木上總助と云人江州高城さ云所に居住有しが軍

陣方に執行はる笛を覺居けるに因て永正の比菊

軍陣之笛

爲邦公の時 一圓の中貴寺名刹多しさいへごも十刹の

列位に加はれるは此寺也他に類なき寺柄委敷事は

寺院之條に見たり或説に八代に一ヶ寺有て今に

廃寺となるこ猶尋ぬべし

一正観寺の歴前に記すごさく數年佛法繁昌の淨境

にしてあまつさへ五山之上十刹の列位にのぼり

菊池二十代

正觀寺

十刹之列

す

一夫藩に於て阿蘇大宮司の孫たる一瞬に類なき

のみにあらず天下の貴名家たり八代の靈符天下に

まれるあるは串にふれて求ればば吉田氏の相撲

掌故主宰たる是を一回に尋ねるに本より類なき事

ば誠に珍重の美にして尊藩の盛大を鳴すべけ

今尊藩に於て菊池郡にのみ有る者を舉て左に記

一國一己

菊池風土記巻之八

左三 合志伊州太守經譽一哲居士

八寸餘中央に彌陀三尊の像を彫る

一岩本村に在り自然石高三尺六寸斗横四尺三寸程厚

合志伊州太守の墓

是を見る時は三人の逆修也然るに人々此塔を山岳

院の塔として今は所の名と成る然共塔に山岳院

の名はなし逆修有るからは其以前寺院にても有し

や尋ぬべし

十二月二十日

菊池總政所大正院

逆修之塔 權大僧法印桂岩

菊命山太德禪寺

寛文十庚戌天

一米原村の内に在り大松の本に石碑有り高さ五尺餘表 迫間形部少輔經吉

横二尺餘銘左に記す

山岳院

一羽根木村源吉さ申者の屋敷内に在塚印南天數本

あり屋敷跡は西郷村の内に在り菊池軍記には毛利

壹岐守下知して益城郡六嘉村に而首を切るとあれ

共宗立菊池に逃來り此に隠居せしと云此募今に人

々太切にする事也猶尋ぬへし

肥後文獻叢書第三巻

正月三日施主敬白

窓香勝禪定門

寔永祿五年

八月日孝子敬自

實山祥眞禪定門

九月日孝子敬白

弘治二年丙辰

此慕宇野家光にては無之哉

今村妙音寺之墓

于時天文十年辛巳

隣友周德禪定門

一木庭村峯泉寺境内に在り銘無し何代目といふ事不

分明此寺城家の建立と承る時は城氏の元祖六郎隆

鰹の墓にはあらずや

城越前守墓

銘有闕而不知

山清圓禪啶

十月七日死去

辛丑

花屋長榮藤原

春山内

一東迫間村高徳寺跡に在り

天正七年己卯二月日造立合志紀伊守と有り

迫間刑部少輔墓

裏裏

骨龜四年癸酉五月一日往生釋妙應

右

六二六

一山崎村に在り或人聞き見るに骸骨瓶槍假面等有り

いろふ人は腹痛すおもふに山崎監隆基村所にて

菊池風土記巻七

石棺

一玉祥寺原龍崩の傍に在り文龜元年五月の戰に死骸

を二ヶ箇所に埋めたりと云一ヶ所は寛政年の崩

て谷に落亡ふ

首塚

一深川村より午の方田の中に在り若し人塚の草を刈

る時は祟り有て腹痛す高木氏の人より其あやまり

を謝すれは痛癒るといふ高木氏先祖の墓

一四丁村の上貳間四方の竹籔畠中に在り盛俊の墓と

申傳今に所の者尊敬す是俗説のまゝをしるす

高木塚

主馬判官盛俊墓

右清房の後裔夫婦の逆修と見わへたり

時弘治四年八月吉日

逆修 晴雲妙慶壽位

晴月淨圓壽位

敷跡也今高宮村柿の下に逆修の石碑目の石有り

左にしるす

六二五

甲斐宗立之墓

一西郷村内に在り几考るに菊池家代々の墓は多く五

輪歟または五段切七段切の塔然るに當村の墓五

段切と見ゆれば御嫡々の墓此所に在る事おほつ

なければ此墓定而菊池九代隆泰の弟西郷太郎政隆

の墓にはあらず 指尋ぬべし

一西寺村と野間口村の交ひ道の側に在り

西郷村之墓

延壽太郎國村墓

らん

一木庭村平良石に在り足の骨節今の長け高き人より

貳寸程もながし大人の骸骨也おもふに城家の塚な

ヒララ イシ

石棺

在り其四方は幅廣の石にて立切中に小石

をつめたりおもふに神尾城の城主水次太郎の墓に

あらすはその子孫の塚ならん

一水

山崎靈社と齋ふ令その跡もしれず是隆基の墓にて

はあらずや同村には外にも石棺有りと承る何れも

山崎家の墓なるべし

同

右長福寺跡に在り今だけ名寺床と云熊本へ通る道

二月十九日

圓樂坊

て不分所多し

隅阿閦佛

[于時慶長十九

北原村の墓

一木野村彰教寺に在り隈部軍記を按するに親政の一

周忌寺参之節親永香花を手向扱々家申ならは御

菩提所迎御寺も振々敷慕も五輪卒兜婆を立つへき

にうらめしの御事やさて墓印に小松一本植置暇乞

して踊られ云々木野氏親政迄にて絶領地阿

左古村之内八拾町上地になる

木野親政墓

弘治四天戊午八月吉日

逆修 桂林妙芳

弘治四天戊午八月吉日

藤原武東

逆修 日林楝永

城越前守

一夫婦の逆修と見えたり

木庭村の逆修

安寺跡に在り外に五輪の塔有り銘に通山和尚と有

肥後文獻叢書第一

爲征西將軍に供奉に而下向下河原村の内高宮則共屋

一下河原村之内高宮村に在り高宮山城守藤原清房は

高宮山城守の墓

闕

裏に庫

不分明の所有り

一浩泔一穴三十人

高さ貳尺一寸大松のもさに在り文字

正平一年己亥二月廿日

一雪野東迫間兩村の間に在り古老の説に菊池家の女

さら姫さいふ人の立られしさ云獪尋ぬへし銘左に

しるす

虎が塔

右妙蓮寺未此所え移らさる以前よりの墓也何人と

いふ事をしらず

辛巳九月

大

分明

凧芳所々不應永八

右守山城跡に在り靈感院様御發句御記し玉ふは此石碑也

妙蓮寺の

逆修地藏一千體處 石の面に数多の姓名を刻むこに略す

享碌五壬辰八月時正願主

城山石碑

側なら自然石にしるせり

一立石村に在り今御郡代御宅用圍の内に在り赤星十

代安房守武規の弟也銘に

赤星治貞墓

一隈府迎町の裏觀音堂有り其境内に在り菊池家の姫

おしほ殿の塚といふ何代目の事といふ事不詳

しほ塚

武統を西福寺に葬ると有り西福寺に在る石碑を見

るに永藤五年に死去裏に口隆有て隆の字上て

不明おもふに赤星筑前守重隆にはあらすや重隆

其比に當る人也武統を西寺に葬るとは系圖誤て

口隆さ取ちかへたるならん歟武統は赤星備中守也

是~宗梅庵主也宗梅主兩人有りてしかも當所を赤

星備中守慕こ申ことは口碑有り然るに玉祥寺宗梅

庵主位牌を立しに

宗梅庵主玉祥寺之會下故 永禄五年ご

備中守ために位牌を立る

記るせしは是西福寺に葬る所の筑前守重隆也備中

守にあらす備中守の為に立る位牌ならは永禄五年

は削るへん余御拜塔を見るに地伏石に数多の名を

切付たるを考るに逆修にてはあらずや然れは備中

守墓とも定めかたし猶尋ぬへし

一隈府町右田氏の家敷内に在り赤星系岡を按するに

足利殿合戰

大渡橋上討死,

岩木村の

機六二三

二月十五

此墓誰といふ事不分右

【五儀

祥安

天正九

字

花陰妙茶 生歳十八歳 隈部伯守源鑑義の女の墓也

天文七年戊戌十月十五日

生味村の墓

右天徳寺跡に在り

天正二年四月十日 孝子敬白

三智匪志

大賓一尖居士

道道

合志丹波守藤原重遠

道道所々石開けて不分明

沙彌空寂

建武三丙子

東福寺の

塔寺後竹林の内に在り年月不分竹林の内前代

大道記

廃墳多し

文明十四年間,

居士

あらずや此人

あへり

全

代に房

年星

赤

れの飛騨守

ば

當房に

在

正+

先彈州大守

按するに天文廿四年は六月以後弘治に改元と見わたり年代記には二十四年はなくて弘治元年と有り

正覵寺墓

天文二十四年六月二十一日

藤原治貞

新開圖書助

兵部侍郎源忠直之母、義雲慈孝禪定尼者、將監藤氏朝行之女也、應永十七庚寅誕質也、資容端麗、四徳兼備、十四歳嫁、而配紀州刺史源氏朝豐之室内克盡於婦禮、外允親於九族、十七歳生忠直、其明年嬰微疾、逐掩粧矣、春秋十有八、葬以長殤之禮、實應永三十四年丁未正月二日酉刻也、燕長録口歳己卯正月、當三十三口忌辰、於是孝子忠直逐□□□之日、伸追遠之誠、躬收拾拳石 漸寫進經六萬餘字□□□之一字一石焉、迄于寛正二年辛巳

兵部大夫忠直母

安永八年己亥十月十一日今の寺内に改め埋

塔の銘左に記す

き追薦せし塔有り今光九寺の道下に在り措

迄

一隈部忠直の母十七歳に而忠直を産み十八歳にて死

去忠直生長の後是を悼み法華経を一字一石宛に書

八月二日

芳山譽

三月

あらずや

永正元年

於筑州――討死

武此二つ隈部一門の墓さ見たり何人

前死せ墓耶

直時

元同禪定門

十一月

に部

て武

恋永三

次

郎

叫

直

肥後文獻叢書第三卷

此間不知

しにて

御拜塔宗梅庵と云

寬正二年辛巳夏七月二十五日野釋德顒謹誌

德顒は正観寺第十一世の僧也寛正二年より寬政

六年迄三百三十四年に成る

藤家賢女 源氏閨儀 真心有素 懿行無虧

内外和脇 壺彝孔宜 住世十八 日逼崦嵫

報恩一句 蓮經七枚 字也石也 何曾磷緇

岭然靈廟 瞻之仰之 愼奉遺體 傳以誄梓

七月二十五日、共功既畢矣、輒口口徙營兆域、封

蠟蟬藏石經也、寔匪孝道之口口深厚、誰能至于此

者乎、忠直告余日、疇昔子羔爲母殫泣血三年之哭、
曾參爲母極不飲七日之哀、王修爲母動轍車之誠、
隱之爲母發感鄰之歎、丁生爲母存于刻木之敬、雖
今昔之事或異、而子母之情乃同、我在襁褓之中喪
母、勿途承顏口口志、此豈非於命哉、然生成鞠養
之恩榮、治塵不能酬之、今也立石廟一基、口于先
妣德齒、傳之後、以欲擬于所謂刻木感不飲泣
血等口口公銘請于□□□三也余三口口至頗述其梗
槩□□□銘曰

此石碑今は光九寺内に在り洞音に曰此石誰人の徒
しけるにや光九寺境内に見ゆ本意なき事也我若年
の比より折々彼の墓を拝して能覺えたりと云々是
を見る時は洞音の比迄は石碑慥に墓所に在ける也
然るに今は赤仁田の墓所を火葬場と云者あり大な
る誤疾を病む者この墓所に通夜して祈れば鎧
武者あらはれて驚す事髣髴さして一夕に病もる

と云其賽には菊池川の砂を捧け燈明を上ると云

明八年菊池重朝公千句連歌を興行し詩歌を詠せし

時も忠直あつかり其後藤崎宮草創の由来を漢字

にかゝれたる文章有り彼社の物と成る藤崎霊鐘

の事も右文章の中に在るに因て世人誤て鐘記さい

ふ又合志郡稲本村八幡の寳殿棟札の文章は阿佐古

式部少輔源武貞に代りて忠直かゝれしさ云々又文

明十三月八月一日に萬句の連歌を重朝公興行し玉

ふ時忠直發句月蔦の題にて

一西迫間村南赤仁田に在り銘に 天倫東人

隈部忠直墓

赤星三郎五代の孫武則法名淨喜此等に葬る系圖

にあり然れども墓すたれて今は見んす

六二一

正月二日

り天明二年迄三百五十六年に成る

義雲慈孝禪尼

朝の妻忠直の母也悪永三十四年

嘉吉三癸亥八月二十二日

應永三十四丁未年

四十年に成る

潭月延龍禪定門

腰部忠直也嘉吉三年より天明二

光九寺に在る暮

紀伊守源朝豐

忠直は文武の英才にて有しさ今に中傳ふ其中には

あやしき俗説共有り此に略す或書に明應三年忠直

行年六十九さ有り

まけてなけくそ世のならひなる

理をいへはおさろくべきにあらねこも

みちしるべせよ和歌の浦浪

薩州の歌人執心三年滯留せしさぞ忠直弟隈部四郎

次郎山城守武直筑前に而討死の時詠る

立よるときけはなつかし敷島の

たゝなほ返し

おとするまでの身のほとはなし

薩州の歌人忠直をしたひ來りよめる

誰そさはいさしら波の立よりて

蔦やてる月一しほの木の間かな

右墓の銘如此然る間菊池軍記の説洞音の説なさは

系園の誤に因て深考へさる物也#降の説に有隆元弘行

に死去さいへり

隆は武房の弟にして勇武の名ある人也文永十

一年蒙古より日本を襲ひし時九州の諸將各發向し

是を防く菊池武房弟有隆の弟菊池八郎康成葉室太

郎高善城六郎詫摩太郎以下八百餘騎にて對馬に趣

き大に蒙古の陣を破り首級五百餘騎を得たり又弘

安年中武房有隆一族郎從一千餘騎筑前に馳向ひ蒙

古の大將を搦捕兩度の事功を以て威名四方に振ひ

しかば帝御ましまして甲冑を下し賜ると云叉一

説に有隆蒙古にくみしかれ巳に危(みしか有隆

七月三日死去

藤原有隆

嘉暦二年丁卯

一西寺村西福寺の後に在り

赤星三郎有隆

一合志郡久米村安國寺に在り永正六年閏八月十七日

十九歳安國寺に而自害天仙源祐居士さ稱し奉る永

正六年より寛政六年迄二百八十六年に成る

菊池二十三代政隆公墓

肥後文獻叢書第

長何居士 年月なし何人なる事かしらず

右西福寺に在り永禄五年より寛政六年迄貳百三拾抬

七年に成る右墓の事委は御拜塔の條に出る

隆隆の宇の上問て不分

裏 永禄五年壬戌

表 南主 宗梅庵主

右有隆の墓と並べり城武峯の墓なるべし正平は南

朝の年號甲辰は正平十九年也北朝の貞治三年に當

る菊池家は王室の純臣たるゆえ北朝の年號を用ひ

ず感心すべし正平十九年より寛政六年迄四百三拾

一年に成る

法名 長寛

藤原武峯

正平甲辰八月一日

はやりをの勇士にて下より敵を指通しひるむ處を

はねかへし勝事を得たり此時鎧にかゝりたる血星

のこさく有ければ赤星三郎有隆と名乗して土俗申

傳然れこも菊池分家多くは在所の村名を名乗る加

恵西郷出田藤田林原伊倉柏原等の類なり是を以て

みれば有隆赤星村に居られしゆゑ赤星氏とせし

にはあらずや猶尋ぬべし

葉池風土記巻七

月やしる十かへりの松の千々の秋

一江月山玉祥寺に在り爲邦公隠居の後合志郡板井村

に碧巖寺を立碧巖録を講せられしと云三十七年に

て出家し長亨二年戊申十月廿三年死去尖活仍勢居

士さ稱し奉る長亨二年より寛政六年迄三百七年に

成る碧巖寺に清正公の代淸幹長老暫住職の節爲邦

公の御繪像に識を書き給ふ掛物有り重朝公は明應

二年癸北十月廿九日四十五歳に而死去智顯梅屋正

英稱し奉る明應二年より寛政六年迄三百二年

成る重朝公文明十三年八月一日一萬句の連歌興行

有り月松の題にて

同二十一代重朝公墓

菊池二十代爲邦公墓

になる

賀明慶妙心

公

殊德妙鑒

細林委公大師

大師

慶林副司

按するに大師號はみたりに叶はざる由此等は弟子

より私にしたるにはあらずや如何持朝公御位牌

の肥筑太守阿蘇光居士さ有り此代迄も筑後を

兼領せして云安三年より寛政六年迄三百四十年

六一九

一正観寺境内卵塔場に在り菊池十七代武朝公の時守

護代などつさめし勇将也

菊池武國墓

右正觀寺村作右衛門さいふ者の屋敷内に在り正觀

寺塔頭の十二ヶ寺内寳地院顯德庵の跡れず然る

に此所を寺跡を申傳ふる時は右二ヶ寺いづれその

跡なるべし

墓さ云て今に尊敬す

一岡山

俗にむらさき和尚の

一正観寺桐木に在り古正観寺境内實相院の跡

菊池二十二代能運公墓

右墓故有人の墓ならん姓名不分享禄四年より寛

政六年迄二百六十四年に成る

玉電離松

幼芳禅定門

四月十六日

空山玄性 合作也

天

金享禄四卯泡童子

祥寺村傳右衛門裏山中古の墓所也無銘の石塔ぁ

るは玉祥寺開山の墓外に

是よりして月松の屋形と稱し奉りしさぞ此時に家

臣には隈部忠直さいへる才人有て孔子堂學校も建

立又藤崎宮に千句の連歌興行有り文華なる事おも

ひやらるべし

熊府學祭酒藪慤子厚

安永七年己亥夏四月

而菊池氏之墟。則寥々莫聞焉(正觀公之墳。在于

墟之西南禪寺院中。歳年遼遠。無他表識。墳上獨

有一大桃樹耳。邑人澁江氏父子痛之。喟然歎日。

菊池氏之忠烈如彼,而使楠氏獨專其美乎。謀之豪

族宗氏,宗氏奮口是我罪也我先世皆事菊池氏。

而被恩舊矣。乃捐財建碑。使澁江氏請予文鐫之。

正觀公乃寂阿公之仲子。諱武光。其忠烈功業於

數世中最為盛?事具史册。澁江氏名公 字子鍔3

子名公正。字子方宗氏名英盈 字傳次。如三子

亦可謂勇於義矣。銘曰。上菊池氏之墟。俯長江浩

仰箭筈之巉巇。山川鬱勃之氣。何爲至今未

也。遽而悲風一起。萬木皆疇。如王者師〟聲罪討

征。士馬踊躍。金鼓錚鏗。螻蟻之衆莫之敢抗也。

蓋忠憤之氣。不可天閼,故能激風霆薄日月。雖經

千百歳。而未嘗竭也。况有數義士。隔世而緬懷。

爰建碑石。以表泉臺。使人之拜觀九原者。益思慕

徘徊而不忍回也。噫嘻,盍嘗觀大友少貳二氏之墟

與慕乎?寧有復泫然而泣下者邪。

肥後文獻叢書第三巻

一片角村菊燦山光善寺境内に在り文安三年乙北七月

廿八日死去阿山光居士さ稱し奉る一説に永享五

年十一月十日と有り墓の域中に櫻有り年々花咲け

共十九をかぎると云此寺の西より北にかけては古

の卵塔場と見わたり戌亥の方には左京が一門の墓

有り持朝公募邊古墳甚多し内に銘有りを左に

しるす

菊池十九代持朝公墓

一岡田村神嶽山正善寺境内に在り透道居士と稱

し奉る

菊池十八代兼朝公墓

一正観寺卵場に於て叡藏天明年中に石碑のあま

た僵れ居たる中より武政公の碑を見出せり然共

墓所慥にしれす

菊池十六代武政公墓

右天明二年壬寅二月成就同月十五日宗傳次占6正

寺に於て塔の供養をなし此事に預かりし人々を

はしめ数多の賓を請し應せり

宗英盈 傳 次 建

菊池

澁江公豐士錫謹書

一正觀寺門内に在り世俗の説に桐木の墓を武光公の

墓と云しは謎也桐木は古實相院の有し所也此墓は

二十二代能運公の墓能瀬公を實院さ稱し奉る今

其絢 像 正観寺に在り武光公は應安六年十一月十六

日死去余棄て家と申あへるは菊池氏楠氏と共に

王室に勤勞ふかく忠誠の鑑たる家にして殊に武光

公は功勳格別多く西海二十餘年の靜をなし百人

武將の内にも載せられ給ひて其墓もいちしるしけ

れ規度したる印もなきよ兼て歎息し何そし

て石碑を立たき物とおもひ同郷の宗傳次英盈に物

かたりけれは英盈その先菊池家につかへ來し恩

を蒙る苗裔なれは此事を聞て感慨し碑文を世話

侍らはその碑は我立へして有りし故に時節到來

さ悅ひ當時時習館の教授敷孤山先生に委く物語り

碑文を請ひて出来の上遣しけれは英盈多くの財を

棄て營みたり碑の寸法は余て水戸黄門光國卿建

菊池十五代武光公墓

五十四年に成る

文化十三

立(此注後

北朝

寺の舊記抔吟味なかりして見たり喜院跡いま

源右衛門さいふの屋敷興國三年より

瑞寛政六年迄四百六一七

嗚呼元弘以至明德四十餘年。王室之難。豊不痛哉。

如夫皇統之有正閒。神器之有去就。雖非臣子之所

敢議。然其君子小人之分。 忠良亂戦之列。 則天下

後世。自有公論′昭々乎不可得而掩矣。蓋方是之

時。忠臣烈士不爲不多。然至其一門無叛心。數世

全臣節。則未有如楠氏菊池氏盛者也。楠廷尉崛起

信義。中興王室。 其後屢諫不聽。 殺身成仁。 其子

其孫。克遊遺訓。興南室相終始。其忠盛矣。 至如

菊池氏'則自寂阿公首死王事。二子繼興。能復君

父之。途奉征西親王。専節獄于一方。而宗族子

弟。無不同心協力以勤王事。是以中朝不競。海西

獨振。既而神器入洛。南方諸臣皆散。而菊池氏崛

強獨存。傳二十五世。以終足利氏之代。此共忠誠

無異於楠氏。而功則有加焉楠公歿後三百餘年0

常藩義公聞而慕之。乃建碑於其所戰歿湊川之上。

請明遺民朱之瑜撰文。於是楠公之忠益以顯著。

作神道碑

菊池正觀公碑銘價者転孤 遺幅

編者孤遺稿

給ひし楠正成牌を規とし文字は家翁是を書し石工

の者は玉祥寺村次就中文字の彫刻の趺座は下

坂庄兵衛細工なり碑文左に記す

一深川村菊池跡の西南に當り上の京と云所に観音堂

菊池太祖則隆公墓 文政八乙酉 石碑立

古墳

私此節御供之人々須佐美九大夫眞下梶之助外に

壹人之由承る

武士のすみかはあれて轡むし

一靈感院殿西寺江 御成之夜御近習三人御供に而御潜

行古城御登山有之追悼之御發句 こゝなる所にあ

る逆修に書記し給ひけり逆修の事古墳の條にい

す

左衛門 上妻半右衛門

天保十五四月十六日野

津原鶴崎へ轉任になる

弘化二年乙巳二月

村井次郎作

荒木甚四郎

候

合志菊池獨

中に附助

天保十五年

+11

役天保十三四月十六日

増田十郎左衛門

殿

天保十二辛丑

天保九戊戌間四月十三日所附

林理右衛門

助

天保七丙申四月二日所附 天保化申泗明二日 狆用肥後文獻叢書第三巻

四月三日所附

武藤豬付一輪足村昔の東福寺境内喜院跡に在りたぶの木一

本有り武重公薙髪の後觀喜居士と號す此所に住給

ふ興國三年八月三日此處に而死去是より結庵を觀

喜院號し代々住信有りいま輪足村東端の角屋敷

下ヶ名を観喜院と云 今世俗くくわ

んきんさいふこれその跡也武重

公勤王忠誠朝家の一柱だりし事世のしれる所也

菊池軍記に武重の死去年月を聞かすとあるは東福

一出田村西に在り墓の上に宮を立て若宮と崇む

菊池十三代武重公墓

菊池二代經隆公墓

石四角に在りその内一つは今村の内に立て有之

此墓を則隆公の墓といふ苔むしたる五輪あり此片

名を昔いかなる人のはからひにや北宮深川兩村の

あはひの橋に用ひしに其橋より夜々光ありて墓の

遊迄飛わたり見とける故本の所に返し納し事 有

しかのみならす墓前を馬に乗り通る者はこざく

落馬せし故深川文左衛衙御惣庄屋の時墓の前に

観音を安置せしかは物さかめ止みけるとその

木枝を手折る人は必腹痛すと云

*一六

有り其後に高き墳あり榎木しける兆域をなせし片

菊池風土記巻七

林七郎左衛門

十月

安永四年十一月

4 内藤渡邊兩

菊池合志

渡邊喜平次

明和七年七

中島傳九郎

明和五年三月

内藤儀左衛門

寶暦十四年三月

飯田三左衛門

上村專左衛門

寶暦五年三月

横井儀左衛門

寛延三年七月

延享五年三月

太夫

關岡左衛門

元交四年九月

曾根安左衛門

同二十年十月

年十一月

辛同十二年八月

八年正月

享保六塜本彌次兵衛

寶永之比

横山彌左衛門右衛門

- 彌次

天和三正月

貞享五九月

元禄三二月

宇野彌兵衛

正德五年閏正月

横山彌右衛門 内藤勘左衛門

享保六年

天明

入江彌三左衛門元田尉太夫

享保片山甚十郎

同十年十月

天明

年八月

牛島角兵衙

同十一年二月

金津十次郎

同十八森島喜左衛門

吉田傳兵衛

片山八郎兵衛

同十五年四月

寬政四年四月

川瀬兵衛

財津平左衛門

宮本傳右衛門

元文三年二月

寬政十年五月

年正月

平野甚助FL肘 林三左衛門

横田勘左衛門

仲路傳同五年之秋

井延享三年三月

文化十一年二月

河田八左衛門

吉田儀兵衛

寳暦三年五月

文化十四年三月

文政二年四月

三年狩野源之允

木原彥左衛門

寳暦七年六月

同十一年

文政四年四月

仁田市郎左衛門西村作左衛門

國武彈助

文政九丙戌

井上平左衛門

人八

に日

明和八年九月

明和九年坂根長左衛門

河田吉

此時より菊

安永三年八月

池合志併勤

上村角左衛門 山内次郎助

*一五

内山小右衛門

武藤猪左衛門

七月四日所附

十月十四日

六年

天保六乙未

天保 杉谷伊兵衛

齋藤三郎

三月廿七日

六月廿九日

文政十丁亥

天保三壬辰

編者曰原書には不破大作まであり以下後人の書加へたるなり

不破大作

町市郎右衛門

文政八年七月廿六日

同五年正月

西浦九兵衛

松浦仁一郎

八月

文政不破敬次郎

吉村嘉善太

文化十二年八月

文化十三年八月

吉村嘉善太

文化六年十月

文化五年四月

近藤英

門田中九郎兵衛

長沼十郎右衛

寛政九年八月

寛政八年九月

横田勘左衛門

神山忠兵衛

寛政三年六月

天明十年二月

水野傳左衛門

柳井瀬右衛門 此間菊池合志兼帯

天明元年二月

ふ事多し孟子の所謂國て取法といふ物也賞

一靈感院様御代御仁政四境にあふれ隣の政皆見習

一菊池系岡あまた見る中に九條一跡の事といふをの

せたるありいまだ何事といふことを聞かず

一守山の城天正十六年間六月加藤清正公當國入部

の節加藤傳藏守山の城代と成ると承る寛永十五年

島原陣の後諸國の明き城毀っべきよし御觸有てこ

ほちに成りたるよし城代やみて後には限府の宗善

右術門抔初は見つくろひしたると申傳る時は其比

迄はなにぞ残り居けるや其時分焼拂に成しさ云っ

たふ猶尋ぬべし

一菊池氏の事に付古来より一さもさ菊さい''事所に

申信れさも何事といふ譯をしる人なし臓を以てい

は ・九州にて朝家に忠勞無二の菊池氏のゑ是をほ

めたる詞にてはあらずや尋ぬべし

ふべし

一安永四年春の北西迫間村内河原田といふ所に而長

九尺幅六尺程の大石耕作の際に成るさて石工より

て是を割けるに其石の中より炭五升程出るこれを

火に入れば眞のに替る事なし造化の所爲奇さい

肥後文獻叢書第三巻

延享元年八月右田勘左門宅に御成

明和七年十月西寺村佐藤形助宅に御

成都合兩度

三年より

岡荒瀬猪左衛門

理助

本庄彦右衛門

より

同八

寛文より

延寶三

御郡中御郡代之歴代

一靈感院殿

一妙應院殿

一隆徳院殿

御成有」之年月所未聞

殿様祭といふ事始る前代未聞の事といふべし今興

後方に此こと出来たるも我にひての事

一征西將軍に供奉にて下向の平山和泉守子刑部子孫

正観寺村に居住其子孫加藤氏に仕へ平山忠助大工

と成る御城出來之時熊本八代菊池より棟梁罷出手

を分て造營す其節忠助菊池大工の棟梁を勤め其功

に因て隈府西原内に地方を下され所を大工分さ

云し由申傳今に至迄忠助子孫菊池大工の觸頭を勤

中誰すゝむるとなく暦の比より

は多く罪はすくなく専用の人々は多く時習館より

御選有りて人々文學なきはあらず自然と共に化

して一瞬の風やはらかに誠質をたふさむことにな

徳孝相あらはれ御仁政天下第一の稲有り常郡

一享保八年の比隈府町茨木屋甚三郎と申人大寒の朝

西照寺へ参詣せしに門前に一人の乞食裸にして一

の薬莚をまさひ飢凍して居たり甚三郎あはれに

おもひ寺より歸るさ己が家に連れ行懇に飯なごた

べさせぬ布のこを一ッ得させけるに其後菊池山鹿

方懸折々火難有けるが皆人火成ければ捜求て其

盗をさらへ國藤にていたく責らるゝ役人盗に問て

日爾所々に火かけしに隈府はかりを残せる事いか

と尋ねければ盗答には彼町に甚三郎と申人あり

先年恩恵にて一命をもふけたり其恵み誠に忘れ

がたし今隈府に火を懸侍らは此甚三郎宅もともに

灰と成るべし是を憚るゆゑに火をかけさりしょし

ふべし

一菊池軍記に日寂阿が舅赤星有隆入道宗愚等百五十

你騎元弘三年三月十三日菊池を致して云々西福

寺にある有隆の墓碑を見るに嘉暦二年丁卯七月三

日死去とあり嘉暦は元弘よりは四五年前に當る然

れば元弘の亂は有隆死後の事也菊池軍記誤りとい

此時の合戰叶ひ難からんは下記部三十三又日武光義

有て不義あらす

成長の後女と同所に臥居たりしに他の女懐妊し

ける故吟味せしにおいちだりしと答ふに是に因

ておいちが父母驚きおいち十八歳の時隅を入れ男

形成し名を市右衛門と改む今市右衛門は五十餘

の者也今所の山口役を勤む幼稚の時に雨親男女の

形を取ちかふべからずされば女化して男と成る物

なり奇さいふべし宛委除籍琅邪代酔篇等に載する

處の女化して男と成るは此類なるべし

*一三

C

申せしさぞ誠に甚三郎一人仁恵にて町中數百家の

災をのがるゝは甚三郎の心中推はかるに名聞をは

なれ人をあはれみたる心眞實なると見わたり人を

すくふは第一の善事仁の端なればその行程の事

悪事退散子孫長久のもとひとなるは必定也夫人は

いかほどにあしきものさいへごももと天より受得

たる善心有る物ゆゑに誠さへ深き人なれば悪人と

ても感せしめざるはなし盗の極悪にかたまりし者

たに其天よりうけ得たる善心甚三郎かめくみに引

「あらはるゝを踏心を付て見るべし然るゆゑ惡

敷人さてすつべからず必殺へみちひくべし

一賞暦の初當郡深川手永西郷村においちと申女

一又日征西將軍下向に付許義有りて今川了俊九州の

探題さ成應安五年下向と云々元徳二年より應安五

年迄は四拾三年の星霜なり元徳三年征西將軍下向

に付て應安五年に探題の下向は除り延引なら是元

一口武光公の言上によりて元徳二年九月に將軍宮

肥後に下向さ云々元徳は元弘以前也元弘中筑前博

多にて寂河英時戰の比さへ武光公未記御年若

にて共後武重にて家督有りしかば元徳の比言上

申事は大なる誤也

一又日此時に征西將軍に随ひし公家衆もちり々々に

浪遊せしよし有り是又大なる誤也武光公の代海西

二十餘年の静謐をなせし程なれば宮に供奉の人々

浪遊せし事あるべからずおもふに武光公降參し給

ふと申よりして供奉の面々も散々になり給ふなら

んこ推了の言なるべし後太平記他國の人追尋て記

したる故かく謎多し

と云云大なる誤也是は武光公の御子武政の代の事

にてそれもかうさんはし玉は細川頼之のなため

にて和陸に成りし事實説也武政公討死はしたもふ
とも王家に背き給ふ人にあらず

徳とあるは彌以あやまり也
一又日義満將軍應安五年に京都を雷と云云叉武光
太宰府に打向て云云武光公は應安六年十一月十六
日已に死去の事なれば應安七年は死後の事也齟齬
といふべし且また義満將軍に降参抔いふ事いやか
への虚説此節の戰は武政公の時にてそれも降
参にあらず取扱にて和睦有り前に辿るか如し俊
の下向は武朝公の時也それを武光公にとり合する
に旁以齟齬せり予に菊池の事を考るにかく誤
われは他國の事もその隣の人々見る時は又誤あら
んこれを以て見れは軍書を一概に信用し古人の善
悪を評論すべき事にあらず能々考合すべし
一太平記部列に日肥後守武光畠山治部大夫か籠りに
る日向六笠の城を攻め落したるに大友にそむかれ

けれ共武光が勇力にて大友がふせぐを不用して

肥後國へ引返すは大勇といふべし又小貳心替せら

けるに阿蘇大宮司籠たる城をせめおとして通る

兵に得たる處也其故は頼切れる味方にこゝろ替

せらるゝ時は必兵落失せ或は氣を屈するもの也兵

めぐむ大を兵を得ると云也士卒能思付すは

子也第二は栫養奥儀山大善寺跡也第三は大堀木

の人玲誌哪津第四は山西小森の人 第五は熊

本春日の第に上内田村の人 村第七は山

鹿郡河原谷の人筑前所持の琵琶三つ妙見に傳るを

雌琵琶さいふ迫間村の名の都方に傳るを雄琵琶と

いぶ先年焼失す四丁分村に都方に傳るをうたた

ね琵琶さいふ此事俗説のまゝをしるす尋ぬべし

オホロ

一上妙見村の宮に在り 座頭此琵琶は筑前申人の

所持せし云筑前大和國吉野にてあるひさ親王の

弟子に成り琵琶を稽古いたし赤星はいたか天神さ

三七日籠りに夢中に青梅七つを賜る悪覺めて枕

の本に七つの梅有り是をはいたか殿に納む今のは

いたか梅はその實といふ今はい梅さいふははい

たか梅の略語にはあらずや其梅の數に比して弟子

七人を取る第一村上梅宅水沢村の郷士村上外記の

琵琶

隆徳院殿 宗孝公御成之節又々御覧に上る

妙院殿 綱利公御花畑にて面蛙の面御上覽あらせ

らる蛙の面今紛失せり其後延享元年八月隈府右田勘

左衛門出端の屋敷え

六一一

一又白武光公高良山にて將軍義滿公と戰ひ降参せし

一後太平記に征西將軍初下向の時に八代に入給ふと

云々然れても當菊池にも御住居ましませしゅへに

其故事舊跡今菊池に在り

一太平記大全に武光公は武重公の男と有り武光公は

武重公の弟なり大全誤り

正誤評說

もの厚さ七歩横七寸三歩共に鯨尺也

琵琶長鯨尺の貳尺

はこれよりは甚大なり又半月の形なき半月二

つ有るは即催馬楽の琵琶なりこそ

或は日此琵琶は催馬楽をひくひわのよし雅楽の琵

一翁面

御松囃子御能之遺品

菊池氏の軍には良將の有る人を軍奉行なし馬に

乗り高き所に居團扇を持ち戰場を見せ味方のいくさ

疲れて備みたれんと思ふ件の團扇を磨き太鼓にて

下知して引入太鼓をうたしめて二陣を入替る故に

の軍先陣の敗れごも敗するこしらず下知にて引

心得て入替る故におくれず入かはる次の軍の入替

るを見て先陣の敗する兵氣を直して静に引けるぞ

是右之團扇を用たる所也

こうにて巻く

震地日丸金

地革にして柄竹

竪六寸二歩

表:金日,丸朱

横六歩

肥後文獻叢書第三巻

面男日下し賜りたると云て双方書物を上る郡奉行豊岡利助

と云人の前にて對決に及たれ共双方是非不分明によ

佐藤傳七談 加藤三左衛門と 右兩人證據

佐藤傳七牂加藤三左衛門殿に嘲髪宗

にて銀貳百目甚左衛門に遣し和平となるこの時の銀

子は宗善左衛門重次出し置其後座中より返さ

すと云傳ふ其後

甚左衛門に譲受しさ云座中は菊池殿より座中に

の戰に薩州勢

この翁の面を掠取歸陣せしかば時の能大夫藤吉雅樂

菊池家の物他邦に渡す事を本意なくおも

ひ雅樂薩州に三年程忍び居有所を尋しかば此翁面當

國八代の様にかへしけるよしを聞て隈府に帰り座中

決し白銀を出して八代より買戻し再び隈府の賞

なす雅樂の孫清十郎後に名を外記と云其後又甚左衛

門改む寛文三年六月甚左衛門さ座中さ翁面をひ

公事に及び子細は甚左衛門か父雅樂か面たるに

出る

條に按るに右之翁面は赤星道半島津義久を頼み隈部親永

を攻し時 宮天正七歳三月十一此外に衣裳等数多有り此に略す

先年紛失

一太刀

非美作

一蛙一三番神面

の面共

春日作

*一〇

菊池風土記卷七

伊牟田美濃守守俊

大塚源兵衛盛道

岡田將監元成

大野加賀守弘成

木野刑部允親光

内田刑部允友明

一條十郎助光

西川次郎左衛門友政

竹崎圖書助惟

内古閑秋十郎運直

城六郎政元

馬見塚左衛門盛

馬見塚新左衛門長行

若園源左衛門忠村

大河内和泉守氏直

立田刑部少輔武貫

迫問刑部少輔武宗

牧右馬允安滿

伊倉掃部時長

虎口別當丹藏

寺尾野左近景光

原田兵部允行成

深川傳十郎隆

內田右左衛門朝藤

赤星安藝守有繼

平山中務少輔秀直

竹崎次郎左衛門惟村

田中彈正忠朝宗

二中

山中對馬守經世

鹿兒木式部允房貞

合志掃部隆直

藏邦鄉

久多良村刑部良助

隈部十郎親次

河內守資宗越後守重顯

加恵軒之亟武元

合志遠江守重鄉

龜甲内藏助守家

津川又十郎公家

津江大和守邦鄉

新開出羽守安眞

出田佐右衛門重鄉

西山加賀守安親

*〇九

宮に在り

一軍配團扇征西將軍宮北宮に奉納有けりこぞ今に北

器物 軍配團扇

永正元年三月三日

政隆

菊池肥後守

合五百十人 内拾五人本書鼠損>姓名不知

出田刑部允重元

城筑後守武東

赤星安藝守親家

岑

弘生次郎太郎家久

關部兵櫻井次郎三郎公村

隈部彌三郎親元

高嶋近江守元房

鬼島出羽守邦隆

湯鄉治部允賴常

嶋崎刑部掾興

北島長門守氏定

嶋伯耆守宗氏

秋藏豐前守尚義

山口出羽入道祐昌

道田良雄

方保田新左衛門伊勢守國生

荒尾伯耆守泰家

早波出雲守邦重

石貫兵庫守政

塚本若狹守親元

市田尾張守雅家

櫻井伊豆守公家

古閑山城守貞載

關將監公賴

赤星飛驒守房繼

竹嶋兵部惟直

吉田新十郎公棟

相良式部少輔朝長

隈部彌七郎清平

高倉圖書助俊直

竹島忠左衛門惟豐

瀨田兵部允惟清

宗備前守重賴

八郎盛賴

瀨田新左衛門惟夏

臼間田又十郎武

赤星右近武親

山北掃部內古閑次郎左衛門朝貞

小森田和泉守朝右

亮重貞

關隈部源兵衛北山城守公村

吉田左衛門公也

隈部豐前守貞朝

城大藏大夫

朝

嘉吉三癸亥正月日

持菊池右京大夫

都合百十六人 内一人本書鼠損姓名不明

光吉刑部允

城戶信濃守重詮

鹿島刑部允隆元

合志丹波守重遠

肥後文獻叢書第三卷

內古閑周防守朝

本山十郎太郎能也

合志藏人少輔隆

小山十郎三郎貞

窪田式部允重宗

赤星大藏少輔重生

城彌兵衛晶岑

守治

内田右京部新右衛門朝家

佐藤日向守重秀

白石民部允朝右

助景直

隈部右京亮常治

宗與佐藤伊豆守朝經

隈部下野守鎮治

小足十郎太郎盛政

高橋薩摩守朝景

永野淸左衛門運俊

廣瀬刑部允忠

高瀬刑部允政元

佐野新三郎友清

千田尾張守行

鹿嶋民部允武詮

千田行川房

宇津宮三河守公鄉

古庄出羽守宗光

林原與一郎隆基

木庭越前守重行

和田兵庫頭重德

林田駿河守公康

山鹿右近重詮

岩野彈正鄉成

多比良出雲守朝道

竹崎又之允丸

馬見塚藤左衛門盛秀

御宇田山城守直貞

隈部新兵衛賴夏

山井丹後守賴直

小森田四郎兵衛運淸

隈部右京亮重門

關部滿龍丸

小森田加賀守高也

阿左古淸左衛門能淸

若園源兵衛忠道

内古閑圖書介頼續

平山和泉守惟近

宇野刑部允忠元

早波六郎次郎英冬

竹崎出雲守惟圓

瀬田隆慶坊快

早波山城守邦政

阿佐古清左衛門友貞

山口九郎左衛門朝昌

佐藤兵部少輔邦則

櫻井大藏少輔公

阿佐古式部少輔武真

塚本伯耆守親勝

隈部讃岐守基家

荒尾和泉守泰直

市田美濃守惟寛

西山伊賀入道安貞

城六郎重岑

石貫主稅助廣

佐藤駿河守邦佐

隈部又十郎重光

若園山城守忠幸

伊牟田加賀守守親

小森田八郎右衛門邦治

小森田兵部少輔重也

小森田三河守經也

櫻井播摩守公綱

伊牟田上野入道宗與

山田兵部次郎朝明

久多羅木伯耆守良直

久多羅木三郎良元

内古閑周防守誠長

佐藤大和守爲春

隈部八郎三郎朝夏

長野太郎重鄉

鹿子木兵部少輔重貞

隈部民部少輔元成

隈部對馬守忠門

隈部近江守淸本

宇津宮新太郎綱行

道田加賀守邦世

伊牟田勘解由允朝廣

高倉出羽守家俊

瀨田兵部少輔武宗

塚本新左衛門親次

岩野山城守道時

出田刑部允重綱

熊谷和泉前司直次

秋藏備前守公尙

內藤彈正忠弘宗

秋藏周防守公俊

合志藏人助隆門

詫摩藤內貞光

片山藤左衛門重光

田原武藏守家朝

山非勘翁由允重續

合志右近允武忠

古川治部允邦守

窪田民部允惟各

吉田駿河守友定

隈府次郎右衛門六〇七

結城次大夫友鄉

方保田藤左衛門良清

隈部新左衛門弘通

吉田清左衛門守俊

阿部太郎次郎吉家

木野宇右衛門親景

高橋右京入道仙

小原筑前守諸元

田北伯耆守久長

小豆丹後守重綱

安田清兵衛守隆

赤星修理允有直

葉田民部允元國

佐藤式部少輔爲成

城伊豆守朝成

武治

長野修理允右俊

二部

弘生太郎左衛門光弘

内古閑刑部掾

隈府八郎車治

平山遠江守盛世

大内刑部允舘

菊池肥後守舘

高長門守高冬

右大

應安三年正月十三日

爲掟意者也綸旨如此執達如件

關部伊豆守邦宗

弘生式部少輔朝氏

立尋守義者忠臣烈士之切也撲逆潑國者武臣之節也于 竹崎安藝守惟氏

茲有二人之逆臣號小貳大友已爲其臣殺大內張逆威前 高倉因幡守守俊

代未聞也因茲武政隆政呑正兵之勇請舉義兵之旗誠豪 鬼嶋出羽守邦久

傑之志叡感不然早運逆徒誅伐之策可致天下太平之功| 西山河內守經道

方保田丹後守守經

菊池次郎武重舘

四日

城右京亮爲冬

合志太郎重澄

本山三河守惟之

石貫民部少輔安元

宮崎兵部少輔重作

征西將軍懷良

息致命於君討死尤老心爭無其憐乎速於義兵抽軍忠

者云本伽云天恩更不可有相違天氣如此仍執達如件

海鄉式部少輔賴種

祖父寂阿元弘之軍忠不顧老體都鄙之忠節無比相且兩

旨

逐日我小弱/兵7敵/强二切入數代弓矢/名ヨ殘

下欲下云云

肥後文獻叢書第三卷

興國元季己卯七月勘解由次官

赤星中務丞有繼

編者曰異本二八島長門守宗次'平川與三衛門高冬下兩人二vy

北島新左衛門氏也

高崎進古入道元雄

高島近!

山北對馬守邦續

伊牟田兵部少輔家吉

赤星遠江守有信

島崎右京公興

吉田式部少輔公貞

竹崎伊豆守惟

白石常陸助賴道

宗大和守重信

隈部上總助忠直

長田式部少輔基秀

馬見塚大和入道宥成

赤星九郎重親

有り左に記す余おもふに是は出陳の節の着到

付にはあらざるや尋ぬべし

菊池持朝公政隆公二代の你付:今汇殘扎

XOX

補池風土記卷七

KOH

ス我自害セン敵利味方損ナレ忠臣/道闕タ

順之未必其生、逆之未必其死、相逢賀蘭山前、聊以 リ早奪民兵ヲ率シテ肥後ノ地ニ押寄我首截本望ヲ

謂也

臣居遠弱之倭、福小之國、城池不滿六十、封疆不足 古今好下欲ヌè所二排入今氏兄弟、君恩二ホny

三千、尚存知足之心、陛下作中華之主、爲萬乘之君、 テ君ヲシ奉リ大逆無道ニシテ畜類ニ劣レリ何ソ我

城池數千餘、封疆百萬里、猶有不足之心、常起滅絕 レ此,無道二與セン哉偶人界=生シテ喜ト欲ルノ所

之意,夫天發殺機、移星換宿、地發殺機 龍蛇走陸 ヲ不知畜類=隨エトャ佛教顯ス處死後ニコソ三悪道

人發殺機、天地反覆、昔堯舜有德、四海來賓、湯武 ニ墮下見ヘタリ
生キナカラ畜生類ト成事何歎

施仁、八方奉貢臣聞天朝有與戰之策、小邦亦有禦 力7>悲哉人皇九
十五代御宇二至國忽千二畜類/

敵之圖、論文有孔孟道德之文章、論武有孫吳韜略之「鬼國下成事痛?
冫力日本一州都魔魅/掌二落ヌ

兵法、又開陛下選股肱之將、起精銳之師、來侵臣境、 事ヨ我仝毛朝
臣下成y一日兩命ヨ存憂事7聞 恨

永澤之地、山海之洲、自有其備豈肯跪途而奉之乎

がめしは名義よろしからず惜むべし

菊池武光

云

臣聞、三皇立極、五帝禪宗、惟中華之有主、登夷狄

而無君、乾坤浩蕩.非一主之獨權、宇宙寬洪、作

氏將軍ヨリ御教書有返事

良懷王報明帝書 明帝得表慍甚、終鑑蒙古之轍、不加兵也云云、

征西將軍自ら臣と稱し口明國を中華明帝を陛下とあ

明史誤作長懷

藤原武朝

弘和四年七月

罷戰爲强、

勝君負、反作小邦之羞、自古講和為上

裁豈可亘餘儀乎、仍言上如件,

生靈之塗炭、拯黎庶之艱辛、特遣使臣敬叩丹陛、惟

上國圖之、

可有御沙汰者也、將軍宮御事、被受正平之敕裁,爲

百餘歳忠義、被賞近年奉公阿黨之所望乎,亦任理非|博戲、臣何懼哉、倘君勝臣負、且满上國之意、設臣

故大王御代官、年來被積勞功、御理運無相違上者、

敕按邦以分守、蓋天下者乃天下之天下、非一人之天下也、 受恩不報是形人－ > 心畜類也受恩報怨何卜力在陣肥前國府一運諸方計策之處、今川仲秋相率松浦 然則就忠之棧深、可有御成敗者、何被閣當家代々三

【刻武朝奉之功、合居住當家分國之上者,功勳之次第皆宜存知者也,

後二十七年者、顯興入道紹覺、憑武光以來之武功,

當

餘年之

陣、鎮西一統之大功者也、武政者相承彼忠功、致

度々合戰、運種々計略時分、早世之間.武朝自十

二歳之時,合叄勤筑州大王之御棹、守父祖行跡、從

令荷擔、鎮西御大事以來者、文中之比、丁俊寄肥

後之時,數月勵防戰之武略、於水島陣、成了俊追落

殘討死畢、然者元弘一統之頃、義貞正成長年命出 以下之凶徒、打出博多之間、指遣肥後守護代武國

仕之日、如正成言上者、元弘忠烈者、勞功之雖惟 致大綱合戰、追散仲秋畢、又大内義弘、豐前豐後兩

多、何存身命者也、獨依勅定陀一命者 武時入道也、 國之凶徒、相共罷出之間、於蛇打陣致合戰、武光合

忠厚尤爲第一歟云云、此條達叡聽之由、世以無其 弟武義入道自關並武安討死畢、然而後了俊一類

者也、建武二年氏謀叛以來者、武重仓参洛、直獻 大友少貮大内兄弟數千騎、寄來肥後國之間、於託磨

忠懿之間、宸翰以下御感、特絕此類者也於鎮西者、 天授四年九月、武朝十六歲之時,任運於天道、

原

在國之一族等、致妙惠誅伐之大功、何氏下向之時, 忘命於公儀、雖爲無勢、馳人多勢陣、抽戰伐之勇、

於多々良濱合戰、勵武節畢、延元年中、武重下向之「一族以下銳卒數十人企討死、自身被疵、攻戰最中、

後者、致度々合戰、蒙都鄙之善譽歟、厥后武士命相 將軍宮有出陣、而被馳向了俊、及御合戰之間、散在

續彼武名、馳廻肥後筑後、致度々之合戰 護持遠 之官軍、少々依馳參御旗下、凶徒令退散畢、弘和二

近之官軍記、興國以後者、武光奉成故大王入御、最一年之比者、武朝守叡旨、奉仕將軍宮之間、一族以下

初於八代城、自命對治一色入道々猷父子之後、申沙 扶持 人等、受彼 朋黨語、楯籠 分領守山 之要害、擬

汰大小之籌策、服大友少貳等於御方,二十肥後文獻叢書第三卷

六四

鎮西致兩度靜謐吃、共刻武朝

屬將軍黜武朝之條、弗廻時日自馳向、各追落畢、是則雖

爲私計策、偏所存公平也、且度々勅使被見知者也、

加之元弘以後者,以當家武略、致九州每度之合戰、

至于今相支了俊多勢陣畢,就中自元弘三年、至今稔

弘和四年者、五十二年之星霜也、此間正十三年以

菊池風土記卷七

-親重

隈部藤五良

同三良助

某

-親種

,隈部次良助

年三十四,

二年七月二日去

法名智仙居士行

-親元

左衛門

隈部傳左衛門慶安

隈部七良内空閑權大夫藤原鎮房室

次良法名泰岩居士

親房

天正十五年十二月廿日同父於同所自害隈部

智後改親泰

廿九代隈部式部大輔山鹿城村在城山鹿彥次良重行

——親安

隈部彌三良八筈嶽住山鹿彥三良藤原重政

-親次

女

南關二討死四十一室重安丿母也

專阿居士

重行智天正六年四月十六日赤星安房守親家

討負奔竹迫自是爲隈府城主其後佐々氏下戰

豐前國於小倉自害

現代隈部刑部介但馬守法名仙空山鹿兵庫頭藤原

朝家 者也然壽永元唇之頃者、曩祖肥後守隆直、不

〝與〝東夷等之逆謀、奉」守劍、受„„安德天皇之勅命、

數年勵„忠勇、嫡子隆長三男秀直以下數輩致命畢後

鳥羽院御代承久合戰之時、先祖能隆爲大番役、依進

置叔父兩人、隨院宣進戰畢、就夫當家本領數箇所

爲小義時被沒倒畢、文永弘安兩度蒙古襲來之時者,

高祖武房勵勇敢於戰場、施佳名於異朝,既抽日本之

爲日本之大功之由、顯天下之歌謠畢、後醍醐天皇御

時元弘三年者.曾祖武時入道寂阿忝奉勅詔、同三月

十三日、打入凶徒將平英時之陣、父子一族以下無所

カモ

云、謹 檢„ 當家忠貞之案内、中關白道隆四代後胤太

祖大夫將監則隆後三條院御宇延久年中〝始而從下

菊池郡 以降、至:武朝十七代、不 與 凶徒、奉

テルニ

右今度勅使如 被｣申 將軍宮 者、當家之忠功者

不｣可」過三元弘忠士,歟、因,是難」被.閣 群黨愬 云

菊池右京權大夫武朝申代々家業之

菊池武朝申狀

雜錄

菊池風土記卷七

親元

肥後文獻叢書第三卷

隈部彌三良

北京田大膳介

景直

景治

富田兵庫

元治

二十四死

家元選

富田主膳

-景元

治元

寺住侶

兵衛後仕

清正公

富田但馬守

靑潭寺再建

富田太良 天正十五

家治

但馬守改 年七月二

安藝守

十八一

富田伊豫守

隈府討

「相良寺鐘壽

富田安藝

守

進

【同父於院馬場口討死富

-家朝

田帯刀後改飛驒守

有鋤大隅兼元室

女

後仕清正公

棒千代

-治元.

隈部五良兵衛

又親家/子トス

-親廣

隈部良一説親永ヲ親廣子トシ木野親政

女

民治

親氏

【隈部軍治

式部上野守

日去葬于青潭寺

彰教禪寺號照山妙鏡母天正四年四月十一

女

木野但馬守親政母也親政於南關戰死于

文十九年六月十九日去葬于青潭寺

廿七代隈部式部大輔上總介法名高名須天居士天

安寺二

花蔭妙榮生年十八生味村祥

鑑義

隈部伯耆守‿天文七戊戌十月十五日死去

永祿十一年八月一日去葬于青潭寺

治時

富田小左衛門

小關平藏武家室

女

實棒千代妹也

* 二

菊池風土記卷六

女

于造音寺

總介入道素覺

|親

#四代隈部式部大夫上

合志伊勢守隆峯室

賴夏隈部新兵衛

重則

朝夏

隈部八良三良

良十郎

亟

重門

重光

親

右京

隈部又

但馬守

重基

一元成

廿三代隈部民部少輔

親興宇野氏名乘家跡等相續也

一親興

宇野治部大夫宇野氏斷絕故則

【於筑州戰死行年十九

武直

,隈部四良次良山城守

武家

-武治

隈部次良衛門尉

宇野民部大夫

宇野源次良池邊

次良吉

紀伊守家次智

宇野治

元規

部大夫

宗夫左宇

大野

宇野次良改富田

氏法名周禪居士

葬今村觀音寺

隈部和泉守宗眞

隈部右京常治室

*↑

隈部下野守

二十八葬于青潭寺法名喜竹道悦居士

六代隈部幸若丸後豐前守天文八年六月十日去

貞明

菊池肥後守藤原能運室

宗茂

運秀

隈部彌七良

隈部和泉守

隈部次良和泉守

【赤星左京大夫武規鋽

廿五代隈部式部大輔 法名祐岩居士

-運治

隈部上總介出家

五良

京亮

進

守

行

常任

常治

右京

宇野藤

隈部右

五良

四 良

-守治

宇野人

詮鄉

守光

隈部源兵衛尉

隈部源

能清

元成室

[清衛門

貞清

女

阿佐古 式部少輔

右俊

部允

-武貞

-忠行

·野刑

忠元宇野刑部丞

-永尊大阿闍梨

五平山現住

親忠宇野清左衛門

||長治

二十代隈部又三良式部大夫

肥後文獻叢書第三巻

忠冬

清七

忠重

阿佐古式部大夫 阿佐古

友貞

福本八幡建立

輔式|阿

式部少

長野修理介

長野太

重郷

良

阿佐古清 阿佐古兵

能貞

右衛門

部少輔

阿佐古

能家

民部

基家

-基興

彌兵衛

隈部源次良讃岐守

廿二代隈部常若丸上總介法名天倫東人葬于迫間川

忠直

傍赤星彈正少弼藤原爲繼智於西迫間心峯山

光九禪寺建立開山江月現住鍊室金大和尚歸

依僧也又於雪野胡桝田五反三畝寺中境內一

丁五反寄附也

-重治.

新左衛門

弘眞

隈部八良

忠門

隈部對馬守

近江守

託磨別當太良安春室

廿一代隈部源八但馬守法名宗仙居士宗大和守兼

——朝忠

智光九寺碑在朝豐紀伊潭月延龍門トアリ

系圖誤り

-運光

長野太良

運慶運貞

重運

長野清左

長野備前守 長野備前守

*

菊池風土記卷六

武運

十六代始 宇野源次良後隈部右衛門尉下改公文永

|持直

七年二月十日去行年三十八法名淨貞文永元

年甲子二月菊池次良藤原武房自爲外叔父當

地之以府訓授賜隈部氏又當所以白木須賀山

築館居住自此時稱菊池氏四天王之武士

女

菊池式部少輔藤原隆泰室

——持治

憲仲大和尚

直光智

【薙髮號淨觀入道

尉原田長門守

詮治

一成治

衛門

宇野治部女

長野太良藤原隆基室

-賴房

同六

遠治

同又四良

輔赤星肥前守遠基聟

輔法名淨智於筑州

討死二十八

十四代宇野刑部左衛門

馬守延

文二年六月隈部上總

朝源五九九

冬冬

一朝光

秀

,隈部源太良

對馬守

又次良

赤星刑部少輔武則室

トアリ

十九代隈部又次良上總介應永四年八月二日去法

-朝直

名天峯祥麟葬于平野壬谷山一`明應四年

-隆治

隈部太良自父先早世依不續家

四良

治貞

室

峯山.

介朝直宇野又

法名淨喜葬小

和守

去

四 良

宇野源

治朝

四良大

治行

忠政

-宇野新

宇野但城越前守藤原隆顯室

隆朝

源四良式部大

-隆忠

隈部千代丸式部大

十七代隈部菊池肥後守武士妾

次良

-賴行

宇川四良

兵衛尉

彌太良守平女

-茂治

治員

大森三良左衛門尉母吉田

大森三良

於國討死

宗治

宇野五良衛門尉承久合戰

-義治

宇野四良冠者

月去寂眞居士葬于日輪寺

十一代宇野三良兵衛尉與父同肥後下向承元二年六

業治

範治

宇野杢頭

義治

入野屋判官代

入野屋判官代

正四位下

一朝治

氏治

入野屋藏人大夫

入野屋内藏權頭

俊治

-信

宇野次良早世

廣瀨七郎

入野屋也

關東下向母兵庫頭

藤原仲常女

住入野屋八郎因改

有治

光治

陸奧入野屋莊領居

宇野太良齋院次官

肥後文獻叢書第三卷

時亂顯武功

光治

康治-

大森彌三良

大森小三良

盛治

大森彥三良

左衛門良

之尉

太-盛長

行治

盛家

大森彥七建武

從五位下

伊豆守

高-治

治

土方太良

土方太良

i賴定

-賴長

宇野皇后

宇野駿河守

三河守

-胤治

土方次良

【衙門尉

出羽守

武治-賴仲

大森彥三良

季治

皇后宮大 土方五良

澄智

阿蘇平九良隆

寂運居士

討死行年二十二法名

部丞入道淨堪

王忠治

十二代宇野源四良北國合戰 十三代宇野源太良

義光

義家

八幡太良正四位上鎮守府將軍

加茂次良

介

左衞門,新羅三良

加賀加賀守從

加賀冠者

-賴風

五位下二條院判

|進

官代

二條院判官代

-賴安

奧六八代. 從五位下宇野

宇野源右近大夫

義隆

-賴治

賴弘

【務永法名

法名宗願大

將監下野權守

和國宇野庄>

因是以宇野改

柳津源大夫有光

女

石川三良源基光室

石川成田次良承久合戰

成田太良兵

-光治

光清

鎮西八良九州下向

【依勳功賞賜美濃國市橋

庄地頭職

賴面

池風土記卷六

五九七

源下野守

一葬于吾平山相良寺

智後白河院御宇保元平治之合戰被賴于新院

於法性寺海道與平民基盛合戰終不利因是肥

後下向菊池次良隆直卿遊事山鹿郡蟄居於山

開溫泉湯文治二年八月七日卒行年七十

华野七良齋院

名宋室兵庫頭藤原神常

此外男子四十六人

毛利陸良

「剃髮號義法坊

義朝

左馬頭

從四位下六條判官

良次良

光助俊治

光鄉

河尻太 河尻次良

小富三良

理

光

河尻河尻五良

修

河尻

尉

全衙門尉

坂地大炊良重

光

光時

坂

坂地小次

坂地小次良

賴任

乙葉掃部介

-賴清

井上肥後守

-賴義

正四位下鎮守府將軍

大夫

盛仲重

仲

田村

左衛尉

-賴基

藏人

義仲

田村福原丹後守

-賴遠

有光

柳津源太石川者

石川三良號

-賴房

六代 從五位下肥前守母同始荒加賀氏

-賴成

,從五位下肥前守母但馬守藤原文貞女

有綱

伊豆野右衛門尉

-廣綱

太田駿河守

女

肥後文獻叢書第三卷

二條院讚岐

從五位下田 二條院

冠者左京進 判官代

門滿治大寺次良

光盛

石川四良

石川太良山城守

三河人道

守

「太良裴光光義

石川澤田

石川源大夫

宇野賴弘室

美濃守源國房室

-賴高

從五位下肥前守大夫加州居住

代, 荒加賀陸奥守從四位下上總介落髮賴心入

道母佐渡守繁長女

-賴風

皇大后大進

從五位下上佐守

-賴盛

從五位下柏原伊豆守

河内判官

五九六

-實國

-賴綱

-賴昭

|賴國

-孝光

-賴範

-賴

從五位下

從四位下

-賴資

資金

大藏權頭

下野判官

從五位下右近

正四位下筑前守

從四位下

土岐伊

賴家

國房

光國

溝機大夫

「將監左衛門尉

美濃守

豆花

,從五位下大和

大掾

從五位下戶島藏

福島相摸守

-範弘

-國仲

多田下野守從四位下

——明國

太田下野判官從四位下攝州居住

源兵庫守從四位下

——仲政

太田筑後守從四位下

從五位下

頼家

結果

山縣三良

能勢判官

母中納言不惟仲女

伊豆守

國直

國能

太田出羽守從四位下

-頼政

永壽阿闍梨大王寺別當
二位中納言濟政卿室
源三位兵庫頭入道
賴圓於宇治戰死
小國源大夫藏人
賴行
「從五位下右馬頭
深栖三良丹後守
仲綱
-兼綱
判官
多田左衛門尉
光重
「從四位下
-賴秉
多田下野守

下向賴朝公仕

源藏人大夫關東

六條藏人大夫

撿非違使源大夫

母菖蒲前

正五位下伊豆守

佐守

國基

能勢上

-滿實

-滿季

——滿政

-仲

-經基王

右馬頭太宰大貳正四位上號六孫王人王六

十一代 朱雀院御宇天慶二年己亥十二月

二日始賜源姓西海惡賊討藤原純友等成大

宰大貳賜鎮守府將軍東國下向奧州ヨ治

一代受領七个國7歷大納言橘繁古卿智天

德二年戊午十一月二十四日薨六十四靈祝

六孫王大權現宮

延喜十二年壬申四月十日誕生左馬頭内昇殿

被聽於西州度々顯武功弓馬達者越于萬人貞

元二年丁丑八月十五1日出家長德三年八月二

十三日卒去行年八十三葬多田院號多田左馬

權頭從四位上伊豫守母武藏守藤原敦有女

武藏守從四位下

從五位下

忠重

鎮守府軍將

駿河守

從五位下

陸奧守從四 從四位下

致公

-忠隆

位上母同

兵部亟

左衛門尉

從五位下

忠國

從五位下右衛門督

長田越前

致任

守

上四品上行內昇殿被聽頼光養子下成法名

蓮心

|頼信

小童寺立

冷泉院判官代甲斐守鎮守府將軍河內守從

- 源賢大阿闍梨

美丈丸藤原仲光子身替リ=立後

五代 淡路守從四位下周防守大和守二元卒行年

-賴親

四十八母左京大夫藤原致忠女

【幼名文殊丸七歳時家督正四位下肥前守攝津

-賴光

守二元卒天曆八年七月二十四日誕生鎮守府

將軍行軍六十八

行年二十二實經基公末子

一滿成

太田出羽介早世天延元年七月二十四日去

源次敦妻

下野守

賴季

-滿賴

從五位下上野掾

-賴行

——滿重

從五位下伊豆守

從五位下出羽介

滿快

滿國

|從五位下伊守

從五位下相摸介

一日立太子諱貞明親王藤原長良女母大

五十七代,貞觀十年三月十六日降誕同十一年二月

一陽成天皇

五十六代,諱惟仁親王母藤原忠仁公女大皇大后藤

◎清和天皇

明子元慶三年己亥五月八日落飾素實同

四年十二月四日崩治世十八年壽三十一

葬粟田山置骨於水尾山

一人皇五十五代文德帝第三皇子惟仁親王嘉祥三年庚

午三月二十五日降誕同十一月二十五日立太子天安

二年戊辰八月二十七日受禪貞觀元年十一月十七日

大嘗會同六年正月朔日元服同十八年十一月二十九

日禪立

家老之第一也

源家隈部系譜

隈部家老に菊池

-隆光

兵右衛門

日死

於筑後竹井原被害

天和元年三月三

隆統

新九良彳－新六

吉左衛門久心

八月四日死法名岩積

-親高

親元

安房守嘅永九年

新九良兵部

|貞固親王

-貞純親王

,三品中貞元親王

-兼忠1

兼信

五九三

[卿始源姓

爲淸

從四位下民部

刑部大輔

三木兵部卿

部卿

重之

正四位下

式部卿

三木兵

【太政大臣藤原照宣公智

四品號閑院母藤原仲統女

務卿上總常陸大守後號桃園親王

母橘棘貞女右大臣源能有公智右大臣源

能有公者 文德帝之王子達文學弓馬道

堪能也因是舅之傳武道極軍之奧儀文學

弓馬之達人自武家下成貞觀十六年甲午

八月五日誕生延喜十六年五月七日年

四十二法名貞覺

橘千古女

源宮内卿

國淵

從四位上

三品彈正尹母大宰帥

元良親王

三品兵部卿

皇大后高子同十八年丙申十一月二十九

日受禪天曆三年九月二十一日出家同二

十九日崩治世三十八年壽八十一

石村

治貞書介墓在立

次良新開圖

房守

京大夫安

正少

-重規

代,九良彈

又太良

九女

高瀨刑部武尚室

武詮

,藏人大夫

南主窓梅庵主

重行

備中守葬于西福寺

直

有信

又三良遠江守

房繼

有繼

又次良中務亟

肥後文獻叢書第三卷

飛驒守

[備中守

亮 修

理

大藏

重生

少輔

重則

玄蕃允

三良

安藝守

十一代,左京大夫

-重隆

筑前

主守此 夫

又三良

鑑直

丹波守

法名執門

吉左衞門

隆長

-鎮光

薙髮堂 吉衞門

中

郎叉

統莫

隆安

藤内兵衛

佐渡隆光

守

,又十良

字ァ賜ハリ統家ト改

日阿波國ニテ死八十九才大友義統ヨリ統

十三代備中守周防守號月叟道半元和五年六月二

親隆

親

合志四良伊勢守

城

十二代肥前三良式部允安房守薙髪號道雲隈府在

市大夫

親明

親貞

女

重繼

-親光

玄蕃藏人

市大夫

戰死

熊本親實

統景

親國

藤五良於

彌右衛門

備中守

五九二

菊池風土記卷六

女

木野駿河守武郷室

||武續

四代又次良遠江守落髪西寂

女

三代孫次良 筑前守實寂阿九男八良武豐武貫討

|武生

死後養而令續名跡

【名寂舟居士

|武貫

掃部亮延文八年八月十六日戰死二十四歳法

女

菊池肥後守武時室出家號慈春比丘尼

二代:赤星四良肥前守薙髮寂心入道

遠基

赤星三良薙髪號宗愚弘安元年八月蒙古襲來

〇有隆

「趣筑州合戰蒙古/大將7討捕此時從天下賜

赤星氏又玉名郡之内七百丁豐前國規矩郡肥

前國神崎庄於東鄉臼間庄大津山關築城居住

嘉曆四年丁卯七月三日死去葬于西福寺

八代,彈正少弼安房守

-政繼

女

八代將監貞頼室

|家繼

式部允

代,三良左京大輔法名雲嶽天仙居士葬于西福寺

-爲繼

兼規

六代,孫次良式部少輔

|武次

又次良先父早世

武定

津江三良

元

武興

|武津江三良

|武則

孫三良刑部少輔法名淨喜葬于西福寺

女女

片保田三良武明室

菊池傳来以後 鷹羽 丸篠

右之旗隆直以前に用ひしなるべし隆直以後よりは鷹

の羽也因て大平記箱根戰計の所に鷹の羽の紋の

旗一流差揚て菊池肥後守武重三百騎にて馳参給さ云

春日若宮稲荷三社は代々尊崇也

小名 米良 黑木向鵜紋 甲斐 中武 田爪

濱沙 小河 八代 肥木田 村田 西鄉 山崎

大坪 高倉 武田 藤田 外に出田 村井 廣瀬

菊池家之裔同姓異氏

稲荷大明神

春日大明神

若宮大明神

庶子 右繩之定

左繩之定

嫡子

脇二布掛

庶子

三布掛

幕紋出事

脇四布掛

五布掛

嫡子

違鷹羽

庶子

向鶴

幕紋當紋

左巴

嫡子

鷹羽

鶴紋

三條松

開扇

幕本紋

雪折篠

三龜甲

左巴

亦按するに武經は政隆公自分養子と極るにあら

群臣のはざ不臣の振舞いふべし然れば政

隆公より武包公に系をつくりて正しかるべし然

共今のまゝにて其譯を論じおくものなり

玉へば上の臣は臣下の臣下朝臣は尸にて朝家の

臣の義にあらざる事彌明白也

五八九

吉文本

鎌倉傳故

同竿長一丈三尺或一丈二尺八寸

手鑲長三尺七寸廣一寸八寸

髖長四尺八寸或七尺八寸

同繩之色 青白黑 天地人之三才也

前論する通り也然に同じ藤原さ雖公卿等位の高

家の臣といふ義ならば尸なき姓の人は朝家の臣

にはあらざるや然るに尸なき姓の人夫々の官位

司有り是にても朝家の臣といふ儀を付たるは後
世の誤なる事知べし亦朝家の臣と言義ならばみ
かざおかみともよまんかしあそんとは讀べから
ずあかめしたしむ詞のしるしには源氏物語 木
の巻眞人の註源語梯に云もうとは眞人也眞人さ
は天武の御宇第一のかはねと定め給へり雖然
後世藤原朝臣の盛なりしより第二のかはねと
なりて眞人の人も或は朝臣に改賜ふ様になれ
是にてあかめしたしむ詞なる事彌明也然るに今
は和朝の古言知れがたく姓の源平藤橘と云より
は朝臣と云ば大切の様に心得重き姓は書け共朝
臣を憚る是我國の古言を漢字にて解くから斯く
取違多し悲しむべしまた按するに後世姓の朝臣
名の朝臣といふ事あり職原抄註云三位以上は書
卿三大臣は書公也參儀は雖公卿書朝臣亦
妊朝臣は源朝臣親房の類又殿上四位 五位 書三某
朝臣云は朝家の臣也さ云々此に云姓の朝臣則

臣時平等奉」勅撰ごあり 是臣藤原の制屋と書し

立飛行左兵衛大将臣

代實難に

下に随ひ朝臣を不用公卿の稱出来たり 朝臣を
省き給ふは如何成事にや某朝臣とは業平朝臣の
類是名の朝臣也名の朝臣位によりて書きし朝家
の臣と云義ならば前に巡る如く朝臣さ讀ては義
當らす是皆和朝の古言明かならず義はろびて如
斯誤有り或日別記に云ふ如くかはねはあかめ
したしむ詞ならば人の方より稱る詞然るべし自
書するは如何答日かはねこ云は昔の八色のかは
ねより外にはは無き様に心得る故左様の疑有り今
の俗にかはね直に名さなつておふやけに行る>
ものあり座頭の類也座頭は盲人なれば目しるさ
いふ社的實也然るを座頭さいふ目しゐを座頭さ
云ては義あたらず是あかめ詞にて全かはね也今

盲人自座頭と云又書記せり今は座頭さいへば目
しゐと心得る様になれり又家の首座と云も同
かばね也皆自何首座と書記せり古の尸を自書・
多しくらべてしるべして今を以ていへば座
頭は盲人のかはね也首座は借家のかはね也赤三

君の賜を忘れざる也私にのぞくへきにあらざ
るべき事にあらざるべしかばねに次第輕重あ
て其姓に付て賜りたるは易る事は叶はす依て満
原記は一のかはねの眞人也源平藤橋の二のかは
ねの朝臣也平群山上は六のかはねの臣也大伴は
三のかはねの臣なり凡此類なら然るに日本書紀
やまとの言葉を漢文に譯し給ひしより世人漢文
を本とし假名をよせ物と心得てより國風いつと
宿禰四曰忌寸五曰道師六曰臣七曰連八曰稲置冠
辞考云かはねはあかめしたしむ語を氏の下につ

けて賜れる也依之あかまへ名てふ語を略き通は

せてかはねこはいへりと云々余考るに天武天皇

十三年に八色のかはねを定めて諸臣に賜しかさ

も天武天皇以前に武内宿禰天淳中原瀛眞人天皇

雄朝津問稚子宿禰天皇平群臣中臣連なと有時は一

眞人宿爛臣連の稱は共昔より有朝臣忌寸道師稻

置此四かはねの稱天武の朝に初り前の四を合せ

て屹と八かはねと定め給ふ也かはねさいふ義冠

辞考にいへることとし其姓をあかめしたしみて賜

りたるかはねなれば是を姓に付て書は其姓の

本義を取失ひし事多して萬葉考別記に云

こ の歌など書くには唐字をかりそめの物

萬葉

し 唐文をよむにはこのことをかりそめ

さす依て互に誤れる事古より少からず然るに後

朝臣の

世は唯共處に随ひてのみ この古言を心

慣也一

得んとする故ひか事多きなりこゝのことはこの
の言の本を尋定置てみだりに字になすむこさな
かれこ云々余思に此論和の古書を讀人の心得べ
き事也成程誤れる事あり職原抄朝臣を註して朝
家の臣とある是我國の古言をからふみさばきに
するより斯誤れり若朝家の臣と云義ならば清原
紀大伴平群山上共に皆朝家の臣なれ總て朝臣と
稱へし亦八くさのかはねを煩は敷言るに及ばす
朝臣計にてすむべきに唯源平藤橘の類朝臣と稱
て餘は朝臣さ稱せす是あかめしたしむ詞ゆへに
八さに立て氏次第にあかめしたしむ輕重有て
かはねがはる也が接するに拾介抄官職知要等に
八くさの姓を分て夫々に多く書記せり其外に無
尸姓さいふを又多くのせたり是は未かはねを賜
はらざる姓也遠澤風早品治染島等多有り朝臣朝

廿四代肥後守二十二代能運/弟託磨武安子諸士一

武包

致セサルニョリ高來ニ行レタルトナリ彼所

ニテ卒法名宗岳居士

ニ阿蘇大友屬セス逆意

有終沒落下隈部親氏長野運貞内空閑

重載等相計り武經フ廢シテ武包ヲ立二十四

代トス

武經

始惟長二位也阿蘇大宮司惟乘之嫡子國侍

廿三代重安子繼立三月永正六年閏八月十七日合志

政隆

郡安國寺ニテ自害十九歳法名天仙源居士

廿二代肥後守從五位下永正元年二十五歳逝去二月

能運

二十五日法名儀天明綱居士墓在正觀寺内桐

木實相院號實相院

加賀滿九

於豐後早世二十一歳

イニ武邦文正年中十九歳ノ時

|武國

依謀叛豐福打死

肥後文獻叢書第三巻

八十四人之書以申請養君トス依之

政隆自害武經後按するに鎌足公の下に改卜部姓爲藤原朝臣と

記せるは誤也萬葉考別記に云鎌足公始内のおみ

閉し時大錦冠にて四位に當れり亦云薨給ふ

日に大臣位も藤原氏も賜りしさ云々此事日本書

紀天智天皇八年の條に見えたり其節迄は朝臣さ

云かはね未た出來す故朝臣の文字も後人の書加

へ也孝徳天皇三年制七色一十三階の冠一日職冠

有大小二階二日錦冠有大小二階と云々下略す古

今榮雅抄云昔は絹笠と云物を冠にす品に随て色

々の類あり大職冠なと云は正一位に當る也其後

に一位二位と云事は出来る也と有りまた別記に

云朝臣かはねは天武天皇十三年に至りて賜りて

倉公の時には中臣の逆しさ云々是皆證する

にたれり按するにかはねさいふ事天武記に云作

八色の姓以泥天下の萬姓一日眞人二日朝臣三日

#五代左兵衛督從四位始、重治大友修理大夫義長

義武

子義鑑弟宗麟ノ叔父也天文二十三年十一

月於豐後切腹法名金圭宗閑居士此代二斷絕

嫡子犬房丸ト云

五八六

菊池風土記卷六

忠親

比彌次良 新宮靈社

左兵衛督肥後守三十八早世文安三年乙丑七

月二十八日法名阿山蘇光居士一說永享五年

十一月十日墓在于片角村光善寺位牌-肥筑

大守ト有り

兼士

大藏少輔

英朝

千田伊豫守

-武

高瀬相摸守

十八代左京大夫法名元朝持朝父子不和佐敷市

「六十二薨一說自十二歲出論天授四年於託磨

原引十六歲而合戰得勝利檢者一色治部入道

道猷數千人討取畢此時十萬余騎沒落武朝被

傷義滿將軍my現存/間/法名常朝~賜7

神德寺殿透關道徹居士是也墓在岡田村正善

寺公正案ヌè 一色入道對治/事云武朝公

ナリ系岡誤テ兼朝公ノ事トセリ

五八五

松屋形ト稱孔子堂ヲ建墓在玉祥寺

月ャンルのヘリノ松ノ千々秋是ョリ月

廿一代字藤菊丸明德二癸壬年十月二十九日四十五

重朝

逝去法名智顯梅屋正英文明十三年八月一日

萬句丿連歌興行月松/題 發句

宇土,次良太良宇土掃部助忠豐養子號彈正少弼

爲光

-爲房

磨 又次良號爲山號大膳大夫

政隆

能運立者

大夫將監

-爲安

肥前守 始政朝繼

重安

次良三良號

戊申十月二十三日薨法名尖活仍勢居十年五

十九墓在玉祥寺隱居之後居于板井碧岸寺

爲邦

次良肥後守大正元丙戌年三十七出家長享二

重

武明

十良左衛門佐相摸守

兵庫頭

武弘

三良東兵庫頭

-武德

左京大夫享德三年九月十八日與姪爲邦和睦

良山討死

-爲安

養子肥前次良三良寬正六年四月二十日於高

依謀反逆陸沉

澄安

武照

肥前守 筑後守守護職之内

一說於筑前爐形討死年二十

-武安

肥前守蜷打合戰討死

原戰早世

歡喜丸

武澄

肥前守 ,十四歳致大保

武世

余五

|武方

六良

アルヘシ

-武光

豐田十良按前出ル武光ノゾキラ

武吉

七良於兵庫與楠正成同戰死

隆舜

大圓寺阿日房與父於博多戰死

-經重———武

肥後文獻叢書第三巻

駿河守

叉次武相

高瀬十良

爲房良臣

良

右馬助法名阿元

次良自十二歲出軍十六託磨原合戰肥後守中

武朝

務少輔右京大夫左京大夫明德四年天下一統

又肥後守又右京大夫應永十年丁亥早世四十

五始興法名元徹又常朝

乙卯年八月勸請阿蘇北宮於菊池今之北宮也

法名眞傳居士此代築守山城正二十二丁未

年云

十六代武光嫡子肥後守志行大廣早世三十三永和四

武政

空禪房

一作日開蜷打討死

武義

深川彥四良法名自關

真武

守守護代

武相

武楯

武國

-武

相

十良肥後守

十良

筑後守

武明

中務少輔

修理介

五八四

菊池風土記巻六

ト

諸國及歸寺小野之櫻ヲ見テ 袖フレシ花モ

十代次良二十一歳出家法名祖禪寂照遁世之時廻

武士

十三代次 良肥後守任左京大夫建武二年上洛氏叛

|武重

逆之時初箱根山合戰從此三役初執權隆香侍

所經村守護代武村興國三年八月三日死去葬

于輪足山號歡喜居士

十二代字正龍丸次郎法名寂阿元弘三年三月十三日

武時

「奉詔於博多戰死平英時陣二打入同賴隆討死

按肥後志云木山/城迹正敢寺廢迹山上-7

y城野彌次郎親政城跡下云木野鄉咭作機嘢入

十町之領主也親政、菊池十二代武時入道寂

阿五男城野對馬守武茂之裔也親政隈部但馬

守親永妹聟ナリ

十一代太郎八良字永德丸與八良爭家督之後就得利

-時隆

爲叔父武經於關東分口時年十七

八郎に好か

戰死

重富與市建武二年武重上洛之時於淀渡

武村

家光

之高名爲先祖

五八三

木野殿

五良

武茂

兼茂

武貞

-武鄉

同

武信

|宗一丸

號中村

「謀反討死

兼賴

-貞臣

託磨又次良

改攝津守

武規

豐前守

於筑後本 死法名永綱

|武

託磨又次良

後之眉目也

阿北殿

名空印又空

賴隆

武敏

九良陣命討死蓋時

判官法

叶五代肥後守豐田十良奉勅奉屬一品式部卿親王九

一武光

州一統靜謐二十四年九州都督將軍云々 武重

同母兄弟三人武時四男墓在于正觀寺應安六

年十一月十六日死去法名正觀寺殿九州都督

武光聖嚴大居士

-覺佛賴隆

肥後文獻叢書第三卷

城式部 同伊

爲昌

同越

爲冬

豆守

前守

十代

|武房

同越前守

重岑

六良

|有隆

|親冬

重照

前

居士

十良大夫

道威大

居靈東田日二天|十

道之石葬二九大

士峯南郡月正良

大號山飽九十

十良大夫

天正九年十

|隆顯

|隆冬

久基

出田刑部

出田

政冬

重基

出田祖

式部

出田

出田宮内

親基

左衛門武房

少輔

輪足山院主文永弘安蒙古合戰之後薙髮

【 號覺佛爲輪足山院主

武門

十良

|武經

八良與時隆家督爭論於鎌倉而亡

——武成

長瀨七良

|武本

-道武

堀川三良

|隆盛

孫四良先父早世仍不繼家

五良

赤星三良蒙古合戰有高名自將軍賜幕紋赤星

‟祖有系嘉曆二卯年七月三日葬於西福寺

若宮四良

此間一有重政次良

所武法一經村

彦四良

四

彦

|隆興

隆幸

一兼雄.

式部少輔法名元勝筑後守後職中三瀬戰永

秀周

享十年十一月十一日高名顯于都鄙云云

長門介

宮内少輔

三良

師周

孫三郎

長門介

又四郎

常陸介

·兼幸

三良

邦幸

-秀世

三良

六良太良

又三良

-經幸

上總介

-師世

彥三郎

新三郎

法名大謙

惟幸

小三良

四郎

-資幸

武幸

三郎

|代大 良

重名 待空

下總守

下野守

九代

|隆泰

隆吉

朝長

早世

西鄉太郎

越中守 越中守

紀伊

右

加惠九良

介

一隆時

城祖城六良 同六良

-隆經

隆頼

太良

小野播摩守

-經鄉

本鄉

法名延隆

-實照

四良左衛門

菊池風土記卷六

豆守

隆顯

同伊

家督

武賢

常陸介

昌世

對馬介

八歲

溝口戰死二十

武秀

新左衛門

武朝朝兩代之執權

治部少輔法名大中

-隆光

號小野崎五郎一云九條十良

定直

伊倉七郎號藤田

家隆

大夫四郎

-定基

江良四郎

【人居處/跡力

-隆親

片角三良今下片角村二三良丸下云所,此

「義直女承久之時合戰

【因不繼家

I 隆繼

能隆

彌次良大友豐前守司

小次良先父死

八代

黑木祖

隆政

-隆俊-

黑木藤兵衛尉

八代五郎

-直方

合志四郎

|秀定

一以定作直砥川三郎於壇浦討死

七代 孫次郎後鳥羽院奉仕天下武者所承久合戰比

-隆定

肥後文獻證書第三卷

隆

三良 隆朝

隆重

-隆香

隆平

無子父子之契約

近江助自元中五年七月八日

武賴

但馬助

年十一月廿二日溝口合戰討死

|隆里

孫四良安藝守法名令貞應永三

則勝

武重武光兩代之執權 弟隆定繼

伊豫守無子

孫四郎林安藝守

筒突川戰死

-定氏

彥鶴丸 蛇塚三郎

-隆氏

孫三郎

無子

隆光

左近三郎

九郎

一爲隆光兄

父子不和

爲隆朝兄

朝定

武益

大夫

一

三良三郎

藤林原【養爲子初與爭能隆立

林原余三母關東小山田別當在重女畠山重忠

-經道

西入道

信

親

經-小次郎

出田

立田

經綱經世

小太郎

北國合戰討死

五郎

-經秀

村田五郎 井芹 立田 出田

-經遠

琢磨四郎

-經家

藤田三郎

-經長

天草兵藤大夫

四代:鳥羽院武者所

迫間五郎

隆明——經綱——基綱——隆倫

-經明

合志五郎

長坂經·五七九

【甲斐中武始è

-隆長

永野太郎北國合戰討死此代my十四代米良

菊池九郎肥後守壽永元曆比安德天皇奉仕從

此代鷹羽幕紋始è阿蘇參籠時鷹羽土器上降

落者二因爲紋云々阿蘇十二宮大明神歌曰7

サクトモフカクタノメャ菊池川阿蘇ノケフ

タエヌカキリ

-隆直

六代,此以前紋日足

-經泰

高倉三郎

經繼

|經能

佐野原四郎

三郎

-經政

佐野太郎

次郎

[赤星祖

|經俊

經親

七郎

一經直

五代,鳥羽院武者所

-經遠

出田三郎

隆古

山崎伊豆守

少輔

-隆邑

隆任

九州武者所

刑部

山崎左京大夫

太郎

基奇

-隆房

基宗

兵庫太郎

山崎阿波守

四郎

山崎震社大明神

一作西鄉太郎

隆基

隆秀

政隆

大夫將監

四郎大夫

池下向 大夫將監

-則隆-

一代人王七十一代後三條院御宇延久二年庚戌菊

政則

對馬守後朱雀院御宇始武將賜都住居

高木祖

文定

藤原中納言被流太宰帥

肥前守

|長房

參議正三位太宰帥

|師家

右中辨從四位下

良員

肥後文獻叢書第三卷

隆 ·安頂

三郎禪師

-通俊

兵藤大夫

-經頼

三代 兵藤次郎

-經政

山鹿太夫

固松原防戰時賊大將綱不畏箭鋒仍射

足裏討取爲九州兵頭因被下宣旨賜錦

旗訖於出田村崇尊若宮祭之

二代若宮 菊池三郎肥後守寛仁年中異 襲來時

-經隆-

着紫糸鎧辨笠乘白葦毛馬打望博多警

經保

|保隆

次郎

次郎

小島山崎伊豆守殿

能 八月十日

判

承如件

能隆曰一院輪宣今日文永二年乙丑下着頂

戴畢一家分國各不分遠近新紋鷹羽嫡々相

五七八

-道兼

道隆

-遠量

-兼道

伊尹

武藏坊西塔別當三十八歳

-辨慶 義經武士文治五年四月廿

八日於奥州衣川戰死

道長

道綱

號謙德公從一位攝政大政大臣母武藏守經邦

女花山院母或說康平三年八月流於土佐國

-賴通

-義孝

從五位下權中納言母中務卿

代明親王母

忠實

行成

關白大政大臣法興院入道法名如實

-伊周

,氏長者攝政關白五年永治二年七月二日死

五十二藏

-道賴

大內藏卿

||隆家

|周賴

,右大將內大臣攝政關白長德元年四月十四日

薨三十三歲稱中關白

母藤原仲正女關白六年號室町殿中關白

良顆

粟田關白

正二位中納言宇都宮小田祖

兼隆

|經輔

正二位

太宰帥正二位權中納言伊豫守源資女

永保元年八月七日死七十六歲

正三位權中納言

長久五年正月朔死

太宰帥正二位中納言

權中納言

歸鄉之後號儀同三司

道雅

三位中將

正二位前内大臣左遷太宰帥

忠通

法性寺關白

知足院

關白

通

師實

·師後二條

京極關白

宇治關白

大納言

御堂關白關白三十二年六十三歳號法性寺

仲

|時

女子

—基經

——國經

良房

|良房

長良

肥後文獻叢書第三卷

中納言從二位

-國經

【贈太政大臣

氏長者從一位攝政大臣號忠仁公御女清和天

皇母天皇幼時攝政貞觀十四年九月十四日死

六十九歲稱白河殿今稱法勝寺者此也

大藏大夫

從一位攝政關白寛三年正月十九日死五十

六歲關白職之始也今稱極樂寺者此裔y號

昭宣公

贈太政大臣 為雷所擊震死

從三位宮內卿

正二位左大臣

別當

一田島湛宗——辨心

熊野

一定成

船中將

左大臣

日良祖 陸奧守小

實方

一師朝元

尹

定時 正小中將

四位下

二條

紀州

一師氏

「冷泉圓融二代外祖攝政三年一說年四十九

小二條左大臣

|師輔

右大臣正二位天德四年五月四日薨五十二歲

||師保

左大將淸愼公母右大將源能有女

出家

臣

賴忠,

實賴太政大臣七十二號小野宮殿

太政大

女子五人,

七十歲號貞信公 稱小一條殿 貞信公封信

濃國贈正一位又號五條殿

-忠

左大臣攝政關白二十四年天曆三年七月十日

八二 ハイ 二

五七六

菊池風土記卷六

實聖武之叔母也豈以叔母爲妃哉是必有誤

-光明子

聖武妃孝謙母按ヌè二依之下六光明子

宮子

文武天皇妃聖武母

[號京家

永谷

麻呂

-濱成 京家䲢左京大夫正三位

動雅大臣號靈龜二年

五月三日渡鬼國鬼神

退治

【正三位

|宇合頼鄉

清成——種繼

式部卿正三位號式家

中納言

式家祖 北家雁正二位左大臣贈太政大臣近江若狭中衛大將

-房前

參議從三位氏長者母右大臣嫡子姫天九年

四月十七日薨五十七歲生於讚州房前津因名

以房前號北家

伊東祖 從一位

正二位

|武智麻呂

繼綱

右大臣

右大臣正二位 右大臣

南家祖

|夫人五百重姫同

夫人氷上姫天武天皇女御

豐成

【號南家永手

-清河女子

-魚名

十日十仁久阿大賜|七死月三女部臣太 五六年弘常母政 -御楯

-眞夏

冬嗣

五七五

フダラクャ南ノ岸堂立テ今ブサカエン

北/藤波

日野氏長者正二位右大將左大臣號閑院

【 南圓堂 永繼女南圓堂建立之時工/下/

明神歌二

日野先祖

左大

民部少輔

濱雄

家宗

參儀從三位

參儀

從五位下

長長岡

將

【參儀從三位

岡河邊正二位左大臣

天平四年五月十七日死五十二歲

内應

正三位大納言賜太政大臣

歳大

大將

左

左大臣

從三位

家依

三起

中守

儀

正一位

中納言

參大納言

正二位

小黑麻呂

從五位

從五位下

葛野磨

正二位

鎌足

二姓之元祖

右大臣卜部中臣

願中臣寺

糠子大連

大連

御食子國足

清光寺本

小德冠

始而賜中臣姓

常盤大連

可多能祐大連

,人皇三十代欽明天皇御宇

阿毘古大連一眞人大連——賀麻大夫——黒田大連

大小橋臣命- 阿麻毘舍命———音穗命

姓而部始天賜四々 大

臣命云々

-國麻大鹿島命- -臣挾山命——跨耳命

卜皇代人臣又

又稱雷宇哀十云 雷

大

御仲皇命 稱

-梨津臣命 神聞勝命 -久志宇賀臣命

肥後文獻叢書第三卷

氏長者大納言從二位右大臣號淡海公母讚州

海士氏號後天氏改賜之養老四年任太政大臣

同年三月三日薨六十二歲自異邦歸時讚州房

前津二滯妻海士生四人之子都八人讚州海士

子四人都十二元

|不比等

僧也

一定惠

大和尚入唐道傳法相宗多武峯本願興福寺住

小山中

名代

-久多大連 垂目大連

正二位內大臣大錦上建立多武峯孝德天皇大

化二年任右大臣天智天皇八年十月十五日任

內大臣卽改卜部姓爲藤原朝臣內大臣於常陸

國鹿島産春日大明神藤巻之鎌7持 産屋二

才 1.授之所治納仕賜故號鐮足内大臣大織

冠一名鎌子内大臣十月六日薨五十六歳藤原

氏神三社也春日大明神若宮大明神稲荷大明

神討逆臣入鹿大臣以鐮天皇賞賜大織冠云々

山錦上

五七四

当沙風土記巻六

一木庭村に在り赤星氏豊後勢と戰し所さいふ赤星村

負其伊倉村へ落行隱る者あり今伊倉村に赤星氏

あるは其末葉さいふこ土俗の説尋ぬべし

陳床

|津速彦靈命

按するに右之外城何之比破壊したる哉考へからす〇天御中主尊

雲上城は天正十六年間五月 清正公當國に下り給

し時加藤僖藏雲上の城城代こそ成れる當 御代に

およんては隈府の宗善右衛門抔より見つくろひし

たるよし其比に至りては破壊し塀計も残りけるや

島原陳の後こぼちに成りたちといふ十八外城の名

は雲上城よりして申たる事成へし

一林原與三代々居す十八外城之内

打越之古城

參考太平記案するに此越前守は親にてはあらすや

菊池彦次郎は武義さ見へたり又菊池系圖にて時代を推

しみる時は越前守はさもにてはあらすや系闘には

親廉

親な豬へし

下魂日日萬日魄種五七三

恩智大明神

大御食津臣

伊賀津至命

河内國高安部

天宇佐天津臣命

岐命

天照大神命爲天下八百萬神頭領云々

一天兒屋根命

大和國添上郡三笠山春日山大明神也

皆是獨化天神

奧居登魂命

人臣蔵神以上七代

-天八百日魂天八十日命

命

空

虱

天合魂一天三命

日命火

伊勢豐受皇

大神

國狹槌

天八下魄H俘

國常立

地

北家藤原菊池系譜

世系

菊池風土記卷六

を焼すて役所堅固に警めける玄長夢にも是を
しらす暮さ幕に二十日間貳百餘人を引具して菊池
か陣へそ忍ひける武百人の者堀の中橋を越えて陣
地へ入て此方彼方に火を放て時の壁をそ揚たり
ける其時菊池か警固の前後の橋を刎返し前後に
射手を立並て鏃を描くて射させけれは忍の者は周
章騒て掘へ飛入矢に當て一人も不殘討れにける
と云々評して日此等の合戰本書に不出さ云々是
は康安二年正月二十五日也さ云々菊池夜討の為に
構へたる陶壺の陣の猫といふ事城越前守か謀なり
といへり是必用ひて利有へき事也異國なさには陣
法有間敷歟衙陣などの心持にてや爲出けん珍事
なり故赤松滿祐のせられける圖をみて今此にしる
すものなり口傳にあらすむは具に難知からん歟
籠城其外城取にも尤用へき事也大形の法は六拾間
程にして善しといへり但所によりて大小の異は有
へしといへり是敵の忍を味方の忍に仕なす所なり

作て構へけるに夜討の有らん事を考へける間陶

壺の陣の備を作りて内々用意したりけれは毎夜か

又日菊池は本より勇謀ともに達た

武光公

向城

を此備は四方皆堀なり晝は壺に居て用事を辨し夜は

陶に居て警固をいたす此儀をは味方の者にも具に

しらしむへからす若敵の忍て入たらむ時は四方の

番に示して夜必火事又は敵の忍ひ入て騒動する

時は急に四方の橋を刎返すへしと法を定て敵の入

る時に如此して一人も不殘討取へき爲なり毎陳

此備へ有へ〱俄之事堀の備ならすむは逆かも木に

て口傳あるへし

亣本陣

陶

亣亣

▵是非の分別な

目傳すべき事也

能

一木庭に在り城氏代々居す十八外城之内城越前守は

智謀すくれたる人にて武光公の代に軍功多かりし

-菊地大友.

さ承 するに太平記評判日戦之阪

軍之内 長者原の合戦

に初は探題方利を得て菊池彦次郎の勢三百餘人討

れて剰へ彦次郎も重手を負ける所に城越前守五百

餘騎にて荒手に成て戰ひければ小貳筑後次郎同新

左衛門を討その外松浦宗像大宮司か一族若黨四百

餘人討取たり是城越前守が勇智謀に因て負たる合

戰も又勝に成り味方に善き大將一人あれば初負

これ共利を得る事は如此なり越前守は太

宰府にて小貳大友等さ戰の時松浦黨之者共が許へ

山伏鱓借遁世者なんこを遣して其軍利を得たるも

のなり又今越前守謀にて長者原の合戦にも利有る

所也軍兵は先菊池彦次郎は五千餘騎探題の勢は

上林之古城 今は城林さ書

一今村鹿島氏代々居す十八外城之内

一四丁分村に在り惣谷平山姓代々居す十八外城之内

戸崎之古城

之

黃金塚原之古城

五七一

し

七千餘騎也多少の勝劣二千なれば懸合合戰之時は

百騎にても多き方利有ものなり然るに越前守合戰

の評定しける時自分勢五百餘騎をは草に伏せて奇

道を廻りて揚子の山の方へ備へさせ菊池彦次郎を

は二千餘崎にて中の手に備へさせ宇津宮岩野麗子

木民部大輔下田帯刀石山宮内川野邊次郎稲佐治部大輔谷山右馬助島津上總助齋所兵庫助高山民部大輔以下左右に備へさせて探題か寄るをまちた!の相岡には城越前守奇道より軍の機を見て時節をひ貝を調ふるき合戰すへし貝を吹事なくむは敵たさひ入さも櫃をつき並て鎗食を作り控へて待へし貝の聲を聞て一同に馳込て合戰すべし戰の最中に敵の後より撃て勝利を得んとはかりける彦次郎相岡を待たすして合戦を初るに因て敵に小有る也其戰のなる時に揚子の方より馳出して中軍を駆ける間大を繋事を得すして戰大全ならす是等は合戰の大事也城越前守は智謀すくれたる士なり菊池彦次郎は相岡を待たずして仕損たわごも越前守が手段に依て勝利を得る事かくのこと

増永之古城

一加惠七郎代々居す

西光寺之古城

一蛇塚九郎代々居す十八外城之内

板井村の 蛇塚村に在り 今大楠樹ありて 遺趾存す 石淳土中に埋

りたるか 所々に顯れ鱗吹す 北東は竹樹なり築地の形あり及北東

は菊池川を帯ふ 馬渡りは此大河あるにて附きたるか 文政十三年

三月廿三日に到り看る 川北に高島村にて一水を隔て、南北を分

てり城墟は此砌老農仁九右衛門さ云者の茅屋の軒を去る事共間三

餘面内は今大道にて全く貢馬往來の地南は蛇

なり

馬渡之古城

一合志郡板井に在り關部家代々居す十八外城之内他

郡に在りさいへごも十八外城の内故記之

轉訛にはあらすや

(後入也)

山下迄拔

西り見る 碧巖寺

ぁ軀尾之古城

後

三年三

甘

一出田村に在り出田太郎代々居す十八外城之内

古地之古城 今城跡を俗に鬼石さ云

一茂藤里村に在り菊池七代隆定の五男伊倉七郎定直

受持之城跡十八外城の内

元居の古城

なし此則菊池十八外城の内原田五郎受持の所なり

肥後文獻叢書第三巻

跡 俗な高山椎木大なる物數本あり此處を城

ふ

口碑に存す山上

由此山の南の品を

甲云尾さ一原村奥山城在番年々替る警固重き所深葉山之近所

十八外城之内菊池家没落以後菊池庶孫細永藏人と

申者蟄居子同又次郎代遊獵之留守を窺ひ豊後よ

り徒黨之多勢押懸致燒討,弟兵十郎討死攸之叉

次郎原村之内尾村 今細永村に引出其後居住之者無

市成之古城

一柏四郎代々居寸十八外城之内

掛幕之古城

一雪野赤松嶽に在り其所砂地にて赤松多し居住之人

未」開十八外城之内

五社尾之古城

一市野瀬八郎代々居す十八外城之内

葛原之古城

一水次太郎代々居す十八外城の内

神尾之古城

寄る場所なれば年々に番主替る共才有

給ふさ聞ゆ

を置

一水島村に在り十八外城之内此所菊池氏を攻る者能

臺之古城

一西郷太郎代々居す十八外城之内

菊池風土記巻五

にては一

その時迄は菊の城に居給ふ雲上の城

の木戸を守る

いまだ出す誤りさいふべし雲上の城といふは

將軍の宮居ませしに因て名(守山と云ふは所の

によつて名(貞治六年より寛政六年迄四百三十一

年になる菊池二十二代能運公家督相續にて明應九

年没落の後宇土彈正爲光在城文龜三年能運公爲光

を殺し隈府へ還住永正二年二月能連公売す嫡流断

絕其後政隆武經武包代々居城永正十七年より二十

六代重治 居城天文三年熟義武没落の後大友

義鎮より城代として赤星重隆を被差置」と見た

b天文二十三年義 武自殺之後肥後一圓に 赤星道

雲に被宛行居城相道牛在城天正六年四月十八

日龍造寺隆信是を攻め道同子息親高より城を受

取りて隈部但馬守親永に賜ひ其後島津兵庫守殿隈

府の城を攻られ親永一旦落城すといへども又歸住

天正十五年七月廿六日佐々成政これを攻め取り同

十一月秀吉公より蜂須賀阿波守殿被差下同十六

年閒五月加藤氏の城代加藤傳臓を被差置其後一

統御觸有之破却に成りたるを云

池隆直が雲上の城と云々隆直公は菊池六代也

一染土村に在り鎮西八郎爲朝の城跡といふおほつか

五六九

鷹取古城

一西原四辻地藏より北に水堀あり此堀昔は北原大琳

寺に通り大堀に面有りさぞ夫故此原内にては此

堀を埋め上ヶ田さなせし分をその下ヶ名を堀の

さいふ余おもふ菊池氏の時は城外の隍に而有りぬ

べし今井手と成り水通る所有るは是築池井手出來

たる後の事なるべし

城外堀

一雲上の城の追手門は今西原の四辻地蔵の遊と云然

れば町は追手より内見ぬたりおもふに町は菊の

城の時より今の古町に而雲上の城出来たる時も町

をうつさずして追手内になりたる歟

追手門

一高野瀬村内北より南に通り今にその跡残る大道に

そひて卑き品の所これ隈部氏の時出来たるとい

ふ又二郭の要害とも云今河原會所と正観寺村長兵

福屋敷との間西より東守山村へ通り深き隍有り嫗

がふさころといふ

城内隍

且陸軍参謀本部にて製せられたる地圖に基き更に方位図を製して此に附載す

+

内

田

·黃金塚原城

•元居城

4.

菊池

上林城

神居染雪隈

發深川東城赤星姓代々住

● 葛原城、市野瀬八代々居

● 雪野赤松嶽五社尾城

●染土鷹取城'原田五郎代々

● 神尼城、水次太郎代々住

●水島臺城六年々在番替5

● 増永城、西郷太郎代々住

●西光寺城、加恵七郎代々住

●打越城、林原與三代々住

●馬渡城、蛇塚九郎代々住

9板井亀屋城´關部家代4住

●古地城、出田太郎代々住

G今村戸崎城"鹿島家代々住

●木庭上林城、城姓代々住

●慧谷黃金塚原城、平山姓代

•古地城

亀尾城

•馬渡城

打越城

原村真山市成城在香林

掛幕城 柏四郎令居

編者日右上頁に示せる十八外城方位は大要を示せるものにて共の距離遠近等も見

るべからず依りて其の外城廻りて實地踏査せし木下重三氏に就きて地間ひ

● 隈府雲上守山城、牛城本丸

菊池風土記巻五

住

城万城

城城住

住

居

城

城住城番

城

々

々

越永

代

打

す三

林馬 渡 城

蛇塚九郎代々住

島

住板井關部家代々住

増臺

年水

龜尾城

城

古地城

山田太郎

々

代今村鹿島家代々居

西郷上林

木庭城姓

惣谷平山姓代々居

黄金塚原城

替

川

深

居

伊倉兀-

居代

隈府城居

询

牛八十

丸

雲上山守城

幕

3 城城 城居

春代莖

掛有

一菊池の十八外城の稱は守山の城出来て後のことな

るべししからざれは外城十八番にたらす

城墟

菊池風土記巻五

記に左圖の城外々在太郎 代々加恵七郎代々住

西光寺城本七代々原與城住城城居城雲上城 八百九月古城絶頂に郭域

の石玉垣出來(後人書入也)

一高野瀬村正觀寺村雨所の夜に在り又守山の城とも

いふ今隈府の城跡といふは是也菊池十六代武政公

南朝の正平二十二年に是を築く4期順治六東は大柿

村の下牛縊谷といふ所より土豊水村の下をさかひ

西は立石村の下牟田と云ふ所より深川村の下今熊

本に通る道南は菊池川を限り北は迫間川をかぎる

此分城内といふ一の天守跡は堆く今に牛馬を上げ

す一の天守より南うは坂を隔て月見御殿より東に

松原有り此所二の天守跡と云ふ以前は南北一面の

地形なりしを隈部氏打入のころ城の拵をほそめし

時處々堀切出来たりといふ今のうは坂道も其節い

たく切くづせしにはあらずや盛衰記を案するに菊

五六七

一左近將監藤原則隆公肥後を賜り延久二年七月十五

日此地に下向有て同郡深川村に城を築き是を菊の

城と稱す十五代武光公迄此所に居城今深川境北宮

の田の中に一丁餘の畠に高く四方堀にて石垣築き

廻したる所有り今に天守跡といふ延久二年より寛

政六年まて七百十四年になる

菊の城 政八酉五月二十五日銘石建(後人書入也)

一今村に在り首兩手は木にて作り腹にゑつりをかき

土にてぬり立たる座像の大佛霊験有り俗にて土阿

彌陀さいふ先年強風の節境内の木吹倒堂打崩し佛

の首にもたれ御頭少しゆがみける故田尻氏是をぬ

きて見しに建立年號等有之尤蟲喰て分りしを

漸分りし所迄堂の本の中柱に書記し置しを今度哈

味せしに一向に煤氣にてしれす猶又御首の内も同

土釋迦

一雪野村に在り寺號計申傳ふ

一道場村に在り遊行派之由申傳山中塔多殘る

妙觀寺

願行寺

一玉祥村に在り正観寺に菊池十九代持朝公の書翰有

るを見るに彝選大姉と有り持朝公の姉君と見えた

此は墓所にはあらすや

一木山村に在り寺號計申傳開基年月開山等未聞右

三箇寺隈部親永赤星道雲と攫矢の時に道雲を調狀

のため將軍毘沙門の秘法を一七日執行頼れ寺也

其時照蓮寺の僧を覺さいふ隈部軍記に見ゆ

彝選庵

肥後文獻叢書第三巻

一下河原村之内神前に在り本尊阿彌陀如來開基之年

月開山等未聞

神前山正光寺

一今村に在り本尊十一面観世音開基之年月開山等未

聞片角村光善寺の隠居所と云傳ふ西の村の前畑

の下ヶ名に今寺といひて古の寺領地と云傳隈部

系圖を見るに宇野次郎家老法名周禪居士今村觀音

寺に葬る有之時は妙音の寺號は申傳の誤り歟

昔は境内も廣く古墳有るや今に残る墳墓の條

に出る

一妙見村に在り其跡有て音號計申傳ふ

普門山妙音寺

妙福寺

前吟味せしに是又虫喰てわからず建立年號文禄之

比歟之由申傳ふ佛體損じたる時は俺を諦て誦し

其譯を告てぬり直す

一西鄕村に在り其所を今も村のあざ名に地藏院と云

一同村に在り本尊彌陀開基之年月開山等未聞

地藏堂院

名月山正光寺

一加恵村に在り本觀開基年月開山等未開正觀

寺下土俗の説に菊池九代隆泰の弟加恵九郎隆時の

建立成るべし境内にいちしるしき古墳あり此隆時

の墓と云う

一瀬戸口村に在り寺號計申傳ふ禪宗にて有しと云

得月山買石寺

一水次村に在り本尊藥師開基年月開山等未聞

國合山常福寺

獅子山隱獅子威 象王峯頭象王牙 夜來咬碎虛空

骨 叶作山頭古木花

於天童山作

地獄顚倒一念中 一念廻向本來空 空々寂々非他

物 樹々松靑躑躅紅

に其所を比丘尼寺と云大智和尚の詩二首左に記す

溫泉山

願主阿蘇山行人さ有り其中

經隊あり

五六五

妙音寺

一大林村に在り寺跡山中に石壇等今に在り開基年月

開山等未 聞

像あり木野親政菩提寺也碑有り折て不可読

照蓮寺

折和り

一木山村内に在り大智和尚の開基和向自作の觀音の

正教寺 又彰教寺とも書け

一隈府下町萬屋八郎兵衛裏に當り観音堂あり此れ

跡なり今に下町を道場町といふ下の田の坂を道場

坂さいふ

道場寺

一東迫間村に在り本尊藥師開山等未聞 今堂より東

の方是昔の寺跡歟

于時永正十年癸酉十一月十五日施主敬白

盤霊山高徳寺

法華一千部供養

快宥

預修塔婆一基

此分以前の境内と見ゆ西郷太郎の菩提寺にてはあ

らずや古墳多し

天正十六年正月晦日

右之分全知行不可有相違之狀如件

合貳丁 七反

壹丁壹反貳丈 田方

一壹丁三反三丈 田方 一貳反貳丈 高方

施餓鬼田

品方

菊池郡長福寺分

一北原村に在り本尊觀音開山等未聞今は村内に在

り氏佛なり昔の寺床は北原の面井手の傍圓楽坊の

墓有る所也下名を寺床といふ昔は天臺宗後に禪宗

成り正観寺下に屈す長寺に有所の書翰左に記

す

長福寺

一原細永村に在り本尊阿彌陀開山未聞

大龍寺

一同村に在り本尊阿彌陀開山未聞

注福寺

一同村に在り本尊藥師開山未聞

通光寺

號を天徳寺殿さいふ

一班蛇口村内鳳儀村に在り正中年中大智和尚建立大

智和尚は當國宇土郡長崎村民家の子幼名を萬仲と

いふ七歳にて渡唐三十四歳にて歸朝菊池武時公の

歸依僧也寺床當時大なる古木欝々として霊地と見

わたり寺床より西南の方小高き所塔有り銘に云明

暦六年正月廿一日當寺九世峻其側に圓なる自然

石有り無銘俗説に大智和尚唐土よ 持参の石さ申

傳寺跡より一丁程下に毀れたる古塔夥敷有り俗

鳳儀山聖蔞寺

日

榮宣書九月三判

南福寺

高木刑部殿

吉良藤内殿

坂田將監殿

從兩人之地之内肥後割四段つゝひかへ分に申定候

長寺分

南福寺榮宣

重勝書刊

天野助左衛門

五六四

菊池風土記巻四

一市野瀬村に在り本尊藥師開基之年月未聞開山は

正観寺第十四世兩溪智陽と云十刹の位に昇り正觀

大通山聖知寺

一宮園村に在り本尊藥師開基年月未聞

長福寺

一夜間村に在り本尊地藏開基年月開山未聞

永福寺

一生味村に在り隈部氏の寺と見ゆ

祥安寺

一木庭村に在り本尊觀世開基年月開山未聞禪宗

の古跡城越前守建立さいふ今庵と成る

養林山峯泉寺

錬室金大和尚

桑林山光九寺

康正二年子八月四日

源忠直書判

一此方當知行之内雪野村に小桝木田一所三町五反三

畝坼永代奉寄進者也後代之子孫以來不可相綺仍狀

如件

目出度奉存候

一岩本村に在り今右衛門と申者の裏に當る本尊地

藏開山等未聞 合志丹波守の墓有り丹波守重遠法

五六三

天德寺

同村平山に在り本尊地藏開山等 未開遺跡に知

れて下ヶ名を寺山さいふ

眞福寺

岩下に在る也

四丁分村之内

一四丁分村に在り 開山等未聞古の本尊阿彌陀高四

尺程其後延の比より今の二菩薩 勢至 寄進さいふ

西福寺

一同村に在り寺號斗申傳亢遺跡いちじるし平野村の

興福寺是を取立たるさいふ

一金峯村に在り寺號ばかり申傳

興福寺

一高野瀬村に在り寺號ばかり申傳

眞徳寺

一雪野村に在り寺號ばかり申傳

忠圓寺

日輪寺

寺に再住と云

御屋形様2申上候處一所,不殘無相違御寄附之段

自然此曲をなす時は怪異有りご至て光寺にて曽我十香切は舞も浄瑠璃も共に禁す 一階院内一丁七段井山野之事

に

寄進默左に記

一西迫間村に在り本尊馬頭観世音開基の年月未聞

菊榮山光善寺

立開山は大和の僧と申傳寺の西古の卵塔場朝

公の墓竹林の本に在り外に四五段の墓三つ有り無

銘貴人の墓なるべし此寺の寺領佐々成政の代取揚

と成る今村内に正善寺田と申て有と承る

一片角村に在り開基年月 開山之名未聞の像眇

神嶽山正善寺

一岡田村に在り本尊釋迦如來菊池十八代兼朝公御建

比持噺されし僧にて赤星船渡し此僧の願立さいふ

桑林山光九寺

一袈裟尾村に在り本尊大日如來古北福寺の下宮さい

前後せりと寛保の比成就院さ申僧暫在住

ふいか、今辻堂と成る

萬福院

一寺尾野村に在り本尊大日如來開基の年月未聞文

見ゆ

寺尾山大圓寺

廢院

年に成る

なるは開山手飼の猫眼に爪を立しさを因て木像も

上人の建立さ云俗説はいか此寺に愛染明王の

木像有り名工の作と見ゆに成るこ云々爲朝は保元の

或人の説に鎮西八郎爲朝當寺

文覺は壽永のころ時代

目也今に在り吉備宮王藤内の末葉に而有し由今如此光善寺境内跡に住者も今に猫を飼はす菊池十

九代持朝の墓此寺に在り寺の後より西に懸ては

古の卵塔と見わたり廢墳甚多し委は墳墓の下に

隈部系岡には心峯山さ有り此寺昔は今の所より前

の田の中にあり開山は錬室金大和尚今庵成る當寺

は隈部上總介忠直の菩提寺也忠直は應永三十三丙

午年五月午の日午の刻に誕生故に馬頭観音を安置

せらる午の刻はの九つ也困て光九寺名附云

質にさる事なるへし忠直菊池持朝公爲邦公重朝公

此三代に仕へて名譽有し人也委は墳墓の條に出る

云又開山の像眇目

菊池風上記巻四

一雪野村に在り寛永元年圓明開基山鹿湯町之光専寺

下此寺昔禪宗にて有し由寛政六年迄百七十一年に

成る菊池武房公の時に者安心院と申僧建立鱓寺に

て水王山不動寺と云今寺之内に鎮守堂の本尊則不

善龍寺

一正觀柿村に在り檀林寺と云延壽寺月 開基寛政六

年迄百八十年に成る此寺月遺愛の大和柿有因

て東本願寺上人の兄横超院より柿風室と申額の文

字賜る

檀林寺 延壽寺通寺

一赤星村に在り空心開基寛政六年迄百八十二年に成

正林寺 興正寺下

一邊田村に在り文祿二年明誓開基寛政六年迄二百二

年に成る

正教寺 京興正寺下

慶長四年熊本西光寺四世の寺務了

海建立寛政六年迄百九十六年に成る

云

百二年に成る

菊池西光寺

光源寺も西光寺通寺

一高野瀬村に在り一西寺村に在り寛永二年宗善開華寛政六年迄百七十

五六一

正嚴寺

一東迫間村に在り初は妙光寺さいふ寛文五年惠安開

基寛政六年迄百三十年に成る

壽寶寺 興正寺下

一輪足村に在り古東福寺坊中大德院と申坊頭の寺に

て有し處と云菊池家断絶の後立山德大夫と申者天

文の北京本願寺へ登り剃髪いたし法名を誓と改め

本尊を一體頂戴致し來り其五世圓立代に元祿四年

二月本願寺へ登りて光滿寺さ申寺號を許されたる

さ也或人曰寛文七年に圓三開基と何れが正説たる

や猶尋ぬべし

光滿寺

の男某の二男兵部允さ申者菊池家没落の刻阿波國

へ落行大賢坊と名を改め天文之初當郡原村の内伊

無田村に罷越天文十六年本願寺に登り一向宗と成

り徳安と改名此時より一向宗となる赤星有隆の孫

天文の比迄存命如何尋ぬべし

寺も大破致し寺領も上地となる其後赤星有隆

動寺の本尊と云寺五十石之領寄附有り菊池家斷絕

一木野道場村に在り天正元年淨念開基寛政六年迄二

寛政六年迄二百

明了通五世圓葉了融六世下

に寺を建立二世翁了順三世 常念了満四世當山 百五十九年に成る

丹生庄大塚村に草庵を結び其後肥後に凍り石村 一木野本分村に在り
天文五年西法開基寛政六年迄二

日我は花の本が夫此焼の針腮にあたれり我正に

命おはるべし花の本が孕る子は世にすぐれたる男

子なるべし出生せば大大太郎惟基と名附べし我

永守護せんこの宣ひければ花の本しきりにまみ

えん事をこひしに我は是母嶽明神也姿を見は恐

るべしと宣ふ花の本も深く乞しに岩屋より大蛇
出て暫して又入りぬ弘仁二年三月五日男子を産め
生質健にして足胼胝多に因て又戦大太郎さも呼
ぶ後に豊後を押領せり豊後守と號す惟基五男有り
嫡子を高知穂三田井太郎政次二男阿南七郎惟季三
男植田七郎惟定四男大野八郎基平五男臼杵九郎大
夫惟盛以上五人也當寺開基の沙門了善は高知穂太
郎政次の末葉にて高知穂因幡守惟世と云し士し
大友氏に任へ或時攝州大坂にて蓮如上人の間に
より菩提心を起し髮して了善號し豊州大野郡
西方寺 興西下
成る
勝明寺 京興西下
一隈府下町に在り慶長十七年敦善開基教善後には峯
庵道環さ改む西覺寺三世常念之次男也二世道瑞三
世圓四世即空熊本京町佛嚴寺之教西は道環の兄
也常念の嫡子也西覺寺四世常圓は三男にして本家

を継げり寛政六年迄百八十三年になる

西照寺

九十年に成る

にありさいへさも正説をいまだきかす

岩屋内に氣息喧々たる整有り怪で是を問答て

右おたまき之事余豐後にて承りし事を書氾せり恐れ共甚疑し

り弘仁は人王五十二代嵯峨天皇の時醍醐天皇は延喜

の時也時代大に相違せり然るに洞音日延喜十七年に仲平卿下

向弘仁二年に花の本子を産むさ弘仁二年は延十七年より百

六年前に當る時は是大なる誤りさいふへし又仲卿下向有る

共十年を過る迄造營逗留あるからすかた々々うたかはし苧

隈の事は口碑一孤人村に在り永正二年空心開基寛政六年迄二百九

十一年に嚴寺 熊本西光寺懸崖了空七世大峯了海八世

就龍了瑞如此次第せら 開基より菊池風土記巻四

一昔は隈府下町に在り常お古の卵塔残り、

門裏に寛永八年元

立院日圓開基熊本本妙寺下也寛文十二年迄四十二

年此所に在院同年八月晦日の夜吉左衛門と云者よ

出火御高札場より切明町迄延焼此時寺も焼失に

付今の院馬場に移る寺元は西向日要の代に立直

北向になる時に安永九年也寛文八年より寛政六

正等山妙蓮寺

一隈府横町に在り本尊阿彌陀文明十四年可信和尚之

建立筑後善導寺下地以前は今の内門より下に在り

見上人の代今の所に移る善成和尚の代上人地

成る共節江戸増正寺大僧正より隈府山さいふ額の

文字御染筆被下候時に安永三年なり開基より寛政

六年迄三百十二年に成る

隈府山極樂寺

右玉祥寺の寺領岡田村内に在し岡田村の迫間田

申所之

玉祥寺納所

寛正元年正月二十日

荒木日向記

所也我等代官仕所如件

への安ん修理大夫 御領内神原組出上村之内にあり穴の入口拾五丁もあ

口に4月の形にして程次第にさかりにして坂の

一年冬余至りに出上庄屋案内にて松炉をこもし入しに

わき出奥に流れ入穴の奥を極めしに水はもりて何

行さいふ事しれす穴の入口の額に小きほこ 蛇骨

安置して今に在り人見る事あたばす穴の前に神殿有り穴明神

五五九

置一立石村に在り明應五年賢超了善開基了善は豊後の

産俗姓は大神大太郎惟基之裔也其濫觴を尋

皇六十代醍醐天皇の比租母嶽の麓に人な

此祖母は

の女子をもて其名を花の本といふ 向豐後肥佞

境に夜人有りて花の本か本へかよふ其父母怪し

み是を問へは花の本答て日夜は來てあかつきに

り給へは其姓名をしらすによりて父母ていはく

彼人歸り給へる時針をおたまきにつらぬき男の襟

にさすへしさ其夜親ののことくして明後糸を

此岩 屋 今 豊後國

しるへに尋ねしに頑母嶽岩屋に至る直入郡の内中川

理

西覺寺

一平野村に在り寛文八年妙蓮寺開山元立院日圓建立

なり熊本本妙寺下也昔金峯村に興福寺といふ寺有

しを本として此所に取立しと云傅ふ寛政六年迄百

二十七年に成る

水淨山興福寺

年迄百六十四年に成る

邦公冑の立物に用給ふ狐の生尾有ける由是を立れ 此分三十三町六反三次此外に小代之黑崎綾滿牛水兩

百文程出たり余も此を見るに江山和尚代に出来た片田に二町五段

る由銘有り整も宜玉祥寺にあり又此寺に爲河に二十町 觀音寺分 西郷に三町地寇分

來古市田島に二町五反

江田島

南島神主

五段

是水名

の共

二段

野間口二段

百姓次郎丸

木取淵

於玉祥寺被付寺領之事

荒木日向守目錄左に記

菊池爲邦公同重朝公の墓院の内西の方

にも

尚と云墓は村内傅右衛門裏の林中に在り此外

衣 作者

玉祥寺

本尊勢至菩薩安阿彌の作さいふ當國球摩郡永國寺

肥後守

祥寺 後に別村さなるこ承る

長祿四年庚辰

一玉祥寺村に在り 此村昔は迫間村之内にて有しか玉

也仍狀如件

江月山玉祥寺

依志買取寄進玉祥寺と云任彼證狀之旨可有御知行

一當國野原鄉之内倉滿牛水田畑之事

爲邦寄進狀

右記之文繁蕪を略して此に加ふ外に中興記棟梁

は身方の軍兵あまたにみえけるさなん以前松下浩

之銘等有り略」之誰なる事は本書を見るべし

此寺元來天台宗の由四百餘年相兵に退轉せし

を龍田泰勝寺第二世春山座元寬文七年に再興して

刹さなす今は泰勝寺下也惣庄屋は河原左衛門

代之事詳なることは春山座元の中興記に在り

下也享徳元年菊池二十代爲邦公建立竺庵仲央大和

兵術殿これを乞うけ共謝麗に大一幅の絹に書きし

涅槃像賜られける今寺に有所是也開基より寛政六

年迄三百四十三年になる

公に在り今の十六羅漢は大清和尚の代に出来たり大

嶺和尚の代本堂新に立程なく焼失又建立あり

年中三月寺の後園木の本を堀しに半鐘出た

出たり其内

銅の花瓶弁に大中通寶通永樂洪武朝鮮通 等の鏡 山本に 二町居屋敷
九反三次

橋田に に名

足に一町百姓菊池風土記巻四

圓通寺僧都台

隈部式部大輔 康

三月三日

一爲諸願成就鳥目三千貫白布五拾端極茶貳石進上仕

候於佛前如意滿足賴入候恐々謹言

大永二年三月三日内空刑部大輔藤原長載

圓通寺御坊

右爲請願成就武運長久也

砂金一包

一百疋

圓通寺衆徒中

按察使賴藤

正安四年十一月四日

肥後國菊池郡圓通寺住僧禎宣依申請為祈禱所可被

祈御願滿足兼又寺邊停止甲乙人入可禁斷殺生之由

可加下知者也院宣如此仍執達如件

一後伏見院御綸旨

圓通寺僧中

肥後國

永仁二年三月二日 權大納言藤原房明判

晦五五七

寛文丁未秋八月

右緣記一卷村老得乎兵燹之餘者也雖事疎荒而不

屬不敢易之但存其故備不忘而已矣

一正親町院天正二年九月大友義鎮本堂方丈造營

一後奈良院享祿四年白河大納言賴高右中辨氏言勅聖

奉て造営

一後小松院應永二年國主再興

一後村上御宇正二年菊池武時武光再興

圓通寺

天正二年九月三日

義鉽

一寺領十五町宛行候宿願成就目出度造營祭禮之儀湯

淺播摩守元申付候猶期來迎候恐々謹言

大友宗 翰

圓通寺緣心足下

九月大智

日

一貴樣御事兼々申入通國守之地領之事相尋候得者相

違無之由被申候眞實御寺代々聖主國主領有之儀

L候間可被御赦免手裏候半芒存候御透之刻此境御

出待在候折節松茸多御座候必侍申候敬白

一龜山院御願圓滿又一寺勤行無懈怠可相勤也

圓通寺衆徒中

肥後

建長七年三月七日

相摸守平持朝判

一爲請願成就姫井雪野之二庄被寄附之也仍執達如件

圓通寺 御坊

肥後國

建久五年六月二日

頼朝

一爲頼朝家門繁昌於寺邊開廿五町奉寄進者也

一安徳天皇御宇壽永二年内大臣宗盛修覆す

さいふ則隆鳥羽に而迎へ共に舟に乗り肥後に下り

城をこの郡に構へ尊像を朝日山の麓に安置し奉る

同三年三月兵藤太郎奉行に而脈は本年を造營す

菊池郡岩本庄に遷す佛堂神社僧坊に至る迄大概天

長の例に準す岩本庄を寄附す則隆より六代肥後守

九郎隆直まで代々修補のみ也七代孫隆定承久年中

に再興す文永年中菊池武房十五町を寄附す此より

後の綸旨告文左にしする

肥後文獻叢書第三卷

一國家安全武運長久一

一國家安全武運長久一家繁昌爲茶湯米十五町菊池易

地未來際無退轉奉寄進者也仍執達如件

弘安五年六月朔日

右自四月朔至七月晦日可被勤行之者依 天氣如件

一觀世音普門品三十三卷

一伏見院御綸旨 定異國降伏祈禱勤行之事

一千手供養二時 一千手院陀羅尼 百反

一尊勝陀羅尼百反 一法華經

一部

圓通寺 御坊

弘安九年十月日

陸奥守

右者武運長久子孫繁昌也

一白布百端 馬拾疋 砂金一包

侍者中

圓通寺

源泰朝

圓通寺衆中

左中辨 恒房

治建二年三月廿一日

依天氣如件

寺に来る開山恵顯勅を承加持し皇子平産加持の

奇特さて宣旨を賜る貞觀六年 清和天皇御宇勅詔

に依て修 陽成院御宇元慶七年靈夢を得玉ひて

菅原道真自筆の法華を納められ延長四年八月三日

正一位大政大臣勅にて於佛前管絃兒の舞有り乞

人貧民に米錢を施行し給ふ爾來毎年八月十七八

兩日施行有り朱雀院御宇承平五年國家安全賊黨退

散の為とて大同の例に依て勅を奉て一位大政大臣

保昌公造營す天慶二年九月十八日沙門道賢一七日

の行法をなす種々の霊験多かりき天徳二年勅有て
本堂を再興す天蓋籏なと寄進せらる右大臣師輔公
左大臣實頼公百首の歌を奉らる正暦二年 一條院
御宇靈夢を得玉ひて本尊の彩色を改め給ふ同三年
地を擇て山城愛宕郡に移し給ふ二月事初り四年八
月に成就同五年十一月洛中瘧並に水鬼の難多かり
天狗来て心を悩し日吉の猿多来て田畑を損す洛
中洛外騒しかき同月十四日化人飛廻り告て日圓
通寺本尊の座し給ふ下の土を取て臍に當る者諸難
消散たるへし時の間に巡り告く皆驚感し馳参
す門前市をなし座下の土を取る自夫瘧病やみぬ延
谷を越林を過て至り見るに松椿生茂り燈籠な
どのみ殘て道もたえぬ檜皮葺の堂一つ有り觀世音
の靈像儼然たり則隆むかし今の物語なと聞く内夢
の告に少も逆はす彌信心をまし感涙袖を濡て歸り
其後内大臣道弘公に依て此よしを申再興の望を申
勅して許し王ふ然るに同二年則隆肥後の國の司に

除せられて國に下る又内大臣にて本尊を肥後に

遷し可奉由請ふ宣旨に日朕か心に任せず汝信心

感應を得たる故汝が心に任すべしさ勅詔則隆大

に歡び彼僧さ共に謀る日君が信心勝縁にあふ事の

うれしさに君は鳥羽に待へし我本尊を守護し來ん

五五五

久元年後三條院御宇鹿島大夫將監則隆七月廿四日

夜夢むらく我を信せは武運長久子孫繁昌あつて名

を天下にあらはさん我を見んと思は、愛宕郡其所

に来るべしさ云て去ぬ則隆夢醒て不思儀におもひ

彼地に至るに道傍に借忽然として居たり間て日借

はいかなる人そ答て日此に寺有り大寶山圓通寺

號す我共住侶なり此寺の観音霊験尤あらたに代々

尊敬し給ひき然共星霜推移り恨むらくは殿閣も廢

壊し佛像も雨露の滴をしのき難し君それ

もはなた望居しに其光空に昇りて消散す暫有

目

一岩本村に在り淳和天皇天長四年天下病み行れ妖怪

多かりき天皇不豫之事有之て其比何さもなく光

る物空を走りて夜々御殿の上に現す公卿一同に奏

して陰陽博士に是を占はしむ博士奏て日此光の去

て留る所を知なは吉凶自しるべしと云因て其時を

相待所光る物御殿をふさせしかば御悩甚し公卿

開山和尚より是迄六十六代

大寳山圓通寺

同四十六世

洪谷義範

一溪義純

仁溪義寛

義芳

同四十五世

同四十四世

同四十三世

御郡奉行は横山彌次右衛門代

此代に寺領拝領有時に元祿三年二月二十二

文英元都

同 第四十二世

金叔惠眞

扇元眞

同 第四十一世

同傳

同

肥後文獻叢書第三巻

同同同 第卅八世 月谷清竺西堂 月善清竺雨堂

同 第卅九世

同 第四十世

別峰友り天皇夢見玉ふは童子二人來て告て日我不動明王

奉仕金迦羅精多迦也 山城國そこの地に世

の像土に埋れて星霜を經給ふ彼像を取て一寺を

建立し祈禱あらば衆生災疫即滅し御惱も安るべし

君尋常信心に我を抑給ふ告奉る御悪覺て

咸淺からず則左大臣公宗公並に北面の武士に勅し

て彼所を尋ねしむ此彼を尋て日暮て闇夜と成る

時に草莽之間より忽光現す怪くおもひ共所を堀見

るに件の音の御頭井觀音經出たり此より此地を

御ぐし原さ名く急ぎ此よしを奏聞す御感彌深く即

一寺を建立有へしと同年九月斧初め同五年六月に

成就勅額を賜り大寶山圓通寺といふ本堂の本尊阿

彌陀御ぐしの樓大日堂藥師堂仁王講堂方丈厨可

庫藏經堂學文寮山門鐘樓鎮主山王宮妙見宮稲荷社

辨才天宮虚空蔵堂釋迦堂迄莊嚴法器悉く備れり十

二僧房有り普賢坊圓覺坊順正坊一縁坊立本院承照

院也其後僧侶相て佛法靈験の地と成る 仁明天

皇御宇承和二年より毎月十七八日護摩供有

同年五月より宣使初り同十二年皇子御誕生御產御

平安のためさて御所の勅使權大納言恒賴卵圓通

同 第十七世同八年十月五日

同 第十五世明應二年九月廿日

同 第十六世同六年十月五日

同 第 十 世同十五年二月十三日

同 第十一世同十六年九月廿四日

同 第十二世長享元年十月十三日

同 第十三世同三年四月十三日

同 第十四世延德三年小春十六日

九八世同十一年九月廿六日

第 九 第二日

七六

同 第 六 世長條三年孟夏住山第 一 世寶德四年二月廿五日

同 第 二 世同年四月五日

同 第 三 世享德初元四月五日

同 第 四 世同二年七月十六日

同 第 五 世同四年二月廿三日

四

同 第二十世文安四年五月廿六日

同 第廿一世寶德四年十月十七日

十刹住持次第

維馨知德

以川元紹

斯

第第第第第第第第

五

雨溪

善同

周文

同 第十八世文龜二年十一月廿七日

同 第十九世永正十五年十一月六日

同 第二十世大永五年四月二日

同 第廿一世同八年四月五日

同 第廿二世享祿四年三月十三日

同 第廿三世天文二年十二月八日

第廿四世同四年臘月十三日

第廿五世天文七年十一月十五日

玉筠善珍

琴溪寶音

夢周聖殊

春江元陽

沿巖善延

秋江有德

東興德璠

善佐

東龍元輔

以聽善

第 七 世文明五年十月十三日

第 八 世同九年

善寶

同 第廿六世同九年十二月十九日

同 第廿七世同十五年八月廿四日

同 第廿八世同十八年十一月六日

鼎國壽尹

校中元珠

處竹聖仁

榮照

大川德濟

享泉師元

笑耘元帖

中貴善會

同 第廿九世同廿一年十二月十二日 徐仲元友

同 第三十世永錄七年十二月廿日

同 第卅一世同八年十一月廿六日

同 第卅二世同十三年十一月廿六日

同 第卅三世元龜三年十月廿八日

同 第卅四世天正十四年十月廿四日

同 第卅五世文祿元年十二月八日

同 第卅六世慶長十年十月五日

同 第卅七世同十四年七月廿四日

竹園德修

省隱聖惟

月岡榮匡

雪心元春

樂甫元鄭

月照善派

枕雲德義

引接善誘

渭雲正樹

歟さに

正觀寺住持之次第

正観寺開基より寛政六年迄四百五十五年に成る

菊池氏亡て武蔵へ赤星氏守山の城生成しも大友よりの指闘な

り書翰何れも赤星菜さいふ事しれず道は志賀安房守の智也

接するに武光公博多に御出陣之事太平記菊池軍記等に見へさるは

後人の体を記せし故此等の事を脱したり榮国の隈部に被遺書

翰實鉄さいふへし

正觀寺

我鎮書判

正月廿一日

一當春之爲祈禱配膳給候宗敬之至候殊多種到來旁祝

着候猶志賀阿波守可被申候恐惶謹言

右は永五年仲和尚再生の時也

老僧中

正觀寺

宗麟書判

九月廿三日

一當寺之事奈多政基可爲菩提所之條可被勵志專要

候恐々謹言

右之書翰は仲和尚初の時也永祿五年の比さ云

正觀寺

義鎮書判

一端給候祝着候猶志賀阿波守可被申候恐々謹言

七月廿二日

肥後文獻叢書第三卷

同第十三同 第十五世永享二年九月三日

同 第十六世同四年菊月初三日

同 第十七世同十年九月廿一日

心宗道肯

心周文正忱

同 第十九世嘉吉二年十月初一日

睿山妙省

同 第十八世同十二年九月廿日

源善燈

一源善同

雨溪知吗

同 第十四世正長元年十月廿一日

右之代より諸山と成る

世愧二月十七日,

同

仁屋殊麟

同ニナシ

應永三十一年.

同 第十二世應永卅1年十1月廿七日亻 =7,白巖元東

周讓德恭

同

同

第十一世

以寧中同 第十清

世

一峯聖

同 第九世

寰仲元志

窮八世

玉林聖璨

同 第七世

中岳中正

同 第六世

節之中禮

同 第五世

大道賢

同 - 第四世

隆庵和尚

住山第三世

大方和

開山永元年六月九日に示寂

秀山和尚

開山貞和五年五月七日に示寂

將軍干戈之時筑前國博多御討死候其息武光公無餘 一當寺之儀前々旨
不可有相違之由申候所爲祝織筋

一先日粗申入候正觀寺之事菊池武時 〔名寂阿宮方

元周雨堂

隈部殿御宿所

源義鎮書判

天文二十一年一月一日

脩

德

一正觀寺住職之儀任先例可有執務之由依仰執達如作

前住

各判

資弟にて隈部親永の

四月廿一日

當住

右之書翰=而當寺御建言之趣明也此隈部K親永之見八於明前之書

翰に天正九年に有れば隈部親永守山の城主になり後也空閑鎮房

候悲歎之趣爲可申染禿候可得御意恐惶

隈部殿御宿所

八月五日

者可爲御見迦候哉可得御意候恐惶

一熊令啓候抑今度兵軍之次第御勝利顯然珍重L候仍

侍衆禪師

正觀方丈

忠直書判

八月七日

候恐惶敬白

儀聖福寺八御萬幸殊端金物等未相調候間雖斛酌之至候表寸丹詐

正觀寺之事菊池武光公御建立最前被號諸山結緣候

其後肥後守爲邦公之御時京都畠山沙彌德本以御取

合被達 上聞候處可爲十剎之間被仰出候其公帖于

今隨身候都鄙之崇敬如此候爾來禮義如形執行來候

處此度時刻到來寺家一宇不殘破滅剩本堂本燒却

候難止愁諸事過御察候乍思貴家御代々之儀承傳

此節無別儀被成御荷擔候間衆中申談遂在寺度心底

忍候厥時大方恢和尙以御才覺如當國

御同心候依其契約曆應三年御建立候領地山本郡之

內大清水先于題目御寄附從曆應三年及天正九年

一日片時無相違在所候先年内空閑鎮資之時郡役

被仕度從前代守護不入之由至豐州逡言上候處鎮資

等被成御書自今以後彼地領汇付於榜者一稜可被仰

出之旨稠敷御下知候之條方分迄誓文他言雖然内々

押妨候迷惑命存之刻鎮資事不慮如斯候當時鎮房

又々押領候適々御眼前之儀汇候問被成御異見被地

領之儀還附候樣可然存候自然彼家尚々紕の時

親氏書判

三月廿五日

城越前守也

一度々如申候御寺領慮外之愀雖迷惑候當時依許之

儀于今延引存之外汇候然者當郡之内大長持十四町

之事先々御格護可目出候高橋十二町十齣分之事

重而以次可申成候可得御意候恐々謹言

侍者禪師

正觀寺

十一月廿四日

兼朝公御法名也

元朝書判

一先日如申候近見十五町先渡進候仍而此内久福寺分

田畠被差置候由承候不可然候早々 可有御知行恐

謹言

應永廿一年十一月廿一日 兼朝書判

東松軒

爲東松軒領合寄附之狀如件

一菊池郡之内米田五段之事

東松軒

應永二十一年甲午十二月十三日兼朝書判

爲東松軒領合寄附之狀如件

肥後文獻叢書第三卷

秀書一今年相當持朝様三十三回候條於心中雖無疎就當社

御造營乍存餘事屏風一双龍虎奉寄進于文室候叱留

作者御中

雨溪和尚

心宗和尚

國仙 同

武世書判

九月廿日

一當寺入院之儀式其費莫大之由達 上聽候雖先例候

無庸造候不可然候所詮從今度至向後可有禁遏之由

上裁候各可有御心得恐々謹言

侍者御中

正觀寺

判

十五日

源應永卅五年八月隈部對馬守也

一高宮若狹方知行分門前畠地之事委細就披露仕候不

可有相違由被仰候目出度存候仍而永代寺家肝要之

地候間依御近邊雖望申方候至此所者不可給之由候

殊可然存候恐々謹言

寶地院 拜復

作者閣下

參人々御中

菊池殿

沙彌元秀書判

十月九日

可被申入候間省略候由可預御披露候恐々謹言

上聞十剎御敢書井 公文被調進目出度候巨細萬松院

一正觀寺之事披露仕候處即被達

住持

沙彌 書判

寶徳三年八月十二日

一肥後國正觀寺事早可分爲十剎之列之由所被仰下也

仍執達如件

十剎公帖

右武光公眞蹟傳て正観寺に在り書中難讀文字あり

其儘を寫ものなり

阿蘇大宮司殿

謹上

肥後守武光書判

七月廿一日

今月十七日御狀委細承〝畢 抑就守富庄土口事 御教

書相領候此事先日自阿尻半分乃口且可被辨之由被

申候間社家江直可被致沙汰之旨申候此等子細委申

御使候恐々謹言

十八年五四九

一河崎村十郎丸名三町之事

永享十一年己未季秋十二日 持朝書判

奉寄附之所仍狀如件

右爲彝選大姉菩提此下破失

肥後國菊池郡雖小此下破失

萩原邊多前兩所此下破失

之正觀寺者也

一奉寄進

文中三年五月廿二日

肥後守書判

右爲子孫繁昌殊後世菩提所奉寄彼田地之狀如件

武政公也

肥後國千田庄永富村内田地肆町事

正觀寺

正觀寺方丈

十一月十九日

肥後守書判

應永兼朝公也

名也

領掌不可有相違者也仍執達如件

武朝現存の法

法ろ滿

の存賜一於"當寺,武光武政常朝代々寄進地之事

泚常朝上義滿

義

は

一當時之寺領山本郡之内大清水村六拾六町永代寄附

之地檢帳等今有'之

春日寺

1 裝束所

寺

幸同斷

右同前

一顯德庵 右寺

斷

作平屋敷邊一安同

一正傳庵 右同斷

利七屋敷

同

朝日寺

一大昌院 同一反

壽光寺

太平寺

一德隱軒 畠地一反八畝十五步 正觀寺村傳七屋敷

六步二

正光寺

屋敷

一多福庵 同一反六畝

長移寺

同 長左衛門屋敷

少林寺

桐木に有

赦免

買石寺

同 一實相院 此屋敷御同 久三郎屋敷

寶積五畝

寺

一栖鶴軒 同二反一香集院 同一反五畝十五歩 同村德右衛門屋敷

成道寺

正觀寺村 + * 屋敷

神德寺

一萬松院 畠地二反

聖智寺

當寺所持の文明の眞跡指上ら

被爲遊御請御褒美として額の文字采

御染筆遊され下し賜はる當寺は京都南禪寺配下也

寺中之庵院左に記

公司

御代靈威院樣

一風呂屋床

門と云

肥後文獻叢書第三卷

一東松軒 畠地二反

一龍雲軒 同二反八畝

同 平左衙門屋敷

片角村林右衛門一柳隱軒 同一反七畝

一少林庵･御赦免地

隱居屋之所一圓德寺

寺より北 永福寺

一寶地庵 右同世長飽田郡橫手村

同郡高道村

玉名郡石貫村

同 高平村

飽田郡柿原村

右同斷

郡村不分明

玉名郡石貫村

加惠村

同

菊池郡北原村

郡村不分明

菊池郡加恵村

同郡野出村

飽田郡柿原村

同郡金峯村

菊池郡市野瀬村

右何某屋敷と有は享保の此の人

今村の内に在る六地蔵是以前山門有し所と云

末庵之次第

山下了伯屋敷

して云

栖鶴軒成道寺等は此人の開基地此人は合志郡尾足

初渡唐の節石に十七歳天寧の

平等我家常

虚空與法界

大唐亦客鄉

日本非生土

有て此寺を御建立開山は秀山大方兩和尚也秀山は

佛燈國師の弟子にて秀山師の孫弟子と云り大方

和尚は秀山和尚の弟子に而其比は鎮西に而無二の

名僧さいふ和漢觶剤等にも出たりと承る按るに秀

師大方師を訪て博多より此方に見たる節武光

公秀山師を御止有けれ共強てひそかに歸り給ふ武

光公跡より馬にて追懸金峯山の裏野出村にて追付

給へさも許容なく秀山師の日此所山水美景願は此

所に一宇を立て居せんこ有しゆへ則寺を立寶積寺

號し秀山師居住此節秀山を御留めによつて當正

觀寺の開山さ成し玉ひ大方師は以前約束有しを以

開山に成し給ふ此を以て當寺に兩開山有しさ

いぶ兩師の繪像木像今に在り繪像は當山八世寰仲

和尚渡唐の節彼地にて楚石和尚に賴て賛を書かせ

しょし寰仲和尚は三度渡唐有て唐にて寂すさいふ

世の詩左に記

近侍せ妙應院様 淪利 寺領高十二石五斗一合五勺一才御寄

附此時は郁首座の代に而御郡奉行は横山彌永右衛

五四七

常御代に至りて

仲孕と云 當寺其菊池家全盛の比は格別繁

昌の所にて代々能僧多く殊に二十代爲邦公の御代

には五山の十刹のに入公文帖今に傅り其比は借

徒も數百人に及しと云菊池家おころへて後大友家

よりも歸依有しによりて菊池大友兩家の皮

書翰今に紛失せす數通あり且以来の法衣

の製装等器物猶傳れる所此寺にしくはなし天正十五

年七月下旬佐々成政守山の城を攻落せし時當寺借

徒も退散す其後清正公御入郡之上御國廻りの節米

拾石拜領重而寺領に沙汰有るべしとの由其時の和

尚を善浪と云袈裟尾村に斬罪の者十四人有しに詩

正公正觀寺和尚に罪をなだめさせ罪人をゆるし玉

ふ思召に而事さなしに使を立正観寺を喚給ふに

和尚其意を不悟清正公の威光を恐れ他行せしさ

て不二出合」さりし故清正公御憤怒有て寺領の沙

汰もやみけるこぞ其後

村の產に而赤星はいたが天神の申子と云傳ふ

神より扇子を賜るこ見

一袈裟尾村に在り弘仁年中僖教大師の開基に面以前

は永福寺と申さ云八王五十二代嵯峨天皇の御宇弘

仁二年癸巳之春傳大師此地に来り柴を折て庵さ

し草を敷て座さし箕如實相觀を修せし折から紫色

の袈裟黄金の錫杖空中より降り大師の側の松木に

る其松を釋氏松さ稱す此奇瑞を以て袈裟尾山

永福寺と號す上宮は傳教自作之大日如來を安置し

鎮守は山王七凪を請し中堂は一刀三禮の薬師井

十二神彫刻山下に十二坊を建立勅命として御祈禱

料千石千貫寺領等賜る上宮は中堂より一里餘北東

に永尾坂さ云所有り則上宮の馬場筋也中宮の跡は

今茂畠を堂床さいふ所あり是也今寺の境内より上

に當る十二坊は今村内に學頭坊勝善坊德滿坊萬福

袈裟尾山北福寺

尚以右之題目今以別紙無御座候重々可申賴候

右之外に書翰有り竹崎圖書助惟秀之筆跡也此に略

す

南福寺御報

重勝 印

九月二日

天野助左衛門

肥後文獻叢書第三巻

筑前博多に而平英時の隙に打死の節武光公は武重

公と共に御供有しが軍敗甚危かりける故福岡の聖

福寺に忍び玉ふ時に大方和尚御匿し被成ひそか

に肥後に連れ返せしさ也此時大方和尚に約束の筋

あたる

一正觀寺村に在り菊池十五代武光公南朝興國二年に

御建立期の肝想三

「其由緒は武時公元弘年中に

一大琳寺村に在り 本尊大日如來開基年月 開山等未

聞又は九儀野山或は實相山とも云傳ふ何れか正説

たるや狩尋ぬへし暦五年寅八月十四日の大風に

堂を吹倒すその節今の所こうつる以前は今の所よ

り東道の東に在り何れの時無性になりたるや不

可、考古記等一向不傳五山の中央に立る寺也

熊耳山正觀寺

列へ此にいたす

九儀山大琳寺 常時廢寺なれども五山

院の跡あり菊池十代武房公の中興也今は宗に面

大慈禪寺會下也今の深川會所屋敷高並氏屋敷共

寺の境内に而有しとなり高並氏門前に小堂の古佛

地臓行基の作さいふ其側に石碑有り院主藤原刀丸

あり寺後の林中は古の卵塔也弘仁より寛政六年

迄九百九十四年に成る

菊池風土記巻四

關白様 今度肥後國爲御檢地阿波守被仰付御下向

以上

右統家は赤星親隆入道道の事也大友義統より統

の字を賜はり統家と改名系岡に見ゆ西養坊と有を

見れは此寺其比天宗たる事朋也

西養坊參

判

統家 五月八日

一親父伯耆入申、居屋敷筋目之事候條預進之候可

有格護候巨細井寺河内守可申候恐々謹言

右親爲合志五郎號伊勢守竹道の城主也赤星入道道雲の弟也

南福寺

天正十一癸未四月廿八日 親爲 判

件者也仍狀如

預進之候全有知行詰目之儀y、問辛勞可有粉骨

イ 二

うち替之刻可返給候

一所三段三丈 十萬分

追而十萬分

竹下

出田之内

に見へすぞへからず

南福寺

天正十四年六月五日

藤原家綱判

以上

一所畠地七丈

#手

家糊菊池井赤星系圖

今村大塚村分百姓職申合自然御配分之時者當麥

之毛作分に可爲分當候田中名之儀も同前に候

天正十三年十月十日

檢者中

就長福寺之儀預御懇札畏存候最前如前代£申渡候

條以今別紙御座候一々追而者直..可申合候得以

先諸物等於有之者南福寺方可有御馳走候此由b

入御請合尤肝要候恐々謹言

五四 五

六反分之内

南福寺

出田村

天正十六年五月廿一日

小出甚助判

天正十六年五月廿六日 森勘右衛門尉判

今度御檢地!汇付菊池郡之内菊池田!出田村作抱之

事如先々申付候條以來之儀可百姓之事爲其一筆如

此候如件

阿波守内

汇付菊池郡之内出田村南福寺藥師領六反分之内田

畠之儀阿波守汇理申如先々被申付候然上天下之

御檢地之儀汇候條御國主被仰付候藥師領之儀不

可有異儀候爲其如此也

一出田村に在り 開基年月開山等考此寺の面に當

時十左衛門と申者住居す此所迄境内と見へたり

等寺後の山中に在り本尊薬師如來行基の作七年

廻りに開帳霊驗折々あり此寺昔天台宗と見へたり

其故は北原長福寺跡に慕有阿岡佛所 坊慶

長十九年と有り圓樂坊の號天台宗と聞ゆ然して南

福寺古き書附に天正の比南福寺より長福寺を兼帶

する事あり是南福寺天台宗たる事明か慶長の後

は雨寺共に正寺の會下に属し禪宗さなるとみえ

たり正観寺末庵の内に書のせたり其後何の比より

手水山南福寺

だ出來せすいはんや禪浄土をやゆへに和銅の開基

うたがふべし此寺古記紛失考ふべからず父思ふに

廣譽より以前は浄土宗ならんか其故は山號の無量

本の彌陀旁浄土宗の意にかなひたればいか

ゝ猶尋ぬべし今西寺村馬場は皆昔西福寺の境内さ

いふ寺後に赤星有隆宗梅庵主城武岑其外之墓あ

委は墳墓の條に出る今の三十三所觀音の像は齋藤

又右衛門寄進也和銅二年より寛政六年迄千八拾六

年になる

肥後文獻叢書第三巻

地三丈 一所畠一所田地三反三次

重治は大友修理大夫義鑑之弟菊池家に養れ足利義輝より義之字

を賜り義武さ改名委は系圖に出る

一所畠地六丈

をにしま

つる

藥師寄進之地

十萬分

南福寺

大永二年八月十六日

藤原重治

右旨趣は天長地久節發願心無病無腦如意成就之所

也仍一書如件

全寄進燈油田腳在

か此寺淨土宗と成る然るに此寺を禪宗の古跡と云

は深く考へざる也當時出田村十右衛門と申者その

先麗この兄弟内より此寺の住持と成る其節に十右

衙門家に預り置し書附今に在り余請かりて見るに

昔は南福寺より出田村の庄屋役を兼滞する事有り

昔は事繁からざりしや又は民家の文字を知る事な

かりしや今は村の長役寺務のかたはらに勤まる事

にあらず村長の役兼帯の事は寛永十四年延寶五年

の北さいふ出田村に共帳面あると承る十右衛門方

に所持する書附左にしるす

一加藤清正公御代築地井手出來之時塘堅めの御祈禱

被〃仰付 米八石御寄進有」之非手 明神勸請右之御

寄附米寺暫無住之節退轉に成る

右者寺内藥師堂本尊裏書を寫置

一藥師如來十二神尊像悉破壞新彫奉寄進

承應二年癸巳二月成就繼先祖之志者也

施主宗善右衛門尉重次

東福寺宗空法印様

進上

卯月日

久隆 判

弘治宗源左衛門

一隆盛就病中立願申候所卽病災愈復仕一入滿悅奉存

候爲報謝藥師十二神 將井一宇造測仕奉寄進候開眼

裏書宜敷奉賴存候恐々謹言

肥後半國を賜り下向其後慶長五年庚子十月廿三日

宇土小西攝津守を責滅し従是肥後一國を知號

肥後守,翌年之秋 當山之知行被沒收 郡奉行 津田

兵藏被檢地院坊主特に懸りの知行等石高につも

り被收納」年貢天正十七年九月に極る也有地

二辰一西寺村に在り

阿彌陀如

こそ是寺に付て出来たると有て句下に西福寺廣譽と記して隈部上総介忠直

亭會と有り和銅二年より文明十三年迄は七百七拾

三年歟と考ふ時代大に相違せり案するに此年廢跡

と成りたるを再興し給ひ中興開山の廣譽にてはな

きかと云々余おもふに南福寺北福寺山鹿郡の日輪

寺抔昔は皆天臺宗也菊池氏の比より禪宗となる西

福寺も此類にて天台宗成るを廣譽の時分浄土宗に

はならざるや然共和銅の比までは天台宗もいま

五四三

來 元明天皇之和銅二年開基といふ或人口俗説に

開山は廣譽といへり是不審なり廣譽は文明の比の

人文明十三年八月一日に隈府に而菊池二十一代重

朝公萬句の歌興行有し時廣譽月の題にて

月ならで苦池に秋の色もなし

古西寺村西福寺村さいわり本尊村

無量山西福寺

妙應院様御代井手堀かへの節御紋附御挑灯二張御

寄附年々爲三塘堅」御所念有之十一月朔日に井手

明神祭御座候享保之比迄菊池郡中より十石高に三

合程宛上り居申候

一御當家

當山に居住居之時も此所に葬る墓印有り此所を

歡喜院

八畝菊池十二代次郎武時長男武重薙髮之後歡喜居士

貳反八畝十步菊池九代式部大夫隆泰二男發心之後覺佛さ

院坊主

號院主に成る委前に出る

十七箇寺坊主之次第

惠覺納

肥後國東福寺

正慶二年三月十八日

源氏判

一高師直方より如申進依宿願貴僧を願祈禱仕候所得

快氣珍重々々大慶に存事に御座候爲祝儀筑前國下

座郡領地進申候何方よりも少も有間敷候爲後證

如件

親永先君書たろは義武さ見ゆ義武自害天文二十三年より元龜

三年迄十九年に成る

東福寺法印 御坊

元龜三年七月朔日

親永 判

隈部但馬

謹言

111

一當寺之事去月二十四日燒失仕候由氣毒に候依爲

先君菩提祈念白米二十石錢三貫奉寄進候其外何

富田主膳に申付候條可被得其意倫重可申候恐々

東福寺法印鋒納

肥後文獻叢書第三巻

句興行にも又於當院干句連狀興行亭會珠長法印著述今

兵衛屋數也今毘沙門堂一此寺天正十六年戊子六月廿七日加藤主計頭清正公

輪足村に天正十七年の帳面有り余請借て是を見るに

大坊之畝數付有り因てしるし置右之外に末寺末庵所

々に在し云此寺の本尊七年廻りに開帳有りての本

尊堂は古より今の所にあり寺は古は今の護法堂の邊

にあり後に今の所に移る今の寺床は古の卵場也

僧一乗院の代に石壇出来る余が曽祖父澁江壽左衛門

世話いたし隈府中に寄進を勸む

敷跡さいふ

滿坊

歡淸坊

大德院 今の光寺屋

風光坊

萬善坊 二反八畝二十歩

實什覺坊

圓滿坊

二反一畝

大門坊

實相坊 一反七畝

一反九畝

得行坊 二反五

常行坊 一反二畝五步

勝藏坊 二反二畝長勢

常樂坊 二反五畝長尊

右三箇寺同日萬句連歌着會

有る此多門院の遺

多門院

常時源右工門抔申者居る

壹反貳畝貳拾步文正應仁之比盛也重朝文明十三年八月萬

今共屋敷を俗にクリンギント

骨院と名け代

の父なり

義鑑 天文八年二月刋

六日

修理大夫

一菊池郡東福寺奉寄進料米之事白米百斛右如法經執

行之料米也爲菩提所進給也

東福寺大僧都

寛正五年二月十一日

惟鄉

阿蘇前大宮司正三位

一豐後國玖珠之内檀園村之事奉寄進東福寺之上仗何

夕樣之法師被召置候共從是方 少茂綸無御座候為後

代寄附之狀如件

法印

輪足山

寛正七年四月廿日

安政 判

牧越後守

一肥後國玉名郡之内大野村之事奉奇進東福寺可有領

知之條執達如作

法印

輸足山

一玉名郡中富村合志郡板井村爲菩提所寄進也仍如件

明應二年

重朝 判

五四一

永祿二年三月二十日

親隆 判

赤星入道道半

一菊池家代々殊仁大友氏等之數通之鏡狀拜見仕候大

圓寺十二町之事井 山野不殘預進之所可有全知行之

狀如件

輪足山寺領地之

東福寺法印

義統 判

統判

卯月十五日

大友宗麟之子也

東福寺法印南池二十二代能運公はこの前に

･去有,此能運#別而有,之歟

一貴僧事菊池則隆45以後靈魂被吊御菩提之儀殊勝

千萬候被添御心第乍案中祝着候彌可勵馳走簡要

候仍大圓寺拾貳町預進之候可有知行候恐々謹言

天文二十三年五月二日 能運 判

一當寺事爲代々祈念寺領知等不殘可有支配爲後日如

件

天文二十二年五月三日 大宮司惟豐 判

菊池東福寺

一御祈禱成就目出度存候爲報謝阿蘇郡之内拾五町奉

寄進觀音尊像其外何れに茂三人之者に申付候條可

意彌御祈念賴存候恐々謹言

法印

二月廿五日

東福寺武光 判

九月十二日

持朝 判

彝選大姉菩提奉肥後國千田一奉寄進肥後國菊池郡内雖小萩原深川廣
生流川右為

寄進東福寺

東福寺法印

東福寺僧都

兼朝 判

日

三月三日

元弘元年七月七武士 判

地山野等不殘奉寄進候爲證狀執達如件

候為末代鏡狀如件

一輪足山東福寺當家代々祈願殊勅願寺如先例領地敷 一肥後國東福寺拾五町領地其外山野至迄任先例宛行

進

東福寺江

東福寺法印

武重 判

五月十五日

康應元年二月三日

武朝 判

述芳

意候恐々謹言

達如件

一當寺頷知官職井山野田 畑如前例奉寄進候寂惠覺坊

東福寺法印尊納

輸足山

寂阿 判

正中二年三月三日

武政 三日

判

菊池入道

申候

右於代々領知之地也少茂異 儀有間敷候委絋武 重江

一先師以來旁御心懸之續無忘却候然忒寺領之事當家

東福寺伽藍井山野拾五町之事

五四

惠覺法印

肥後文獻叢書第三卷

東福寺大僧都

代々寄進之上は如前々申預口勤行寺役所任舊規無

怠慢堅固可被相勤候者也仍後證之狀如件

延文二年二月阿申置

候料米百斛白布五拾端進上申候猶歸國之砌可一於當寺武重武士武光武政代々寄進之事領掌不可有

相違者也仍執奉寄永富村田地肆町之事

右爲子孫繁昌殊後世菩提所奉寄進彼地之狀如件

寄進之所仍狀如件

永享十一年菊池風土記卷四

一本田武藏守物語承申候代々願所之儀承候則如前

々不可有余儀一所茂不殘宜有御知行内々上野之儀

東福寺空心坊

三月四日

能隆 判

肥後次郎

一當寺代々領知如法經之事任前例宛行候以來狼藉之

儀候可有注進者也歸陳之砌寺領等宜申付候仍而

執達如件

東福寺

肥後菊池郡

宗盛

承安二年二月五日

仰平清盛入道淨海惡逆增日繁以神佛之慈眼避惡

趣善而願成天下安平仍祈念如件

一承安三年平重盛同宗盛祈念之願書

榮心坊ゑ

肥後菊池郡東福寺住侶

平清盛 日

判

長寛二年三月二當寺任前例領知等宛行之者也自今以後領止地頭

井 甲乙人等可令全知行給之仍執達如件

五三九

惟直 判

文永七年九月七日

阿蘇大宮司正三位

一當寺如法經執行感入候惟國病不癒仕悦申候爲報謝

阿蘇郡之内Lㄅ江古尾藏原三日所寄進仕候可有

御知行之條爲後日證狀如件

別當坊

東福寺

武房 判

四月四日

一當寺如法經衆徒料米大圓寺拾貳町之事可有寺領仍

如件

侍者中

東福寺

一今度依如法經功德病即滅致本復候珍重々々以參宮

御禮可申述候得共承合申儀候而以使札申入候先

御齊料米拾石錢百貫進申候尚期貴面候恐惶謹言

三月七日

宇治朝臣惟國 判

衆徒中

東福寺

文永二年三月四日

武房 判

被仰候貞宗! 申含候條可有御知行仍如件

肥後國菊池郡輪足山東福寺之事御祈禱效驗嚴重之

間信仰無極雪野今村小萩原千田庄永代寄進之狀如

一冷泉院御宇安和二年五月阿蘇宮、勅使下向肥後國

十五ヶ寺へ綸旨を賜る勅使管原光顯卿也

右領知付在 別紙,此!!略

證慶御坊

肥後守

判

康保二年九月二十五日

左衛門

藤原

一肥後菊池郡之内貳拾五町爲菩提所祈念奉寄進者也

仍執達如件

證慶法印御坊

右大

天曆三年五月四日

當村領止地頭 井甲乙人等糯司令全知行給之仍天氣

如此執達如件

一村上天皇之綸旨勅使杜菅原大納言光家卿也

一安和二年正月十五日藤原保昌御歸路也

證慶御坊法印

肥後菊池郡

右大辨天曆元年三月四日

歟

禱者也仍天氣執達如件

耙隆村安和二年六月三日

東福寺僧都

黃金百兩太刀貳振寄附

義

一仁安元年不清益有,願御祈禱御使杖

一康和二年五月二十五日八幡太郎義家願書有り

一天仁二年平忠盛宿願有」之下向

東福寺秀吉法印

延久五年二月廿五日

則隆 判

當寺領地之義任天慶例無滯宛行者也仍執達如件

菊池左近將監

一肥後國菊池郡輸足山東福寺法印寺領之事

東福寺永鑑法印

菊池輸足

一東福寺領内拾貳町未來際奉寄進者也仍如作

天祿元年二月三日 郡司政高 判

永鑑御坊

安和二年七月三日

右大

田寺永鑑事爲願祈禱導師被任僧都之旨依執達如

右大辨國定

件

五三八

菊池風土記巻四

同三年再興天元二年成就永二年永鑑隠居し弟子

徳明に相續同八月十三日徳明法印となる徳明は播

州之產也長保元己亥五十六に而死去寛弘四年二月

十六日夜悪徒來て焼失同六年天臺慧鑑再興同七年

僧正と成る八月護摩堂を立て天下安平を祈る十月

四日の朝燕鳩鷹三羽来て堂上に在り六日西刻に三

方に飛去又八日の夜鳴讀の間木の間にやり

て讀經やみて東西南に飛さり同十八日の夜恵鑑の

夢の内童子來りて告曰われは兜卒天不動明王の金

迦羅也神使として降り來れり汝は佛法堅固の道師

観音の圓通に達す故に感應甚深し因之永く汝を

守護すべし先の鷹は阿蘇健磐龍命なり燕は春日大

明神四所の内武甕槌の神也鳩は八幡也何れも汝

を守るべしと云ぉはつて夢醒ぬ是より信心彌まさ

りしさぞ惠鑑隱居して明尊に相殺す時に後一條院

御宇萬壽元年三月二十五日也此明は攝政藤原朝

臣家卿の末子 三條院母公の御弟也同三年僧正

成る同六年三井寺の貫主と成る同七年惠覽に相

縉有り 後冷泉院御宇永承二年賊徒に焼かる是よ

b星霜を經る事二十三年 後三條院御宇延久二年

九州肥後國菊池郡輪足山讒慶佛法堅固之旨達上開

之處叡感以甚深也從今以後爲願寺可致精誠祈

五三七

一朱雀院天慶六年藤原保昌下向の節證慶法印に内縁

有にて閉して申下せし綸旨

菊池元凧左近大夫則隆如三前例」寄附有ける 堀川

院の御宇寛治元年二月より造營雪庵居住雪庵は權

中納言公成末子 白河院母公の御弟なり同三年

願所と成る同六年大僧正と成る壽保元年如法經始る誠に數代大徳居住に因り 天子諸候御歸依ふかし效驗いちしるしきかゆへさいふべし其後の歴代略していふに菊池九代式部大夫隆泰の次男頼隆幼より佛道を好み後に愛心して覺佛頼隆法印と云寺を榮吉に譲り護摩堂の傍に結庵し死後に院主坊と號し其跡に院主數代居住すべ菊池十二代次郎武時の男次郎武重肥後守さ稱す家を弟武士に相寂し共身薙髪して歡喜に居士さ號し且又佛道

修行有て興國三年八月三日に此所にて逝去したまふ是より結一庵歡喜院さ號し數代住持居住さ云々右に出ろ所の歴代の綸旨等左記す開基より寛政六年迄八百五十七年に成る

八王六十一代朱雀院の御宇天慶元戊戌年天臺沙門證慶法印乃開基比叡山正覺寺坊末寺也證慶法印は山城國の人なり出生の時奇瑞あり因て五歳に而出家し其後に諸國をめぐり高野山に籠り太宰府天満

宮に籠り菩提心の堅固を祈りけるとなん天慶元年

双山は今の

肥後に來り菊池に而双山を見給ふに幅足川なり に共

頂に紫立たる雲の東西にて唱囀頭有ければ怪

思ひ此山にいたり玉ふ偶猿の地を掘るを見てあ

たりに在ける人に問玉ふに其所こそは夜々光明有

て讀誦の聲ありと答因て打寄りうかち見るにあや

しくも一震天顕れ出て告て日われ法華經百萬部讀

一輪足村に在り 古渡り共本尊千手觀世音行基

昔亘理書中

輪足山東福寺

一五山の名菊池十五代武光公の代に初りして云輪足

山東福寺無量山西福寺手水山南福寺袈裟尾山北福

寺九儀山大琳寺也

菊池五山

寺院

菊池風土記巻四

又村上天皇の御宇天暦三年五月四日菅原大納
言光家卿勅使として綸旨を下さる康保三年三月御
堂建立并末寺五ヶ所を立つ本覺坊圓乗坊密教坊
願坊定驗坊也四年五月隠居し弟子永鑑に相續有り
冷泉院御宇藤原保昌安和二年正月十五日に入洛有
同年五月阿蘇に勅使下向之節肥後國拾五箇寺に
綸旨を賜はる勅使は菅原朝臣光顯卿也 圓融院御
宇に天祿三年五月三日の夜半に炎上本堂計殘る天
延二年に大政大臣藤原伊尹公内縁有に因り永鑑に
勅宣を調下し給りけるにより諸國司地頭を進し
誦の大願未みたずして死せり故に身體は敗る
いへごも舌斗朽すして殘れり善哉々々此地清淨
の境也師精舎を建立せば我永々守護すべしと言絡
てかきけすやうにうせにけり是を以て證慶法印奇
異の思ひをなし信心肝に銘し天慶元年國中を勸進
しければ時の國司尾藤肥後守隆房大檀那と成り終

に大願成就し同二年佛殿方丈護摩堂鐘楼門造立尤

二月十五日柱立初霜月二十八日に悉く成就し同

六年藤原保昌卿下向有ける證慶俗有人なれば保

昌事の由を泰聞有しか 帝論旨をそ下されける

の文字御染筆賜る

一隈府横町に在り橘姓嫡流澁江家勅許之氏神安永四

年堂上山井三位藤原兼敦卿より元水神祠場と申額

天地元水神

一隈府横町井手端に在り正觀寺村内なら十一月十四

日に祭る

地藏堂

一阿佐古村に在り

雄床大明神

る

一蟹穴村にあり熊野権現勧請といふ十一月四日に祭

権現宮

一同村に在り阿蘇三の宮勸請と云

藥師堂

一水沢村にあり 弘仁元年十月十八日に祭る

三社大明神

る

一高田村に在り加恵鷺宮を勸請といふ十月廿日に祭

一鍋倉村に在り

鷺宮。

五三五

長岡清記樣より九曜櫻御紋附挑灯貳張永々御寄附

竹田中川修理大夫樣より御紋附健 中丸挑灯貳

張永々御寄附有り

仰付 御祈禱之節 御紋附中 丸挑灯貳張御供 渡被、

爲三仰付候

太守樣御上下之節々御船中安全祈禱永々被爲

一岡田村に在り六月十四日に祭る牛頭天皇と申奉る

同

祇園

座

一王祥寺村に在り正月廿八日に祭る三座一所に御鎮

阿蘇宮、春日大明神、白山權現

る

一袈裟尾村に在り皆相殿に鎮座也十一月廿六日に祭

藥師、七社大明神、住吉聖母

一正観寺の本尊也十一月廿四日に祭る

地藏

一村田村に在り文明年中に立

一輪足山に在り東福寺本尊也十一月十八日に祭る

同

同

一高野瀬村に在り十一月十八日に祭る六庵と云加

藤若水再興有り

同

一大琳寺村に在り十一月十八日に祭る古の九儀山大

琳寺跡也

田代宮

一西郷村に在り西郷太郎昔は西郷五海羽根木蟹穴の惣氏神にして祭りしを其後村限の祭り初り氏神立しか共今に古例殘り五海羽根木蟹穴より作初穂を備る此宮鎌倉御霊の宮を請といふ十一月十二日に祭る

一細永村に在り太輔經直の弟十郎經俊其子次郎經知の子佐野太郎經正の弟原四郎を祭りたると云

若宮

四郎宮

一加恵村に在り七月廿七日に祭る

諏訪大明神

一下河原村に在り靈佛也

虚空藏

一深川村に在り菊池氏の時馬屋別當の墓所共上に堂立能牛馬の顎を聞給ふ前立の地藏は後に立たり

と見ゆ是を駄牛地藏と稱す駄牛は駄護にはあらす

や堂の前の石體は以前の馬船と云傳ふ

駄牛地藏

一下西寺村に在り同十五日に祭る

同

一原村に在り十一月十四日に祭る

一五海村に在り十一月十六日に祭る

熊野權現

稻荷大明神

一寺尾野村に在り十一月十一日に祭る

一瀨戸口村に在り宇佐勸請と云十月十八日に祭る

大日如來

同

一邊田村に在り十一月十七日に祭る

同

一車石村に在り十一月十一日に祭る

同

一宮園村に在ら十一月十三日に祭る宇佐より勸請と

云

一黑蛭村に在り十一月十三日に祭る則木野大明神也

八幡宮

黑蛭大明神

一四丁分村に在り十一月十三日に祭る

妙見宮

五三三

觀世音

一同村に在り高宮山城守藤原清房物請年月不詳藤

原清房は江州高宮の住人に而西征將軍に供奉にて

下向子孫菊池家に仕て下河原村に居住三四代か間

山城守受領して相續有して承る右屋敷跡を今に

高宮と申也右乙姫宮請之砌は流鏑馬等祭盛らし

と云立畑と申所あり是やぶさめの節の馬立場と申

傳て畝數壹反五畝有りしてき田壹反六畝有り流鏑

馬殿さて森有て右之道具にても入候所にてはあら

すやと所の人中傳ふ井戸も有り御供水と申傳ふ灰

迴さいふ所有り祭禮之間火を焼申候を捨場申

傳ふ祭禮は十一月十一日也

阿蘇乙宮大明神

一下河原村に在り十一月十五日に祭る

今宮

一雪野村に在り十一月十五日に祭る

一西寺村に在り十一月十五日に祭る上下村共に

天幡宮

八幡宮、阿蘇大明神、上西六殿宮

一四丁分村に在り十一月十五日に祭る

一隈府町札辻次兵衛裏に在り趾床今は論所となる堂

も暦之すたれ御神體新古二體有を次兵衛甚左

衛門此兩人にて一體宛預る此天神は道場寺の鎮

同

る

一稗方村に在り太宰府より請北宮社司鶴田増大夫

代ならしき田靑ゆて御供田今以有之靑て祭

申は大豆を煮て靑のりを懸け備る今に靑ゆて田

預來る家あつて共家より備る也十一月廿一日に祭

同

一山崎村に在り十一月十日に祭る

一野間口村に在り延資六年六月廿五日太宰府勸請

同

同

一赤星村に在り太宰府勸請九月十九日に祭る村中の

氏神也

同

一正観寺村に在り二月廿五日に祭る

同

る

肥後文獻叢書第三巻

一西迫間七坪村に在り十一月十日に祭る興國十三年

菊池四郎宗政建立さ云傳此人系岡に見へす神像背

に文明七年六月廿七日藤原宗政と有時は云傳誤れ

産七社大明神

一木庭村に在り十一月九日に祭る古は原四丁分の方

より此所迄は山多有て此所山の人口にて有しさ云

ゆへに山神をいはひて有しと承る

一堀切村に在り十一月九日に祭る

山神

堀切大明神

にて有しさいふ説有りいかゝ昔は切明町善四郎裏

に在り其跡今にすこしの藪ありて昔は隈府町の氏

神にて有しよし武政公北宮を請の後いつさなく

北宮を氏神と仕り天神の祭すたれたりといふ古を

おもふ人有らは小祠にても取立御神體を安置し度

物也按するに今隈府北宮を九月九日に祭る座に渡

唐の天神の繪像をかけて神酒を呈ぐ是天神古の氏

神故に北宮祭る座にかけて合祀するなら、

ふらんか尋

ぬべし

一染土村に祭り十一月十五日に祭る

一松島村に在り十一月十五日に祭る

同

一市野瀬村に在り十一月十五日に祭る

同

一平野村に在り十一月十五日に祭る

同

一白木村に在り十一月十五日に祭る

同

同一水沢村に在り十一月十五日に祭る天正十三年十一

月十五日太宰府より勧請

五

一大柿村に在り十一月十四日に祭る

同

一細永村に在り十一月十三日に祭る

同

一瀧村に在り十一月十三日に祭る

同

一日生野村に在り十一月十二日に祭る

同

一高野瀬村に在り守山城墟に在り十一月廿五日に祭

五三一

一長野村に在り十一月廿五日にまつる

同

一下河原村に在り十一月十五日にまつる

同

一鳳儀村に在り十一月十五日にまつる

同

一甲佐町村に在り十一月廿日に祭る

同

一虎口村に在り十一月十一日に祭る

同

一小楠野村に在り十一月十八日に祭る

司

一斑蛇口村に在り十一月十七日日に祭る

同

一佐野村に在り十一月十一日に祭る

同

一篠倉村に在り十一月十一日に祭る

同

同

同

同

一生味村に在り十一月十二日に祭る

一道園村に在り十一月八日に祭る

同

同

一伊良迫村に在り十一月十一日に祭る

一菰入村に在り十一月八日に祭る

同

天満宮

一竹牧村にあり十一月十一日に祭る

一鍋倉村に在り十一月八日に祭る

永田大明神

一東迫間村に在り十一月十一日に祭る

同

と云

一木柑子村に在り十一月五日に祭る建久四年の勸請

同

一戸四良村に在り十一月十日に祭る

天満宮

之御神體居ますよしうけたまはる

同

以前は今宮を祭りして云今も御神殿に今宮 一黑仁田村にあり十一月十日に祭る

一流川村に在り十一月四日に祭る菊池武重公御建立

在り十一月九日に祭る

同

熊野權現

一木佐木村にひより稲荷の神と申さぞ

五三〇

一西迫間村に在り十一月九日に祭る

同

同

一廣瀬古閑村にあり十一月九日祭る

の下にて御物語有り何所へと御玉へば比叡の阿

肥後文獻叢書第三巻

一堀切村に在り十一月九日に祭る

同

闍梨大我寺を守護し給へと招請有さ答玉ふ 彼

には比叡の神専鎮守當寺にましまして佛法を守り

給へとのたまひければ承諾まし々々因て大師同道

有て勝地をねらびて今の所に鎮座と云稲を荷ひ給

菊池風土記巻三

之小名

一同村に在り十一月三日に祭る塚原斗之氏神也

丁分内

森天神

一同村に在り享保十七年子の年田腐の節勸請庄屋は

清九郎代此社四丁分總領の社也

同

一四丁分村に在り十月四日祭る昔は村二つに分一方

は此天神を祭る

一廣瀬村に在り十一月二日に祭る

同

天滿宮

し神嶽山正善寺源寂到祇園宮御夫婦

相殿にて此裏にも源寂判と有り

クモ

岡田村に在り十月二十六日十一月六日に祭る或人

日此賀茂宮を請にてはあらすや當は雷の誤に

雲介龍別當大明神

一南古閑村に在り十月二十五日に祭る

同

て雲介龍別雷神にてはある間敷哉然共額の文

字誤るへからす尋ぬへし御神體は御夫婦也裏に

岡田大神さ書一蟹穴村にあり十一月四日に祭る延喜式神名帳に云

山城國紀伊郡稲荷神社三座上武大田命中社倉稲魂

下趾は大宮姫人皇四十一代 元明天皇和銅四年に

鎮座是を稲荷大明神と稱する故は二十一社記云弘

法大師東寺に任せし時御弟子檜尾僧都實恵東寺南

大門に徘徊せしに老老嫗異體なるが数多男女

屬率て稲を荷ひて遠より行疲れたる氣色にて南大

門に休息せらる事の外直也人とは不見奇異の思ひ

を成し大師に告中大師出給ひて此人々招請中門

稲荷大明神

一茂藤理村に在り十月四日に祭る阿蘇二ノ宮勸請さ

一西寺村に在り十一月三日にまつる

赤馬場大明神

同

一高島村にあり十一月三日に祭る

天満宮

一片角村に在り菊池川の上に在り十一月三日に祭る

鵜木八幡宮と稱す

八幡宮

一高田村に在り十月二十日に祭る阿蘇一の宮請さ

鷺宮大明神

一土豊水村に在り十月十九日に祭る

一北原村にあり十月十八日に祭る則古への長編寺也

天滿宮

一山崎村に在り十月十八日に祭る八代より勸請

觀世音

妙見宮

一上妙見村に在り十月十八日に祭る百濟國濟明王を

崇むる田一説には濟明王の子三人来朝しと現し

給ふさ兩説如何と洞音の説也或説に八代の妙見を

請さいふ是正説ならん

一瀬戸口村にあり三座相殿十月十八日に祭る

妙見宮

熊野權現、八幡宮、天滿宮、

一深川村にあり佐保川八幡宮と稱す委は菊池川の條

に出る十月十八日に祭る

八幡宮

一荒牧村に在り十月十七日に祭る

天滿宮

一北古閑村に在り十月二十五日にまつる

同

一高野瀬村に在り十月二十五日にまつる

同

一妙見村に在り十月十八日に祭る又八月二十五日に

も祭る

一今村にあり十月二十五日に祭る

天滿宮

一野間口村にあり十月二十四日に祭る

天満宮

地藏

一藤田村に在り十月二十二日祭る兩社一所に御鎮座

案するに五霊は御霊にあらすや御霊山城鎮座御靈

八所 吉備靈 崇道天皇 伊豫親王 藤原大夫人

橘逸勢 文屋宮田九 藤原廣嗣 火雷天神也神

社便覧に出る

五靈宮、天滿宮

編者曰肥後岡志を見るに嘉恵村にも鷺宮大明神社あり社帳

寛治年中菊池氏勧請之さあり

いふ

一香加鶴村にあり十月十日に祭る

天滿宮

一寺町村にあり十月八日にまつる八大龍王と見へた

八龍大明神

一新古閑村に在り十月四日祭る

天満宮

一赤星村に在りはいたか天神さ稱し奉る十月八日に

まつる昔正觀寺八世寰中元志和尚は合志尾たり村

の産に而此神に中子したるさいふ夫故にや聰明才

智有て三度渡唐し終に唐土にて死去さいふ柿原成

道寺之開山也又妙見に居たまふ筑前も此神に祈願

して奇異有ける此社菊池家勸請といふ何の代さい

ふ事未

天満宮

一姫井村に在り九月二十六日にまつる阿蘇乙姫勸請

清水の遊に森を御神と崇む因て姫井名るな

乙姫大明神

一岩本村に在り九月二十五日に祭る

一大塚村にあり十月十七日に祭る

天満宮

一岩木村に在り十月十四日に祭る

一加恵村に在り十月十四日にまつる

寶満宮

八幡宮

一柏村に在り十月十二日に祭る

天満宮

編者日肥後國志を見るに水村には能野權現なし同社は水島村

にあり然して祭日は十月十日見にたり此の水或は水島の誤

ならんか

紀伊國牟婁郡熊野速玉神社速玉男事解男伊弉冊

云々熊野請さいふ

ハヤタ

一水沢村に在り十月十一日に祭る延喜式神名帳に云

ナカノテ

熊野權現

一羽根木村に在り十一月十一日に祭る山城國岩清水

の講

八幡宮

一村田村に在り十月十一日に祭る

天滿宮

宜しから

ざる歟伊弉諾尊軻遇突智を切て三段としたまふ其

一闇罐神と成る闇麗神は龍神也此故に帝雨乞の時

丹生宮と貴布稱さに御祈有事也

俗説に往古此御神舟

乗り來此所に跡を垂給

ラテ

一神來村に在り九月十五日に祭る二十一社記に云貴

布稱社賀茂の攝社也延喜式神名帳に云山城國愛宕

貴船大明神

をいはふなり

一西寺村に在り九月朔日に祭る延喜式神名帳に云信

濃國諏訪郡南方刀美社健御名方神也吠記載 右兩神

諏訪大明神

日にま

一岩木村に在り阿蘇二宮の請也故事未開九月十

村ニ作ル

イニ

二の宮

▵之加修覆時に天文年中菊池家没落加藤

氏入國之後家臣佐々備前給之時祭田被„„没收|爾來

は河原一村は產神と相成申候神職は大同以來日置

氏代々相勤る承る祭禮は九月十三日也寬政六年

迄九百八十八年に成る

肥後文獻叢書第三巻

貴布稱社闇神 伊井諾 初は木船と書き後瑞験によ

りて貴布稱と改む今此所にて木船と書は天滿宮

一大林村に在り九月十五日に祭る按るに神社便覧に

鹿兒島神社大隅桑原郡に在り是を大隅大明神と崇

みたるには非ずや

大隅大明神

一同村に在り杉森有て愛は水わき出る多田を養ふ

此御神は阿蘇の宮を勸請と云

天木大明神

!同村に在り九月二十五日に祭る

一出田村に在り是は世上一統稱する處之若宮にあら

す菊池二代經隆公の墓所也是を若宮さ崇む

天満宮

一上古閑村に在り九月二十四日に祭る

若宮

一西寺村に在り九月十九日に祭る

天滿宮

一夜間村に在り九月十八日に祭る

阿蘇大明神

たる木さて社前に松大

船を懸たる

跡さてさ井手さの間に舟形の池有り祭職の時酒をふよし

若宮

一木野本分村に在り上七社の四番に立せ玉ふ御神也

延喜式神名帳に云山城 葛野郡松尾神社一座大山

唯の神一座賀形中津大神一座也人皇四十二代文武

帝大寶元年泰都理始建三殿一品儀同三司所作

の二十一社記云松尾証垂跡の縁記鎮座の時代古記

不慥又比叡の神同體歟と見へたりさ云々大同

元年九月二十九日此所に御影向といふ永正十一年

松尾宮

一建立の永和四年より寛政六年迄四百十五年に成る

一九曜櫻御紋附挑灯貳張松平讃岐守様御前様八重姫

様より御寄進時に實暦三酉年九月六日也

一今櫛子岩間戸豊岩間戸居ます門印菊池氏の時立し

儘也折々柱の根切有し故卑くなり侍る

一錦の旗軍配閏扇奉納の年月未聞軍配團扇は今

傅れり錦の旗は紛失す征西將軍奉納さ云遺物の條

下に岡有り

一御神殿の鶴田長永の木像僧形也是は武司の入道し

たるなり吉田兼好鴨長明の類なるへし其後之社司

も木像有り俗體なり長永は武政公の御聟と云長永

の妻すけ姫の墓當村内に在り

五二五

隆朝臣祭田數頃御寄附寄進狀 ||2以降代々崇

之大永亨祿之比漸及破壞,干」茲城越前守親冬歎

水

一下河原村に在り阿蘇宮勸請也人王五十一代 平城

天皇の御宇大同二年九月十三日前國司肥後守粟田

鷹守朝臣の奏聞に依て紀熊人阿蘇第四宮比咩御子

健磐龍命之

大明神網屋競宮世

河原村金鶴山に勸話 後三條院延

久二年菊池左近將監藤原則隆朝臣肥後を賜り菊池

に下向に之後當社再興菊池二代右近大輔經

四宮大明神

御當家御尊敬之社也五穀成就の祈禱年毎に行はる

本分龍德池田道場米原木山等の氏神なり然さも御

趾之修覆は氏子よりいたす事なし 御上よりの營

也五穀成就の御祈り有る趾なれは此御神の御惠と

も郡中の人に加はらさるはなし郡中の人はつまひ

かに察してろそかにおもふへからす御中の

酒家格別に信仰す是其由緒あらん 予未聞 大同貳

年より寛政六年迄九百八十八年に成る祭禮は九月

二十九日也

豊後國大友修理大夫源義長祈願の事有之田 寄

附之狀有」之

深川村 大林寺村 北原村 右之村々より年行司

瀬村 正寺村 輪足村 片角村 今村 赤星村

村神來村 山崎村 袈裟尾村 玉祥寺村 高野

山崎村袈裟尾村

一九月九日の御神樂入料を昔は 雨西寺村 野間口

一隈府町は此宮を九月九日に祭る北宮村は十月二十

一日に祭る御きぬ替は十月二十一日にあ

元都は熊耳山正觀寺住僧文英之事也

元都筆之

熊嶺沙門

宗善右衙門尉 重次

募緑鐘井樓成

隈府之住

藤原吉次

梵鐘所施 是廨聚海外靜内空 形煎響快

妙耳妙音 匪對所對 或默或言 施會不會

忽推刀軨 頓脱縲械 阿顚迦 免障性罪

防心離貪 證眞發解 迷濁敢 倚乃賴乃

山吐晴光 翠光如畫 林漏月輝 清輝似珠

泏乎閟宮 鐵紐以掛 屢祈屢應 願轂無壞

寛文壬子夏四月 中笠翁爲銘刻之

一御神殿之御番神殿内に皆書記有り大願主藤原朝臣
武朝願主宇治氏女慈俊應永癸未六月朔日或は大願
主はみな武朝書く願主藤原道利と有も有り何れ
も應永癸未朔日記せら此内に山崎靈凪大明神の
御神體有り是菊池系圖に出る所の大夫將監隆基公
の御神像也昔は山崎村に在していへとも共所不分
明今に至ても山崎村之者當社に祭る時は末凪に居
ます山崎宮を先拜して次に當証を拜すと云今の末
庇いにしへは深川北宮兩村之間に在しを北宮村庄
屋源左衛門代に社内に移し相殿に成す中央は山崎
宮東の壹番は八幡宮同二番は新宮西の一番は若宮
同二番は春日大明神也
一昔は趾傾片角村内今水車有る近所に有して承る他
田郡平田村より昔常を請し奉りし末社有り
請三月にて有し故以前五月五日に三番の神樂有

るに牟田村より御供米さして貳拾五石宛奉納有し

そ此祭計は今にのこりて五月五日を暦年中願

替三月九日に成る

を立て奉納有しか近き比にいたっては沙汰絕てや

みしさ承る

佛以一音演說法、衆生隨類各得解、夫至教之所以

宣傳也、所以皷舞也、莫大於聲音海中乎哉、若或

聞無聞聞.見不見見、證無證證、則非痴吻之所敢

髣髴也、雖然、去佛世二千六百餘年、遠而遠矣、

澆漓浮虛、少信少根、傳而知焉者、見而知焉者、自

證自得者亦鮮矣、不見楞嚴會上佛敕大聖文殊、而

肥之後州菊池郡北宮大明神鐘銘 叙

同社鐘銘左=記ス

宗善右衛門尉重次

小比丘世姓赤星氏菊池之應流有隆之苗裔也

此社則生緣之產宮神矣令關此舉染頑筆云

又曰、如此表書誌、今神殿拜殿二字、既今成就畢、

多年之本懷、今時滿足矣、然處遠慮於遐代、積居

諸而必復可破壞、是以欲於末代爲再興、白銀百目、

爲修理添置者也、此利銀年々無滯事者、此頭何永

代可退轉哉、誠是偏仰神之威風、殊賴之崇敬者也、

仍而如件、

宗善右衙門尉重次謹造

現住常光教寺沙門惠然日芳誌焉

我大醫王 獨尊三界 應病設方 誠昏卒怠

機境冥運 圓心自在 萬靈蠢然 如瞽如聵

桢眞圓通 除煩惱蓋 六用利勳 耳根爲最

分擇二十五大士所證、圓通文殊承慈旨、一々點檢、

將來唯以觀音菩薩所證之法門、爲圓真實者、寔有

以哉、有客問曰、然則餘聖皆非耶,云不也、如此

土耳根最利、經曰、今此娑婆國、聲論得宣明、是

故被未來 世方 便門、以此根而修 圓通、超俆 者軒

知桢異、餘聖者如斯而已矣、據本而論之、則二十

五大士都無異同、無優劣矣、耳識可見、眼根可聽、

六根互用大小圓融、而事外無理´理外無事、毫端

巨海、芥子納須彌″淨名之鉢饜萬口、寶積之蓋覆

是豈善巧方便乎、宛爾而然耳、夫復是彼非此

聞者肅然曰、達哉言也、豈易聽乎、我鄉有神

祠、靈感妙應、崇信之者、罔不蒙褫、鄉之豪族重

次、以無箙鐘于懷、一日奮然'而募一鄉善信男女、

翩所摶翕然隨應者多、竟鑄洪鐘一口、以借晨昏、

然未有銘刻、請勒前之言、以爲銘、不亦可耶、

予曰、文辭莊麗、變態奇巧、非吾所能也、而見義

非無勇、且又爲結勝緣一舉者乎也,

鎮西路肥之後州、菊池郡隈府庄北宮大明神、元是

謂勸請阿蘇十二宮之一社也、創建之濫觴、其間久

遠、而不知何年何月也、綿時邈歲、而柱根搾朽、梁

棟傾斜、寢逮于荒癈焉、重大覿之不忍、累歳有欲再

興之微意、而不果素願也、今時何時乎、一天治平、

四海安泰、而政化達閻里、德澤及庶民、是以郡內

府中村市之貴賤、一志戮力,而涓流成海 纖芥

山、修造財用以備也、今茲春二月中院資始、秋九

我等合敬禮

哀愍衆生者

以上棟

迦陵頻伽聲

聖主天中天

上長押と共上との間に小柱有て是を鴨居とよぶ

印雞棲于桀の處にして水鳥の名を用ひ火をふせぐ

の凪さす類聚雑用抔に母屋寢殿の指図を載たるに

も人家に鳥居の號あり神社の惣門是より趾地さい

ふ限りをしめす物に笠木にその下との間を雞棲と

す俗に通し安き爲に鳥居とも書け全體の名には

あるべからず伊弉諾尊伊弉冊二柱の故事にかけ

て雞棲を説くのは論するにたらず明暦年中造營

之棟札左に記す

肥後文獻叢書第三巻

河原杢左衛門尉 吉久

宗喜三右衙門尉 重知

小工 拾隈府町

明暦二年丙申秋九月吉旦

肥後州菊池郡隈府庄 北宮大明神社檀井 拜殿再興

之事

右棟札裏書左に記す

宗善右衛門尉 重次

願主

西寺徳兵衛尉 勝昌

郡吏

佐分利次郎兵衛尉氏八

鶴田仁右衛門尉 隆次

匠氏

郡吏

五人

郡司

國君萬歳 家臣千秋 爲頌祝日 穆々神徳

妙用無邊 黎民豐樂 國家安全 世仰春日

道則堯天 子孫久保 君臣萬年 和光常照

威風永扇重乞願主一族、幷菊池郡隈府町中、各4助

緣之衆輩、子々孫々、繁茂昌榮、福壽增長、至祝

珍重、禳災祈褫、如意安穩而已焉、時明暦二年龍

集丙申秋九月吉日欽營之、

月上旬終成風之功也、我願既滿、衆中望亦足矣、

所奉 仰冀

とも城中能防ざける間堅固にして不落此節隈府

の菊池傳來の面も全面所薩州勢に奪れたり右能

造寺方より赤星氏を攻る時當焼失に及び漸く樓

門計殘る

居

御神を此所に移し奉る時に天正

七年なり

暦五年迄七十九年の間は人民も

擾亂に他たるなれば再興の事は沙汰たんて此門に

御神體居ませし事久しくぞ侍る其後郡中も漸く竃

のにきはひに成行まゝ御神體の假殿にましまず事

いたましくおもふまゝあるさいへごも郡司庄屋

時務に支へられて兎に角に日月をおくりしかば宗

善右衛門尉重次なさいへる者急き再興あるべしさ

御惣庄屋へも事のよしを物語る其比迄は菊池氏の

遺格いまた忘れす御祭事の武人毎に能しりたる折

に御陣屋さいふ本陣の跡なり

され鵠巣城に引退

衛門は菊池

薩州勢に而強く攻めけれ

隈部親永隈府の城を落

川を前に取廣瀬村に陣す今も村内

らるる也本郷能登は一萬五千の勢に而山鹿城村の

城に向はる新納武藏は二萬五千の勢に而の巣の

城によせらる栴北宮内左衛門は二萬の勢にて何れ

も三月十一日に發足し同廿七日に當國山本合志に

着し彼所より三手に分て城々を攻らる 梅北宮

案するに南嶺子に日鳥居の事異説多し列仙傳にの

せたる華の故事なさへかけ直に華表華標の字を

る人さへ有り爾雅第四釋宮篇に日雞棲於弋爲傑

鑿垣而搏爲塒蹴臼弋概也云云詩日雞棲于桀といふ

即是也字彙に概其月切門中板爲欄又木斷印弋也さ

註せら雞の棲號因て来れる事久し吾大日本古来よ

五二 一

一石鳥居壹基

なれは響のに癒する如く郡中の志一致して財の

費をいとはす經營せり此を以明暦二年に御神殿拝

殿末趾に至る迄ことこさく成就しぬ其節郡中より

出せる財の餘り銀百目有しを又修のたつきご是

を凪に附置ける印其節再興の棟札に銀百目さ書載

せたるは是を云也寛文十三年四月宗善右衛門鐘を

籍させて寄進しける其以後は怠慢なく折々修理

る中に隈府町中より御神殿の基を高さ三尺五寸程

高くない土をもち立御神殿北にしさる事壹間

程御番等の彩色を仕直す時に明和八年卯の七月

下旬也大工棟梁蟹穴村善九郎所の役人は隈府町別

當右衛門同庄屋善十郎御惣庄屋は三池長左衛門

代庇司は緒方相摸代也

は其先のうやまひしに背き且は明神の御恵

みをわするゝに近し其輕重により冥福もまたおそ

るへしつら(この宮居の興廢を按するに菊池家

全盛の時御祭の節は村々におふせて柴山を出させ

古記に河原村より柴山三ッを上るさ有り案するに此山

ふば屋也御能場に是をかざり奉納せしこさなり

能な

て後世の鑑となりしも此御神の冥福を垂給ふ

深く侍るとぞ覺ゆる昔は菊池郡中その年の新穀を

新葉苞につゝみて上げ来りいまた北宮に奉納せさ

るうちは新わらを草鞋なさには作らざりして承る

今も共遺風俗有九月九日の御祭に秋たなつ

物何所にても奉るものいかにも新わらを用いる者

往々に見およべりこれいにしへの遺風をわすれぬ

民といふべし此等の證を見て仰願は古をおもひ御

神徳のすたれたるを起し怠れる祭事を賑す者あら
はそのなすわざもに癒し神明の冥福長く子孫に
もかふむるべし夫神は聰明誠一ににして冥々の
ちより善をたすけ悪をす若先襯以來此宮の御恵
みを蒙りし事をおもひ一歩をはこひ一拜をなすさ
きは信仰の輕重により其幅をかうむる事明也若む
かしの旨趣をおろそかにおもひ此宮居を疎く心得

さして 山鹿彦次郎重行有動一族四千五百餘人籠
らる永野の城には富田安藝直方高橋藏人池邊一族
其外名有侍三千七百餘人相添籠らる鵠の巣の城に
は多久大和古庄右京秀家池邊土佐治秀池邊勘解由
左衛門河原左京以上五人を大將として六千三百
人籠らる隈府の城に隈部親永自身侍八百雑兵四千
餘人籠らる薩州より六萬の人數を三手に分て寄せ
山鹿城村城には嫡子式部大夫親安大將を
かにこれなころだ道半是をほいなくおもひ薩州島津修

理大夫義久を頼み隈部を討んこ示合て翌天正七年

三月廿一日薩州より人數を指越さる親永も兼而用

龍造寺に人質

行はれ御神輿行幸ましけり 今の上市場下市場は通

筋に而みこし休めの處

に能を山の能さいふも屋室をかさり御神輿を

あかめ奉る故さみへたり其後菊池氏嫡々断絶し跡

を赤星家より繼事三代其時赤星家隈部親永と棄て

不和なりしに隈部親永の賴に付天正六年四月十八

日に肥前國龍造寺隆信より舎弟政家に軍兵貳千相

添て赤星備中守統家入道道半の守りける隈府守山

の城を責落し隈部親永に渡して歸陳す道半は竹迫

の城主合志伊勢守の方に行しそ油時道中二人の男

境を立て各園の造を定め 元明天皇岡造を

岡司さ名つけ回郡鄉村の名を定め玉ふ時に速瓶玉命

國造と定めたまふ也是につけても往昔より御神

徳の赫々たる事誠に仰て信すべく菊池氏代々も

に阿蘇の御社を御渇仰により六代隆直公には御霊

夢の御歌有り

上岡

人皇十三代成務天皇の御宇に國々の御君に分てい

ちしるしき徳ましますをゑらひ給ひ此をのみや

つことあがめ給ふ(印)するに景行天皇帝國の

さ稱し奉るならん

部中の氏神なりの女をめざり生ます御子を

國造速瓶玉命と申奉る御陵は阿蘇手野村に在りそ

のほとりに北宮と崇み奉る是當社の本社也

村北に富たれば北宮國造さ稱し奉る事は計

りませし時草ヶ部吉見乃神

今の南郷野尻手永草ヶ部の内

蘇も一回に而あり

一北宮村に在り北宮と申奉るは人皇第一代 神武天

皇第二皇子神 八井耳命 第五王子 鍵盤 龍命肥後國

に封せられ 昔は阿國京北國さて阿 大和國棚原より下

北宮

神社

宮原村に陵有り其側に吉見

吉見草ヶ御兵九河らにとまる折から御神輿を休め奉り御神殿經營の

間は此所に御假屋をもうけ御滞座ましますす今下河

原村庄屋九兵衛屋敷近所に其跡穢さす殘り侍る

衛門子孫也今に至迄代

酒を呈するも也

誠に御武運御E

領内五穀成就の爲に御請なれば殊に賑々敷

となんされればにや菊池氏の御代継し事二十四代に

及んても終に朝家を背き奉らす金石の忠誠楠氏と

肩を比し名を正し勤王の略しは勝利を得玉ひ

の

し阿蘇の畑のたえぬかきりは

これより彌盆尊くぞ思ひたまひける又隆直公阿蘇

に参籠の時神酒を戴き玉ふ土器の上に鷹の羽二つ

忽ち降下りしてなん夫よりして紋を鷹の羽に改め

給ふさいふ是より代々の尊敬いと深くこそ有し又

阿蘇山上に菊池鳥居さいふてあるは菊池代々の

所也わきて十六代武政公に至て尊崇さらなるに

因て御神託有けるは國造を勘請し給へして是に

つて北宮を武政公永和四年八月十日に請し奉り

御神輿は七重八重に供部し奉り二重峠を越中久

保田通り下河原村之内日向に暮をゆぶつけ鳥と

あさくともふかくたのめや菊池川

高六十六石餘

長野村

米禾麻苧楮宜し

東は斑蛇口南は寺小野西は小楠野箭筈嶽此境に在り

砂疆檻 高百二十二石餘

虎口村

東南は雪野西は市野瀬永野寺小野米宜し

疆壒 高二十六石餘

染土村

は永野南は染土西は市野瀬北は虎口米禾宜し楮麻の惣高二萬六千五百八十四石八合六句六才籟清正記

多産す其品宜し

に見たり

加藤氏の代菊池郡

高四十五石餘

東北は豊後の日田郡津江山南は生味西は虎口楮茶宜

尾野村

東南は寺砂疆檻 高三十石餘

小楠野村

能植す

す

東は小楠野南は市野瀬西は稗方大林北は上永野楮を彊艦田少し 高九十五石餘

砂彊墖畠多 高四十七石餘

白木村

東は斑蛇口八

南は染土西は虎口米禾宜し麻苧名產也

斑蛇口村 穴川、鳳儀、

虎口西は白木格を能植し今半尺と書く大なる誤なり俗吏急劇の砌便利に隨

ひ省略して文を失却する事往々如此可悲夫村

合四十六箇村惣高一萬四千四百七石餘

彊檻郡惣高二萬八千三十七石七升八合軍役高二萬六

千四百六十三石二斗六升按するに菊池風土記巻二

す石工多し石を取場所有り

砂稗方村

彊檻 高二百九石餘

餘

池田村

疆檻灰土 高三百九東は白木南は池田西は宮原東は大林稗方西南は木野本分北は木山

は山鹿郡水野米宜し

疆檻沼有り 東は阿佐古砂疆檻 高三百十九石南は池田西北は山鹿郡永野米禾宜し

阿佐古村

七石除

餘

米原村

云

高二百九十東は白木村に在り是其證也

一石餘

南は稗方西は木山米宜し楮能生す

木山村

疆艦 三石餘

東は大林南は木山西は龍徳北は池田米宜し楮能生す

大林村

東は木山米原南水岡田西は山鹿郡庄村石淵木野川

砂彊檻 高百九十二石餘

高七百七石餘

同

道場村

東は道場南は木山西は本分北は池田米宜し楮能生す

本分村

砂彊檻 高二百六十石餘

彊檻又灰土沼も有り 高九百八十九石餘

村

木野本分村 龍德堤、

木船″あだか、北は山鹿郡下永野村田畠木山米原道場大林龍德池田

入交る此小村の黑蛭堀切格に宜し御高札場有り按す

るに今龍徳木山道場邊木野谷さいへとも昔の城主

申しゝは木野本分の事なるへし木野大明神と黑蛇

宮原村

高二百七十高二百三十高四百七石餘

東は大林西は木野本分南は米原北は道場麗德此所疆

艦さいへごも殊更土性強しと北十七石東は白木南は龍徳西は宮原北は阿佐古米宜し楮密柑 東は西迫間白木南は袈裟尾西は木野本分檻楮を能植

を能植立る田畠入交る

岡田村

東南は邊田水島西は木野川山鹿郡境北は本分米禾宜

東は山崎南は野間口蟹穴西は岡田北は本分女績を能 疆檻灰土錯畠多高二百一石餘

する者多し

瀬戸口村

黑疆艦又黑壌有り畠少沼田多 高四百五石餘

水村

島

東は邊田荒牧南は高田西は鍛冶屋川玉名郡境北は水

東袈裟尾南は野間口西は水次北は堀田西瓜名產也

疆爁田地多 高五十八石餘

黑疆爁畠多 高百五十九石餘

寺町村

山崎村

東は邊田南は寺町西は玉名郡鍛冶屋村北は本分木野

東南は羽根木西は高田北は流川邊田

川此所に出る玉名山鹿の郡境なり

黑彊瑗畠少 高四百一石餘

彊塭田地少 高百三十四石餘

寺町邊田

荒牧村

東は流川南は高田西は水島北は本分女能績す

水島村

東は荒牧南は加恵西は玉名郡袋田北は黑彊濫畠少下田多 高五百六十三石餘

黑壤輕脆,高四百九十六石餘

邊田村

高田村

東は岡田南は荒牧西は邊田北は本分

東は五海南は高島西は梶屋川限北は高田米禾宜し

黑彊壒 高五百四十八石餘

黑壤畠多高三百二石餘

加恵村

流川村

東は孤入南は合志郡林原菊池川限合志郡境西は迫間 東は水次西は流川北は本分南は迫間川

川玉名郡境北は加恵村

黒壌畠多沼田多し 高二百六十五石餘

黑疆燼 高五百三十石餘

瓜類宜し尤此村懸内神村疆檻にして米禾宜し

高島村

東は隈府南は西寺西は蟹穴北は袈裟尾山崎川越なり

東は宮園南は板井西は高島北五海

高七百六十八石餘

黑野間口村

菰入村

靈感院様兩度御成有之佐藤形助宅本陣と成る

東は蟹穴南は甲佐町菰入西は加恵北は羽根木西郷

黑彊爁 高三百四十五石餘

東は深川南は廣瀬西は蟹穴北は野間口下地なり米多

悪し茄子に宜し

五海村

黑壌 高八百四拾七石餘

海蟹穴入交る

寺村

東は羽根木西黑壌 高千六拾九石除

黑疆濫畠少下沼田多 高貳百八十七石餘

上西寺村

西鄕村

深川米禾宜し

海入交る

東は赤星川越なら南出田菊池川限西は廣瀬古閑北は東は蟹穴南は五海西は西鄕北は荒牧地方蟹穴西鄕五

疆爁田多畠少 高貳百四拾八石餘

黑疆爁畠少下沼田多 高貳百貳拾三石餘

村田村

羽根木村

下御簗御村内に在り

賣出す此村大工多し

東は北宮南は村田西は西寺北は大琳寺南は疆艦米宜

東は野間口南甲佐町西は羽根木北は水川越なり土

黑壌田多畠少 高三百七十五石餘

黒疆畠少沼田の下田多し 高百六十石餘

深川村

蟹穴村

深川文右衛門惣庄屋役勤しより今以手永の名と成

羽根木西郷五海と入交る茄子に宜し早く作りて多

南は五海西は加恵北は荒牧地方羽根木五

壊 黑疆艦 高三百六十九石餘

を立てたり米禾宜し

高九十九石除

袈裟尾村

深川手永

右村總而三十二箇村惣高壹三千六百三十石七升八

合一勺三才

は廣瀬古関西は南古閑南宮園北は西寺

高四百二十四石餘

東は南古閑南は拡入北は五海西は高嶋

新古閑村

高七百四十四石餘

甲佐町村

東は新古閑南は合志郡板井西は拡入北は甲佐町米禾なる

宜し

疆檻 上地也高二百三石餘

宮園村

東は木柑子南は合志郡板井内岩瀬西は宮園北は新古疆艦 高百二十三石餘

閑烟草名產なり

高五百十五石餘

手永會所有り

東は木柑子南同北は廣瀬古閑西は新古閑

夜間村

東は片角西は深川北大琳寺南菊池川按するに此村以

前は深川内歟片角内ならん北宮御勸請の後別に村名

疆爁田多畠少 高百九十一石餘

北宮村

東は正觀寺南は北宮西は西寺北袈裟尾川越也立石村

は懸内箕を作る

黑壞田多畠少 高二百六十四石餘

東は正觀寺南は隈府北は玉祥寺米禾宜し

大琳寺村

土性強く上地なり 高百四十四石餘

高野瀬村

東は西迫間南は高野瀬隈府川越也西は袈裟尾北は稗

方米禾宜し此村大なる水車有り村の工匠水車に巧

b此村昔は西迫間内なり玉祥寺出来て後別に村名と

玉祚寺村

東は玉祥寺南は立石西は山崎北は稗方米禾宜し深川

黑壌 高百十四石餘

東は伊萩北は河原南は妙見西は赤星禾米宜し

大塚村

赤彊爈 高二百二十七石餘

東は出田南は合志郡坂井西は夜間北は大塚

上妙見村

黑蟻 高五百四十五石餘

東は河原南は赤星北は藤田西片角川越也

木柑子村

高三百五十四石餘

草宜し

今村

東は出田南は木柑子西は廣瀬古閑川越也北は村田烟

東は河原南は藤田西は築地川越也北は佐野村

高百四十石餘 五百七十七石餘廣瀬古閑

黑壤

高二百二十石餘

廣瀬村

木庭村

農業の隙に蓑を作る烟草よろし

東は河原南は今村西は片角川越なり北は木庭牛房名 東は妙見西は廣瀬北は村田南は各志郡富納村也此地

産なり

壤 高千二百五十一石餘

彊檻 高二百六十八石餘

出田村

藤田村

東妙見南は出田西は村田川越なり北は北宮米禾宜し

た李

高千石餘

赤艦

赤星村

宜し

東永の名申候

東は姫井南は今村西は藤田北木庭昔は河原村と赤疆塔 高二百二十七石餘

高九百三十九石餘

妙見村

下河原

云慶

安年中始て中河原と號す蘿蒿名產なり種子楮宜し先

年ねりまみやしけて二種蘿蓄の種御渡有之 當村

杢左衛門御惣庄屋役勤し以來當村の名を手永名にし

は上妙見村南は合志郡住吉村西は赤星北は今村米

不石餘

子よろし

高貳百九拾五東合志郡平村南は同郡妻越村西は上妙見北下河原種

生些村

黑壞 高七百四十七石餘

生味内

道園

伊 岩木共

東は生味内瀧原種子宜し

高百六拾四石餘

南は合志郡小原村平村西は伊萩村東は姫井北は下河

伊倉村

黑壌 高三百六十石餘

岩本村

黑繮壏 高貳百五拾三石餘 五拾七石餘市野瀬

東は鞍嶽南は岩本西は河原北は四丁分もやし名產也

西迫間村

高百十石餘

苧格宜し農具細工する者多し

姫井村

東は土豊水南は高野瀬北は西迫間西は同村内川越麻

高貳百七石餘鈷 百六拾九石鈷

彊壏赤黑錯 高貳百七拾六石餘

四丁分村

東迫間村

池も拵るなり

東は生味内道園西は西迫間内市之瀬南は平野北は染 西は木村此内に菊池川の源廣河原有り此村にて菊

米禾麻苧大に宜し此處宮山大竹を生ず

東北は豊後津江木地屋村北は同程野村南は四丁分

赤疆爁 上地也高三百五拾四石除

高四百四石餘

雪野

原村

は雪野

東は原村内佐野川越也西は土量水南木庭川越なり北 御高札有り村内の観音嶽石細工に宜しき美石出る

東は原村内戸四郎村西は雪野南は鍋倉北は斑蛇口村

赤疆爁 高百拾八石餘

東南は東迫間川を境とす西は玉祥寺稗方北は白木

村南は原村内鍋倉西は平野北は菊池風土記巻二

黑壞 高七百壹石餘

隈府南は大琳寺北は土量水 く蓋字の誤

河原手永會所有り此村往古菊池城院有し時ふ道村

内也因で往古は馬場村と云院馬場を略して名付たる

べし菊池氏の時に至正観寺建て後は古名すたれて正

観寺村と呼此村米粟よろし農具材木を取出す者多し

隈府

今士豐水書

ドリコウヅ

高五百貳石餘

黑壞

正寺村

河原手永

つべし領は我物に成切りたる詞拝領物なごみつ

へし是にて支配領この遊び明か也故に御上に

かけていふ時は何守様御領分こそいへ何守様御

手永とはいはず手永の詞御領主様方にかけて云事

未例を聞かす是手永は支配の意なれば御領主様

方にかけて云は不敬にはあたる間敷哉手永と云ば

共組を支配する惣庄屋などに懸ているこそ相な

らめ名を正すは政の專務なればか様の事古のご

(何某手永と呼たらば他邦の人もいちはやく合點

仕らん如何

東は輸足西は拾五石餘築地村也東は木庭村西は正五一 一

大柿村

東は原村の内左野川越西は東迫間は木淀川越也

北は雪野

赤艦 高貳百三石餘

東は平野西は西迫間南は輸足北は雪野

平野村

赤軀坛 高百九拾六石餘

土豐水村

トリウブ

高武百四拾貳石餘南今村川越なり西は北宮北は正觀

寺村烟草によろし

寺南は片角之

内に當る北は土量水上御簗場此村内の築地村に在

り御仕置も此所にて有之米粟大宜し

片角村

黒赤疆

土性強上地なり高四百八石除、四

恰足村

輪

東は正觀寺西は立石南は北原北は高野瀬御高札有り

町今の所に移る時正寺高野瀬より地を割出て隈

府分にせして申傳ふ古の町は今の古町田西に懸て有

しとなり

右之ごさくなれば今田底の村所昔は多く野にて人

流通を一村の名するは誤也

柏原

之

今輪足ご云古記に渡共かけり

上甘さ云村は無之

無柏原さは二ヶ村にて此雨村の間菊池川

今の穴村上甘の轉語ならんか

この轉

考ふへか

無しらご

海

子養

五今は今

ば

清濁夜間さ云

辛家 違

さ云

夜野本分の地也

城野

水島

木野さ云今の

上を上郡さす四百万以上を中郡とす二百万以上を

下郡さす百戸以上を小郡さす然ればそのかみの郡

と云物は家十軒より百軒迄の所見へたり古へ生

すくなくして戸口も多からざる事是にて推しる

べし今時は少々の楽器にも戸數十軒に滿る所あま

也太平日久しく古より人民の繁昌なる事しるべ

しと云余日此を以てみる時は菊池も古へ中以上の

郡と見へたり菊池郡北辰を去る事三十三度卯は阿

蘇郡に境ひ子丑寅巳午は合志郡に境ひ酉戌亥は玉

名郡山本南郡に境ひ子垂寅は山鹿郡及び豊後日田

郡津江山に境ふ名和抄に載る所の菊池郡の郷名左

に記す

肥後文獻叢書第三巻

今加恵かいこ五か

の山の闢今からすぎな夜

ん若云れ

んなら養び

歟は村繫か様に成り按するに支配とは人の物を預

さばく詞己が儘ならぬ意有り御代官所の境木共に

何某支配所有り又は御小間物支配役などの類見

當御代に始れば前御領分の國語にて付け給ひたる

もの然る時は手永さ云義も支配の意にて雨豊に

自分支配内の事なるべしゆへに菊池にても惣

庄屋杢左衛門代迄は河原杢左衛門手永と手永を惣

庄屋の下に付て呼しよし承る然る時は豊抔同

意の詞也さるにいつの比よりか手永の文字を惣庄

肩書に何御手永と記て手永の文字を御上に

云詞を聞かす何郡何手永と云時計にいへり私云手

永

一當御代に手永と云事始る手永は豊前豊後にて申詞

也彼國にては大庄屋自分支配村を私手永と申す是

自分の支配内云事也今 本藩の俗語に手永

一加藤氏の代は千石に一大庄屋共大庄屋一人の支配

分を一組と申しゝ由

家すくなかりして申傳る事實さる事なり菊の池も

野中に在しを則隆公下向の節に切ひらかれし事ぁ

きらか

一右國郡郷村の事按するに 景行天皇諸國の名を立

給ひ成務天皇國郡の境を立て又國造を立給ふ

元明天皇國造を國司と改め郷村の名を定め給ふ順

和名抄に郷の名迄はたり昔 王朝盛えし比迄は

人民多からずゆへに村は郷長より統たり後は人民

多く成て郷も又増たりと見和名抄に載ざる郷名

も有り其後人民彌増多くなりて村ことに長を立ち

れ郷名入用ならずいつとなく郷の所境しれざる様

郡村

同同迎町三十五軒

同寺町二十六軒

同下町七十四年

同中町百三十一年

同横町八十軒

一隈府町上町百十五軒

一守山城追手口西覺寺前、

より隈府切明町構迄三百三十

の大道

八間同所より御本丸跡迄千三十三間丁にして十七

丁半也堀の内入口より坂口迄三間坂口より

御本丸跡迄百間隈府上町搆口より堀内入口迄百三

十三間

四里三丁四十四間

切明町四十二軒

同藪内三十八軒

町内惣軒數合五百四十間

一條院の時宋太宗雍熙元年に當る僧然入宋の時

言上る也と云余日然れば此時迄は村には長なく鄉

より兼ねたり因て村數を繫げす又制度通日 德

天皇二年改新の詔を宣ひ制法を定らる此時に天下

の郡を三等に次第を立て四十里を大郡さし三十里

以下四里以上を中郡とし一里を小郡とす何れも大

微小領主計主帳等の官有り里と云ば道のりの里に

あらず此時五十戶を定て一在所さして是を一里さ

一里こさに長一人有て是を掌る 文武天皇大賞

年中に命を定めらるゝ時には郡を五等に分て二十

里以下六十里以上を大郡とす十二里以上を上郡さ

す八里以上を中郡とす四里以上を下郡さす二里以

上を小郡さす此時も一里さ云は家數五十軒有所を

云云千戶より八百万迄の所を大郡さす六百万以

に成れり 王朝盛らし節は國司は京より任せられ

て下り郡司は其所の人を撰び任せらる和名抄に日

本の國は凡六十六郡は五百九十八と有り制度通に

日文獻通考四裔考之内に日本の事をあらはせり

内に五畿七道凡三千七百十二郷四百一十四驛八十

八萬三千三百二十九課丁さ有り是は本朝の

一菊池川筋に在り上簗場は輸足村内簗地村に在り下

簗場

コウ

共灌漑左に記す

大林稗方龍徳道場黑蛭瀬戸口等之稲田を養ふ

右之外鍋川杉尾川 懸幕川 楠川 木落谷川

有さいへごも皆出口より程なく菊池川へ流入る仍

而略､之

一大林村内エザリ稗方村内高星二筋より流出壹里巴

初田川

一菊池川の内にて深川村八幡宮以前御鎮座有し邊を

さほ川さ云緒の他此所を佐保川と名付るに二説有

此所にては菊池川竿の如く直に流行(故にさほ

川云云此遊毎年四月廿日の夜螢夥敷群かり集

川の上に竿をわたせる如く一つらに續き殊に奇

觀たるによりさほ川と名付云何れか正説たるに

や尋ぬべし

佐保川

ぞ

寺三ヶ寺に頼み卒度婆を建て一七日讀經有けるこ

肥後文獻叢書第三巻

流木野川に流入り又七合流て山鹿郡内江の瀬

に流入る一同所より原村内永山通阿蘇郡當郡の境鰐の石迄

一同所より原村猪無田通阿蘇郡菊池郡との境水無

川原迄四里五丁三十一間

一同所より當郡水島村通玉名郡境迄一里六丁十六間

一同所より廣瀬村通合志郡境迄一里十六丁

一同所より妙見村通合志郡境迄一里三丁

一同所より當郡班蛇口村内穴川村通津江柿ノ谷村境

一ノ坂迄三里三十三丁但歩道也

一同所より豊後日田郡木地屋村通堺迄四里廿三丁

一同所より當郡生味村通豐後津江堺札木まで三里三

十丁

一同所より豊後日田郡程野村通堺迄四里二丁

一同所より豊後日田郡津江さ當郡原村之内伊野村さ

の堺迄四里二十八丁

一隈府御高札場より熊本御高札迄六里

薬は赤星村深川村の交ひに在り

編者曰、木下氏本に左の書入あり

下第一旦深川村限井手に掛直りたり其より此井手下深川を初め

兩西寺南古閑甲佐町の村々田方井手添の分秋に至り水勢夥敷な

り故稲井作湯氣強く不然に至り難儀に及び居たりし處天保

七丙申六月より猜又本川筋以前の簗場に吹まりしなり

一原村之内若木の南の出口の水不殘四丁分 村内尾

川と申所に流下り夫より姫井岩本伊萩村の稲田を

養ふ故岩木川と云其末合志郡の内に流下りては又

岩木川

一此井渠辰巳川をせきあけて水を通す寛永元年申十

一月十一日に事始り同二年酉の六月七日迄に成就

河原杢左衛門代也此節も余か先滥江藤右衛門に

御祈禱被爲仰付此井渠稲田を養ふ所 今村

下河原赤星也

今村井渠

此川四丁分下河原藤田の稲田を養ふ

に出水有り其北の出口の水不殘四丁分村に取水

に因て古より此水口を四丁分川の水上さいふ又河

原村を通る故に河原川とも云下に至て河原内の中

原前を通り辰巳の方より戌亥を指して流る故に此

所にては辰巳川と云又辰巳の共云藤田村の前に

て菊池川に流入る出口より菊池川迄三里拾五丁其

流灌漑左に記す

一原村の内若木といふ所に小高き所を隔て南北兩

河原川

藏人勢

を引率し永野隈部の城に向ふ親永も永野の城を

出川をはさみ雨軍に陣を取る翌日の戰に

赤星藏人馬に騎り短兵にて隈部の陣に打てかゝる

時に隈部か陣より雨の如く射る矢に赤星人馬の

右の膝を射させ馬より落てよけを枕に伏し終に敵

の為に害せらる夫より 其所をよけ枕さ號し此川

を合勢川と名付て川の上に其節兩の死骸を埋

塚今に在り此節親永勝軍の爲に妙音寺照蓮寺正

五〇七

出

一此川出口木野谷内金頭と云所より出る前は木山村

向ふは龍徳村の内此所永祿二己未年隈部親永曽て

木野親政の領地阿佐古村八十丁を親永死去之後

星道雲に望れしょり手に及ぶ

腰部軍說「赤星合勢川

アフ

一菊池郡阿佐古村の内横尾より出三里拾六丁流て玉

名郡中富村境に入る稲田を養所阿佐古村宮原兩

本分瀬戸口水島也

合志川共此川の水口は若木の出水迄にあらす伊

萩村内迄所々よりの出水又は小川も加はる末は合

志郡妻越村へ流行若木より妻越村境迄壹里拾九丁

木野川

一元禄十四年八月より事始り同十六年三月に成就井

手長さ貳千三百貳拾八間御積方之役人志水清右衛

門米村傳藏野尻仁右衛門也御郡代塚本彌兵衛御

惣庄屋河原杢左衛門深川甚右衛門代なり此節も余

西迫間村井手

右古老の申億るまゝをしるす

此川の分流灌漑左にしるす

さらに音なし山の瀧津瀬

岩波を鞘にかけて松風も

見へすと云此所を勢返しと名付る事は豊後津江

の長谷部山城守信經兼て菊池さ不和なりけるか武

光公此所に逍遙有しを信經聞付幸の事とおもひ手

勢三百餘人襲來しを武光公総貳拾餘人にて追散し

首を取給ふ事百餘級に及ぶ信經打負引返しける所

故に勢返と名付と云寶暦の比秋山玉山先生于か家

翁な同伴し此所に遊覧其前返旌瀑と書て詩なさ

作給ふ今文人返旌瀑と書するは玉山先生に始り

此川迫間村内にて瀧有り鮎返りと云そのかみ妙應

院様御成有て御歌有り

的銃形の石のみ残れり餘はいつさなく潦に流

一此井手出來の時代未聞稲田養所高田荒牧也

右之外に小井手有り略之

荒牧井手

一水次村内也出の時代未聞此井手稲田を養ふ所

岡田流川邊田寺町水村也

島井手

一山崎村計の稲田を養ふ出來之時代未聞

山崎井手

一加藤氏の代に出来ると承る横田井手共此井手末

深川井手さ會合して神野間口五海西郷蟹穴北古

閑南古閑の稲田を養ふ

一此井手袈裟尾村計の稲田を養ふ出来の時代未聞

神來村井手

袈裟尾村井手

一此井手稲田を養所玉祥寺袈裟尾村等也出の時

代未聞

玉祥寺村井手

か凧先澁江藤右衛門御祈鳶 被爲柳付」候此井手

稲田を養ふ所西迫間村玉祥寺村等也井手口より玉

祥寺村境迄千三百拾間也

一加藤氏の代に出来る此井手稲田を養所赤星出田

赤星井手

一加藤氏の代に出る東福寺護法堂の遊正観寺村内

以前兩寺の境を堀通せる此井手稲田を登ふ所輪

足村正觀寺村片角村北原村大林寺村隈府北宮村神

來村野間口村也

築地 手

一元禄十一年寅二月事初り同十四年己五月成就井手

の長さ六千六十三間井手口破所横三十一間竪九間

原本村の下堀切道浚所三千三百九間也御積り方御

役人志水清右衛門米村傳藏野尻仁右衛門御郡代塚

本彌次衛門御惣庄屋河原左衛門深川甚右衛門な

b此節余が佩先澁江藤右衛門に御祈禮被爲三仰

付」候此辨手稲田を養ふ所原村四丁分村木庭村下

河原村藤田村也

原村井手

五十一間也當郡内計の流如此末は高瀬に至海に

入る此川原村の内細永に大なる瀧有り河苔は瀧よ

り上に生すのり方役人當時原陸右衛門と云此河の

分流して灌漑する所左に記す

田を流るれ共源にして雨迫間村の中を流る事

長き放追間川と名付たるにゃ此川上長野村内に勢

返しと云瀧有り左右共に岩石に白理有て佳景也二

三十年以前迄は鞍形又鏡形的なこ様の石白筋畫が

ごとくに種々有しさいふ老人は見たる者多し今は

五〇五

一菊池郡班蛇口村の内穴川村豊後日田郡津江境一

の坂の下邊より流出同郡高田村下にて菊池河に流

る道規五里拾四丁貳拾四間と云此川多くの村遊

右之外に小井手有り略之

迫川

一菊池氏代より有由承る此井手稲田を養ふ所廣瀬古

閑夜間大塚宮園村田なり

夜間井手叉廣瀬古閑井手共云

一菊池氏代より有よし承る此井手稲田を養ふ所加恵

村高島村也

一菊池氏の代より有り此井手稲田を養ふ所深川西寺

南新古閑新古閑甲佐町廣瀬古閑拡入五海村也

加恵井手

菊池井手

村也

ればこその歌に川のならその水よりてま

しばこそいさきよからめさ

一此川、原村の内廣川原より流出菊池郡の東隅より

西に郡の中を貫き長く流れ行は菊池川と名付たり

此河の出口を菊の池さ申人あれ大なる誤也是さ

右の外深葉山かこはたきこ山ほこのかう山めく

嶽等有さいへこも故由異説の事聞へぬは略之

菊池川

は筑紫なる菊池なると云

人有り其故は昔肥後豊後此山をふ事有時訟を聞

人の日菊池なるやはすか嶽さ古歌にあれば此山肥

後の内たる事朋也とて境論を決せしさなん暦の

初迄は山上の大杉むら繁り合て隈府よりもほの

かに見へ居たり同八年寅の三月余登臨せしに枯た

る杉野火にも居たりいつとなく年ことの野火

もえくゐとなり今は杉一本もなし高さ三四尺の石

斗有て俗是を山の神と崇む安永九年子四月朔日西

迫間光九寺の僧道1佛名を石に彫り山上に八

體を安置す

るとなん有し板に赤星さを

共時に此歌を添

にて戰功多かりければ將軍家より初て赤星氏を賜

るとなん岬冑に血の飛散たるか星の如く

て賜りし云一説にへる恵廣河原は巖石の際々より水わき出てひろき

故に廣河原といへり古人の浮池岩清水河原なさい

へるは皆水の出る所を指せ共夫々の違有て混すへ

から此川の出口は河原或は岩清水なさゝ云へし

池といふべき所にあらす然るに此川の出口を菊の

池と云深川の眞の菊池を信し難しいふ人は大な

る誤也水の出口豁達として殊の外(つろき地形美

にして詞客の遊ぶべき所此川の鮎河二品名物

にして獻上になる和漢三才岡縮に九州九ヶ國の産

物を分ちしるすに年魚は肥後の下計に出て國

は無之然して延喜式巻三十九内膳司云年料之内

太宰府下云年魚八百三十九斤二十缶内子鮨年魚三

十六斤一缶さ有り按するに延喜の比は九州の獻上

物昔々太宰の都府に國々より送り府より皇都に送

奉る故に内膳司には西海道九ヶ國の獻物を一所

に打込みに記したり年魚内子鮨年魚菊池の名産和

漢三才岡繪に出る通り九州にて餘國に此獻上無

之今も此産物江戸に御獻上に成る時は延喜式に出

る年魚内子鮨年魚は此川の産物にて肥後より御獻

上せし事明川の出口より川崎村境迄六里拾九丁

世俗の説に菊池武光公の詠と云へごも余思ふに此

歌風體陋し加藤氏城を築き給ふ時櫻井素丹かよ

石ひきまばす茶うす

みし狂歌の類なり 敵に加藤の城のぬしかな

武光公の

御詠さいふ事おほつかなし此比の風人の口すさみ

たるなるべし此山の南側俗にやこ山さいふ是質は

矢ごし山也しの字を下略してやこ山といふ我朝の

習ひ詞を上略下略する事有りあつはきを椿さいふ

は上略也ますみの鏡をますかゝみといふは中略也

馬の毛をかす毛と云ふは下略也此類甚多し今此

山も下略してやご山さ申習ひ本名を取失ふと見え

梨子地またらに見ゆる山形

くら嶽は銀ふくりんか今朝の雪

一菊池合志兩郡の堺に在る山頂に観世音を安置す

開基年月未〃聞寶暦の比野火にて延焼せり 合志郡

高柳村より隈府町伊東牟七と申細工人を頼み石に

て觀音を刻み再興す古歌有り

鞍嶽

山河

弘安年中に蒙古襲来る時赤星有隆筑前の多々良濵

鬼さりひしくものふぞすむ

筑紫なる矢筈かたけのふもとには

一當郡の北鄙虎口村の内に在り八方一様なる山とて

八方嶽共云山上に池有り昔は水湛しか今は涸たり

古歌に

嶽 又八方獄さ云

檜垣の嫗のすめる白川の遊よりは豊後は此山のか

たにあたればかく取合よめる也又此山の測に風穴

り大風吹なむとする時は二三日前より穴中より

息出て音する事夥し風は大塊の隠氣なればさも有

へし邢子勵か趙記に龍山有四麓、各有一穴、大如

車輪、春風出東、秋風出西、夏風出南、冬風出北

不相奪倫、蓋謂龍也、是もろこしにても有事也

又此山の麓に鞭指野證野有り鞍嶽に相應の名なる

べし

矢こしの山のあれはなりけり

君かいるきのふのまさのあたらぬは

たり按するに稲垣歌集に豊後の人に遣す返歌有り

前書略す

方

*

周

儒士

直

人

肥後水水子

日大阪安 量

播

品墨

書

正

成夢良

使

申

張應斗

書

使

從事書記

副

水足父子と朝鮮聘使の學士と唱酬の節座の圖左

にしるす

爲思黃菊對群賢、舟楫無端涉巨川、空水迢々愁不

盡、夜來月色共澄鮮、

菊溪復次 予前日席上韻遠寄因用原韻又裁二絕

聞說青丘世有賢、宛然手采滿山川、夢中猶記人如

玉、無賴狂風旭日鮮、

海遙帆影鏡中遷、醉後陶然水底眠、一曲高歌吟未

了、風流猶憶白雲、

奉呩嘯軒韻

切、無限烟波萬斛愁、

車

醫足安直 比自足安一神來村より三丁程南野間口村より三丁程北に當り

畑畔に三角形に石を積み立て今に耕作もせざる所

有り是菊池氏の代死刑を執行ひ重罪の者は礫に懸

られし跡也又今村内赤星境の屋形口といふ所畑畔

に横五間程竪貳拾間餘耕作もせざる堆所有り是も

菊池御代死刑の場と申傳ふ

礫場

一深葉山内に在り市成城主か又は城附侍の居る所

なるべし

外記屋敷

己亥重陽前一日、余留大坂、見水足氏童子、年十

字號說

俊才海内發豪英、僻地兒童亦記名、今日相逢君莫

默、滿林秋葉玉金鳴、

席上奉呈松浦霞沼先生

何幸海西一小童、結盟豪傑滿堂中、新詩薰誦秋宵

月、併見菊花籬落東、

奉和菊塘彥文惠贈韻

謹次成先生辱贈、兼奉謝申成兩公惠、

詞律鳳鳴曲、却疑舞彩毛、松烟將玉版、賜及似橡

奉使遠來韓國賢、東行跋涉幾山川兩邦相約善隣

賓、舘外晴雲秋氣鮮、

奉張先生

韓國豪才作遠遊、芳名先入日東流、江南明月天涯

色、孰與金剛楓樹秋、

奉呈成先生

遠來萬里海雲東、飛鵠暫留攝水中、逢接鄉林和氣

客、秋風却似坐春風、

料、滿囊珠玉幾詩篇、

奉呈姜先生

星槎一盐裏分明山水州、扶桑賦就有餘流、天涯涕淚相思

五〇一

三山逼面憶仙州、帆外天風海上流、望斷北雲人不

見、悲歌對海此時愁、

又疊前

散跡海東险九州、眼看波浪醉中流、桑弧好去男兒

志、周歲遠遊何足愁、

去帝王州、上國衣冠託海流、多謝郢歌天上

落、長空片月寄清愁、

奉和靑泉學士舟中遠贈韻

博泉

右の文は水足半助の請によりて申維翰より贈られ

し也水足平之進の號以前は出泉と申せしを此後よ

博泉さ改められし也

朝鮮國宣務郎秘書著作兼直大常寺申維翰、題于大

城使舘西本願寺、

三、號出泉、以刺自通曰、某名安方、好讀書

詩行草、願奉君子半日驩、使書所為詩筆、昂然如汗血駒、膚瑩瑩玉雪、隅座端麗、一眄睞而可占雲霄羽毛、余爲撫頂再三、字之曰斯立、以其有立身大方之象、更其號曰博泉、寓思博時出之義、手書詒之、且告以無相忘、卽起拜謝曰、庶幾夙夜

辱命、是言俱可書、

享保四年己亥の九月朝鮮聘使の學士申維翰等大坂西本願寺の御坊 逗留の節水足半 助安直子 平之進安方把携對面之節 平之進贈答之詩幷 汇半助の乞因て申維翰より平之進に贈る字號説且又其節座配の圖左に記す委は航海唱酬に出る此事博泉幼年の

水在梅花下、月在梅花上、夜深人不見、水月兩來

梅影

簪纓爲昨日、蘿薜又中秋、歸鳳相如瘦、臥龍諸葛愁、雪深凝屐齒、露脆亂蓬頭"明月佳如此、東門

中秋

如帶白雲鶴在松、山房時聽午時鐘、清樃有酒留仙客、重疊藤蘿十二峯、

題正觀寺

按するに博泉初の名は安方號は出泉と申せしなれ

ば後に業元と改名せられしさ見えたり

大呼曰、英雄已沒、山川如故、山川如故、亦將奈

何、于嗟來古之人耶、于嗟來古之人耶、竟無答者、

享保十四年冬 肥府儒臣水足業元撰

肥後文獻叢書第三卷

韓使東臨路不難修隣千古自朝鮮、帆影隨風到日邊、爲問海山好詩

渺茫碧海泛仙槎、修好千年自麗羅、玉節來時高意

氣、牙檣過處浩烟波、已看冠蓋禮容足、定識江山

詩思多、此日北風鳴雁去、鄉書萬里竟如何、

奉呈申先生

尋盟千里向天東、雲浪烟濤只任風、曉日射波三島

外、秋帆掛月大洋中、潮聲一面琉璃碧、楓樹萬山

錦繡紅、勿謂殊邦言語別、藝園更有筆頭通.

奉呈書記張先生

隣好東西遠到誠、秋風清道雨初晴、錦帆映日來天

地、玉饰輝波涉海瀛、一斗杯中揮彩筆、五千里外

發英名、勿言異域無相識、夜々雲涯日月明、

奉呈書記成先生

奉呈書記姜先生

、相逢萍水約金蘭.秋風千里

動、夜月三山劍佩寒、烟外數峯分遠近、天邊大海

湧波瀾、何思殊域玉堂客、賭鳳如今共倚欄、

謹奉呈朝鮮學士申先生

出泉水足安方

時の事なれは最初に出すべき事なれ共後に思ひ付

し故後に追加へたり

五OC

瀾池風土記卷一

豐州木正範頓首再拜

菊池古城記

水足斯立

肥之先侯菊池者、居隈府之城、今已墟矣、其郛郭

溝渠尚存、夫天有日月星辰、人有忠義之節、此二

者貫萬古而不銷盡者也、菊池世唱勤王之師,不為

將軍屈膝、其遺烈爲風雨、爲雷霆、爲金石、草

木、人無知、望而知英雄之精靈凛々然至今不滅

哉、土人語曰、菊池氏之候裂地芬城封、枝屬裨將

肥陽水先生案下

呈

壬子秋七月十八日

難、今僕在京而聞此擧、憤然怒目張膽以恨、空拳

無所施、爾來每一思之.未嘗不痛憤太息、而今足

下圖從居君父之地以得憐於人、不如就有知己之居

而雪辱於世、僕今困乏、雖無推轂之力,幸僑居中

有餘地居足下、足下明斷不避嫌疑、來就于僕、欲

遠夙志以共有爲、足下幸富年與才、勿敢爲退縮之

計、果天不棄才、則奮翼溟池,亦當計日而竢也,

豪傑士所共期、口與小狗徒共論、請足下屏左右以

熟鬧焉、僕不勝感激、陳卑情以忘固陋、伏乞昭察、

不備,

以數十、有犬牙相制之勢,而是城據山河之形、就

要害之固、卜九州之吭、以爲子孫長久不叛之基,

所謂用武之地、天府者也、無事則精練士卒、以養

其氣、有事則攬轡長驅、以擅其勇、勝則東

南取徧城、北取豐後、西取筑後敗則與其精

十騎,逃入山谷間、山谷之間、有虎口斑蛇口者

西國之至嶮、彷彿乎蜀道之難、丹嶂青壁、錯襍新

紫、咫尺之中、前後相失、故雖有百萬之兵、不可

得而擒者、地勢爲然、是以能傳二十五世,爲名諸

侯也,其亡也以時、非用兵之罪也、菊池之先、精

紳貴族則隆始封、出守居菊城云、菊池莫知其處、

或曰在深川北、爾後傳世十六、至候武政、始營此

城而居、又十世而墟矣、共間用兵力戰,不可勝計、

天下無不知其爲拉鬼之將也、雖然是特介胄武辨

之事,君子賤之、至侯重朝、好學建孔子廟、春秋

釋奠、是亦可謂盛矣、今已荒廢、及征西將軍營城

院武庫、只土人有知其地者、然菊池氏之澤入人也

深、至今隈府民、語先侯時事、莫不流涕者、後之

代侯者、佐々加藤雖威頃刻而亡時君欲知深根固帶

之術者、必於是墟、余聞而偉之、邃登其墟四顧、

長胤頓首、致弔於吾友水君,聞足下遭曠世之禍、

頓喪所天、繼有主命、罷官除祿.嗟不幸極矣、可
勝言哉、夫足下之才,卓出千載、海内無比肩相上
下者、而足下之禍、亦千古所希有 以奇士得奇禍、
亦造物者之所爲耶、然去者已不可奈何,來者猶可
追、自今以往、自重千金、以全先人之業、揭諸天
下、應幾黿玉之毀、再爲完物、是已、僕嘗與洛人
彧、足下人中麟鳳、惜身在海隅遠藩之末、薄官微
祿以羈之、莫以大顯也、而今不圖、爲肥侯棄、雖
不幸極矣、亦天意所在、僕爲天下喜焉、而足下罷
官之後、未開蓬累而行、是何濡滯、蓋重去父母之
國耶、雖然、君子遲々去國者、中庸之常也、足下
身受不測之禍、逢希世之變,豈可以常道處之战、
僕願足下、急流勇退、絕跡於西藩、從淀河而遡北
極、則僕雖貧、分家產之半、以給足下之養、縱有
老母弱妹、不至飢渴於溝壑矣、豐士人木正範來學、
其人質直.可任以大事、爲僕說足下平生甚詳,聞
足下之敗狀也、悲憤見乎色、繼值西光上人之西歸、
謹修尺素、以表寸丹、去國之計、在足下熟慮之、
記置

範謹修書.以吊足下大故、僕嘗聞人之難、而未聞
甚於足下之難、亦嘗見人之才、而未見大於足下之
才、蓋天欲降大任於是人也、必先苦其心思、勞其
筋骨,動心忍性、曾益其所不能,甚哉天於足下、
開頃家有盜賊之難、足下執劔當賊、身蒙瘡十有六、
而不至于死、則非天乎哉、然父死於賊、賊死於援、
是以肥人饒々、不以足下父子爲夫也、甚者謂文人
雖有才,不足共有爲焉,於是乎官誅賊屍、次奪足
下祿、足下以文起家者.賊以武爲業者也、文臣武
夫、交鋒而鬪、則其成敗豈竢今日論而定耶、足下
討賊也勤矣、縱以肥人饒々、於義無恨矣、足下名
削於籍、望失於人、恬然以居非笑之中而不疑,則
僕爲足下不取也、抑病而未能起耶、將道之有足以
雪辱者耶、不然、則朝失於君、夕蓬累而去、此大
丈夫進退之分也、豈累々如喪家狗、往歲足下與僕
言.百工居肆.以成其事、士修業亦然、與子弟如
就學干京師、逮期足下有故、不能修其言,亦離斯
伊藤長胤頓首再拜

七月十五日上

博泉大儒宗案下

惟千萬亮察、不宣,

博泉水足先生書院

一御郡代衆御出在之節逗留之所也大林寺村内立石村

に在り實暦の初比に始て建つ

一深川市郎右衛門 桃代迄は深川村に居す平井嘉右

衛門代より袈裟尾村に移る子次右衛門家督本名

御免有て平井を名乗る其子平井勘兵衛當役相勁む

御用宅

深川會所

一河原杢左衛門代迄は河原村に居す文右工門七右術

門に至り藤田村に所替諸左工門代隈府に移る所は

奥村屋敷酈居候處、

耶居候塩河野茂次郎澤彥左工門高木形右工

門相續居す三池

す三池長左工門代に至り會所家近く火用

心悪敷候に付奉願安永九年三月末より 四月に

院馬場に移す屋敷四反七畝此床地代移方矢共に

宗傅次寸志成就の上本の會所床地宗僖次に拜領且

又御紋附之麻上下帷子拜領させらる長左工門廿四

年相勤子 平左工門退役寛政年阿部太郎左衛門に

被仰付當役相勤む

より御雇有り八十人程も来る止方の節に皆歸る

河原會所

一隈府町西照寺門前井手端橋より東に當り寺の境内

に在り水足平之進實名安方又業元さも有り強記敏

提世に並なし名天下に振ふ十三歳の時助

に随ひ大坂に行き朝鮮聘使に出合唱和有 集是也

韓客其秀方に服して字を斯立號は博泉さ付たり

徂徠伊藤東涯二先生に書を贈る徂徠の返書は世に

行はる後不幸にして浪人し給ふ然共其罪にはあら

す浪人の後に隈府の西照寺住僧招て境内に書院を

立て傅泉をかくまふ時に伊藤仁齋先生の門人鶴崎

の木破杢平次は正範博泉に心安き故に東涯先生 博

泉を京に呼登すべしと杢平次に相談し尺牘を贈ら

る杢平次も同前書を贈る時に享保十七年壬子の年

也其後博泉傷寒をやみて書院に日を送りしに快氣

の上は上京すへしさ申されしか共病日々に重く成

同年十月十二日終に死去時に二十六歳也其著述の

太平策文章十訣等は世上に流布す人皆知之作捨

の詩文稀に今殘れるは知人寡し余日ころ集置しを

ば因て左にしるす且東涯先生の尺牘紹先生

集に脱す此文別而東涯先生の篤實君予たる事をし

らるべき文なれは合て以て左に載及杢平次も

金松

一赤星村氏神天満宮より南に當り村際道端に立つ石

有り伽監さいふ其故事未聞

伽監石

一生味村に在り野原堆所に一つの石有り旱魃の節村

民軒別に麥から一把宛を出し此石を焚時は必ず雨

降さいふ此名如何なる故といふ事未聞

雨が塔

一木庭村に在り城越前守上林の城に被居候節の馬

せめ場と云

馬場

一土豊水粟田の間の坂を云守山の城より東北の外城

に付たる侍の通ひ道なれば名たる歟

一延寶六年午正月中旬雪野村内赤松と云所金山の見

立有て御役人 山崎平太夫清田與三右衛門兩人被

差立」堀方有之候へとも金不出候に付止む

雪野金山

時事不意に出たればあはてふためく折から乳母此

道にて折々ころひし故に名つくさいふ

一山崎野間口兩村の交迫間川端に在り寶曆十二年午

の八月此川原に爐場出來同十月よりふき初て鐵砂は川筋所々より出る見立の役人は齋藤長左衛門北川又右衛門伊村左次郎なり鐵の性甚剛にしてほろして同十三年の八月止むふき方の者は石見國

鐵山

一市の瀬村大通山聖知寺といふ寺跡の後の山中に大なる石有り其面に像を切り下は苦に埋れて面計見ゆ人により面計切付るさいへごも吟味せしに全體有る由鎮西八郎の面像といふ事俗の唱誤ならんか按るに此寺正観寺の下にて雨溪和尚の隠居し給ふ所と云今の面像石に切付たるは達磨の面像にては有間敷歟大體だるまの縮像に似たり見る人皆しかいへり

一木山村の内に在り俗に米原長者のこかねを納し所といふはあぐるにたらす是右の窟室ならん歟

鎮西八郎面像石

黄金塚

一方村に在り俗に米原長者の金かけ松さ云不審狩

尋ぬへし

秋の月御代を時なる光かな

以上多門院座

第十

多門院珠長

隈部新左衛門弘直

何舟

世にむかふ月はちりなきかゝみ哉 高倉出羽守家俊

月扇 第八

月 第七

三字中略

勝藏坊長尊

何路

月弓 第六

治

木葉遠江守信色をふや千染の糸の夜半の月 方保田藤左工門良淸

月油 第五

名何

月に打聲幾千度さよ衣 伊牟田勘解由朝廣

月糸 第四

何物

の鐘より月に成にけり

月濤衣 第三

薄何

願行寺吾阿

何風

月鐘 第二

諸神法樂

暮る夜何船

夜をおしき月は残れるあしたかな

弘治丙辰孟春七日書之

重朝公

城越前守親賢 書判

右揃の萬句は隈部忠直筆者にて藤崎宮に奉納有し

承る

暮ぬれは月のさそはぬ袖もなし

以上願成寺座

赤星村舟渡場

一昔は今の場所より上にのほり北宮の淵尻に有て

船頭も北宮村に在し由熊本立町伊勢堂に居られし

成就院寺尾野大圓寺に住居の時願立今の所に移る

年代未聞

月や弓空にひかるゝこゝろ哉

古の大道

月見れは秋にもおかぬあふき哉

月神祇 第九

何垣

影すめる月は御池のこゝろかな

月祝言 一守山城有し比は西寺村諏訪原より築池村に 糖

の塘道

通りたる大道有て築池より北に回り守山城の後通

平野村に通し道有り奥の村々此より隈府表に

往還せ云今は守山城跡と月見御殿跡の間大

道となる

うは坂

常樂寺長勢一前に今の大道筋其内守山天守跡と月見御殿跡と

の間のり越の坂を云赤星道龍造寺より攻られし

四九五

九千

四九四

肥後文獻叢書第三巻

月野第四

何路

月

第三

何人

内古閑周防守成長

見る月や心のかきり野邊の秋

月原 第五

何舟

月遠しさはるかたなき原の秋

以上山井勘解允亭會

隈部八郎重治

さやかなる月こそ秋の窓の雪

月

第四

白何

見もあかて月のやすらふ扉かな

月門 第五

何木

月里 第六

もかな

山何

月は世の千里にうつす都かな

月庵 第七

白何

月待さ我まつ出る庵かな

月庭 第八

何

影塞し有明の月の の秋の庭

月 第九

内古閑刑部爲載

明るまて月も老せぬ

以上長野太郎亭會

月床

第六

佐藤大和守爲春

隈部入那三郎朝夏

二字通音

友なれや月に馴ぬる秋の床

月簾 第七

一何

明て狩月も色そふかな

第八

月に見て玉垣ならぬ夜もなし

月離 第十

何田

雪野院主祐泉

關もかな空に道有る夜の月

月陌 第九

かたふけは月も見にすく離哉 隈部次郎右衛門武治

月に人出てたゝすむ陌

か

以上内古閑刑部掾亭會

月村

月軒 第一

山何

秋塞し軒端にふくる夜半の

長野太郎重鄉

村遠き梢を月の見て哉

以上隈部對馬守亭會

月屋 第二

朝何

第一

何人

十千句

ふりにけり月を見るへき板屋哉

鹿子木兵部重点

菅むしろ心のふる月夜かな

願成寺彌阿

道田加賀守邦世

赤星修理亮有直

隈部近江守清本

城伊豆守朝成

隈部對馬守忠門

加藤式部少輔爲成

隈部式部少輔元成

長野修理亮左俊

菊池風土記巻一

守道時

秋津洲の月もくもらぬめくみ哉

岩野山城惟圓

竹崎輔武宗

瀬田兵部少御何

月

貞

阿佐古式部ウラワ

何路

月浦 第1

ふけわたる月もはや瀬の波路か那 櫻井大藏少輔公峇

以上山口九郎右衛門亭會

教

安樂院契カクレス

淵に見て心もふかし秋の月 久多羅木伯耆守良直

月沼 第九

山何

月すめは秋よりさむきなかれ哉 佐藤兵部少輔邦則

月淵 第八

何衣

月流

月にのみ心をすめる秋の水 山口九郎右衛門朝昌

第七

玉何

以上隈部讃岐守亭會

月水 第六

月江 第五

何風

すむ月の影もほそ江の浪間哉

以上阿佐古式部亭會

月濱 第六

何松

幾秋の月のやさりかはまひさし

月澤 第七

初何

深に見る月にはよその秋もなし

岩かきのかけや隠沼月の秋

月瀬

第十

何人

月

第八

さひイニ

何舟

秋の月

清き岩井に

月橋 第九

片

の

行やらて見るや橋守波

月舟

第十

何垣

七F

月はたゝ浦の秋のひかり成

月清し御舟遊の夜のなみ

以上早岐山城守亭會

掾武月眞砂 第1

何木

月に聲あら礒崎の潮かな

月岸 第三

何田

波に月もろこそ岸の植木かな

月洲 第四

千何

世々の數るや眞砂秋の月

第二

何世

出雲寺天人の袖か岩尾の

し

ろし

月田 第三

何人

てる月もなひく田面の稲葉哉

四九三

石貫廣福寺源宥

内古閑圖書助頼續

山井勘解由允重續

平川和泉守惟親

合志藏人佐隆門

早岐六郎次郎英冬

元昭

早岐山城守邦政

秋戕備前守公尙

五千句

肥後文獻叢書第三卷

行

赤星中務允有繼

月の鵲しるし天津空

月雁 第八

何人

月やよむ雁そつらなる文字の聲

月 第九

何風

友鶴のもすみゆく月夜かな

月千鳥

一字露顯

幾秋の月にかなれむ小夜千鳥

以上平山遠江守亭會

佐藤駿河守邦佐

隈部又十郎重元

市田美濃守惟實

第一

何人

若園山城守忠幸

見るもおし嶺近くなる空の月

月岡 第八

何舟

岡越やひかり先みる夜半の月

月洞. 第九

夕何

夜半にたにねぬへき物は洞の月

月柚 第十

山何

くれぬれは月にひかる柚木かな

以上小森田兵部少輔亭會

月瀧 第一

あひおひの光は今朝の月日かな

月星

第二

何木

星やその月の宮

月の宮守宿直人

月電 第三

何色

西山伊賀守安貞

月更ぬたゝ電のひかり哉

月

第四

何心

伊牟田加賀守守親

人はいさなかめは月の朝かな

月夕 第五

城六郎重岑

月に流見そへてうかふひかりかな

月嶋 第二

千何

月ひとり八十島めくる光哉

月海 第三

何路

波見へて月浮ひ来る海邊哉

白何

夜をこめて残れゆふへの空の月小森田八郎右衛門邦治

の光かな

以上若園山城守亭會

月山 第六

何道

契り有て月すみなる 川邊かな 伊牟田上野入道宗興

舟

月河 何第五

さすしほに江をてる月荒尾和泉守泰直

にほイニ

月潮 第四

白何

明朝

南福寺長

櫻井播摩守公綱

讃岐守基家

隈部何草

塚本伯耆守親勝

宇津宮次郎貞綱

小森田三河守經世

石貫主稅分店政

ふけにけり遠山ちかき夜半の月 小森田兵部少輔重世

月峯 第七

何色

四九二

三千句

ほのかなる月は杉間のひかりかな 吉田兵部少輔公貞

月森 第十

山何

かけ高き森はや月の秋 弘生式部少輔朝氏

以上宮崎兵部少輔亭會

月時雨 第九

何路

秋のゆく空はしくれて

月霜 第十

月林

第一

三字中略

影高き月にうらむるはやし成

月園 第二

竹崎伊豆守惟岑

四千句

御何

更て行月さへおそき園生哉

月竹 第三

薄何

竹に月いろをわけたる末葉かな

月柳 第四

糸何

散る音を月のあらはす柳かな

月 第五

玉何

まきの葉は月をへつる木陰哉

以上竹崎伊豆守亭會

竹仁安藝守惟氏

延命軒慈我

島崎右京亮公興

月は今きり間にしるきひかり哉

月雲 第二

山何

八雲たつ昔の月か夜半の秋

月風 第三

何路

風わたる月高倉因幡守守俊

初何

更る夜の月に音をふあらし月露 第六

何木

露に狩ひかりをそふる月夜かな

月雨 第七

夕何

山北對馬守邦續

蟬 月に今雨も残らすはれにけり

月村雨 第八

鬼島出羽守邦久

何人

月鵲 何色

第七

日くらしの聲よりいそく月夜哉

平山遠江守盛世

月空舟

何第六

以上闕部伊豆守亭會

新左衛門氏世

かな

北島月嵐 秋の月にもはぬ野分かな 平川與三右衛門高冬

第五

月野分 第四

ひかりそふみ空かな

白何

島長門守宗次

高崎近江守元雄

阴部伊豆守邦家

月霧 何木

第一

入る月のひかりを残す秋の霜

以上山北對馬守亭會

赤星遠江守有信

何田

河内守經道

もなし

西山イニ

月入ぬよしやむら雨夜半の秋 伊牟田兵部少輔家吉

月何

第十

かるかやに月もみたろすかたかな 馬見塚大和入道宥

白何

合志五郎重隆

長田式部少輔基秀

初何

見よや猶月の朝かほはなの露

月僅 第七

亮爲冬

四方に見る月や桂の花さか

城右京袋

月桂 何第六

御屋形槎御座敷

以上

赤星九 重規

花月にほのめくひかりかな

女郎花いく夜か月になひくらむ

月 第五

何衣

月女郎花第四

何舟

イニ北爲房トアリ

輔

陽鄉式部少周持

萩か枝にをらしこほさし月の影

月萩 第二

何人

重朝公

月やしる十代の松の千々の秋

肥後文獻叢書第三巻

四九

にほひ来て月にもしるふしはかま

以上右京亮亭會

月蔦 第一

月

第三

若何

荻の葉に月もなかばの光かな

二千句

村何

蔦やてる月ひさしほの木の間哉

月柏

第二

かけみ月も名におふ柏かな

月苔 第三

何田

月ならて苔地に秋のいろもなし

月紅葉 第四

何路

いくしほにうつるや月の下もみち

月蓬 第五

唐何

月もさそよもきか島の秋の宿

以上隈部上總助亭會

月篠 第六

玉何

月葛 第八

何鳥

ふくる夜の月をもかえ勢眞葛原

月苅萱 第九

影ふけぬ月も夜さむの小さゝかな

月藻 第七

四字上下略

浮草のひまに月有る汀か

月檜原 第八

御何

蘭 月杉

空清しひはらに曇る秋の月

何舟

方保田丹後守守經

賴道

重作

才二宮騎兵部少輔

宗大和守重信

西福寺廣譽

石貫民部少輔安元

隈部上總介忠直

惟之

菊池風土記巻一

一通し物以前は一夜の内に上町先通り次に下町より

又出る其節は時々して宇論ヶ間敷事有て神事のつ

しみにも不叶事有之故に安永二年巳七月より

上下町一夕越に一ト町宛興行に走る以後は上下町

共に睦敷興行有り尤一夕越の内一年は上町七月朔

一御松囃子の開口 禁裏將軍家の外には無之事

承る今當所に残れるにて征西將軍當所に居ませ

し事明也さる間菊池の遺民たる者は事怠らず勤度

もの也

寶暦七年七月

次左衛門

一右之通に御達申上候所に如舊例無相違、相勤候様

に被仰付候也

隈府町庄屋

拝領」正観寺村より一切御松囃子場世話仕來候

一通し物行列物真似之儀云云御凱陣奉」候儀也今

以雲上之城跡に向聖堂道より北南院馬場を通町中

へ入込み申候七月朔日より十五日迄毎夜興行物真

似仕來候嘉例追而御達申上舊例相勤來申候右之樣

子に御座候間神事御松囃子等前後し別而町中萬事

相愼申事に御座候云云

四八九

文明十三年八月日一日興行萬句連歌發句

月松

山何

月見御殿文政八乙酉五月二十五日しろし石建つ月見殿之

槻彈藏 【日後人書入也

一正寺の後に高き所有り古菊池城院有し所菊池氏

の代に至りて月見御殿有し也何代目に立しさ云事

未聞委は菊池城院の條に出る余接するに菊池重

朝公の時臣に忠直有り君臣魚水文武並行はる賢侯

ご奉稱へし一日句連歌の興行も此所にて會有

しにはあらずや萬句の發句は城越前守親賢寫置れ

しが殘て菊池に有り左に記す

一寛政八年に隈府町中より之願相濟能舞臺立つ時の

御郡代宮本傳右衛門惣庄屋阿部太郎左衛門町別當

中島伊次郎町庄屋源右衛門大工頭取西寺村義八

世話人頭取中島伊次郎也押立て屹度したる材木は

宗傳次仲島伊次郎竹田屋貞次郎三人乗而覺悟せし

を此節出合殘分町中より世話也五月より取懸七月

十二日成就

追補

日に出初む一年は下町朔日に出初む此事河原惣庄

屋三池長左衛門代に定る燒衛門

がよはひは久方の、萬方雲おさまりて、寒暑時を

西の海もろこし舟のみつぎ物、かそへつくさん君

岩根がうへに遊ふだり、八百神もそふよの、や

よふかりもそふよの、

やよふか イニ

松やにやに、小松やにやに、松がうへにこそとみ

いやましします、しら毛もはらり、眞白毛もはらり、

~j

「天下泰平國土安穩武運長久息災延命弓は袋に入

は箱に納め我朝にては延喜の帝の御代ともいゝつ

へし唐土にては堯舜の御代とも云つへしかアゝ目

出度御代にて御座候毎年御嘉例の松をはやし申を

菊池代々神事之御松囃子傳來之開口左に

記す

然共古の申樂は舞方も定らずしてすなほ也後世

人の風機ひらけ殊に東山殿時代文華甚しければ申

樂を潤色して裝束作物この式を極て諷も格別に出

来たりと見の申樂より起りたる能なれは今は能を

申さいふ

召て今宥珍敷からむ申樂つかうまつれと

有り

肥後文獻叢書第三巻

上

御棧敷より御覧被成候御松囃子當日は以前御町
奉行衆以來代々御惣庄屋衆も只今に至迄菊池遺跡
に而御名代様と尊崇仕候此儀は菊池公以來之遺民
故に而御座候尤爲裁判正寺村輪足村藤田村下
河原村今村片角村土豐水村兩迫間村右村々庄屋罷
出申候且又御棧敷入用竹木夫方等は古来被爲三
一御松囃子能菊池落城以來隈府町正觀寺村高野瀬村
之間御茶屋前申所御能場に定め此所にて毎歳相
勤申候前々より御松囃子相勤候上に而御注進中上
候事に御座候古来より之礎等于今御座候を用ひ
假舞臺毎年仕立相勤申候往古之舞臺は焼失仕候
一御能場正面征西將軍#菊池公御棧敷掛申候牲昔よ
椋神木御座候將軍木さ稱来て將軍御棧敷さ御神
木へ蓬萊三方之御酒兩樽宛備來申候以前御町奉行
衆御座候節御松囃子等御覽之時は菊池公御棧敷よ
御覽成候其以来は御惣庄屋衆爲御押右之
竇曆之比御尋に付御達中上壹通之寫

にがへず、四海波しづかにして、風雨枝をならさ

ず、松によれば千年の鶴が岡のやま、ヤアエイヤア

一脇能は老松例格也是將軍家之外は不叶由承る

十五日に興行 五興餅に今不日

有る是吉例

正月

月成て菊池家代々の神

年にはあらすや

七月

か出陣有吉例さ云僊ふ是御歸陣の上ひあらざり

ふ是は菊池公軍事急にて

の前

兀朝雜煮七

元日

朝に

菊池公御出陣に障有て正月に興行叶はず正月何日に

月

證有り寶曆五亥の年大風にも不思議有り享保の

比迄は傳聞も多し古事を知人もあまた有し故前説

計にて人々能知之 今享保の時を去事六十餘年に

て古事を知人增稀也因て前説の遺を繋ぐ夫菊池家

は中關白道隆公より出て藤原氏也代々子孫繁榮家

運長久の御壽國家安全御蔵の申樂正月新に舞臺を

將軍木の下にもふけこの所にて興行有り其後慈悲

院義政公の時諷能初り天下に行し比は菊池家持

朝爲邦兩公の比に當る此節より申樂能に易りた

有り三年共に火難有て隈府町燒亡す是偏に神事た

行所に直達也

なれり依て神殿を表して御假屋を立神酒を捧なり

怠慢なく每年勤む寛文七年より以前の能組は不

知夫より 永二年迄は能又は噺子にて勤る番組

附所持者有り其後役者不足にて開口計をむ

即日に御役所に注進す漁夫より御上に御達有り 此松囃子

の事何によらす 御郡代衆に相

其場はり御奉此以前に日和悪して延たる事三度

きにては先やき餅を按するに翰林葫蘆集に云申樂と云事は秦

の川勝に初る 推古天皇の朝阮戸王子天

神地祇を祭祀し安國の政をしく因て六拾

三番の曲を作り川勝に命じて紫宸殿の

にて大優の技を成さしむ太子此神樂の神

の字を分て申樂と名づく説文に申は紳也

といへり大歳神申の方に有時は猿を以て

是に配す因て猿樂さいふ神楽を和らけて

面白くたはむれを成すを俳優と云也宇治

拾遺に曰~内侍所御神楽の夜職事家綱を

四八七

事たり今に傅る開口の壹番は他になき事にて目出

度詞を騙せり舞人は七月以前より別火物いみ深

して是を勤む若不浄にて勤れば必凶事有り此故を

以て山の作物屋台 征西將軍菊池公を祭り所繁榮を

祈る心を専として勤之因て今は町の神事となれ

他に類なき神事且は菊池公の遺澤深く人民に残

所をおもふへし今も假御殿に臺の物抔備へ征西

將軍菊池公に御神酒を奉る所の惣庄屋假殿の内に

定座有り開口の發語に天下太平國土安穩武運長久

息災延命とあるは即祈禱神事の心をのへたたん

より南竹藪連り出ばた邊にも土手有しと承る天正

十六年に隈府町今の所に移る俗説に天正六年に移

岡山仙助所持の古代日記に

「村了念さ

ると云へるは深く考へざる也綱仙助所持

翌年に生れ貞享二年に九十歳に成る加藤三郎入道宗慶に

物語る事有り然時は天正十六年に町移り有り是一識なり町

りし時は町家も散迯たる餘残の者迄にてに九十

一軒程にて有して横町は後に々しさ聞の余か

遠祖の時一軒にて有し故に孫七助三など者に屋

ほて横町は半

す其比迄は今上下廣町邊に堀有左衛門屋敷より刀持

骨

頃郎横に

堀昔はから堀也今の水流る

肥後文獻叢書第三巻

すし

町

近先に隈

出骸札上出部

通りたるも出来たりと云は加藤氏井手をほらしめしより

其後赤星道薩摩をたのみ天正七年三月廿七

日に此城を攻る時には親永能ふせぎける故に薩摩

勢攻落し得ず引取る其後佐々成政下向の上故有

天正十五年七月廿六日に又此城を攻る此時隈部親

永落城に及び共身は玉祥寺原を越子親安と出合

山鹿郡城村の城に落行ける玉祥寺原にては打懸る

鐵炮に次男親房は已に危き所に隨従の侍共人ふす

まを立切て搆ひし故に鐵に當り死る者數人なり

し云家老富田安藝同弟帶刀も院馬場にて打死

隈部系圖此時に御所小路邊 皆戰場となれり

ける骸骨をほ

大郎兵衛うらより戦死者を共に埋しさ見いて一隈府上町の首に在り正觀寺高野瀨兩村の交なりこ

の松囃子は菊池家代々の政として天下國家祈禱の

ため城内にて毎年正月執行しさいふ何の代にや

出陣に付正月の興行怠り給ひ凱陣の上七月十五日

に執行れて以來嘉例と成て七月十五日に勤来ると

菊池家斷絕たりさいへごも此事は隈府の神事

松囃子能場

年前中町斗火難有し時此木焼失と云寶暦十三年癸

未九月八日の入っ過に横町槙屋金次郎宅より出

火町中一時に焼失尤藪内斗殘る其節の惣庄屋河原

形右衛門 辻々せまくて火避成り難して願

立上下の廣町は其節出来せり天正十六年より寛政

六年迄に貳百七年に成る

然れば今の町筋より餘程くつろぎし也百二十

敷を分與へて鄰をもふけし事有り又以前は守山城

の地形も天守跡より南月見殿跡迄は今の如くは無

△之地形も大體一面なりしと云御所小路も今の

幅より格別廣く右田氏の屋敷内町より南二間程

入て二圍程の櫻有り又權次郎屋敷より少下の裏町

より北にも櫻一本有り是御所小路の道側にて有

一限府町當時宗文五郎屋敷邊を云菊池氏の家臣時代

未聞

奧村屋敷

一正寺前の石橋より向の角屋敷を云以前正観寺境

内なれば菊池嫡家断絶の後も衰微の後居たる人

有し歟按るに赤星道の家臣に井寺阿波守と云者

有此等の遺跡歟

井寺屋敷

一正観寺村内小路村より南道端の畑也此所にもあ

限府町元録寛永の間町御奉行有り其後やみて惣

庄屋兼帯當所には恒菴先生も奉行役にて見た

り夫限に止みに成しさ承る

一妙蓮寺門前の道筋を云由緒は菊池城院の條に出る

町奉行屋敷

院馬場

右四小路何れ茂西より東に通り守山城内裏尾にて

止る

一高野瀬中東西に通る道又鷹飼小路さも云

一西照寺前東院馬場に通る道を云

北小路

一限府町以前は今の古町にて有しに其節は菊池家の

武威九州を掩ひし時分にて町家も多く有しさ云菊

玉隆周隆

池家嫡々亡び其跡を赤星家より継ぐ事三代

此時に至ては武威おころへ國中の郷士も共號合に

したがはざる者まゝ有さいへごも猶城も町も本の

ごさくにぞ有ける扨赤星入道道雲隈部親永と阿佐

古村内八拾丁の地方に付合戦に及び合勢川の戰に

赤星打負ゑざり谷を越て隈府の城に迯歸る其後隈

部親永肥前龍造寺隆信を頼み天正六年四月十八日

に隈府の城を攻む 赤星道中共時に肥前勢手を分け西

間村の農人にだ道を習て玉祥寺原より西迫間

川つらを忍び牛縊谷に廻り城の後より不意を襲ひ

ける故に赤星なじかはたまるべき城中に騒動し

終に打負子二人外に數人龍造寺方に人質に遣し

其身は竹迫の城主合志伊勢守親爲の方に行給ふ龍

造寺は城を隈部に引渡し歸陣有り此より隈部親永

隈府の城に打入ける此時親水はからひ小家中にて

は城の警固不足なればとて城のもほそめし云

今古城の道

其節に北原の新堀高野瀬のから堀の南に

隈府町

一昔は隈府藪内町より上町の裏迄北に通りたる大道

一西覺寺の近所を今に公義御帳には花むろ小路と出

るよし承る然は西覺寺門前東西に通る道是其跡歟

又は西覺寺より東の北南に通る道歟尋ぬへし

御藏道

花室小路

一西覺寺前より十間程西道の側面の方に有しこそ今

道脇に所々打ほぎ有る石有り此所さいふ

市惠比須跡

一今隈府切明町口より西の大道を云此所菊池始凧菊

の城に居ます時分より天正十六年迄の町寶暦の比

道南の田より茶わん或皿様の物多堀出せり今の肥

前燒之類也

古町

一木野谷内向は龍徳村前は木山村内昔赤星藏人隈部

親永さ此所にて合戦の節人の馬矢に當り落馬し

てよけを枕に死ける所故よけ枕名付るこそ今地

方の下名もよけ枕と云俗よこ枕といふは誤也委は

合勢川の條に出る

よけ枕

肥後文叢書第三巻

此筋直に東將軍木の下に通

内裏の尾にも一北原村より東正觀寺村に通る道をいふ

中小路

通す御所と稱する時は征西將軍

ませし所にかよふ道にて有しさもにはあらすや

南小路

HIMA

町筋

又本町

を云一隈府中御所小路

一此橋螢格別多集て一所にかたまりみたれつ飛つ興

すべき放菊池氏全盛の北遊覧有て亂橋の稲有り亂

橋土俗申傳ふる所二ヶ所有り一ッには築地村西道

下に石橋有を云甚おほつかなしは築地井手水懸

也此井手は加藤氏の時に出来たり菊池氏時代未此

井手なし故に俗説誤也ニッには木村の橋といふ

是正説たるへし

蹴れ橋

有て古何の時代に有しゃ其ころの年貢中出しの御

藏有しさを共跡近き比迄は石をならへたる所も有

り今は見へす當時此分は正観寺村内分にて隈府内

に混せり横町東側の屋敷裏ことに此道跡に懸らざ

はなし

一上妙見村に在り筑前さ云人の屋敷跡と云俗説に赤

星にて八拾丁を領すさ菊池氏何の比の人といふ事

不分明此村の宮に納りし琵琶は筑前所持の物と云

筑前は佛説派の盲人と承る俗説のまゝを記す琵

琶の條に出る

御屋敷

一北宮社る未申川の上道の北に二反餘の屋敷有り今

に名を棧敷場と云是も北宮祭禮の節此所神輿行幸

ましくて御能興行有けるとそ因てみゆき能場共

云其時菊池氏の棧敷かれる所なり此御能を山の

能といふ事は村々より屋敷に山の景を作り御能場

に呈して御神慮を慰め奉る隈府並に河原より呈せ

事其證有り古記に河原村より柴山三を上ると有

るは是也外の村々は何村さいふ事不分明按するに

昔は隈府、正観寺、輪足、片角、今村、北宮、赤星、

深川、西寺、大林寺、野間口、神來、北原、此分

北宮を祭居し故右之村々にてはあらすや

棧敷場

幡宮同二番は新宮西の一番は若宮同二番は春日大

明神也

一今北宮社外東石垣の本に杉の並木有所を云昔は此

所迄も趾地にて有し由 の比地引合有し時に御

上に召上らる

四八三

的場

一流川村に在り 地藏の古佛を安置す靈驗有り

味

と云俗説に此堂水に浮み流れるさなむ然は浮水

堂にはあらさる歟是よりして村も流川と名けたり

と云

浮御堂

ウキミ

一片村の後北の方に在り今畑さなる左京は菊池氏

何れの代に當りしや其節の富家にてありしと云へ

一門中の墓光善寺境内戌亥の方林の中に在り

左京屋敷

一廣瀬村北の方に四軒程人家有り當時五右衛門など

いへる者居す此所は島津義久赤星道の瀬に因て

守山の城に隈部親永居城せしを攻させ給ふ時に薩

摩勢機能此所に陣を取るこ云前は川後は岡な

れは誠に生地さいふへし今陣屋敷と申分は其節大

脂の本陣所と聞ゆ

御陣屋敷

國綱子

比

徳

一國重

尉

始國網子

國貞弟子

一國宗

二郎

「同時子

國房

-國綱

八郎

兵衛三郎

國村子

両綱

-國家編

一國信

【國村弟子

-國泰

左右衛門國友

一國光

六郎

一國

延壽國末爬文比

國吉

國村

國時

-建武比

號延壽太郎

令宗文五郎酒場

し又限府南田の内

此所に延壽の爐場

の跡さて石を積み寄る所有り或説に武重公箱根

合戦の砌筑紫鎌にて宇津宮を追落せし事有り此鎌

延壽家之作る所と加藤氏の御代に其末裔を舉用

有り玉名郡胴田貫に居す國村の家系左に記す

肥後文獻叢書第三巻

一五社の跡北宮と深川さの間に五ヶ所に有り此社は

菊池氏尊信のこそ北宮庄屋源左衛門代に今社の

内に奉移相殿と成す 中央は山崎宮東の壹番は八

五社遺跡

一北宮村の西深川村境に通れる道今も地方の下ヶ名

を上市場下市場と云此所も北宮大明神祭禮の節市

たちける所にて神輿通りたる道なるへして此道

筋に市たちけると聞ゆ菊池家断絶の後に社内に市

場なほりたるならん

一菊の城の南深川村田の中に少堆所の古木有り一

本は叢生ひしけれり菊池氏全盛の時北宮大明神祭

禮の節御濱出の神輿休め奉る假殿の跡と云今に共

叢を苅損し穢せる人は必票にあふさいふ

上市場下市場

一赤星村西の端に菊池寂阿公の息女おしく姫の墓の

今土俗御しく神として是を祭る右屋敷内に

靈異の事折々有り俗説に此姫菊池河に身を投し死

給ふと云墓印榎木壹本有り有隆屋敷の北に當る

神與休

御しく神屋敷

袖ふれし花も昔をわすれすは

める

タモ

一菊池十四代武士公鳳儀山大智鱓師の教化に因て二

十一歳にて御出家法名を凧禪寂然と稱す遁世して

諸國を廻り歸國の上寺尾野村大圓寺の櫻を見てよ

墨染櫻

と云ふ俗

不動倉の跡を長者に附合するなら

庄島土

盪を云

俗説に前田千町奥永順月川崎 千町を有てりと

一米原村に有り米原長者の遺跡と云鳥の城と唱へた

る由長者の姓氏時代しれず名は孫三郎と云たる由

長者屋敷

常には出さゝる故に不動倉號する事延喜式に見

ゆ不動倉の跡今に至る迄地を穿に焼米出る事夥し

又禹餘糧を出す俗に米原長者の團子と呼ぶ物也燒

米も又長者の事に云人あれ共おほつかなし井澤長

秀曰酉陽雜俎に乾陀國に昔尸毗王の倉庫有しか火

に燒る其中粳米焦る物今尚存すとあれば今の焼米

出るは不動倉の跡なるへしさ云云天安元年より寛

政六年迄に九百四拾年に成る

涼殿玉屋殿月見櫓藏床今其跡有り藏床一下西寺村の内一ツ橋と云所に有り今も其所の井を

浚ゆれは及物杯出ると云延壽太郎國村は名高き劍

工にて京都來國俊の妹の子にて有しさぞ共子孫何

れの代にか今村の内木の下高野瀬内小路にも住居

四八一

菊池延壽太郎屋敷

其子孫也此故にや他姓の人此屋敷に移住む時は夢

中に異人あらはれて追はたるゆゑに仕事あたはず

さいふ按するに惣平先麗は禪門にて有しさ云然れ

ば赤星家譜代の故有家臣ならん

者屋敷を賜はりて長く居住せり今の惣平は則

一赤星村の西端今のはいたか天神の後通りに當時惣

平と申者の居屋敷也有隆より十一代重隆守山の城

に引移の時屋敷の側に届ける某に向て日余守山の

城に引移る迄は此屋敷其方に與ふへしこの事によ

赤星三郎有隆屋敷

是よりして此所の櫻を墨染櫻と稱す元の木は朽て

今有は其糵なり時に永和四年三月二十八日にてあ

りしと云永和四年より寛政六年までに四百貳拾年

になる

わかすみ染をあはれは見よ

歌の心を按するにさほ川の水のいさきよきも菊の

池水のきよらかなるか加はれる故といふ心也是を

以て見る時は菊の池の深川に極れる事必定也然共

此歌よろしき歌にはあらず古歌なれば事實に引事

はくるしからす土俗の説に此歌を清原元輔の歌

云人有といへるは甚おほつかなし扨又此歌に因て

佐保川を菊池川の惣名とおもへるは大なる誤也共

故は片角村の氏神深川村の氏神共に八幡宮にて菊

なかれもきよき菊の池水

さればこそいさきよからめさほ川の

古は清水諶々溢流みたりと聞の菊池川此南を流行

に佐保川共名つく古歌に

なるへし

一深川村観音堂の道越南道下竹林の内に有り菊の城

の跡よりは末の方に當る昔は池形菊花の形に似た

りさぞ本郡綾形の池是は菊池にて名高き所なれば

菊の池叭西表歳の石を立文字菊之池さあ

入り大弾の筆(是れも後人の書入也)

此所に居たる共にて名付たるにはあらずや能因法

師の歌枕に出る肥後國名所守山は此所に有り い

ふぬへし武政公築き給ふ城之此所に有故守山

の城とも云

肥後文獻叢書第三巻

株棋対是にてさほ川は菊池川の惣名にあらざる事

明かなり菊の池今埋れて淺池形もれ常は水も

洞て夏のみわき出る五十年餘以前に深川村一米原村内に在り文德實
錄日天安元年菊池郡不動倉

十一宇火ありと不動倉は米穀を蓋置窮年の資さす

不動倉

池川の上に居ますれて深川の八幡宮斗を佐保川八

幡宮稱し奉るは即いはゆる竿川の上に御鎮座ま

します故に専ら佐保川の稲有り 深川八幡宮寶暦五年亥

吉助さ

云者時の御郡代平野甚助の下知にて池の石垣を築

直し池の底を浚へしに其夜の夢に童子忽然にあら

はれ出て日汝我池の形をけかしたるよと吉助をは

たりけれは夢覺て驚きかけの日に石垣をのそけて

元のこさくにいたし置しさぞ夫より吉助は手足な

へて叶はずさなん此菊の池のほとり蛙多けれ共

事無しといふむかし菊池公絅の君に云

*不分明 蛙鳴をかしま

して叱し給へば其後は蛙鳴事なしと云傳ふ古

老の説に菊池氏未下向き迄は北宮村より加恵村

のほこり迄はかや野にて菊の池は其中に在りしさ

和名鈔に菊池を久久知と調す

八月二十四日大風に焼

一文徳實録に云天安元年間二月丙辰肥後國より言す

菊池城院兵庫皷自鳴同丁己又鳴同五月又鳴と云云

或人の日妙蓮寺よりもり山迄之間馬場筋を院の馬

場と云云此名によりて考れば守山の上に平なる所

有り此邊にてはなき歟分明ならず城院の馬場と唱

来れば疑なき事上略下略の例は総て多き事又

菊池氏全盛の犬追物を執行し事有りと云此に

依て考れば犬馬場と書へし當世は犬の馬場と書

多しさ云云余おもふに院馬場正説たるべし今の正

觀寺村昔は馬場村と云然れば院の馬場にて村を

馬場と名付正観寺出来て後に村名易る是馬場村は

菊池以前よりの村名にして犬追物菊池家に初る時

は院の馬場の馬場を略して村に名付たる事必定也

菊池城院

一袈裟尾村北寺より正寅に當て八丁程有之其所

を堂床と云傳教大師座の時錦の袈裟黄金の錫杖

空中より此松に降懸る因て村を袈裟尾村さ云と申

博委事は北福寺の條下に出る

信也菊池に五六年逗留其後薩摩に行して云

釋氏松

一正觀寺村内院馬場奥に有り往昔菊池城院を守る人

四七九

形勝の地は古今共に人見立る事同じきもの佐々

成政の城跡加藤氏の今の御城を築きふも大方は

同所なり交德帝の比此地形勝に依て城院を立給ひ

菊池氏談又此小城を築く古今の人見る所同じき事

類多し且犬追物を行はれしは定てさる事なるべし

然共夫に因て村名などに名付る事甚おぼつか

昔は犬物諸侯の國所々に有し事にて村井に道に

名付る事うたがはし犬追物の濫觴は源頼光將軍市

原野にて野飼の牛の多きに腹さきたる牛の中に奇

童丸隠れ居たり人々是をしらず皆生たる牛を射

るに渡邉綱斗はいかおもひけん死せる牛を射

るに奇童丸其中より出たり是牛追物の初となか

後牛は用物なればとて犬にかへたりさかや鎌倉

・時壽永元年金澤にて牛追物有り同年六月由井の

にて又有ける犬追物は貞應元年二月入道將軍賴

の代に南庭にて初て有けるぞ其後牛追物は絶

唯犬物斗世に行はれし故質と成ると承る貞應元

年より寛政六年迄に五百七拾三年になる

もり山

一隈府上町の端に有大椋なり是征西將軍の宮心有

挿給ひしが自生長してかく楽しさなん云傅ふ此木

の本枝下に臥すればふせる人不覺立て脇に移り枝

將軍本

一守山城墟の南月見殿遺跡の近所に有り大さ十圍程

ありをちかたよりも能見て人々仰止せり昔は一

本ありしさぞ其後枯て一本となりぬ是も暦年中

野火に焼失せ此木月見殿の近所なれば關西親王

御出遊も有し所にて世俗内裏杉さしたるならん

か天明二年壬寅正月余正観寺和尚に相談し跡に

杉五本植繼ぎ置く二本はよく生長せり後来の薬を

祈るのみ

内裏杉

に趣給ふ彼地にて薨去今八代宮地の征西軍の墓

は懐良親王の墓さなん云傅ふ此事名勝略記に見ゆ

今内裏尾の南に坂有り其近邉を觀清畠と云是關西

の書誤り關西將軍居ませし所故に其名殘れら私に

内裏さ稱するはなれごも征西將軍の宮まし

ませし故世俗尊仰の除りかくは申ならはしゝなら

ん

肥後文獻叢書第三巻

右桂庵和尚法名を玄樹と云南鄉寺の住職入唐の名

花欲暮。香煙撲袂畫簾風。

方に所持せら當時盛に文學行しにや桂庵和尚島

隠漁唱集に祭奠の時の詩有り日、太平奇策至誠中。

遮陪泮宮。泗水吹添菊潭碧,寒雲染出杏壇

家有政九州化。萬古斯文四海同。泛誦未終

子堂附之藤原武運、

さあり大槻弾歳の書也(此割注後人の潜入也)

一茶磨山村の前道より西に有り今其所を甲と云近

き比迄は孔子堂礎の石さて一つ殘居しを今吟味

するに見やす實暦の比玉山先生菊池に經歴の節迄

は右之礎有り追々取寄學校内之礎に用ゆべき沙

法有しなり孔子堂草創の事は菊池二十一代重朝公

の時春秋の祭奐有り孔子の門人十哲も繪像に仕

立從祀有しと聞故は孔子堂に掛られし聖像一

裏書に文明四年二月吉日孔 今に残りて右田藤左衛門

下に限る事はす此木の心は腔調なりし故に

童子其中を通るに障らぬ程に有しが霊感院様御代

に成し比より此木おのづから肉つきうつろいつこ

なくて木の勢盛なり誠に有木なればかけまく

もゆしき御神霊御仁政に感じましますならん

孔子堂 文政八乙酉五月廿五日しろし石建孔子堂之遺址

四七八

菊池風土記巻一

一國一己

巻八

誤墳正物

古器

巻七

程

雑

巻六 世 系

巻五

録

巻三

巻四 寺院廢寺

里

巻二

村郡山

河

巻

舊 跡

菊池風土記目録

あり葉室直次郎之筆(東風日後人一守山城墟の北茶磨山の上に平なる所有り今に入憚

て牛馬を繫き秣かふ事なしむかし武光公武威

四方に振ひ九州静謐貳拾壹年忠誠楠正成に並へ

り征西將軍を申降し奉り御殿を此所に經營有り征

西將軍の事又は關西將軍さも稱し奉る征西將軍の

宮に御父子二人まします初の征西將軍は式部卿世

良親王稱し奉る 後醍醐帝第六の王子宮は延

文五年七月筑後大原の合戦に武光公と同しく小

大友を討ち瘡を被り給ひ同年八月菊池にて愛し給

ふ右世良親王の若宮四歳にならせ給ふを武光公吉

野に言上し征西將軍の宣旨を申下されて此宮を後

征西將軍の宮さ申奉り同此所にましまして御諱

懐良親王と稱し奉る明史日本傳に懐良或は日本

國王關西親王な稱せり文武の名譽有りし宮なり

應永年中武朝公大内義弘と合戰武朝公敗北して菊

池を去り八代に籠らる此時後征西將軍も同く八代

四七七

の書入也)

内裏尾

八乙酉五月廿五日と

つ征西将軍宮

舊跡

菊池風土記巻一

元明天皇の御代に至りては、郡郷の名茂さはに分れ

にけらし、夫より東肥の事、世々の文にものせつ、

くたちて、元弘の比には、しなどの風さはかしく、

わたつみの波あらひて、世の中しすかならざりしか

ば、やすみしゝ我大君も御こゝろをよしの山に幸

まし、ゆつ岩村に宮柱立給ひ、ふさきいつも、よ

もつ海には及ばざりければ、いすくわしくしらなす

まくらごも きほひ起てまつろはす、かんたからを

あなごり、みかさをかみするてふ事は、わすれにけ

る中に、あか菊池のやからそ、其まこゝろのまめな

る、石こかねをつらぬき、代々にいさをしを立て、

おほきみに津かへまつり、西の海たひらけくやすら

天皇のあまさかる、ひな治めに巡りましょ比、御

船より八代の海面を見さけ給ふ、折し茂沖にもゆる

火あり、こをみてさは勢給ふに、しらぬ火さなんこ

たへて、ひの國の名はしまれりける、はた穴穂の宮

しらす、天皇の御代には、國々の境を立給ひ、

纒向の日代の宮しらす、

菊池風土記序

肥後文獻叢書第三巻

寛政六年といふ年四月日 澁江公正 しるす

けく、御いつになひきし事茂みつかきの久しく有

けらし、あれ今おもふに、いそのかみいにしへを去

事遠くしなれば、くさ〜〜の事、あるひはたえ、

あるひはほろふ物にしあれば、菊池の郡の、いさへ

けのつゝれ事さも、かれさ言ひこれさいひ、もみ

ち葉の過し昔をかふかへ、みつきのふてにまかせ、

ふつくにかきあつめ侍るは、むらきもの心をつくさ

>るにしもあらね、もち月のたらはーけんともお

もほわねは、見る人おちたるを補ひ、誤れるをたゝ

さんは、ねかはさらめやも、

四七六

新撰車隨過老巻之三十一

四男

吉

稱 龍造寺.後改,

信又一本日龍造寺者七條大納言藤原兼隆之後裔也兼

後有,故流 肥前:永亨十一年於肥 病死始娶

松浦某女 生 男子 後至, 京都 仕 將軍家 冒母姓

稱 松浦左馬助兼信 後又來氵 肥前:稱 上松浦 是龍

造寺之曩祖也兼信七世孫有田九郎左衛門信吉其子

藩翰譜鍋島傳日政家之三男駿河守高房鍋島直茂養

爲｣子二十三歳死其子季明流 陸奥會津, 六十 二歳

於 配所 死龍造寺家永斷絕大成武鑑日政家男高房

爲„鍋島直茂養子 稱 龍造寺 慶長八年依家康

公命 仕" 秀忠公,同十二年九月先„„養父死異本

系圖日政家之子隆房號 永德院白巖,其子山城守家

忠號 白庵 於 江戸 死其子兵部猞信號 宗巖 院自

休 熊本流長院有、墓

11

-隆房 爲„鍋島直茂之養子,

子

信家天其子家治幼穉也離韦七殿左側剛

陳早七邢左衛門故信家弟

隆信蚋 家督 稱. 龍造寺山城守1

新撰事蹟通考

四七五

武瘵嚴男同性

宇野東風

隆胤 榮卒無„嗣子一族長臣請 迎隆胤

娶„胤榮之遺室以嚀」繼 總領職|改 山城

守隆信,從„„佐賀城,後併„領肥前豐前二筑及

肥後北郡 勢威振,九國,天正十二年三月隆

信討„有馬晴信於原城i晴信乞„援於島津島

院

實周家之男幼名慶法師始爲,龍造寺住職L

11

從五位下 始名隆胤

隆信

民部大輔 山城守

-胤時 新五郎

|鎭家 備後守

-家乾 越前守

三日卒

天正十六年六月叙位任三豐前守,十七年三月

從五位下

胤榮

宮内大輔 豐前守

-盛家 伯耆守

肥後文獻叢書第三卷

女

!政家

* 天文十四年 家純周家等戰沒故返,初服

繼 曾祖父剛忠之跡i居 水江城, 稱, 民部大

輔家種

家信

也爲 後藤伯耆守純明之養

後藤伯耆守貴明養子

11

大村系圖貴明大村純前之男

後藤十左衛門始膳

姜大村丹後守經前女

江上石見守武種養子肥前神

江上叉四郎

卒年不、詳號„隆雲院

不,自由 子隆房幼冲故讓„所領於鍋島直茂

天正十五年屬„秀吉¸賜„肥前國ț後發病起居

始名鎮賢

從五位下 侍從

太郎四郎 民部大輔 肥前守

小田彈正少弼鎭光妻

肥前多久 城 主

川城主

蒲池彈正少弼鎮漣妻 腕般抑

津義久命 高瀨願行寺僧四阿彌陀佛,葬 其

首於寺中,法名泰嚴宗龍號 法雲院 卒年五

十六

ラシム

兵,戰敗死昌外之部將河上忠堅得„ 其首| 島

カ

津昌勿將_兵來攻 隆信二十三日隆信與薩

四七四

新撰事蹟通考卷之三十一

女 胤榮室

房守

·家晴 上總介

又作 安

元龜元年十一月二十七日死

隆信爲"總領G之後繼其跡】居 水江城

左衛門佐

|鑑兼

孫九郎 甲斐守

家泰 長三郎 周家同時戰

與„家純¸俱戰死法名春雪

|家門

11

和泉守

天文十四年正月二十三日與,馬場賴周¸戰

而敗死法名鑑

|家純

豐前守

寺開祖

富春禪師 水上山住職小井樋村瑞應寺

妻小鳥井信元女州記

天文十五年三月十日死年九十三法名剛忠

淨金

肥前守頼四七三

-胤尙 右京亮

和守,同年八月三日卒法名長雲公

天文八年六月二十二日叙 從五位下,任,大

從五位下

胤久

民部大輔 大和守

一胤和_刑部大輔 早世

女 犬塚尙重妻

-長信 和泉守

信房 豐後守

信周 安房守

-隆胤 爲,,總領胤榮之嗣,

頼純 孫八郎 周家同時戰死

純家

孫三郎 周家同時戰死

兵;戰,,祇園原 死之

天文十四年正月二十四日與,馬場賴周

一周家

馬場六郎政員妻

六郎次郎

肥前中野城主馬場

女周之子也

鍋島淸房妻

女

1

安秀

家治

-家昌

-家平

家親

家益

肥後文獻選書第三卷

左衛門尉

叉四郎

家淸

主家氏-

季時戰死故繼 家跡

法名心覺.

灭四郎 法名修善

康家

屬„足利尊氏;

孫六郎 民部大輔

始名家種

貞和五年二月二日補„肥後玉名郡野原 西鄉

ヨウ

增永名地頭職】

一胤家

叉七郎

屬¸„鎮西探題一色賴行入道道猷,

家和

若狹守

屬„„鎮西探題今川貞世入道了俊,

11

按九州記作 家盆、家季、家親、家政、家

平、家定、家治,今从„系圖,

若狹守

灭四郎

家秀

-家兼

屬 太宰少貳貞賴

立別家居 水江城,

山城守 剃髮號剛忠

1

澄覺法印 寶琳院住職

還俗嗣„父跡i居 佐賀城,永正十七年八月死

法名麟應

故

始爲亅僧爲„龍造寺住職,胤家繼„千葉

後改„家貞,

隱岐守

從„千葉胤盛 住 筑前,終續 千葉家i

豐前守

按自„公光,至 康家次弟諸本不同今從”

系圖 校„合諸書,

11

院

永正七年三月二十一日死法名定眾號„„ 慶雲

始名忠俊

右衛門大夫 隱岐守

始爲、僧爲„„龍造寺住職,後還俗繼家

隱岐守

四七二

能成

景賴

-行景

-公光

-千常

字俵!

從五位下 左衛門尉

鎮守府將軍

從四位下

從五位下

行

内舍人

左衛門尉

從五位下

伊豆守

公清

相摸守

近藤太 近江`掾

依」爲 近江掾|稱 近藤

左衛門尉

駿河守

-景親

島田次郎

近藤武者 後改貞成,

近藤太 左近將監

大友能直之父才群头

友系圖

弘安四年與蒙古,戰今討死

|季時

左衛門尉

|季益

左衛門尉

以 龍造寺】爲三家號

鎌倉家人 補佐賀郡龍造寺鄉地頭職,自」是

文治元年從「系圖

九州記爲三三九月二十七日季家爲

|季家

左衛門尉

-季善

左衛門尉

孫家兼也不」知 就是

久安二年二月來 肥前國,佳龍造寺鄉,

藩翰譜日秀鄉七世孫季善從鎮西八郎源

爲朝 止 九國,佳龍造寺鄉 季善十二代

秀清

左衛門尉

傳出, 于少貳系圖

丨賴平 爲 武藤賴兼之養

少貳系圖爲賴兼實

廣瀧山,自殺法名大本高其後示現稱 廣

明應六年四月從」父與"大内,戰十九日於

一高經

從四位下 侍從

-勝茂

信濃守

法名白岩號,,,,永德院,

實政家之男慶長十二年九月死年二十二

隆房 駿河守

天正十八年依 龍造寺家病身其男隆房

幼穉¸直茂爲,,其養子 居 佐賀城,元和四

年六月三日卒年八十三

從四位下 侍從 始名信生

直茂

飛驒守 加賀守

-信房 豐前守

天文十三年八月二十八日病死法名剛意

金公

孫四郎 駿河守

肥後交營業書第三卷

義房 左近將監

始居,近江國田原鄉,因稱 田原藤太, 後 改

テ

鎮守府將軍

藤原秀鄉

從四位下 武藏守

龍造寺

實時尙之弟

|政興 太宰少貳

永祿二年正月十一日於清福寺 自殺法名心

了本原

【五月肥前屋形少冬尙

始名冬尙

阿蘇文書 天文 十六年閏

太宰少貳

明應七年任„肥前守 亨祿五年九月四日卒年

四十五法名心月本了

從五位下

-資元

太宰少貳 肥前守

-賴隆 四月十八日戰死

瀧大明神;

四七〇

一能成

景賴

行景

脩行

-公光

|千常

字俵,

從五位下 左衛門尉

鎮守府將軍

從四位下

從五位下

行

内舍人

左衛門尉

從五位下

伊豆守

公清

相摸守

近藤太 近江掾

依」爲 近江掾¸稱„近藤|

左衛門尉

駿河守

景親

島田次郎

近藤武者 後改,貞成,

近藤太 左近將監

大友能直之父事群 大

友系圖

弘安四年與 蒙古,戰今討死

-季時

左衛門尉

季益

左衛門尉

以„龍造寺】爲„家號

鎌倉家人,補 佐賀郡龍造寺鄉地頭職,自是

文治元年年今從…系圖

九州記爲三三九月二十七日季家爲

季家

左衛門尉

季善

左衛門尉

孫家兼也不」知„就是

久安二年二月來:肥前國,住 龍造寺鄉.

藩翰譜日秀鄉七世孫季善從鎮西八郎源

爲朝 止 九國 佳龍造寺鄉 季善十二代

-秀清

左衛門尉

|賴平 爲„武藤賴兼之養子孙,將營系圓

|廣瀧山,自殺法名大本高其後示現稱廣

明應六年四月從」父與三大内,戰十九日於

一高經

從四位下 侍從

勝茂

信濃守

法名白岩號 永德院

實政家之男慶長十二年九月死年二十二

1隆房

駿河守

天正十八年依 龍造寺政家病身其男隆房

幼穉 直茂爲„其養子 居 佐賀城,元和四

年六月三日卒年八十三

從四位下 侍從 始名信生

直茂

飛驒守 加賀守

——信房 豐前守

天文十三年八月二十八日病死法名剛意

金公

-清房

孫四郎 駿河守

義房 左近將監

肥後交營業書第三卷

始居,近江國田原鄉,因稱„田原藤太 | 後 改

鎮守府將軍

藤原秀鄉

從四位下 武藏守

龍造寺

實時尙之弟

|政興 太宰少貳

永祿二年正月十一日於:清福寺 自殺法名心

了本原

【五月肥前屋形少貳冬尙

始名冬尙

【阿蘇文書 天文 十六年閏

太宰少貳

四十五法名心月本了

明應七年任肥前守」亨祿五年九月四日卒年

從五位下

-資元

太宰少貳 肥前守

-賴隆 四月十八日戰死,

瀧大明神,

四七〇

新撰事蹟通考卷之三十一

嘉賴

初法師 太宰少貳

敎賴 爲兄嘉賴之嗣,

-嘉賴 爲兄資嗣之嗣,

世兵,戰而死

永亨五年八月於 肥前國鹿子| 與: 大內持

-資嗣

太宰少貳

賴房 稱„橫岳

永亨五年八月大內兵攻„滿資¡滿資 於 秋月

岡城,自殺年四十法名本勝

名賴滿中滿貞後改,,滿資:

|滿資

太宰少貳

應永十一年六月二十三日死年三十五法名

本惠

太宰少貳

永和四年十一月十一日死年四十法名士峰

本富

-賴澄

越後守 太宰少貳

教賴

經直

四六九

屬』龍造寺家兼

作̀ 茂尚

鍋島平右衛門

清久或

-經房

小二政祐贊【遂亡不知,孰是

ニフ

明應六年四月十九日於‟肥前多久城,與大内

義興,戰 而敗沒法名明哲本光於多久城下專稱

按慕齋集答 日本國小二殿政尙書,日

本天文八年又海東諸國記大内義隆 伐 之

始名賴忠足利義政授„名一字 改 政尙後

叉改 政資

太宰少貳

應仁二年十二月六日與„澁川之兵, 戰」敗

死年四十四法名淨鎭

足利義教授‟名一字

松法師 太宰少貳

嘉吉元年正月於‟對馬死法名大雄本覺

後,赴 他國

某 大膳 分頗知 賜 千三百石 後去肥

-茂成 主殿 子孫在 江戸-

-増門 新介

政室廣門妻也

トカ

女二人, 黑田長

妻弓削左衛門尉清軍入道幽全女/衪也有1

今何右衛門

役與,,石田三成 後來:降加藤清正之陣姑

寄食加藤家居 肥後八代 忍到豐前小

倉,忠興君授,,祿二千石 元和九年四月二

十三日死年六十八法名卓山夢庵

ミシ

天正十五年降 秀吉 賜 本領内 慶長庚子

剃髪號 夢庵i

-廣門

上野介

門

永祿十年於 五个山,自殺年三十七墓在

三一岳城西北三十步許 法名虎峰良龍禪定

惟門

左馬頭 下野守

永和元年乙卯八月二十六日與』今川貞世,戰

肥後,敗死年三十九法名存覺

從五位下

冬資

太宰少貳

本太平記為賴資 諸異本皆作 賴高,今從

、之叉日次記曰太宰新少貳忠資 和 三年

十一月十一日於九州,討死不知孰是

二八

按賴高一作,,直資 太平記爲 忠資 金勝院

延文四年八月大原合戰敗

-賴高

筑後新少貳

年七十八法名梅溪本道

徵,故略, 千此

應安四年辛亥十二月二十四日卒

詳 于編年考

屬,,足利尊氏 與 菊池武光 戰連歲終不勝

始名賴通 剃髮號 妙雲 棕

從五位下 鎮西行

|賴尚

筑後守 太宰少貳

妻細川幸隆之女

|重門 筑紫左近 賜三七百石:

|經稔

|貞法

監

權守

左近將武藤但馬法名崇賢

武資

資法

少貳但馬權守

河內守

經信 但馬三郎

延文四年八月於大原,戰死是

胤懶散

又

種信 但馬將鑑 作種

|資信

朝日但馬守

池武敏聞、之起,兵襲擊走 賴尚叉 轉、兵掩

至太宰府 攻妙惠妙惠兵寡不能防守,退

保 內山佛寺 武敏叉圍」之二月二十九日妙

惠力竭自殺年六十五

シム

元弘中奉‰ 後醍醐天皇敕 王師,足利尊

氏之反也妙惠父子叉從」之建武三年春尊氏

戰破而來 筑前,妙惠子賴尙救 菊

剃髮號 妙惠i

-經時 山井但馬守

筑後守 太宰少貳

貞經

-經重

|門

秀門

-滿門

一正門

四六七

所肥前五箇山城,

少貳高經戰死家衰故正門遷 少貳之居

11

上野介

大永四年正月十八日馬場肥前守賴周殺

滿門父子三人:

筑紫筑後守

移,,筑前三笠郡 筑紫村 因家號改 筑紫

亨祿三年八月大内義隆其臣杉豐後守興連

爲､將攻_肥前 筑紫尙門朝日賴實與」之少

貳冬尙分 龍造寺胤久拒 之 尙門賴實與,

胤久部將鍋島淸久,戰 田島:尙門以下敗死

筑紫下野守

テ

筑紫下野守

刑部少輔

武藤藏人

賴泰 太宰權少貳

正月二十一日任 太宰權少貳,轉咗徧 此

日叙爵弘長三年十一月出家法名心蓮

永四年八月四日卒年六十三

關東評定傳曰景賴建長四年二 月 依

品親王下向事,勤,京都使節 康元元年

舊左

剃髮號 心蓮

1

-景賴

左衛門尉 太宰權少貳

子孫 肥後:爲家號

賴貞

-賴基

肥後守

-爲賴 稱保

評定衆

-賴茂

左衛門尉

弘安四年七月十三日卒年八十四

貞永元年八月繼父職 補鎭西行,

從五位下 祝髮號,,覺惠

資能

左衛門尉 豐前守 太宰少貳

肥後文紙書第三卷

經資

-景資

-經氏

盛經

-資時

年與蒙古 戰,於壹岐島前 討死

記〟引之

少貳 武藤 資時弘安四

少貳家譜日

〃參考 大平

住„肥後三船,

1

備中守

十五法名宗恵

延慶元年戊申正月二十五日於 鎌倉卒年五

從五位下

筑後守 太宰少貳

子孫在„肥前國,稱,平井

豐前守

居„岩門城,弘安八年被、誅

後改 盛資:

息景貸弘安四年二十九歲

豐前守 蒙古合戰繪詞書覺惠之子

正應二年己丑八月二日卒年六十四

三郎左衛門尉

從五位下 剃髮號 淨意

筑後守 太宰少貳

四六六

永保中源義家帶〃鎮東將軍節刀 征,陸奧

國賊 賴氏佩〃官符爲 將軍仗,從」之因

新撰事蹟通考卷之三十一

-賴氏

若狹守

依」爲:武者所 稱武藤

-長賴

尾張守 長家二男

康平七年十一月九日薨年六十號 御子左

權大納言

|長家

正二位

兼家之四男也萬壽四年十二月四日薨年六十

二稱 法成寺叉御堂,

攝政 關白

藤原道長

從一位 太政大臣

少貳

系圖附錄五

新撰事蹟通考卷之三十一

後守 補„鎮西奉行,因來居 太宰府世襲

其職 四六五

-宗平 刑部允

-氏平 左衛門少尉

二十五日卒年六十九號』安養院

貞永元年八月辭」職祝髮法名覺佛二 年八月

故更以 少貳,爲家號

テテ

建久六年叔,從五位上 任 太宰少貳兼筑

資頼

武藤小次郎

女

平知盛妻

建八六年爲„„公文所司

-頼平

大藏亟

左衛門尉

-頼兼

小三郎 大藏丞

被」誅頼家爲」縁坐

-頼家

セル

天仁元年源義親有罪

而稱„武藤慊仗

慶長五年九月十四日於 佐賀關,戰死

-親賢

田原近江守 削髪號„紹忍,

親資

田原右衛門大夫

親正四世孫钟

親榮

|親正

田原近江守

親貞五世孫

親述

-親貞

田原中務少輔

田原讃岐守

仕: 御當家,

正久

吉弘加左衛門

仕,立花家.

吉弘加兵衛 始松市

慶長五年九月於 石垣原,戰死

-統幸

松一太郎 加兵衛

女 戸次山城守 入道宗傑妻

女大友義統室

女

高橋三河守鑑種養子

肥後文獻叢書第三卷

-親眞 善右衛門

-親政 龜右衛門

-親英

松野織部助

寛永十八年三月二十五日死法名小庵道孝號氵

本地院,葬 春日寺,

實大友宗麟之二男 仕 御當家,

剃髪號 利根川道孝,

-親家

林新九郎 門司勘解由 常陸介

親貫

-親宏

田原右馬頭

田原常陸介

仕,, 御當家】

松野八郎左衛門 號,,休庵

'能盛

長藏 左馬助

實大友宗麟之三男

後號,,松野牛齋】

-親盛

田原民部少輔 與兵衛

新撰事蹟通考卷之三十

領, 豐後國國東郡田原村,因改家:號 爲田

十郎 左近藏人 中務少輔

泰廣

能直之十男

田原 吉弘

助祖

親勝 少兵衞 仕 御當家

太郎

吉弘統幸妻

女伊勢佐伯某妻

女女

永祿十一年生文祿五年太閤 秀吉賜 豐後日

田郡太井莊内千石】慶長六年十一月仕福島

正則,與 安藝備後二國内千四石,皆有 證書

筑前惠良某妻

始名親次

|親善

小

太郎 虎左衞門 ･虎後=

始名親孝 剃髮號 道

1

親度

民部大輔

永祿五年五月削髮號 道輝︶

原

田原藏人次郎

基直

盛直

田原次郎

田原藏人三郎 剃髮號正曇

直貞

爲„豐後香賀莊地頭 住吉弘鄉

田原豐前六郎

|貞廣

田原下野守

一氏能

豐前權守

吉弘叉三郎

-正賢

直輔

以吉弘 爲,,稱號,

太郎 吉弘藏人佐

鑑理

始名鑑直

太郎 親藏人 左近大夫

-鎭信

加兵衛 剃髮號 宋鳳叉宗仍

鎮種 高橋主膳兵衛 剃髮號紹運

1

吉弘土佐守

-賴資

-親理

氏房

-賴房

貞泰

地 其綸旨傳 于今1

袈裟鶴丸 豐前藏人次郎

親賀

剃髮號 寂性˵

屬:官軍 有˩功與兄同賜綸旨,

藏人太郎

親昌

始名能長 剃髮號正友,

屬三官軍 有˩功 天皇賜給旨 後從,,,,足利尊

寫年

-親家

1

氏 康永二年三月有三軍忠目安狀˩有微。

貞治二年卯月有˵申狀,55

-親泰

普賢丸 一法師丸

彌太郎 日向守

貞和四年正月有:父賴房之讓狀|

-親每

延次四年十月有三軍忠申狀 (T之

編年考

鶴壽丸 藏人太郎

-親

永德三年十月受…父之讓有､狀

次郎

千德丸

親明

-親守

新藏人

民部大輔

伊豫守 安房守

次郎 兵部少輔,民部大輔

天文五年六月十三日大友義鑑授」名稱 親爹】

安房守 剃髮號,,道擇

太郎 双十郎

剃髮號,,道雄i

藏人佐

大和守

滿延

常陸介

八郎

寬正六年大友親繁授 加增領地,

松一丸 太郎

應永十五年有三父親賀之讓狀

八郎太郎 山城守

母田原左近大夫直平女

カ

龜鶴丸 民部大輔

四六二

新撰事蹟通考卷之三十

親時 肥前次郎

-親本 伊豆守

兵庫頭

親定

千壽丸 常陸介

志賀家傳日志賀親正男親有依.讒言,爲

大友氏,於„肥後小國扇村,切腹

-親有

カ

山城守

親正

兵庫頭

親賀

親泰

武藏守

山城守

親方

武藏守

山城守

元德二年築 城於直入郡白丹南山,居

之岡城日 上志賀 南山城日:下志賀

重利

良鶴丸 左馬頭

一鑛隆

鎮安

-親政

-貞朝

四六

元弘建武之役屬 官軍,有」功 天皇賜恩賞

始名忠能 剃髪號正玄

志賀藏人太郎

爲_大莊屋,

親信 何右衛門

何右衛門

仕〟 細川御家,

某

安兵衛

安之允

三十三法名寶山良勝

天正十四年十一月二十二日先」父死年

常陸介

天正十五年十月六日死年四十二法名金

剛宗

能登守

天正十六年正月五日死年五十六法名天

道運號 常樂寺,

剃髪號ŋ道運子

常陸介 武藏守

統勝 平三郎 樺左衛門

像仁右衛門等,俱自殺

11

依 義統之命,赴 竹田】害 義統息 女, 與宗

慶長五年九月十五日大友義統立石沒落時

-統綱

與九郎 茂助

宮內少輔 於 臼杵 鎮實同日自殺

統

治助 左吉 市進

-鑑之 右京 於臼杵 鎮實同日自殺

——鑑通 左京

治部大輔

|鑑景

與十郎

統賢 民部大輔

於 臼杵,自殿

參河守 剃髪法名宗教

鄉人祭稱 八幡

於 豐後野津原今畠,自殺法名宗慶

-鑑貫

人道宗慶

肥後文獻叢書第三卷

一作…近江

兵部大輔

能

-泰朝

宣元

實一萬田宣顯入道孔釋男

力

鶴丸 志賀左衛門太郎

靑觀

剃髪號 圓淨i

朝鄉

輔阿闍梨

志賀三郎

剃髪號 阿法i

前八郎太郎」

志賀太郎藏人

又稱三大友志賀

郡岡 螈

居、之

|城是也

田

狀 故改,,家號,日 志賀 後築,,城於豐後[

11

年四月母尼深妙與,大野莊内志 賀 村,有讓

貞應二年十一月二日能直分 與所領,應二

剃髪號 信寂ı

仁王丸 志賀豐前八郎

能直之八男

志賀

于今,

慶長五年移,,居大分郡伊豫床村 子孫存,

新撰事蹟通考卷之三十

-親時 肥前次郎

一親本 伊豆守

兵庫頭

-親定

千壽丸 常陸介

志賀家傳曰志賀親正男親有依„讒言,爲

大友氏,於„肥後小國扇村,切腹

-親有

11

山城守

-親正

兵庫頭

親泰

武藏守

山城守

親方

武藏守

山城守

元德二年築 城於直入郡白丹 南 山居

之岡城日, 上志賀,南山城日三下志賀,

重利

良鶴丸 左馬頭

I鑑隆

-鎮隆

一親政

-貞朝

四六一

元弘建武之役屬官,有功 天皇賜恩賞

始名忠能 剃髮號 正玄

志賀藏人太郎

爲大莊屋,

親信 何右衛門

何右衛門

仕細川御家,

安兵衛

安之允

三十三法名寶山良勝

天正十四年十一月二十二日先」父死年

常陸介

剛宗

天正十五年十月六日死年四十二法名金

能登守

道運號ŋ常樂寺,

天正十六年正月五日死年五十六法名天

剃髮號 道運孑

常陸介 武藏守

統勝

平三郎 樺左衛門

慶長五年九月十五日大友義統立石沒落時

依_義統之命,赴,,竹田」害』義統息女, 與宗

像仁右衛門等,倶自殺

-統綱

與九郎 茂助

宮内少輔 於 臼杵 鎮實同日自殺

統

治助 左吉 市進

-鑑之 右京 於 臼杵 鎮實同日自殺

一鑑通 左京

治部大輔

|鑑景

與十郎

-統賢 民部大輔

於 臼杵,自殿

參河守 剃髪法名宗教

於„豐後野津原今畠,自殺法名宗慶

鄉人祭稱 八幡

|鑑貫

兵部大輔入道宗慶1

能

-泰朝

宣元

實一萬田宣顯入道孔釋男

力

叉鶴丸 志賀左衛門太郎

靑觀

剃髮號 圓淨i

朝

輔阿闍梨

志賀三郎

剃髮號 阿法

1

前八郎太郎

志賀太郎藏人

又稱:大友志賀

貞應二年十一月二日能直分引與所領,應二

年四月母尼深妙與 大野莊內志 賀 村,有讓

狀,故改 家號,日:志賀,後築„城於豐後□□

郡岡－螈 居|之

剃髮號„信寂ı

仁王丸 志賀豐前八郎

能直之八男

志賀

于今 1

慶長五年移,居大分郡伊豫床村 子孫存,

四六

新撰事蹟通考卷之三十

貞政同所戰死 法名道了

直

千代法師 七郎 丹波守

永亨五年八月十六日於,,筑前秋月,戰死年

二十六法名道宗

貞政

ス

王一丸.孫次郎 越前守

貞世 鹽滿丸 五郎

直政 爲貞政之嗣,

左馬助 法名聖雄

貞直

圓王丸 叉次郎

昌繁藏主 妙園寺任職

貞鄉 越前守 太田家祖

明巖 報恩寺住職

母戶次重秀女

法名義慶

眞政

龜鶴丸 次郎 參河寺

宣元 爲:志賀朝鄉養子,

玄長 袴田右衛門尉

四五九

六郎

親泰

千鶴丸

里人祭稱:白石明神,

永正元年七月四日死年十七法名喜山紹悅

-長泰

喜德丸 新次郎

法名俊翁宗英

-常泰

喜德丸 治部大輔

養心庵

受父直政養兄家泰之讓」法名勝山道信號氵

修理亮 參河守

直泰

不働丸 與次郎

實直弘之子 始名家政

家泰

萬壽丸 兵部大輔 法名道貞

實眞政之三男

法名融乘

直政

乾七丸 次郎 治部大輔

一家政 爲:直政之嗣,

太郎兵衛尉 剃髮法名蓮

景

能直之六男

一萬田

爲„伯母壽福院養子,奉」仕 幕府¸„高家

衆

從四位下 侍從

-義孝

大友內藏助 近江守

奉仕 幕府¸爲:旗本,

親冬 松野六郎兵衛

延寶四年五月七月於 江府 死法名寶屋宗

珍號„„雲岫院i

能增

松野主殿 今之正之祖

夕

女 照子內親王家上﨟稱„壽福院,

宗¸稱„松野˵ 法名機雲宗用

正昭

義親 龍五郎 右衛門督 奉 仕 幕府,早世

右京亮 義親死無˩ 子於˩是正照 爲,一家

親賢 左兵衛督 奉˩仕˵ 幕府 世

始名宣景 貞能 石丸治部大輔

母田北七郎兵衛尉親泰女

法名淨實

宣政

鶴松丸 孫太郎 左衛門尉

-英政 三郎 上總介 井上家祖

削髪法名孔釋

母大友豐前九郎能基女

宣顯

孫鶴丸 太郎左衛門尉

母田村刑部大輔仲能女

自亅是以一萬田 爲家號

光景

一萬田丸 兵喬太郎

居豐後大野郡鳥屋城゙ 母同親秀,

詫磨文書文永八年二月鎌倉下知狀

大友出羽前司賴泰與,,,,詫磨別當 能秀 子息

時秀直秀長秀幷大友太郎 兵衛 尉 時景 法

師¸相ñ論相摸國大友莊内屋敷名田,事

云々以下

久我某簾中

女土佐一條權中納言康政簾中

志賀親次妻

女女

弘治三年二月於. 長門長福寺,自殺

繼卣大内義隆之遺迹

義英

八郎 左京大夫

ﾁ

天正七年正月讓,家於義統,十五年五月二十

三日於 臼杵莊赤河内海邊岩屋茶亭,卒年五

十八法名休庵宗麟號 瑞峰院¸„赤河内 程

中村成森.

非

從四位下 剃髮號 宗麟

左近衛權少將 參議

義鎭

鹽法師丸 五郎 左衛門督

義武 嗣 菊池家,傳在菊池系圖|

享祿三年五月四日於 府內上原 生天九年

元服足利義晴授〃一字 日義鎮 永祿五年五

月剃髮號 休庵宗麟 六年築城於海部 郡 臼

杵莊丹生島 移氵 居之,別號謂〝圓齋, ”””

一

來〃豐後,集」兵與,黑田高孝,戰敗而降, 高孝,

後赴 江戶,蟄引居牛込,剃髮名宗巖號中

庵 慶長十年七月十九日卒法名中庵宗巖號

豐鐘四五七

十六法名香岩眞馨號 松聲院

慶長十七年七月十七日於江戶牛込,卒年三

始名義宣

從五位下 侍從

義乘

宗五郎 左兵衛督

親盛 田原親賢之養子,

女 吉川秀包室

女 臼杵統尚妻

爲田原親貫之養子,

親家

奈田鑑元妻

女

院

ヒ テ

足利義晴授』名一字,曰:義統,豐臣秀吉双

授,一字,改„吉統,後復„義統,文祿元年有故

沒收所領,關原役屬 西軍謀_復舊土, 密

從四位下 侍從

長壽丸 左兵衛督 參議

實親繁之四男始爲、僧住 肥後 瑞光寺,後還

備前守 從五位下

親治

小僧丸 九郎

女菊池肥後守室

河野某室

女

故改 義右,明應五年十月二十七日於生長門

國,戰死法名傳芳成公號 大智寺,

足利義材授,名一字,因改 材親,又授 義字

母大內左京大夫政弘女

正四位下 始名親豐

-義右

鷹房丸 五郎 中務大輔

女 島津忠昌室

親照 戶次叉五郎

親治 爲義右之嗣;

海東諸國記曰六郎親常政親異母弟日田修

理大夫大藏親常

親常

11

六郎

敗走 肥後南關終被」殺

肥後文獻叢書第三卷

始名親安又親敦足利義晴授氵一字,改義鑑

永正十一年十二月受」讓天文十九年 二月十

日夜逆臣津久見美作守刺„„義鑑於寢室,十二

日朝終卒年四十九法名松山紹康號,到明寺,

到明寺在二三大野郡寺小路 1

禪宗號菩多羅山－

七月四日叙

從四位上埛書‟淳祿五年

從四位下壢名土代大永六年三月二十

九日三從四位下舊無位

義鑑

11

次郎 修理大夫 左近衛權少將

-親元 五郎九郎 爲„戶次能泰之養子,

足利義澄授』名一字,日:義親 後改 義長 永

正七年八月受」讓同十五年八月十一日先」父

卒法名天眞淸照號 大雄院,

修理大夫 從四位下

-義長

鹽法師丸 次郎五郎

俗義右戰死依 足利義澄之命 繼其家跡|大

永二年正月十九日卒法名 梅屋見友 號』見友

院

寬正六年七月五日卒 法名 成巖正金號 寶生

實親世之四男

從五位下

一親隆

四郎 出羽守

能賢 筑後守

-師能 近江守

寺

長祿二年二月六日卒 法名輝山光碧號 大 聖

實氏繼之三男

左京大夫 從四位下

親綱

花市丸 孫三郎 出羽守

親繁 爲親隆之嗣,

文安二年正月四日卒法名玄乾理公號 觀音

寺

實親世之長男 足利義持授‵名一字,

刑部大輔 從五位下

持直

親隆 爲_親綱之嗣,

孫太郎 中務大輔

大友十四代豐後豐前二州大守賽 親著明應五年七月謀」反親治遣」兵討」之親 勝

四五五

親勝

三郎

寺;

明應五年六月-日卒 法名 珠山意公號 海藏

豐前守 從五位下

小鷹丸五郎左衛門大夫

親滿 四郎

號 心源寺

明應二年十一月十四日卒年八十三法名道清

正之故今從之

11

男也花押藪又同

四

實親著之四男

按系圖親繁實氏繼之四男然墓表銘 繁

トモ

11

從五位下

-親繁

五郎 豐後守

能世 民部少輔

-親實 左京亮

-親鄉 太郎

「禪宗號金福山

寺

寺在二宇多枝村

、記爧髙號,,瑞光寺。

作

應永二十五年二月二十五日卒法名幢袜

修理權大夫 從四位下

-親世

千代松丸 孫三郎 式部丞

1

從五位下 號 不二庵,

利根孫太郎 式部大輔

氏泰無、子以」弟氏時,爲、嗣尊氏命改源姓

自」是子孫世稱,,源姓 應安元年三月二十一

日卒法名神州天祐號氵 大應寺,

從四位下

宮松丸 孫三郎 刑部少輔

-氏時 爲氏泰之嗣,

後復歸,,順官軍 於 長門府,自刃

氏宗

孫四郎 兵部丞 始名氏行

於山崎 諸軍敗績氏泰逐降 尊氏,

法名獨峰淸巍岝號同慈寺

11

-親棟 刑部少輔

持直 爲‟親著之嗣

母大内義弘女

【庄久所村-今爲亡所強號雲鶴山1

瑛號 大惠寺1

大惠寺者嘗親著之所」建在海部郡丹生

應永三十三年十一月二十九日卒法名玉庵道

實氏繼之長男

陸奧守 從五位下

親著

次郎 式部大夫

-有祐 十郎

親繁爲親隆之嗣,

僧 福嚴寺住職

親綱 爲持直之嗣,

1

日於三豐後三角畠,被誅

背„親著 謀」逆應永三十二年 九月十三

孝親

次郎 大膳太夫

親著 叔父親世養」嗣

-氏能 利根六郎

-親國 五郎

四五四

-宗茂

千熊丸 左近將監 飛驒守

從四位下 侍從

始名統虎

實高橋鎮種入道紹運長男母齋藤兵部少輔

鎮實女也,六永祿十二年己巳八月十三日

於‟筑前岩屋城 生天正十三年爲‟養子,十

月續』遺領 十五年六月 豐臣秀吉授筑後

柳川城,領三十三萬二千二百石,七月叙,從

四位下,任侍從,慶長五年沒收所領,受

加藤清正之扶助,居„肥後隈本1毗衡,居高耗

閑暇雜書浪 客

11

七年春上洛按宗茂家臣小野和泉以下多居住喂

八年

本1今其所曰:柳川丁1小野和泉既於熊本|死

十月於 陸奧國棚倉 賜:一萬石 十五年七

月於,同國赤楯上總國山邊郡|加賜二萬

石,元和六年十一月改„知,於„筑後國山

門三池三豬上妻下妻五郡,賜 十一萬九千

六百石餘,再住∪柳川城` 後爲相伴衆致

仕薙髪號 立齋 寛永十九年十一月二十五

日於三江戸下谷館,卒年七十四法名松宗

新撰事蹟通考卷之三十

村假館,死法名泉譽良淸號 光照院,四五三

氏泰始因」徵到„京師,從脇屋義助,拒 尊氏

式部丞 從五位下

氏泰

千代松丸 孫太郎 大炊助

即宗 利根吉祥寺住職

宗匡 彥子丸 續兄貞載之家,

從四位下 侍從後號好雪

實立花直次四男離號

左近將監 飛驒守

實紹運女宗茂妹道雪養爲」女

女

立花吉右衛門重家妻

實安武安藝守鎮則女道雪養偽」女

カ

女

實戸次治部大輔親正女爲"道雪養子1

八木多比丹波妻

小野和泉鎮行妻

卽葬,

館側

ス

慶長七年十月十七日於 肥後 玉名郡 腹赤

茂號ņ大圓院 葬ņ廣德寺,

名宮永 宗茂室

丹後守

親正

千代壽丸 左近將監

山城守

親直

彥德丸 左近將監

實弟也繼„兄貞載之遺跡,居氵 立花山城、

宗匡

立花參河守

日終死

京東洞院,與„結城親光,戰被‶重創,十四

テ

居,筑前糟屋郡立花山城,因以 立 花 家

號 建武四年頑珽正月十一日從,足利尊氏-

立花左近將監

貞載

貞順 屬官方囿於豐後大野郡大渡,戰死

阿多々丸

近江次郎 豐後守

建武以來屬. 足利尊氏,

削髮法名具簡 號 顯孝寺】

近江守 從五位下

貞宗

孫太郎 左近將監在近大夫將監-

詫磨文書文保元年

肥後文獻叢書第三卷

宗勝

-鑑光

-鑑載

親善

-鑑連

友宗麟分2道雪 遷 立花山城】繼其家跡

自」是稱‶立花,天正十三年 九月十一日死

年七十三

永祿八年立花鑑載叛,大友家,而家絕矣大

丹後守 剃髮法名道雪

實戸次

彌次郎 伯耆守

山城守

鶴千代丸 左近將監

但馬守一作ﾚ俊

國訓相同

千龜丸 左近將監

兵庫頭

立龍丸 左近將監

因幡守

宮德丸 左近將監

能泰

直賴

新三郎

三郎

直繁

高載

太郎

右馬頭

直世

直光

治部少輔

右馬頭

阿蘇文書有三正平二年六月一日 頼時之

書狀

-頼時

豐前太郎 丹後守

貞直

-時親

戸次豐前々司

戸次太郎

泰能 入田十郎 入田家祖

親盛 九郎

良慶權僧都 大野酒井寺院主

兵衛尉

頼宗 津野五郎

-親重 大炊六郎

親泰 田北七郎

附家祖

木後稱 迫間

直重 大炊四郎

四五 一

女 島津貞室

-秀貞 出羽次郎

貞宗 爲貞親之嗣,

-師親 近江藏人

入田兵庫助

秀直

襲來之時司三軍分,抽 忠戰,

大友家譜大24 大 友 貞親弘安四年蒙古

太平

法名玉山道溫號

刑部少輔 從四位下

貞親

太郎 新藏人 出羽守

德

永仁三年乙未九月二十三日先」父卒法名 道

時入道道惠!

從五位上 掲津系圖作親

親

次郎 左近將監 因幡守

-鑼連 丹後守繼三立花家 傳在. 立花系圖,

實大友親治之二男

親元

五郎九郎

詫磨文書

出羽守 兵庫頭 從五位下

始名泰直

賴泰

薬師丸 大炊助 式部大輔

朝直 又次郎

田原吉弘家祺系在末

-泰廣 十郎

爲„筑井親直養子, 法名明眞

能職

九郎 豊前守

基

-能鄉 豐前八郎 志賀家祖系在」末

秀直 鷹尾七郎

一萬田家祖系在末

景直 六郎

親直 五郎 左近將監

家祖

-有直 筑後元吉四郎

時直 左衛門尉 久保德永家祖

-能秀 詫磨家之祖系在」別

母畠山女能直卒後爲、尼號„風早禪尼深妙,

親秀補ṇ相摸國大友鄉地頭職,寶治二年戊申

十月二十四日於鎌倉,卒年五十六法名寂秀

號„出雲路̀

肥後文獻叢書第三卷

能泰 野津原三郎藏人 修理亮

左衛門尉 法名佛阿

|重秀

次次郎

正安二年庚子九月二十七日卒法名道忍

母三浦肥前前司家連女

叉文永八年下知書,,出羽前司頼泰 蒙古襲

來合戰繪詞書文永十一年襲來之時大友兵

庫頭賴泰

建長五年七月二十日 相摸守平朝臣判

陸奧守平朝臣判

右者去々年正月能秀時景等得女壹尼深妙

之讓各欲申給安堵御下文之處泰直支申之

間可逐 泩之由被仰下畢十二月二十四日

分出達交畢此上可及其儀歟早任深妙讓狀

並 泰直之達文可分知行之狀依 將軍家仰

不知如件

詫磨別當能秀大友太郎兵衛尉時景與大友

式部太夫泰直相論相摸國大友莊内名田在

家等事

能直

季時

親能

-光能

光家

正五位下 少納言

大炊御門

正三位 參議

左衛門督

正五位下 齊院次官 式部大丞

掃部頭 薙髪法名寂忍

親能始爲„„外祖大外記中原廣季養子, 後 因ņ

源賴朝命¸復„藤原姓,故子孫或稱 中原,作

或稱 藤原 鼓承元二年十二月十八日於 京

師,卒法名寂忍西掃

能直,冒ņ母姓,稱,大友,建八五年授„豐前豐

後二國守護職,七年三月遣,臣古莊重能,先

赴中豐後,四月緒方惟榮族大野 九郎泰基拒

˛之戰,大野郡神角 重能擊殺 泰基 六月十

1日能直來,豐後,承八元年 冬讓ǐ 所職所領

齊院次官 駿河守 六波羅奉行

稱 淵名

定門黼連动神祇後崇祭稱,藤北大明神,

竹迫家祖系在別

一法師丸 左近將監 左衛門權少尉

豐前守 撿非違使 侍所別當

從五位上

トネ

經家妻親能妻姉妹也

母大友四郎經家女稱利根局

或曰親能室經家之女

侍〃源賴朝゛得」寵有」身出嫁 近藤左近 將 監

以下略而不」書

-親秀

利根太郎 大炊助 從五位下

親直 筑井左衛門尉

承久三年補 大宮司 子孫代々居此職

親實

嚴島大宮司

師員

-忠寺

於總領親秀,同三年卜,,退隱之地於大野郡

北村,營建居邸」遷」之貞應二年癸未十一月

二十七日以」病卒五十二法名能蓮葬藤北常

ﾁ

「藤内舍人仲淸子也

之子也

後爲‶親能之養子 名

尊卑分能直實佐

安二年壬辰正月三日生于能成之家,實賴朝

引」系者皆據」之能成傳載 小甙系圖,

藤原能成

11

諸家大系圖等大友系圖能直爲二能成子

ﾁ

女

「忠淸

寺

母園田清左衛門女

萬千代丸

天正十六年於 和泉國境,死法名湖月宗江

文祿四年死法名蘭桂純香

松平隱岐守定行室 號„蓮香院

灭三郎 薩摩守

從四位上 左近衛權中將

始名忠元 此代改源姓

元和二年丙辰六月二日生寬永八年四月二十

一日元服 家光公賜:一字改光 元祿七

年甲戌十一月二十九日卒年七十九法名泰雲

慈溫號„寬陽院 葬„福昌寺ı

母島津備前忠清女

兄弟男女有二十人餘,今略、之

俊成 正三位 皇大后宮大夫

始名親家

俊忠

從三位 中納言 大宰權帥

寬治五年十月朔日薨年五十九

忠家

正二位 大納言

稱 御子左:

康平七年十一月九日薨年六十

長家

正二位 權大納言

叉御堂殿1

萬壽四年十二月四日薨年六十二稱:法住寺

從一位 太政大臣 攝政 關白

藤原道長

鎌足十二世孫 關白兼家男也

大友

系圖附錄四

新撰事蹟通考卷之三十

四四八

新撰事蹟遍考卷之二十九

天文四年乙未七月二十三日生義久無､男

以„忠平 爲」繼天正十三年受」讓十四年八

月足利義昭授,名一字 稱義珍 双 改 義

弘 十六年六月叙_從五位下 任 侍從 慶

長四年正月叙„從四位下,任參議左少將

元和五年己未七月二十一日卒年八十五法

名松齡自貞號 妙圓寺,

始名忠平 剃髮號 惟新i

左近衛權少將 參議

侍從

義弘

兵庫頭 從四位下

久惟 島津安藝

寬永元年甲子二月死法名貴宗好胤

忠榮

中務少輔

十一法名天岑昌運

慶長五年九月十五日於 關原 戰沒年三

從五位下

始名忠豐

女女

久保

家

四四七

天正五年丁丑十一月七日生慶長四年正月

寂,從四位下 任 左近衛權少將 七年築

城於鹿島十一年六月 家康公賜名一字I

改 家仉 十四年遣」兵征:琉球·元和三年

七月任 參議左近衛權中將 九月 秀忠公

賜,,松平稱號i寬永三年八月叙:從三位,任

權中納言 十五年戊寅二月二十三日薨年

六十二法名花心琴月號 慈眼院 葬 福昌

始名忠恒

又八郎 薩摩守

從三位 權中納言

大隅守

一法名恕叄一唯號 皇德寺

文祿二年九月八日曉於朝鮮 病死年二十

萬壽丸

天正四年早世法名凉山

鶴壽丸

豐後守朝久

右衛門尉彰人妻

薩摩守義虎妻

-忠平 爲義久之嗣;

母入來院石見守重聰女

#妙谷寺 葬,,福昌寺1

正月二十一日薨年七十九法名貫明存忠號

天文二年癸巳二月九日生二十一年足利義

輝授 一字 稱 義辰,後改 天正十三

年四月讓,,家於弟忠平 十五年剃髮 號 龍

伯 舊磚畫始叙 三位法印 慶長十六年 辛亥

1名日逮

正五位下 從四位下

左近衛權少將 從三位

虎壽丸 双三郎 修理大夫

久通 圖書頭

下野守

法名覺翁大圓

-忠信

河内守

盛宗功

慶長十五年十一月九日死年六十法名既

忠長

肥後文獻叢書第三卷

叉五郎 圖書頭

-歳久

-忠隣

中務少輔

十一法名梅天長策

天正十五年六月五日於 佐土原 死年四

始名昌

又七郎 中務大輔

下總守 法名芳春大澤

又吉 常陸介

於日向國根白坂陣,戰死法名桂山昌

天正十五年四月十七日 秀吉征西時

三四郎

文祿元年六月梅北國兼作」亂擧」兵攻

肥後佐敷城 敗死時爲其隱謀`主 太

閤秀吉命義 賜」死七月十八日 時

於|大隅國脇本瀧水 自殺從者俱死者二

十七人法名岳心良空號 心岳寺1

稱„祁答院ı 剃髮號„晴̏

左衛門尉

四四六

新撰事蹟诃考卷之二十九

法名心翁大安

國,忠將從」之十二日於 同城,戰死年四

十二

クリノ

永祿四年七月貴久伐 肝付兼續於大隅

忠將

叉四郎

右馬頭

永正十一年甲戌五月五日生大永六年十一

月爲''忠兼之養子 十八日自, 加世田: 移

鹿島:二十七日忠兼乃讓家於虎壽丸,時

年十二改及三郎貴久,其後忠兼 信,, 讒

之言:變,,前約 廢」之天文十四年三月十八

日島津忠廣北鄉忠相其外宗室貴戚 議 立

貴 爲:中興太守 永祿九年二月削髮號

伯囿,元龜二年辛未六月二十三日於加世

田卒年五十八法名大中良等號 南林寺,

母薩摩守重久女

永祿七年三

月十四日任

從五位下祆胶七十眇阵,修理大夫「陸奥守

-貴久

虎壽丸 双三郎 三郎左衛門

女 肝付河内守兼續入道省釣妻

ユキ

-彰

一重時

忠興

久雄

-尙久

女

四四五

樺山入道玄佐妻

法名一枝曇秀

四代孫但馬守柄改源姓

左兵衛尉

右馬頭 從五位下

子孫代々領 佐土原,

右馬頭 從五位下

慶長五年於‟關原 戰死法名雲庵定曉

入來院彈正重豐養子

時ヽ 島津相摸 爲三宗家之臣,

灭六

於„朝鮮陣中,死法名天宗慈雲

叉四郎 右衛門尉

二萬七千七十石餘,

慶長八年十月賜 日向那珂郡佐土原

剃髮號,,宗恕i

始名幸

右馬頭

忠兼

-忠隆

忠治

肥後交鷺遊書第三卷

寛正四年癸未五月三日生永正五年戊辰

二月十五日自殺年四十六法名圖室玄鑑

號 興國寺：

母梶原三郎太郎弘純女

安房丸 又三郎 陸奧守

忠幸

從五位下

延德元年己酉正月十七日生永正十二年乙

亥八月二十五日卒年二十七法名蘭津友

號 津友寺1吉田

寺在

母大友政親女

忠良

百丸 灭六郎 修理大夫

從五位下

明應六年丁巳八月十四日生繼兄忠治之

遺跡 永正十六年己卯四月四日卒年二十

三法名興岳隆盛號〃隆盛院˜

母同:忠治:

叉八郎 修理大夫 陸奧守

從五位下 後改 勝久 再爆元

1年改

龜三年癸亥八月十八日生繼〃兄 忠隆之

條氏綱 子孫稱 後藤

亨祿中赴〃駿河國仕 今川氏親後仕 北

長德軒

島津治部大輔忠將妻

母新納駿河守是女

死年七十七法名常潤號〃梅岳寺

永祿十一年戊辰十二月十三日於"加世田,

實伊作善久之男

剃髮號,,鏑禕道心入道日新齋

菊三郎 相摸守

大年寺,

天文八年己亥月朔日死法名天雄濟 民 號

始名運”

相摸守 剃髮號 一瓢齋,

母同上

遺跡,天文十四年十月薩摩出奔住 豐後沖

濱,天正元年癸酉十月五日於 沖濱 卒年

七十一法名大應妙蓮

四四四

新撰事骂过考卷之二十九

永亨四年壬子十一月四日生明應二年癸丑

三月十日死年六十二法名天勇玄清 號 常

以」爲,,庶子 不嗣立

1

-友

叉七郎 相摸守

-女 相良前續室

文明十六年於 日向飫肥戰死年六十四

伯耆守 稱 義岡

山:戰死年三十七

長祿三年己卯七月二十日於, 日向三俣小

有久 出羽守

稱 大島

國

几家,

嗣——豐後守

廣

忠朝

忠-次郎三郎

豐後守

1 日向宮崎郡飫肥】

文明十八年

稱 橋

自忠廉

豐後守

忠清六代之孫也

修理亮

|忠清、菊千代

宗家臣島津多門

叉助

昌 法名桂山

〃兄用四四三

始名武八叉忠政後改:忠昌

1

從五位下

|忠昌

陸奧守

灭三郎

隆盛院開山

右馬頭 攝津守 爲〃兄忠弘之養子,

湖山英功和尚 廣濟眞如二寺住職

天祐宗津和尚 福昌寺十一世任職

-賴久

-忠弘 若狹守 喜入家祖

守棟桂山和尙 福昌寺九世佳職

一淸久 伊豫守 迫水家祖

-勝久 遠江守

桂家祖

久逸 嗣伊作丈安丸之遺跡

午四月朔日卒年四十二法名山玄忠號

„龍雲寺1起來。

永亨四年壬子十一月五日生文明六年甲

陸奧守 從五位下

立久

修理又三郎

亮

琳寺：

母伊作某女

母大守義久女

忠辰

天正十三年乙酉七月二十五日死年五

十法名大通玄廣號 大通寺,

利又作 俊國訓相同永禄六年諸役人附

外槎眾大名在國内島津薩摩守義俊

始名陽八足利義輝授:一字謂,,,,義利

11

義虎

又太郎 薩摩守

-僧 了淵善阿彌陀佛

日死法名昌嶽號,,,,源院

天文五年上京二十二年癸丑七月二十二

始名實

又太郎 薩摩守

女 相摸守忠良妻

福山

十法名隆岳號 長松寺

寺在:

大永五年乙酉十月九日先」父死年四

|忠興

又太郎 薩摩守

稱三寺山,

肥後文獻叢書第三巻

-光久 越後守

泉又太郎忠辰は高麗陣に被雑居候處

御暇不申上彼陣∩し歸國被致

付秀吉公御立腹にて御改易にて忠

辰者梅北宮内左衛門國兼田尻但馬守

に方人致し事を起んと忍て被歸候

を如何樣成儀にて罷歸候哉と御尋有

之候に申上樣無之長出陣にて宿本戀

敷罷歸候由申上候得者右之通御改易

にて候

薩州舊傳書日

朝鮮役文祿四年三月赴」之後密歸,出水,

秀吉聞」之沒訊收所領 忠辰大愧」之叉至

朝鮮:慶長二年八月十七日於„釜山海|

死法名通津宗要

11

天正十五五月晦日 朱印

島津又太郎とのへ

知候也

年義久與有今宿可全額

不可有相違候但此女近

天正十五年秀吉征西之時賜,,,領地證書|

薩摩國在之當知行分

四四二

一用久

-忠國

某

從五位下

應永三十二年乙巳正月二十一日死年五十

一法名義天存忠號,,,,慧燈院

母佐多三郎左衛門忠光女

仲翁守邦和尚 福昌寺三世住職

康曆元年己未於 日向飫肥;生文安二年乙

丑六月七日寂年六十七

梅壽

灭三郎 修理大夫

陸奥守

大輔 從五位下 始名貴

永亨十年遣˩兵討〃硫球|中山王降

文明二年庚寅正月二十日卒年六十八

法名大嶽玄譽號深固院|

母伊東大和守祐堯女

薩摩守

モチ

モチ

始名好八中持久後改用

始領加世田,亨德二年癸酉奉三兄忠國

之命理討:阿久根、野田、高尾、出水四城,

逐纟 其地˵ 築〃城於出水˩ 爲代之所

新撰事蹟词考卷之二十九

三大野

一斉久 駿河守

越前守

始名忠俊點,宗、島津矢柄

忠榮 藤四郎

駿河守稱大野

大膳亮

-秀人 伊勢守

賢號 洞龜寺1尾野

寺在 高

天文五年丙申三月四日死法名天倫才

始名成

三郎太郎 薩摩守

一續

在阿

中務|延久

彈正忠

保泉寺,葬„„蓮華寺14

稱 太田,

月二十九日死年五十八法名桂 林號

實用久弟嘉吉元年生始爲」僧就 蓮華

寺開山南溪和尚】得度後應氵 用需

還俗終爲‶用八之嗣,明應七年戊午七

國

薩摩守 剃髮號 伊甫:

十九日死法名松夫道存號 龍光寺,

居¸稱„出水島津,長祿三年己卯二月二

從五位下

-師久 生駒丸 左衛門尉 上總三郎

曆應三年庚辰五月二十日死年十九法名

阿號„照明寺」

——宗久 三郎左衛門

大夫判官

家久 上野介

上野介

川上家祖

-賴”

孫三郎

越前守

始名義

石坂家祖

久泰

九郎左衛門

尾張守

北鄉家祖

-資忠

七郎左衛門

家傳作:安藝前司,

-資人

樺山家祖

六郎左衛門 美濃守

法名道宏

新納家祖

四郎左衛門 近江守

山城守

佐多家祖

|忠光

三郎左衛門

但馬守

岳玄久號,卽心院,志

寺在志

久豐

陸奧守

修理大夫

久豐 爲元久之嗣:

母伊集院長門守忠國入道道忍女

爲開祖：

屋眞粱和尙;

應永十八年辛卯八月六日卒年五十法名如

翁玄忠號 福昌寺和宗曹洞派號王龍山,以石

福昌寺應永元年元久所,俞建,

從五位下

元

陸奧守

氏忠

光久

1

母大友親時入道道惠女

四郎左衛門

嘉慶元年下卯閏五月四日卒年六十法名齡

從五位下剃髮號, 玄乀!

|氏久

灭三郎 修理亮 越後守 陸奥守

眞

永和二年丙辰三月二十二日卒法名定山道

四四〇

實大守忠國之三男嗣 丈安丸之遺跡,明

應九年十一月十一日於加世田,戰死法

新撰事蹟通考卷之二十九

始名俊

式部大輔

河內守

女 久逸妻

十六歲早世

某

丈安丸

法名道芳

法名道恕

勝!

若松家祖

久氏 三郎左衛門

下野守

法名道一

忠親

法名道榮

下野守

始名宗

久淸

法名道惠

左京進

伊作家祖

始名久長 法名道意

忠長

彥三郎 三郎左衛門

善

忠良

女

女

貞人

-忠氏

四三九

下總守

出水家祖

次郎左衛門

母三池木工助貞鑑入道道喜女

知„就是今姑從„龍光寺所藏系圖,

圖作:文和元年七月三日八十三歲 不

按卒年月續花押藪爲‟觀應二年,一本系

11

道阿彌陀佛葬 淨光明寺1

貞治二年癸卯七月三日卒九十五法名道鑑

剃髮號 道鑑i

上總介 從五位下

島津下野守昌人妻

吉田二郎四郎妻

爲‟忠幸之養子,

法名越山號,,多寶寺:

明應三年甲寅四月十八日死年二十七

灭四郎

名德瑤輝公號,,,,善勝寺

|俊忠

田家祖

一忠光 五郎太郎

町給黎家祖

宗長 彦三郎

左京進

|氏久 七郎

-久時 大炊助 稱:阿蘇谷,

常陸介

「忠經

五郎

|忠佐 左衛門

一忠康 式部大輔

-高 大炊助 信濃守 稱 中沼,

母伊達判官入道念性妹

名道忍義阿彌陀佛葬 淨光明寺

弘安七年甲申閏四月二十一日卒年六十法

始名人近

從五位下

人經

修理亮 下野守

忠繼 式部少輔 山田家祖

一忠連 下野守

肥後文獻叢書第三卷

-倍

1忠朗

忠棟

一忠眞 源次郎

忠宗

母相馬次郎左衛門尉胤經女

阿彌陀佛葬 淨光明寺

乙丑十一月十二日卒年七十五法名道義仲

善和歌,續千載集有"忠宗之歌,正中二年

從五位下

上總介

慶長四年三月九日於三伏見城·被誅法

名諸宋幸侃

大隅守 •

11

祝髪號 幸侃

右衛門大夫 始名源太忠金

忠倉

大和守

大和守

忠公

大和守

大和守

伊集院家祖

俊忠六代孫

賴

彈正大弼

彌五郎

新撰事蹟通考卷之二十九

從五位下

大隅守

三郎兵衛尉

修理大夫

門尉忠經稱 若狹島津

品牌

周防七郎

於"宇治川,戰死其 子 左衛

國季

或作 島津

異本島津系圖忠久同母弟有,若狹 守忠

11

通子而非 賴朝之子不知就是,

祖也接據:吉見系圖 則忠久惟宗廣言密

ルハ

尼子息能

員同孫島津忠久賜 日向守護 元暦元年

八月十七日被」授下文範頼乃 吉 見家

不之弟

注剃妻 双河越重頼賜 武藏多摩郡

條院,稱〃丹後内侍,無雙歌人也密通 惟

宗廣言,生…忠久,其後關東下向嫁藤九

郎盛長 生‰數子,二女河越太郎重頼妻

也三女伊藤祐清妻也右智三人内伊藤祐

清從〃平家,討死其妻頼朝一族 賜平賀

義信,其腹子朝雅也爲〃〃北條時政之智,

双蓀九郎盛長賜 武藏足立郡 盛長女

允妻也有三人之女 嫡女在京奉」仕

重 賴女爲〃義經㎝妻,比企禪驎四三七

左衛門尉

光忠

左京進

孫六

宮里家祖

掃部助

泰忠

忠直

三郎左衛門尉

三郎左衛門尉

駿河式部大輔家村妻

-忠繼 五郎左衛門尉

宇宿家祖

-忠季

大夫判官

常陸介

知覽家祖

一忠宗

大夫判官

豐後守

大夫判官

周防守

忠綱

忠景

豐後左衛門尉

豐後守

文永元年甲子卒年六十三法名道佛仁阿彌

陀佛葬〃淨光明寺

母畠山重忠女 本多

始名忠義

七年下一向薩州山門院木牟禮,御在

薩州舊傳書曰高祖忠久公自〃鎌倉 建

東鑑脫漏日嘉祿三年丁亥六月十八日乙

丑辰刻島津豐後守從五位下惟宗朝臣忠

久卒日來腳氣之上惱 赤痢病 云々

11

家譜系圖

忠久源賴朝之三男也母丹後局比企判官能

員妹治承三年己亥十二月晦日於攝 津國

住吉:生係圖畠山重忠

13命養之

建八四年賜〃薩摩國守

護職,七年八月赴,任時年十八嘉祿三年丁

六十二月十日

改元安貞

六月十八日於 鎌倉|卒年四十

九法名得佛道阿彌陀佛葬 淨光明寺1

豐後守 從五位下

惟宗忠

大夫三郎 左衛門尉

判官

源姓

光久以來又改為

灭島津 姓惟宗自 貞久 稱 藤原

系圖附錄三

新撰事蹟通考卷之二十九

肥後交陰叢書第三卷

祿三年稱 惟宗:千載和集〃有 忠久曾孫忠宗

歌諸家系圖纂吉見系圖範賴譜跋曰始賴朝

十四歲永曆二年三月二十日伊豆國流罪

之時恐,,平家權威,國人不˩與二一食賴朝

乳人比企局其比武藏國比企郡少領掃部

誤也

之

:誌 惟宗忠宗:續花押 ”自:忠宗之子貞久稱

原:大成武

藤对

緒,也至三光久代,復 源姓 筑後守 忠 徹

家寬延二年十二月久柄代爲 源姓

穉之時爲„近衛基通 被„養育】依」有:由

宗氏 承八三年六月改 藤原 是忠久幼

民部大輔惟宗廣言,因冒,其家姓 爲 惟

又日忠久元雖」爲 源氏其母嫁八文字

諸

‟豐後守,於二年至 薩摩 譜

書所、不、載武鑑之誤也

大成武鑑日母比企判官能員妹稱,丹後

局,文治二年正月八歲賜, 島津御莊總地

頭職¸八月築„城於薩州出水郡木牟禮

居」之三年九月賴朝授 十文字紋| 薩

日隅三國守護職 島津¸爲稱號 嘉

祿元年寂„從五位下,任 大夫判官,後爲

四三六

-朝房

鎮房

-長甫

弘堯

盛直

-家尚

民部少輔

左馬助

尚直

播磨守

常陸介

秀直

常陸介

豐後守

正房

常陸介

城井三郎

民部少輔

彌三郎

世々屬 大友家 天正十五年冬鎭房 蟠濳

城井谷不從 黑田高孝入道如水,屢構兵

十七年正月豐臣秀吉分,鎭房納和議

以,其女,嫁-如水之子長 四月二十日如

水而招 鎭房於仲津城,誅」之

鎭房被」誅時朝房在 肥後木葉 加藤 清正

右宇都宮系圖公景爲 肥後岩野木葉地頭,以

來其家鎭」之居 木葉城,故附錄

受"高孝之密謀 四月二十三日遣,兵殺,朝

房,木葉春日社記曰朝房之靈有」崇慶長元

年八月配享宇都宮大明神隆房之冠,

少貳忠資松浦吉種佐志將監,時會,兄冬

ヒス

仕 懷良親王,居„肥後,正平四年河尻幸

俊詫磨別當宗直以,足利直冬,爲"上將,

起」 兵討„隆房 隆房不]克而逃十四年八

月從„懷良親王¸與少貳等戰,大原,斬

隆房 宇都宮參河守

|師冬 中務亟

觀應元年十二月二十日 沙彌判

宇都宮因幡權守殿

宛行也早守先例可致沙汰狀仍執達如件

同國木葉村 齬價地頭職事爲勳功之賞所

★黼鸓 肥後國 岩野村監踋防

入道跡内

薩摩彥次

左近將監

豐前國元永村玩爛吶郎 同國伊加田庄村驌

·武藻

佐田文書

住..豐前國宇佐郡佐田莊,故子孫 | 佐

田,爲„家號i

|公景

因幡權守

仲房

能登守

——豐房 薩摩守

肥後文獻叢書第三卷

盛綱

-直綱-

磨守

出羽播守

家綱

-重綱

兵部少輔

中務少輔

川家,

盛景八世之孫佐田五郎左衛門統綱 仕 細

盛景 因幡守

薩摩守

入道昌節

親景

因幡次郎 掃部助

經景

宇都宮大膳亮

木葉城又謂 宇都宮城,

頭,故遣 隆房i爲 代官i居 木葉| 乎

按隆房所居未」 詳兄公景爲 木葉村地

11

祠,名 宇都宮大明神,慰隆房之忠魂云

十一懷良因 隆房之强戰,遂得脫危難,

隆 房 常崇信祖神春日,以」故此年十二

月玉名郡木葉村春日神社之封内建 小

マヌカルチ

綱率大軍,續戰-於」是隆房終敗死年三

四三四

新撰事蹟通考卷之二十

宗房 爲:左近衛少將兼仲之養子

備後權守

道隆之弟生

兼隆,兼隆生 兼房,兼房生〃僧宗圓, 下

野國宇都宮別當,是宗綱之父也

粟田關白道兼五世之孫也道兼護

號„八田武者,

藤原宗綱

下野權守 從五位下

宇都宮城井

之所藏,於:山鹿郡新町,寫」之其後賴直有問」

予事 書通數度叉訊予家贈文書等

右五條系圖文化元年 九月二十七日請-得賴直

-賴直 五條岬 七郎左衛門

寬政十一年離 筑後|永住肥後 亨和元年

移—居同郡熊入村,

|賴常

南條三說

延亨四年住, 山鹿郡岩野村,

|賴貞

喜助 分、家號„南條 改名春養】爲】醫

朝綱

-信房

|景房

|通房一

冬綱

四三三

延文四年八月菊池武光奉 懷良親王, 與H

少貳頼尙,戰„筑前大原,頼尙不利冬綱自

率二千五百兵至大原會少貳討弟

隆房之軍 隆房戰死冬綱`臣芳賀五郎房則

射 懷良親王其矢中』親王脇】

始名高房中冬綱後改守綱

城井常陸介 大和守

頼房

薩摩守

大和守

信景

左衛門尉

壹岐守

年八月二日卒年九十九

文治元年爲„豐前國仲津郡城井鄕地頭職,

來」任故子孫或以„城井4爲„家號 暦元

從五位下

宇都宮大和守

彌三郎 左衛門

號„八田及宇都宮,

統康

鎮定

肥後文獻叢書第三巻

大友義鑑授„名一字 天文十二年山本山

鹿二郡內百六十七町領」之二十年 詫磨山

本二郡內五十町領」之 法名桐巖宗仙

左馬頭

一長安

大友義鎭授 名一字 永禄六年筑後三原

竹野二郡內四十二町領」之元龜四年九月

重修„大淵宮, 天正四年三月領 肥前佐賀

郡內巨勢,屬龍造寺隆信 代々以 筑後上.

妻郡矢部高屋城,爲 本城,十五年 豐臣 秀

吉征西時賜 本領,暫移引住豐後 双來 肥

後,留„八代 法名道林宗德

-賴安

千菊丸 七郎左衛門

大友義統授„名一字,

-賴昭

居„八代改﹕ 家號,稱„矢部 仕 加藤清正,

法名壽安宗忠

加藤家士帳

-賴永

加藤右馬允與力 矢部七郎左衛門

知行高五百十八石一斗三升九合

寶曆三年正月復家號五條】

母吉弘加兵衛幸雄女

吉壽 七郎左衛門

亨保十一年七月十九日死年四十七

母奧佐次右衛門女

彈右衛門

直翁宗徹

享保十七年二月二十六日死年七十七法名

母田原龍右衛門女

七郎左衛門

佐伯葉左衛門

母高畠角内女熊本

長兵衛 後改 清原三說,

母津江山城守鑑盛女

十五日死年六十一

寛永二年還,,筑後大淵寛文六年八月二

矢部七郎左衛門

四三三

新撰事蹟過考巻之二十八

寛正四年三月修 熊野宮 七年正月二十三

左馬頭

良興 良量之實子爲‶賴經之嗣

德中肥後國山鹿山本二郡内領」之法名靈

條宗達

應永二十九年六月矢部建生松天神社 亨

實賴治之二男 屬 菊池家,

-賴經

左馬頭

應永三十二年六月十二日賴治分授井依

谷

-賴重

大膳大夫

賴經 爲兄良量之嗣;

自賴元至氵 良量,五世仕 將軍宮賜 綸

旨口宣分旨等 不可枚 今僅存者十

九通賴元仇過成氐一過長遠 及公卿之書六通

元中十一年十二月十九日賜„名良量,法名

忠嶽宗量

-良永 治部大輔

-良邦

|良續

良祐

鑑量

|一邦興 轟薩摩守

宗心

左馬頭

左馬頭

天文三年豐後大野郡井田鄉 三十貫領」之

五年筑後下妻村五十五町領」之法名 桐月

大永八年竹野郡東鄉領」之法名良海宗立

自賴經¸至良邦,三世屬 菊池家,凡三世

之間有菊池家之書等二十八通」傳,于家,

左馬頭 屬大友家,

左馬頭

日菊池爲邦與, 山鹿 郡泉莊内入町山本郡

葦原村四町領地 應仁二年十年十日菊池

重朝授 山鹿郡和泉莊百町,

法名龍山宗哲

-賴治

!良遠

[良遠

-賴顯

肥後文獻叢書第三卷

法名無極宗觀

某年月於 肥後隈本 卒八代悟真寺 有､碑

阿蘇家所藏良氏之書簡有 數通,其花押

寫之

良氏

修理大夫

爲〃兄良氏之嗣

主水正 勘解由次官

左馬頭

兵部大輔 筑後守

正五位下

良氏無〻子故為養子

所藏口宣

上卿坊門大納言

正平十八年五月三日 宣旨

正五位下清原良遠

宣任兵部大輔

藏人頭右中將源具氏 奉

居〃矢部高屋城 法名玉峰宗金

權少外記 主水正

良量

左馬頭

元中四年賴治居 筑前月足 十月十七日將

軍宮以„使由利信濃守 賜 分旨及腰刀,時

宮在 肥後宇土 七年正月十八日賜筑前

河北莊 應永十年三月大淵創一立熊野神

社,法名珠山宗剛

藏人頭左中辨兼春宮亮平時澀奉

宣任左馬權頭

主水正清原賴洽

天授二年九月十二日 宣旨

上卿春宮大夫

藏人頭近衛權中將藤原實门口

宣任權少外記

清原賴治

正平二十二年七月二十五日 宣旨

上卿權中納言

所藏口宣

左馬權頭

新撰事蹟過考卷之二十八

賴元罷下此境候事奉扶持 宮御所出貨

阿蘇大宮司殿

刑部大輔秀仲奉

當年并同心人々恩賞事就注進可有其沙

汰之旨被下 綸旨云々然者今更何之有

豫議乎但 宮御下向勘解由次官賴元

人供奉之間有蒙 勅命之旨歟相構被

和順者可宣事歟御方中若有不和儀者奉

爲 宮不便御中也諸事被申談可被仰御

催促也其内有參着之儀仗 勅裁叉何被

空舊勞哉叉讒訴事更不聞及事也下

七月二十九日

元之書簡有 數十通 分旨等奉書 書, 勘

解由次官,自狀多假名書而 唯書,,賴元

皆有花押¸記:于左,

阿蘇家所藏有,,,,載-賴元從 征西將軍,

11

七十八法名無礙宗性

月二十八日**悍曣作 於 三奈木莊, 卒年

11

賜„筑前三奈木莊日向飫肥南北兩鄉地頭

職二 6 3 二十年剃髮號 宗性 二十二年五

|良氏

四二九

藏人右大辨源顯統 本

宣任修理權大夫

正五位下清原良氏

正平五年七月二十九日宣旨

上卿帥中納言

所藏口宣

正五位下

筑後守

五條主水正 修理權大夫

正平十六年二月

判形叉有異

判形有」異故寫」之

正平十五年十二月

賴元

阿蘇大宮司殿

十一月二十一日

西可被行恩賞由被經御沙汰被下御事書

-賴尙

良業

賴業

1祐隆

一定康

肥往文獻叢書第三卷

助教直講 上總介 少外記

大外記 彈正忠 從四位下

天永四年正月四日卒年七十二

良秀

大外記

從五位下

康治二年十二月十九日卒年六十四

|良枝

穀倉院別當 助教直講 博士

大外記 正五位上

始名顯長後改 顯滋 改…今名,

文治五年閏四月十四日卒年六十八子孫立

、社祭之 後嵯峨天皇賜」號曰:車折大明

神 相傳有」人嘗乘」車而過, 其祠前 車忽

折因名

宗尙

別由-賴元

大外記 主水正 正五位上

承元四年正月十五日卒年四十七大和論語

作者

大外記 主水正 從四位下

延元三年秋懷良親皇拜, 征西將軍 經略

西海道,使-賴元 輔‶佐」之賜,金烏旗 四

年春來„鎭西,居„豐後玖珠郡˴ 領 筑後河

島莊內矢部大淵等, 正平十八年九月九日

稱五條

正五位下

少納言

次官 大外記

當

勘解穀倉院子孫今在 朝廷,稱„船橋i

穀倉院別當 主水正

弘元年十一月朔日卒年七十九

元亨三年二月剃髮法名了空居 泉福寺 元

主水正 大外記 正四位下

穀倉院別當 大膳大夫

正應四年六月卒年七十一

大外記 正四位下

穀倉院別當 主水正

文永元年七月十一日卒年六十九

断撰事蹟帚考卷之二十八

貞觀中賜„„清原眞人姓 承和四年十月十七

日薨年五十六

始名繁野叉通雄

夏野

右大臣 左近衛大將 從二位

小倉王

正五位下

天平勝寶四年七月朔日薨

御原王

中務卿 正三位

四日薨年六十贈,太政大臣,天平寶字

二年謚 崇道盡敬天皇

一舍人親王

一品知太政官事 天平七年十一月十

天武天皇

五條

系圖附錄二

新撰事蹟通考卷之二十八

-海雄

業恆

|吉柯

-廣澄

|賴隆

|定滋

四二七

天喜二年十月八日卒年五十二

大外記 從五位下

天喜元年七月二十八日卒年七十五

博士 助教 侍從 大外記 局務

得業生 大炊助 正五位下

河内伊豫等守 主稅權助 少内記

實業恆之男也

正五位下

大外記 博士

實出羽守龍雄之男也小野永見子

瀧雄陸奥守

伊豆守 從五位下

左京大夫

石見守

正五位下

勘解由次官

房則

豐前守

筑前守

喜兵衛

|宗恆

-義信

-賴次

賴演 主稅助

肥後文獻叢書第三卷

武德安民

足刀慶長五年關原役從„義弘 有功

記關原役

有後設院喜兵衛·薩州舊傳書喜

兵衛工後改 淡路守;入道淡

寬永元年甲子

四月十六日死年七十四法名香雲道淳

高橋少三郎 半右衛門

母愛甲某女

天正元年於八代,生

薩州舊傳書曰嫡子高橋少三郎有」故仕三

11

松平相摸守,後醍院之嫡家者在,,因幡國

鳥取,

熊太郎 木工助

後醍院内藏助

於熊

母同上

天正十三年生寛永六年七月二十八日死年

四十五法名文安宗章

右以,,家系圖,寫」之子孫連綿于」今在 鹿兒島,

慶長十四年六月二十七日生寛文六年十二

月十八日死年五十八法名天山道雲

母東一郎右衛門女

四二六

一宗能

|良春

主良宗

ニシテ

之儘而不」改 一字 寫」之其訛謬見, 前系

本傳,可以知也

爵松丸 越後守

號„後醍院

——宗利

母菊池武重女

【良任

正平十八年生良宗幼稚

年父親王

ラ

沒落蟄一居民間 無官無位且無„元服禮,至

三晩年 自加冠號 後醍院越後守源良宗 懷

良補 征西將軍 時賜„錦旗,其紋 金銀

表5日月,谁」之以白餠,爲„„旗幕之紋,

|宗重

伊豆守

八郎

宗親

越後守

越後守

越後守

文明十二年生*天正四年丙子

五月十七日死年九十七

天文二十年生„于八代,天正始屬相良義

陽,屢有戰功 葦北郡佐敷斗石役最爲, 拔

功,義陽感」之欲、爲一門好以相良之庶

流家號高橋,授之後復」氏稱氵　後醍院, 天

正十年島津義久弟忠平;在八代城, 宗

重仕」 之爲」臣十二年三月忠平之弟家人與

‟龍造寺隆信 大戰„于肥前島原| 斬』之宗

重從,平田美濃守光宗之軍 被,二創 六餉

淡路守 剃髪號„淡齋

松童丸 八郎 喜兵衛

大永四年生氵 肥後八代 慶長二年丁酉十月

十一日於 薩摩入來院,死年七十四法名白

峰來

備後守

主殿

良高

主馬允

女

東某妻

宗廣

新左衛門

內藏允

按阿蘇文書延元二年十一月二十八日五辻宮

分旨廣福寺文書三年十二月八日宮三位 中

將令旨俱左兵衛佐之奉書花押相同然則宮三

位中將前云五辻宮也然其始末不」詳阿蘇 文

書參議某之奉文別有 數通,皆勅„ 阿蘇 大宮

司,促京參｣之文也據」之考」之則懷良來鎮

11

延元三年十二月八日 右兵衛佐 判

大智上人

豐後國規矩郡蟾田鄉內田地屋敷事相轉豐後

國津江山兵藤村之條被聞食畢可致金輪聖王

寶祚延長天下泰平正法紹隆砷禱之由宮三位

中將家御氣色所候也悉之

按奥州卽鎭西府將軍源顯家也元二

年八月顯家奉„義親王 率 東軍 西

上三年正月至„南都,五月二十二日與

廣福寺文書

„高師直戰„界浦 死」之此書乃二年

十一月三年四月也

11

阿蘇大宮司館

勘解由次官

肥後文獻叢書第三卷

四月二十七日

懷良親王

代郡無,小野鄉小野村,寺在 宮地東谷,則

小野蓋宮地之誤也又懷良譜後醍院家系圖

按悟真寺在, 宮地村東谷 詳 編年考微 今八

明應八年之條

然南朝日衰武家月盛也親王終不」得:再興,

有若亅無而送三年月,逐薨:于八代郡 小野鄉,

卽葬 小野東谷 建〃一宇 號 悟真寺|

11

11

延元二年丁丑拜〃征西將軍,下一向肥後國,菊

池武重武光奉」迎守』護之,自延元 至正平

數戰服.. 大友少貳等,武光以氵 己妹,爲、抽

無二忠勤 其子武政相續而屢竭, 力戰,九國

大半入,掌握,文中三年秋武政__武家,故親

王沒〃落菊池 潜〃身於林中 俟 時之至,雖

征西將軍

一品 式部卿

後醍院

西;後五辻宮率 九國官軍,歸南都乎其他無

【所」考附而備考

四二四

新撰事蹟遍考卷之二十七

,爲、

1

テ

ルニ

按五辻宮不.載,名不詳 誰皇子,且來鎮西

ナルコナツ

延元二年十一月二十八日 右兵衛佐 判

阿蘇大宮司殿

五辻宮合旨所候也故以悉之

爲, 退治大隅日向兩國凶徒所分 發向給也軍

勢等急速馳叅可被申 御共之旨

阿蘇文書

附考

異本系圖泰成元中六年七月二日薨年二

十一法名悟眞不可信

北朝 明也

不知其終所

諸書未｣見」之考紹運鏍增鏡太平記等` 龜

山天皇皇子守息親王叙,四品:爲, 兵部卿,後

薙髪法名覺靜屋一居近江國伊吹山下:元弘三

年五月北條仲時挾,新主,走抵 近江,傍近民

兵奉„守良親王,爲」主據,太平寺,要」之仲

與」衆皆自殺守良不」知,其終所,世稱,五辻

守良延元二年頃來:九國今無所、考阿

蘇惟馨筆記五辻宮爲懷良:今以:此說四二三

天筆如此悉之

奧州宮軍上洛之間近日合戰最中也仍度々雖

被仰候于今遲參何様事乎閣國中合戰不依三

位中將參洛遲速相催一族再軍勢等以夜繼日

可馳參者

阿蘇大宮司館

參議 判

十一月十六日

諸國遲參凶徒未敗北九州官軍可早參旨度

~被仰了隨而大將宮三位中將定被加催促歟

而面々構不一揆于今不參何樣事哉今天下

安否之一節也奧州參已近々云々西國又不

者頗可謂無念不可知他人抛萬事急可被早參

之由被仰下之狀如件

阿蘇文書

風 等之文- 興辯善攢則年月前後相犬牙矣五

辻宮非 懐良,必然

ニナリ

據-元年十月匿,吉野山中,三年九月途遇暴

ルルハ

十二月晦日自 讚岐, 旨卽延元元年也然

是則阿蘇文書拜 征西將軍,九月十八日論旨

按飽田郡走潟村界 宇土郡 村有ņ 將軍

大明神之祠,田代某代々掌„其祭祀: 其

ヒス

五條系圖日元中四年十月十七日以 御

使由利信濃守,賜„腰刀及旨,時將軍

宮在,肥後宇土 分旨今傳,于家

元中四年頃在 宇土

西將軍,俱無 確證「不」足」信

嬬玩天授三年以後別載,將軍宮,而 不」

書」名大日本史曰武朝申狀稱.. 將軍宮,

者據„後醍醐院系圖 卽良宗也猶- 護良

之子興良稱_之曰』將軍宮-閱 後醍醐院

家系圖,懷良子良宗無稱 將軍宮,之

故不」探」之皇朝史略以„鎮西宮 良成,

爲„後將軍宮 或以 太宰帥泰邦 爲 征

按此云將軍宮諸書皆爲„懷良¸然武朝弘

トモ

得」勝

テスニ

武朝迎戰而被.創士卒死傷頗多焉時會,將

肥後文獻叢書第三卷

軍宮救來親戰勵 諸軍」於¸是武朝遂元中十年二月九日

阿蘇大宮司殿

左中將 判

按元中者九年而合 北朝然十一年賜

五條良量,分旨亦有,之然則將軍宮未‹降

ニシテ

上包左中將實綱

征西大將軍宮仰執達如件

九州再興事所被憑思食也此時分擧義兵

者豐後日向兩國守護職井肥後國八代莊

河尻一跡三船一跡海東一跡井 豐田莊等

事可被知行之由依

後引蟄八代 故又稱,八代宮,天授弘和以

來南朝日衰封域月蹙元中九年十月訛,明德

後龜山天皇終 北朝,至此時 泰成僅保

"八代之一隅 密圖„興復 沿革圖說

阿蘇文書

阿蘇文書予家

神社地疑卽宇士御所之遺 基矣乎今無

考所,附 記 而備„„校訂

ナラン

1

シテ

外芥川小山宇都宮三家各有所綫系 構居

源大膳藤丸等地,爲一鄉之豪族, 今皆

爲"庶民 竊惟走潟其比屬 宇土郡 將軍

按菊池武朝申狀日文中三年武朝自

三十二歲之時, 叄勤筑州大王之御

陣 筑州乃筑後也菊池傳記住 筑前

太宰府 然建德以來今川貞世大內

義弘等之京將來而太宰府爲 本營,

與,大友氏時等議而拒一禦九國皇

爲

泰成11

日新宣陽門院日本史

新葉集大

天皇

稱 一品宮

破南方蜂起者,斬其將皇子某以

取 其首,是圓滿院還俗之宮也

月十六日於,紀伊國, 畠山家士 攻

皇女某

宮 齬

叙一品 系

泰邦親王

稱 „太宰帥 勦稱 帥一良成

|王系

鎮西宮 沽本醅

後黿山親王 正平十五年生. 吉野行宮,暘檥煤

新葉集大

親王,任,太宰帥,聯汪孫劉建德文中`間

來而居犹後國阿

蘇文 「懷良請而爲」

之菊池政使 菊池肥前守武澄爲御所

衛護之將100

1傳記

者蓋說成之子圓悟而 非 泰 成內義弘大友少貳等帥衆師至肥後託磨原

天授三年八月菊池武朝奉 將軍宮, 與大

内義弘等, 戰, 于筑前蝼打 菊池之族多死

武朝申狀葉室善申狀!

朝坤獸葉喔包辦眭姚四年九月今川貞世大

後愚昧記阿 惟鄉目安

爲｣ 誰武朝申狀諸女書等唯曰 將軍

宮載名諱然菊池傳記等諸書

及口碑所｣ 傳皆後將軍宮 爲„ 泰成

故今從之

, 史

之誤也帝王系圖以 泰成 爲春宮

今據｣ 之則稱 後征西將軍,者不Ｊ知

コシテ

跡譜今見 諸門跡譜謂五常院宮

諸門

ルニ

五常`院`宮

春宮,令据之

首席王系圖”以三嗪後稱,,稱,後將軍宮 是也4茆圖說讀史餘論九洲

甩詑肥後治亂記菊池傳記

按大日本史日 後龜山天皇卽位立…

泰成,爲‶皇太弟1天授二年天皇春宮詠 千

宗長親王千首和歌跋曰

11

天授初爲,,,,懷良之嗣,受」讓補 征西大將軍

蘇文書亦爲,,,,筑後宫,故今據」之

師,, 泰成居 太宰府 無稽之謬也阿

意輪寺

天授三年七月七日薨葬于吉野山如

世泰親王 任民 部卿 建德元年淑 四品

系圖

異本

元年也三步

前云一宮也然皆不」書」為誰皇子,故姑附

:于此,|備 參考

ニフ

一宮自天親王二宮忠義大禪定門紀伊國色

川氏所藏文書曰色川卿先皇舊地其龍孫既

幸 大河内行宮 宜ネ 速赴- 錦幡之下, 乙亥

八月六日忠義那知山實方院所藏文書曰

乙亥七月十八日忠義蓋忠義所」謂二宮而

乙亥康平元年也吉野未」及建元 故以 甲

志日吉野郡龍川寺在, 北山

宮乎未 詳

莊小瀨村,傳云南帝皇居之故蹤拾爲 佛寺

有„神碑 日當寺開基南帝自天勝公正聖佛

神位康正三年丁丑十二月二日 卽長縣 是亦

11

肥後文獻叢書

子,行乎并未」詳楠氏系圖正理下叉日此時

南帝從醍醐帝四代孫也赤松反,神器,之

後十津川皇居破而崩„于山北高福寺 是所

、謂南帝指 一宮乎 異本系圖 後龜山/皇子行悟法

【親王號 高福院爲·赤松被

弑是又付一

大和成本圖

薙髮號王息圓胤大僧正同男女安四年十二

南朝五常院宮後村上帝皇子說成親

按大日本史據,諸門跡譜,以 泰成;

爲‟五常院宮,以, 圓胤 爲 泰成之

子 誤也諸門跡譜日圓滿院圓悟

便 名義有 義有據 薩戒記永亨起,,,,兵於紀

月八日之條

伊,四年十二月戰沒矣世‟稱 圓滿院

還俗宮 張富記

諸門跡譜

僧圓悟 | 住 圓滿院 稱 五常院宮網

-僭圓胤 爲 大僧正 住,圓滿院 文安元年還俗

|說成親王

泰成親王 爲 懷良親王之嗣 譜見 于下,

任 上野太守,孫

古本

,,,,梅陰祐常

任式部 親王

惟新葉異

母教子失. 其姓 叙„從三位 生…世泰親王,

世 薨 明年教子宿 如意輪寺 修„„冥福

後龜山天皇賜三和歌¸慰、之教子奉,答歌,

益~哀」之新葉

四二〇

-皇子某

11

腰輿¸發 行宮 關白以下皆從焉閏 十月

二日車駕至大覺寺,五日 天皇 傳 神

器於北主 十一月 禁中 留十 餘日 置

酒遊宴盡、歡而還先應永元年二月二十三

日上 尊號曰:太上天皇 薙髮法諱金剛

心三十一年四月十二日崩于嵯峨ı

後龜山院 北 嵯 哦

酩王系圖偟年代鰷規續

一神皇正統記大日本史

福田寺: 山城

志

母女御某福恩寺前關 白 内 大 臣某女也

入」宮爲 女御 至後村上天皇崩 落

飾上」號曰:嘉喜門院

新葉集大

日本史

按門院櫻雲記近衛右大臣經忠之女異

本系圖門院藤原氏名勝子近衛左大臣

經宗女南朝公卿補任前關白内大臣藤

原經家號 福恩寺,不」知 孰是;附備、

考

1

稱:小倉 從氵 天皇居 嵯峨゛ 正長

元年 夏稱 光天皇不豫繼嗣未」定小

新撰事蹟過若卷之二十七

大日本史云金藏主及二王子名諱昭穆今無

、所、考吉野高峰山福源寺有"一古碑,記曰

四一九

11

野山河野鄉 奉」討二宮 赤松記亦同,之

野奧北山 本亅討 南方一宮 同夜於吉

上月記十二月二日 夜半於 吉

211

取〃神爾¸歸〃京師, 諸門跡譜日南方小倉宮𤢖附止趺偟 孫

按嘉吉三年九月前權大納言藤原有光等起

折兵入 禁中,取 神璽寶劔¸擁〃王子萬壽寺

僧金藏主者,據〃延曆寺官軍來攻金藏主有

續神皇正統

光戰死棄 寶劔於清水寺傍1 吉野

記大日本史

遺民奉 神璽 擁 王子二人 據 吉野,圓滿

院僧圓胤還俗亦起〃兵于紀伊,長祿元年丁

丑十二月赤松家士佯降 吉野¸殺 二王子

大日本史應仁外記諸門 跡譜○

安祥寺寺務 網

權僧正 兼〃

倉意欲以,其子 承大統-秋竊奔:

伊勢 冬伊勢國司大納言源滿雅春」

之起」 兵與〝守護世保持賴,戰 而 敗

死小倉出降復居 嵯峨

僧尊聖 居∪勸修寺 任 大僧正兼 安祥寺寺

元中二年九月十日 太上天皇寛成皺

右今度之雌雄如思者殊可致報賽之誠之

狀如件

發願事

高野山金剛峰寺所藏

母氏先其所,出

¸門琳

』知-所 其崩 處

不

〈或間

退,于紀伊國: 高野山寳臓帳- 薙髮正平廿三年三月 後村上天皇崩天皇

卽┐位於吉野行宮,知其後無、幾遜」

位在. 河内國天野行宮,自稱 太上天皇,後

-長慶天皇

譚寛成

右後醍醐之皇子兄弟次序諸書大有異同,今

參考諸實錄,以薨年等顯明者,推、之次第

焉餘纂抄諸書」之叉載„紹運錄大日本史

者都而有,三十八皇子十八皇女 今略」之

肥後文獻叢書第三卷

法 諱覺理

儲運移┌御玉川宮,奉、稱„長慶院行在帳四年七月八日寂東寺過去蘭

諸門跡譜後文中二年八月 天皇奉„神器」如 吉野,自

」是吉野復爲„„行宮 6雎元中九年十月足利

義滿求„講和,詔而許」之於」是天皇駕

按卽位年月諸書闕」之新葉集載-建德元

年正月 後龜山天皇御製松契 遐年歌,

是卽位後之歌 據」之則其卽」位在正平

二十四年中,月日未」詳花榮三代記應安

六年八月二日南方方奉」讓,位於御舍弟

宮,乃文中二年也然先,是後龜山天皇

卽位新葉集尤可、爲確據矣此時兵役

擾亂 天皇幸┐吉野,北方隔壞不」審 行

宮之事實,傳聞誤而爲〝讓位;

長慶天皇卽」位立爲,,皇太弟,張嘉喜門

葉集 其後長慶天皇遜」位公卿迎三天

皇立之

本日大史=

龜山天皇

テ

-諱熙成

日後村上第一皇子長慶院

寬成親王號 南方

玉川宮男

號務 網永亨四一

]=

新撰事蹟考卷之二十七

-權子內親王 正和三年生以幌元應元年爲三內親

王」叙一品元德二年,伊勢齋

元弘元年谁 三 宮尋罷,伊勢齋

母藤原氏贈左大臣隆資女也運

僧尊眞,稱 醍醐宮

母典侍藤原氏親子正二位參議宗親女也稱

#中納言典侍,日本史

|滿良親王

玄圓法親王 住 一乘院,爲„興福寺別當網

母藤原氏守子左大臣實泰女也寂,從三位

諸門跡譜

本史

母菅原氏正三位在仙女也稱„少納言内,

聖護院後退院不」知」終所:

煞門跡譜

紹運錄

|聖助法親王

母同 世良: 本史

集新作和今住„聖護院‹ 一寂二品

作

親王 爲、尼過去帳

東慶寺

·皇女某 爲尼爲:鎌倉松岡東慶寺五世佳職

號„明堂和尚 應永三年八月八日已刻

母同„„良,

「本史

本史

居 今林¸稱 鷲尼。

大日

-欣子内母同„護本史

良,阳

|妣子内親王 爲、尼居⺊ 今林,紹運

本史

母同„恆良,炟

入,保安寺 爲,尼葉集

|祥子内親王 元弘三年爲„伊勢齋˙稱:前齋宮

本史

一稱„後京極院 鉏

大日

1 母中宮藤原氏禧子太政大臣實兼女也交保

二年四月授,從三位,七月爲‟女御元應元

年八月立爲 中宮 元弘三年十月崩年三十

三年光嚴帝逼而内」之建武二年二月二日

號„宣政門院 【嬍煇灘敦小興國二年潛入

‟保安寺,出家爲｣尼時‟年二十七以上

禪於關白藤原經忠第 十月五日 天

吉野証爲‟皇太子) 葉八月十五日受

統

飄蕩翩㚬書要

三月還三

起¸鎮 三年正月赴三京師二月如 南都還

入 吉野 閏七月灭還､鎮九月路會,大風暴

元弘日記裏畫証嚇記 太平記

三月叙_三品,爲,陸奥太守,還

行在

親王証統延元元年正月率,‟東軍援延暦寺

「卿補任正統記

建武元年夏爲”

鎭„陸奥出羽ı

元弘日記裏書公

鳩峰雑

嘉暦三年生 元弘三年十月出

元弘

諱義統記

良始憲良隍正

-後村上天皇

懐良之母,不可」疑故今從紹運録,

按紹運録阿蘇宮母同„法仁 阿蘇宮懐良

也或母同,‶鎗良,然良母 _ 天皇即位前早

卒增鏡法仁母元弘二年爲」尼八代郡神 宮

寺位牌銘 靈照院禪定尼正平六年三月 二

前 法仁

十九日 乙譜中,然則靈照院尼 爲 法

、信附而備」考面已

テ

肥後文獻叢書第三卷

四年船皆-聖尊法親王 始名慧尊後改尊珍

紹運◎聖鎗

可」害又爲僧住三大覺寺 爲 嘉暦

以前之誕生 明也然諸書皆爲 懐良

後村上之次 今不可以考

母不､知”出所.

按恆性嘉曆以後生則此年幼 而 不

ニテ

元弘三年二月十九日北條高時配 越

中,而害」之門跡譜

住„大覺寺

-僧恆性

母同, 恆良成良,

本史

三月十一日崩 于住吉殿,年四十一葬, 觀

心寺,

集

錦部郡天野Ú 十四年十月 以 - 畠山國

清率 關東兵 將犯 行宮 車駕還自天

野,御„觀心寺 根軼 十五年九月行 幸 住

幸住

吉社:域記

悖花十六年還幸賀 名生 行宮,

十九年三月復行„幸住吉社 二 十 三年

南朝公

八年四月行 幸河内國

太」爲賀名生

高師直兵 幸…穴太 嬬七年正 月 改 穴

3*太平

皇卽位於吉野行宮,知正平三年正月避,

四一六

新撰事蹟通考卷之二十七

盛光盛國時常德重俊信等是也餘略之

有四十餘所,所謂佐高長光國宗盛綱近家

ハユル

其名稱 小邑,者豐原高下本野三村

ブイハラ

按據 此和歌,考 其詞意 乃有-欲,遜」世

之恃-五條文書稱 大御所 又大日本史後

屛,居八代 今據 之高田御所舊基未､詳

世を秋風と歎かさらなん

とにかくに道ある君か御代ならは

事しくと誰かまとはん

草木∞なひくとそきけ此頃の

同年十二月到來せし後に便宜にかくそ申

遣し侍りし

しるやいかに世を秋風の吹からに

露もとまらぬ我心かな

日にそいてのかれんとのみ思ふ身に

ひとゝ浮世の事しき哉

便宜中務卿懷良親王州

11

其所在:高田鄉豐原村有2名 菊池屋敷輪

+ 筑前町等 所 此近邊疑御所之遺基里

俗 傳 言卿相將士倍 從親王 宅„„居御所傍

近 今四 五

馬,其威靈士民畏敬如、斯云俗說雖」不足

スルコト

之法名也塋域自」昔不、伐,艸木,不、維牛

年考微明應八年條

111

號,,悟眞寺̏　後移今地 寺之事詳才編悟眞乃宮

姞接卡士人乃歛 瘞其所,後其旁建

ム

ル

11

潜遁城中忍 後山,至 東谿,遂

チ

11

ニシテ

里人傳云將軍宮此頃在 古麓城 北賊俄起

攻事急而不 能 拒守,城陷宮及

原 戰死皆非也

スト

月十八日,或爲三三年八月六日,或又於大

中五年

悟眞寺記菊池傳記等爲嘉慶二

11

蘇文書元中三年十一月旨為 故大王 據

1

˩之則弘和三年薨可,爲」得」實故今 從」之

按豐後國萬壽禪寺/古過去帳征西將軍 後

醍醐院皇子癸亥三月二十七日癸亥卽弘和

三年也菊池武朝弘和四年`申狀"以,懷良

爲 故 大王 別載„將軍宮, 五條文書三月

十二日分旨書 故御所,其書入弘和四年阿

傳記

11

11

弘和三年癸亥,驟三月二十七日薨 *過去帳

年

五十八,葬 八代郡宮地村東谷, 元中七年

建,一寺 號 悟眞寺 萬壽寺

懷良 也此年八月 天皇崩十

月奉„遺紹 圖„恢復, 4興國三年 七月

親帥„菊池武光等諸將,往今征 島津貞

如櫞武光夾輔懷良 削平隣國, 當 此時,

南朝稍衰弊名將勇士多戰沒以」故卿 相將

士多來„肥後¸屬„懷良¸威煙振ņ九境 正平

十四年八月武光奉„懷良,赴„筑前 討 太

宰少貳賴尙 大‶戰,于大原, 懷良身被 三

• 牧宮

此筑鎮西宮園*阿蘇宮或稱 關西親王_九州宮3 筑紫宮類

‶建德二年中務卿阿蘇文書‶正二十四年

一品中務卿文中四年一品式部卿今据 之

務卿式部

時云々

拼, 會之等 所々一叙,一品,歷 中年二月之書狀 御

錄 筑後炡御船陑蘇文書五條賴元正

懷良後居豐後玖珠郡 . 阿蘇文

系圖爲延元二年,名和傳譜爲 建武 二

年,皆非也

11

11

國元年,乃季延元四年也大日本史後醍院

書誤為‵延元四年十月 實五年四月二十

詳,于四年考徵故傳記亦謬而爲興

興國 元年之 條:

肥後文獻選書第三卷

李花集後宮

皆謂 李花集日建徳二年九月二十日鎮西より

如據 武朝申狀

御所,

太平

明國,贈馬及方物 明主嘉』之叉 懷良

本朝過紀菊池傳記菊池略傳明史

大統曆文綺紗羅

圖書編〇閩書洪武四年賜 懷

明曆雜鹽` 異邦書皆誤爲 懷,又明史洪武十四年 皇

朝弘和元年懷 長送 明主有】書疑非 正故不 書

天授始讓,,職於泰成, 居八代 稱 高田

大日本史菊池略傳傳記

チ

ミシ

11

建德元年三月明主大祖遣„„使臣趙秩於 皇

朝 菊池武政輟之鉽西謁懷良,秩以爲

眞天子也禮遇甚優武政乃奉旨遣祖於

按守山御所或爲益城郡守山鄉ı在雌威部

柚非也菊池武朝申狀付隈府城又謂守

山城内, 城内有: 内裏尾月見御殿御所

小路等名 乃守山御所之遺蹤也

山御所－菊池風土記

菊池傳記附錄

記菊池傳記 二十二年武政修繕隈府 城 營

造殿室‟於郭中 爲懷良之居館,號曰:守

朝通

創,武光及其長子武政奮戰賴尙竟敗

氵

東軍 下引向勢州,八月十七日解」纜九月

十一日於 伊豆﨑 遇 大風 數船漂沒親

王顯信卿等船歸„„著勢州 上野入道道忠

艤 此御船 入道一品船著 常陸國記

澄法親王尊良親王第一宮著,御遠 江國

井伊城 花園宮著一御四國 牧宮同著御

蹟通考卷之二十七

11

關城書裏書曰延元三年閏七月二十五日

十二月三十日 勘解由次官 判

阿蘇大宮司殿

征西將軍令旨所候也仍執達如件

鎮西恩賞井朝敵退治以下事爲有其沙汰

己御下著讚州候則可有御渡海與州

鎮西御船付以下之事急可被召進故實之

仁於與州之由

阿蘇大宮司殿

九月十八日

天筆如此悉之以狀

&罰等事併所被委 將軍御成敗也存其

旨殊可令致忠節者

記曰四國,從」是三下向鎭西,太平記參考以 牧宮

*宮爲 懷

爲懷長 讀史餘論花

者非也

元三年 炳然也然則始與義良親王等,共

發 伊勢 義良親王井入道一品紕顯信 > 等 率按文書雖」不」載､年十二月至」讚岐國,

乃爲,翌四年正月之綸旨,明矣故今究從

_之傳記爲„ 興國元年三月, 興國改元諸

四一三

阿蘇大宮司館

右中將判

正月二十二日

天氣如此悉之以

其沙汰者

九州合戰事 宮御下著之間面々談合可致

阿蘇文書

傳傳記•

物資

四年春懷良著„„豐後國柳浦 菊池武重迎,

阿蘇文書菊池略傳傳記

之於肥後 三月 菊池

●著 柳浦,三月來 菊

至是補„征西大將軍

リル

按阿蘇文書不˩揭˩年孜m上二書 爲三 延

ルニ

1

ニハ

ニモ

征西櫻雲將軍

云々懷良親王瀫 啾綰船著

11

四國,可以有˩ 御-下-向鎮西,云

法仁法親王 正中元年生始名躬良 《建

武元年入. 仁和寺大聖院,無˩ 幾而

爲"親王,延元三年爲僧名,法仁, 正平六

年北朝光明上皇叙:二品:賜網所 補 六

省

母同 恆良|紹運錄

正統記

弑時年十六 史〇年十六 据 櫻雲記囍史餘論

飞 建武元年拜„„征夷大將軍,証械腳大二年

北條時行獸 鎌倉 直奉„成良¸歸京師

三年冬鼏幽,天皇於花山院,北主光明帝

立„成良|爲,皇太子,及- 天皇幸 吉野-廢

」之幽 于京師,後與,恆良|共爲„尊氏,所以

正統記曆代皇記皐年代略記大日本

本史

11

11

成良親王 元亨三年生, 元弘三年冬爲, 上野

太守,足利直義副、之出嚀鎮 鎌倉,婚

疑非„其所"生然他無」所」考姑從」之

トモ

按無文元亨三年生于亅時門院年五十一

母喜子内親王 龜山天皇之皇女也永仁元

年爲〝内親王 號 照慶門院,正中元年三月

薨年五十二瀨師待狀

大日本史引無

肥後文獻叢書第三卷

亅之令據、之

一懷良親王一嘉曆元年生議鼬略傳懷長來三肥後,年甫十四

元元年正月足利尊氏犯 宮醐天皇

朝敵追討事四方官軍等不一揆或先驅而

失其利或守城而似怠慢就中九州士卒等

雖非無功績各爭雄而及參洛之遲引云々

依之凶徒猶不退 帝都涉旬日之條國家

之弊庶民之憂 宸襟無聊故爲進官軍懲

軍陣 無品親王爲征西大將軍所有御下

向也方々官軍急速應催促可被參洛恩賞

避亅 賊幸 延曆寺,懷良從亅 駕十月尊氏幽

天皇於華山院,懷良遁匿 吉野山中,三

年秋拜〃征西大將軍,鎮撫西海道, 以, 勘

解由次官清湦賴元 爲¸値條紋齬其餘卿相

多扈從焉黼呫七十二月到讚岐`國 阿蘇

阿蘇文書

歳世俗,流傳同母Ś藤原氏中納言爲道女也甜職招謹錄 爲中

宮,元弘二年及,天皇遷-隱岐 爲J尼

運綠諸門跡語

·傳紹

勝寺檢校 七年十月二十五日薨年二十九

新撰事蹟遍考卷之二十七

歳以, 其幼,居 之於藤原宣明宅 後遷 于

時幽,天皇於六波羅 恒良年甫十

元弘元年北條高

皇太子恒良 元亨二年生

終所 有 家集 日 李花集

日本史

後村上天皇即位後養髮改』名宗良

楊 稱 上野親王 或稱 信濃宮,正平

七年拜,中務卿征東大將軍,後寓 河

内國山田 宗良嘗選新葉和歌集後

龜山天皇勅準 勅選弘和元年十二月

重訂上」之時年七十賜葉蝶大不知, 其

か

叙品延元々年六月叙_一品 官班

任座主訑座主記

任座主 評 建武二年三月十六日

壞鏡太平

北條高時遷 于讃岐國,三年歸」京還ñ

|宗良親王 正和元年生斯十餘歳就 叡山妙 法

院性守僧正,爲」僧名鼒澄嫁琯住

妙法院,叙„三品,元德二年十二月十

四日爲天臺座主義註元弘二年

母大納言源師重女親房妹也。

終所,以及陸夏令从一來書

大日本史 與長Ë作 隆

1.1

日本史

日次記大

元中七年 6 閏三月二十二日寂 年六

北朝明

歸朝居 遠江國奧山,開一創方廣寺,

|元選和尚,元選字無文元亨三年生-韓藝爲後

渡 元嗣 法福州高迎山古梅友 禪師

二十八日崩 于吉野 陵´在吉野郡高原村

稱川上西山陵 本史

女院小傳

大日

母皇后藤原氏廉子右近衛中將公廉女也太

政大臣藤原公賢養爲」女証」劇《元德 三年

元德三年

二月寂 從三位,稱,内侍三位 建武二年四

月準 三宮,興國中尊爲, 皇后 正平六年十

二月號 新侍賢門院 姍議黨軑曆十三年四月

知孰是:今姑》从 本書

書著書大日本史 延元元年冬使- 恆良 赴越

前」經,,略北國 據 金崎城 二年三月城陷,

恆良被」執足利尊氏與,成良,共幽」之於一

室三年四月十三日尊氏訊弑幽室 年十

關城書裏書大日本史 櫻雲記六七月十三日/ 害

年十五南朝公卿補任云七月二十一日十五歳讀史餘

爲閏七月年十五,不

但馬建武元年正月二十三日立爲 皇太子

神皇正統記關城

母藤原氏姪子參議實俊女也稱 一條局 本史

宮 瀹運

炟*號河崎史難發嬬

平滑

甜讚太元德-世良親王 昭慶門院如天皇養爲子爲親

王拜上野 大守紹運後爲太宰`帥

,延元元年冬出〝守„越前

金崎城,二年三月六日城陷尊良洞」胸而薨

足利尊氏使僧智嘔 葬之禪林寺軑平

母典侍藤原氏爲子冷泉權大納言爲世之

女也躙大 生二皇子二皇女,早卒及三天

皇,即」位勅而贈 從三位

1

尊良親王 嘉暦元年爲 中務卿,8元弘二年北

二陵今尚現存銘文削歇不.可以讀叉靈牌今

藏妙見补別當神宮寺之内,龕靈牌一而

彫二法諱,其表銘日登霞後 醍醐天皇 遷化

靈照院禪定尼其裏” 延元四年八月十六日

正平六年三月二十九日與參考本校定7年

月,相符合靈牌古色實其時之物也

肥後文獻叢書第三卷

條高時遷 于土佐畑 鸝 三 年 亂

定歸„京師二年九月十八日薨日𩷑裏居,大塔,因時人稱 大塔宮,知元德

二年三月二十七日叙,二品,楿班元弘二年

蓄髮還俗 名護良¸婳鰔梅老歌《三年六月|興良親王 興國二年夏源親房迎„興良於吉野,

尋為親王 邻店 帝王系圖李花集

阿蘇文書〇本書名

正 平

十四年拜, 征夷大將軍 十五年四月

反焚 賀名生行宮 二條前關白師基

帥」兵討」之興良走南都不」知其

ﾁ

民部卿三位局 諸門跡識

大日本史

母源氏親子權大納言師親女也叙,三位,稱

二十八教太平記

日本史參

三日拜,,征夷大將軍 建武元年十一月謫

鎌倉 幽 二階堂谷, 二年七月二十三日足

利直義使臣淵邊義博,殺』之於幽所, 年

十

大日本史

ﾃ

爲延暦寺座主 ○座主記爲 十二月六日十二歳 未

延慶元年生始爲 兵部卿,嘉暦元年

往,,梨本佛寺,就承鎭法親王爲、僭

號 鼏雲 二年十二月二日叙,三品

家官班記天臺座記異本太平記

護良親王!

新撰事蹟通考巻之二十七

候

右之者共名御替被成候間其心得可有候磵扶持

方請取に遣候時如斯名を申候而取可申由被仰出

内田藤左衛門とのへ

右衛門尉事

織部事

田尻叉四郎とのへ

田尻彌太郎とのへ

内田三郎兵衛とのへ 田尻次郎左衛門とのへ

市政太事

式部事

田尻伊右衛門とのへ

上妻新右衛門とのへ

三浦事

牛島三郎左衛門とのへ

田尻宗右衛門とのへ

一七人扶持宛

伊豆守事

内田九左衛門とのへ

内田衙門七とのべ

皇及尊母之山陵於此i傍開„梵刹 安置靈

牌,名曰‟顯孝寺,修氵 先考之冥福: 寺今廢

四〇九

ミサキチ

王墓叉影塚 正平七年懷良親王墓建 天

ウツシタテ

按天皇崩年月諸書有異同,參考大平記

舉„其異同】定爲:本文年月八代郡宮地村

洞泉谷有 五輪塔石 二 相鑊土俗 字 曰

藏王堂北塔尾 遺詔奉」稱ņ後醍醐院

シテ

諱尊治後宇多天皇第二之皇子母談天門院典

侍忠子參議藤原忠繼女也正應元年十一月二

日生德治三年九月立爲,ņ皇太子 文保二年二

月二十六日受 禪於冷泉萬里小路殿,三月二

十九日卽引位於太政官廳,延元四年八月十五

日讓 位於皇太子,十六日崩年五十二葬, 于

後醍醐天皇

征西大將軍

系圖附錄一

新撰事蹟通考卷之二十七

明可爲如惣並者也

右知行不可有相違候猶於忠節者可相重候追而和

合百七十町

野村

一二十町は

岩玉名村

山本郡之内

一七十五町は

一七十五町は

伊倉南方

玉名郡之内

濱横島除之

知行方坪附

以上傳 牛島家

城三郎左衛門殿

天正七年十二月二十六日

親賢判

所

二町

城三郎左衛門殿

天親賢

天正七年九月二十八日

一町五段

一所

二一所

原口名

町

一同三町

一町三段

辻名

一所

一町三段

古閑名

所

池砜宮尾之内

——池

肥後文獻叢書第三卷

一同所所所所畝一麥二升

一馬一足

覺

三名衆中

山上

天正十五年十月朔日

右爲加增分宛行候全知行不可有相違者也

貫五十

錢

六貫二百田畑共

合二十四町一反四畝

畝は

同所

一八二南方

一二町八反は

田方

は

所

同六町三南方のしり

一八町は

田方

一一町二反四畝は

同所

南方翁丸*>

一五町二反は

知行方加増目録

田方

玉名郡伊合之内

三名字衆中

山上

追而不淺存知候處水島二雙被添御心候御
芳情之至不及申候必自是御禮可申分候
如仰今度就弓矢申承候本望候陳以後依遠

同 伊豆守殿
同 大和守殿
田尻善左衛門殿
十月二十三日
鑑元
御書旨之極具分披見候仍今於途中申承候
就中御寄合衆此忠義之段不及申候隨而水
島六被懸御意候御丁寧之至快然候猶重々可
申承候條不能細筆候恐々謹言
誤
此二上包作 鑑
宗惟
御宿所

牛島寄合衆中

緒方民部少輔殿

賀來治部少輔殿

贺來彈正忠殿

田尻與左三郎殿

田尻木左二郎殿

通¯元之父 自豐後之狀

四〇七

城三郎左衛門殿

親賢判

十月四日

五十町可預進候爲御存知候恐々謹言

城三郎左衛門殿 牛島

三月四日

今度弓箭於出來可被抽忠賞事可爲連々首尾

然者領地之儀可任望候至親類中忠義次

第可顯其威候爲御存知候恐々謹言

以上之數通傳,,,,田尻家

同 伊豆守殿

大和守殿

同

田尻善左衛門殿

長清判

十月二十七日

方無音心外之至候結句御懇示給候畏入存候

仍御領地御安堵之儀鑑元別而被添御心相調

候御祝着奉察候如此御請上意御面目之至不

及申候然上者自然之時性別而可被抽御忠儀

事肝要候委細猾猪野上野守方可被仰達候條

不能詳候恐々謹言

今年之慶詞珍重候仍舊冬殘黨雖現形候則退

散候案中候其砌至關城被添御心候之由祝着

大津留常陸介殿

渡邊 能登 守殿

清田遠江守入道殿

吉岡三河守殿

度足民部少輔殿

清 田 越後 守殿

田次上總介殿

義鑛判

二月十三日

去年弓箭以來小原遠江守入道任下知山上日

多小窪衆無別議心底之條居屋敷等之事如前

財無相違可被申渡候自然違亂之仁於有之性

可被加制止候尚家惟可申候恐★謹言

上包誌, 佐伯治部少輔惟教關城主小 原 鑑

元入道宗惟

11

御宿所

田尻善左衛門殿

惟教同

鑑元

八月九日

賀來伊豆守殿

緒方刑部少輔殿

加來丹波守殿

十二月二十五日

宗惟判

到河尻表殘黨現形候雖難有指儀候每々無實

所國候條各不可有汕斷之儀候萬一敵於相動

渡於關城萬事可被添御心候各忠儀此時候发

元上68可有御發足之御覺悟候志 真光寺

田次上總介方到國中衆被差遣候我等事急度

可罷下之覺悟候紀伊助山城守可申談候賴入

存候恐々謹言

各中御宿所

內田和泉守殿

牛島三郎左衛門殿

同 左衛門殿

田尻駿河守殿

宗惟判

正月七日

候彌每事賴存候必近日可罷下候條其時申請

御書各中卒勞之段可申候发元無異儀候可心

安候恐々謹言

其國寄之衆内申旨候條不圖賀來中務少輔
差遣候此節於勵忠儀岵一段覺憑入候恐々謹
田尻善左衛門殿
十二月十二日
駿河守所望之由可存知候恐之謹言
以上二通傳 牛島家
牛島彥五郎殿
義鎮判
十二月十二日
三郎左衛門所望之由可存知候恐々謹言
左衛門殿
牛島三郎左衛門殿
同
高鑑
二月十六日
田尻駿河守迄心底之趣述候祝着候渡海之刻
別而忠儀肝要候然者可成其感候殊一色到來

悦入候猶江本右京方可申候恐々謹言

此二通傳, 田尻家, 其上包記-菊池殿御父

子自„島原,御狀

同 左衞門殿

田尻筑州守殿

高鑑判

二月十六日

四〇五

先日雖分啓候不預御報候無曲候雖然無異所

砌候條無餘儀存候如存知國中宗徒之衆改先

非可屬忠貞之由候條始中終以問目肝要候於

于今は隈本退治可爲一両日中候然は海陸之

通路之儀稠加下知候爛不拔足樣了簡無油斷

候可被得其意候殊御筋目無御隔心事候間於

向後無他事可申通候本望候時日重疊可申候

恐々謹言

關城主

小原遠江守殿 玉名郡南

六月二十二日

同文贈"牛島三郎左衛門 書狀 傳 牛島家,

肥後國山之上衆去年干戈之刻別而軍勞之由

祝着候然者鑑元在國之條爲寄子分同心彌於

勵奉公者一心可顯其志之段可被申聞候恐々

謹言

田尻掃部介殿

同 善左衛門殿

同 伊豆守殿

判

日

義鑚五月二十三言

天文十九年八月與,大友兵,戰死」之

公尚三十八代孫

三郎左衛門

派

河內村有、宮稱 阿蘇若宮 有 寺謂, 清光

山江月院, 2 曹牛島黨所以建

11

代々住 | 紀伊國中山,壽永二年四月來1

肥前國長島莊牛島:因而改 澀江;稱 牛

島,建八九年移,肥後飽田郡活龜莊河内

村,自」是以來居住

平公尙

澁江五郎

牛島

右田尻 系 圖 其 家所」傳後人之杜撰故略」之田

尻家之人出, 文書等 者系圖不」載」之今無、所」

考

惟家 上野介

金峰山麓 義武密逃走 河内浦 趨 島原

ニテ

肥後文獻書第三卷

公

每々心底之趣述候祝着候殊折々音信悅

各中申談渡海之刻忠貞肝要候然者別而可被

成御感候直に 茂被成御一通候猶江本右京〃

可申候恐々謹言

同 左衛門股

田尻駿河守殿

二月十三日

義武判

到遠境度々音信悅入候以時分忠貞簡要汇候

何様別而可成其感候巨細從方筌可申聞候恐

三名字所藏文書

出村平山村面木村以上謂 山上八箇村,合玉名

郡小天村 九村三家領」之故曰:山上三名字,仕

菊池!後從 大友 元龜天正以來屬:城親賢 親

賢授以„城稱號

ルニテスノ

チモノ

飽田郡大多尾村東門寺村出羽村嶽村河内村野

イツルハ

右牛島系圖略*寫」之

三郎左衛門

彦五郎

天文頃`人
賴次
織部助
-賴清 丹波守
宗賴二十三代孫
-賴秀
内田周防守
人
按舊遠江
玉名郡山北西安寺有塔石 銘日本打造立,
五輪塔婆一基嘉元二年砷八月日當寺大檀
那遠江國住人相良三郎左衛門入道淨位
モト
内田家祖稱,内田相良｜子孫徙, 飽田郡 活
龜`莊大多尾村 代々住于此 勸請祖神
春日社,又建 淨正寺,爲 菩提所|

祝` 髮號 淨位

-賴重

三郎左衛門

高橋家祖

-賴元

左近將監

領,山鹿郡山井内田高橋,

伊漢靈帝,豨 之後裔也

住 活龜莊嶽村 田尻五世而無」子應 永十

癸未年養 豐後國緒方惟基之子定綱, A

嗣自」是冒 實家姓 稱 大神, 田尻大藏姓

之間建 漢高祖祠於村 爲產神,至于

今」祭」之灭草創嶽麓寺

禪宗曹爲 菩提寺』

四〇三

天文十九年八月菊池義武遁 隈本城,而匿

„駿河守家 大友兵追來與 三名字等, 戰,

レデ

善左衛門 駿河守

其先原田黨大藏姓後漢

大神定綱

田尻

者-故略』之

右内田系圖其家所藏甚詳也雖」然有難 信用

賴豐

左近太夫

別家移居東門寺村1

-賴房

彥九郎

九州記天正八年有,,志岐民部允,國誌草稿

元龜天正頃志岐兵部少輔鎭經其子志岐入

道林泉其 子兵部少輔 親重天草城主附"菊

修理

池兵部頬規 同隱居林泉又曰親重親父林

泉諸書不」同有馬系圖晴純五 男兵部少輔

諸經爲志岐兵部少輔鎭經養子, 今從」之

天草一黨覺書志岐藤右衛門百人 扶持 爲

誰子,乎不詳

傅書之誤也

秀吉公より肥後國を小西攝津守加藤主計

頭に被下加藤殿へ御預け彼内に居候而

朝鮮入にも參 加藤家没落して彼邊

土に罷居候處又肥後國を細川氏へ被下候

彼方居候處此御方より島津彈正殿

肥後へ御使者之範罷出彈正殿とゆかり有

之候に付御國へ參り度よし相願此御方え

爲參由汇候按‶麟泉仕 加藤家

肥後文獻叢書第三巻

藤原親高

八斗五升五合

藤原頼景

-長頼

一宗頼

山井四郎左衛門

相良家之祖

相良三郎四郎

内田

山上三名字

奉一仕細川家i

吉･賜本領,十七年與志岐,反 小西, 後

復降 小西 其子甚右衛門通隆一嫮覺書栢

人扶持楢本甚

呫徧從„„行長,赴 朝鮮,於„ 順天：戰死年三

十二其子又七郎旗弘仕 加藤家-門與九橋本

双秕上佰伍汁六布其子又七通次寛永十年九月

下川又左衛

ミシテ

栖本代々領„天草郡栖本,故以 栖本,爲

著姓,其家菊池之枝族也小島二郎保 隆爲祖

家記 菊池則隆之三男

湘 親高稱 八郎 天正十五年謁 秀

續今略」之

栖本

右上津浦家系譜未」見之以上載」地志略及古

城主考,而種直之時家衰天正十七年上總介

某反 小西行長 黨 志岐麟泉¸後復降„行長

然不」書」名種直歟未」詳天草一黨覺書百人

種直 上總介

種貞十一世孫

重貞

上總介

-種貞

上津浦入道辨勢

領„天草郡上津浦,因而家號稱氵 上津浦

大藏某

原田黨

上津浦

興 家 寬永十年奉凱仕

,細川家

居叔父伯耆長

忠廣改易之後至柳川|

重次

五郎左衛門

藤原鎮經

志岐代々領天草郡志岐 故以 志岐 爲 稱

號,其家菊池之庶流也其系譜不」傳鎮經 稱

兵部少輔始屬„„大友家中從龍造寺家相良

家|後爲„島津家之旗下1帷石。其子兵部

少輔諸經削髮號„麟泉 實 有馬修理大 夫 晴

純~五男也天正十五年謁„秀吉 賜 本領,十

七年反 小西行長 據„守志岐城, 行長率.. 家

軍,往攻」 之不」克行長告,急於 加藤清正, 清

正自將、兵來與„行長合】軍討麟泉 麟泉兵

竭力究乞」降退、城而赴 薩摩」不知其終所

薩州舊傳書云志岐氏は肥後の國人にて四

萬石計傾知致し志岐之城主L<志岐兵部

少輔鎮經入道麟泉と爲申するのにて候處

志岐

扶持上津浦六左衛門加藤家士帳下河叉左衛

門與力二百四十五石二升七合上津浦六左衛

門其外無„所見

大藏種保

肥後文獻叢書第三卷

草黨 祿如:左 百人扶持天草太郎左衛

門五百石天 草 三郎左衛門 衛門弟 五百

石天草新助 - 二百石 天草 喜 右 衙門

垌千石天草彌十郎太鹹佐衒百五十石天草

市十郎) 百五十石天草叉三

門嫡子

天草家來三人木山彈正天草伊豆天草主

水又一書天正十七年志岐城攻之時天草

伊豆守手軍將天草主水助種方加藤家士

帳加藤右馬允與力五百石天草新助 二

百石同喜右衛門 百五十石同市十郎其

餘無､所見

種基

天正十五年秀吉種量

大矢野

種重

大矢野十郎

原田黨領, 天草郡大矢野 因爲家號

代々居,大矢野城:

蒙古襲來合戰繪詞書弘安四年有三天草人

大矢野十郎種保同三郎種村, 種村種保之

慶長五年安松十三歳尚在 宇土城:九月加

藤清正拔„宇土城】安松母子蒙 清正 之扶

持 移 居隈本城 賜月俸百口 加藤家士

帳大矢野喜兵衛二百五十八石七斗四升八

安松 喜兵衛

從」父戰死年十八

彌太郎

行長指出,兵援 志岐城,後乞｣降而屬 行長

文祿二年從三行長赴朝鮮之役, 八月二

日於„順天,戰死年四十三

妻宇土左兵衛佐顯考女

征西之時賜,本領,傳

吁鎵 雖迦及獍明十七年天草 一黨皆背 小西

朱印之

可以疑者」故令略 之

種保十一世孫

日系圖載 代々名:有

民部大輔

弟歟系圖不」載

四〇〇

種生

種弘

種材

-種光

長門守

太宰少監

壹岐守

多倍王大化元年歸化住,大藏谷,其二

子貴重王是大藏姓之祖也十二世孫春

實依 純友追討之功 賜 筑前三笠郡;

住 原田 故嫡流以˵ ˵ 原田 爲 稱號 波

多江、秋月、江上、高橋、天草、上津浦

等皆其末孫也春實後改 春 種: 云大

友記春實之時賜_大藏姓 不˩知就是

今姑從翰譜 併一書諸說 備考

寬仁三年刀伊賊切難扔冠 壹岐 前 太 宰 少

太宰

監大藏種材防˩ 之有˩功 朝廷賞˩ 之爲壹

守

太宰大監

長門權守

種資

太宰大監

新撰事蹟通考卷之二十六

某

種直

三九九

天草一黨覺書個號略 秀吉征西之後賜 天

散位, 書中有三 天草三郎種世 後太平記

天元年有三天草彈正忠行盛,其後清正

記天草記等天正十七年天草伊豆守種

應„志岐麟泉 叛 小西行長 據 本渡战

行長及加藤清正等圍攻」之種元力 盡自

殺

之文書 詫磨文書至德四年五月自

天草祖原田種直之孫個志然其世次不,詳領

天草郡本渡 家號稱天草 代々居 本渡城

按今其家亡無 系傳 王名郡廣福 寺 有

正平二十年十月二十五日天草太夫種國

之本領,僅賜 筑前夜須郡秋月莊其子種雄

築 秋月城,居、之改三家號,爲„„秋月,

壽永二年平家遁 京師:趨 西海 種直奉

安德天皇 數有功以」故源賴朝沒

筑前守 或作: 種成

原田太郎 太宰少貳

親行

二月九日

義統 判

肥後文獻叢書第三卷

南關紀聞載 大友義統之書簡

親貞事對當方連々無別儀覺悟之由分承

知候偏に其方才覺故に候感入候仍於其

國五十町分大約 之事預置候可有知行

候恐々謹言

某

邊春常陸入道殿

カ

按常陸入道喜連親貞之一族也 顔, 山鹿

郡芋生村 其子芋生攝津守親延居 芋生

城,因而改„家號於芋生

大藏春實

小代文書大友宗麟之書中 天文 頃有‥

邊春薩摩守ı

能登守

天正十五年冬叛 佐々成政,與,和仁親實

據, 田中城, 成政密圖通親行 親行陷 其

詐謀與,,親實之侍臣黌藏人 議逖殺親實

放:火於城屋1降成|然成政忠,其不義

却不」賞」之親行流浪終於 吉地村,病死

阿智 其按大成武鑑春實靈帝五代孫高貴王志

孥直六代大藏氏大國後孫也九州記及

古城主考靈帝孫獻帝之後胤古城主考阿

簫翰譜

秋月傳

年討 藤原純友有 功賞任 對馬守

止 ˇ地名,賜姓大藏,其苗裔實天慶三

使主

藏谷

應神天皇三年歸化三代實錄作三四代孫

子商香王之後因 祖先之始? 來”

二八

其先出」自《後漢靈帝曾孫阿智王i阿智王

避,,,,其國亂 來 播磨國 明石浦 住居大

日本後紀日後漢靈帝曾孫阿智王

對馬守

天草

天草一黨五家

仕 加藤家,領三三百五十石餘,

次左衛門

三九八

次郎

熊市,

一作

親實

女

親續

-邦鄉

領, 坂上坂下村百七十町

臼間能登守

天正十五年背,,佐々成政,被」誅家

和仁

和仁丹波守

1親範

後剃髪號 自休

-親宗

領,, 玉名郡和仁村吉地村十町 村筑後國白

木村等百二十町, 代々居, 和仁村田中城

小代文書大友宗麟之書中天文之 頃載,

和仁彈正忠.

邊春親行妻

勘解由

天正十五年九月佐々成政團 隈部親 泰 於

山鹿城村城 時一揆乘､虛犯 隈本留守,成

政築. 對城於東西,置 守兵,還隈本 守兵

領,玉名郡十町村板楠村藤田村 前原村內

由鹿郡茂賀浦筑後國邊春村等百二十町

居 十町坂本城：

邊春加賀守

十二月六日視實被」害視範親宗奮戰 俱死

闔族夷滅宗社丘墟

人鬼

大戰破」之十一月成政怒」之親率„數百騎

來伐„親實邊春親行弃 坂本居城, 與親

春親行弃,〝坂本居城;

實¸俱據„田中城 守成甚固成政亦能不」攻

▲之知親行之爲、人 密送」書殺親實行迷

其賞,爲成政,被 欺逐耦親實 降 成

彈正

親行等出」兵遮其歸路 宗茂

糧於立花宗茂 宗茂自將、兵入,糧於對城

糧盡苦„保守,成政遣 人於筑後 柳川 請

其嫡子中村太郎時隆二男筑地藏人國親三男

小代文書嘉慶二年應永八年有三大野伊勢守,

國志略日大野別府地頭紀清賢之子大野國隆

願行寺有三大野伊勢守重賢寄進狀

長

隆寄進狀1据 重長之狀

大野伊勢守

清源寺有,正平十四年六月大野伊勢守紀 光

壽福寺,祂至有三正平十三年二月紀政幸書

應和二年勸請實之 三 男 非 也

二年勸請暝誌略魘胞

應和繁根木八幡社記大野領主大野菊麻呂紀隆村

與,小代親忠 戰而敗死家絕

タリ

人爲 大野領主,天正年中大野彈正少弼親就

ニシテ

古城主考日大野家始繁根木八幡宮神主而數

代相續之家也隆村國隆光隆隆鑑等皆紀姓之

地志略曰一書云應永十年癸未五月三日大野

出羽守紀朝隆爲〝大野日嶽城主¸

「秀隆 大野三郎

一國秀 筑地二郎

-隆 中村太郎

肥後文獻叢書第三卷

恐一膳寫誤親之子秀能其子

志略出 大世系圖 然

三系圖藤原善鄕

-宗鄉

臼間太郎 善鄉之後孫

東鑑建長二年有.„臼間野太郎,則鎌倉以

來之家也

代々領,,玉名郡臼間莊内¸稱 臼間莊司,居

坂下城˵ 墓在„坂上村 幕標銘日慶幸

公禪定門應仁二年五月十二日志

秀鄉之奕葉

臼間莊司

臼間

右大野家其所亅出傳系等不分明 然是又東肥

一方之一領主故書』之備 訂攷 代々居 大野莊

開田村日嶽城5

‷取從„紀宗善由來書

無,正全本,可以矫

秀時其所』據不亅詳

故不

也

秀親秀前原藏人

兄弟同名可以疑

三九六

紀國隆

大野

大野小次郎

建八四年四月補 玉名郡大野別府地頭,

舊繁根木八幡宮之別當也好精

某年八月六日死法名清源

過去帳

蒙古襲來繪詞書弘安四年合戰之時 載〃肥

按建久弘安相距八十年餘

疑建久者建長建治之誤然

後人大野小次郎國隆」

今無所」考故姑

由来記

清源寺文書

大野家之次第無存知候之間大概書記

其昔關東より直に被成御下知候

ルコト

幡別當紀國隆法名清源御恩地被下建久

四年卯月二日御教書を頂戴候而八日關

東を被罷立肥後國玉名郡之内大野二百

五十町被給中尾高岡居屋敷にて子を男

子三人女子五人被持候彼男子三人には

五十五町つゝ被讓候嫡子中村太郎時隆

には高瀬中村五十五町二男筑地之二郎

國秀には筑地五十五町三男天野三郎秀

弘治三年三月吉日 紀宗善

源太郎殿

龜甲伊豆入道

隆には居屋敷五十五町是三人同前領地

之分此由關東え被申上幕紋別々に被

申下中村太郎時隆には三龜甲之内龜之

丸筑地二郎國秀に形葉大野三郎秀

隆には六下葉龜甲男子三人には如此去

は女子五人には入聟にて中尾山田岩崎

尾崎河崎是五人は我々幕紋也大野八

衆と申事は男女八人之分去によりて其

分に申候然間あたる番候 三男惣領職

被繼候其より大野十郎代々申來候於原

野口高道は筑地之内に候然西窪大野庶

子分に候歟我等名字之事本嫡家之流中

村名字にて候へと∞中村被持放候而よ

龜甲名字に候名字者末

宇者末代に相殘事に

て家々連續不知候事は不覺第一名字之

可爲瑕瑾候大形之覺分書付候仍爲後日

狀如件・

-實照

二月甲佐宮雜掌申狀二十三年七月分旨

在三河夙三河守杯 入道廣覺 推 年齒

當,幸俊實照之間,故姑係„幸俊之子,備

考

七郎

左馬頭

阿蘇文書

申定

契狀條々事

一世上之一,於今先相極于當國候歟然申

守護爲云各々大事於敵方先立方一味同

心致奔走可申合力事

一於契諸之衆中自守護方若預不慮沙汰之

時無自他之隔一同雖分致愁訴無信用者

就是非相互捨不可被捨事

一於衆中萬一有嗷訴方者同心可加諷諫

於無承引者向後數事不可申談事

右如此條々申定候上者到于盡未來際更

不可有違變之儀也若申僞候者

右河尻系圖無 全本 錦囊移寫,,,,河尻系圖 僞

妄書不」足」信故不以探

永祿天正頃人載 菊池傳記 雖」然其父祖

不,分明,

重兼

肥後守

應永二十七年八月先是實照叛 守護 菊池兼朝

兼朝攻」之數 日 實 照臣佐川田玄蕃吉久密內1

通菊池 且､弒實照 實照聞､之脫」城遁後又從

菊池 復 舊領 全實昭推 阿蘇文書 之

菊池傳記按傳記作ˋ ˋ 實照

阿蘇殿

應永十七年蟥 九月二十七日源實照

河庑殿

日本國中大小神祇殊者當國鎮守阿蘇大明

神御罰可罷蒙者也

畏分言上候

同文書

貞和五年九月二十日肥後守幸俊

一可奉寄進以幸俊拜領所内所領一所事

右志趣者爲天平靜謐四海泰平兩殿御

息災延命殊兵衛佐殿御心中所願成就

圓滿次幸俊所望滿足息災安穩壽命長

遠之所奉立願之狀如件

一可有御寄進阿蘇庄事

阿蘇大明神御寶前立願事

敬白

傳記

髮更„„名堯信 太平記異本太平記

阿蘇宮有„幸俊之立願狀,如」左

正平二年屬 足利尊氏: 尊氏授以„肥後國

守護職 自」是稱肥後守¸ 菊池武光 四

年九月足利直冬來„河尻津 幸俊奉」之爲」

將與官軍戰不」克五年夏終降三武光,剃

剃髪號„堯信¸大慈寺記

三九三

按正平十一年六月惠良惟澄申狀十二年

剃髪號„„廣覺`

參河守

按幸俊此年降 菊池武光,故奉文伍螺賴

加„權字 歟幸俊不」知:其終所】

將軍宮御氣色取候也仍執達如件

正平五年八月十八日勘解由次官判

河尻肥後前守殿

惟澄申守富莊內甲佐社居合田事理家

如此子細見狀候爲事實者任先例可被止

其妨之由

筑後守惟澄

進上御奉行所

八月九日

御披露候恐惶謹言

正平五年八月十四日

泰聞候任先例可預御成敗候以此旨可有

謹

抑守富荘内甲佐居合田事依河尻肥後守

幸俊押妨自社家捧申狀候之間

建„若宮八幡神社 地誌略

其城迹也

築」城居」之哈阿尻町外城是河尻家祖也同八年

建久初賜肥後飽田郡河尻荘地頭職 來些

諸種七世孫

-實明

河尻三郎

諸種

高明之子

二十一年賜

源姓,累官至 正二位左大臣,安和二年

春有」罪貶,太宰權帥,天祿二年下」詔召

還明年四月入„„京師¸居 葛野別荘 天元

五年十二月薨年六十九稱 西宮左大臣,

源高明

醍醐天皇第十三皇子母更衣周子右大辨

河尻

系圖之十四

新撰事蹟通考卷之二十六

肥後文獻叢書第三卷

源唱女也稱 近江更衣,延喜遠實

七世孫-泰明

|武實

幸俊

肥後守

同村長德寺記：

正和頃人出,"于河尻野田村延壽寺鐘銘及

削髮號„貞覺i

民部大輔

大慈寺 記

寺

記永仁六年十月二十九日死法 名梅屋葬 于

弘安元年造凱立大慈寺

左衛門佐

遠實寛元二年建,野田村安樂寺,

馱櫶詩記槁

十三世孫

實明之孫

右兵衛尉

實明之子歟不詳故附:于此,

1

詫磨郡内田畠地於河尻乙王丸 有 解狀

詫磨文書建八十年三月 宗形氏綱沽引渡

11

三九二

賴

久載

重德

重能

女

重隆

久盛

永祿十二年四月二日死

源太夫 1作 善 佐渡守

賴峰

內兵衛

妻i田島藤左衛門朝夏女

與兵衛一作 藤 於犬馬場口,戰死

【內兵衛

1

馬場右衛門兵衛政朝妻

太郎右衛門

本少 異

譜代々有子孫,居 菊池隈府|

小兵衛

仕,加藤家；

加藤家士帳宗小兵衛二百三十五石餘又一

本系圖治部少輔重德於 山鹿城 討死

孫右衛門

仕 加藤家

同士帳宗孫右衛門月俸六石

主水 與兵衛

仕 加藤家

同士帳宗與兵衛知行百三十石餘

妻出所死年月等詳記」之其真假不」可

【考故可:其疑者悉省」之„„其略,而書」之

11

鑑隈府宗家者據』其家系一本

但其系

右宗系圖對馬宗家者從其家之系圖及大 成武

赴_安藝國,仕„淺野家

與兵衛

永正二年十二月八十四人連署有名

-盛賴

與八郎 丹波守

非¸„明應中,編年考徵可„„合見,

1

11

按系圖明應九年三月爲 菊池能運 於 宇

土城,討死然攻 宇土城,交龜三年十月也

盛11

信

11

與八郎 大和守

重詮 越後守

宗海 東福寺住職

十七年六月二十九日死年 四十一葬, 東福

つき∞さそよきか島の秋の宿

菊池重朝授„名一字 岩野山築」館居住稱

道祖城 文明十三年萬句連歌有」名月蓬題

宗大和守重信

重信

丹治丸 大和守

E

文明二年五月十日死法 名喜雪葬 袈裟尾

肥後文獻叢書第三巻

-重頼

|隆盛

重

隆盛

女

宗利

太郎 主水 備前守一本家號

n

出田刑部少輔武祐妻

弘治四年二月東福寺藥師十二神將建立

源左衛門 落髮號 淨隆

九郎兵衛 丹後守

子潛匿 宗家 成長之後養爲」子

實菊池武包之二男也武包逃出, 隈府】時母

次郎 治部丸 越後守

於 久米原 戰死

彌十郎

薙髮號 宗意

與三郎 備前守

按系圖文龜三年八月三日菊池能 運賜

預知證書, 然其頃能運寓┐居肥前高來

可」疑故不」取

11

三九〇

女女

-盛家

某

-義盛

彥七 刑部少輔

始名盛貞

明應元年襲」封足利義材授,,,名一字 改

材盛,永正三年致仕

彥七 讃岐守

始名盛順

武藤政資及家臣宗顯茂攻,,,,筑前

大內

義興:被」敗政資始悉戰沒武藤之 嗣於」是

絕永正七年足利義尹授名一字, 許 源姓

及屋形號 八年於:京師 賜八千貫之地

十七年致仕

百五郎

右馬四郎

嗣家臣民部職家遺領

家臣河野平九郎某妻

家臣中原修理盛時妻

以下略

新撰事蹟通考卷之二十五

永亨八年六月賊起攻 本山城｜兼信乞, 助

兵於隈府 菊池持朝遣城備中守,本

山」兼信與」之内外夾擊賊退散康正元年六

月討„益城郡賊 氏族物故者七十餘人菊池

爲邦賜„感狀及山本郡岩野莊内百五十町,

三八九

兼信

與十郎 大和守

-義盛 詫磨又太郎

-兼義

始名義信菊池兼朝授 名一字 改 兼義 嘉

吉元年十一月於 生松原,戰死

四郎左衛門

盛規 實相山大林寺住職

弘和二年正月飽田郡一揆蜂起義澄 討 討平」

之菊池武朝與„感狀,

-義澄

右馬頭 大和守

正平七年菊池武光貺 詑磨郡 丙二百町,

居 本山城,天授四年詑磨原役戰死

1

刑部大輔

貞茂

賴茂

盛眞

肥後文獻叢書第三卷

右馬頭

ヒテ

11

貞盛

正平元年三月爭„家督 戰負而逐奔肥前

神崎 五年九月來 肥後屬 菊池武光 十

四年八月於„筑前鯵坂 戰死

|盛國-

右馬太夫

削髮號„靈鑑i

正平中襲」封天授中任 太宰府 使下,從

弟宗伊賀守澄茂」爲對馬留守應永九

年歸」國居 上縣郡三根鄉志多賀,先」是

與ę朝鮮國 始通」好

貞國

某

某

盛世

女

應永九年十二月襲」封爲筑前國守護代

十五年八月還對馬】初而居,三根佐賀

府,二十六年致仕

シケモト

一成職

按隈府宗系圖助國之子經義盛明 其

子賴義, 瘣們辯,其長子盛真對馬宗系圖

無 盛 眞'

次子尙義 家之祖

馬宗

尙義子貞義 其子貞澄

貞國

其子盛職其子貞國云々今據, 對馬 宗

系圖,改一補之,

姓L復„平姓】移„府於與良中村,居之

實盛國之二男應仁二年襲」封改 惟宗

彥七 刑部少輔

家臣宗信濃守盛家妻

享德元年襲」封

刑部少輔

家臣宗右衛門尉盛弘妻

彥次郎 於春日山,與„„兄盛國,倶戰死

熊松

彥四郎

爲成職之嗣;

盛俊 助六 能登

春日山,與„大内兵 戰而敗死

父貞茂授 豐島 爲郡主於 肥前國

刑部少輔

削髪號 昌永i

刑部少輔 讃岐守

按隈府宗系圖重尚作三種國,寛元四年九

月率」兵討 阿比留對馬守親元 始領對

馬國,正元二年七月二日死種國 之子助

國弘安四年蒙古襲來之時苦戰而死氏族

建祐於濱汀,祀„高島大明神

チ

及親族家臣戰而多死」之葬下縣郡佐須鄉

小茂田浦 後國人建」社祟引祀師大明神

テ

文永十一年蒙古來犯 對馬 戰國府 十

月蒙古高麗兵船九百餘艘寇 小田 助國

實知宗七男

|助國

右馬七郎 右馬允

|助國 爲兄重尚之嗣

甲斐六郎 與、兄同於 小茂田,戰死

越前五郎

荒四郎 後爲時宗僧 名甫鐵,

某

與三左衛門

重尚授 湯沐邑

-盛明

-盛國

-經茂

某某

三八七

右馬助

彈正忠 稱 中村,後改 宗香

英時 英特敗死經茂從貞經有」功元元

年五月足利尊氏自鎭西歸京之時從」之

於攝津國和田岬, 破 大敵 尊氏授 二引

兩紋 補 九國侍所 經茂天資驍勇世稱鬼

刑部

元弘三年五月少貳貞經大友貞 宗攻 北條

薙髪號 宗慶

彥次郎 刑部少輔

乾元年中襲」封

右馬頭

右馬次郎 於 小茂田,戰死”

文永十一年繼; 遺領, 弘安四年蒙古又犯

對馬,遣_國兵,討」之異賊猶寇 筑前,雖

然至„八月,遇„暴風 賊悉溺死

右馬太郎

-知宗

-知盛

肥後文獻叢書第三卷

諸國記載 我國之.

皆其頃事也時代懸隔矣

宗

從一位 太政大臣

忠盛之長男

忠盛以上大

【橋系圖載」之

從三位 權中納言 清盛四男

文治元年三月壇浦戰入」海而卒

鬼王丸 惟宗判官 知盛之三男

母宗判官信房女

重尙

元曆元年知宗年僅一歲在 長門國根緒城

文治元年源平之亂平氏敗績及生根緒城陷

家臣齊藤兵庫頭命乳母惟宗密抱去

地後乳母往〃筑前蘆屋投 蘆屋某 乳母

云攝津國人妻也爲」夫被、棄無_賴所 希爲

婢而育 此兒 某憐扶一之, 二年鎭西奉

行武藤資賴赴,太宰府|途見兒之不凡怪

テ

一某

11

ヨリト

文永十一年與蒙古 戰小茂田,敗死

右衛門三郎

下野次郎

退ǹ居與良鄉内山,後移,豆酘|

房之家號 稱」宗弘長元年讓家於弟助國:

寬元四年襲,封爲|對馬島守護,冒, 外祖信

彌次郎 左衛門尉

所」按皆齟齬今從:本家系圖」

カル

按隈府宗系圖知宗作氵 知邦,双乳父南備

後守惟宗懷」之遁而竄,于山林 後遊事

原田種直, 宗家號者宗像大 明神之神夢

問„乳母乳母告以 其實 資賴駭日是吾故

人之子也乃伴歸」家撫引養之時避源氏之

難,冒„乳母姓¸稱„惟宗判官,其後資賴與

筑前國宗像御牧嘉麻志摩肥前國神崎豐前

國企救等郡内,掌 太宰府之兵,居 宗像赤

馬城,別居在 太宰府 是謂 北殿, 也寛元

四年三月對馬島平鎮西奉行武藤資能,

授 對馬地頭職,

ルニテス

-貞高

貞康

貞一

其後尾州中島海邊之賜正嘉元年巳六月

十一日病死本蓮寺法名妙榮家紋用茗荷

作云々

——定省

按大橋家傳及系圖寫„之於錦囊 其

爲」書也有不」可信者貞黼 三十餘个所

地 或通楨錫

半國, 等交 可、考載 白石紳書, 者原 本出

何書乎雖」略却而可」信故併書爲„„考訂

之便,

-貞元

1

一定條

大橋

民部大輔

貞憲

太郎左衛門

或稱 二階堂】

一定雄

修理大夫

系圖嘉祐二年流 伊豆國加茂初島, 然自

曾祖通貞死正嘉元年,二十二年 前而時代

ニシテ

スニ

犬牙故不、取

太郎左衛門

太郎左衛門

貞淸

太郎左衛門

新撰事蹟通考卷之二十五

三八五

按系圖無政重,國志略貞一後改,氵　政重, 然貞

一鎌倉將軍之時人諸國記丁亥 皇朝應仁元

シテ

海東諸國記曰政重丁亥年遣,使來賀觀音現像

先亅 此再度救 我漂流人 書稱 肥後州大 將 軍

大橋朝臣政重1

寺井家記日近江國淺井亮政之臣大橋安藝守此

末裔也

仕 近江國佐々木家

大橋善次郎 安藝守

亨祿二年七月十一日死

長門守

後住 常陸國】

-定庫

長門守

修理大夫

仕,大塔宮,广元中元年於"尾張國:死

參河守 後號 入道武藏坊

元德之人

譯したりける賴朝公大に御感有て抑此

兒は文珠菩薩の再來にや知恵と云容貌

と云類すくなく覺たりいかなる者の子

なるそ何にて望あらは叶へしと仰

けれは我身別に望とても候はす只一つ

の願候と申∞敢す泣居たん賴朝公あや

しく思食何さま此兒はふかく物をお∞

ひ入たる氣色なり何事の望そや賴朝

身に及ふ事ならは八幡∞御照覽あれ叶

へしとありけれは見は泪をしとめ

なく申けるは某父は筑紫肥後國に

て大橋左衛門貞經と申者にて候貞經を

召下されし時某はSまた胎内に居候へ

は父か姿は見す候へと餘らなつかし

是迄參たりしなからへて候は、

一度御あわせたひたまへとふしまろひ

てそ泣居た頼朝此よし聞食さては貞

經か子にて有けるよな大橋は重罪の者

なれとも君子に二言なしとて左衛門を

召出し摩仁王丸に賜り貞經叛逆の∞の

肥後文獻叢書第三巻

白石紳書日平姓大橋民部大輔同修理太

夫同三河守等定理欧米町に出す時確川子

米田求政秀家人亡後細州群に住して

米田將監は求政か子 蘘荷之紋用候

事は大橋太郎通貞號中將母は鍋屋莊

司娘肥後國人文治二年肥後大橋城陷る

于時貞經妻懷妊而當七月也往鍋屋館產

一子號一妙丸七歲之時登山寺自名中將

讀經不怠旦夕悲歎父貞經之行衛十二歲

之時至于鎌倉扶父侖舊領安堵而再興廢

歸於鄉偏可謂大乘妙典之功力諸人羨

なれは十二年まて土牢にいれかきしに

かゝる不思議の事に依て命を助た法

華經の功徳言にのへかたけれは一は妙

典に對し奉り一は見か孝行を減して所

顔をあたへんとて左衛門親子に肥後國

半國を賜り御Sとま賜りけれは兒は大

によろこび父と共に國に下り母に逢行

末永く榮たり大橋左衛門尉通貞といひ

けるは此摩仁王丸か事なりけり

しれては忽に命を失ふへしみつから金

吾殿にわかれし後淵に身をしつめん

とびしかと和殿に心を慰てかひな

き命なからへてありしに思ひよらさる

事とやかのうましとありけれは摩仁

王丸また押返して仰にては侍れとも父

の御行を葬る母の御思をやめんか

爲に候そや其上佛孝行は萬の功徳に

まさるとやらん經にもとかせ玉ふなれ

しわ

しけりたいのる事とては父を一度相

見たきと理世安穩後世善所とはかりか

きくときてそねかひける十二になれる

頃餘りに父の戀しさに尋ね見はやとか

もひ母かもとへ立歸りあわれぬかはく

は某に三年の暇をたひたまへ鎌倉へ登

戀しき父に參合御供申下らんといふ

母は大に驚きてそれこそ叶ましき事な

一日二日の旅路ならぬにたれをたよ

りにたつぬへきたとへ尋行たりともあ

事は不定なり其上大橋何某か子と

歳そかさなくとも死生もいまた定らぬ

父を 候はすは神明佛陀にくしと

おほしさるへしまけていとまたひ
玉へとかきくときて云けれはとむると
叶まし體を見て其儀ならは心にま
かせよと許けれは摩仁王九大にて
の形に出立中將と名を改め乳母子の松
若と云∞の一人を召具して鎌倉に登り
鶴岡八幡の寶殿に詣つい心中の祈願を
相述戌の時より申の終りまで法華経を
そ読みける共産寶殿にひき渡てよに
殊勝にそ聞ゑける参詣の皆咸涙を
流しける此折節頼朝の御所ひそかに
参詣ましくて隙にかわせしかあま
の殊膠に思食しけれは彼兒を召出し
御心見に法華經の功徳を問せ玉ふに其
啓明かなりけれは御蹄館の御頼朝公に
かくと語らせ玉へは不思議に思召やか
て御所に召され法華經の内にて御不審

の條々を問はせたまふに悉く即座に訓
三
しれさりけん貞能か子貞經は貞能上洛
の砌鎌倉殿に降参しけれは世しつまり
て後本領の内三十餘个所を賜り御家人
の列に加へらる貞經か妻は肥後慨住人
鍋屋荘司の娘にて美女のきこえ有しか
は十三の歳むかへとり年比相馴しか
∞子一人もなかりしかは夫婦ともに是
を悲み阿蘇山の観世音にまうていの
けるにほとなくだならぬ身となり
けれは貞經か悦斜ならすとそきこへけ
るかゝる所にいかなる者の讒言にや貞
經謀反の企ありと訴けれは源頼朝御憤
あさからす文治二年三月四日梶原平三
景時を討手として指下し大橋の城を責
させられけるにもとより無實なりけれ

は何の用意もなししはしは防き戦ひけ
れともやみ々々と攻落されて貞經は終
にからめとられけん景時生捕を引具し
て鎌倉に赴きかくと申上しかは頼朝仰
けるやうは只今首を刎むつれと思ふ

仔細あれはとて梶原に仰せて松葉か谷
の土の牢に入られける貞經の領地をは
梶原に給のける貞經か妻は乳母かゆ
ありて薩摩に落行うき年月をかく
りけるに月重りて男子とまうけて仁
王丸と名づけすてに七歳になりけれは
同國大御堂と云寺につかわし手習學問
させけるにとなる見と摩仁王丸を
ゆひさして父なしとそ呼にける摩仁王
丸かさな心におもひけるはけにも人々
は父あり母ありなとわれは母はあり

て父とてはなきやらんと不思議に思ひ

やりて立歸り母に逢て尋しかは母は問

につらさの餘りなからかくすべき事な

らねは其あらましを態にかたりつ

經の書る大橋の家系幷に文とも取出し

て見せれは唯今ありつることのやう

にふしまろびてそなきけるか何とか思

けんいそき山寺に立歸り家へ∞ゆかす

法華經をよみしかは一部始終をそらん

三八二

-貞能

家貞

-正衡

-貞光

家房

右衛門尉

從四位下

正盛

因幡讚岐筭守

貞經

正四位上

清盛

伊勢備後等守

筑後守

通貞

保元元年奉˝ 勅來而檢引注肥後國¸Š院

物語

按大系圖爲„„正度貞季籠季能有記

貞,今從 大日本史

｢作三季房, 其子家

從五位下

筑後守 肥後守

タシム

養和元年八月任„肥後守 討„鉽西之反者1

壽永元年攻 菊池隆直於菊池郡雲上城 隆

直食盡終降„貞能,二年六月貞能定 鎮西

而歸,京師, 平氏亡盡後逃去削髮更¸„ 名以

典,因 宇津宮朝綱 乞」命賴朝赦 之稱 肥

後入道至 常陸國那珂郡苦 村 結 草庵

は桓武天皇の皇子葛原親王より十二代

の後胤筑後守家貞か孫にして肥後守貞

能か子なりはしめて肥後國の代官と爲

下向し此所に住しより大橋とそ名乗

ける貞能代に平家歿落せしかは貞能

か舅尾張國住人原平太夫高春か許に隠

れ居て後には剃髪染衣の姿となり終所

一

大橋家傳に云文治年中に肥後國大橋と

所に大橋左衛門貞經と云人あり先祖

正嘉元年六月十一日死年七十二法名妙榮

號 本蓮寺 1

ス

太郎

一妙丸 中將

平氏沒落之時降 源氏 源賴朝賜 本領之

內二十餘个所,住肥後大橋城,故蔿 號

大橋城在 山本郡山城村,

大橋左衛門尉

閑居以終云村史

シテテフト

右合志系圖有:本校ñ合諸書,而寫」之

千町,手鑑爲」書可」疑者也

赤星隈部其外相良名和小代等皆領地不」過...

國志略引大津掃部助手鑑合志領內一萬六千

町永祿八年丑五月五日勢揃之騎馬百五十八

疋但安藤氏馬除」之步行共合二千人御幕內

之御公方井病人除」之今按合志一郡田數有

四千百十二町」邸二千九百四十町餘,

秋田一千頃化叶仁阿齡菊池大臣城

右一帳神領以下之配分而藏入分書記

無、之

田畑揃畝數合四百四十六町五反四畝

以上

畑五十六町三長

田十四町六反

內

上莊下莊竹迫近隣之能組中其外四

月十一月兩御神事田共

田畑七十町九反

右銘々名前畝數等有 小割書,略」之

人數大小百五十人

肥後文獻叢書第三卷

請銀三十一貫

新撰事蹟通考卷之二十五

系圖之十三

大橋

桓武天皇 -葛原親王

從五位下 上總介

||高望王

賜„平朝臣姓i

常陸大鎮守府將軍

後改, 名國香 |

1

從四位下 陸奧守

一貞盛

鎮守府將軍

從四位下

正度——

陸奥守

木工頭

三郎大夫

常陸守

正五位下

仁壽三年薨

一品 式部卿

-高重

後爲」僧名"道玄,與,一專 於氵 同所,戰死

孫四郎 常陸介 伊勢守

始名隆重

天正十三年九月島津部將新納忠元河上忠

堅等來攻 竹迫城,同月三日高重逐降」之

薩軍捕 高重 歸氵 薩摩 幽 于羽月二十

同十四年四月二十五日義久遣人殺」之

宣頓寺跡有石牌 銘日天一清居士慶

長十四年四月二十五日合志伊勢守源高

重其脇下山北五右衛門 山北者合

志家臣也此年建之

11

菊池郡姫井村管内有」墓其碑銘表 合志

伊州太守經譽一哲居士元龜四年癸酉五

月一日往生裏天正七年二月日造立合志

紀伊守皆不亅書„實名

菊池郡伊萩村管内有」墓其碑銘 中央大

賓一尖居士右合志丹波守藤原重遠左于

▲時 天正二年四月十日一本系圖重遠實

菊池肥前守重安之子也 合志高爲養

新撰事蹟遍考卷之二十四

繼非

畑二百三十三町七反四畝

三七九

田七十町七反三畝

内

家中侍中坪付

配分

右寺院庵等小割書有之略

田畑三百四町四反七畝

田二十四町二反一畝

畑二十七町六反九畝

内

田畑五十一町九反

寺方

畑十町三畝

田九町二反四畝

内

田畑十九町二反七畝

竹迫上莊村民家傳, 合志家寄附 之神領

寺領家中領知之一帳,略一記于左,

社方

子:重遠早世故叉養親爲¸¸嗣然親

之致仕永祿十一年以前而先重遠之死

年代犬牙矣叉重遠姓藤原可」疑也 附

書備 考

-親

高

肥後文獻叢書第三巻

明存坊律師

天正五年八月二日於 山鹿郡長坂城,戰死

兵庫頭

大永三年二月四日死法名道空

伊勢守 藏人大輔

始名親賢

1

トモ

按諸書始爲 親爲,後改 親賢 然永祿十一

年記„親賢 天正十年前後文書書親為,故

今從」之叉始為藏人大輔,後爲„„ 伊勢 守

誤也子隆重受」讓改 伊勢守,親爲稱 藏人

大輔

實赤星重隆之二男也

永祿十一年以前讓 家於隆重 致仕-

天正十三年九月島津義久遣」兵屠竹迫城

親爲爲〳擒赴氵　薩摩 十月歸 合志 十九日

於八代郡小野 病死韻誌熗躪竹

-親重

按國志略日八代郡大野高 塚城東有 古

墳俗謂 伊勢殿墓叉孝子塚,孝子卽合志

隆賢

兵庫頭

奥長畛 戰死

後爲」僧名_一專,天正五年八月於‶長坂城

隼人佐

牌, 元龜三年又諸寺立 供養塔婆,二說

未、知 的從」

碑| 國志 草稿是皆逆修而宣頓者親賢之
法名也或云宣頓者高人之法名永祿十一
年親賢爲其追福 建 宣頓寺; 安i置位
記及上綸旨等文書,不」足、取而已
而疑親為之墓然則小野者大野之訛也或
云相良家臣東掃部助父曰| 伊勢守| 爲
高塚城主」乃此人之墓也未」知:孰是
住吉村宣頓寺跡藥師堂有:古位牌 其銘
金性寺殿日頭宣頓山主永祿十一年戊辰
八月吉日前合志藏人大夫親賢叉其境内
有 石碑 銘曰日頭宣頓山主元龜三年八
月彼岸合志藏人大夫源親賢竹迫醫音寺
天臺宗號 護法山城就院雖壽亦有, 同銘之

伊勢守 岑峰并用今从墓標銘
隆岑
藏人少輔
-隆直 掃部助 永正二年連署誓書有」名

11

按一本隆眞酸作 三重基之子而隆峰

之父 1

合志-隆眞

丹波守

隆基

合志藏人助

合志近江守

-滿家 古莊內記

-滿政

古莊新右衛門

-安重 牧民部允

-安滿

牧右馬允

爲宗

重宗

穴保田大和守

穴保田式部允

連署誓書有」名

兵部少輔

兵部少輔

惟淸

十四人連署之盟書,其内載, 藏人少輔隆

岑墓銘灭可』疑也研究無據叉國志略

隆岑墓在 住吉村廣勝寺,哈维今見

碑銘 誌 前藝州太守友譽廣勝居士亨祿

四年辛卯三月二十七日, 非, 隆岑之墓,

盛高 土佐守

-隆房

-隆成 隼人佐

三七七

永正十六年九月七日死法名道悅

藏人 參河守

出田刑部允重綱妻

赤星安房守武規妻

11

按隆岑遷 竹迫城古城主考等爲,, 永正

年中今據,,碑銘則永正以前也然又阿蘇

家有, 永正二年 十二月菊池一族家臣八

竹迫城東北向、山有墓碑銘曰永福寺殿

天宗桂室居士永正元年甲子天二月五日合

志藏人少輔伊勢守隆岑

受..竹迫公種之讓,遷 竹迫城 自、是代々

爲„居城,領„合志郡,

隆 門

行やらてみるや橋守波の月

合志藏人佐

橋

月橋

萬句連歌有」名

11

祭 文明十五年十二月二日死法名宗西

門剧就在坡住吉社 始1

, 二季

是謂„„隈屋形】 自:長耦,至隆.

八月移居之

村之内,

康正二年建„飛隈館 在维洁-隆門

藏人佐

-高冬 平川與三左衛門

隆朝

女 鹿子木民部允員長妻

平川刑部少輔

女 瀬田新左衛門惟冬妻

法名道仙

-隆袜

五郎左衛門

女

村

元中四年八月修造日羅山橋田寺】超齢橋明

寺在 合

法名靈峰道忠

武宗 嗣瀬田武光之家

五郎 四郎左衛門

重隆

法名惠願

妻赤星重規女

文明十六年八月修, 住吉社, 同年築, 古

池上城,徙凱居之,是稱 住吉城:

萬句連歌有｣名

月葛

合志五

ふくる夜の月をもかくせ眞葛原

一高久 弘生式部少輔

穴保田民部左衛門

||高冬

瀬田兵部少輔

武光

瀬田兵部少輔

武宗

實隆門之子

瀬田新左衛門

惟夏

永正二年八十四人連署誓書有」名

重隆

新撰事蹟通考卷之二十四

|定實

五郎 刑部少輔

·隆道 眞木太郎

隆敏

太郎左衛門

女 阿蘇某妻 惟衣室,非也

系圖作 大宮司

僧 了快阿闍梨

-僧 別源和尚

以來長綱以前之舊家而與佐々木 爲

[別家】考 小代文書等 從 足利家 爲

三一方之豪族 小代等皆屬 其手下,然

其家所」 出不」詳惜哉然則此家亡而後

佐々木家改而稱合志,乎自„„長綱

11

屬:合志太郎手 張栩峒代叉於:合志城,

遠 警固 云々又阿蘇文書正平五年三

小代文書小代重峯建武三年九月

月惟澄申狀押- 寄凶徒合志能 登守幸

隆所„楯籠i 之菊池陣城」云々是鎌倉

隆亦佐々木家而定實之傍親之人三七五

鑑峰

四郎兵衛

-義道 小足刑部允

西林軒玄憐

年十二月草創也水石幽勝之境地也

菊池郡正觀寺八世之住職飽田郡成道禪

-僧 寰中元志和尚

定重

小足三郎左衛門

女

甲斐伊豆守武鄉妻

式部丞

隆冬

太郎

歟今無

、所:孜質1

ナルカ

按幸隆定實大略同時代而同稱,合志 幸

グナノル

菊池傳記

延文五年十一月與菊池武光 戰„于鞍嶽

不 勝降 武光¸ 應安七年又屬, 足利義

*

傳記

法名道專

泰高

高重

重綱

|高綱

秀義

——經方

義經

肥後文獻芳書第三卷

兵部大輔

按義大系圖等作」章今從,大日本史

從五位下

佐々木莊司

秀定

-時長

兵部丞

號 惠淨冠者】

佐々木源三 兵衛尉

-長綱

元曆元年死年七十三

四郎 秀義之四男

備前安藝守護 左衛門少尉

後薙髪居 高野山

太郎

建仁三年山門之戰討死

四郎

左衛門少尉

四郎左衛門

其壽可以踰„百歳,疑有 年代之誤, 今

不.可以考姑從„ 舊文, 叉合志川芥有

異說,不」足」採故不」書東鑑治承五年

二月有:肥後國合志太郎 蒙古襲來

戰繪詞書弘安四年合志太郎十六歳又

ラン

按自 正應三年 至 應安二年,八十年

11

正應三年三月淺原八郎爲頼之亂長綱爲

=其黨 故逃 叡山. 倚 延暦寺座主法燈

僭正 匿叡山肥後合志郡有,延暦寺1

座主密遣 長綱 爲 寺領奉行; 延元二

年八月來居„合志郡真木村,因改 家號

爲‟合志 應安二年七月六日死法名念

葬 圓滿寺嗪

四郎左衛門

法名

道念

次郎左衛門

六郎

法名眞西

五郎左衛門

三七四

-公種

|正種

秀種

-種次

某

·師實

左馬助

刑部大輔

昌種

師光

刑部大輔 剃髮名 道休.

(時字脫嘶)

元弘三年北條高時沒落之刑部入道道休

自殺

敦實親王

筑後介

備中守

定種

右京大夫

右京亮

行種

駿河守

日向守

-雅信

重種

寛正四年三月死

筑後守

左京亮

忠種

永正二年死

扶義

駿河守

永正大永之間從 大友家移居豐後國,

一成頼

日向守

#近江源氏,

一流祖也

兵庫助

參議

居 近江國佐々木莊,因爲〃著姓,子孫又稱

左大臣

稱 一條左大臣;

賜〃源朝臣姓

宇多源氏

從一位

正曆五年薨七十四 贈 正一位

宇多天皇第八皇子寬平七年爲 親王】

歷:中務卿式部卿 叙 一品,天曆四年

爲」僧改┐名覺眞, 康保四年三月薨年五

十五

右竹迫系圖無 類本 據 家傳引合之,

合志

從„„立花道雪,住„筑後國, 以來代々

立花家,其裔孫竹迫權右衛門直種 寶永

三年記„竹迫暘山王社錄,

-親家

肥後文獻叢書第三巻

布治丸 作十郎

|親次

式部少輔 左馬允

|親乘

仕加藤清正領 祿二千七百石餘,忠廣

除、國時去 肥後゛ 浪 居筑後柳川 寛永

十五年二月島原之役從 立花宗茂之軍1

被」創歸陣之後改名左馬允,三月十日

奉, 仕忠利君 始而拜謁四月四日再發

【創死法名道安號„蓮乗院

中原師員

按南關記曰三池上總介鎮照妻大津山

資秋入道湖春女也天正十五年爲秀

吉 被」沒收所領, 同十六年三月於

下內 病死其子式部少輔仕 加藤家

南關紀聞鎮照三池親元之二男也長子

親貞以〃母賤不 嗣立,不、知 就是今

從〃家系圖 叉菊池傳記 三池壽林善

和歌,與〃大津山湖春 齊」名九州記天

正七年有三池鎮實 皆系圖不載」之

故附記

竹迫家傳曰師員建八年中補,合志郡地頭,來

今ļ褲 後上莊原口築城瑯, 住

今謂陣

二子村二內 師能

師常

竹迫攝津守

右京大夫

上七社, 家傳

从竹迫家傳

竹迫或古書作〃〃高羽 或爲, 高波, 然則建久中非」改」之然無

他考證 今貼 正治二年三月建原口村山王日吉

11

故改. 在名, 謂„ 竹迫輝種, 今略曰:竹迫,也

國志略改 家號實名,曰:竹迫攝津守輝種不知 孰是 又

此也

上莊日 日本城

居中原親能之四男

大膳太夫 攝津守

竹迫

家藏 寫、之

右古文書其餘多有」之皆傳„于家 系圖亦以„

角左衛門 源十郎祖

善太大

四郎平祖

作十郎

左兵衛

三七二

|親

-賴親

法名心應

自師員至貞元 姓 中原 賴親以來改

爲 藤原姓

三池助太郎賴親申軍忠事

上總介

三池中務少輔殿

法名融永

吉松丸

十郎

親貞

正平六年六月二十九日馳參肥後國肥

原而同十月一日關城御合戰之時以親類

若黨等攻入于當城西城戸口分追落之次

第御見知畢其後供奉于筑後國溝口城分

在陣于瀨高上莊而警固畢早任傍例賜御

判爲備後證粗言上如件

死年二十三法名融俊

千代丸 民部少輔

法名融

千代松丸 源十郎

一親照

正平六年十月十八日 藤原賴親判

上總介

法名融幻

承了判

千代松丸

左京亮

進上御奉行所

親盛

上總介

中務少輔 始名泰親

龍丸

源十郎

法名融圓

1親員

彈正少弼 上總介

筑後國國分寺内河崎分事爲兵粮新所預置

也早守先例可致其沙汰之狀如件

益千代丸 式部少輔

應永五年十月二十九日 右兵衛佐判

死年五十七

新撰事蹟通〝卷之二十四

三七一

法名融雄

上總介

日馳參長州赤間關候以此旨可有御披露

安藝助太郎貞元引率一族等去月二十七

法名心瑞新元

貞元一

貞元

助太郎 兵庫介

承了判

建武三年六月日

右去四月二十三日自長州赤間關御出之

時分分供奉去月十六日筑前國下座郡筑

後國鳥飼合子合戰之時馳向菊池武敏以

下凶徒等捨一命抽軍忠上者早賜御判爲

備後證龜鏡恐々言上如件

欲早任軍忠給御判備將來龜鏡事

安藝六郎藏人入道寂順謹言上

剃髮號 寂順`

家

六郎藏人

貞-貞政 左近大夫

三池木工助入道殿

制

建武三年三月一日

肥後文獻叢書第三卷

被軍忠之狀如件

太郎

女 島津大隅守忠宗室編律

三池兵庫助殿

四月二十七日

制

節之狀如件

觀應元年直冬誅伐之事早分發向彼在所可致忠

九月二十八日 武藏守師直判

三池一族御中

凶徒蜂起事有其聞之間差遣仁木次郎四

郎所也急馳向彼所可致軍忠之狀如件

建武三年四月二十日 判

兵衛佐殿被落下九州の由其聞候就之自

將軍家被下御自筆御書之案文進之候若

被餘手事候者任法可有計沙汰候只自關

東近日御上洛候間重可被仰候也恐々謹

言

御奉行所

進上

建武三年中原貞元

三月六日

候恐々謹言

五丁反

下地しんたいの立用

田地五十七丁九反一丈内

給主持立用

筑後國三池南郷内三丁二反四丈

一三男六郎くら人貞家分

二丁反三丈 てかまの村川口の

九丁八反二丈 下たくまの村

畠地十二丁内

五丁三丈 下地しんたいの立用

十二丁□□祖母一期の後知行分

田地六十六丁二反一丈内

給主持立用

肥後國鹿子木西莊内加納村田地十八丁五

反三丈同庄内田地の二丁同つゝら山

いま加之筑後國三池南郷の内五丁一

反

一次男左近太夫貞政分

土佐國田村郷之内筑紫分

筑後國竹野東郷得同金丸兩名

菊池以下凶徒爲誅伐所發向也相催一族可

三六九

安藝木工助殿

建武三年二月十七日

判

院宣也早相催一族馳參赤間關可致軍忠か

恩賞者可有沙汰之狀如件

可誅伐新田義貞與黨人等之由所被下

髪號道喜

貞鑑

木工助

元亨四年二月十三日

沙彌道覺判

右處分のむねをまふり坪付”まかせかのお

のしゝそんくにいたるまてなかくちきやう

すべきものせきやうとくわんとうの御公事に

おいてはそうやうのしはS”したかい田數

の分限にまかせてきんしせしむへし但面々の

配分の外はそうやうちきやすくし仍處分

狀如件

二丁三反四

たかいつみの村

五丁六反一丈

ひらの村

畠地八丁内

母一期の後知行分

八丁

而死故其子鑑員相嗣而爲主氵 隈本

離,領地,寄 城氏于身,終」世併引考右

諸說及阿蘇古老日記圓德寺位牌銘甲

斐宗運之書翰等親俊天文九年先

11

九州治亂記寂心爲,大友家,遭 勘氣,

故讓,,城於城親賢,親賢者寂心之智也

11

木親俊屬 大友家,因」有:親族之好

讓„隈本城於城氏,移,上代城,國志略

日天文八年讓 城氏, 又日寂心無、子

九轶 國志草稿日 天،文二十年鹿子

防守,遂逃」城而走 肥前島原 事

キルコーチ

池義武˵ 謀」復 菊池家˵ 據氵 隈本城,

作」亂大友宗麟遣.兵攻」之義武不.得

有」說菊池傳記作„親俊,非也

擁立菊

ニルハ

小代文書大友宗麟之書爲參河守下

按 天文十九年八月田島某鹿子 木某

ルニ

日圓德寺一清寂波大禪定門天文十九年

八月十五日逝其背日鹿子木次郎鑑員

¸災甲斐宗運賜 甲斐親英狀中啯数系。

全女載 子

鹿子木寂心之孫鑑員惡行人故被」刎,首

-員俊

-員致

同鄉之内祖母一期の後知行分田高等

筑後國三池南鄉内田畠地頭職

肥後國鹿子木西庄下村地頭職

一嫡子木工助貞鑒分

處分 道覺所領等事

所藏文書

剃髮號„道覺i

三池木工助 安藝守

無」幾寂心亦病死家絕乎其他校合無

▲據不得取決‹聊附氵 私言備、考而已

三池安藝守

シテ

セシナル

子木某,而不」書」名不知」爲」誰然則

天文之末弘治以後諸書無-載,鹿子木

氏, 者,唯天正八年旦過瀨合戰有, 鹿

武於我城,集｣兵將､興 菊池家 不遂

而兵破城陥終爲,, 祖父寂心, 被｣誅雖

､然寂心亦為,大友家,所擯斥讓家

跡城地於城親冬10點也

作̏ ̏ 親賢

城,十九年鑑員與,田島等,籌而迎,義

マサニ

三六八

-親員

重能

重員

-朝員

貞員

近江守

陥､之菊池傳記

民部大輔

武員

民部少輔

攝津守

攝津守

九郎

參河守

兵部少輔

文明十三年八月萬句連歌有」名

剃髮號„月舟寂心,

亨祿二年修 藤崎宮, 天文 十一年六

月依:親員之奏請,下┬賜藤崎宮勅額,

輪酯 後讓„ 家於親俊,避 世塵,而引

寓飽田郡柿原城¸志至天文十九年

尙 存 大 玕䫻淙運送 甲斐

*不」知』其終所,

親俊

詠 月舟之心,歌

乗せて行のりてゆくとも芝舟の

寂心善,和歌,文雅有」名飽田詫磨山

本玉名四郡之内五百六十町餘領」之

始居 飽田郡楠原城,後遷〃隈本城,

-鑑員

新撰事蹟通考巻之二十四

心の月や夜半の秋風

三六七

飽田郡柿原村圓徳寺跡草堂有〝位牌,銘

次郎

老日記

阿蘇古

居〃隈本城¸嫌搏天文九年先、父病

代々仕 菊池家,親員以來從〃 大友家,

民部大輔

親英i狀-詳亍下1

ゆかんとのありかに自

九月三日 立出したひの衣の日∞くればかへ

月舟寂心居士

、心地全萬々及千々

大永八年猶盡世間見惟靈在自然

雲岩寺前住悟叟

略古城主考〇移隈本城,年月無攷據古城主考隈

本在城四十四年遡」自——天文十九年,當:永正四年1

大永亨祿比全盛之人也靈巖洞左岩壁

彫 逆修之銘,其次日

書博士

-師俊

大學頭

迫家之祖系在 于 .

1

-師能 竹按師茂之子師員同時同名疑爲,,,, 親能

之養子類歟今無」所以考

11

攝津守

·師員

大膳大夫

親直

-能直 大友家之祖系在于別

一季時 淵名駿河守

文治元年十二月補 石清水別當

-僧 秀嚴 阿闍梨

嘉祿元年六月八日卒年八十三法名學阿

式部大輔大江惟光爲 養子】故姓 大江,

大膳大夫 因幡守

-廣元

正四位下

系圖

三池

後國玉名郡久重村長田村等地頭職,

肥後文獻叢書第三卷

-員時

貞經

貞基

大平合志竹迫城」作貞照,非也而

·

助所 記》

等奉,足利直冬,爲」將攻-鹿子木大炊

正平四年九月河尻幸俊詑磨別當宗直

大炊

鹿子木兵衛

三池三郎

爲„肥後飽田郡鹿子木莊地頭職,因以

鹿子木次郎 兵衛大輔

爲家號

始„居肥後合志郡竹迫跟後徙„三池,自

是以三池∪爲„家號

.

員時鹿子木系圖等皆作 師時, 今從三三

池系圖

11

周防守

三木工

池太郎

補 筑後三池郡地頭,因來 任所,

安藝守 法名寂智

三六六

新撰事蹟通考卷之二十四

貞親

-師任

正五位記

下

從四位下 大外伊勢守

-致時

從四位下 大外記

從四位下 始賜„中原姓

有家

治部卿 伊勢守 大外記

-春宗

少外記

彥命之後也

尊卑分脈日安寧天皇第三皇子磯城

太宰少典

勝良

從五位下

鹿子木 附三池

系圖之十二

新撰事蹟通考卷之二十四

-廣宗

-忠順

·師員

廣季

|親能

寂忍西掃入本弑暕 賜 筑後國三池郡 肥

鑑大友系圖

三六五

式部大丞 掃部頭 薙髮號 寂忍,

親能實右兵衛佐藤原光能之男外祖中原

廣季養爲」子以故姓 中原,仕 源賴朝】

爲,評定衆,後因"賴朝之命,復 藤原姓

承元二年十二月十八日卒年六十八法名

正五位下 一院次官

明經博士 大外記

從五位下

建長三年六月二十二日死法名行巖

大膳大夫 攝津守

師

助教

直講

博士

廣忠

從五位下

從四位下

大外記

天文密奏

三大平城,徙」之天正十五年冬賴,小代親

泰匿,,石尾城又據,,牧野城,十六年四月

安國寺惠瓊密議氵 鎮照臣古布志呂 離

オヒラ

佐々

永祿九年生分,,,,領南地,主ņ內村城,後築

備前守攝

日鞍房之書,

十六年三月鎭房於三筑後柳川 被伏誅

玉名郡山北西安寺有.. 天正九年四月十三

タリ

11

領,其秋佐々成政攻,,,隈部親永親泰於山鹿

記島津家傳

說著三編年考微故略十二年八月終降,島津,

菊池講瀧九州十五年大閤秀吉征西之賜,本

月九年八月二度,

11

【記作 天正六年九

11

十一月島津義久遣」兵攻霜野城,鎭房嬰」

地志略按内古閑傳

鎭房始從_大友,天正六年屬龍造寺,八年

編古城主考内古閑傳記

城君等基貞築」之令从新

肥後文獻叢書第三卷

城固守薩軍不」得拔而

城村城, 時一揆圍„成政之隈本城,成政及

臣佐々宗能分」道還氵隈本宗能過, 山本

郡 鎭房伏,兵於今籐·塹 其歸路l宗能戰死

貞周防守朝誠神十郎運直,皆系圖不.載」之

永正二年連署誓書有 内古次郎 左衛門朝

文明十三年萬句連歌有, 内古閑圖書助賴續,

可」攷悉不」可以信

傳記内古開家臣末葉竹下某所„撰集,其爲

宗久隆出奔道園 天正九

右内古閑系圖得三類書三本 校一合之一

内古閑傳記】

内古閑傳記

城l喜左衛門等, 殺」之年二十三 新編古城主考

三六四

-鎮資

鑑貞

内古閑六代中務大輔佐鎭赴| 津奈木後

11

式部大輔

援,與,薩軍,戰大敗佐鎮 中差矢,謂

士卒,日吾今日決,死於戰場,欲、乖,

名於後世,汝歸而宜」納,此矢於嚴島宮

寶殿,且詠,,和歌 日繋置駒乃 手綱於引

立氏名譽乃太刀遠内古開也佐鎮遂戰沒家

臣内田喜三左衛門高納,,其矢於神殿,

卽嚴島宮社内建氵 小祠¸祭_佐鎮號 今

宮靈社,云叉或佐鑛作 鐄資,各異矣今

從,,,内古閑記,附ņ諸說,備、考今宮靈社

祭 元祖基貞,也

異本系圖鑑貞作鎭眞

民部少輔

但馬守

山本郡大清水村郊外有、墓其銘曰宗 活 禪

定門天正三年乙亥八月二十七日山本郡主

藤原鎭資其妻慕與,,鎭資 相銘 妙誾 禪

新撰事蹟通考卷之二十三

鎭資死其子 鎭照年 財十歳故鎭房立爲、嗣

一本

*娶„隈部親永女,爲妻 F｛1 本系圖 隈又始基貞欲」移„城館於霜野,不」遂而死

鎮房繼„元祖之遺志,城,于此,内村城在

正院村,謂„岩照寺山城叉聖山小塚山

今日. 城腰, 是也霜野今書, 下野

三六三

按内空閑傳記分,引領地,爲, 永祿九年,同

書又永祿九年鎮照生一書矛盾故 今 從

異本系圖,

居是謂„„霜野城 !系圖

異本

¸及鎮照長¸與„鎭房,不睦家臣亦有‶黨,

鎮照¸者」終將」至…内亂,城親冬 和

分„領地,以」北爲„鎮房之領以」南爲:鎮照

之領,因而鎮房新築„„ 城於霜野權現嶽 遷

部

或作 大津山家女

ワッカニ

實鎭資之弟訥沽閑傳記爲三隈部親水二男, 或又作,

資妻之弟,令從 一本系圖及古城主考1

11

11

權少輔

式部大輔

定尼天 正三年乙亥十二月二日,

-爲載

基貞

11

肥後文獻叢書第三卷

明德元年庚午六月避,,伊賀來, 此國,屬來

池武朝,武朝授以,山本郡地,惟駐百因而

居 山本郡內古閑村,改,,家號,爲,,內古閑,

後改 內古閑

永亨四年十月十九日死年八十五後 崇, 今

宮靈社,祀,,嚴島社內

按國志略基貞永仁元年來住 內村內

霜野雜記後嵯峨帝朝下向改 _ 内空 刑

部大輔元重 1作 基鎭 諸社集說

11

1國訓相同

基貞文正頃人也或叉爲,延久三年 又應

和辛酉年下向,皆不」同今從内古開記,

叉今宮靈社有„„異說,辨 親貞之譜中,

刑部少輔

文明十三年八月萬句連歌月里之題

刑部少爲載

掃部助

月は世の千里にうつす都かな

親貞

"祀之,而稱 今宮靈社,國志略日或記云

今宮靈社記日内古閑刑部大輔鎭信天

二年於三津奈木,戰死一族内古開鎭資祟

天正二年五月鳩轨推翻 薩軍攻 葦北郡津

奈木城,與 城赤星田島鹿子木等 奉 菊池

家命,赴」 援十九日親貞強戰數合終死」 之

年三十五此日半夏日也至氵 于今 山本郡中

不」引用半夏據之

11

左近大夫

中務大輔

備前守

刑部少輔

永正二年菊池家臣八十四人連署内有」名

高瀬清源寺有 永正四年正月内空閑備前

守重載之奉書:

備前守

三六二

-祐直

家直

家稜

-盛資

三池上總介鎮照妻

河内守

南關

領,三百十二町,天正十三年屬"島津家和

此歳十二月與〃家臣近延某名一字, 有.. 證

書,讀*十五年冬叛 佐々成政,據〃〃神尾城,

成政遣三家入傳七生駒於千,偽許〃其望,約

而會,吉地村淨滿院 蓫殺之 õ怫欄雜記十

六年四月八日於 持勝

院,被､害不」知 孰是

1

佐々傳記南關紀

開〇中原雜記十

藤原實基

信濃守

基載

遁 肥前諫草 於〃大島,死子孫在 肥前,

關右京

-基孝

家稜被」害祐直時年三 家人等抱育 筑

後,後仕 立花宗茂,子孫尚存 南關記讚永頃關

後,後仕〃〃立花宗茂

津山七左衛門

等其子孫也

基之

右大津山系圖以, 南關紀聞南關記,校引合之

1

叉別本菊池經隆之子合志五郎經明其子經遠

新撰事蹟請考卷之二十三

内古開備前守

後改纟 基鎮,

備前守

子

基載之後

基孝之基包

伊賀守

民部大輔

實基三代孫

服部權少輔

以服部i爲„„著姓

補 伊賀國服部莊地頭,居 上野城,自」是

鎌足十六代孫

民部大輔

内古

藤崎一宮太刀銘元國作大津山彈正資宗系圖

不載之

兵衛大津山末裔也

ナト

詳載」之個妄言不.可」信又今關孫 兵 衛關勝

其子次郎經邦爲 大津山祖,代々軍功戰跡等

-重經

|經隆

一經方

-經稜

-經澄

肥後文獻叢書第三卷

善以」故資基屬 足利家,始居 河內國古

市莊,足利義滿授以„肥後玉名郡臼間莊

內,應永二年十二月來三大津山,居„外目

南

明年築〃城於大津山萵

-資秋

村木屋塚1關村

哈鵬 南

嶽,爲〃居城,改_家號¸稱 大津山, 家紋

五段梯四目結也

資冬

河内守

正長元年造〃營熊野權現社於赤 阪,

嚴宮,南關

河内守

掃部頭

修理亮

小野大藏大輔

掃部頭

美濃守

弘治四年五月與, 家臣野中孫七郎, 有”

文書ı 中性朴家藏

南町 野

津山河内守資冬武運長久延命息災當宮司

神應寺權少僧都勢增大願主天正九年辛巳

十月吉日敬白

安引置十一面觀音,其觀音厨子銘大檀那大

大津山明神經棱勸⺡請之,祭 阿蘇一二宮始

在 葉山 資秋遷今祂地畾嶽麓i

大戰家治又敗歸„西肥i‚…

亂麻¸死肉埋深谷於該是資冬開門突擊

菊池傳記

中下三矢石,如」雨攻兵辟易不」前斃死如

コト

資冬始屬大友後從龍造寺,天正七年背

龍造寺,五月與 蒲池鑑廣¸約而破,龍造寺

安房守家治於白鳥陣, 此月家治討„ 資冬

資冬以爲蘁嶽城小勢防｣敵不､宜,便移,大

田黑神尾城,家治乃將,衆來圍而攻」之城

河内守

善„連歌¸與„三池壽林】齊」名色木山構„別

館 隱居之蝻 闕

剃髮號„湖春i

修理亮 始名經真

-親泰

親秀

-親忠

八郎次郎 左近將監 伊勢守

剃髮號_宗虎i

-實長

弘治四年二月二十三日大友義鎮 授 名

·重定

親忠,天正六年從 龍造寺,傾,八百三十

町餘,後讓„家親泰,隱居

阿波守 法名宗松

宮内大輔 下總守

法名宗傳

大津山

永祿十三年五月朔日大友義鎮 授名親

泰,天正十三年七月屬 島津家, 十五 年

秀吉征西之時賜領地之印證」

藤原資名

於肥後國汝本地之内二百町分扶助畢領

地所付上中下相分從成政目録別紙請

全可知行候也

子略之

天正十五年六月二日

朱印

小代下總守とのへ

-時光 日野家祖

十七年仕三加藤清正¸領ņ四千三百九十

六石餘地,整整兩千石实伊勢守分

有,三八月二十八日之證 爲„„ 葦 北郡

資基

蹟铜考卷之二十三

資名之季子也資名有」故與足別尊氏,

三五九

大津山河内守

鎌足二十二代之孫權大納言日野俊光之

以上系

建武五年五月二日薨年五十二

正二位

日野大納言

有三百餘牒,皆傳』于家,

右以„家系圖,寫」之校引合諸書, 古文書

加藤家改易之後很„居筑後柳川, 改名

下總,寛永中奉」仕忠利君,賜 月俸

百五十口 延寶二年正月致仕又更名至

チ

市正 下總

六兵衛

津奈木城代,

-重忠

武弘

肥後文獻叢書第三卷

清源寺文書

肥後州玉名郡高瀬山清源禪寺佛殿修理

田之事本寺領行沼江堺大坪新開田數田

反也右志趣者先考宗繼禪定門今五月

十五日十三间忌之辰也仍爲頓證菩提如

斯聊於子々孫々永代不易就被地不可有

三字許

不分明 之狀如件

相違之儀者也

于時永正十年癸酉 五月十五日

-實忠

藤原武弘判

高瀬

清源寺

刑部大輔

天文九年三月於"木部,戰死法名宗室

今度小代刑部太輔戰死空忠貞無比類候

此等之儀無上之趣分披露候之條至八郎

次郎之儀御書候珍重必以御使者別而

可被成御感之由被得其意入魂肝要恐

々謹言

卯月六日

入田丹後守

不二軒

加賀入道

包裏に

左近將監殿

宗禕判

潤正月二十日

元龜三年

先祖已來悴家相續之文書系圖等隨渡進

之候益子々孫々繁榮之御覺悟肝要恐

々謹言

屬〃大友家, 有』親治義長義鑑義鎮之書

狀數十通,

剃髮號〃宗禪,又稱不二軒,

八郎次郎 宮内大輔 加賀守

淨業寺有」之古墳銘日宗空禪定門 天 文

九年庚子三月十八日

11

田北大和守

巖松軒

西兵庫頭殿

三五八

新捏事蹟通考卷之二十三

應安三年十一月十二日 武藏守源朝臣判

致沙汰之狀依仰下知如件

右爲勳功之賞所宛行也者守先例可

肥後國岩原村婼原孫七事

可分早小代八郎次郎詮重領知

-詮重 八郎次郎

一某 三郎 於 肥前憩引, 戰死

小代文書有..親行之應永十四年五月讓狀,

於"米生¸戰死

-親行

片山越後守

應永十七年十二月三日

肥後國野原莊同國岩原村伊倉莊南方小

原村豐前國安於曾木村等事小代左近入

道宗祐當知行云々領掌不可有相違之狀

如件

花押 同

#豐前國野中鄉内安於曾木村事止方之

妨小代左近將監廣行可領掌之狀如件

應永八年六月十一日

肥後國大野伊勢守跡 小糸村 岩原村

伊倉庄 野原庄

政廣

·泰弘

貴弘

重行

三五七

也日

則文象元年五月十五

於 高瀬,戰死法名宗繼

系圖〇據下之文書,

八郎

有 古墳,銘曰宗棟禪定門天文十一年

壬寅四月二十四日疑貴弘之墓也

寺之末寺號 明向山弘藏院1

所淨業寺 在宮内出目村,淨土宗筑後國善導

双小代家代々菩提

按系圖無„忠弘

左近將監貴弘

永正十年二月十八日

酌千萬爲後日候間染愚筆記

從加賀守忠弘 續相傳之文書之事

今叉武弘江 進所也然者副狀雖爲

法名宗棟

左近將監

刑部少輔

八郎次郎

法名宗三

菊童丸

八郎

-重勝 袈裟丸

守護代

賴尙判

貞和三年八月七日

小代八郎左衛門尉重氏申肥後國野原莊西鄉

三分貳事御下文井 去曆應二年四月四日御施

行如此早任被仰下旨詑磨別當太郎相共莅彼

所沙汰付下地於重氏載起請之伺可注申之狀

如件

野仲鄉司殿

尙康永三年十一月二日 太宰少貳判

賴

小代八郎左衛門尉重氏申豐前國山國鄉安於

曾木村地頭職任御下文井御施行之旨守護代

相共莅彼所沙汰付重氏載起請之何可被注申

候依執達如件

康永三年七月二十二日 武藏守判 高師

太宰少貳殿

小代八郎左衛門尉重氏申豐前國山國鄉安於

曾木村地頭職事早任建武三年二月四日御下

文可被沙汰付下地於重氏代之狀依仰執達如

件

一氏 八

-秋重

|氏重

|廣行

花押 義持

同

嘉慶二年十一月三日

相違之狀如件

鄉安於曾木村等地頭職事任代々安堵#

下次以下證文小代八郎廣行領掌不可有

肥後國野原庄岩原村小原村豐前國山國

義

花押

足利

左近將監 剃髪號 宗祐

八郎 刑部大輔

與„秋重,俱戰死

兵庫助

今河了俊鎮西探題之時於"本鄉 戰死

新左衛門尉

氏貞和六年四月二十一日

尊

右爲勳功之賞所宛行也早守先例可預知

但本主添御方者可宛下替地之狀如件

肥後國山鹿庄内志職今村陸町

事

彥次耶

下 小代彥入政氏

三五六

於九州致忠節之上子息秋重氏重等討死

新撰事蹟通考卷之二十三

應安六年二月二十三日 沙彌判的齮

小代左近將監入道殿

肥後國井倉庄分 #同國大野伊勢守跡貳

拾五町事爲子息兩人討死忠并軍役勤仕

一族兵粮料所預置也守先例可致沙汰若

有子細者可有其沙汰之狀如件

武藏守源朝臣判

應安三年十一月十六日

汰之狀依仰下知如件

右爲勳功之賞所宛行也者守先例可致沙

原莊内小代伊津证,同孫八郎

國 野

預知肥後國小原村

七郎左衛門同 可分早小代左近將監 法師 宗淸

左近將監 剃髮號 宗淸

母龍造寺六郎家平女

伊高 七郎六郎

彥次郎 法名宗爲

伊忠

下 小代左近將監 法師

可分早領知肥後國井倉庄井同國大野伊

勢守銘貳拾五町事

|重氏 八郎左衛門尉 先 父死

三五五

行家 彥三郎

-貞行 彥四郎

-國重 右衛門次郎

嘉慶二年十一月二十五日

石爲勳功之賞所宛行也者守先例可致沙汰

之狀如件

宗清

花押 同

右任相傳之旨可領掌之狀如件

永德三年五月十二日

野原庄地頭職事

可分早領知肥後國

下 小代左近將監 法師

法名

足利

花押 滿

小代左近入道殿

永德三年五月十二日 左衛門佐判斯被

成思食之由依仰執達如件

之由今河伊豫入道了俊所注申也尤以被

武藏國小代八郎次郎重峰申軍忠事右

去六月五日於西坂本致合戰之忠事自

同七日至于二十日於中尾致軍忠之間

高新左衛門尉殿御證分明也就中去六

屬:足利尊氏】

重峰

八郎次郎

重弘 小次郎

智實

-有行 彌四郎

-泰高 四郎次郎

領 野原莊藏村,

-行高

藏滿孫四郎

法名宗蓮

小代宮內孫次郎

——重行 中分次郎三郎

法名宗妙

-伊重

小代叉次郎

某 長鶴丸

重宗六郎宗重等申狀有 數通, 今略,

之

建武以來長鶴丸代丹六吉宗三郎五郎

其餘申狀等有„數通,略˩之

承了 判

建武三年十月九日 藤原重峰

此旨可有御披露候恐惶謹言

右菊池武敏以下凶徒等蜂起之間為誅

伐屬 大將軍御手以去八月十八日於

當國唐河合戰抽軍忠訖然早預御一見

御證判備後代龜鏡欲成彌弓箭之口以

肥後國野原西鄉小代八郎次郎申軍忠

事

判

建武三年七月日

月晦日於吉田河原屬執事御手一族等

相共致合戰之忠之間小幡右衛門尉分

存知者也然者早賜御證判爲備末代龜

鏡仍言上如件

法名宗心

重泰

右衛門次郎

-眞光 四郎兵衛尉

俊光 吉田三郎

寶治元年六月二十三日

右人依子息重康之忠補任彼職之狀如件

小代平內右衛門尉重俊

補任地頭職事

下 肥後國野原莊

花押

所藏文書

因而來,任子孫築,城於筒嶽Ë、爲居城

寶治元年六月補„肥後玉名郡野原莊地頭,

法名佛蓮

重俊

小代平内右衛門尉

·能行 三郎左衛門尉

實行 二郎左衛門尉

母平義澄女

弘家

小太郎 早世

三五三

顯日

·重光 彥九郎

-重範 九郎四郎

-資平 九郎三郎

惟重五郎二郎

遠重

九郎次郎

法名觀心 領 野原莊一分村,

-資重

一分右衛門九郎

-賴秀 左衛門三郎

大貳 律師

-經重 左衛門八郎

法名光滿 領 野原莊荒尾村|

-泰經

荒尾八郎左衛門尉

伊平 增永二郎右衛門尉

法名上蓮 頷 野原莊增永村,

增永七郎 右馬允

母多胡宗内左衛門尉惟宗親時女

頭職,因而子孫世々以 小代,爲三家號

入間西郡之略也

爲,,,武藏國入間郡

本書作 入西郡 蓋

相行

三郎太夫

親重

-親家

富田三郎

-家俊 次郎

家光 同太郎

-家遠

鹽谷平五太夫

-高家, 四郎 ·

號,四方田,

忠家 三郎

弘高 莊權守 號 本莊

河内守

·家弘

莊太夫

|家行

武藏權守

-經行 有三別當

弘行

兒玉有太夫

小代鄉地

實遠平之子依 遠平之遺命,爲,,行平之嗣,

法名生蓮

-俊平

小代小二郎

與俊平¸有„讓狀¸今傳„于家

仕„源頼朝 承元四年三月二十九日行蓮

薙髪名 行蓮】

-行平

小代八郎 右馬頭

小代遠平

七郎

||五郎

小代隆遠

義行 高坂太郎

|直行

高坂彦三郎

經行

經遠

小代小次郎

行 越生新大夫

遠弘

小代次郎大夫

行成 淺羽小大夫 先、父死

-基行 五郎大夫

懸命之領知,事歎息有」餘空沉三紅淚̏ 越 述

盡忠之事實,所」希 本領安堵 仍如件

ニチイテ

令,同心,奉勅詔,同年三月十三日發引向博多.

爲平英時,寂阿父子善安一族百三十騎 遂, 戰

死,建武二年尊氏直義叛逆之時武重吉宗分..上

洛,拔,忠戰,其後尊氏下引向筑紫 之時在國之

一族等菊池武敏討j少貳妙惠,且於三多々良濱

顯ŋ戰功,去文中年中今川貞世仲秋等寄來 肥

州,之時數分 防戰」於 水島鄉」令」追ñ落貞

世仲秋等,然後武朝親善奉」屬:將軍宮,令」在1

陣肥前,處今川貞世叉相一卒松浦以下,打引出博

多,之際肥後守護代武國武元親善逐 爭戰, "

追落,訖其後貞世仲秋大内大友率三豐後豐前之

勢,分發向,之間於蜷打陣」一族多分, 討死.

天授四年今川一族少貳大友大内兄弟以,數千

騎¸寄引來肥後¸之間於詫磨原¸„合戰得勝

利,弘和二年奉 將軍宮, 進引發豐後, 之間武朝一伊周

親善等之一族忽企„反逆,楯凱籠守山城,此故武

朝親善不」廻„時日,馳向悉„„追落訖然處 何

故被、捨„代々三百餘歳之忠義,忽被_爲、沒收

三五一

兒玉黨祖

遠峰

-隆家 菊池家祖

儀同三司

有貫主爲 武藏國友綱鄉地頭職,

正二位 内大臣

系圖,故略」之

藤原道隆

傳載„于菊池

小代

弘和四年七月日 葉室左近將監清原親善判

菊池傳記日親善依 讒被.没收頠知二千八百五

十町,因、玆不诊堪其歎,以菊池武朝,獻 訴狀

於吉野朝廷,朝廷議而賜本領安堵之綸旨, 又

日善保依」爲』阿蘇大宮司之緣座 承安中來肥

後,是肥後葉室之祖也 其末裔有:室左兵衛者|

其居住之所今日三室小路 在,,亀田郡古府中,

承久之役奉」勅從甘菊池隆定赴京師 有

軍功,因而北條義時沒一收本領」

善賢

修理大夫

親通

葉室侍從

承安年中來」肥後,稱 葉室i

善保

正通之後孫 修理大夫

宰相

-正通

從四位上

右大臣 賜 清原眞人姓

清原正高

舍人親王趺武天瑝五世孫

葉室

系圖之十

新撰事蹟通考卷之二十三

肥後文獻叢書第三卷

胤四位宰相正通至 親善,五十九代奉仕朝

家,專拔„忠誠,就」弘安年中蒙古逆賊兩度襲引來日本 之時高善

武房勵„勇於戰場,傳ņ名於異域,後醍醐帝御

宇元弘三年正月十五日善安與氵　菊池寂阿

中承八年中囊祖修理大夫

善賢及菊池隆定不敢與‶東夷 隨、勅勵戰

ヨリ

竊檢„當家之系譜,人王四十代天武天皇第四

皇子舍人親王五代孫右大臣清原真人正高後

右葉室系圖無„ 全本 據 親善申狀菊池傳記|

作」之親善申

-親善 左近將監 以下不…分明】

吉宗

左近將監

元弘三年三月十三日於 博多,戰死

左近將監

蒙古襲來之時防」之有功

高善

右馬頭

新撰事蹟通考卷之二十二

半助

|正綱

仲光小內膳

三世住職

職

二世佳祐與

-親正 勝右衛門

妻光明寺女

之愬寵,明曆元年正月寂

古町草一創正覺寺¸爲„開祖¸蒙忠興君

11

祐

眞宗西派也

寺,一年住,,土用月村,後於 熊本成滿寺

在三古町擀土剃髮爲」僧法名慶天正十五年冬城沒落之時僅三歲家僕密

抱而隱„山鹿長生山, 叉潜居合志碧巖

親則

新助

女 內古閑鎭房妻

與、父倶囚:柳川,翌年五月二十七日同

自殺法名泰岩

|正可

-親元

三四九

右隈部系圖佐々傳記附錄國志略等所」出皆不

同今以„仲光隈部家所」傳及隈府町某家所 藏

法名智仙

元家 隈部傳右衛門

七郎左衛門

爲:法華宗僧.

日達

正之 七郎右衛門

仰光長助

-正信 仰光市左衛門 市之助祖

正辰 仲光平内 半助祖

仕„忠利君,爲„近習

秀吉之命,出｣城被｣預 立花宗茂¸屏纟 居柳

川,十六年五月賜｣死法名仙空

代々爲菊池家之老臣,居山鹿長野城 菊

池家亡而屬‟大友 天正五年爲„ 龍造寺隆

信之麾下, 六年請„ 兵於隆信| 討 赤星親

家¸„隈府城,遷｣之十三年又從„島津家

十五年背, 佐々成政 據 隈府城,不能克

脫､城而走„山鹿城村城,與子親泰,俱守｣

｣之成政來圍而攻｣之守禦當｣節十二月

但馬守

-親永

刑部允

寺

孫,天正四年四月死法名照山妙鏡葬„青潭

1

孰是

女 木野對馬守親則妻

一作„„親則子彌次郎親政,親

葬 青潭寺|

天文十九年六月十九日死法名 高峰順天

上總介

親家

肥後文獻叢書第三卷

式部大輔

||親次

政爲, 霍永之妹智, 未 /知-親泰

-親房

次郎

妻山鹿重政女

居„山鹿城村城,與、同畔„成,據、城十

二月出降山鹿彥二郎重安種孩及老職 有 動

兼元以下十五人被」預:毛利勝信,囚 豐前

國小倉 十六年五月命而賜」死皆自殺法名

泰雲

泰又作」安國音相通。

源次郎 式部大輔

山鹿彥三郎重政妻

略親次下野守鎮治之子今從„系圖

11

隈部彌三郎親次於八方嶽城,陷」之國志

大友興廢記曰天文二十年大友宗 麟

於"南關閉戰死年四十一法名專阿

彌三郎

國志畧日親永式部大輔親廣之子今 從…

系圖」

妻山鹿兵庫頭藤原重行女

新撰事蹟通考卷之二十二

同有名

運秀

彌七郎

連署誓書有」名

|宗直平 次郎吉

直

次郎 和泉守

阿蘇山萬福院有 式部少輔 武治之永正

元年十一月山鹿郡 岩原村 五町寄附狀,

阿蘇文書永正二年九月誓詞書 山 鹿式

部少輔武治 連署誓書記¸„隈部

11

妻赤星武規女

法名祐巖

|武治

式部少輔

爲‶兵部少輔.

文龜三年十二月送阿蘇大宮司 有書簡,

運治 兵部少輔 上總介 後爲僧

同有 書

右京進

常治

常任

右京亮

-守治 源兵衛 連署誓書有」名

三四七

代, 符合然無法名花蔭妙榮祥安寺1

所､考今始從本書, 法名花蔭妙榮葬 祥安寺,

女 天文七年十月十五日死年十八 按推父

11

伯耆守

潭寺

女 永祿十一年八月朔日死法名月清妙紅 葬.. 青

-治元 五郎兵衛

-親廣 次郎 左馬助

上總介

氏治 軍次

-親

式部

-親元 彌三郎

-鎮治

下野守

十八,誤也

道悅葬 青潭寺一作死年二

11

天文八年閏六月十日死年四十八法名喜竹

連署誓書有」名

豊前守

貞明

11

幸若丸

能運室

女

菊池仕加藤清正

-治時 小左衛門

某

棒千代

有動大隅守兼元妻

從」父同於„犬馬場口,戰死

家朝

帶刀 飛驒守

戰死

天正十五年七月二十八日於„„隈府城.

-家治

安藝守

氏 富田伊豫守

修補青潭安藝守

寺

家次

直方

守

富田但馬守

太郎 但馬昔潭寺住職

一景元

後爲」僧 元選和尚

仕 加藤清正i

治元

主膳

元治 兵庫頭

-景治

兵庫頭

肥後文獻叢書第三巻

民法名素覺葬』造音寺,

-親朝

式部大輔 上總介

女 合志隆岑妻

名

兵衛

連署誓書有」新-賴夏

11

影し有明の月の秋の庭

同月庭題

-朝夏

八郎三郎

誓書有」名嘲上下皆傚之一,

以下記 連署誓書,

永正二年十二月菊池家臣八十四人連署

重門 右馬助

友鶴の聲∞すみゆく月夜かな

同月鶴題

･重元

又十郎

みるあかく月の徘ふ扉かな

萬句連歌月戸題

但馬守

-元成

隈部民作式

部少輔萬句連歌”

女 小關平藏武家妻

三四六

基家

之爲母發于感鄰之歎丁生爲母存刻木之

敬雖今昔之事或異而子母之情乃同我在

襁褓之中喪母而逐承顏 志也豈非於

命哉然生成鞠養之恩榮涓塵不能酬之今

也立石庙一基銀于先妣德齒傳之於後

以欲擬于刻木感鄰不飲泣血等之门口

公銘請于〇三也余三门口 至述其

梗概□□銘曰

藤家賢女 源氏閫儀 貞心有素

懿行無虧 内外和協 壺彜孔宣

住世十八 日逼崦嵫 報恩一句

蓮經七枚 字也石也 何曾磷緇

哈然靈廟 膽之仰之 愼奉遺體

傳以誄梓

寛正二年六七月二十五日

野釋德顒謹誌

源次 郎

讃岐守

萬句連歌月瀧題

月に瀧見そへてうかふ光哉

二十四歲死

-景直

富田大膳

女

隈部常治妻

法名周禪葬„今村觀音寺,

-家光

富田次郎 改三家名,稱„„富田,

妻池邊紀伊守家次女

親門

宇野源二郎

女 隈部宗直妻

-重基

重則 治部大輔

宇野民部少輔

親興

宇野治部大輔

於筑州戰死年十九

-武直

かたふけは月みへすく哉

四郎二郎 山城守

武治 次郎右衛門 同月籬題

-基興 彌兵衛

國志略日忠直爲, 越前守親忠之子,非也

菊池風土記墓在 西迫間村南 赤仁田

銘 天倫東人,正德享保間遷,,墓於光

寺,予見其碑石,二行有 联炸之四字 下

折而亡失疑非,忠直之墓標,不可辨

母朝行女應永三十四年正月二日死年十八

忠直之撰書有:墓紙 其跋記:明應三年

六十九歳 年月未」審

11

ヒキノ

蔦やてる月ひとしほの木の間かな

一萬句興行之時月蔦題

11

應永三十三年丙午生善詩賦】長,連歌,文

明八年五月菊池重朝千句聯歌藤崎宮奉納

時忠直作,詩獻詩子台

藤崎宮: 同十三年 於 隈府

ス

上總介

-忠直

常若丸

兵部大輔

弘直 新左衛門

重治

八郎

清本 近江守

忠門

對馬守

女 詫磨別當安春妻

肥後文獻叢書第三卷

極不飲七日之哀王脩爲母動轜車之誠

兵部侍郎源忠直之母義雲慈孝禪定尼者

將監藤氏朝行之女也應永十七年庚寅誕

質也姿容端麗四德兼備十四歲嫁而配紹

州刺史源氏朝豐之室内克盡於婦禮外允

親於九族十七歲生忠直其明年嬰微疫逐

掩粧矣春秋十有八葬以長殤之禮實應永

三十四年丁未正月二日酉刻也長祿

支己卯正月當三十三年之忌辰於是孝子

忠直邈门门口之日伸追遠之誠躬收拾

石漸寫蓮經六萬餘字之一字一石

焉迄于寬正二年辛巳七月二十五日其功

既畢矣鯫今 復徙營 域封蜿藏石經

也寔匪孝道深厚孰至于此者乎忠直告余

日疇昔子羔爲母殫泣血三年哭曾參爲母

兵部侍郎源忠直之母

經一字一石塔, 菊池風土記日此塔始在, 光久寺 道

下: 舊光久寺境内也 安永八年十月

移,建光久寺其銘曰

後庭之岩上

法名義雲慈孝忠直爲‶追善,所建有 法華

三四四

國志略日朝直式部大輔隆直之子也又日

紀伊守朝貞朝直之長子明應九年十月二

十二日死法名潭月宗雲』光久寺,

新撰事蹟通考之巻二十二

應永四年八月二日 死法名天峰祥麟葬 平

野山丑谷,

一朝直

又次郎 上總介

隆治 太郎 早世

於 筑後,戰死年二十八法名淨智

隆朝

千代丸 式部大輔

女 菊池武士室

i能家 民部少輔

阿蘇山萬福院有‶能貞之亨祿四年四月

五日寄附狀 其內未年,年四十五

-能貞

11

兵部少輔

1能淸

淸左衛門

女 隈部元成妻

淸左衛門

是後妻歟 予見其墓地,在 光久寺後

庭岩上,非三四三

可以葬地-光久寺其後之寺而

後年移 墓石於此類者也實地不」詳

ナル

今從 墓標銘」叉日妻宗大和守兼盛女疑

一本系圖朝豐作,但馬守朝忠法名宗仙

妻將監藤朝行女

年癸亥八月二十三日

墓銘日潭月延龍禪定門紀伊守朝豐嘉吉三

寺前田中,後因此今爲小庵I

桦寺五世之住職也寺始在…今之

葬,光久寺-張部直之所。她開山日鍊室和尚,玉

光久寺號 桑林山,在菊池郡西蕿間村

-朝豐

紀伊守

永鼐阿闍梨爲 相良寺住職,

1

忠重 淸七

親忠

宇野淸左衞門

式部大輔

-長治

叉三郎

朝冬 双次郎

-朝光

源太郎

女 赤星武則妻

忠元 刑部允

忠行

刑部允

女 治貞 双次郎

部朝直妻

大和守

-忠政

治行

新四郎

源四郎

五平山,

延文十三年將六月死法名喜三淨 智 葬,,

年.

國志略日隈部家傳宇野但馬守治忠

正平十三年六月死法名淨喜葬 小峰山,

-治朝

宇野但馬守

女 城隆顯妻

妻赤星遠基女

隆忠

隈部源四郎 式部大輔

-治直

大輔隆直始居,白木村陣内

肥後國志略日宇野新七郎特直之嫡子式部

肥往文獻張書第三巻

死年三十八法名淨貞

三年喃潮証隈友真

阿佐古式部少輔

運光 長野太郎

運貞

運俊

清左衛門

備前守

重鄉

重運

長野太郎

備前守

さやかなる月こそ秋の窓の雪

野 萬句連歌月窓題

領,,山鹿郡長野村,因而家號爲長

-右俊

長野修理亮

月はた同の秋の光哉

ウラワ

略 上下,下皆倣之

以下 記: 萬句連歌,

明應二年閏四月修 合志郡 本八幡宮」

《文明十三年八月萬句連歌興行時月浦

菊池郡阿佐古村,因而改家號¸爲阿

三四二

-武貞

佐古,

阿佐古式部大輔

新撰事蹟通考卷之二十二

諸家系圖纂大和源氏系爲„有治業治 淑、離

同成

-宗治 宇野五郎 承久之亂於三北國,討死

義治 宇野四郎 子孫稱大森

俊治 宇野三郎

承元二年六月死法名寂眞葬 日輪寺,母同

上

-業治

宇野次郎 從」父而來 菊池<

母兵庫頭藤原仲常女

——有治

宇野太郎

肥 後 子孫遂臣屬

池來。

盛,戰而被、捕後來,,肥後¸倚,,居菊池

或被

保元元年七月之役屬 崇德上皇, 與 平基

-親治

宇野七郎 齊院次官

始名親弘

右近大夫 下野權守

賜 大和國宇野莊,因而子孫以…宇野,名、家

從五位下 中務丞

賴治

文永元年二月菊池武房賜家號 隈部 隈

部菊池城府名也居,白木村,同七年二月十日

|持直

源次郎 右衛門尉

女 菊池隆泰室

持治後爲,僧號,,憲仲和尙

妻原田長門守直光女

-詮治

治部右衛門

法名淨觀

-成治

刑部左衛門

長野太郎藤原隆基妻

女

妻阿蘇平九郎隆澄女

-直治

源太郎 刑部丞 法名淨堪

一賴仲 皇后宮太夫

於北國,戰死年二十二法名寂蓮

-忠治

宇野源四郎

清治知治宗治 今從 原本隈部系圖,不」改

前後歴凱任

式部丞左衛門權佐、内藏頭、筑前、信濃、美

-經基

長子母右大臣源能有女也貞純淸和第六

歴„兵部卿

中務卿 上總常陸太守,延喜十六年五

月薨年三十二稱,桃園親王

貞純親王

第六皇子母神祇伯藤原棟貞女也貞觀

房女也嘉祥三年三月二十五

日生,於外祖良房一條第 十一月立爲 皇

太子, 天安二年八月踐祚元慶四年十二月

四日崩年三十一

淸和天皇

諱惟仁稱"水尾帝 文德天皇第四皇子

隈部

系圖之十

新撰事蹟通考卷之二十二

肥後文獻叢書第三卷

滿仲

母皇后藤原氏明子號 染殿皇后 太政

大臣良賴親

十五年爲„ 親王,叙,四品,-賴房

子以、故世稱_經基日:六孫王」賴俊

上總介

二子也 左衛門尉 檢非違使

信濃守 大和守 正四位下

永承五年有」罪流, 土佐國,

從五位下 肥前守

子孫稱‶大和源氏,

從五位下 陸奧守

長子母武藏守橘繁古女也延喜十二年四月

十日生„於攝津國多田館¸„歷伊豫 陸奧

等九國守兵部少輔治部大輔左馬權頭¸拜

鎮守府將軍,至三正四位下, 長德三年八月

二十七日 卒年八十六文明四年 敕贈,, 從

二位,

天德五年除王籍,賜 姓源朝臣,同年十一

月卒年四十二

宰大貳,幷鎮守府將軍,叙,正四位上1

濃、但馬伊豫、武藏等守、下野、上總介、太

一本系圖文龜三年於 宇土戰死高瀨系

-武基

11

右京進

女 菊池肥前守重安妻 法名花山壽香

-重時 高瀨次郎

五十人内有｣名出,菊池風土記,

政元 瀨高刑部允

¸菊池政隆初年永正元年菊池侍臣百

-武備

相摸守

以„其名,直爲三法名

11

按高瀬系圖作„武德入道泰朝然阿蘇文書

有…高瀬泰明之文明四年十月十九日書狀

高瀬寶成就寺住持法印權大僧都快憲文明

十二年十二月十三日定書時檀那菊池左京

大夫泰朝同所清源寺有, 文明十五年三月

十日沙彌泰朝之書簡 據此等 泰朝剃髮

トモ

11

入道泰朝

-泰朝

三郎 左京太夫

人,武楯當,武教之子,

爲.. 應永中比

前繼｣家非氵 武光之子,可推知

武教武光子而

離國之節口宜感狀系圖共持越付今者無之候 智音院重賢申傳之 趣匕

交之裏5浄I書置候一冊高瀬家之蹈相成候間 委敷事相分不申候

其兄武信其弟片保田三郎武明有

藏守重棟,交龜六年於袈裟原,戰死

或作

其子武楯其子武就 其子

武相

右京大夫永正比人其兄有:西左衛門

梯山長,又仕,加藤清正,

「戰死非也是誤 菊池武義,者也

¸薙髪號„秦朝I亨

武尙其子一郎武國其外如. 傳記系圖,一本泰朝實菊池

兼朝之三男以上諸書悉不、同難、辨,孰爲、是孰為非

故今此系圖據』文書等之證實,推年代勘究之,著

其概略¸備„後之校合,耳

三三九

子武備其子武基菊池風土記系圖武儀之弟高瀬筑前守

弟有武尙,

其子真武其子武楯 其子武祐其子 泰朝其

¸深川彥三郎其

高

政进左衛門 小西行菊池傳記系圖武教【黨之又有三三郎重秀女子 菊池重安妻,

其子武備其子武基其子武

「綠文明頃之人

【武著 其弟有 山鹿兵床頭 重長東武

武德

其子武弘

¸肥後二郎薙髮號,自關,「天授中

武尚爲」祖其子武國

‶之非也武信武明菊池武隆之子也

其子武

11

11

11

【圖者慶安之初年嫡々法雲院

右高瀨系圖有 數本 高瀨家系圖

其家記曰高瀨家汇傳來之系

圖居„千田平城,天正戰死不」知 孰是

1

ス

115

-武楯

肥後文獻叢書第三巻

右高瀬殿之肩書其時之人肩所 書入置,也

高瀬相摸守

從五位下

11

高瀬寶成就寺有:武楯之寄進狀,

奉寄進

肥後國玉名郡高瀬談義所寶成就寺敷地之

事

武相 十郎

限東堀

限南浮津口

限西繁根木河限北籠手屋々敷

彦次郎

武教

右彼地之事爲眞言興隆之砌於本尊虛空藏

菩薩盡未來際奉寄進之所也若武楯子孫於

彼寺致違亂妨者不可爲相續之仁仍為後證

寄進之狀如件

應永廿年癸巳卯月二日

藤原武楯

又清源寺有,九月十八日 魂之 定書, 記

號

無

11

也

現像,書稱 肥後州高瀬郡藤原武敎 菊池

殿族親爲 物 菊池爲邦之比也又武楯應永十七年以

應永 四年十四年, 然諸國記誌, 此國 之人

ナル トモ

按菊池傳記系圖實菊池武光之二子時代

不符合,或云諸國記丁丑丁亥恐可

11

其管下,居 高瀨,

11

接待,丁亥年前轆改, 名武教, 來 賀觀音

海東諸國記日武敎丁丑年青年以 武麻

呂,稱」 名使人來朝以遠處,不」緊、人不

11

相摸守

高瀨三郎

從五位下行相摸守藤原朝臣,又有 應永十

八年十月十日之寄進狀同年十一月十五日

掟書,又繁根木壽福寺有,,應永十七年十一

1

月十八年九月寄進狀,皆書 藤原武楯

按菊池傳記菊池系圖武楯實菊池武朝次子

三三

豐後國大坪村鵡事舍弟 筑前守 武尙爲恩

賞配分宛行之候訖然者當所內土貢參拾貫

分下地任武尙素意淸源寺可有御知行於

寄進狀者童龍丸成人之時可分進候若其內

自然不思儀候者以此狀可用寄進狀給候由

又有„武光之書,

菊池筑前守武尙

正平九年钾四月四日

右爲天長地久天下太平御願圓滿現當二

世子孫繁昌限未來際所奉寄付者也

北限田畔

南限門前大道

西限堀

東限長福寺保田木堀

源禪寺敷地

肥後國玉名西鄉大野別府中村內高瀨

淸源禪寺之內事

奉寄進

高瀨淸源寺有 武尙之寄進狀,

-武國

野原預所殿

武國

九月十二日

肥後國野原東鄉内増永名事依江田次郎五

郎申之不可有子細之由菊池殿被仰候急江

田次郎五郎方〈可被付沙汰候恐々謹言

たかせとの

小代家所藏武國之書狀

葉室親善申狀

天授中菊池武朝奉. 征西將軍宮,陣 肥前國

府 今川仲秋及松浦黨合､軍來„筑前博多 武

朝遣武國,討之仲秋等散亂而走 5) 菊池武朝申狀

¯瓔､封故置 守護代:

肥後守護代

菊池系圖按武朝幼冲

11 11

高瀨十郎

按據 此文書,武尚自…武光,以前死年月今

無､所 考

謹上清源寺照春禪師

肥後守武光 判

八月二十九日

長老幷僧衆御中可有御披露候恐謹言

|親家

-鑑直

重隆

-親國

親實

肥後文獻叢書第三卷

彌右衛門

備中守

重繼 玄蕃允 藏人

備中守

藤三郎

統景

於茶臼山討死

-親光

市太夫

左京太夫

筑前守

叉三郎

佐渡守

鎭直

丹波守

藤内兵衛

-隆光 吉左衛門

肥前三郎 式部丞

安藝守

薙髮號 道雲

テ

菊池家亡而屬, 大友家,得,睏遇,天文二十年

大友宗麟征,肥後將之未」從者」諸將皆服焉

親家滔諛宗麟¸頗 菊池家之遺跡 逖 爲„ 限

領. 玉名郡大野別府中村,居 高瀨保多木城,

後祟„祭保多木靈社,

武時之十三男而武光之弟也

藤原武尙

ニシテ

菊池筑前守

高瀬

寛永九年八月四日死

親高

安房守

始名親隆大友義統授:一字,因改 統家|

天正六年四月爲【龍造寺政家隈部親永,被、

攻退„隈府城„賴„„叔父親賢,居¸„合志竹迫城,

其後所居未」詳秀吉征西之時沒收所領, 元

和五年六月二日於 阿波國,死年八十九

テ

薙髪號,月叟道1

統家

備中守 周防守

親賢 爲合志高久之養子,

府城主,後與„隈部親永】構」隙永祿二年五月

討„„親永於長野城,不、克四年十月十三日死

年四十八

三三六

重則

重生

有信

灭三郎

房繼

有繼

安房守

-家繼 式部允

爲繼

三郎 左京太夫

法名雲嶽天仙葬„廣福寺¸

彈正少弼

灭次郎 中務丞

萬句連歌有」名

飛驒守

11

永正二年連署有名

修理亮

有直

遠江守

大藏少輔

備中守

11

武統

連署有亅名

毫_西福寺.

藏人大輔南

-武詮

主宗梅庵主

按西福寺過去帳江德院南樹宗梅庵主永

祿五年壬戌十二月五日赤星備前守武隆

連署有亅名

三郎 安藝守

日

眞左新開圖書助右天文二十四年六月二十一

11

菊池郡立石村有」慕銘中央松月 道 藤原治

新開圖書助

主治眞

次郎

安房守 連署有„赤星右近允武規,

-武規

11

灭太郎 右近允

花薄つきにほのめく光かな

萬句連歌月 薄 題

赤星九郎重規

重規

ノズキノ 1

九郎 彈正少弼

-重行 玄蕃允

主六字,是武詮之墓乎武隆系圖不」載之

故附備、考

ナル

叉隈府町右田某後園有」墓彫ŋ南主宗梅庵

女 隈部隆忠妻

正平十四年八月於''筑前國大原,戰死

武貫

掃部助

武時歿後爲尼號` 慈春`

女

菊池武時室

剃髮號,,寂正

遠基

赤星四郎 肥前守

-隆鍰 號大猷坊. 袈裟尾山主

津山關,移居之, 嗪 嘉曆二年死葬 于菊池郡

西寺村 西福寺, 墓碑銘中央藤原有隆左右嘉

曆二年丁卯七月三日

系

*弘安四年襲來之時叉有」功鎌倉幕 府 賞

之補, 肥 後國臼間莊内豐前國規矩郡内肥前

國神崎郡内地頭職,因¸玆築城於臼間莊大

太平

文永十一年十月蒙古來犯 壹岐對馬筑等

赤星三郎有隆於三所々,戰捕 蒙古部大將,

テス

爲„著姓1怪說,不｣足以信

スルニ

菊池武房之弟也領 菊池郡赤星村 乃家居因

家號赤星諸書有

チ

肥後文獻叢書第三卷

式部少輔

兼規

孫次 郎

-武次 叉次郎 早世

武定 三郎

武元

法名淨喜葬 西福寺,

津江三郎

-武則

孫三郎 刑部少輔

方保田三郎武明妻

女木野駿河守武鄉妻

女

落髮號 西寂ı

-武續

叉次郎 遠江守

高瀨祖,故不取其證詳:高瀨系圖,

ナリ

11

按一作筑前守,然其弟有 筑前守武尙,爲

11

實菊池武時之八男也武貫戰歿故爲ņ養子嗣

右京亮 始名武豐

-武生

天正九年親賢死其子久基幼冲島津義久分三

實城親賢之弟

讃岐守 剃髮號,一要

-親基

右衛門佐

重元 藤次

左衛門尉

重基

式部大輔

清源寺有. 城刑部少輔政冬 永正四年正月寺

領奉書

實城親冬之弟

刑部少輔

——政秀 三郎

貞峰 六郎

六郎貞峰

永正二年連署誓書有: 出田刑部 大輔重綱

-重綱

城,

刑部大輔

-親房

藤原有隆

111 111111

薙髪號 宗愚

赤星三郎 播磨守

赤星

實城久基之弟久基早、世武房爲:親基之養

育,親基死無、子武房逐嗣 其家¸ 稱,, 出田宮

内少輔,秀吉賜五百口月俸, 住 大坂天

後從„加藤清正 來肥後,終爲」臣給三祿二千

石」忠廣改易之後居氵 筑後柳川 寛永十年三

月拜引謁忠利君,賜,先知,十一年正月十五日

死法名次峰宗勝號 梅林院 葬„流長院

刑部左衛門

グス

宮内少輔

十次郎

江田村三寶寺亦有」墓銘同」之

ニモ

親基爲 後見, 十五年與, 八基, 共謀,,,秀吉

全,,所領,十六年久基死親基續氵 其遺跡 居

筑後,文祿元年正月十五日於 筑後國石垣觀

音寺,病死法名源入一要號,, 香雲院, 玉名郡

領 菊池郡出田村,因以,其邑|名家

-經信

出田

-經家

藤田三郎

-經宗 菊池四代

民部大輔

藤原經賴

菊池三代

出田

|武房 十次郎 爲叔父親基之嗣

十六年領知於 筑後國,賜替地 其年死年十

七

城十郎太郎とのへ

朱印

六月二日

於肥後國汝本知内八百町分扶助訖領知所

付上中下相分從成政目錄別紙受取全可知

行候也

天正十五

領内八百町】退隈本城,

シム

秀吉征,義久,久基赴 筑後, 迎謁因而賜,本

ステ

-經遠

經隆

武宗

隆綱

隆信

|武遠

-秀信

經信,經信十四世孫出田三郎秀信始居 隈本

古城主考引菊池家譜日菊池經宗 有 出田

日於 御舟陣原,討死詫磨系圖末可見

原 戰死.

小山系圖亦有三秀信,而文明十八年 十二月 十二

シテ

ニモ

文明十七年十二月二十日於 益城郡 御船陣

筑後守

三郎

朝

民部少輔

武久

九郎

次郎九郎

隆氏

三郎

九郎

隆重

三郎五郎

越前權守

經親

九郎

彌次郎

-經能

出田三郎

近江守

111 11111

新撰事蹟通考卷之二十一

、知:誰子一本爲"下野守重照之子,故

附于此

ナルコチ

按菊池傳記永正始有:城六郎政元不

11

-重照 下野守

テ

字,稱,,能冬,後又大友義鑑授,一字,因改

親冬,未」知, 其是否,故附而備」考

阿蘇文書有三城六郎次郎能冬龜 三年十

ナゾト

國而隱,寓山本郡霜野谷, 加藤清正聞」之

召爲,領内十二人禪門頭之一員,叉玉名郡

1

廣村起┐建德榮寺,爲"住持, 為. 府北之成

鎮,云是德榮寺記而未、詳, 其實否

タ

テ

シテ

京師,入三佛照寺門,改,,名行西,酩後又歸

チ

國志略日親冬讓,,家於子親賢,後歸」佛赴

11

按移„隈本城】諸書各~異矣皆不得,其事

實 說著‶鹿子木系圖,可 合考,

レリ

是遷„隈本城,領,他田託磨二郡之内千町餘,

勢威頗振

1

菊池家亡而後屬 大友家,天文十九年鹿子木

寂心爲,大友,被„勘氣,讓„所領於親冬,自

二月書簡 或云親冬始名也菊池能運覞,名

島津義久授„名一字 稱:久基,親賢死基

年甫九歲義久命‶親基】爲後見,天正十五年

十郎太郎

一隆房 彌次郎

親基 左衛門佐 繼„出田重基之家,

始從„大友家, 天正六年以後屬,, 島津家,有”

勢名九年辛巳十二月二十九日死法 名靈 峰

道威葬 石神山東南隅 延寶二年仍孫出田某

移ñ建島崎村岳林寺,

越前守 賢又有」作、政國音相同

シ

マサ

親賢

十郎太郎

菊池郡木庭村峰泉寺跡有」碑銘曰逆修日

仙棟永弘治四天戊午八月吉日城筑後守藤

原武東

-武東

筑後守

清源寺有 城刑部少輔政冬之永 正四年正

月之書狀,

繼,出田重綱之家,

刑部少輔

爲冬

-朝成

冬鄕

肥後文獻叢書第三巻

備中守

-爲政 備中守

僭 夢因聖珠和

始稱,城小次郎政邦¸爲､僧後爲„„正觀寺四

十一世之住職,入院之時香語中伏願 鞍山

筈嶽之氣鐘,于此一人, 文東 武西之名冠,

于彼九牧 大永五年四月二日寂

伊豆守

文明十三年八月萬句連歌有」名

右京亮

11

萬句連歌月桂題

城右京亮爲冬

四方にみる月や桂の花さかり

龜三年菊池能運兮[爲冬,鎮中字土城,

永正元年歸 菊池-

11

シテ

菊池傳記系圖無爲重爲賢冬時三人,而爲

チ

冬爲:爲昌之子:今從,異本,

伊豆守

法名寂圓

剃髪號„宗梗 勤宗樱选甲斐宗運,書狀令据之

阿蘇文書大宮司惟將代有‶城越前入

-親カ

冬

11

越前守

曾孫 今從 諸書所載

按一本敏峰重岑爲„„親岑之子, 爲″ 爲冬之

11

チ

11

阿蘇山萬福院有: 城越前守 重峰龜元年七

月寄進狀1

人はいさなかめは月の朝かな

萬句連歌之月朝題 城六郎重峰

越前守

-重峰

六郎

源寺願行寺有, 賴峰之永正元年三月書狀,

11

連署誓書有, 大藏少輔敏岑上總介賴岑,又淸

11

賴岑 上總介

-敏岑

大藏大輔

永正二年十二月贈 阿蘇家,八十四人連署

誓書有彌七兵衛昌峰

昌岑

彌七兵衛

-親峰 伊豆守

1111110

新撰事蹟通考卷之二十一

金勝院本太平記名重經同書又作,親廉,

誤也

隆顯

11

越前守

實能隆第六之子也隆經無」子故養,弟隆

賴,爲、嗣

-隆賴

城六郎太郎

就是

林,未知

11

庭村上林城, 今日城

城一居領地,改„家號稱城

菊池能隆第四之子也能隆授 山鹿郡城村,因

1本代々居:菊池郡木

越前守

藤原隆經

菊地六郎

城

系圖之九

新撰事蹟通考卷之二十一

武顯

——武金

-定賴

|武峰

-兼敏

隆敏

爲重

爲賢

冬時

三二九

式部大輔

伊豆守

式部大輔

法名元仙葬氵 東福寺,

越前守 右京太夫

兼昌 兵部少輔

法名秀中

爲昌

式部大輔

伊豆守

菊池郡西福寺,違

正平十九年 甲辰八月朔日 死法名長覺

伊豆守

五郎 攝津守

石見守

而敗死

文中二年七月於,,合志原,與今川貞世,戰

六郎

木山合戦討死

以小山,爲家號,

郎武

隆氏

武宗

孫九耶越郎領小山村 故或

前權守

九

11

船蓮原 戰死

親

日隆定之二男

小山系圖隆隆重

月二十日於御

九郎

九次彌二文隆

朝人:秀信

明十七年 十 二

111

圖可,合見

越前 三郎

武宗 隆重 隆綱

`五耶

¸ 片角三郎菊池 三郎

按出田系圖經親

三郎筑後 守

以上出田系

11

11

越前守武宗 判

康永三年枾 歳八月二十五日

右田地屋敷等おいては和與の儀たるあいた

地頭職三分一をはやきの六郎くらん人殿に

さりわたし申事實也たいしつほつけ別紙あ

向後においてはあいたかひ大小事をうけ

給申へしましていらんわつらひのきひさゝ

かあるましく候仍爲後和與狀如件

11

文和二年十月二十一日 右京權太夫判

肥後國六かのしやうのうちおやまのやしき

六かしよ幷ちんのまへたうよりみなみかな

L田地四丁五反事

同國神藏庄内詫磨田地伍町屋敷二所此所之

事本知行运不可有相違追注進之狀如件

新恩地之事,諸書悉有„ 武 宗, 早 岐小山系圖隆信

詫磨文書爲.武宗養父武

武宗阿蘇文書小山系圖武宗武

成養子能勝˙據」之考之

武成始名 隆 信 武 久後

二郎 民部

氏 隆信 武 武遠

信,雖„年日少異,所同不」知孰是

レリト

次第相同其外不同取捨無」所 考

改„能勝,歟兮無所、考

決,故併書附„于此,小山出田系 圖大 略同俱有„„ 秀

〃

11

隆信武宗能勝,阿蘇文書正平二年九月惠良 惟 澄注

進狀菊池九郎武久申養父小山越前權守武宗跡本領

早岐 系 圖爲

二日於 御船陣原,戰死年四十二

朝

越前 小山日向守文明十八年十二月十

秀信

某

·能勝

康永二年三月五日 越前守武宗判

某

彌一丸

-秀政

磨三河守

ことし

11

ゆつりふく小山のひらのちとうしきか

のときのひかしのしやうの内みなみが

ちをかなしきはたのむらむしや一丸ゆ

つりをくところしつなりさきたちてあ

にまつ一丸にゆつるといゑとかやの

めいにそむくあいたかのところくりか

へしおとゝにとらするなりしあにま

つ一丸いらへせはこのゆつりをくはう

の御めかけるしあにいらんせんくはう

に申へからすかきりある御くうしをつ

とめへきなりよつてゆつんくたんの

加555三年 10 王~六月一日

よしかつ例

松一丸

肥後國六庄内小山村地頭職同戸島永峰兩所

同國藤崎庄内石村地頭職

早岐六郎藏人秀政申本知行分所領事

嘉慶二年六月日

右地頭職者武者一祖父武宗與光圓父秀政相

論之時依無道理不相待公方御成敗武宗私分

和與之條文書明白也而今改先祖之契約恣分

押領之間就歎申先度被下問狀御教書處未申

御請之條背上裁者也云違背云押領難遁罪科

者歟然早任和與狀之旨當村三三分一爲打渡

給粗目安言上如件

副進安堵御教書武者一祖父與狀

早岐伊豆入道光圓申本領肥後國小山村三分

一地頭職訖磨武者一押領事

目安

剃髮法名光圓

法名永結

伊豆守

氏政

早岐六郎藏人

早岐源六

武者一丸

-武宗

隆信

肥往文獻提手第三卷

正和五年五月十二日

相摸守

武藏守

早岐太郎藏人

剃髮法名正圖

菊池九郎 法名義連

實淸基之孫

越前權守 法名尖意

按據』下下文,後改:武成,乎

始名菊池孫九郎隆元 爲隆信之養子

下 菊池越前權守武宗可分早預知肥後

國六庄內小山村地頭職事

右人依參御方所宛行也者可領掌狀如件

貞和四年九月十七日 判

菊池越前守武宗申肥後國六庄內小山村

地頭職事任去月十七日御下次可被沙汰

付之狀依仰執達如件

貞和四年十月八日

宮內少輔殿

伊豆守判

四年十二月菊池るを子なきよつて詫磨方彌一九ゑうて

の時よりやうしたるよて代々御下文手

口をあいそへなかくゆつりわたす

ところ但女房の命をそむかはねうは

うのはからひたるへく候而讓狀如件

11

11

ゆつりわたすひこの國六の内小山村

の地頭職事右所は重代相傳の所しか

貞和四年十二月二十五日 武藏守判

一色宮内少輔殿

越前々司武宗?申肥後國千 田 莊

重富名南加治尾等田畠在家地頭職 【戲

跡 半分事守今月七日御下文可沙汰付下

地於武宗之狀依仰執達如件

七日

判

貞和右依參御方所宛行也者守先例可致沙汰

之狀如件

可令早領知肥後國千田庄重富名南

養父武

加治尾等内田畠在家 地 頭職 成跡

下 菊池越前々司武宗附於

新撰事蹟過考巻之二十

一かやまの村はやきのふりをせしんかいの殺

生禁断の事正心か跡を知行せん人永代をか

きりてこれをかたくきんせいすへし且は其

うあいしたかひてちきやうすへし御くうし

おいてはふんけんしたかひさたすべきな

きくちの九郎あいしたかひて水魚のおも

ひをなしてすくべしもし九郎をきやうはい

する事あらはゆつるところの田屋しきかね

ては九郎たるのふちきやうすべきなり父さ

せるあやまんなからんおいてはいらんわつ

らびあるへからす

新補地間自往古不相綺而小山鄉者號新恩

11

11

11

11

一れうねんはうゆつる田やしきの事そうよ

11

一領内はくゑきようちかうたうわるききこへ

あらんものをおくへからすよくくこれを

きんすへし

一民百姓をあわれみはこくみ所をかたやかに

さたしうれ、そせうなきやうに下知成敗す

11

非分の事を百姓にあて、せめとる事

あるへからすゆめくひとうのはたらきす

へからす

11

地惣追捕使難相綺之由隆信申之間番訴陳

雖遂問答以和與之儀向後惣追捕使不可相

綺小山鄕」如隆信狀者惣追捕使向後不可

相綺當鄕由出狀之上者所止訴詔也好者此

上不及豫儀相互無異論可分領掌之狀依

鎌倉殿仰下知如件

所務者砥河木崎上安永鯰鄕者爲

右彼相論者於得宗方召調訴陣狀有其沙汰

之處去三月四日兩方分和與之間所被執進

也爰如行信狀者當莊惣追捕使職事於本補

右のてうくこれをかたくまもりてすゑす

ゑまてもおこたる事あるへからさる狀如件

正わ三ねん三月十日

正心判

肥後國六箇莊小山鄕地頭早岐判官代淸基

法師琺躇代隆信與當壯惣追捕職 給 主水原

孫四郎宣孝代行信相論所務事

下知けん重し、そんくにいたるまでか

たくこれをまりておこる事あるへから

す

任此狀可分領掌之由依仰下知如件

裏書

正心 判

正わくわんねん十二月二十一日

みきくたにのところはちうたいさうてん

のりやうなりよしそく太郎くらんと入

道正ゑんに本證文をそへてゆつりて候へ

と∞てうくころたかひ候へはくりか

へして孫きくちの九郎たかのふやうしと

してゆつりあたふ所なりかのほんせうも

んらをとりかへしちきやうすべきなり正

ゑんきせちのうゑはそのしそくらこのと

ころにいらんさまだけあらはさいくわに

申あつへきなりよてゆつりしやうくたん

のことし

相摸守平朝臣判

ゆつりわたすひこのくに六かのしやう

かやまのむらのちとうしきの事

以下略

分左衛門尉藤原

別當陸奥守平朝臣判

知家事清原

肥後文獻叢書第三巻

んとにうたう正ゑんゆつりわたすといへと

∞てう正心かこゝろにたかうあひたか

れをくりかへしてまたきくちの九郎たかの

ふほんせうもんあいそへてゆつりわたすと

ころなし正ゑん坊かやまむらにいらん

わつらひをなさは正ゑんほうかこせんわう

ゆつるはやきのふりをせしんかいを∞九郎

たかのふりようちすべきなり双とかなから

んにおいてはいらんわつらひあるへからす

11

一かやまのむらのちとうしきをはせん曰くら

11

嘉曆四年九月二十日 修理亮判

さためを正心か顔ひこのくに六の庄か

やまのむらのちとうしきしょむてうく

の事

此狀為類書可分進之旨依被成關東御教

書進覽正文之上者爲後證可被下校正案

文之由菊池孫九郎隆元分申之間所有其

沙汰也

武藏守例

正和五年五月二十七日 相摸守判

三三四

-盛實

事

שו

建保四年四月二十二日 案主菅野判

知家事惟宗判

今圖書少尉清原判別當陸奧守中原朝

臣判 大學頭源朝臣 以下略

可早以源二女分傾知肥後國小山村地頭職

右人爲彼職任先例可致沙汰之狀依

鎌倉殿仰下知如件

天福元年七月二十日 武藏守平朝臣判

相摸守平朝臣判

早岐判官代

ゆつりわたすひこのくに六莊のうちか

地頭 職 舍弟

やまのむらのちとうしきの事しやてい

熊

白

右件のちとうしきはおうちこしらかわの

官 代人道

にやくまとのに

はちくわんたいにうたうとのよりもりさ

ねかよまて三代さをいなきところなりた

したうにはちゝはやきとの御ちきや

撰事蹟通考巻之二十

日

清原

建長八年十月三右任舎兄盛實建長三年八月十日讓狀守先

例可致沙汰之狀所仰如件以下

將軍家政所下肥後國六莊内小山村住

可早源淸基緜爲地頭職事

幼名若熊 剃髪法名正心

早岐判官代

建長三年八月十日

源盛實 判

うの所なりたい(のゆつり釈本證文と

∞に早岐とのに候によてたうしはほんせ

うもんはそへす候あんはそへてゆつりた

てまつるほんせうもんはひんきの時申て

たてまつるへしはやきとの御めいをそ

むかすかほせにしたかわるへきなり御よ

ののちは若熊とのちきやうせらるへき

所なりもしいらん申人あらはもりさね其

沙汰にあふへしおとゝあまたありとひへ

と心さしふかきによてゆつるところ實

也よて爲後日ゆつり狀如件

同彥四郎親元

又幸秀與„其子御房丸,曆應二年十月 讓 狀 有

之

貳,狀大友詫磨五郎次郎幸秀林申亡父道秀遺領

本名

11

文保二年六月沙彌道秀與親幸 有"讓狀,其文中

嫡子五郎親信二男五郎次郎親幸又建武元年四月

賜„幸秀,有„„綸旨,又同四年七月沙 彌 太宰少

同五郎次郎親幸報触”

同五郎太郎親信

志賀文書正安三年有」名

詫磨叉三郎秀治

系圖脫漏

居住詫磨刑部大輔然則至天正比,居„此郡,歟無

家乘,今其後孫住 豐後大佐井鄉北村,能直能秀以

來文書二百餘通家傳秘藏

キハルマデ

無､據不､可 取決,詫磨家事文書等信然以可」徵然

所居不､詳能秀補 詫摩別當神藏莊地頭下 司 職,代

々襲」前傾 詫磨郡及飽田玉名二郡內筑前豐後內數

个所,枝族繁蔓矣天正頃大友家族臣名簿肥 後 詫磨

タリテ

三家同時代居,同城,宗系圖眞個不､足」辨其餘考

肥後文獻叢書第三卷

右人補任彼職之狀所仰如件以下

源業

補任地頭職事

將軍家政所下肥後國六莊內小山村住人

源業

早岐判官

傳„詫磨家ˋ 故寫此

早岐

11

早岐略系及交 書令

天正七年八月大友義統授,名

同太郎統正

康曆元年六月文書有」名

11

同彌八入道寂祐

貞和五年十一月補„筑後三間莊地 頭 職,有三下

延文四年九月文書有、名

同德一丸

建武三年九月軍忠申狀有」之

同又太郎宗顯 弟助四郎

1111111

親家

應永十五年三月四日

詫麿攝津入道殿

沙彌 F

詫磨別當五郎滿親本領所々事

名々事國分。

肥後國詫磨西鄉神藏莊地頭職等

得永寺。 重

富。三郎龙岩永。小枝吉得九平九清永福永松石

光石今牛。石松4金光。彌石石龙。石九内石能。石九内

石安枝吉。千見清松春武。

與安o弘納國武鳥栖。永富

11

同莊内本莊

安弘名。久吉,

事

名枝吉名。

同郡東鄉黑石原

同國飽田郡内鹿子木東莊内富吉名。恒清

名。南山室村。五郎丸名

同國飽田郡大浦。皆白

同國玉名郡内大野別府尾崎村蛹 同府内

塚村野原莊内荒尾以L

同

筑前國志登壯地頭職

以上

應永十四年七月日

別當太郎

11

應永十二年七月與親家有. 源滿親之 讓

按地志略日詫磨郡本山城詫磨別當守直之城地也元

弘年中別當次郎宗直延頃詫磨三郎員政永祿頃詫

系圖文書守直損緻 無宗系圖日 正 平

磨左馬助宗照居」之看

11 || 1

其子守武其子安春其子武安四代號,,詫磨別當 國志

略此四人居,本山城,詫磨 別當同代有二家,可以疑

元年,四代住,當城 菊池系圖日武澄

二男武元

十二年菊池武光授 詫磨本山城於宗盛義,至„康正

#武重弟

員政

11

右詫磨系圖 其家所藏文書,校合之,此以下不

分明,

親勝

-親常

別當太郎

別當太郎

應永十九年十月十九日

不可有相違之狀如件

詫磨別當太郎親家本新當知行之地事領掌

判

賴應永十六年十二月二十日 沙彌刋

滿

可有相違之狀如件

親父攝津入道曇慶跡事任讓狀之旨須掌不

假名書全文

應安三年九月十二日 武藏守源朝臣

右爲勳功之賞所宛行也者守先例可致沙汰

之狀依仰下知如件

參分事

莊內先給

同國島助通時鰷 積註

村鈹細越

可分早詫磨別當太郎氏直領知肥後國甘木

兵庫助

-氏直

別當太郎

-秀信 詫磨孫二郎

之

宗直自 建武.以來軍功等詳申

略

申 狀寫編

謹上清少納言殿

左中辨時經 奉

六月三日

仍執達如件

天氣所候也以此旨可分申入征西將軍宮給

本領等事申狀具如此子細見狀口歟可沙

汰居宗直之由可有御下知之旨

肥後文獻叢書第三卷

大友右馬權助宗直申

志名子子村 掌不可有相違若又有子細者追可有其沙汰

之狀如件

肥後國六莊內小山村地頭職事相傳行先領

詫磨別當五郎殿

右兵衛祐判 瓢

應永七年十二月十七日

早守先例可致沙汰之狀如件

肥後國藤崎莊地頭職之事爲料所預置候也

氏直弟

始名親氏足利義滿授名一字,因改,,,,滿親,實

剃髮法名曇慶

-滿親

別當五郎 攝津守

應安三年九月十二日 武藏守源朝臣判

右爲勳功之賞所宛行也者守先例可致沙汰

之狀依仰下知如件

可早詫磨太郎左衛門尉貞宗領知肥後國志

加木村㚼 事

貞宗

太郎左衛門尉

親氏 嗣兄氏直之家,

新撰事蹟逾考卷之二十

貞和六年三月十二日

判

右爲勳功之賞所宛行也早守先例可分領掌

之狀如件

筑後國瀰高上莊地頭職事

下 詫磨別當宗直

六年二月十八日

判

貞和右爲勳功之賞所宛行也早守先例可分掌

之狀如件

肥後國臼間野莊地頭職事

下 詫磨別當宗直

詫磨別當殿

貞和六年正月二十八日

制

多見

主參御方者可完下替之地之狀如件

久多見 豐後跡事所宛行也但本

貞和六年正月二十八日

判

右爲恩賞之地所宛行也早守先例可分領掌

之狀如件

肥後國岳牟田莊內鹿子木等跡事

下 詫磨別當宗直

詫磨別當太郎殿

國人三一九

貞和六年八月三十日

右爲勳功之賞所宛行也早守先例可分領掌

之狀如件

肥後國神藏莊闕所等事

下 詫磨別當宗直

詫磨別當殿

判

貞和六年十一月二十二日

守先例可致沙汰之狀如件

伊勢國守護職事

判

貞和六年八月三十日

之狀如件

右爲勳功之賞所宛行也早守先例可分領掌

播磨國五莊䮾遠江國濱松莊 - 長井

縫殿頭所領等事

下 詫磨別當宗直

卯月二十一日

判

貞和六年之狀如件

右爲勳功之賞所宛行也早守先例可分領掌

下 詫磨別當宗直

筑前國息濱地頭職事

宗直

肥後文獻叢書第三卷

さうそくのせうもんらをあいそへてちや

くしたるあひたちかふさにゆつる所しか

りつほつけはへつしにありたのさまだけ

なくちきやうせしむへし御事かひて分

けんにしたかひてつとむへきよてたに

ちのためにゆつり狀如件

元中三年二月一日 沙彌良清判

詫磨別當太郎

右馬權頭

雜訴決斷所諜 肥後國衙

大友詫磨別當太郎宗直申當國神藏莊地頭

下司兩職事

右宗直當知行不可有相違之由可分下和者

以牒

建武元年三月二十五日

左衛門大尉坂上大宿彌 判

右中辨藤原朝臣判 以下名略之

又同日筑前志摩郡志登社地頭職同年

十月十六日相摸國大友鄉田地一町屋

貞和五年十一月十九日

筑後國守護職事

貞和三年十一月十九日

判

右守先例可致其沙汰之狀如件

判

右爲恩賞之地所宛行也早守先例可分領

之狀如件

筑後國竹野四鄉地頭職肥後國山本莊地

頭職肥前國山田莊地頭職事

下 詫磨別當宗直

大知事侍從藤原期臣判舒略兒

以下五人

中納言兼左京太夫

大藏權大丞三善朝臣判

建武二年六月一日

可沙汰居宗直之狀牒送如件以牒

牒件地頭職事任去年十一月二十六日綸旨

詫磨別當太郎宗直申肥後國大浦皆代地

頭職搞事

雜訴決斷所牒 大友千代松丸

敷等就"安堵之事,牒,二國國衙 有下

知牒送 略之

1111K

-宗政

某

直貞

具書

二十一日御赦書 副神狀 如此當知行實否

支申之仁有無載起請之詞可被注申也仍

執達如件

嘉曆二年九月二十日 掃部助判

磨豐前權守入道殿

之親

香鶴丸

建武元年十一月有:從弟宗直之讓狀,

菊犬丸

詫磨彌次郎

元亨三年十一月親政與貞政】讓狀中太

郎菊鶴香鶴菊犬兄弟四人行

綱太郎 豐前太郎

剃髪法名良清

貞】

ゆつりあたうつな太郎かところ肥後國

かみくらのうちおやにて候ものゝて

よりゆつりたひて候田地畠ところノ

のしよりうつな太郎にたひ候ところな

りつほつけはふやにて候もの ゆつり

あいそへてたひあいしるさす候よ

-親房

新撰事蹟通考卷之二十

右件所せんそしやくそんより親政の弟

三七

ゆつりあたふひらたの彌二郎親房かところにひこの國神藏莊平田村ちとうじきの事

平田彌次郎

八郎 法名雪阿

承候了 判

曆應三年十月日

右去八月二十四日遠江國大退羅城夜討

合戰之時打入最前城内御敵追落燒拂城

塌致軍忠之條御見知之上者預御證判彌

爲抽忠勤粗言上如件

詫磨七郎之親申軍忠事

年考

建武四年二月之親軍忠申狀有之

元亨四年二月二十九日

豐前太郎貞政判

詫磨七郎

てのちのためにしやうくんのことし

|一親政

貞重

武貞

肥後文獻叢書第三巻

與寂意代親清 年貢相論」前遠江 守 執達

狀今者寂意死去运

詫磨別當次郎

-秀

某 一房丸

女

|貞政

筑前志登社雜掌成朝與,吉富名地 頭 詫磨

1房丸,就三年貢等相論 有 嘉曆二年九月

修理亮平朝臣下知狀,其中一房丸幼稚

之間母堂藤原氏 双元亨三年三月下知狀

能秀遺領神藏莊地頭下司職以下所職筑前

國志登社地頭職事總領主一房丸與豐前

權守親政` 雖」及訴陣,親政子息菊犬丸一

房丸親父別當次郎武貞有 志 之 間 交寂

尊之讓狀孫一房丸

熊鶴丸

某 幸一丸

詫磨叉三郎

弘安十一年四月寂尊與 熊鶴 有,讓狀,延

アタフ

慶二年正月貞重 貺嫡子幸一丸,讓狀 有

親基

、之其末寂意加 一見了

詫磨彌次郎 豐前權守

剃髪法名寂雄

詫磨彥二郎親基同舍弟香鶴丸申肥後國

神藏莊內吉永與安彌吉名等田園事去月

磨彥二郎

菊鶴丸

康永三年三月十八日式部丞判

武以來都鄙合戰之賞配分如件

右任曆應四年七月二十二日御教書為建

號詫唔

詫磨豐前太郎貞政

詫磨一族勳功賞肥後國安富莊

同國神藏莊內闕所等事

寫 午編

11

元亨三年十一月六日有,,,,豐前 權守藤原

詫磨豐前太郎

磨九郎太郎親淸妻

詫磨新三郎

法師 糍銘 舍弟彌次郎親政

法名

正和三年九月二日前上總介下知狀賴秀

親政讓狀 建 武五年四月十八日大友

詫磨豐前太郎源貞政軍忠 申 狀 有」之輝

新撰事蹟通考卷之二十

神藏莊地頭下司職付給田組舍弟等讓分除之

讓與 太郎賴秀所相傳所領所職等事

剃髮法名寂意

-賴秀

詫磨別當太郎

女 菊池隆泰室

-泰秀 六郎 法名蓮西

|秀親

書亡父淨意舍弟秀親,

11

按此文書中淨意跡犬太郎丸又犬太郎丸之

11

元德二年二月十日 修理亮平朝臣判

淨意子息犬太郎丸相論田畠屋敷事下

西花門院領肥後國鹿子木東西莊雜掌源盛

與東莊五郎丸名地頭詫磨別當又四郎入道

-某 犬太郎

前上總介平朝臣 判

·德治二年十月二十二日

右禮子配分如此早守先例可分領知之狀

如件

筑前國志登社地頭職進舍弟等办4人

右件取領所職等任將軍家御下文代々知行

無相違仍相副御下文所讓與賴秀也但公家

關東御公事等者隨分限舍弟等L分配分可

分勤仕之狀如件

按正應六年九月十五日有賴秀之讓狀,正

和五年三月十七日有 寂意之讓狀,皆無

」當叉文保二年十二月就-志登社雜掌教賢

11

九八

弘安十一年四月二十五日 沙彌寂尊判

黑石原

そくなり

門内鳥栖名田但舍弟等かふんはのそくな

同所職等 白河津本司職彌石名同所職等

但安家莊官職のく同名門内四丁阿良社

敷地がめのこうの村といふたしつるき

かふんはのそくなり

木部名但舍弟つるきくがふんはの?

興安名だし舍弟等のふんのそく

石丸名付吉永田畠ら但つるきくかふ

のそく

-宗秀

D所領也祖父大友豐前々司能直親父

詫摩別當能秀代々將軍家御下文を給

知行さをいなししかるをなかひて

能秀之ゆつりを得てなしくあんと

の御下を給りて知行者也關東御

公事於ては所領のこんけんにしたか

ひてのこりの子息をあい∞よふして

きんしせしむへき狀如件

加:地子米,能秀代幸阿於 關東 致訴弘安二年卯月三十日 藤原長秀判

四郎太郎

泰長之孫 瀬

系

詫磨四郎太郎宗秀謹而言上

-顯秀-

欲 早任本主行西建永元年八月日寄進

狀井關東代々安堵御下文御下知狀以下

手狀等ı被停止小河三郎安祐非分競

望肥後國鹿子木東莊內橘村地頭職 事

右地頭職者曩祖大友豐前&司能直之時行

西奇引進之,仍能直次男詫磨別當 能秀傳

領之ı後以】件村代官職,令」補一任行西子息

屋敷一宇 敎西跡義房居屋敷

中略

黨酷】

一所九段

石夕町

村吉又次郎

西跡

田地三町肥後國合志郡村吉村 林進詫磨叉四郎顯秀

弘安四年蒙古合戰勳功賞配分事

剃髪法名淨意

灭四郎

貞和四年八月日

詔

之處能秀預„裁斷御下知」之上能秀子息長

秀以:永八年十一月二十一日賜安堵

御下文,以至„于宗秀|數代當知行無相

違, 之處小河三郎安祐乍、號 當莊土用丸

名領主,令」 競ń望宗秀知行橘村内,及亂

訴 之條太髣髴也取詮召給訴狀,可以被

、經„淵底之御沙汰,之旨爲、被仰下奉行

人,言上如」件

西願

遠秀 | 之處西願子息秀元依」 令,未進

1111

某某某

-直秀

右依弘安四年蒙古合戰之忠所被宛行也者

守先例可分領掌之狀依仰下知如件

長秀

弘安九年十月廿八日 相摸守平朝臣判

陸奧守平朝臣判

泰長

三郎

讓與 藤原直秀所

在

肥後國鹿子木東莊內南山室地頭職事

右自亡父豐前々司能直之手讓得之賜將

軍家御下次能秀分知行之處也然三男直

秀讓與畢無他妨可預知但於關東御公

事者隨分限可分勤仕之狀如件

大王丸

弘長二年八月三十日 藤原能秀

大法師丸

乙王丸

文永九年六月十一日直秀與以上三人,

有 讓狀

新撰事蹟通考卷之二十

内111 1.11]

右件所領等地頭職并所職等長秀相傳

一些七の郡内惣社名宮屋敷地以下

地頭職

一門分除

鳥栖田地屋敷旭女子等

一同莊内惣別當職事

一同莊内弘納名地頭職"女子

一同莊内十禪師神主職事

一肥後國神藏莊内千見名地頭職事

一同莊内石丸名地頭職井一莊圖師職

事

一豐後國大野莊内志賀村ほりけの名

地頭職#5田上家分田畠及公

職事

讓與 相傳所領井所職等事嫡子泰長

剃髮法名道圓

四郎太郎

四郎

剃髮法名寂尊

——時秀

詫磨別當次郎

時直 左衛門尉 以下兄弟載,大友系圖,故略

弘長三年卒年六十六

續〃少貳職,終以爲家號」又支流省 別當,

命族

ニテ

按補 別當,國限〃此郡,外無、任而代々襲

其職,終以〃詫磨別當,爲〃此家稱號,猶

武藤資頼爲 太宰少貳 代々居 太宰府

シテ

此文書時秀兄弟名等載」之故書」之其餘

能秀之代仁治建長應弘長年間鎌倉下

文下知狀等有„„數通

1

永八年二月十日

鎌倉殿仰下知如件

右訴陳之趣子細雖多所詮賴泰者有本主能

道遺言之由雖帶後家尼｜狀後日讓能秀

時景之時 任建長御下知狀

四年五年 下知狀

有 能秀跡#蓮景知行不可有相違之 狀 依

肥後交證書第三卷

二年八月能可分早詫磨別當次郎時秀法師 鉣 顏知筑

前國志登社地頭職禮前女同事

菊池二郎母

文永四年十一月二十三日 相摸守 判

左京權太夫判

亡父能秀書置狀事訴狀遣之可辨申之狀依

仰執達如件

三十日

詫磨別當二郎時秀申

藤原秀

弘長右自亡父豐前々司能直之手讓得之賜將軍

家御下文能秀分知行之處也然時秀讓與畢

無他妨可分鎮知但於關東御公事者隨分限

可分勤仕之狀如件

肥後國内神藏莊地頭下司職事際舍

木部 鳥栖 拾參町但除舍弟分殘所

在

讓與 相傳所領等地頭以下所職等事

藤原時秀所

蒙古襲來合戰繪詞書詫磨別當次郎秀肥

後人

1111 11

能秀

|親秀

長男也大友大炊助 系在」別

嘉祿二年十一月六日親秀授„能秀,有誓

書,傳„于詫磨家,

二男也 次郎

詫磨別當

11

按補〃詫磨別當,年月文書等無〃記載,仁治

三年十月二十三日鎌倉下貢 馬 料等

可調進¸旨相摸守執達狀有〃〃詫磨別當殿,

是見,文書,始也武家盛衰記 膕俋略 建 保 元

年八月賜 詫磨郡 補〃別當職安貞二年

叙,從五位下任,肥後守,永

任 肥後守1

國志略

引之

付木部

可分早藤原能秀爲肥後國 神 藏 莊 樹

地頭下司職事

鳥栖等

右人任亡父能直朝臣之讓狀爲彼職守同知

行之例可致沙汰之狀依仰下知如件

貞應三年四月二十六日 前陸奥守平判

前豐前守能直朝臣存生時由緒相傳領掌名

々配分內次男能秀分領事

肥後國神藏莊裝

新撰事蹟遍考卷之二十

按文書中載-貞應二年十一月二日有的1111 1

蓮景

景法師 T - 相論相摸國大友莊內屋敷名田

法名

大友出羽前司賴泰 泰州 與詫磨別當

能秀子息時秀直秀長秀等井大友兵衛尉時

*直親秀之子

始名式部大夫

能

直之讓狀」今不傳

11

貞應三年五月二十一日 前陸奧守平判

右人任讓狀分知守先例可致其沙汰也依

仰下知如件

長浦三郎遠秀沙汰橘村井五郎丸南山室村

地頭加治尾名伊平次宗次方

鹿子木東莊內

大野別府內尾崎村

眞三太夫沙汰惣社敷地內屋敷在家免田散

在名田畠黑石原

同國飽田郡內

石丸名 同田所職 同圖師藏 小石丸

彌石丸 河良宮 吉弘名田畠 久末寺名

陣付井土々呂木 年預職 得丸 三郎丸

平丸 與安付 惣別當職 千見 重富 上

家分倉富名等

寬永十年九月奉„仕 御當家

次郎左衛門 始名惟

耶組四百石北里又作

外義 又作 加藤家侍帳中川平九

領二百石.

天正十三年石櫃城退去慶長中 仕,加藤家,

右馬助

-重義

次郎左衛門

惟連 十郎左衛門 爲"下城鄉長1

寬永十年爲三小國鄉長,正保二年六月四日

死此家代々任三鄉長

惟宣

肥後文獻叢書第三卷

傳兵衛

能直傳大友系圖著」之

11

木部村之內小名

諸記無」所」見今不可考

今不分明,其頃

後,然下文書 木部鳥栖住人 `磨郡 鳥栖

木部

テス

按大友能直爲„豐前豐後守護¸來居豐

右人補任彼職之狀如件以下

承元三年十二月十一日

ミニス

左衛門尉藤原能直

補任 地頭下司職事

人

將軍家政所下肥後國神藏莊木部鳥栖住

所藏文書

大友家始祖

藤原能直

左衛門少尉

後守

詫磨

系圖之八

新撰事蹟通考卷之二十

111.10

新撰事蹟通考卷之十九

義直 大和守 同守關田口鐘城,

-義章 式部少輔 同守陣鼻城

義元 越前守 同守„動目喜城,

力

延文四年三月菊池武光討,大友氏時,親率

兵至三豐後 阿蘇大宮司惟村通„氏時, 結 九

寨於小國,絕,其歸路,正義守 櫻尾城,武光

悉破其九寨

始名包義 仕 阿蘇家

正義

北里加賀守

-守次 松岡丹波守 爲執事松岡某養子,

滿義

北里次郎左衛門

北里安藝守

-義房 北里備前守

-義親 綿貫五郎左衛門

定義

北里加賀守

地志略日綿貫次郎左衛門妙義自,,鎌倉,始

來,,東肥,住,小國,壽永年中人也不知孰

是,今從家系圖

11

-惟義

-正義

-兼義

-惟昌

惟經

寛永九年十月二十三日死年八十八

右京進

始名義

參河守

築 小國石樻城,

大藏大輔

大友義鎮貺,,領知證書,

加賀守 實正義之弟

次郎

川,戰死年二十九

天正六年十一月從三大友義鎮, 於氵 日向耳

੭

伯耆守

按自,延文四年,至三天正六年,二百二十年

代數三世恐此間有,,數代脫漏

安藝守

右早川系圖自 秀村[至秀家 九世從⺡　建長五年,至

-秀貞 早川丹波守

後仕 加藤家

|秀家

早川越前守

分三甲斐宗運,討之宗運往圍 數月城固 不

下惟將又遣 休雲及伊津野山城守,與宗運

合」兵攻、城守昌亦請,援助於宇土 宇土顯孝

發〃精騎 救〃 隈莊,三月十日休雲及宗族與,

宇土兵,戰 于舞原,多死」之法名善心號, 松

月院,

テムコト

天正八年隈莊城主甲斐守昌反大 宮 司 惟將

妻甲斐宗運女

吉秀

早川越前守 剃髮號 休

女 吉人妻

守臣也領,安見村

1

母鹿未安藝女 4

豐田城主村山丹後

始名貞許 剃髮號 玄察

惟淸

鍋坊丸 孫兵衛 社司慶按年

爲社司,

肥後文獻叢書第三卷

母佐々原後藤兵衛妹

爲〃居所,元亨二年有:鎌倉下,元德元年七

月九日死年八十一

自』信義,至〃妙義,其間數代系譜不」詳築 櫻

尾城,

家號改ņ綿貫」爲:北里,

妙義

次郎左衛門 剃髮號〃實,

來〃肥後¸僑〃居阿蘇郡小國鄉北里 後改, 綿

貫次郎左衛門信義

歳修驗者因幡坊 甗介保之

歳修驗者因幡坊齜蚍 ·北里家筑

永承五年頼親有.罪流 土佐,幸鶴年 財 二

11

11

次郎左衛門

信義

頼親之五子 幸鶴丸

檢非遺使 信濃守 大和守

源頼硯

滿仲之二子 正四位下 左衛門尉

阿蘇家臣

北里

天正十五年,三百三十五年疑代數多有, 脫漏, 叉一本

爲,‶之子正其子進其子某其子秀久其子秀村, 今 從家

系圖,

ラグハ

撰事蹟通考卷之十九

邦秀

式部少輔

吉盛 石見守 社司

大永中於. 玉名郡筒嶽,戰死

吉貞

民部丞 社司

永正中於„堅志田,戰死

|乘吉

民部丞 社司

爲社司,

吉俊

渡邊民部丞

致仕後築„城於矢部莊猿渡村 爲 隱寓所,

號 古蘇武良城,

11

後削髮號 離風】

正秀 -

式部少輔

吉忠 兵庫介

吉爲

-澄吉-

兵部丞

兵部

-成吉 兵部進

-吉長-

吉行

-吉次

某

吉政

剃髮號 休也.

渡邊孫兵衛 社司

妻伊津野四郎右衛門女

母小鰯上野介女栩

九郎右衛門

道願寺主馬助妻性

母同上

渡邊孫四郎 軍兵衛

母邦秀女

本願寺|入. 釋門,後歸鄉開 西福寺,

後讓„家於弟吉次」剃髮號 空圓,至京師

渡邊又太郎 石見守 社司

天正八年與,休雲,俱於,,舞原,戰死

渡邊右衛門大夫 社司

渡邊左近

秀

省

|綱

充

ミツル

肥後文獻叢書第三卷

11

箕田源次

作宛

天曆七年死

渡邊源次

テ

進

綱十三歲時爲〟伯母養子,住氵 攝津渡邊,因

稱:渡邊,老後又退引居箕田,改名 綱 萬壽

二年死年七十三

次郎

奈古屋次郎

秀村

播磨守

瀧口大夫

-秀清

渡邊源次

吉清

補,肥前上松浦守護,兼 宇野御厨執行 永

居」此以„松浦„„稱號

-直吉

松浦小次郎

兵,戰死」之

建武三年三月從 大宮司惟直, 與, 足利之

式部丞

秀清無、子因兼社司職,

早川刑部丞

爲,早川三社之社司,

渡邊次郎

彭城居」之自」是叉. 早川 爲家號

進四代孫也建長五年領,益城郡早川村,築

渡邊近江守

舊稱渡邊〝

遺腹之子也來 肥後阿蘇 仕氵 大宮司, 復

渡邊次郎

仕 源爲朝,保元元年七月於〃鳥羽白河殿,

戰死

松浦次郎

二子玄蕃允惟義三子惟八宗運軍記嫡子宗立二男藏

爲〃稱號¸嫡子參河守鎮隆入道宗立九州記長子宗立

治亂記

按宗運之男子大友記 一銘仇州 男子六人各以, 阿蘇

女 甲斐親英妻

女 伊津野山城守正俊妻

女 甲斐伊豆守守昌妻

某 十郎

某

仙千代

某

孫次郎

女 早川越前守吉秀妻

女 木山備後守惟久級,妻

郡六个村地藏堂,爲 毛利勝信之兵,被」誅

作¸亂襲„隈本城,終不」克而敗走後於1

スニ

天正十五年八月 佐々成政攻„„ 隈部親安於山

鹿郡城村之城.宗立及菊池武國等爲 謀主,

後號„入道宗立,

-親秀

相摸守

-親常 主膳

阿鄉 故以„箕田 爲家號 天慶五年五月卒

仕

11

從五位下 武藏守住„武藏足立郡箕田

大納言

正三位

承和五年賜„„源朝臣姓,寬平七年八月薨年十

從一位 左大臣

源融

嵯峨天皇第十二皇子

渡邊 早川11

汉

蘇家臣

右諸本各異矣今據„宗運之書牒 不」諸書

男次郎惟義三男五郎惟秀島津家傳長子參河守次子

相摸守親則繼„父跡,三子林越前守與,父不」睦赴

肥前¸後來:薩摩

瑞著

人三男三郎四郎四男四郎兵衛新編古城考

11

森本一

珍重候隨而至隈莊御入魂之趣尖得其意

雖近年承及候任無指儀自然押移候砌示預

11

十年正月の書なりけり

しを乞得たりこれ天正の

令傳在八代西垣某之家,其包紙寬栖 此頃 二見

にゃ居りし此書傳へて葦北の二見村の民家にあり

11

返宗運贈„尾張守剃髮

甲斐親英參

三月七日

專一個以此旨至長鶴能~異見肝要候此等

之趣大方以一書申進候爲御存知候愚老意

分之段尖致入魂不殘心底候間相構而朦氣

有間敷候又々彼一通無申迄努々不可有外

見候猶細碎之様體含口上候間分省略候恐

11

重恩名字旁鬼 籠 候其故加舊冬從豐州

以真光寺隈部合志之事如前々可顯忠意旨

宗運被賴思召候段被仰下雖斟酌奉存候

難止種々盡口態候何扎如順路可勤忠心

之通以使者申上候拙者滿足之體可有推量

候如斯別外聞候條彌申談名字長久之才覺

肥後文獻叢書第三卷

島津臣鎌田政年1 翰

此書某

某

親房

後仕"加藤清正

九兵衛

後仕凱加藤清正

彌左衛門

記宗運之弟

爲_岩尾城守將

11

坂梨惟延筆

左近將監 武藏守

御館

鎌田寛栖

宗運花押

正月四日

三〇四

候兼亦相良家之事對貴家累年表裏之旨細

碎承知候當方之儀依隣所代々一致之姿相

談候處時儀如何候歟近日以悔變此表江取

懸候之條遂一戰爲始義陽數百人討果候可

有其聞之間不細籌候從元社 無音心外候

半御懇書本望候餘者於連々可申承候條先

省略候恐々謹言

態用一筆候仍長鴒事氣任深重候條爲折檻

舊冬以來遠方隱住候由L候如此仕合何故

可爲疎略之儀候哉倍申談怫名字可別外聞

無相違様との

事其方夫

婦連々撫育疎略故法外無道候殊更矢部於

御殿中狼藉不穏便就中一臺孫市下玄番

允腹切せ候事前代未聞雅意不及言語

其外至諸傍輩中寄合被官以下不決實否或

討果或分追放事當家遠近驚耳自儀候相伴

無道之黨類様々爲宗惡口謗言侍之道一不

嗜朝夕事言語同斷也小家之在家汇分出入

而已殺犬鷄於目前料理庖丁不及是非仕合

候外聞實儀不可然様體無念千萬候其上諸

人致 致秘藏刀馬於其餘色々致押乞押取

事無勿體子細候如斯之時者悴名字滅却候

根元候至鳥類畜類蝦蟇蚯蚓迄∞子を不便

不存者無之候雖然亡家亂國之惡行人性古

今の掟

撻無紛候既大内陶道麟獨子にて候次

郎不義人故汇被分誅伐候近以天草之大夫

三田井親氏舍弟長親氣任故に被致成敗候

新撰事陸過考巻之十九

字之難無之度々御用戰一度不分敗北候御

當家至豐州御家汇抽奉公到忠貞候故蒙御

鹿子木寂心之孫鑑員茂惡行人故被刎首

其外何扎直子直孫腹切候事惡行之

根本人故皆以如此候隨而某次男孫次三

男仙千代四男十郎企逆路候條何樣心之及

雖異見加候一圓不致承知候故悉可討捨覺

悟候處豐州表江立退候を俵山追懸兩人討

果十郎逃延居住不知不及是非候雖爲親子

惡人之族者如何樣之無分別在致出候而

渡奉對 上緩怠悴名字中聊無自他之嘲

度候長鶴事爲某は孫て候其方は親子依

爲骨肉同體令申事に候兼而は又度々如申

聞候亡父親宣奉對惟豐樣豐州被抽大忠

故御恩賞越他于今分連續其方同前之儀候

條不能口態候就夫大永三年癸未之四月某

九歲成候時親宣菊池義武公之被懸御目候

事無其紛候義武公被仰候は文武之道心か

け遊山逍遙を可令失念旨被仰聞耳底聽納

乍若輩尤致納得其以來至老身%一生中名

||親直

11

11

宜以 惟豐 爲」 主厚供引給之,終聚」土豪,將

其兵,襲,矢部 惟前敗走永正十四年惟豐還

矢部,以親宣之恩功,爲家老職,居:諸臣之

上,以,,南鄉岩神,爲 居城,阿蘇系圖 可合見

諸書年月之 組語等 詳

大永三年始謁:肥後守護菊池義武不知其

按一本親宣爲:重村之子, 双 親宣之 二子

載 甲斐七郎隆昌 爲隈莊甲之祖 非也年

マンラン

代相違孟浪可以考

民部大輔

削髮號„宗運蕉夢

11

永正十二年乙亥生後大友義鑑授名一字

日:親直

或後及雅豐與嫁通天文十年十一

月御船房行反惟豐遣 其子惟將討之以親

11

直,爲三軍帥瓤直二十七歲

時惟豐年四十九房行迎來戰, 木倉,

房行敗死惟豐賜„御船城於親直˛

按菊池傳記等不」揭年月,或有衤 作大永六

年,玼年價値不、載„惟將, 者』 今從 下田家

11

記宗運贈氵 甲斐親英 書 「智健軍城主也

【出 拾集昔語 宗運

按宗運死年或爲 七十一」叉爲‟七十五 宗

運大永三年癸未九歲 于據、之則永正十

二年生此歲六十九今從」之

11

十九法名宗運蕉夢葬,于木倉永壽寺, 黼志

原合戰記

忌猜,天正九年破,相良義陽於響原,而殺」之

麾下僉祝」捷宗運不」欣歎曰義陽者當時之勇

將也島津義久不」能」入〃兵於阿蘇領者有〃

義陽,故也今義陽死吾亦老吾死 則必不俟

三年,而全領悉爲〃薩摩之有,果而如」言 拾集

天正十一年癸未七月五日病死年六

シテ

宗運軍記響

チ

續„父迹i爲 阿蘇老職| 宗運精„兵法, 有,智

¸戰跡 詳 諸書畫

略,每、戰終不」 敗

及宗運

編年考徵,故略之

爲ˋ 相内修 政務 外總,軍旅,愛〃士衆,撫,民

庶ę故雖„新叄 也譜弟舊老之士皆順服而不三

、疑之甚也故不.

ナリ

御船素阿蘇之領地義長 與, 之於親,

ヨリ

,又古城主考引, 甲斐家譜, 日永正十四

年大友義長與,御船五百四十町於親宣

11

111011

敦昌

運

-重久

-重綱

-重方

· 昌

-重安

甲斐出羽守

應永三十四年生明應四年乙卯三日朔日死

年六十九法名攝憐祖傳

下城左馬助

隱岐守

重藤

甲斐敦昌妻

七山左衛門太郎

黑仁田重直母之父

參河守

犬房丸 和泉守

亨德二年生永正九年五月二十二日死年

六十法名清岸淨了

刑部少輔

女 甲斐親昌妻

犬房丸 上總介

文明十六年甲辰十月十三日生天文七年

戊戌六月十八日死年五十五法名祐翁文保

十三年總昌院建立號總昌院|

邓考卷之十九

川|◎1

前」彼、攻逃」矢部館 而來 鞍岡 倚,,,,親宣,親

親宣潛一居日向鞍岡,阿蘇大宮司惟豐爲 惟

重綱之三男

|親宣

甲斐大和守

鎮昌蚤夭家絕傳守昌之譜中可 合見

11

カ

タリ

母甲斐誠運女

鎮昌

次郎

-武昌 兵庫頭 鑑昌一同生害

-昌興 兵部大輔

内,生害

天文二十一年三月二十七日於 日向山

|鑑昌

若狹守

改隈莊】

11

隈莊,五月二十九日隈莊城入部以後家號

永正四年丁卯十月三日生 天文十二年

母下城重昌女

親昌

隈莊甲斐守

-誠昌 家長門守 日向高千穗河内城主

-守昌

テ

チモヘラク

肥後文獻叢書第三巻

シム

氏命而爲,肥後守護,討 菊池武重 重村大喜

以 爲 躍龍之時 至 迺引」兵到西|改家

號爲„甲斐 元三年九月與, 大友之家人

等,合、兵而襲 菊池 菊池武重聞」之逆戰合

志鞍嶽 重村大敗走„豐後,終趨„日向,寄寓

土持榮鋼

レトモ

甲斐

重

伊豆守

11

シテ

11

按一本甲斐系圖武本重村之間有 武定 武

治武忠忠重,又一本作 武本隆長重幸重伸

重藤重村 菊池傳記重村者武本四代之孫

ハカリ

11

也然 推 年代, 其間大略 可,三四十年,而

至六代,本文三代系圖叉別本爲、之 今據

之

按一本重村重並之間有ņ 重盛 重俊重家重

元重治重定重續七代,今略」之

右馬允 伊豆守

重並之曾孫

守昌爲_隈莊親昌之執事職,親昌死其子鎮

繼守昌嗣„其家,逐爲„隈莊城主 甲斐宗運

以, 其女,嫁」之天正八年春 先」是守昌叛,

阿蘇 就宇土顯孝ı而通 薩摩㎝阿蘇大宮司

惟將令三宗運ı討之宗運圍而攻之城堅不

又傳記此時守昌戰死覺書拾集昔語後得

大宮司之免許 歸隈莊天正十五年秀

吉征西之時從„島津家|赴 薩摩 家絕矣

シテ

11 11

11

‵此役具于編年考1

▲下又遣 早川吉秀伊津野正俊, 各帥,家

軍,與,宗運合」兵攻,之三月守昌兵竭力

窮請:助命,惟將釋」之除城邑,不知其

隈莊城合戰覺書

按菊池傳記爲三天十八年三月,宗運軍

記拾集昔語爲 永祿八年三月, 然 合戰

覺書天正八年二月二十八日宗運出軍三

月十日早川吉秀與 宇土援兵戰死之

三月下旬落城吉秀墓碑銘〇〇八年庚辰

八年也 三月十日且宇土顯孝去年春初屬

島津 爲此年明也故 今從ń 合戰覺書

11

昌年甫四歳以｣故守昌擅„家政,鎮昌夭無｣

11100

新撰事蹟通考巻之十九

皇の所に謝り 瓶玉阿蘇國造にならし事は前に見

へたり國の造は今の國守のこときるのなれは左∞

云へし肥後國主とは何ぞや云高砂の謠に出たる

阿蘇宮の神主友成延喜十六年春京都に赴く時のこ

とす阿蘇家惟泰以前は別で家傳系圖等髣髴とし

て分明のことなし友成高砂の事まて記載あるは

いか疑へし又云古は肥後國一圓神領なり天正年

中にいたり僅に盆城阿蘇二郡を領すと云々阿蘇神

顔は阿蘇谷の内鋼の個甲佐建軍郡浦三社の神領是

を合阿蘇四箇神領と云大宮司私領は代々の讓狀

のことし惟時惟澄神職を以て干戈に携はり南朝に
仕へ奉り惟村足利家に屬し薩摩国守護職或は肥後
の内肥前豐後の内所々の地頭職等に補任の論旨
旨書等はありといへと代々全く是を領知する
事はこれなし惟豐か代に至り兵威に勢大になり
阿蘇盆城二郡三千餘町は大略之を領す肥後一國神
領とは無稽孟浪信すへからす
主なりと玄古の事能く知れり然れとも其頃阿蘇葦
北天草三郡は火の國とは別國にして各國造を置
編年考徽崇神天
武本之兄菊池隆盛先」二九九
重村在甲斐集」兵將之往屬足利尊氏」尊
民部大輔
-重村
菊池六郎
停住都留郡.
トママリ

從」父赴鎌倉 ı 父變死武村逃至 甲斐國」

武村

テ

菊池五郎

ス

菊池武房之三子

父死故 隆盛之子隆

續祖父武房之遺跡」時武本争繼立」遂到

鎌倉」 北條家」到歸地於時隆武本憤之

相刺而死歎旧峡

ス ニ

テ

藤原武本

菊池六郎

甲斐

系圖之七 阿蘇家臣

新撰事蹟通考巻之十九

一惟善 代の孫惟学か日健磐龍命始山城國宇治郡に

居る故に宇治を姓とす其後阿蘇君の姓を賜ひ國造

す

神八井耳

命の孫瓶玉命とあり故に是を直孫と見中に健磐龍を入て三代と

するなり燃れとも神武天皇・ 崇神天皇まて五百年餘健磐龍速瓶

玉二人にて其長年を経ること疑しからずや

舊事記は後の意なるべ書中其例あり

延喜式に健磐龍

命神阿蘇比咩神阿蘇國造神を以て阿蘇三座の神と

す然るときは則ち由あらん上世遠遼得て詳にすべ

からす叉景行天皇成務天皇の頃惟人成輔成等の

阿蘇比咩の

名を負國龍吉見神の子に

天彦神其子四

權大宮司の

郎吉成五郎吉治等の名ある皆家説に從ひ強て論せ

ツキ

十三年皇世十二代阿蘇に三代其壽の長きこと思

へし又健磐龍命は神八井耳命の子速瓶玉命は健磐

龍命の子なること正史に見る所なし阿蘇大明神流

「徳三年閏九月

注進狀又交明十七年の牒等には健磐龍命は神武

天皇第二の皇子以前の記一定ならさる事速瓶玉は神八

井耳の孫淇父の名

さずにして崇神天皇の御宇阿蘇國造に

定賜ふことは舊事記に之を載前に見へたり 舊事記に

主とする年

せらるゝ

其子惟人とす今按するに神武天皇七十六年より

一家傳系圖皆神八井耳命の子健磐龍命其子速瓶玉命

肥後文獻叢書第三巻

瑜 20鉗景行天皇十八年まで描いた 凡六百七

姓の人代阿蘇の宮乃神主となり代々其職を嗣か

惟泰以來は系圖のことく宇治を姓とす證とすべし

一惟善四代孫友名官府に達する書に日神武天皇皇孫

健磐龍命を肥後に封す其子速瓶玉命は今云肥後國

漸々亡絕而僅殘者出雲紀伊之國造而已

益々衰弊終如神職巫凧繼其他家に家斷絕 宇治

シテ

シニ

司及置國司職始分園司掌政國造立其下動神

事撰其人有任郡領任者神事」後世國造家

裏て阿蘇宮の神職となり職官志國造其職掌 神事祭祀」

治民事孝徳天皇朝諸國置二

コホノミヤツコ

ること健磐龍命の識中に是を書す 阿蘇君の事古事記に神

武天皇皇子神八井耳命者火君阿蘇君大分君等十九

姓之祖也書紀宣化天皇元年阿蘇君を載然れとも皆

名を書せす其後阿蘇君の名實鎌未是を見す叉健磐

龍命の子孫其姓を賜こと何書にも出す證とすべき

なし又は大宮司の家國造に任し健磐龍命宇治に居

上のこと記載あるへからす何に據るか疑へし

因て考るに始め速瓶玉命の裔阿蘇君の姓を賜り或

は阿蘇の國造に任し或は郡顔ともなり後年其家

に∞任す中葉以降及宇治姓を用ゆ何の故なること

を知すと因て惟幣復古と稱し姓を阿蘇公に改む

君の事後詔有て君を公の字に換

一歴名土代永祿十二年三月十三日宇治惟勝叙從五

位下阿蘇家に惟勝なし惟の初の名か今考ふへ

11

追考

天正十一年十二月二十日生十六年六月秀吉

授肥後國於清正小西行長兄惟光 與, 母祖

附╗衞之」惟光遭」害甫竊携惟善及祖母

出匿矢部後還 宇土慶長五年清正

攻宇土城 昭之惟善在宇土 退三矢

部六年清正與扶祿移居於今地 ╷招散亂

之神官社僧ｌ修宮殿造僧房再興祀奠

惟景惟連薩難以來從幼君」間關流離竭」カ

保護竟全社稷 〜日 承應三年九月十三

日卒年七十二

シテ

從四位下

惟善

松鶴丸 大宮司

惟善 爲三惟光之嗣

譜系

死縣

母ｌ同居隈本」惟善悪行長居 宇土城内」

家臣西源兵衛惟景坂梨彌五助惟連入道甫

むに足す阿蘇家は支族なし唯一家にして異本を二九七

傳

疑へきの甚しからすや

ラ

孫或は其の末裔等稱す故に異名の系圖數本あり怪

一右阿蘇系圖家に詳なる記録系譜なし惟泰以前は尤
說ありといへと思所ありて姑家の系圖に從ふ惟
泰以來は綸旨令旨鎌倉下文代々の讓狀あり其外諸
實録を以是を校訂し之を作る父系圖其家の傳ふと
ころ四五の異本あり菊池家の如き庶流多くして皆
其家亡び後年豪家無名の者金錢を以扶祿月俸等を
テ
受寸志の士と稱し家々に系圖を偽書し菊池の後
一山本郡正院西原村に墓あり碑銘悅岩善賀居士神祇
其左に阿蘇一神前大宮司宇治惟隘右に永祿十二年
二月八日惟將同代の人にして大宮司を稱す疑へし
予其銘を精く見るに盆の字の下分明ならす恐く
は前の字なるへきか然れは惟長か子の惟前にて大
宮司にもなり永祿九年までは文書等に名ありとい
へと其後の事知れされは十二年の比正院にて死
たるか其故は素より詳ならす然れとも古人皆を
盆の字に寫す輙く私に改むへからす

からす

,

薩人亂ñ妨矢部館 惟光後終降屬||島津家|十

家

天正十年二月生惟種卒惟光年甫三歳立爲三

大宮司 鸝十三年閏八月薩大軍來攻, 阿蘇

大宮司

I惟光

長松丸

位牌銘

惟將無」子養爲」嗣天正十一年冬續遺跡

三大宮司,十二年八月十三日卒墓在„矢部畑

村,墓標銘

從四位下

惟種

大宮司

惟種 爲 兄惟將之嗣

顯孝

阿蘇殿

1

十月十日

候表御禮計候巨細尙性岳寺東堂可爲演說

候恐々謹言

肥後交戲叢書第三卷

領,益城阿蘇二郡諸城皆潰矣於」是忠臣舊士

抱護惟光兄弟,避」難而匿 矢部目丸 深山

母犬飼備後守女寬永十三年丙子十二月六日

押方文書古老日記佐々傳記

島津世錄記阿彌陀寺位牌銘

也成政憐, 其幼,卽止 城內,扶助之|八月成

政攻„„隈部親永於山鹿城村城,時賊兵蜂起

襲 隈本 成政歸討„其賊 賊兵敗走阿蘇家臣

甲斐宗立爲,一揆之主長,十六年五月成坐

_背|命賜、死以加藤清正,爲 半國主。惟光

叉倚 清正,復往„隈本城 清正赴 朝鮮之役

有』讒者』至秀吉之營所肥前名護屋,蚣-惟

光畔.成政, 秀吉乃分: 清正之留守居城代下

河叉左衛門元宣 誅 惟光 交祿二年癸巳入

月十八日於. 祇園山,殺」之年十二秀吉後聞

惟光幼穉 而 逢無實之罪,大悔」之云 集散

セシム

ニシテシカモ

チ

五年夏豐臣秀吉征一伐島津義久,親帥 衆軍

來 西國,東肥諸將悉負„島津家 參謀幕下,

各*賜:本領,阿蘇雖」有:三千餘町領,僅以„

矢部鄉内,新與三百町,六月二十五日貺印

證 此月佐々成政爲„„肥後國主,惟光兄弟往1

限本,申, 登城之禮, 于時惟光六歲惟善五歲

11

チメデ

田下野守親貞,町田出羽守久信

方 鎌田刑部左衛門政景坤同

此外島津忠平中務少輔家久薩摩守

義虎和線伊集院右衛門 大夫 忠棟本

阿蘇殿

義

八月二十六日

今度使書來着御懇切之儀候抑爲連日雜話

之辻境目純熟候儀尤珍重候倍永可申談候

事本悦候依太刀織物丁寧之至候自是太刀

一腰段子二 端 寔表嘉端計候猶年寄共可申

候恐々謹言

島津殿

七月三日

准将

ひつし

天正十一年365

みつのとの

阿蘇山新樂坊豪海法印

堺目立物之儀甲斐民部入道申談候肝要候

自今以後於御同前者何樣如先代可申承候

此等之儀用嘉書候條太刀一腰金 織物二端

表禮儀計候猶新樂坊法印可有演說候恐

謹言

二九五

態用嘉札候仍代々申談筋目無他事候處近

年不慮之姿自他之覺不及是非之段至相良

義陽中入候間以調達三家一致之旨成就尤

目出候於向後者每事可申談候御同前所仰

候隨而太刀一腰覆輪金馬一日分 進之

又少貳冬尙伊東尹祐大內義隆三田

井親貞城入道宗梗合志親爲相良義

陽宇土顯孝等有〃書翰 顯孝之書狀

寫之

阿蘇殿

鐮田刑部左衛門尉

八月二十六日

政景

肥州表之干戈無休期之處宗運連日以深重

之首尾去春以來和睦之一着尤目出分存候

爲此等之祝詞御使僧丁寧至候殊更至愚拙

芳翰井 太刀織色一端御懇切畏悅珍重候益

於向後無疎遠可被仰合事肝心候依鷲羽 三

尻 進覽之候誠不顧輕麁補微志計候恐々謹

言

答書狀,政景之書狀寫」之餘皆略

按阿蘇家至 惟豐之世,勢益盛大略領„阿

蘇益城二郡 始屬氵 大友,爲氵 懇親, 至惟

11

母宇土矢崎城主東某女

永祿二年嗣」遺跡,天正十一年癸未十一月二

日卒

從四位下

惟將

大宮司

女 名和重行室

女 惟前妻

女 名和武顯室

永祿二年十一月七日逝去年六十七

藏人頭右近衛權中將源重保奉

宜叙從二位

正三位宇治宿禰

天文十八年八月十四日 宣旨

藏人頭左中辨兼近江權介藤原國光奉

其後獻 禁中修理 料萬疋` 福王寺爲 使僧

至:京師 爲其賞,十八年八月叙,從二位,

上卿新大納言

肥後文戲讀書第三卷

至薩州當方一和被仰談候一通 使節

申談候重緣之儀倍御丁寧承候祝着候殊太

刀一腰馬一疋珍重候從是一振表嘉例趣志

賀常陸介可有傳達候恐々謹言

大友殿

四月九日

准將

宗麟

三月十一日

阿蘇殿

天正三年丙子

就申談候重緣之儀爲祝儀太刀一腰金 馬一

正進申候寔表禮儀候趣志賀常陸介可申候

恐々謹言

友義鎭爲„„島津義久,所」破兵勢大

久乘」勢而犯 肥後,義鎭不」得」制」之諸將

悉應」之雖」然阿蘇領輙不」入」兵者完因

宗運之力,也十一年七月宗運死自」是薩人

稍有-閲„領內¸之心 惟將與, 同國隣國之

諸將,有送答之書簡及留書

11 N

將,有„ 甲斐親直入道宗運,爲 虎牙之宿

將,眷…禺大友 有智謀勇略 天正六年大

-惟豐

年加御縁者候間承候得共隔遠程候申

馴儀無之候新九郎方卒之段承歎敷

儀在世之間不申通候殘念此事候御後室

儀貴殿御扶助之段承分感喜候今度從御

後室祝神之號觀音之像口宣御教書等送

給御請悅杳御懇親之至及感淚候此等之

趣貴殿從御手前巨細被仰傳賴存候猶期

後信之時候恐惶謹言

十二月二日

阿蘇中務大輔

野村源左衛門様

尙々今度遠境預御飛脚其地御堅體之由

珍重候御内儀 預御心得候以上

リト

按阿蘇家記玄譽子新九郎死無,,男子家

絕矣薩州舊傳書玄與其子主殿其子新九

郎其子主膳兵衛其子源右衛門云々右考

留書 家記說可以爲」得然舊傳書 其國人

所.誌不」可以有,, 虛誕, 然則新九郎沒後

口宣等送 阿蘇 之後名跡相續建」家歟

大宮司

明應二年生永正二年冬兄惟長罷」職往隈

新撰事蹟通考卷之十八

十三年二九三

宜叙從三位

上卿廣橋大納言

天文十三年九月十六日 宣旨

正四位下宇治惟豐宿禰

中納言光康來 阿蘇

按前後

九月叙,從三位,勅使烏丸

天文五年十二月二十日叙,從四位上,

位口宣等今不」

傳無、所 考定,

歷名土代

留鏡福善寺在代耥鏡村,今存 草堂

全文載 惟長譜中, 福善寺

不記

年月,其故不」詳長狀天文五年書記然則其

以前之事也古老日記天文九年十二月十三

日惟豐退 高知尾,二十日本意是亦諸書所

因不.載也故附書

11

11

1

洞然長狀日惟豐退 矢部¸賴„相良家, 逗

11

府¸續„菊池家i爲„ 肥後守護, 惟豐乃受 其

讓,爲�"大宮司,十年三月惟長攻, 惟豐, 惟豐

走„„鞍岡¸惟長奪„„ 社職神領, 令, 其子 惟前

爲,大宮司,十四年惟豐討惟長,還矢部

家記系譜古老日記坂梨惟延筆記菊記傳

復職

【記 惟事多著 惟長之譜中,可見

新九郎

タル

之兄而早死乎今無、所以考

11

按歴名土代肥後阿蘇宮神主惟前子宇治

惟富天文八年二月二十六日 叙, 従五位

下,十年四月六日叙, 従五位上, 叉矢部

11

カ

後終死,,于薩摩

仁田水長門守殿

惟兵

市下帯刀允

惟廉同

竹崎千左衛尉

惟貢判

西源介

長秀判

五月二十日

竹崎長門入道

天正十八年庚寅

候は、一方に光様可奉守主之事

右之條々於偽者刈 仍起請文件

肥後文獻叢書第三卷

某

女

福王寺有,惟前惟富之位牌 惟富疑惟賢

未申通候得共分啓入候同氏新九郎方累

留守右衛門督樣

新九郎病死後寛四年自ņ 其妻, 賜

惟前,口宣教書等贈之於 阿蘇, 其時

有„大宮司友貞之書翰留書,如」左

雖未申馴候呈一翰候同氏惟堅事往年貴

家連御緣席候由傳承候得共隔遠縣候故

今迄不申通候同姓新九郎至迄忘親族之

好打過候處新九郎儀頃年卒去候由驚入

存候存世之門不申通儀一入歎敷事候妻

室娘儀貴家被加御憐厚候由承感悅之至

存候今度從後室祝神之號 #勸音之像

宣御教書等被差越候請悅不淺遠香被懸

懇想候條偓感涙候此段能々被仰宣可被

下候猶後信之篩可爲御意候恐惶謹言

十二月二日

阿蘇中務大輔

野村源右衛門妻鸻酸在

行二十石

最勝寺右京妻 同社司知

留守右衛門督妻 知行五百石

1世中之轉變如反掌候之條萬一從此國其

國分別之時者何拙子抛萬事相調御

神頷如前々惟光樣御格護候橉申拵御奉

惟光樣世に御立之時者悖家に無其紛儀

汇候他家之柄居萬事心苦敷事迄候家之

名を失はしと存候條自然之時は被召出

御神領之内に外聞實儀可然樣被召置候

渡、自他國之覺∞可然候才加候

b、主人共親 共可奉 憑外 不可有他心

事

母様光さま御下知之まいたるへく候

一某遠國に逗留仕候以御神慮到來

軍,之時乎

三年早屬: 薩自今以後何篇

正十

之様に候かみ風に夢見て驚申候

按天

11

從此方角打入候時分様體我人夢中

居, 甲佐之時也

分彌其 分 駹 來 侯 然處 乙酉 年

而以宗運致披露 阿蘇家江歸伏之事互

至子々孫々まて非可致忘却事候拙子存

按歸伏來 矢部,

神慮之所深被存取惟前相良義陽談合

若此十條於偽申者如你神

天正十八年庚寅

一世上如何體之轉反付而山野之末堪忍仕

二九一

一至惟光樣相應之御奉公可致當末候事

一惟賢氣任之儀出來候時者一篇に

光樣に可抽忠貞候事

惟賢御神文之上者爲私雖不及言上候

無二之意分以法印畏申上候

天罰起請文

右元者

人々御中

惟光樣

宇治惟賢判

卯月

斯里

N

仍起請文如件

公可申候其曖事ならす候は、火下水底

まてる光公御同前に可爲成立候事

一萬事に付祖母様光さま御下知之外不可

致余人之申事に同心候阿蘇家は余家に

相替候御神慮無純熟事は一圓不可成儀

眼前に候之條怖入候

進狀,其次尾尚宗運可以有傳達 之狀如

7611

シテ

惟前隱„寓薩摩ı有¸年就 相良義陽 請”

宥,義陽以 甲斐宗運,談」之惟前亦再不

、可以背阿蘇家,旨以, 誓詞血書,貽宗運

ユルス

古老日記曰天文九年庚子十二月十三日

阿蘇惟前矢部莊内江發向惟豐高知尾仁

被」退同二十日甲斐上總介親昌舍弟左

近大夫廉昌矢部仁討入惟前兄弟,惟前

按兄弟疑

惟賢然則

父子之誤也

追崩惟豐御本意緞黔無 十二

年癸卯五月八日惟前兄弟堅志田沒落

按拾集昔語惟前爲 惟將之嫡子 而 惟種

之兄,叉此役爲 惟種死後天正十一年,

非也

11

肥後文獻叢書第三卷

惟豐惟將聽」之因而惟前惟賢後悔歸伏來,

矢部,謝、罪而居,甲佐 年月不詳

按惟前歸伏來 矢部 不詳 年月, 推

考惟賢誓書及文書等 相良義 陽弘治元

年續」家孫永祿六年十月 惟前 貺矢

田某,有"領知之證書 田 同九年八月

姚韓田

惟前送 阿蘇山成滿院,有氵 佛牙舍利寄

惟賢

妹子也雛賢年齒定惟前 也 早屬 忠平, 其後 阿蘇領悉蔿薩

摩之旗下,鷁津十五年夏豐臣秀吉征 九

一世上不慮之成立付而壽命之危之爲御

暇乞不申如遠國罷越候事心外候然者先

年御

11

起請

止矣縣覺其後贈 阿蘇誓書

薩摩 永

黑齋玄與覺

薩洲轉書城鎮西悉平明年惟賢往 ニス

國,忠平退 豐後府内 次 玖珠郡野上 招

惟賢¸委 „鄉導¸惟賢擻 道逐」敵饗 薩

惟前,誤也

諸書多作 =

島津兵庫頭忠平來責„阿蘇益城諸城,惟賢

惟賢 誓書,師子天正 十三年 乙酉秋

之

推 之誓書

惟賢從、父居„„甲佐稱阿蘇内記 猻惟將

後祝髮號,,黑齋玄與

稱 新里, 賢叉用 堅字 國訓相通

阿蘇内記

永祿五六年間也

件顯袄知20證據」之則自弘治元年,

領,十四年爲 惟豐,又被、攻一戰敗 而 走..

薩摩

系譜古老日

|記菊池傳記

又來僑居八代,大永三

ニレテ

永正十年襲,,矢部逐惟豐簒 祇 職神

惟前

大宮司

矢部

死去皆誤也

11

按菊池傳記武經出 菊池,無、幾病死坂梨

天文六年於, 堅志田城,死年五十八家傳

鞍蓋 此時也故附書

ラン

11

按大永三年相良長祇代也當方以, 調法』歸

11

洞然天文五年長狀萬休齊同惟前河田江一

兩年御座候其後當阿蘇惟豐被退矢部此方

御賴與風御出候而鏡福善寺江御逗留候何

茂 當方以調法歸鞍候此等之次第其程近事

候間王細不申及

古老日記

11

大永三年惟長惟前自氵 八代,來居„„堅志田城,

下田覺書

君臣之約,密勒」兵伐,惟長,而復„„矢部,然

親直永正十四年僅三歲也故改一省親直,

惟延筆記於〃豐後國津江 死系譜於〝据 拾集昔語

名土代阿蘇宮大宮司宇治惟前

惟豐以〃其女,嫁〃惟前,孫個惟 十二年惟二八九

日記拾集昔語

前

又圖、逆與,其子惟賢,討惟豐,旣率」軍

赴〃矢部,惟豐開」之遣」兵擊之,五月兩

軍會引戰萬坂 惟前大敗而走 宇土郡浦 双

逃 薩摩¸與本系圖古老

五日叙 從四位上,

八年二月二十三日叙,從四位下,十年四月

歷名土代〇此口宜今不」傳歷

藏人頭左近衛權中將藤原孝親奉

宜分叙從五位下

宇治惟前

天文五年十二月二十日 宣旨

上卿今出川大納言

司,與本採七天文五年十二月叙,從五位下,

口宣案

異本系圖

11

自」是稱,兩大宮

惟前之領,

異本系圖分」頒

、勢阿蘇家臣亦來從者多焉於」是老臣等相

議談„和融,以 甲佐堅志田砥用中山,爲

年從八代,來„堅志田城 8與 惟豐

古老日記日永正八年辛未阿蘇家大亂九年

壬申五月二十三日阿蘇惟豐鞍岡御籠十四

而來氵 八代,居河田,燃

1

レミテ

系譜坂梨惟延筆記◎傳記矢部

武經改,舊名 惟長5

爲 堅志田;非也月日据 傳記

稱„阿蘇萬休齊„ 惟豐屏一居鞍岡 有 鄉士

伊集院等兵,來襲„矢部,惟豐不能拒守,走

日向國 知保鄉鞍岡 武經逐奪 家居矢部館

分- 其子惟前,嗣,社職-稱阿蘇大宮司,菊池傳

【記阿蘇

チ

11

テ

十年三月十一日武經率 家領薩摩國 滿 家院

按古老日記日永正八年 阿蘇 家大亂蓋謂”

此役,也下田覺書永正八年大友義長遣」兵

攻„矢部,惟豐敗走又赴氵　阿蘇宮地,縱火

燒„宮殿,遂 神官衆徒行者,然此頃大友阿

蘇和順” 不」可以構､兵其誤可」知也

11

11

菊池 支族 甲斐 大和守 親 宣 者,怜』之集 土

豪 十四年奉„惟豐,自將 其兵 塹惟長 惟

長惟前敗績而又奔 薩摩¸家臣西祭主竹原三

人從」 之惟豐還„„矢部 悉誅,逆臣,以…親宣之

攻大,擢置,諸臣之上一起黼習傳証 惟長 父子後

憑,相良家,

古老日記爲九年,然今

月諸書皆同故從」、之視」之則爲永正未】決而可知也又菊

池傳記於„鞍岡¸與, 甲斐親宜同親直,爲”

テ

ルハ

系Ü 亡父親宣奉對惟 豐樣 豐州被抽大

忠候御恩賞越他于今分連續候其方同然之

儀候條不能口態候就夫大永三年癸未四月

某九歳成候時父親宣菊池義武公之被懸御

目候事無其紛候云 ★ 大永始 親宣 旣 阿

蘇老臣T非„鞍岡之一鄉士,故爲‶麾下之人

臣,謂„一國守護職貴前 是爲, 重臣, 也據

譜爲三天九年,一本系圖爲三大永亨祿間

然甲斐親 直入道宗 運送„„ 甲斐親英, 書中

寫申

!始惟長奪 取社職神領等,者永正十年三

之

惟豐

从:諸書所記爲:十年,

討„惟長,歸„„矢部 諸書不、載,年月 唯古

老日記爲‟永正十四年,今姑據」之 此役系

11

從八代 現形堅志田

年丁丑惟豐自„鞍岡,御本意十五年戊寅六

月惟豐矢部沒落紕� 给大永三年癸未年阿

蘇惟長法名萬 休齋息惟 前 望 阿蘇家督

村山殿

宗直

立田伊賀守

重雄

鹿子木民部左衛門

員

內田遠江守

重國

長田右衛門尉

武秀

内空閑備前守

重載

土田刑部大輔

重綱

長野備前守

運貞

赤星彈正少弼

小森田安藝守

能世

二七

密臻,矢部,圖-拆„„惟豐„復 社職』阿蘇家臣

亦多結附」之惟豐聞」之遣,兵俄攻」之武經鞅

掌無„防術¸遜脫奔 薩摩ˋ 記阿蘇劼日認

阿蘇系譜坂梨推延

シリソケテ

諸臣亦背疎矣永正八年武經懼」難遁 隈府!

惟長讓 社職所領等於弟惟豐 往 限府｜繼

菊池家,而爲„肥後守護,更_名武經 永正三

送 家臣祭主双五郎 有 書狀其後武經舉止不正

記 惟長 然則其後, 武經

右連名諸書出る者と同し故略

して不書

11

11

永正二年,十二月三日八十四人連名

神文

若此條一宗一言申候者

上宮江起請文奉納候上渡預計策候其狀者

一通無詞者一言不殘门等可申

益不可有聊爾候事

右元者當國之事惟長樣可有御格護之由各

申定候於自今以後無二心野心之儀順逆可

奉憑外無餘儀候既如此申定

再拜々々敬白天罰記請文事

菊池家神文寫

當國守護職之事惟長可相計之由如此

惟長

九月六日

就當國弓矢各心底之通以御神色委細承候

祝着候爲當家對政朝其外老中無等閑之

處被取成弓箭候上者不及力候然以豐州相

良長每申談調法之儀不可有油斷候一味同

心馳走肝要候就中隈府國中其外方々可被

廻了簡事專一候阿蘇十二宮大明神其外諸

神∞御照覽候<爲當方各~不可 等 閑候心

事恐々謹言

永正二年九月十五日二十二人連名略

誓文返書之案

神交略

若此條一言茂 僞心當申候者

順逆任御指南涯分可致馳走候各御覺悟之

趣誠御憑敷候御芳恩深未來際無忘却可立

御用外不可有餘儀候自然從隈府計策之儀

候者狀者一通茂不殘言者一言無隱可申

入候呪爲此方不可申歎候惣而可成御煩子

細不可相工事

肥後文獻叢書第三卷

隈部和泉守

爲宗

窪田大和守

重實

田島左京亮

重直

御宇田上總介

武治

隈部式部少輔

城上總介

當國御覺悟之事各頻憑存候處無相違候千

秋萬歳候自今以後無聊爾之儀可抽忠貞候

御敵早々御退治之趣豐州被仰談可爲外聞

實儀候此旨可預御披露候恐々謹言

十一月十八日

大明神御寶物被記置候入物江 納候

後日書寫添文書候畢

以誓交連署去十八日内空閑次郎左衛

門尉爲使被入候此等之儀於後代可相

殘候條正文者於御嶽

二八六

按據 右證書｣熟 考｣ 之始惟忠讓 家職於

惟歳,隱〃居甲佐 及 惟家爲 大宮司, 不

相能¸終構｣ 難廢〃〃 惟家, 而立其子 惟憲,

爲〃大宮司,惟爲投 守護菊池重朝,尋至

鬪爭, 十七年夏 惟忠 病卒惟憲繼而滋募

新撰事蹟通考卷之十八

ソラルニ

阿蘇古老日記曰文明十六年惟忠惟家義絕

同十七年守護衆於 矢部幕下,合戰守護衆

多亡

11

相長家也

此方衆即日ı1

其家人

沙彌洞然長狀日阿蘇惟忠江 被捨舊惡於小

熊野急度被逐參會其後者御知音候左候之

處阿蘇一家錯亂之條從守護者惟家江御合

力候惟忠惟乘御相續候て無程逝去之刻候

之間從八代者惟乘江 御與力候既に重朝樣

御發足之條多勢出張之處於馬門原此方衆

遂合戰宗徒之面々數十人討取候云★洞然相

11

權大宮司播磨殿

惟忠

三月二十八日

-惟憲

-惟長

右元者御弓矢相定候上は一味之者共申合

二八五

再拜々々敬白天罰起請文之事

文明十二年生物碱詰 受父讓爲大宮司永正

二年秋菊池家 之宗族巨臣廢 其 君政朝,請

立 惟長¸爲„嗣君 爲:肥後守護｣其父惟憲聽

｣之十二月八十四人以三連判盟書 迎 惟長

菊池略傳菊池

傳記阿蘇家傳

月請從四位惟長今从之

阿蘇古

從四位下

系圖作從五位1交龜元年七

大宮司

按讓„職 子惟長 年月無„書記,

大宮司 憲叉作｣乘訓讀同

歳惟家不知其終所

長狀

1

是城爲冬 隈部忠 直議,和徐成

誥 成

長狀作馬門原今 守 護方軍 屢敗於

【姑從古老日記1

于幕平,

相良爲續亦遣」兵折,惟憲,既而兩軍會戰

スクフ

兵惟家請„兵於 重朝 重朝自將而 赴、援

ラトン

一惟家

肥後文獻叢書第三卷

大宮司

文明九年七月惟家殺小國滿

文明九年以前嗣」職

「願寺」書遠守二惟時之御答

ས་ད་

近仰二惟歳之

御證狀乃

チ

按惟歳惟家不」知其出所」一本省惟爲 ,

惟綁之庶子惟歳爲兄惟忠之養子」續」職

即加賀丞丸是也不知二就是

カナルチ

忠

惟家書翰

年五月卒王寺過去帳

號忠矢部のうちてらかの村同砥用のうち

かな木のむら御ほたS所として忠一寺

御こんろうて以後御せんさまに御まい

らせ寺領たるべきよし惟忠仰さためられ

候よし承候もつともかんように候我等

子孫におゐてももしあいちかひ申候は、

そんにて僕とも子孫たるへからずこの

よし御心得御申かしこまり申上侯あなか

して

文明十四年みつのへ

九月十七日 阿蘇大宮司宇治惟家

文明十六年甲辰

今度弓矢我々無謀候處重朝惟歳惟家より

不快候無是非候當家一家譜代之人々我等

不可捨之由一味同心被申候間任所存候大

慶候依權大宮司新左衛門此方忘重恩罷退

候哉就者權大宮司職年頭職如代々貴方知

行不可有相違候今此方以同心現願候間

如此申出恐々謹言

權大宮司所藏文書

光院｜過去帳

福王寺

甲佐宮

七十文書

年阿蘇山奇瑞記

明十七再復職

還府畢

シ

一本系圖文明十六年辰二月惟家依不快」

11

又明十五年二月贈權大宮司播磨守」書

簡有』之

中しやうとのへ参る

やへのみうち

二八四

惟歳

惟忠

-惟爲

女

ナルコチ

數通,舉 其一二,爲钤證送纟 御船惟安¸書翰

留書亦有」之惟安不、詳„何人,其頃大友

家臣本莊繁榮贈„阿蘇老臣,書中矢部御船

江久不,申通,候云~據」之則御船亦 親

而立,一家,乎或日前云惟兼之子也然其實

不,分明,又寶德二年九月甲佐宮造營文書

惟忠三十五歳御曹子加賀丞丸七歳御時加

ニシテ

ニフ

タルチ

賀丞丸不｣知｣為‟誰子 家傳一爲„惟忠之

庶弟惟爲之幼名,今無诊所 考質

名和義興室舊記

大宮司

復職

按惟爲諸文書實記等無」所」見唯系國一

載」之又不､載亦有之嗣」職而後早死乎

無」據今從一本,姑存之

新撰事蹟通考卷之十八

阿蘇殿 惟家

惟歳

七月二十二日

文明十一年己亥

被越候如證交相定爲後日簡要自是

下田美濃守井田筑前守申付候光永對馬守

同前候爲後證各名字書付進候委細御兩使

可被申候萬吉恐々謹言

飯田山就境事市下出雲方原常陸方為使者

菊池殿

六月吉日

文明五年癸巳

阿蘇山本堂就御造營去年進使者候處御懇

承祝着候依今月十二日上結構申候棟

列之事御催促可目出恐敬白

掃部助：書公方惟歳公叶

御機色|候樣云々今据之

文書留書

11

應仁 二年 十二月 成滿院 住侶永珍

應仁以前嗣」職

*達 阿蘇寺社奉行村山 伊豆守下田

加賀丞丸に當家事相續可然候由我々老者

達依申候被相定候目出候但先日惟安に一

言被申子細候間就其儀承篇自候尤候穩以

阿蘇殿

惟鄉日

判

七月廿九ひつし

御札委細承候了

永亨三年六月嗣爲 大宮司德三年八月

讓 職所領等於養子加賀丞丸」

テ

肥後文獻叢書第三卷

抑松崎村山方御使に被越候時所存通委細

依申候加賀丞丸に御相續候すると承候目

出先日安に一言仰事共候間其よりは

難被定候程に我々計候へと承候今日以小

陣西上野守御船に念比可申遣候返事到來

時くわしく可申候毎度如申候雖老體候萬

事此方にまかせられ候は無斟酌其老者

達又は領分のおとなに申談候は、守護様

之振舞何事も無事に目出するやうに可

致了簡候一日菊池大守殿御使被越候間其

事念に申て候巨細申御使候恐々謹言

寶徳三年かのとの

按加賀丞丸就, 相續之事,惟鄉之尺牘有

上書にこれたゝの御せんにつかは

され候

これ鄉

八月一日

ほうとく三ねんゅっとの

候するほとに申まいらせ候御わひに候

あひかり物のはさみ∞のあし二ゆひま

ひらせいかさままいり候て御祝申上候

あなかして

候はは申

すさためて御よろこび

惟鄉例

かせうの事御やしない候により候てた

うけの事これたさうそく候めてたく候

これやす∞ねんころに申候われ〈か事

八月一日

寶德三年いつし

かのとの

進候猶々依故實申候當家事相定候併

神慮候間千萬々々目出存委細小陣民部

丞可申候恐々謹言

兩使申候處無相違返事被申候大慶此事候

仍祝之際加賀丞方人太刀一腰馬 一

栗

皆視 傳_阿蘇家 則後迯隨本家惟鄉

雜掌目安惟兼曾祖父惟武叉自 惟武至

惟兼,四代據此次,一本加 惟通,爲惟武

惟政惟通惟兼 然惟兼之目安親 父 惟政叉

諸記文書等無 惟通 誤矣

則後成」平乎惟武以來諸 文

之事,然

ルーキ

惟忠,惟兼和談

良惟楯之請文案

始終從:南朝稱:大宮司,明也竹原惟貞惠

按據到此目安,自惟武 至 惟兼建 別家

11 11

飯尾隼人祐殿

義俊判 魔

三月二十八日

御判之處度々宮方仕候惟兼押顗仕候惟鄉

依歎申候重々被成下御判之間去々年大友

申談取陣候之處爲上意互分退散要害再陣

上可申上所存之由以小早川美作入道黨加

被仰下之間任 上意退散仕候之處翌日惟

兼本城水口取誘候之間不可然之由度々雖

致成敗不承引候如此候之間惟不便之次

第候所詮重而被成御判候樣御申沙汰候者

目出此等子細爲申披候進代官候定委細

可申上候恐々謹官

宮司職事代々帶

上包持朝

阿蘇又次郎殿

正長貳年十月十五日

肥後守

宇治惟忠

加冠名字之事

大宮司

惟忠

叉次郎

過去帳

福王寺

應永十三年五月嗣爲 大宮司 三十年十一月

叙從三位,餅 永亨三年六月十八日讓職所

領等於子惟忠 0 文明 二年 六月十二日逝去

テ

大宮司

惟鄉

中務大輔

阿蘇

系圖之六

新撰事蹟通考卷之十八

右惟兼雜掌如目安狀者號阿蘇大宮司惟鄉

雜掌事有其憚 此條甚無謂其故者惟鄉累

祖相傳證狀手 #帶代々御判之上去應永

二十四年五月十三日當御代給安堵御判任

中略

肥後國阿蘇大宮司 惟 鄉 雜掌謹言

上

目安

先年九州爲一統宮方蜂起時爲無二御方致

山中數十年堪忍於所々盡軍忠申畢如此旨

趣如何而欲分達 上聞刻去々年七月十一

日飯尾加賀守方以書狀證文等分備進者可

有 上覽之由被仰下 則御判次第相續

書相副探題御吹擧以雜掌同九月十一日進

上仕奉仰御成敗處惟兼不帶代々御判當家

不相續而構虛言致亂訴事無是非次第也所

診爲相續忠篩子細申披重而探題以御吹

進雜掌早任惟鄉理運旨預御裁許者彌々致

御祈禱精誠爲抽武略忠勤粗言上如件

應永三十一年三月

肥後文獻叢書第三卷

阿蘇大宮司惟鄉事代々忠節異于地候仍大

應永三十年

一紀忠節有無者先年九州一統仁宮方之時惟

鄉亡父惟村爲御方數个年楯籠山中今河殿

九國仁至于御發向之時凶徒菊池武光武

武朝三代之間獨輕一命數度依致合戰一族

譜代仁等數百人御大事罷立捨命畢惟兼

曾祖父惟武者惟村弟爲不相續之仁宮方化

馳加菊池同心石致不忠旣筑前國於捲打討

死畢自惟武至于惟兼四代對御方有何忠節

背御判旨致押妨哉然者云忠節之相續預惟

鄉理運之御成敗者全神職彌爲致御祈禱之

誠精粗言上如件

一惟兼社職相傳之證狀有之,尤不審也自惟

[時至于惟鄉四代證交手 御等悉惟鄉分
相續之處惟兼數十代相傳不足信用也
彼職矣然則當其職稱其名事有何懼哉
一甲佐一所分知行阿蘇一宮不知行之由是忍
奸訴第一也既阿蘇入部實否者九州探題同
上使小早川見知處也敢非陣之仍惟兼城
自小早川方破却畢

欲早被經御沙汰阿蘇宮四社領並本領新
恩地被弃捐惟鄉无理競望任相傳當知行
旨蒙御下知彌全知致御祈禱精誠事
右當社草創以來至惟兼數十代相傳當知行
之段去年二月捧惟兼目安井證文等之處悉
達上覽訖爰去八月惟鄉雜掌如庭中言上者
阿蘇大宮司雜掌 彼亡父惟村以後至于今
迯不任彼職押而稱大宮司之條 上覽有其
憚者哉可被停止惟兼競望之由言上是又希
代申狀也社職相續當知行于今無相違之上

者以何可致競望哉於惟鄕者緣甲佐一所知

行之處阿蘇一宮當知行之由注上以外虛言

也旣惟鄕以競望之儀對惟兼城雖取陣恭被

下 上使去年被退彼陣畢仍惟兼當知行之

段 上使有見知之處奉掠 上意任雅意如

肥後國阿蘇大宮司惟兼掌謹言上

□□□爲備披覽進上代 證驗若達上聞御

下知無相違者於當社如先例執行祭禮等奉

祈御願且爲分成軍忠之勇粗目安言上如件

年號

二七九

右當神自草創以來至于惟鄕社職相續無相

違處也然間帶代々御判上去應永二十四年

當御代安堵之任御判旨分社領知行處惟兼

父祖代々宮方仕不忠仁乃爲子孫背御旨

致押妨間探題御方大友方仁申談陣及合

戰處 上使小早川方先惟兼要害被破却次

當陣之事御成敗之間可罷退之由依承應

上意申處惟兼任雅意翌日水口城如本取誘

楯籠之條以外振舞也依探題 上使御方

注進仕畢定可有御披露候哉亡父惟村者

欲早蒙御裁許停止惟兼社職競望分全四

箇社領幷所々恩賞地事

上

九州肥後國阿蘇大宮司 惟 鄉 謹言

目安

應永三十年九月

此虛言等無憚所言上且可謂傍若無人是併

依無其理構種々虛言者也早被止惟鄉非分

之望被成下御下知於惟兼彌欲抽忠節矣謹

言上如件·

惟政

某某

肥徒文獻養書第三卷

池武朝之室,然武朝正平十八年生 家 記

誤矣

都々丞丸

別當丸

大宮司

幼名乙丞丸

肥後國四社大宮司職弟國之所領等事任

論旨令旨之趣不可有相違之由依一品式

部卿親王仰執達如件

天授三年三月二十六日 左少將判

阿蘇乙丞殿

分相續親父惟武跡彌可抽忠勤之由依征

西大將軍宮仰執達如件

元中二年十一月十五日

阿蘇大宮司殿

教位

惟政忠節異于他條感悅之次第先日染筆

此時分偏憑思給之上者彌可抽無貳之

忠節殊以可被抽賞候其子細難盡于笔端

候間申含此僧者也

-惟兼 大宮司

地悉任相續之旨領安堵御裁許之狀

杼當神者鉡 先祖惟惟澄惟武親父惟政爲

累代進止之地爰中比伯父惟村隨逐大友欲

成競望終不補任當職至于今當家相傳之處

灭惟鄉成違亂致訴之條爲以外狼藉然間

欲早被經御沙汰四社領其外本領新恩

阿蘇大宮司宇治惟兼謹申

目安

戰沒三月以前受」讓爲:大宮司|

ス

按據,天授三年三月令旨,惟武其年八月

此餘論旨三通分旨九通賜」之

明德五年六月十九日陸奥守判

菊池肥後守殿

山名

阿蘇大宮司惟政代申肥後國釣野日前村

等事於社家分者沙汰付下地於惟政代可

被執進請取之狀若有子細者可被注申之

狀依仰執達如件

此書無,,年付花押

乃元中九年也

後十月十日

二七八

惟武

阿蘇三社大宮司惟村判

八郎次郎

大宮司

加冠名字事

守治惟武

正年十六年二月二十九日肥後守武光

文中二年五月

屬〃南朝 居〻 甲佐 武政 兄弟 分南

北 惟武稱〃南朝大宮司,

書惟澄遺跡相續事被聞食畢於安堵者以一

同之法可有御沙汰之旨被

仰下之狀如件

正平十九年十月十九日

大藏卿判

資世

世書=

阿蘇八郎次郎殿

阿蘇大宮司職事任先例可被執務之旨被

仰下之狀如件

正平二十年三月二十八日 大藏卿判

阿蘇八郎次郎殿

阿蘇社大宮司惟武申肥後國守富地頭職

按正平十九年讓狀菊池女房家記爲菊

菊池某妻

-惟里 彌太郎

惟澄正平十九年遺書,一族舊臣分

而擁„惟武¸癈 惟村,謀ㇶ 立三惟武,爲 主

文意如｣此然其始末不｣詳家記叉 無 傳

錄,因憶自｣是惟武與 惟村 不｣睦蟠居

甲佐,益決｣ 意從南朝

卅年安

打戰死

惟鄉應永

天授三年八月從菊池武朝】於…筑前國

此外分旨十八通于」今有」之

菊池肥後守殿

房胤左少將判

=

上

正平二十四年十一月十三日

仰執達如件

半分年貢事重申狀具書如此爲當社造營

料可被致沙汰渡社家之旨度々被仰下之

處去々年以來貳百貫致沙之外未濟

云嚴密可致勘渡之狀依

一惟村

肥後文獻叢書第三卷

賜,,綸旨分旨,數十通公噸之書狀數十通皆

傳家

惟澄弟有 惠良豐前權守惟雄 彌三郎 惟賢彌

次郎惟永 惟雄始名小三郎 正平四年 合志原

合戰同六年攻,關城,皆有」功嫺 惟賢興國二

年於 南鄕城 有｣攻覿 行爲 肥後葦北莊地頭

職 雕嚕惟永爲〃豐後杇網鄕地頭職,垌

惟澄室

大宮司

屬:北朝¸居氵 南鄕

ニモ

明德四年七月今川 了 俊 之 書

【爲 南鄕 大宮司 應永十二年六

月澁川滿賴之書 爲南鄕阿蘇蝦 今据｣之又大友 氏 時之書

爲, 阿蘇東殿 惟武居 甲佐故斥 南鄕 稱､東歟夂 應永三

ルコト

ニシテ

十年惟鄕之目安惟村楯 籠 貞治元年七月足利義詮

山中,數年是亦斥南鄕 耳

以〃惟村,補肥後國守護職 (,三年七月受,

父之讓,爲〝大宮司, 應安八年叙〃從三位,

上卿新中納言

應安八年二月二十一日 宣

正四位上宇治惟村

右四箇社領本家領家地頭兼大宮司職#當

國他國所領等相副 論旨分旨同重代證文

等依爲器量所讓與于惟鄉也凡神領者專神

事祭禮天下致御祈禱先修造其外所領等者

致軍忠可知行也仍爲後代讓狀如件

應永十三年炳 五戸三日

賞地惣領分地頭職事

井代々恩

箇社領

肥後國阿蘇健軍甲佐郡浦

已上四

讓與息男宇治惟鄉所

應永十三年五月讓„„職所鎮 等 於 惟鄉,惟村

仕 北朝,從,足利家,有」功依」之義詮義滿之

書執事奉行鎮西探題斯波氏經今川了俊澁川

潇賴及九州奉行探題雜掌其外諸家文書 有三

許多1

阿蘇大宮司惟村訴詔之事分出陣然致忠節

依重注進可有其沙汰之狀如件

康曆元年潤四月廿三日 判之花押也

足利義滿

今河伊與入道殿

藏人右少辨藤原俊任奉

宜敘從三位

のとはわれら一烈していてたらんに

へき事ともか∞はす叉つきていてたる

ཇབ

たちたるものなしかるにこれむらうち

そして御かたにさんすといふそのうへは

とてこれすみをうらむへきにあらす叉こ

れむらかとかはなに事そやこれによてあ

との事を申をかんにいさゝかこゝろにた

かふ事ありとも閅目をまつへきところに

いくほともあるましき存命の内に向背に

かよふあいた是非の沙汰にかよはすしか

しなから逆心をあらはしをかぬ不孝のつ

みのかれかたしたたしこれだけ與同のと

もからはみな一族況としころのものらな

これむらよりはこれだけはわれ(お

のか申さんするまにあるへき仁な

りこれだけをとりたてゝこのうちをわか

ま、にせんとお∞ひたるものともにとり

いたされてれたけかもひあへすかやの病

床を見すてゝかやうのふるまいをいたす

かこれはまさしく惟武は不孝の罪業をう

進狀讓狀等皆身南朝之年號可」

二七五

トス

阿蘇三社大宮司惟澄

惟澄 自三元弘三年」至」此三十二年仕南朝

有功勞終身不」詳編年考徵」 申狀注

一庶子等分にわからあたふ所々の事かつ

は少分なり同姓一腹なりさまだけをな

すへからす以前の條々大概かくのことし

右の手かなはさるあひた手印てゆつり

狀に同しよてさためをくところ如件

正平十九年戰繳七月十日

やわかよき事あるこれむらに所領をあて

つくることあるましと思慮なくしてとり

あへすいてたるなりしてれたけ先非を

くゐておゝひなをす事あらは惟村扶持を

わふへきなりたまく一腹同姓の兄弟

なれはすゑくはおゝひあびてあるへし

一これたけ與同のとゝがらの事すゑノ

のものとはさためてきたるへきなりこ

れむら菀許してめしつかふへし帳本のや

から退望せしめは子細同前

其詳今不､可,引得考

テフ

年,惟澄又譲,,總職於惟村,乎家乘絕不,

至三十九

以惟村,爲 守護職,今附註以爲本文之證

11

也惟澄仕南朝,不受此任故翌貞治元年

11

惟澄

ニフ

シテテ

ニシテ

書鎮西凶徒退治之事於所々･數个度致忠之由大友

刑部大輔所注申,也云々又同月同日以阿蘇筑後守1

11

爲,,,,肥後國守護職,貞治元年十月及以大宮司,爲守護

惟澄 新補 大宮司職

延交六年二月南朝正平十

1 然惟村屬 北朝,爲 足利義詮,屢立戰

功,不､從官軍,以」是十六年將軍宮以

ニシテ

カ

11

按正平六年惟時讓,,大宮司職於 丞丸,,據,

+

室諔 六年惟時讓,,職於亟丸,,八年卒嫁

六年二月惟澄又帶 將軍宮之 分旨,始稱大

宮司,自」是改立爲,,,,惟時之嗣,十九年七月

讓,,職於長子惟村,此月卒

同四年惟時歸順之後罷.攝相從但竭,,,,力

ヒニス チ

メテ

守阿蘇筑後守,十六年以來令旨申狀稱""阿

蘇大宮司惟澄,

ニハ

家記,丞丸惟村之幼名而惟時之外 孫也雖

、六年義詮送 阿蘇大宮司

職」有 義詮之教書,此云大宮司者惟村 而 筑後守卽一八郎次郎これだけはこのあびた代官に

みき惣領ならびに男女の庶子分面々にゆ

つり狀をかきをくところなり異儀なくし

て知行すべし

これすみか遺跡等事

さためをく

阿蘇三社大宮司惟澄

仁不可成妨凡社領者專神事先修造其外所

領者致軍思可知行也右手不叶之間依不

及判形所午印也仍爲後代讓決如件 手印

正平十九年六七月十日

論旨令旨重代之證文等所讓與于惟村也发

庶子都之丞丸別當丸菊池女房仁 分讓所々

右惟村主得之嫡子也仍爲嫡子四箇社領本

家頟家地頭兼大宮司職井當國他國所領等

相副

肥後國阿蘇健軍甲佐郡浦記 矢 部 山

砥用兩山津守保豐後國大佐井鄉半分筑

前國下座郡惣領分地頭職事。

讓與 嫡子宇治惟村所

二七四

惟澄

惟成

戰,于多々良 濱,不､勝走 肥前國小城郡,二

アマヤマ

日於三天山自設牧

廣夢想記

九郎

惟直同時於三天山,自刄

惠良小次郎 筑後權守

筑後守

大宮司

澄惟時之一族而婿也凡稱 上島 惠 良大里

等,者傍親之家也然惟澄失,其所,出

元弘三年 惟直相共赴| 金剛山 之處因」下…賜

令旨,自„備後鞆,歸國將其以來所 合

戰勳功之事實申狀注進狀等詳著„„編年考徵,

故不復錄„于此,

惟時從尊氏之逆,時賜分旨

不同心于惟時致無貳之忠節之條頗所被感

思食也彌被憑思食者

征西大將軍宮御氣色如此依執達如件

興國五年七月十八日 勘解由次官判

惠良小二郎殿

大宮司惟時屬朝敵之由被聞召間被驚思食

又正平十一年十四年申狀 自 書』惠良筑後

ニモラス

按惟時屬 北朝 故惟澄於南 朝攝大宮

司,正平初年稱 大宮司小次郎惟澄,申狀

有:數通j又轉,任筑後守,宣旨不」傳故失三

年月,正平五年以後旨等皆爲 筑 後守,

藏人左少辨藤原正雄奉

宜任筑後權守

宇治惟澄

正平三年三月十八日 宣旨

上卿一位大納言

惟澄率„諸弟及上島惟賴等一族不生異

心¸猶盡„忠操 攝„大宮司,正平三年任…筑後

權守,後又轉 筑後守

興國五年十月廿八日 勘解由次官判

惠良小二郎殿

征西大將軍宮御氣色如此依執達如件

泰達者

之處相語一族於御方抽軍忠之條勇敢之至

雖不限今度誠以所被感思食也且以此趣可

禰惟時神位

賜 惟時¸綸旨分旨有,,五十餘通

音堂有」之位牌銘阿蘇前大宮司大雄寺殿正

二位宇治宿.

正平八年卒

家記惟澄申狀O益城郡豐内村大雄寺 跡 觀

ナラ

惟村之幼名也

按亟丸不」審」爲:誰子 家記日疑惟澄之子

11

阿蘇三社大宮司宇治朝臣惟時判

正平六年辭二月十八日

論旨 分旨代々之證文等亟丸於爲嫡子讓

與訖於當知行之所々者無他妨分知行之至

不知行之莊薗等者帶 論旨致訴詔可申

也而神事祭禮者任先例分施行之修理造營

者守舊規可致沙汰也仍爲將來之龜鏡讓狀

如件

右社顔以下之所々當職同管領分相副

論旨分旨當國他國莊薗等事

肥後國鎮守一宮阿蘇同健軍甲佐郡浦已

上四社領井矢部役用津守保筑前國下座

郡惣領分豐後國大佐井鄉地頭職惣惟時

帶

肥後文獻叢書第三卷

讓與 孫子亟丸所

惟直

A之 自三元弘三年,至三元元年,賜綸旨

十一通傳…延元元年三月足利尊氏及弟直義京師之戰破

逃而來 于筑前,惟直從 菊池掃 部 助武敏,

プロト

11

于家,

又同日宛„„肥後國守護所有. 同文之牒,略

ツル

右衛門大尉坂上大宿禰判

左 中 辨 藤原朝臣判

右任』承曆國宣,可以打引渡彼堺者以牒

元弘三年十一月四日

レハテス

當國阿蘇社大宮司惟直申社領阿蘇莊四

至堺事

雜訴決斷所 牒 肥後國衙

元弘三年以前嗣職

大宮司

北畠親房洞院左大臣實世四條大納言隆資

院中納言五條勘解由次官賴元其外公卿之書

足利尊氏直義直冬高師直等之書 狀 有 數十

通;傳„于家ı

二七二

新撰事蹟通考卷之十七

惠良惟澄正平三年九月申狀曰市下八郎入

道々惠相┐語惟時一族數十人 罷成御敵

楯籠南鄉城¸之間押引寄彼城,攻戰之刻豐

後肥後大勢寄來之間馳 向 中途,致,散

合戰,惟澄井舍弟彌三郎惟賢被」疵二人共

被切ñ臥乘馬,一族若黨數 多 分,手負討

惠及大將孫熊】

此年十月惟時歸 矢部 惟直兄 弟 戰死而無,

大宮司,故惟時復」職爲 大宮司,嫁傳雖」然孫

熊亦從 足利 家¸稱 阿蘇大宮司,興國二年

北朝曆

應四年

市下八郎入道道惠叛„惟時¸招引誘惟時

之族人數十,率„其集黨 據„阿蘇 南 鄉城 惠

良惟澄及弟惟賢往而攻」之孫熊大宮司讓, 職

於弟乙房,赴„南鄉之援,惟澄 等 與」之戰不

˩利八月二十七日 据 惟逖陷„其城,斬道

定申狀

右申狀傳, 于阿蘇家,惟定阿蘇之一族也惟

時在京中事以 申狀,可˩考故附凱書于此

又申狀中書」君者 後醍醐 天 皇 書」上者

付惟時,也

云々

二七 一

丸

惟澄之等於孫亟

譜中1

令旨家傳略尙詳三六年二月讓,職所 領 有 數過

正平四年十月復歸順從„征西將軍宮,

貞和間尊氏及少甙頼

尙等之書

四年惟時叛而屬ņ足利尊氏

惟澄申狀文書 康永

此文書亦傳 于阿蘇家乙房不知其

終所

曆應四年九月廿六日左衛門尉師景判

乙房大宮司殿˙

肥後國阿蘇社大宮司職井所領等事養父孫

熊大宮司去八月九日任讓狀領掌之由承候

了可注進此旨候仍狀如件

大宮司殿

肥後國阿蘇社大宮司職#所領等事南鄉之

御敵爲退治發向之間御舍弟乙房殿被讓與

之由承候了可存知此旨候恐々謹言

八月九日

師景判

死打,取御敵數十人,其後落,彼 城,之時

道惠井大將坂梨孫熊丸以下六十餘人討

やうしかとも上の御せとを見まいらせ
候はんためにとかう申候てまかりとま
候て上ちんせいに御くたりの時こそ罷
下て候へ京都と申鎮西と申かたく∞て
いまゝては上にむけまいらせ候て不忠な
る事を仕候はすてのとし月ほんりやうた
くさい仕て御世待申候處かやにて候入
道にわかれその歎未ほせす候に故入道の
御かんのところを餘人に仰付られ候
事當座の面目なさと申さいしけんそくの
思ひ候ところ身の迷惑これに過候はしと
そんし候今度もいちか下入道たいふんか
たらひ申候しかと∞上の御かん御心さし
をわすれまいらせかたくそんし候て最前
に御方に參候ぬしたかて八月二十七日の
夜南郷の御城せめに屛の際まて攻寄候て
手負申候向後も元弘いけの御かんをわす

れまいらせてたとひいかなる御事候と

∞上をすてまいらせて御うちを罷出候

事候間敷候且誓文をもて度々申入おき

まりに歎存候間恐々申上候不便かほしめ

され候御成敗あつかり僕はしかるへ

く叉別紙元弘動亂よりはしめて京都鎮西所

々のかせんくんちうをぬきいて一命をか

しますきつをかうふることとにかよふ

宇土の網田の城なり

殊にあふたのしやうにして度々のかせん

に忠をいたし若黨五郎三郎討死仕候とい

へと∞郡浦□□のあいた御かたきふまへ

候よてとくち名を申あつかるにかよは

これ定

別紙に鎮西に御下のち父子ともに

二心候はす奉公の忠勤をいたし候ぬ犬塚

合戦のかたところ!\一命をおします

勳忠をいたし候ぬしたかて故入道れんき

御ひさの下にて命をとゝめぬ今度∞市

下の入道云々

興國二年十月二十八日

ぬ此間は上の御世をこそまち申候處に思

ひのほかの御沙汰身のふうんなからあ

候このむねをもて御披露あるへく候恐

惶謹言

11

ひらせ候ところに鎮西御下りのよし承候

間やかて∞まかり下るへく候處に道の程

たやすからす候うへ將軍方ことに鎮

西の道かいたうまかくたり候へきた

よりなく候間山に君の御供申候て四條殿

御目かいり候て阿蘇殿御代官となの申

候てさかもとかわらかせんしゆかとにか

よひ候かつ四條殿御目かゝり候ぬこれし

かしなから上の御ためをそんし候て仕候

11

11

坂木上りまり候ぬわれ〱御座の

所をそんち仕候はねとも山々たつね申候

てまいり候ねそのちしやうくんちんせ

五月廿五日

ひよりのほらせ給 ひやうこのかせん

御方うちまけ候しわれも合戰仕候て

京都に参り候處に上の御座の所をそんち

仕候はぬあいた宰相の律師の御房に尋ま

仕てわたくしの一命をします忠勤

をいたし候ぬこれしかしなから御かんの

ところを存候て仕候其のち京都御とち候

て君山きやうからなり候君よりさきたて

正月十日=

八日かわらかせん仕候ぬそのゝち八幡

四條殿御入候しむかへあふみ三井寺御か

たきさしふたきてしかと四條殿そひ

まいらせよと仰かふり使うへ及上の御行

衞をもうけ給候はんために人々はさかも

とにととまられ候しかと北坂梨これさ

たはかりこそ四條殿御供申候て入わたま

いり候て夫より天王寺に御入候しそれま

て御供申候て上の東條に御座候し處に參

りて候へは四條殿にそひまいらせ候へ

きよし仰かふり候てとうてうまてそひま

いらせぬ其後上十津川に御入候しに御

と仕候て身の動忠これにすき候はしと

存候しにつくしに下るへきよし度々御ち

二六九

11

11

11

かしたかつて大和より八幡に御出候とて

矢津田の入道∞て仰下候し間思ひのほか

に存候てわたくしの悦これに過候はしと

はせまいり候ところに今よりは四條殿御

手にてかつせん仕候へきよし仰下候間入

月二十五日あみたかみねのかせん同二十

右以人所補任也早守先例可致沙汰之狀如

大宮司職事

可早分領知肥後國阿蘇社

下 阿蘇孫熊丸

戰,于多々良濱,敗死父前大 宮司惟時因」徵

在」京故尊氏立」之

宮司,先」是尊氏軍敗而來 鎮西 大宮司惟直

武三年

十日於 京師 賜„薩摩國守 護 職 _四月五

日潮, 尊氏立„阿蘇之族坂梨 孫熊丸 大

皇避｣賊如,延暦寺,惟時奉」 詔守護内所

藤原清長奉故証焠十三月二

一年惠耳惟澄申狀

奉、入„„大宮 彼岸所,

ユク

惟時 率 上島惟賴阿蘇品惟定等, 從菊池武

家傳菊池

重,與,尊氏之軍,戰„筥根竹下 有｣功上周

雅懶神狀烔濕延元元年 正月 鼐氏犯禁闕 天

謀叛勅 通

有數大宮司惟時等,伐」 之舭時輪旨 十二月

シム

ス

師,今據｣之

15 建武二年十月足利尊氏在鎌倉,而

元弘三年七月率一族諸臣」詣京師惟頼4月

十日至 京師,沖進狀正平二十四年十一月日安 元弘三年八

月六日十月二日之綸旨於京都,頂戴此綸旨 傳于家,惟時

一族

タル

肥後文獻叢書第三巻

前てはこね山に御むけししたかて御と

をいたし候ぬそのち將軍御むほんつき

建武二年十二月十一日

11

右件惟定元弘にくひをつかれまゐらせ候

うへ本領と申新御恩と申御心さし身あま

存したかて惟有さうとうよりはしめ

入道にて候∞のあひともに京都に御

供仕よるひる心のひまなくくんちう

早郡浦案越田徳用名給りよくほう

こうのちうきんをいたさんと思候しさ

ゐの事

ミヤウチ

阿蘇品六郎三郎惟定謹言上

野中

坂梨掃部助i阿蘇品村名今 屬=

11

阿蘇品惟定申狀始名國定後 畋 惟 定又稱北

司1

宮

皆爲, 前大

五月六日惟時 於 京都¸補薩摩國滿家院泉

所藏 綸 旨

莊伊集院日置南鄉給黎院等地頭職

建武三年四月五日

件

又自„惟泰,至„惟國,鎌倉下文北條家其外

家書牒有數十通,皆傳„于家|

叉惟國致仕不」詳其何年,阿蘇社日記

有三元應元年十一月之奧書,記„„大宮司惟

時,據」之則其前讓」職

、載 惟有騷動之事,其故不」詳叉惟種亦不

t

嘉暦二年三月二十日 前大宮司惟國

按雖有„此讓狀,惟有不|知」爲,誰子,

國之子惟時外無,記載,北坂梨惟定申狀雖

右柏村は惟景の殿の孫子九郎惟種に讓り

給ところに惟種か罪科によりて所にな

るあなた申給はて知行する所也よて所

領以下先日大宮司に讓與とSへと3惟有

は同し孫なから不便に思あひだかの柏村

にかゐては惟有に永代ゆつるところも

大宮司かの所にいらんわつらひをなさ

人之さ渡大宮司職~S、所領等√ S惟

有一圓に申紛るへき仍後日のために讓

狀如件

惟時

购物非惻紅緞三十步寺町名小松二六七

光永又四郎殿

前大宮司惟時

元弘三年十二月日

右配分之狀如件

一光永名阱咭賦名

內四坪三段半郛松銘

筑前國下座郡配分事

也有沙汰時者可出之

元弘三年十二月十五日

惟時

於彼正文者惣領惟直方留置候

阿蘇大宮司館

左中辨判

天氣如此悉之以狀

元弘三年十月三日

豐後國大佐井筑前國下座郡等地頭職可分

支配一族等者

‟元弘三年以前据 下文書,

於惟直,

元應以前爲大宮司 元弘三年以前譲職

此二代無„譲状,故不」詳年月,

大宮司

-惟資

肥後文獻叢書第三巻

致其沙汰之由各可被相觸之狀依仰執達如

件

惟國

建長七年十一月七日

相摸守

陸奧守 判

尾張前司殿

弘安十年三月譲„職所領等於二子惟國,此年

此年十月下亡

父惟景今据」之

大宮司

讓渡八郎惟國之處

大宮司職井村之事

大野 草部 中村 下田 久木野

あらき 下久木野

右於彼職所帶者先度惟資仁讓65LS

へと死去畢雖有子息わしやくとして

加东 S 加ㄊ空間彼於職者惟景先祖相傳之

職也然性本證相共惟國所讓渡也南 加

なし一向此讓あたう也仍所讓渡狀如件

弘安十年灯三月二十三日 宇治惟景判

肥後國阿蘇社領内柏村事

讓與 孫子又太郎惟有

弘安十年十月十三日

右人任亡父惟景今年三月二十三日讓狀可

分安堵知行之狀如件以下

荒木 下久木野 南坂梨子

大野 草部 中村 下田 久木野

社頷村之事

可早領知阿蘇社大宮司職幷

下 宇治惟國

貞時

花押

北條

家記曰惟國後改„„惟時,然阿蘇社日記跋元

應元年十一月大宮司惟時又嘉曆二年讓狀

前大宮司惟國又阿蘇山本堂造營供養料足

日記總官惟國御分惟時御分叉系圖惟國其

子惟時今據」之

弘安十年三月爲„大宮司,

大宮司

八郎

二六六

惟景

惟忠

弘安二年二月二十九日

左衛門尉景房判

小札

廣澤藤三郎股

執事御狀案 正 文者御使田五三

被爲持

太郎

北條

龜熊丸

大宮司

花押 泰時

阿蘇大宮司太郎惟忠申亡父惟義遠領間

事故入道殿御時次男龜熊丸任惟義之讓

狀去文曆二年八月二十七日成賜安堵御

下畢隨又惟忠者蒙惟義勘當之由分自

稱之間今更非沙汰之限可分存此旨給之

狀依仰執達如件

仁治三年十一月十日 沙彌大蓮判

阿蘇龜熊丸殿

文曆二年二月爲大宮司

肥後國阿蘇社大宮司惟景申上分稲事訴狀

副具如此狀如者為一國 平均所役之處 御家

人對捍云々事實者甚不穩便早任先例可分

寬元元年十一月九日

右人任故武藏入道殿暦二年八月二十七

日下文可安堵領知之狀如件

荒木 大野 柏村 草部

中村 下田 上久木野 下久木野

可早領知阿蘇社内所領等事

下 宇治龜熊丸

花押 *

文暦二年八月二十七日

狀可安堵知行之狀如件故下

右人任親父宇治惟義今年二月二十五日譲

柏村 草部

上久木野 下久木野 荒木 大野

阿蘇社大宮司職 中村 下田

可早領知所職所領等事

下 宇治龜熊丸

花押 *

惟盛

肥後文獻叢書第三卷

安貞二年九月十五日

右職所領等任親父惟繼嘉祿三年二月二

十三日讓狀無相違可分安堵之狀如件以

下

文曆二年二月二十五日讓職所領 等 於子惟

景

惟經

津屋三郎

嘉祿二年八月四日 受 父惟次 之讓,爲”

健軍社大宮司,

花押 條

下 阿蘇三郎惟盛所

有限

可早預知得永私田畠內勢多村到

雄時橫手村 田地拾餘打四健軍社大宮司

職井 南鄉內外和波多貳町門田段

屋敷料赤池陣事

右任親父大宮司惟繼嘉祿貳年八月四

日讓狀可分惟盛領掌之狀如件以下

安貞二年六月六日

花押 鰷

肥後國健軍社大宮司職事代々 御下文并

證文完道去狀等拜見候了以此旨可披露

仕候先任先例可分致其沙汰給候且此樣

分申代官之許候了恐々謹言

弘安元年六月二十四日

右親父健軍宮大宮司惟盛知行所也而年

來依官仕之忠惟經可分安堵領掌之狀如

件

多村井久和波多田貳町門田柒段屋敷

赤池陣事

早可分領知肥後國阿蘇社領内南鄉勢

下 津屋十郎惟經所

花押 *

健軍大宮司

津屋十郎

文永三年九月十六日

肥後國健軍社大宮司職事任代御下

文之旨津屋三郎入道惟盛法師可分安

堵知行之狀如件

二六四

撰事蹟通考卷之十七

有三十六通.

其餘惟次代鎌倉下北條家書狀等

承八二年九月十四日

井 正治二年十二月十四日親父惟泰之讓

狀無相違可分安堵之狀如件

右職所領等任去建八七年正月二十三日

桶村 草部

上久木野 下久木野 大野

永野 世田 荒木

阿蘇社大宮司職 中村 下田

可早領掌所帶所領等事

下 宇治惟次所

花押

北條

建仁三年三月二十九日

右人爲彼職有限所當無懈怠可被沙汰之但

於地頭代者故七郎惟時子息沙汰也可在其

旨之狀如件

宇治惟次

下 阿蘇岩坂鄉

補任預所代事

惟義

荒木 大野 柏村 草部

二六三

下久木野

阿蘇本社大宮司職

下田 上久木野

中村

可早領掌所帶所領等事

下 宇治惟義所

而省,此題名 下皆効」之

所藏下文以吓寫下文等文書, 略

スニ

嘉禄三年二月爲 本社大宮司,

阿蘇大宮司

故後於 矢部 猶呼,其名,又代々之城地南

鄉亦有」之東鑑記,南鄉大宮司惟安,然 則

惟泰時代叉居 南鄉 歟或云惟次徙, 居矢

部Ë謂 濱屋形 家臣等又稱„„濱御

今日愛 今日岩

濱御所 惟次 双 築 舞鶴 龜甲

尾城

二城,置:守將,爲戍衛 云

阿贊埰城|邊線|

今日三 又謂„濱城¸家稱 濱 館

ヤカタ

カノ

按家傳曰大宮司代々居|宮地,後移,黑川|

嘉禄三年二月二十三日讓職所領等於子惟

惟泰

惟永

友寶

則貞

惟行

惟綱

惟經

惟信

-惟通

-惟滿

-惟遠

惟雅

惟員

永長元年修 宮殿

傳家

是貞

友孝

天養比

友房

惟俊

惟宣

資永

阿蘇健軍兩社大宮司

泰又作」安訓讀相同

阿蘇家所藏下

傳家

源大納言家政所下 阿蘇并健軍兩社神官

氏人 定補兩社大宮司職事

惟次

建久七年六月十九日 政所判

如件神官等宜承知敢勿違失故下

右人補任彼職畢任先例可分執行社務之狀

宇治惟次

定補大宮司職事

下 阿蘇三社中司氏人祝部供僧等所

所藏下文

年三月箫 阿蘇郡岩坂鄉預所代

建八七年正月受父讓,爲 大宮司 建仁三

次又有」書」繼訓讀相同

十三日讓 職於子惟次 所藏

南鄉大宮司惟安從,,隆直諫 建八七年正月二

治承五年二月原田種直討 菊池隆直於肥後,

治承四年正月日

右件人爲兩社大宮司職執行社務可令致御

年貢沙汰之狀所 仰如件兩祀神官井氏人

等亙承知不可違失故下

宇治惟泰

續後紀日承和十年六月阿蘇健磐龍神社

按家傳一稱 八井耳王命 古 社 記等所不

、載故不」取

西巡時勅 惟人,司 阿蘇神社之祭奠。

ラシム

配„阿蘇五宮,稱„„彥御子神社, 景行天皇

速瓶王命之子

神武天皇之皇子彥八井耳命之子今之權大

宮司之遠祖也

社傳日吉見神配阿蘇三宮,稱三國龍神社,

編年 考徵詳著

影之故略而不書

位

11

11 11

母阿蘇比咩神書紀云阿蘇津媛是也南鄉草部

人吉見神之女 也 位階自,從四位下,至:從三

磐龍命神社嬬 阿蘇比咩神 社 國造神社

續後紀日承和十四年七月丁卯肥後國阿蘇郡

國造神列_官社 社傳云及、置 阿蘇十二宮

以國造神,爲三十一座,

11

後叉配ñ享 健磐龍命神 阿蘇比咩神̀ 爲阿蘇

アハセマツリテ

三座神,延喜式神名帳肥後國阿蘇郡三座小

彭健-高範

惟兼

-賴高

惟敎

忠行

-惟顯

-遠明

-友利

-賴元

惟助

惟親

友成

友仲

宗延

惟淸

惟明

惟保

惟峰

友助

惟惟

氏

成時

則高

惟風

利名

友則

兼

-友成兼

高正

神主永預,把笏何神主之代乎不､書,其

名 故附 書于此,

者歟¸„系圖繁蕪,皆編年考徵緝引載之,故略

丿此正一位據„建仁二年宣旨,又肥後肥前

11

11

按阿蘇神社編年考徵 景行天皇十八年條

著亅之位階等事出, 六國史及類聚 國 史等

位階至 正一位勳五等,

地,供,所ņ其獲,猪鹿於太神,以每年二月卯

日亅爲,定日,爲|永式,其法大有 舊例嚴式

天正以後廢絕矣其式書古代圖 等 今 尙 傳存

家傳

野狩場,也

其後因:遺旨 大宮司代々狩此

餘町・今日下

此神也命好田獵,常狩三下野一生嶽蘆宮地坤五十

齋祭 其 靈¸爲阿蘇國津神, 景行天皇十八

年西巡之時阿蘇津彥之神現而見」天皇,即

下野在 狩 尾 村往

イツキ リテ ミタマチ

官地,也娶 草部吉見女,生速

瓶玉命˝ 綏靖天皇十四年 癸巳八月十五日

薨保壽一百七歲 孝靈天皇九年己卯六月

之

侑 潤崖 敎 民稼穡¸殖 五穀 卜湖·卽此也今南 鄕 群山

河,水涸渴而得,‶良田數頃

チナリ

圖書 編 肥後國有, 介烏

カレツキテ タリ

...

肥後文獻叢書第三卷

地營┐作家

宅,今其所曰:

|速瓶王命

岩隱 也

謂,神塚,土人又稱:御倉穴 其詳 編年

徵明應六年之條記」之

チクラアナト ナルコハ

中有石室二區卽命岩 隱之所

陰陽杉,今尚存又宮西 南 二百五十許步皐

チミコトイッカクリ 葬地曰:

宮神,社傍有 神木二株,曰:神代杉叉

三之子

11

國卿之人.

二之子.

國造神之妃.

國

北宮神社記曰所」祭神四座其一國造神其

社,一里北」社名取義於此,

-六後祀神 靈於 手野,稱„北宮,在於去本

ルコト

#耳命孫速瓶王命定, 賜國造

薨年一百三十

チ

國造瑞籬宮朝火國造同祖神八

家傳

崇神天皇御世爲 阿蘇 國 造

記

健磐龍命子也家傳

名也無„確證,不足以採

リト

有」縁可‶其後孫¸歟阿蘇家傳云 速 瓶玉

「始部載」之

健磐龍名

全國郡原

風土記 崇神天皇御宇在

建緒組者賜

11

今從 古手屋傳來系圖 附書之,備考

略同

高親4孅其子親家

珍

道道其子超

系左衛門入, 保其子國保其子正部 信

保 其 子久保韓刀法備門

‶宮神主

信

子國雄 其子國連其 子賴

代右系圖文書舊記河尻肆古手屋某家所藏也又府千場

町紺屋某家傳„蜂須賀系圖 及 文 書 該書職行前重其

代

年之書狀一通

蜂須賀治部少輔家親守山滿丸名九町九段三丈阿蘇惟

長以判形知行小川山次山城守一跡二町五段下地相添

四郎三郎名八町三段三丈山下名二町五反相添判形7

以被下候隈莊之内原越後守跡十三町判形居屋敷南

クイ伽藍屋敷

顯忠八代御沒落交龜四年甲子二月六日同年宇土知行

城重峰隈部運治申合小塚之忠 守富政高御判形7以

亍íyy弋夕之忠=my亍知行候戊寅之年

敎長御生害亨德元年壬申五月二十一日

義興御生害長祿三年己卯師走十三日

與野生害

顯忠八代御本意之年號明應八年己未三月

判先出」自, 賴信之兄賴光 賴光子賴國其子賴弘

*劇琯其子家光殿其子淳國礎上的勘解其子國光

其兄也綏靖四年四月 薨于畝傍山

盆嬬辯其子國淳其子成綱其子通保 攝津國西

其子其子保忠,其子其中有、湖命鑿穿其西南之山 灑水於白

二五九

ミコトリツテ

封 阿蘇國 阿蘇之爲」地也四面連」山

癸卯故

11

二月乙丑朔無三

年丙子春二月 乙丑朔本書作癸卯朔·推。

-健磐龍命

神八井耳命之子也 神武天皇七十六

公,也阿蘇公後之事跋有」論

11

`著君字者換 公字自是改君謂某

カエヨキミノ

君姓也續紀天平寶字三年十月詔天下諸

11 2

分君阿蘇君等十九性之祖也

キタノ

古事記曰神武天皇皇子神八井耳命者火君大

カムヤ ミノミコトハヒノキミオホ

北 紀

神八井耳命

神武天皇第四皇子而綏靖天皇之皇

ニシテ

阿蘇

系圖之五

新撰事蹟通考巻之十七

名曰小熊野郷,

討死

山郷中間村上| 教長宇土知行永享六年甲寅年大野原合戰年號文正元

代官一家親覺悟之時 江上弓矢人足 年

江 村 下江村等一讀.

之大士江皆在三八代郡,

小熊野

瑠璃童丸持トマリカ

按今益城郡中

按本野古閑植柳海

續松之役本鄉七郎兄弟

ニホンノ

ハシーアシャ八代御地行時同名タメ殿アマカエ三町

竹萬宮内少輔 行直御祝義之時御酌皆吉與七郎

刑部少輔分古閑三町丹後守分柳五丁四童丸名此内

重行重治:御元服之時御太刀則元次郎左衛門殿御

今存

御參會之時御太刀河田 加賀守御クッ大井一助仕

對馬守義房高田本野六丁烏森一丁列所合拾町

彌也

五

顔也

以北湯浦城拄私領釘

兼朝

奉公申候山城守家氏葦,十二町隈莊之内平野五丁敷田三丁被下

按萩尾古保山藤山 | 賀七郎 武顯阿蘇惟則智子 御成候時御酌蜂須

隈莊皆在 益城郡

11

又三郎義久守護罷出萩尾十八町郡山之内十八丁藤山 義興阿蘇惟鄉智子御成候時酌皆吉與二郎yy蜂須

祝義之酌之事

11

コウヤマ

忠樣皆吉伊豆聞被仰付迎被遣候奉公之儀瑠璃童丸申| 阿蘇惟忠甲佐三年在宅之內惟忠一字處望候而顯忠御

被渡候從先祖御/ty 判形攝津守殿阿蘇殿奉公之儀 元服候其時御太刀蜂須賀山城守夕竹萬七郎御家御

被申渡候御夕七夕判形兵庫助處在

11

11

11

于孫至忘却有間敷由被遊候彼奉書儀者家親至隈莊養 壹人 殿樣夕申候間弋山名犬淵源左衛門殿持

性町芬武顯樣與風 御成一禮被仰時 家親成若候思被召|者申候十三年格護申候小畠名是人足一人立申間

被召仕候過分之由面談申上軀而禁足時候~六 顯 蚍島=下地:被下候治部少輔務

11

11

按守護菊

元朝

池野三町桃井河内三丁下角三丁舟津一段登馬口此分私

按釘野今書„„久木野·桃井今作百木1

【下角登馬今不 分明 舟津有三村,

和泉守義親大河内五

丁五段上野隅サギノ浦アブ瀬七段下り馬口被下也

上村女

按三郎皆吉千十郎續松之役本鄉與一左衛門尉加悅彥

五郎重行阿蘇惟豐智子:御成候時續松之役加悅右近

兄弟皆吉與三郎蜂須賀孫四郎酌仕也 重俊御元服

武顯重治

之時御太刀岩田源左衛門尉クッ大井殿

池重。

龜三年癸亥宮地合戰蜂須賀右衛門尉家直

某 千代丸

-親房

-本秀 越後守

家貞

但馬守 攝津守

右近

玄蕃丸

始名高俊

弓箭覺悟之趣對武顯

重行申談候之處相良長唯

以一意可被馳走之由

案中候此節可被添心

事憑存候猶赤星六郎

可申候恐々謹言

正月十五日 義宗判

蜂須賀攝津守殿

本郷治武左衛門尉跡六丁クセン守山

菊龍丸

新撰事蹟铜考卷之十六

二五七

‶村在 八代郡

竈蓋五町ヘキ一町合二十一町

ツネ給三町

按有佐村日置

ヘキ

大宮司 道後鄉役飯代私領田九町分アラサ六町

按未

5名今不分明

顯忠樣依十六年劫治部少輔家親宮原

西岩戸名サウシ

岩戸名四丁同守山江頭サウシラ名二丁 [鄉江 頭 村 守山

按守山益城郡守山

按小

今尾村

> 九州肥後國八代莊小井丸鄉之内 下一步之内 [井九

鄉今小犬鄉ハヤ

親房遠江國炭原莊被下居屋敷鶴谷村尾張國皆樂之郡

被下居屋敷蜂須賀莊被下後是號蜂須賀名字宮方將軍

之戰時依宮方忠抽丹波國丹井莊被下置候又伯耆國一

役被下候右條口宣候也九州筑後國河崎莊十町之夕t

11

谷田十内とのへ

清正

十月四日

天正十九

宛行領知之事詫磨郡之内本村百三十石遣

之候全分所務奉公於無油斷者猶可分加增

者也仍如件

-某 谷田十内 佳豐前,後仕 加藤清正,

-家親

-義房

肥後文獻叢書第三卷

去四月二十二日於宮地鳥越城

合戰之時被疵候條殊以

神妙御感不少旨

征西將軍宮御氣色

所候也悉之以

元中八年六月二十一日左少辨判

蜂須賀越後入道館

凶徒今川了俊襲之時

蜂須賀越後入道館

爲御城衆致忠節候之條

神妙御感不少之旨

征西將軍宮氣色所

候也悉之以狀

元中八年九月二十六日左少辨判

對馬守

教長賜„八代郡麥島村】於八代陣内大手1

戰死

治部少輔 始名親房

按城地未

龜元年辛酉築„„八代大牟田城,

詳 大 牟田

在新蜂須賀治部少輔殿

重年

十二月二十七日

文明十七年乙巳

右家親依忠節之次弟如此所加扶持加茂周

防守義豐之跡十五町 #圖師給之事本意之

時領掌不可有相違狀如件

一同四月十六日宇土爲光井球磨勢現形之

守護勢馳向於木原赤隈合戰之番一人馳加

高名之事

一同十六年三月七日八代沒落以來於所々辛

身之事

一同十一月十五日大手犬馬場合戰之時被疵

被窮高名事

一文明十五年癸卯十月十六日夜於取&合戰

之番於陣內大手橋上粉骨事

一後醍醐天皇之爲御方先祖長年洛中內野原

從合戰以來勳功就中文明三年以來相良爲

續於八代城度々襲來之刻被碎手事

總名曰大牟田;今上土村有城迹,即此也

牟田村北 外牟田上 土有佐下村等之

二 伊分少千

二五六

新撰事蹟通考卷之十六

役戰死

代郡

爲_益城郡豐福城主,

小野 堀江之

其比豐福

義顯

尾張守 兵部丞

|

家次 丹波守

藏人左少辨藤原親忠奉

宜任左衛門少尉

左兵衛尉源親家

幼名金伽羅丸 始„肥後,年十八

興國二年五月廿日 宣旨

-親家

蜂須賀 左兵衛尉 左衛門少尉

高親

-義高

蜂須賀隼人佐

阿彌

親

眞氏

上西門院藏人

義房

義兼之二子

義

家氏

親義

二五五

藏人右少辨

宣轉任守

越後介源親義

弘和三年十一月十三日宣旨

後介高恒始名的兼

紺屋所藏系圖作 越

越後⇐ 越後守

同爲, 湯浦城主,

和泉守

敎長義興頃爲,,葦北郡湯浦城主,

山城守

双三郎

蜂須賀兵部丞能

天授六年五月七日 左少將判

依 仰執達如件

筑後國河崎莊内拾町事

爲兵粮料所可被知行之狀

陸奥伊豫等國守 鎭守府將軍

永保二年十一月三日卒年八十八

正四位下 小一條院判官代 相摸

頼義

母修理命女 幼名王代丸

永承三年九月朔日卒年八十一法名蓮心

從四位上 歴,,治部權少輔 左馬權頭 伊豫陸

奧等諸國守,爲‶上野常陸介】

母大納言元方女子

守致忠女

一本陸奧

源賴信

滿仲弟四子

蜂須賀

名和家臣

右圖得:柳川伯耆家所藏,寫」之叉以 伯耆卷洞

然長狀蜂須賀舊記等,校訓合之,

貞亨三年九月九日死法名秋室彈月

長盛

伯耆十左衞門

貞亨元年十一月二十四日死法名了道宗覺

肥後文獻叢書第三卷

義家

義國

義重

藏人

大炊助

皇嘉門院義重之二子

建二年正月十四日卒

居 上野國新田郡 號 新田冠者:

從五位下 大炊助

義國之長子 新田家之祖

久壽二年六月二十六日卒

從五位下 帶刀長 加賀介 式部大輔

義家之三子 母中宮亮藤原有綱女

卒年六十八

天仁元年七月四日屠髮法名了了八月十八日

出羽守 陸風守 鎮守府將軍

正四位下 左馬允 左近將監

幼名源太 八幡太郎

賴義之長子 母上總介平直方女

顯孝始屬„„大友家,天正七年爲‟島津家麾下,

咸世緣記此年冬島津義久以 太田神崎三百町,

字魞授„„顯孝¸泄禄十五年夏豐臣秀吉征西之時

從爲先鋒,凱旋後賜„本領,佐々成政之討,

隈部和仁等,也 顯孝持,兩端,而不亅出兵亂

平後趨„大阪,謁,秀吉】陳」不」在三一揆黨,時

弟顯輝反,宇土,以」故除,引領地五百町, 1 記島津

慶長十三年十一月二十五日卒法名勝庵大殊

武之嗣惡四郎

民部大輔種基妻シム

11

テ

天正十六年春顯孝至大,留顯輝,守

宇土,時毛利勝信黑田孝高 等 奉„秀吉之命,

來匡一紀國内之亂賊 顯輝出而不」謁勝信等

告之於秀吉,秀吉命而討」之顯輝閉」城堅守

テ

シテ

11

然謀 兵寡不可開」運四月十六 日;夜 密

¸城走 薩摩 匿„出水島津義弘聞」之遣兵

攻」之顯輝強戰數合遂自殺年十九薩人感,,其

佐々傳記藻瀚譜島津

膽勇,建廟於出水】祭」之云

家傳按傳記不、書年

11

仕 立花宗茂 剃髮號„雪人】

伯耆太郎兵衛

|長興

猪之助 正次郎

以上母同顯武,

照一峰

寬永十四年三月十六日死年三十四法名月

顯貞

龍之助

大矢野系圖

女

大矢野

爲兄顯-長興

,

母朽網三河守源鑑康女

名鄲翁宗耶號 長松院,

正保二年三月二十七日於球磨,死年五十法

村上右近大夫

-顯武

龜之助

月1藩翰譜爲,十六年,家傳及家系爲,十六年四月十六

日,今從」之肥後地志略名和傳譜爲:秀吉征西時,誤也

-行良 伯耆角左衛門

11

11

-行興

重行

伯耆守

從四位下 法名熊一卓嫁

系家

於‶隈府,元服菊池重治授名一字質舊記

家系蜂須

室阿蘇大宮司惟豐女

-行憲

伯耆守 修理大夫

正五位下 從四位下

レテル

重行之弟養爲」嗣自」是以〃宇土爲〃家號,

所藏文書

上鄉按察中納言

行直

天文二十二年五月二十一日 宣旨

宇土伯耆守行興

宜任修理大夫

藏人權右少辨藤經元奉

上鄉廣橋大納言

弘治二年四月十四日

宣旨

正五位下源行興

宜敍從四位下

顯孝

從五位下

宇土左兵衛佐

守昌翁院自繁公山主

益城郡莎崎村福城寺有三位牌 銘日前伯州太

行直實行興之弟也行憲死無」子故行直繼」家

法名昌翁自繁緣

11

從五位下

伯耆守

也不以可以信

右馬助顯定本鄉市左衛門顯正 宮田其裔

按松橋醫宮田某系圖有„行憲之 庶 土屋

早世法名空山順性較

宇土十郎

士永祿五年壬戌三月十三日逝去 同之

家系亦

太守從四位下修理大夫源朝臣英興道宗居

宇土郡椿原村 宗福寺 有ņ位牌¸„前伯州

藏人左中辨藤原淳元

二五二

-顯忠

-義興

11

按海東諸國記日教信己卯年遣」使來朝書

肥後州八代源朝臣教 信 約 遣„„歲一船,己

卯 皇朝長祿三年也教信疑教長之謬也然

據„„亨德元年卒,則非教長 但諸國記之

已卯又乙卯之誤而 永亨七年歟而無„他考

證,姑附_于此.

11.

重年

ナルシテ

伯耆守 從五位下

足利義政授名一字,嫁

家系

長祿三年十二月十三日生害|瀬 法名梁傳

棟公稼

室阿蘇大宮司惟鄉女 賀

幸松丸

彈正少弼

一武顯

正五位下

義興卒無」子故爲"養子 繼

養子 繼ㄐ家轄,宕則阿蘇大

實父名闕

宮司惟忠與 名一字 永正元年二月

讓„„八代城於相良長毎,顯忠父子移 木原城,

女明十五年以來與..相家,爭

同年又遷一居宇土城,

11

戰等事載編 年 考徵,故略于

新撰事蹟词考卷之十六

二五]

誤也憲則國音相同

室阿蘇大宮司惟憲女

¸蜂須賀舊記本書作」則

宇土郡椿原村宗福寺有三位牌,銘日前伯州大

守從四位下彈正大弼大仙紹果庵主天文十五

年丙午六月十一日逝去了系亦

從四位下

彈正大弼 伯耆守

與感狀|乎訂攷未|詳 双 洞然長狀永正十

三年有 伯耆守長照,恐重年後改,長照歟

11

之贗物 然 則八代 沒落之比而自"重年,先

1亍

ルハチ

事與,洞然長狀,相符且文製書體 非今

スツ

カ

至:永正 其間二十年感書可」疑然其中

レトエ

蜂須賀舊記等永正元年載„顯忠,自明

$1

洞然長狀八代悟真寺記

家親,感書-

蜂須賀系,

臣蜂須賀

按文明十七年十二月重年有張與,臣

11

法名俊紹貞緣 年1書

年一書」俊國訓相通

11

伯耆守 從五位下

法名悟川紹契緣

此

顯長

肥後文獻叢書第三卷

11

チモエリ

義高譜中,編年考徴延

代,故上元元年之條可,合見

以爲 從顯興:

11

來」也故大日本史菊池傳記等亦皆爲,建武

レトモ

光顯

二年,也然建武二年者 後醍醐天皇重 祚

LA

〃

之明年而其冬足利尊氏始而謀反元元年

六月祖父長年戰一沒京師,同三年父義高戰

死建武二年則長年興¸家開」國之創而顯興

非z遠可以來〃鎮西,時勢,且菊池武朝 申

云正平十三年以後二十七年者顯興入道紹

覺憑〃武光,居〃住當家分國,菊池傳記又日

正平十三年北

朝延交三年也

顯年

〆

女

泰興

名和顯興 篠塚伊賀守 兒

ニモ

島高德等皆來 九國,宮田某所藏名和系圖

11

爲三正平十三年 故今採的徵,從之

顯眞

正六位上 兵庫允

左衛門尉 始名顯昌

所藏文書

出雲國利弘保地頭職爲勳功賞

可知行者

天氣如此悉之以狀

興國元年六月二十一日

左中將判

害躓法名照阿

永亨六年領三宇土,亨德元年五月二十一日生

家系

足利義教授,名之一字,

彈正少弼 從四位下

法名義存

阿波守 正五位下

實基長之四男顯興之弟也

家系

伯耆守 從五位下

彈正少弼 伯耆大夫判官

相良定賴妻

早卒不亅嗣」家法名誠實

從五位下 藏人頭

始名武興叉光興

南條三郎 法名昌棟

村上兵庫允館

二五〇

去月二十六日御札今月二日到來委細承候

新撰事蹟通考卷之十六

右文書以」有〝顯興名,寫,于此」備

進上御奉行所

肥後守藤原武光

上

正平十六年八月日 甲佐社神宮等

阿蘇大宮司惟澄代信阿申當社領肥後國郡

浦幷小河事任去九月五日分旨守護代武貫

弁窪田武宗爲使節還其節候之處如去十月

一日武宗請文者莅彼所欲沙汰付下地於社

家之處於郡浦者宇土道光代構城至小河

者顯興代構要害申異儀之間不及打渡云々

同月同日武貫請女子細同前仍彼請文四通

進上之以此旨可有御披露候恐惶謹言

正平十六年十月十四日

仰下去月二十日前御使等分發向彼所既被

打渡當鄕於社家畢仍社家等欲分所務之處

同二十三日舾顯興代官引率多勢刃傷難掌

祝宗次打擲神人體之條 希代 也其子細

守護使等遂檢見分注進畢

城,

其子泰興始徙,八代城,櫻井某私 記 亦同

亅之太平記載-建武三年誕玩名 和 家臣内河

義直在〝八代城,而爲„一色道猷等,所、攻

取」敗之事」據」之顯興其以前爲.來肥後

者也諸書 建武元年不」知的義眞早獨來

二四九

テ

元四年也是亦誤也

居豐福親王 肥後下向

又按名和傳譜顯興 建武二年三月從„„懷良

【親王來航西·者延

而小河又爲〝甲佐社神 領, 小川 在豐福南

一里許,考„文書,顯興遣氵 代官於小川

注其地,甲佐神官爭,其所務,其時顯興在

豐福城,

チ

11

シテ

按顯興始居 豐福¸據,古城主考名和傳譜,

後遷 八代城,據„„家系圖及大日本史,豐福

小川舊隸,入代郡,2名和家地頭分內也

伯耆守顯興

阿蘇大宮司殿

十二月三日

了抑承候間事不存知事候間以此旨捧請

候聊不等閑之儀候委細御使可被申候恐

謹言

顯興

——高光

某

肥後文獻叢書第三卷

土用松 基長嫡男

元弘元年生)

乙童丸 四郎左衛門尉

正六位上

ス

延元元年十一月朔日於:西坂本戰死年二十

二

按太平記曰長年二男伯耆權守長秋三男修

理亮從„懷良親王 來. 于九國,伯耆卷及家

系圖等所」不」載故不

從四位下 檢非違使

彈正大弼 伯耆守

11

顧興實基長所」生妇正平十三年率 家族數

百 來„肥後,先」是 南朝陵夷名將勇士多戰

沒以」故顯興來„肥後八代,倚┳賴菊池武光

テナリルチ

八代郡以」爲,地頭職之地,始居 豐福

八代郡郡鄉 後生„八代城¸薤髪號„紹覺躪欄

部可照見

明村史至,弘和四年 尙有賦糊

武朝

其時

系圖菊

右濫觴者顯興分押領當社領小河兩郷之間

被下令旨御教書爲遵行守護代因幡守武貫

代使節窪田越中孫次郎代官等去三月之比

入部處顯興申異儀之間被注進畢而重依被

欲早依社家先規且爲神威倍增被致一味

沙汰伯耆守顯興分打擲刃傷當社祝神人

等間事

甲佐宮牒 郡浦府衙

正平十六年六月日

欲早重被仰下分知行神領等事

右神領等任去二月三日 分旨幷御施行之

旨守護人莅彼所々被擬打渡之處押領人宇

土壹岐守入道道光伯耆守顯興幷勾野郷等

依申異儀不事行之由守護注進之上者重被

仰下之如元欲全知行凡本知行之所々于今

不分安堵之間軍勢分減少之上疲勞之至尤

可足高察者哉然早爲被經嚴密御沙汰重言

上如件

阿蘇大宮司惟澄重言上

阿蘇文書

二四八

-義高

-高則

建武二年於‵船上山,自殺

村上與一 稱 河北.

左京進 備中守

伯耆太夫判官 左京大進

檢非違使 正五位上

延元三年五月二十五日從 源顯 家¸於 和泉

母内河右賴女離耆

國堺浦 與 高師直,戰而敗死 年 三十七法名

伯耆卷

了阿

家系圖

所藏文書

頭はか

肥後國八代莊地頭分内鞍楠村

寄進熊野那智山之由被聞食畢

者

天氣如此悉之以狀

建武二年五月二十六日大膳太夫判

伯耆太夫判官館

出雲國大社所藏書

基長

肥後國八代莊地頭分内河内村

三十歳爲」僧法名心阿後居 高野山|

孫三郎三郎左衛門尉

存 吉本村 笠松有熊野權現 神 社 依」爲神

別當神樂寺緣起 景行天皇之時勸

敷河

請交中虛談妖妄不」足因子笑

内在„„高田鄕 今其村有三大肚杵築神社,是亦

因」爲„神領,祭 于此 乎

叉按鞍楠今廢而無」村道 前 鄕吉本村管内名

二丿:

【元元年·故略之

城

11

下三臣内河 彥三郎 義眞於八代 居4古府本

說具載 于編年考

11

』功者賜,一郡一莊之所領 1傳許因考」之此時

以. 義高,補,八代莊地頭職 於｣是爲代官

ル二

名和

爲,,伯耆因幡出雲三國守護,

家族有

1大平記

按建武元年 天皇封"功臣,賞,長年之誠忠,

大日本史廴11

伯耆太夫判官館

建武二年五月二十六日大膳大夫判

天氣如此悉之以狀

寄進出雲大社之由被聞食畢

者

|行氏

助高

泰長

肥後

太郎左衛門

大藏大輔

-長重

大井能登守

長重一作,長生

爲:長年弟,誤也

1

加悅惡四郎

元弘三年閏二月晦日於,,出雲,自殺

加悅土佐守

-長安

爲,,益城郡豐福城番,

越前守

-泰行

爲 葦北郡津奈木城番,

-長秀 飛驒守

布施鬼五郎 左衛門尉

元弘三年四月死

三谷六郎 安藝守

筑前守 正五位下

六郎三郎 修理亮

義氏

安藝權守 正五位下

-氏高

-高重

行泰

隱岐權守館

村上十郎 稱 河南

年五十六

正平十三年十二月十三日於…肥後代,死

源盛 爲„法眼˶ 號 村上信濃坊,

正平九年三月九日死法名行妙

從四位下

上判官,

村上八郎 美作判官

トモ

双號 村

氏安 半内兵衛 爲 津奈木城番,

正平十六年三月二十日死

竹萬七郎 剃髪號,,覺妙

行長 丹後守 爲 葦北郡津奈木城番,

藏人頭刑部卿藤原宗教奉

宣任安藝權守

修理亮源義氏

正平九年六月十八日

上卿日野中納言

二四六

新撰事蹟闹考卷之十六

彌五郎

-

行忠 筑見四郎

行貞 小三郎

-惟村 鋼五郎左衛門尉

賴村 兵庫頭

後改 大石豐前守,

-行村

村上小次郎左衛門尉

法名道教

-長村

小野小次郎

法名道覺

行高

長田小太郎

-行盛

但馬守

故爲 北條義時,奪.j邑上

大日本史

行秋

承久役隨`皇師,防,關東之賊軍於宇治,以

チ

名賜,長年高所以三年聞頭,元弘三年春 後醍醐天皇潛出,隱岐配

所,至〃名和湊,長高俄以〃船上山,爲、壘迎,

主上二四五

從四位下

長義

小三郎 大井但馬權守

長行 孫次郎

梅松論常樂記等爲 六月晦日,今從」之

11

按日次記太平記等作,七月十三日,伯耆卷

11

,爲〃行在天皇還幸 京師,也長高

從」之累功賜〃伯耆 因幡 出雲,爲_三國守護,

延元元年丙子六月晦日於,京師,戰死法名釋

阿

11

居,,伯耆國汗入郡名和莊,以」故名和爲,家

號,村上天皇之裔故又稱,村上,爲三名和莊地

始名長1

11月

「天皇改」伯耆守 從四位下

-長年

又太郎 左衛門尉

-盛高 彌六郎

始名資定

-師房

從一位 太政大臣

稱〃千種殿,又稱〃六條中務宮,寛弘六年七月

二十八日薨年四十六

尋拜〃中務卿,世 呼曰,後中書王,双

-具平親王

第五皇子康保二年叙,二品,爲』親王,

二葬 葛野郡村上山陵,

ノミサギニ

原氏穩子太政大臣基經女也延長四年

六月二日生 桂香坊,立爲,皇太子 天慶九年

四月二十日受禪於承香殿,二十八日卽位

於大殿,康保 四年五月二十五日崩年四十

村上天皇

諱成明醍醐天皇弟十四皇子母中宮藤

名和

系圖之四

新撰事蹟通考卷之十六

-顯房

某

-行勝

某

小野房

忠房

丹波守

嘉保元年九月五日薨年五十八贈,正一位,

稱,六條右府】

從一位 右大臣

稱 堀河左府,

保安二年致仕 祝 髮 法 名寂俊薨年八十七

從一位 左大臣

承曆元年二月十七日薨年七十

寬仁四年賜„„源姓,

之十五

日卒年六十三法名大玄高號瑞祥院

天正十三年襲」封寬永十三年 丙子 六月十三

室秋月長門守種長女

從五位下 始名賴房

-長每

四郎次郎 宮內大輔 左兵衛佐

-長誠 佐三郎

賴房 爲„忠房之嗣,

天正九年島津義久授l,家 名 舊用 之一字,

謂,忠房 十二月嗣 濆領,年甫十歲僅保,球

磨一郡,居, 人吉城, 十三年乙酉二月十四日

死年十四法名天膺了淸

忠房

家臣上村莊右衛門長陸妻

四郎太郎

女

又按國志略賴高之子辰王丸護高父生害時

遁匿 葦北 同十年正月 深水合右衛門於”

水俣山中生殺之年十七其墓在南福寺後山,

八年條,子孫存 于人吉

圖大成武鑑 宗芳 慕銘等所」不」載故不取

宗芳傳著編年考徵 天正十

二四三

室鷲尾宰相隆尙女

始名長武

-賴喬

長次郎 遠江守 從五位下

爲 萬江長矩養女

賴福 爲賴喬之嗣

女 家臣萬江長右衛門長矩妻

莊次 郎

女

賴喬室

始名賴在 爲家臣;

!長秀

莊次郎 主殿助

元和六年八月叙,從五位下,任..壹岐守,寛永

十三年 襲」封 領 球磨郡二萬二千百石餘,明

歷二年閏 四月肥 後日向兩國界椎葉山可——支

配¸旨蒙 台命 寛文四年閏五月致仕七年庚

午六月二十九日卒法名本源雄性號„天眞院,

女 家臣相良喜平次頼章妻

始名頼尙

頼寬

長次郎 壹岐守 從五位下

阿蘇,二日與, 甲斐宗運,戰ⱺ于響原,敗死年

蘇,相連通天正九年秋兵勢盡遂降„島 津

久之麾下,同年十二月爲,島津家之先鋒,征,

11

永祿七年五月足利義輝賜名一字,改義頼

叉改„義陽¡叙„從四位下任修 理大夫,兼ń

傾四郡,居 古麓城,始 屬„大友 義鎭 與阿

始名頼房 義頼

修理大夫 從四位下

-義陽

四郎太郎 遠江守

女 義陽室

女刈某妻

菱某

萬次郎

代林泉院未、群

林泉院

日野覺書廟所

11

亨祿三年爲」嗣居人吉城,天文十四年與、父

同賜,一字 改„晴廣i十二月叙_從五位下,

任三右兵衛佐 十五年繼,遺頗 徙,古麓城 弘

治元年乙卯八月十二日卒 法 名兆山蓮慶號

實相良上總介賴興財駿長男

肥後文獻叢書第三卷

女之於古麓城至芭蕉谷上山,法名越江蓮芳號氵

日野覺書大成武鑑系圖島津家傳響原合戰記

-賴貞

止其逆亂,她相良舊臣相議逐殺」之其廟

在三城家臣深水參河守入道宗芳 子,然正本系

レトモ

按異本系圖於"八代,生害大成武鑑有故

出奔薩摩 不﹂知,就是跟召國志略 八 代事

跡考爲y大膳大夫 賴高,今 大膳亮賴貞從

大成武鑑 島津世錄記,双異本系圖及水俣

家傳國志略等有賴貞之 弟 帶刀賴通」爲5

云小谷地也價 【考

志略入

下今之春光禪寺右,稱三相良天神 乃前

11

津忠平在,日向國眞幸,聞」之道,使招賴貞

11

沒,乘」 變潛逃赴 上球磨﹐近鄉 爲、之駭動島

スルニ

及義陽戰

谷山,未､知孰是,谷山乃種山也

テ

國志略島津世錄記◎世緑記小谷作

ニハチ

兄義陽ę通 薩摩¸義陽遣」兵捕」之幽,八代小

爲„北郡津奈木地頭,居 津奈木城,密叛

大膳亮

德千代丸

【 日野覺書芭蕉谷作 二邊谷 未▵知孰是,

柳江院

チ

二八

チ

三十八宗運函一送義陽首於八代 家 臣 等,

”

二四二

新撰事蹟通考卷之十五

長隆 爲名„瑞堅,爲觀音寺住職,

名大谷蓮世號 高雲寺 *

系

大永五年丁酉正月十一日於,葦北郡水俣,生

害年二十五大市武鄉 墓在 七日町藥師堂脇,法

室伊東大和守尹祩女

-長祗

太郎 始名長聖

-義滋 爲長定之嗣,

1

泉寺記

西家記玉

天正十年正月相良家沒落 時焚、城退„球

繼爲„關城主ˇ　法名蓮室休淸

-長時

西次郎兵衛尉

もとの生れはもとにこそあれ

こをさりかしてに行身ひとつの

七日又有辭世歌,

1

銘華嶽蓮榮居士天文二十二癸丑 載二月十

岾墓在„岡 小路村 蓮華寺跡,令擊師堂存

在 關城北

長定

-義滋

一畴廣

始名賴重長爲爲清

藤五郎 右兵衛佐 從五位下

代蓮乘院未」詳

遇

11

日野覺書廟所

月十二日卒年四十三 法 名了德永幸號 蓮

” 叙,從 位下,任三宮内大輔 十五年丙子八

字の下字あるべし

足利義晴賜一字,改三義玆 十二月 ¸歷名土代

亨祿三年移居古麓城1年 一 天文 十四年

鷹峰城

大永六年長定沒落後嗣、家五月入三人吉城,

大成武

始名長唯 實長年長男

宮内大輔 從五位下

六郎丸 左衞門尉 近江守

大村鬼木戒藏院,法名西池蓮秀

大永四年八月入,,,,,人吉城,繼,長祇之家,同六

年沒落亨祿四年 辛 卯十一月十一日生害,

實賴金男

民部大輔

ı聯微整大威

野覺書大成

西華蓮船號,,日野某覺書

爲續 善 和歌聯句,

文明始與八

始名賴元元服之時菊池爲 邦 授 名一字,改..

洞然状家豕臣

從五位下

爲續

四郎三郎 左衛門尉

1世

女 上村參河守直賴妻

賴村

賴幡 藤五郎

アキラ

-長定 爲 長祇之嗣

因」病不」爲」嫡不」爲」嗣

-賴金

相摸守

五十八法名寶山道珍

後葦北郡,應仁年戊子三月二十五日卒年

肥後文獻叢書第三卷

二年讓„„家於 長 祇,隱異代郡領主名和顯忠·接」兵屢角」勢連歳

年三月顯忠終不」利出‟居城麓,而遁爲續

得„„其地¸尋略 豐福¸且領天草郡,後爲續勢

衰明應八年退保„球磨郡人吉城,顯忠復還

八代,九年庚申六月二十日卒 年 五十四法名

洞然長狀 日

玉井院 葬 無量壽院長城北二一里 餘 興善寺

爲 八代郡 關 城主,

古城 主考○在 古

伊勢守 稱」西爲„家臣】武鐵

一右衛門尉

尙

賴廉 駿河守 爲 上村直賴養子

本卒年五十法名大地蓮心孫個長

古麓城之東南熊河濱

日

十五年 戊 寅 五月十一日

水八代郡松熊村屬色在

„居今出水 武獬dH

武鑑○今出

洞然長狀大成

永正元年二月討名和顯忠 顯忠服 而還 宇

土城 長每以„„麓城˝ 爲居所,自」是火併引領

球磨八代葦北天草四郡,七年任 近江守十

室伊東大和守祐國女

始名長輔 後致仕號:休也齊|

從五位下

長每

太郎 宮内少輔 近江守

頼泰 權五郎 左近將監

武鑑〇爲續事跡具著: 于編

年考徵·故不-復‶于此,

相良因幡守經頼妻

女

稱 小垣¸爲氵 家臣亅

頼氏

頼範 九郎 家臣青井前淸為養子】

稱〃丸野¸爲〃家臣

氏頼 兵庫允 稱丸目爲家臣:

頼豐 頼劫 藤太 稱〃今村,爲〃〃家臣,

相良近江守九州奉行之事吉野上承仰候

由其聞候仍宇土河尻邊羅越て云々

荒瀬入道 狀中

11

日卒臥鹹賦大老 法名立阿彌陀佛葬,觀音寺-

戰死

阿蘇文書九月十一日齋藤美 濃 守贈

自 賴廣 三代 奉仕南朝,元中二年賜,肥

前國守 護 職 ¸又將軍宮賜本領安堵之旨,

十一月被」許„昇殿,應永元年 甲戌 正月十九

大成武鑑於三

-前賴

近江守 從五位下

長俊 民部少輔 松木 爲„家臣,

氏高

稱„外越爲„„家臣;

四郎

二三九

實永富治部少輔實重長男永亨中任,,左近將

監 文安五年五月續„堯賴之遺領,長 祿 二年

後返島

領 薩摩國牛屎院及牛山, 良 四 年領肥

從五位下

長續

藤五郎 左近將監

年十六法名悦山大喜

文安五年戊辰三月二十八日於三大隅國,死

堯頼

夕 力

三郎

-頼家 六郎三郎

嘉吉三年癸亥六月二十六日卒法名竺芳永德

室島津陸奧守久豐女誌國際

長狀

前續

サキツグ

近江守 從五位下

四年丁酉四月四日卒法名實阿彌陀佛

應永元年繼,,遺跡,五年九月任 兵庫允,二十

始名頼

實長

兵庫允 從五位下

長續 嗣本家堯賴之家

實賴連

重

藤五郎

治部少輔

賴均

賴道

彈正忠

左近將監

賴積

長滋

蓀左近五郎

監

於. 關東,戰死

賴常

永富彌三郎 領 山田鄉永富|

賴明 永富莊司次郎 法名觀元

建長六年繼｣家 兼 顩肥後 葦北郡,弘安四

年蒙古襲來時防｣之有｣功延慶 年中 正月二

十四日死法名迎蓮葬 大村佐牟田,

賴俊

六郎 實賴親弟

女 家臣愛甲九郎景元妻

稱和富

賴爲 彌十郎 獅子

賴貞

1

有子

肥後文獻叢書第三卷

十郎

將正平十二年賜 日向國莊内地 十三年十月任,

兵庫允,文中元年壬子八月二十五日卒 法 名

契阿彌陀佛

室名和伯耆守顯興女

·定賴

八郎 兵庫允 從五位下

稱:竹下¸爲三家臣

氏泰 四郎

賴長 十郎

稱 西橋,爲„家臣,

治部祐長

少輔稱毛¸爲家臣

死年月未」詳法名蓮喜葬,大村佐牟田,

彌三郎

賴照 讚岐守 稱 薗田¸爲„家臣

-長家 三郎 後名:正觀坊幸慶村山家祖

長任 彌六郎 稱 桑原 爲家臣|

賴淸 十郎 稱 薩摩瀨¸爲„家臣ı

正中年中死法名蓮道葬 大村佐牟田,

-長氏

六郎三郎

二三

賴忠

-賴平

-賴重

賴元

11

玉名郡山北鄉西安寺 有塔石銘 日

造立,五輪卒都婆一基 延應元年七月 當寺

大檀那遠江`國`住人相良四郎左衛門入道

高橋左近將監

住 山鹿郡高橋

建長六年讓家等於弟賴俊 後居|神瀨山叉球

磨山 永元年甲子五月二十二日死 法 名觀

内田三郎左衛門 法名淨位

住 山鹿郡内田子孫移„亀田郡大

多尾村 系圖在別

山北五郎左衛門

法名淨信

三年乙巳住 玉名郡山北,

言院西安寺

延應元年三月建:一寺"於山北 號 大護山眞

【寺有 池菊義治之書四通

内古閑鎭房等之書狀· 有 賴

正嘉元年四至界榜示之書級椁赫西安寺"有塔石

三年與那智·有境論時/留書

銘"日奉 造立,五 輪 卒都婆一基正嘉元年丁

巳八月日當寺大檀那遠江`國 住人相良五郎

左衛門入道淨信主耶左衛門入道沙彌定智嘉元二年

洛陽六波羅住人諸

甲辰七月九

日酉刻入滅

佐原六郎左衛門

大隅國正八幡宮`地頭

賴員 九郎 稱 大童 原 三家出、自賴員

異本系圖 西豐永

爲賴 八郎 後遁世號』道忍

領上村

賴武

賴村

-賴綱

上村七郎

賴俊 嗣 兄賴親之家

月二十二日爲 遠江守,二

十四年五月十二日出家

武任始、中務丞天交十年七

遠江守武任仕 大内家, 異本系龥○歷名土代曰相長

源賴嗣之時爲„„競馬二番之右,陳賴*後孫

續¸„祖父賴景之家-長狀

八月

桐燃 寬元賴氏

多良木彌五郎 法名上蓮

仙大德葬„„原田馬草野正持寺,

1

カプノセ

勅;而賜 禪師號

源實朝薨l'賴親剃髪號 觀仙, 汏成武鑑!後

在鎌倉`時將軍若宮八幡社參從」之有三名譽,

始`名 賴宗

-賴規

四郎兵衛尉

流之子孫悉以相良|爲家號

長八二年始今住 遠江 國相良 莊,自、是一

周頼

右京大夫 下野守

維頼

從五位下

或 時文維兼之間有時頼,

-維兼

11

從五位下 遠江守

伊豆守

或作爲時i

-時理遠江守 伊東家祖

從五位下

因」爲‟木工助,稱 工藤,

爲憲

從五位下 木工助 遠江權守

讚岐守 始 名 眞衡

-維幾

從五位上

コレチカ

肥後文獻叢書第三卷

-光賴

-賴寛

賴景

-長賴

-宗賴

山鹿郡山井1 内田村

高橋

住,今屬斥 内田山井四郎左衛門

建八九年補„肥後球磨郡`地頭職 來、任居

人吉,正治元年源賴朝薨長賴 剃髮號 蓮佛

承八三年六月`役"有、功因 玆賜 播磨國飾

摩郡豐前國上毛下毛之地,建長元年補豐前

上毛郡奈利恒莊`地頭,同三年辛亥三月十日

死年七十五法名蓮佛葬 願成寺

相良三郎

建八四年源賴朝賜„„肥後球磨郡多良木莊

因 而來 居 食邑以 孫賴氏 繼多良木家

法名蓮寂

相良三郎四郎

-賴繁

相良藤太

相良大膳大夫

或"云光賴實 伊東祐光之二男

工藤大夫

二三六

新撰事蹟通考卷之十五

願行寺

前日者御越祝着候依繁多不能開談心

外候殊播摩椙原給候御懇志之至分悅喜

候此等之儀爲可申染筆候細々可示給事

本望候猶多聞院可有宣銳候恐惶謹言

四月十一日

義武

願行寺文書

蜂須賀攝津守殿

義宗

正月十五日

系圖:故略」之

蜂須賀文書

文書寫 蜂須賀

按據„長曆,推、之永正十七年也

ス二

y

宗薫藏主

閏六月十三日

重治

金龜寺之事預進候以在國覺悟肝要彼

守領之内平島貳町餘近年相分候歟如先

先可有知行候恐惶謹言

奴留湯文書

家等有ņ數通,花押皆無、異

義武之書簡田尻奴留湯願行寺西安寺蜂須賀

二三五

陸奥守

左少辨

-高扶

清夏

從五位上

從四位下

播磨守 中納言

伊賀守

雄友

弟河

正三位

從五位下

左大辨 右大臣

一是公

正三位

參議 治部卿

乙麻呂

從三位

正二位 左大臣

藤原武智麻呂

鎌足之孫而不比等子也

相良

系圖之三

新撰事蹟通考卷之十五

一義武

肥後文献書第三卷

始名重治義宗

11

按詫磨郡木部村有:逆修塔 銘日林田左

京亮藤原能次法名瑞林院梅屋宗心居士

天文二年癸巳四月七日林田村井系圖日

能次武包之子於 播磨國姫路林田村,生

亨祿頃來 肥前國唐津 大永元年 歸 肥

後,住凱居木部村,世稱,木部殿,林田村

井之祖也亨祿大永相前後推,,年齒,疑

非武包子,

ス二

十郎

肥後守

左兵衛佐 從四位下

實大友義長之二男也武包去」國而菊池家無

主永正十七年依,諸臣之請,大友義鑑立,其

弟重治¸繼 菊池家¸爲 肥後守護ı 傳記治亂

祿四年三月敘„從四位下,兼„左兵衛佐 歴名

足利義晴授„名一字 改 義宗

記古城考

代

略傳歴名士代Ö歴

名士代作 義右誤

也又傳記爲三義國:寶 義宗自」享」國暴戾不.勉國

銘未」見」之故不取

郡,自殺沽城生子,亦無註明徵,故附而備」考

11

治亂記

按傳記義武之子有..犬房丸,然義武事跡傳記

之說不」能」信其事著 編年考徵天文十九 年

11

考

11

條,又田尻家有 高鑑之書狀¸家認爲,義武之

城註考法名全圭宗閆鼷

於,直入馭 後又憑„„相良義滋,匪„球磨郡,二十三年大

友義鎭聞』之遣」兵迎一捕之於豐後 十月義武

出„城壁逭嶽邑,大友兵追」之與三名字,

戰:于金峰山北野,於是義武自„河内,乘 漁

舟¸竊赴 肥前島原忖代志鬢滿願寺一萬田田风等

古城主考嶽村戰場首塚銘田尻家

政,且不、從„„長兄義鑑,是以國中旗下多倍而

歸„„大友,天文二年氏族木野則屢~諫」之義

宗却而斬..戮之,自¸玆群臣盆-疎矣三年義

宗畏難及. 我身 逃 隈府 賴相良家 孱居

治亂記古城主考願 相耳

八代

十九年田島某 鹿子

'家,以下據,洞然長狀1

木某迎,義武於隈本城,作」亂劃義宗然財其後

洞然長狀天女

八月大友義鎭遣」兵攻」之義武不」勝

チテ

二三四

週考卷之十四

按武經歸 阿蘇 改 舊名惟長 稱阿蘇萬休

齊 有子孫,故歸 阿蘇 以下事跡行 狀 等

詳載,之於阿蘇系圖 故略」之

阿蘇系譜

x

始名惟長

從四位下

肥後守

按廣福寺舊記法名儀山淨智不」知孰是

過去帳

11

天仙源祐乃葬 此寺,寺傳記安國

之將朽網兵庫頭親滿率」兵陣,,筑後,聞」之來

阿蘇文

而要, 玉名郡臼間櫻馬場 終捕 隆 一同征文

* 閏八月十七日於三合志郡安國寺,自殺法名

武包

實阿蘇大宮司惟憲之長子也始受. 惟憲之讓

爲_大宮司 永正二年秋菊池家一族諸臣相議

廢 其主政隆 請立惟長爲』嗣君,其父 惟

憲聽」之十二月八十四人以, 連判誓書,迎 惟

長 惟長讓„秕職於弟惟豐,如隈府續菊

家:爲 肥後守護,更Ņ名武經,其後武經驕暴

而與,大友阿蘇 不、平將士亦乖離同八年武

經懼、難遯„隈府i還„阿蘇¸鱄郝肥後治亂記阿

遂逐 武包 大永三年三月武包 集」黨起」兵

據 -武平

二三三

永祿三年五月二十五日於 高來 死

死隊

左近將監

古系圖

玉名郡小代筒嶽城 阿蘇惟豐蔿甲斐

宣將扮遣.兵攻」之武包迎戰大敗脫」城 走肥

前國高來

傅記略傳

天文元年二月十三日於 高

來 死法名宗岳

11

愚而國士不 親附,永正中杵 明群臣宗室定」議

實庶流詑磨別當武安之子也武經歸 阿蘇¸隈

部親氏長野運貞內古開重載等評議立,武包,

爲」嗣稱,二十五代 館;雖、然武包亦孤弱

肥後守

宮松丸

肥後守

清源寺有武經永正四年二月之寄進狀文,

略之

九月二十七日

能運

文龜三年 亥

木山三百五十町#彼 城之事以前如申候

早々御入部可目出度¯门委細御使申

候恐々敬白

阿蘇文書

其中任„實相院殿御判之旨 云~ 双碧巖

寺過去帳實相院儀天英忠大居士能運之院

號實相院今據」之

11

又按清源寺有 武經之永正四年寺領證書

11

其鎮内」修 能運追福

1

守護職 非也 考 長狀 能運在. 高來相良長

毎書音及度通 竭力於興復 能運咸, 其

懇切¸歸藩後增„其封 厚謝 其信 長每亦

禮遇如、臣據」之則光福寺者長每建 之於

池家亡肥後無ī

肥筑大守立之其比菊

號 增長山 相良某建」之

八代事跡考天交十六年

肥後文獻叢書第三卷

|政隆

始名政朝廣福寺有永正二年八月之狀 書 政朝 同

年九月阿蘇惟長之狀亦誌 政朝,然則 其後

永正二年十二月終廢„„政隆 諱政隆賴相

良家,而隱 寓葦北郡二見,其後又赴,筑後

燃六年圖再復集 兵城政元隈部鎮治

等應」之乃挾„政隆,討武經 此秋 大友

11

議奉 政朝 爲、嗣是因„能運之遺命,也遺命據,

洞然長

政朝爲」人暗劣無 將帥之略 將士,不服

實肥前守重安長子也能運卒無、子老臣 等 相

隆

改 政

ニモ

肥後守

肥後守

又清源寺有,明應六年八月寺領證書 花押

異矣故寫」之

阿蘇殿

11 11111

新撰事蹟通考卷之十四

文明十四年生重朝卒能運財年十二繼爲肥後

守護 文龜元年五月爲 宇土爲光 被､破趣

カニ

從五位下 始名武運

能運

宮菊丸

肥後守

文明元年叛,父爲邦¸據 豐福城ň爲 邦遣

重朝,攻」之武邦強戰數合終自殺年十九

某 加賀滿丸 於„豐後,死年二十一

|武邦

民部允

シ

其餘重朝之書狀有„許多,又廣福清源等

諸寺亦有」之花押皆同

阿蘇殿

ニモ

重朝

八月十九日

承候誠目出候天下之御祈禱不可過之候

哉仍以御使示預之趣老者共以談合自是

可申候不可有踈略之儀恐々敬白

文明四年壬辰

中」建:一寺 號„光福寺 F& 今 見光 福寺

廢而僅存 草堂,安引置其時本尊如意 輪 觀

音 草堂右有三五輪塔石 銘文磨滅不 可

、讀里人傳云菊池殿之墓也又草堂安 古位

牌,銘日前肥筑大守光福寺殿儀天明 綱 大

禪定門其背曰永正元年甲子二月十五日

國志略之說近」是然 洞然長狀等實錄爲光

伏誅時能運躬不到宇土 双 皆 於 菊池

病死叉正觀寺古之塔中實相院遺迹桐木有

11 111 1

』墓葬„正觀寺,不」可、疑陣跡略志光 福 寺

レトモ

ルニ

又按國志略曰文龜三年九月討 宇土爲光,

而誅之能運亦蒙深創 不得¸歸 隈府

至„八代郡岡城,明年二月卒乃 „岡村 山

11

按能運還 隈府|傳記 爲十月{然九月二十

七日能運有-送阿蘇惟長 書記:于先,

路非-自,高來,送書」然則爲 九月,明也故

今改」之尚編年考徵可:合見

トモ

永正元年甲子二月十五日卒年二十三法名儀

天明綱號實相院,葬„正觀寺¸

ス

肥前高來,三年癸亥九月遂誅 爲光i復隈府

11

-親則

相直

肥後文獻叢書第三巻

11

カ

重光之名,別載„重光弟德鶴丸 今從長

木野但馬守

イリマ

明應六年五月修„八代郡大野 石 室

重朝

木野對馬守

ナルチ

天文二年以„菊池義宗之無道 親則諫」之

ニテ

義宗大怒而殺」之

11

ニシテ

11

按木野鄕木野村在」菊池郡木野對馬守武

茂其子但馬守武貞以來領」之相直親則又

稱,但馬守對馬守,然則相直續 其 家, 領

其地,乎未」詳一本相直不」爲持朝之子,

爲‟武茂之裔,今從 傳記系圖,又傳記相直

親則領„八代郡大野、居 高塚城,其說著,

于編年考徵天文二年條」

11

ス

又按異本親則之子彌次郎親政居 木野;永

祿元年從‟大友之軍,攻 小原鑑於 南 關

城,被„重創,歸 木野¸而死葬彰孝禪寺

一日親政隈部親家之弟國志略木野武茂後

ニハ

孫 而 隈部親永之妹智隈部系圖親則妻親

御嶽本堂之上葺并下宮可有御修造之由

阿蘇家有」之重朝書翰

龍雲院恐重朝之院號也

ラン

按清源寺有 嗣子能運之明應六年八月寺

其文曰代々寄進地之事任氵 龍雲

院殿御判之旨,不、可以有…相違,之狀如、件

自」是國中稱謂月松 御館,明應二年癸丑十

月二十九日卒年四十五法名梅屋祥英〃玉

祥寺

チヤカタ

月やしる十代の松の千々の秋

寶德元年生文正元年嗣立爲〃肥後守護, 好,

儒學¸隈府建〃聖堂,文明九 年二月始行, 釋

簤,又善,和歌聯句,同十三年八月一萬句聯

歌張行之時月松題

從四位下

藤菊丸 肥後守

认同未、知孰的從,附而備、考

家妹彌次郎親政母也一本菊池 系 圖親 政

爲〞持朝之弟木野對馬守武則 子

|爲光

-爲房

シテ チ

龜元年戰死政朝嗣立而後 永 正元年

本家相續故重基繼 其迹 爲肥前守 傳

記誤矣

11

異本重安子有:合志丹波守重 詳 于合志

系圖之末：

叉政朝弟有 菊池刑部允政基:天文四年

八月二十二日病死法名天宗諸本不」載

、之故姑省」之

詫磨大膳太夫

康正元年遣 使於朝鮮

考徵部:

`〃

按阿蘇家有, 重房之文明四年十月二十日

書狀 其上包紙裏書 詫磨, 爲房之子

未詳

ナル

宇土彈正大弼

重光

文明十八年爲光謀-亡,重朝, 奪』守護

職」重朝聞」之遣、兵討」之戰_木原赤熊

爲光敗走憑„„相良家 匿„八代郡松隈 十

八年依ņ 相良長每之語: 重朝釋」之歸,

宇土 明應二年重朝卒其子能運嗣爲 守

護, 文龜元年五月爲光叉圖」逆起」兵密

【通考卷之十四

ラシム

洞然長狀爲光息重光嫡男宮滿以上三人

於 隈府 生害然為光於: 大見自刃諸書

皆同據„長狀 重光宮光二人留隈府 故

爲、虜被」戮歟叉傳記系圖以三宮光,爲

11

11

二人共與」父同被」殺

宮光丸

阿蘇家有‟爲光之文明四年十月十九

書狀,其上包紙裏誌 宇土殿,

日

菊池爲光逝去廟 尊骸土中名奚留

靈魂无、朽石碑銘

松樹千年槿花榮

光皋在三大見大口二村界山中標‟木”

拜塔松;近世建 石碑,其銘曰

11

シルシ

按崋本爲光爲‟宇土掃部助忠豐養子 爲

緞 攻隈府: 能運不」利出超, 肥前高來,爲

光取 隈府城: 居」之稱„肥後守護 三年九

月城重峰隈部運治等 義兵,迎能運

戰„„高瀨 爲光敗績遜一走宇土 遂於三大見;

-略愽傳記古城

被

長狀

-爲安

11

自筆

之狀

伯巧和尚,爲„„開祖 號 神龍山碧巖寺¸此寺有

所持鏡

長亨二年卒年五十九葬 此寺 墓標銘日

11

碧巖寺殿尖活仍勢居士長亨二年戌申十月二

十一日玉祥寺亦有墓

阿蘇家有,爲邦之書狀

肥後國八代郡之内海東村事可有御領知

之狀如件

長祿五年正月二十八日、肥後守

阿蘇大宮司殿

上包阿蘇大宮司殿肥後守爲邦

按長祿四年十二月二十一日改 元正 西

海遠遼至翌正月一未達故用 長祿,叉其

外諸寺有 寄進狀 略」之

肥前守

寛正六年四月於 筑後國高良山 戰死年三

十四墓在 玉名郡石貫村,其銘日進疇大禪

按傳記系圖重基爲 重安之養子 然重安

貝重順之子也

重基

肥前守 法名見西

龜元年續 父跡 爲 肥前守 永正元年

爲„„守護能運之嗣,

肥前守

重順 菊池武藏守 法名元梁

按廣福寺有 德鶴丸之寛正七年 四 月之

書,阿蘇家有 同人文 明四 年十月之書,

其上包紙裏誌„肥前德鶴丸,是重安之 幼

名乎附而備」考傳記系圖德鶴丸爲 宇土

爲光二子 非也

文龜元年五月二十日於 菊池郡袈裟尾

原 戰死法名進覺

重安

菊池肥前守

定門藤原爲安寬正六年乙酉四月二十日

新撰事蹟過考卷之十四

正長二年十二月十五日

宇治惟忠

加冠名字事

阿蘇家有ņ持朝之書狀,

片角村光善寺:

七月二十八日卒年三十八法名阿三蘇 光

足利義持賜,名一字,稱ⅰ 持武,後改 持朝

應永十六年生永亨三年嗣」封文安三年 丙 寅

從四位下

肥後守

-英朝 千田伊豫守有子孫】

武楯 高瀨相摸守

高瀨武國養子

謹上阿蘇殿

十一月十四日 沙彌元朝

神馬一疋栗毛駄進之候恐々謹言

銘中央永俊居士左永亨三右八十一大木

二二七

永亨二年生文安三年襲」封支正元年亂」職

隱居合志郡板井村,後剃髪爲 僧居館為」寺

自稱, 尖活仍勢居士,講 碧巖集,又招,如拙

從五位下

-爲邦-

犬丸 肥後守

異本系圖忠親弟 載〃泰朝,嗣〃高瀬家,諸

書無 所見,故不」取

有〃數株 其根擦 碑四方,里俗謂,新宮森

是乃忠親之墓也

シンクウ

カラム

11

小野實恆筆記曰忠親爲〝父兼朝 被摧

屛,居山本郡北谷村,年二十一遂自殺死碑

11

忠親 新宮次郎

持朝之書廣福清源正觀等諸寺亦有」之

ニモ

正長以前襲,封然無„他據¸姑從 傳記

トモ

按永亨三年嗣」封有三正長二年書,可」疑恐

上包 阿蘇叉次郎殿 持朝

阿蘇叉次郎殿

武朝花押有異左"記」之

當社酉巳丑祭料當國國衛之内府中畠

地三町事任先例可致沙汰候恐謹言

八月十九日 右京太夫武朝判

抑續目安堵事御申候際其子細分言上

候處無相違被成候目出候則可進候之

處路次難儀候間分申其子細候處自性

院御越悦喜仕候間分進候次世上事異

無不審候間不分申候隨而所存之分對

御使委細分申候可被聞食候哉雖無何

事候連々示給可分申候恐々謹言

二月廿五日 右京權太夫武朝判

阿蘇殿

肥後文獻書第三卷

依立願候 阿蘇上宮 太刀一腰銘吉光

阿蘇家有」之兼朝之書翰

山中,病死今佐敷無„其遺跡, 據、何乎未

紙誌兼朝 夂菊池傳記於 |葦北郡 佐

11

按兼朝落髮諸書脫」之詑磨文書有-澁川道

鎭贈„菊池肥後入道 書簡」 卽兼朝也忍阿

蘇家及正觀寺有 |沙彌元朝之書狀,其上包

11

弘和三年生應永十四年紹」封爲肥後守護

永亨三年致仕文安元年甲子三月八日卒年六

十二法名旭山元朝葬,正善寺1

祝髮號 元朝

從四位下

-兼朝

京太夫

右肥後守

薗田本武朝弟有:武相 菊池十郎,其後

孫菊池伊豆守武元爲‟越中國七尾城主,天

正六年於越後國,戰死其末男菊池十郎武

厚女爲 高倉某妻,也

-兼秋 西左馬助

一こうしについて一大事を申入候へき

一さきたて申入候し國間事そのほか所

所さいあるましき事

天授二年二月廿三日 藤原賀々丸

きやうこうのためにかたく申さため

おく條々

肥後國神藏荘内近見村半分地頭職事

右爲天下泰平御願滿足殊當家安穩子

孫繁榮所願成就奉寄進之狀如件

花押有 此裏：

阿蘇御嶽

奉寄進

幼稚之間不及判形候可有御免候哉

重而恐々謹言

追啓

謹上阿蘇大宮司殿

藤原賀々丸

十二月二十五日

間平憑事候至始終進退者宜爲御意候此

節一途預御籌策候者可爲喜悅候凡鎭西

武略互有合力者共以不可失家名候哉毎

事期後信候恐々謹言

二二五

御札委細承候事

惟政也

阿蘇殿

惟武子

天授六年七月十八日 武興

右此條々御内心に候は、ひさゝか身

にをきてかわり申事あるましく候若

僞申候は、八幡大菩薩御罰を可罹蒙

一ちうさく以下何事∞身の大事はその

しさいを申入て候及しせんの事は御

ふくさうなくうけ給へくすゑすゑま

てもとうかんをそんせす申入うけ給

へき事

しせつまて其みやうしを申さため候

うへはいかやうのけらかいく□らせ

っ□□と∞兩方申あきらめうけ給候

はんするほか御せうゐんもあるまし

僕は身としてもこれをもちゐ申

ましき事

武朝

肥後文獻叢書第三巻

加賀丸 肥後守 右京權太夫

右京大夫、從四位下

始名武興 剃髮號 常明

11

11

テ

1)

スルニ

按阿蘇系譜大宮司宇治惟澄女惟武妹爲”

菊池武朝妻 惟澄之讓狀女子菊池女房菊

池郡北宮御番神神體銘應永十年癸未六月

六日大願主藤原朝臣武朝願主宇治氏女慈

俊是乃惟澄之女乎不」詳系譜爲武朝妻,誤

也年代不,符合 武朝正平十八年生惟澄十九年

ニシテ

11

卒其時讓狀菊池女房乃其證也

ナラン

武政之室 而武朝母 也然亦無„明證,及後

記據 武朝加賀丸之時贈大宮司 書,則疎

闊之體 而非 親家叔姪之文,甚可」疑故

附而備„„博雅之助,

正平十八年生交中三年繼立爲肥後守護時年

十二鼒,父祖之遺訓,奉 征西將軍,與賊將今

貞世大內義弘大友少貳等,數 戰連歲終不」屈

其戰蹟具編年考微載

元中九年南北朝一統故不」

世之故復不 贅 于此,

11

11

以來申承候之上殊不可被御覽放之儀候

雖未細々申通候以事 申承候條常法候

哉抑*依世上自然之儀 御所當國御

幸于今雖無指合戰候官軍等大略加敵候

了此時分御合力候者可爲本望候御先祖

叉墓所未」詳或葬 岡田村正善寺,或叉,

雪野村神德寺,法名透關道徹下」知„就是,

阿蘇家武朝之書翰數十通有」之

則異本得以實故今从之

按傳記系圖加賀丸後加誌孫次郎中務大

輔左京大夫,非也又武朝落髪 諸 書不載

、之異本系圖武朝削髪足利義滿賜法

謂‵‵常朝,正觀寺有 兼朝之應永十八

進狀,其中武光武政常朝代々寄進地 事

云々叉詫磨文書澁川滿賴之書狀抑~常朝退

治之事被,,仰下,候云々 據 阿蘇文書･應

永十二年五月也據」之

,

11

11

得、止雖」降北朝,終身委 心於興復 應永十

四年丁亥三月十八日卒年四十五法名玄微常

チ

あそ殿

8

武

五月八日

田口入道方への御釈のかとむき委細

けぬしたかい候て御ゐのとほり悦

存候如仰わたくしにはさいくにうけ

これよりも申入れ御同心に僕は

恐悦さていつをや狀を進申候ふん

ふしめをやみ候てしひつにて申入す候

事心もとなく存候なをなをなに事候

はすとひんきのときうけ給これよん

可申入候恐謹言

阿蘇家有„武政之書簡數通

到來合志郡碧巖寺古過去帳應安七年六

月志行大廣大居士今從」之尙編年考 徵 文

中三年條可合見」

中三年

代記應安七年 七月二十三日條日菊

南朝文

池次郎武政去月二十六日他界之由鎮西注

淮二二三

併見」

武教長祿比人而非三武政弟高瀬系岡可

ノニシテ

傳記系圖武政之弟有. 高瀬相摸守武敎,

今大日本史

11

-良政 次郎 1本作 武朝弟:

六年也

あそ殿

應安武政

閏十月十四日

なに事候はすともつねに申入たく候へ

ともひんきなんと僕は存なからそ

のきなくまかりすき候事御心元なく相

存候せんと∞申入しことくてんか

きの事はちからなくわたくしにをき

候てさ S/\に申入候へ!候御同心に

御ゐにかけられ候は、恐存候諸事及

可申入恐々謹言

到來應安六五月十二日

かうさへまいる

裏二

武政

あそ殿

上包

右爲天長地久御願圓滿當家安穩子孫繁

豐後國直入鄉柏原村事

奉寄進 阿蘇御嶽

阿蘇家有„武光之書狀數十通 其内自筆書

多寫, 其一二,

按武光讓 家於武政,年月無„致據,正平二

十二年武政改一築城於隈府 故今姑以,此

年,爲 武光罷職之年,武光自興國五年

至」茲二十四年戰迹不.可„枚舉,然家乘

不」傳今僅出,太平記菊池傳記及諸家文書

等|者輯載之於編年考徵部,故不復錄

于此,

11

肥後文獻叢書第

母慈春尼

興國五年受.„弟武士之讓爲„„肥後守護,武光

守三父兄之訓,宅„心於皇室 挾┐擁征西將軍

懷良親王,與,大友少貳等,累歲 構」兵屢勝

」之九國二島悉畏服矣兵威溢 西海, 南朝公

卿將士避」亂疲」兵者多來肥後,依„屬菊池˵

正平二十二年致仕文中二年癸丑十一月十六

日卒法名聖巖葬正観寺 太平記系圖

菊池略傳傳記

一武政

按墓所未」詳又傳記及諸書武政之死爲, 應

永六年十月四日 非也考, 武朝申狀, 武

卒武朝于」時十二歲乃文中三年也花 榮三

興國三年壬午生正平二十二年爲,,,,肥後守護

奉,,征西將軍,九國底平文中三年甲寅六月二

十六日卒年三十三法名志行傳記財報申

從五位下

次郎 肥後守

阿蘇大宮司殿

三月廿二日

武光

高智尾河内次郎四郎申候當時内知行少

少御代官違亂之由歎申候依彼注文進之

候所申無相違候者宜樣可有御斗候

恐々謹言

肥後守武光

榮爲每月大盤若轉讀料足所寄進如件

正平十七年十二月十三日

111111

新撰事蹟通考卷之十四

三世常住十方三寶殊者七佛五十餘代之

武士判

十月二日

かしこまりて申入候武士かあとをやう

しとしておとあかにゆつりて候へと∞

ほつくわんをもやふりいかやうなる事

∞候はん時はあにいてよいちとのを

やうしとしてあとをゆつり候へく候よ

いちとのほつくわんをやふりたうけ

のきょう"わすはそうの御はからひ

としてとのきやうたい一そくのなかに

きやう候はん∞のにあて給り候いく候

武士恐惶謹言

侍者御中

興國五年正月十一日 燎原武士判

鳳儀山

嗣„當家 給」候,此旨,可以有 御披露,

候武士恐惶謹言

11

與,候所領不.殘,一所,於何兄弟一族

之中,選-可爲、仕朝器用之L可:令

女

當國

鎮守阿蘇大明神御罰 永可失 弓箭冥

加 候

三寶龍天護法善神殊者

判

右以三武光

1111 1

從五位下大日本史II後任..

【肥前守 誤也

11

肥後守 始稱豐田十郎

入, 征西將軍宮

文書】考」之武士興國二年繼」封三

年養,乙阿迦丸 爲、嗣讓¸家然亦 據,武

士之五年正月書,乙阿迦蚤死乎又廢」之

乎未詳其成行又不知誰人子,故附

而備考

ルニ

興國三年八月七日

乙阿迦丸師命,候此願若破申候者罷„蒙

¸摧̏ 頭目髓腦 發願之後不

テ

一奉｣ 布:施身命於佛祖 正 法, 之間縱雖

守正直天命,不｣可]_人之義,候

二字原本二十

一繼.,武重武士之家 間於 文武二道,仰

キ

佛祖# 天龍護法善神御前 誓申 發 厠條

條

ス

11

一せいたうの事は衆人のきまちく也と

ふとしやうちきの人のきをほんと

すたとひ武士すくれたるきを申といふ

とつしまとのはやしはらとのしまさ

きとのすやとの一とうなくはわかき

てんはつきしやうもんの事

二叉武士始養乙阿迦丸者」其證書

在廣福寺

トイフ

1

武士實武重之 弟可、知也

ナルコト

武士自筆誓書等今傳于 廣遍寺」擧其一

11

スコアニト

異本以武士,爲三武重之實子」然廣福寺

所藏慈春尼之誓書肥後守A 養子武士

レトモ

一,或曰興國五年二十七歲又一說暫還 國

爲三永和二年繭田本建德二年六月二十八

日卒皆有可」疑者」眞偶駁雑亦不知二探

究故不取附而便校訂」

11

11

11

ニクルチ

又按傳記系十三圖歳出家一本爲三年二十

11

邊終世皆不足」信

スルニ

庵,武士隱寓之地也或云一居詫磨郡小山

ナリト

肥後

又武士之聖護寺寄進狀中武重事記 故兄;

武士天性愚昧不弁天道之正理」是以

奉爲君爲當家」逮於後代」可」爲三其

難」振廻仕候之時預御教訓違御命」

候者任 武重遺命之旨始三菊池被讓

シテ

興國三年八月十日 藤原武士

血

のでいつは申候は、八幡大菩薩の

御はつをまかりかふるへく候

一かほきとのがたほたとの∞よりあはれ

候はん時はこの人しゆにいれたてまつ

るべく候この人々はみなしやうちきの

きをまほられ候あいたせいたうの事か

ゐては萬事まかせたてまつり∞して

一つしまとの、申され候といふとも人々

の一とうなくはもちゐたてまつるへか

らす候

をすてらるべく候この人々一とうして

さためられ焼きをはあへてやふるくか

らす候

寺記

居„山鹿郡杉村,其地 其 遺物傳„„于 杉村

女爲、尼號了心素覺,

按蜷打役傳記系圖爲 應永三十四年十

二月三日,誤也今年月日姑據 大日本史

引後愚昧記 |

天授三年八月十二日蝼打役戰死孅虋

薙髮號ņ自關

前守 高瀬家之祖別有」之

菊池彥四郎

尙

菊池-段載 武光姪 肥前二郎 武信同孫三郎

武明,而武明此役討死恐謬也

武士 菊池灭次郎 爲„武重之養子,

11

廣福寺有. 藤原武明之正 平十 七年七

月山鹿郡片保田村之内畠地一町寄進

狀,其古包紙誌„山鹿殿御狀,即此人

也又太平記正平十四年八月大原合戰

11

武筑11

1112

其後又出而不」歸還不」知„其終所¡傳傳說

按國志略葦北郡二見村有菴跡謂松吟

わか墨染をあはれとも見よ

袖ふれし花∞むかしをわすれずは

府北一里許1

詠歌寺尾野在„„隈

實武重之弟也武重無,男子,故以武士爲

【嗣興國二年續„遺頑¸爲„肥後守護,嗜」講

【武好和歌 善詩賦¸„佛教 就 廣福聖

護兩寺開基之僧大智¸學 禪法, 同五年 甲 申

讓„家於兄武光˩剃髮爲¸僣號„祖禕寂照,行┐

脚諸國,後須臾還」國其時見„„寺尾野櫻花盛

從五位下

|-武士

又次郎 肥後守

ヒト

菊池

系圖之二

新撰事蹟通考卷之十四

-武敏

|武豐

肥後文獻叢書第三卷

頓證菩提殊者藤原武吉現當二世所願成

就乃至法界利益周遍也仍爲末代龜鏡奇

進狀如件

建武二年四月三日

菊池八郎

藤原武吉

赤星遠基養爲」子改,赤星右京亮武生

11

按大日本史武重弟載 八郞經重 恐武豐

之誤也又諸本爲„筑前守,非也武豐弟有三

筑前守武尙 高瀨系圖可,照見」

菊池九郎 掃部助

削髮號„„空阿i

建武中 武重 因」徵詣 京師:武敏 起 本

ニス

ニル

國,遙應 官軍,驌文延元元年三月足利

氏西走少 貳經遣...子 賴尙,迎和援之武

敏聞」之乃將」兵往而破,賴尙於水木渡

又轉、兵進攻太宰府有智山城,貞經敗死

武敏乘」勢攻尊氏干筑前,尊氏及弟直義

逆戰多々良濱 武敏敗退尋而尊氏將一

色賴行仁木義長來攻武敏不」能 支脫走

爲„武士之嗣,

武明 片保田三郎

武信 孫次郞

大日本史作,氵 肥前守,誤也

-武隆

菊池與一

1

武光 豐田十郞

-某 宗一丸 稱,中村,

貞賴

-兼賴 叉次郎

八代將監

|時基 彌次郎

|武平

詑磨叉次郎

菊童丸扶持人之事云&

廣福寺有扎伊豆守武本之書狀,其中

某 菊童丸

-武本

伊豆守

·武世 叉太郎

圖系

軼 其後將 所屬官軍,屢與„賊兵,戰,

干所々這該不」知其終所,死年七十二

太平

-守武

一武元

-貞雄

書,武照子肥前守澄安,

肥前守

武安

|武吉

廣福寺有ņ永亨五年三月之寄進狀 書

沙彌貞雄,其文中右 此地 者武澄武安

本願云々然于」茲云貞雄法名而非,實

名,但以實名】直爲法名乎 未 詳叉

同寺有,貞和二年喃潮能

三月文和元年

喵钔正月貞雄之狀,年代 相 齟 齬非,

澄安子,同名異人也

詫磨別當太郎

スル

按"武元同代有詫磨別當太郎賴秀

之子同別當太邸宗直頒詫磨郡

孫嗣、封代々稱 詫磨別當,詳„于詫

磨文書及系圖,武元之家亦稱 詫磨

別當,大可」疑也然他書今無」所考

11

質,姑從傳記系圖,

詫磨別當太郎

新撰事蹟通考卷之十三

同別當太郎

右所趣者爲每年恒例三十講料所限永代

寄進之事實也然則以此法味餘勳爲金輪

泰平 四海靜謐別者亡父寂阿出離生死。

二一七

肥後國大野別府內 中村 田地十二町】

紙

阿蘇御嶺大明神大寶殿

奉寄進

テ

之於湊河 二十五日武 重遣,武吉·往會

正成-正成軍敗見,,,,武吉至 日正成 力 竭就

、死吾子幸還報」之耶亦劃、腹死南韓軍說

阿蘇文書

菊池七郎武吉高瀬十二町田地寄進狀同

坪付記上分進上之候委細 雜掌 親慶可申

入候以此旨可有御披露候恐惶謹言

三月十八日

阿蘇山衆徒等

ルチ

テ

建武中從長兄武重,在」京延元年五月

足和尊氏師:大軍,自鎭西,討上楠正成拒

菊池七郎

武包 嗣本家

同別當太郎

後爲、僧號,,大圓寺阿日坊,

-隆舜

筑後守護代記

一武方 八代四郎

-武鄉 木野駿河守

-武直 木野次郎

廣福寺有興國三年五月三日之書狀,

武貞

木野但馬守

廣福寺有„延元三年八月十五日 武茂發

願狀

|武

-賴隆 肥後三郎 元弘三年從」父戰沒

木野對馬守

廣福寺有 武重之書狀數通,花押寫」之

姑從„風土記:

1

アラカ

多焉據」之視」之則爲二年,炳然也月日

ル

』明,天道之正理,於」事違武重之遺命

肥後文獻叢書第三卷

-武澄

|-武安

-武照

-澄安

廣福寺有 應永三十四年之寄進狀

肥前守

其書中誌 肥前守武照父祖武澄武安

11

廣福寺有元中六年二月三日之寄進狀,

號 鬼肥前i

肥前守 法名慶雲

二月之寄進狀：

廣福寺有肥前守武 安之文中 二年十

今從 本書 菊池傳記系圖作 澄安;誤也

死

,武朝申狀大日本史 葉室親善狀作 武元

天授三年八月十二日於 筑前國惓打戰

ニナウチ

肥前守 法名義連

月寄進狀

廣福寺有„肥前守武澄之正 平 十一年六

後五位下

菊池肥前守

元弘三年三月從」父戰死

111K

武重

武重固請.氵同死,不」許揮」淚而去十三日武時

督,餘兵, 冒､陣死年六十二賦潮油狀太平記菊池傳

記年六十二 據,異本系

菊池郡隈府町所藏

北間家子孫之事候間所領之儀後日

可申附候者可加扶持候恐々謹言

嘉曆二年

菊池次郎

二月三日

武

詑磨叉六殿

次郎 肥後守

母赤星有隆二女武 時沒後 爲､尼號„慈春˶

廣福寺有 慈春尼正平

八年十二月五日文書

從五位下

11

元弘 三年三月 嗣 遺領 建武二 年五月

菊池

¸召詣 京師 8

|傳記

按阿蘇前大宮司惟時等元弘三年七月依

A召皆赴 京都 武重遷延至」此可以疑也

然無„他考證 姑從„„傳記

新撰事蹟 通老 卷之十三

三月之誓書,其中吾幼歲而繼」家間不

二一五

IL

不」詳疑興國二年也風土記爲三三年八月

三日 薗田本系圖爲‵興國二年十月十六

日,廣福寺有 嗣子武士之興國三年壬午

ラン

11

按武重卒年月諸記闕」之傳記死去年月

記四年正月懷良親王 拜„„征西大 將軍,來

肥後,先」是武重奏:朝廷:請」之因而所」任

傳記月

興國二年 辛巳八月三日卒 菊池

法名勸喜刘擴嘯葬„„東福寺,諷

月尊氏幽_ 天皇於華山院,武重 亦 爲所,

拘囚,伺„守者之弛隙 遜還 本國,二年討,

國内反者,尋而率」兵略 筑後-大村螺嬬啊

菊池略傳傳記

記傳記

官軍,屢有戰功,躪8 大延元元年十

此年冬足利尊氏謀反於„京都鎌倉等所々

武朝申狀太

按廣福寺有„武重之寄進狀,其書入當國

國司菊池次郎武重自筆狀元弘四年甲戌

正月二十五日到來勸進願主比丘大智據

谢之則其後任 肥後守,

任肥後守,

武時進攻, 北條英時於博多,英時窘迫自

大友協」謀勤王密奏,,,行在,天皇 嘉奬

賜„錦旗¸以勵„其義然 天皇至名和

港船上山,閏二月二十四日而 寂阿 戰死

三月十三日也其間僅十九日推」日而可

知其非,大塔宮孃密下 分旨於諸國,

徴」兵蓋不」止,此惠良惟澄申狀爲, 旨

葉室親善申狀元弘三年正月奉敕正月

天皇猶在„隱岐配所,爲"大塔宮,明也

故今改」之

ルコト

11

按 武士乃之歌諸本皆有,,異同,今從來

池傳記,又天正本櫛田辻爲„ 阿蘇 宮誤

也又太平記 天皇在 船上山,菊池少貳

二鏑矢‹作」歌日武士乃上矢 鏑一筋爾思心

波神楚知覽乃連發射 祠扉 馬於」是行如

初後里人發」扉見-巨蛇中」矢死』祠云

諸異本太平記

フノウハヤノリアラヒトスジ

、欺豈奚假,汝力,耶乃率„„家兵數百,赴 筑

前博多,比‥櫛田社,馬跼而不｣動武時罵日

我今趨.義救」 難神何爲敢沮 滞我行,乎,

肥後文獻叢書第三卷

按正慶元年寂阿戰死之前年且新主光嚴

帝之年號也後年僧徒無稽僞妄不.可以信

者也 .

11

尼比丘了心素覺謹縫焉

悲父眞空寂阿大庵主摩訶菩提,以

悲父鎧内衣,遺屬於尼|畢物┐故他邦,嗚

嫣天滄々涙々徒自解引分内衣,手縫」之爲

九條法衣,以呈氵 開山禪師｣矣伏冀以,此

因縁,十方含情普共成正偏智覺者也

時正慶元壬申稔七月自恣日

山鹿郡日輪禪寺有,古製九條法衣,其衣書,

此歌,又有」銘其次日

古郷に今宵はかりの命としてや人の

我を待らむ

太平記菊

、兵上以規„„國家恢復,下以報„父,又書

一首之和歌於笠驗,送妻子－傳謥

ヨ

盡時會,少貳大友率„„數千兵,來援.武 見

、之度因不、可.克乃分、兵附„„長子 武重,日

赴」義致」命固非」可」悔汝急歸」國完、城集

|武村

-惟武

武門

-武經

與„甥時隆 爭„家督,遂逃 他國|

迫間十郎

七郎

-經成

-某 鶴壽丸

十郎

冬經

刑部少輔

-經吉

時叔父武本武經爭 嗣立,遂俱至 鎌倉 訴

菊池郡東迫間村後南山 有」墓 其銘花

屋長榮迫間刑部少輔藤原經吉天正十

年辛丑十月七日其裏月山清園禪定門

按東迫間村甚兵衛家有 菊池迫間

系不

系圖,經吉武門十四世後孫其間 系 不

甚兵衛者其末胤而今其分流有

11

三烟 云

重富與一

年十七建武三年正月於 京大渡橋上,戰死

新撰事蹟通考卷之十三

11 1 11]

時隆橫死故紹 „其遺領,元弘三年正月武

奉,護良親王令旨,起」兵與,少貳貞經大友

貞宗「合」謀將」討„鎮西探題北條英時,既而

二人復有„異心 武時恊怒曰恨爲„豎子 所

後削髪號 |眞空寂阿,

武時

次郎 肥後守 從五位下

武時爲_兄時隆之嗣

1

按薗田本實同 姓隆 施之弟未」知 其實

故附備、考

日本史

相刺死孫錭

北條家 評議歸時隆武本憒」之終與,時隆

11

11

隆盛先」父而死故時隆續,,祖父 武房之封,

一隆

太郎

女 長島太郎種武妻

正月八日足利殿合戰時於 |淀大渡橋上1

討死沙彌空寂疑此人之墓也

菊池郡東福寺山中有三石碑銘曰建武三年

十一年蒙古襲來之時拒戰有因功賞賜甲冑

寛元三年生七大野武房三十七歳令據之

永

·蒙古襲來合戰繪詞書弘安四年菊

11

據 之合坂本得:實故從之

十一月相摸守之執達狀亡父能

秀書置狀之事云々菊池二郎母

11

母詫磨別當能秀女

今坂本O隈部系圖母隈部詮 治

-武房

11

始名頼隆後爲僧名覺佛¸爲東福寺院主」

次郎

直隆 刑部丞 早世

-實照 本鄉四郎左衛門

隆頼 爲兄城隆經之嗣

-隆經 城家之祖系別有」之

-經武 加惠隆

大炊助

加惠九郎

隆政

政朝 西鄉四郎

西鄉三郎

者,故不」書

按薗田本母右衛門尉信成女又同書經頼

以下至 武房,代々載」*毌*然 多 有,可」疑

肥後文獻叢書第三巻

女薗田本菊池系圖母筑前 守義

隆女然詫磨文書交永四年八郎 島崎左馬助

——武成 長瀬七郎

武本 甲斐六郎 子孫爲阿蘇家臣,系別有」之

11

-道武 堀川三郎

先」父死因不嗣立,

ステ

隆盛

彌四郎

重宗 林原與三郎 薙髮號 寂,

1

蒙古人,戰而被„重創, ·讚 盡諧八郎作 次郎 誤也

文永十一年蒙古襲來之時於„筑博多,與

祖書剛要剛略、日蓮註 盡

-康成

菊池八郎

——隆冬

須屋五郎

-隆顯 若宮四郎

赤星家祖系別有之

有隆

11

弘安四年襲來`時亦有」功驕躪書記潮呻狀況

按武房或後改„重本菊池傳記爲肥後

守¸實錄無„所見,故今姑省」之薗田本弘

安八年三月二十六日卒法名惠照 叉 有

疑所 故不.

11 111

新撰事蹟通考卷之十三

薙髮號 大中i

1

-秀周

中山治部少輔

法名廷隆

經鄉 小野播磨守

法名元高

厚久 中山越中守

-右經

中山越前守

朝長 下野守

-隆吉

下總守

-經村

中山彥太郎

-武賴 長門守

後國溝口 戰死年五十八法名分貞

應永三年丙子十一月二十二日於筑

-隆里

安藝守

安藝守 稱､林

隆香

孫四郎

重兼 方保田與三郎

-定氏-

蛇塚三郎

11 1 1

母大友豐前前司古城主考

能直女,本係個

隆泰

太郎 式部少輔

按菊池傳記作„隆定|今從 申狀 又一能

隆實隆繼之弟薗田本母大友光能女考可以

知其非,

禦,我東兵 沒ň倒能隆之領地,輝

武朝

能隆爲 大番役 故使,叔父 二人 02 爲』 京

都勤番-承八三年六月奉氵 院宣,防, 北條

義時之軍於宇治勢多,及 京師陷,義 時 惡

左京太夫

-能隆-

彌次郎

クハ ナラン

州溝口 討死疑此人也

武秀 新左衛門 筑後國溝口合戰討死

菊池郡光久寺跡有:古碑銘曰元周禪定

門應永三年丙子十一月廿○○日於筑

居 山鹿平山城,

秀顯

-秀世

平山常陸介

平山備後守

直方 合志四郎

與,,隆長,同沒海軾

秀直

砥川三郎

後鳥羽院武者所

-隆定

菊池次郎

申狀

武朝

文治 元年 三月二十四日從安德天皇

-隆長

永野太郎

按菊池傳訊系圖經俊作 經直弟, 今從

諸家系圖纂、今坂本、田本

11

經親 次郎

-經俊

赤星十郎

按一本作„越後守,非也又一菊池家紋本

日足也隆直改 鷹羽日文永二年八月

能隆始用. 新紋鷹羽 或叉爲經直代,未

认知 孰是.

被
經記扶桑
私記
隆俊 八代五郎
-賢秀 菊池六郎
小次郎
隆繼
先､父死
隆親
片角三郎
一定基 江良四郎
-家隆 大夫五郎
伊倉七郎
一定直
隆元
九條十郎
林原與三

林原三郎

-隆朝

朝定 三郎太郎

林原九郎

-隆重

隆氏 孫三郎

隆光 左近三郎

武益

藤三郎

小野崎祖

直武 谷城七郎 藤田祖

小山之祖孫之末

後爲、僧號 佛地

黑木 祖

鳥院武者所

經直

菊池七郎

經信 出田藏人 出田家祖系有別

-季經

田莊蘭田肥直惟綱之養子,今本書姑從

蘭田系圖蘭田本肥後國人也神凡

#耳命數世之後肥直蘭田麻呂四

代之孫園田猷德以祖名 爲

、氏也惟網者猷德之後胤也

菊池傳記系圖,

ヒノアタヘ

按諸家系圖纂及今坂本 菊池系 圖經綱

爲,經直之弟,又長坂爲蘭田 蘭田所藏

系圖示同」之而經綱爲"下野國阿蘇郡蘭

11

於 北國,戰死

|經綱長坂小太郎

經世

一長坂小太郎

-經 井芹六郎 井芹、莊、立田之祖

-經秀 村田五郎

經遠 詫磨四郎

俊直

經繼

經雄

-隆直

11 壽永元年四月隆直終降貞能,讓詳 二

年六月隆直從 貞能,至:京師 七月 安德

天皇避„源義仲之兵,赴 西國 八月 車駕

二〇九

到„筑前太宰府,隆直等衛T護之ー ㄤ 而

喀衰

以„次郎隆直,爲„肥後守 文治元年三

月源賴朝遣„„弟義經等,敗 平賊於檀浦,諸

平亡盡 天皇乂入、海崩炟隆直遂降 賴

傳詡十一月朔日隆直於三京師,爲„義經

平

東鑑

家鰳 盛二月原田 種直伐, 隆直,練八月以

筑後守平貞能,爲,肥後守,討„隆直等

養和元年春隆直應¸¸源賴朝ˋ 燒 太宰府

大日

肥後守

菊池次郎

-經泰 高倉三郎

五郎

菊池小二郎

-經能 原四郎

-經政 佐野太郎

佐野三郎

俊景 東小三郎

東次郎

隆季

|政隆

經隆

族 則隆築城於深川村¸名菊城中考體

菊城說著

正 平 二十

三年之條 永保 元年辛酉 九月二十一日死法

他系圖.

名道光ネ 定也和醍葬 深川村上原

菊池兵藤警固太郎

右近太夫

母葉室侍從淸原親道女

後祭 其靈¸稱 若宮靈社 在 出田村

按一本作„肥後守 非也叉寬仁三年異賊

襲來之時經隆防˩ 之有˩功武朝中狀等不

、載˩ 之故不˩取

西鄉太郎

西鄉太夫

隆基

沒後祀爲 山崎靈

西鄉三郎

隆房

西鄉三郎

山鹿太郎

高橋家祖

——隆有 紀伊三郎

|經家一藤田三郎

-經長 天草兵藤大夫 於 北國,戰死年二十六

鳥羽院武者所

-經宗

菊池太郎

-經平 迫間十郎

異本隆明子孫有 永里、岡本、石坂、福

本等分家數代 今略､之

-經明

隆明 合志四郎

合志五郎

安頂意禪師

一通俊 兵藤太郎

民部大輔

-經賴

-經基 中村太郎

-保隆

經保

小島次 郎

小島次郎

-基宗 山崎太郎 山崎家祖

新撰事蹟通考卷之十三

長和三年十一月任 太宰權帥,寛仁三年十

二月辭 權帥 長八五年正月元日薨年六十

六

權中納言

隆家

正二位

其祖自„„天兒屋根命,至鎌足,

-般子 二 十二代

自鎌足¸至 兼家,十一代系譜詳„于諸書,故

今略之

或號 二條又南院,

長德元年四月十日薨年四十三稱 中關白

從一位太政大臣兼家之長男也

攝政 關白

藤原道隆

正二位 内大臣

菊池

系圖之一

新撰事蹟通考卷之十三

-經輔

——政則

年四月刀夷賊犯 西海¸政則禦」之有」功勅

鎮西將士,從„„其指揮,

史隆家生 則 菊池武朝申狀則隆者道

隆池郡˩子孫襲」封世爲„著姓 汏岠本使

按則隆爲,太宰少監 來 太宰府 沙鑑仍

府判官後

賜„„菊池郡¸移┐居此地|代々爲:一郡之豪

1則隆始爲 太宰少監 延八二年賜„肥後菊

大日本史

大夫少監賦

太宰少監材相

四代之後胤今從」之

ニモ

按菊池傳記政則爲 經輔子,誤也大日本

11

一本史

シテ

父隆家爲 太宰權帥 政則從赴、任寬仁三

對馬守

刑部少輔

永保元年八月七日薨年七十六

權大納言 水無瀨家祖

正二位

谷

非武備志日肥後

大

撒牙子世六開懷世利

【混爲 肥i

肥後圖介烏湖】慳家什

呫家什氏陀什噠家

阿麻國

.瀨高也筑後地矿

カセ

國撒介鳥刺̏ 爲„開懐世利¸爲„„噠加什 同書

高

圖書編日薩摩之北爲 肥後,其註横直皆五百里其 壆

爲„„牙子世六,代爲„阿麻國撒| 爲„氏陀,貯士爲„一

ニヨコタテ

イソベタチ

閩書曰薩摩肥後長門三州之人最善入寇

モス

·霞草日本考薩摩之北爲肥後

チ

皇明世法錄日本考載:肥後,

11

宋志日西海道肥後又曰淳熙二年倭船火兒配 滕太明

毆鄭作死

11

按:此國田地戶口地理等事郡局記錄田賦考官中

秘策郡々圖等詳ナリ皆思所アリテ略シテ書セズ

叉外域:書:出è毛)左:拔著

節用集曰肥後大管十四郡四方五日材木柴薪饒而五穀

魚瞻紙綿多高五十七萬二千九百八十石田數一萬三千

四百六十二町

拾芥抄曰肥後國䞓田數萬三千四百六十二

肥後文獻叢書第三卷

海東諸國記曰肥後州有„„溫井郡十四水田一萬五千三

百九十七町

「浙江到、此四日四夜

登壇必究曰肥後州十四郡

涪州到、此十日十夜

11

ヨリ

海鼠二百三十二斤十四兩鯛腊三百三十二斤八兩乾魷-公各三十萬束本顳百五十七萬九千百十八束雜顳七十

一百六十六斤十三兩雜魚腊四百三斤自餘輸 綿絲 七萬九千百十八束

キタイ

五疋貲布三十七端布一百二十端耽羅鮻 三十九斤熬 和名類聚抄日肥後國管十四郡田二萬三千五百餘町正

11

叉日肥後國嵴喔眭"調絲二千五百九十三疋綿䌷二十一田事三千六百二町別四百六十束配後

叉日貞觀格云太政官謹奏應分太宰府管内諸國佃公營

叉日凡貢夏調絲者肥後中絲

郡司職田千八百三十町八段配發嬾仁計五間六段

我

政事日延喜格日國 造田四百十一町 五段

又日死損肥後等國十分許,損二分

束

11

同主稅式日驛馬法肥後上馬四百束中馬三百五十束下

11

府 免 其徭役,

同民部式日 凡太宰府 管内諸國島大帳調帳稅帳

11

同民部式日 凡太宰府 皷吹丁筑前 肥後 各七十二人并

佃田!

又曰凡檢揖并不堪佃田、賑給疾死等使 限肥後等國,之肥後等國送,太宰府 官勘校貯 納府庫 具錄色目

損田百四十日不堪佃田百二十日 赈給疾死拚谁 不堪 | 附 朝集使 申送

11

年所:造具,依„前件:其樣仗者色別一箇附 朝集 進

切粳幷用 正稅：

馬島,以充 島司 及防人等粮,其部類根船賃挾抄水手 同兵部式日 諸國器仗 肥後國

際輔助計和鹋具

七財强右毎

四十具胡肥後國

テ

丂㇏

カジトリカ

叉旦凡兩筑二豐肥前肥後等國 毎年穀二千石漕訊送對「魚、鮨年魚、鹽漬年魚、破鹽

海石榴油、荏鹿脯 枏年魚 鮫楚割、蠣 腊、煮鹽年

以充行肥後國三千六百二十束九把一分五毛

ミホノ

サメ

11

叉日凡壹岐島島分寺法會布施供養料稻一萬二千九百」又曰庸布八十端自餘輸綿米中男作物木綿

七十一束一把一分五毫大宰府以管内諸國正稅 通計|熟麻、席、韓薦、防壁折薦苫、锌、黑葛 胡麻油

穰四十雜掌 勘申,但肥後等國副 當國雜掌,各得. 勘辨

同主計式日凡太宰府管内 肥後等國 大帳調帳者谁 稅

帳 分 當國雜掌 勘申L,即附 雜掌 收 大帳返抄幷調

帳損谷等 朝集帳及自餘國島四度公文 分 府掌 勘

.

|馬三百驛馬要略7道之側志岐水志々水訓讀|囚料十七萬三千四百三十五束

三餘 里 「内自味 至此

職水

益城郡有 志々水村 官

`餉田官舍料一萬束、池溝料四萬束、救急料十二萬束、俘

高瀨兩道之間故也卽古之驛跡也〝今味也說著 鄉莊沿革部

往ii來此道者上曰,中通,在山鹿和名抄山本郡戲 三重鄉+即三十五萬束、衛卒料三萬五千七百九十五束、修理府

三重

ナカトホリ

在玉名郡•至氵　南關、

江田

然官道其一載 大水 爲筑大津 明也 三里許薩摩國人會有”

延喜主稅式曰肥後J5

無､所考質:

*冰沙 和名抄玉名郡有大水鄉 卽今大津山是也 天正中入,筑

按大水

傅未 分明 今

傳馬啟動紅纈佐色水俣各五更

水俣仁王各五

國界 之道大概接續至:豐後日向 道驛

山田高原蠶養球磨豐向

坂本蛟高高屋高原

鬲同向

買用其價不亅得亅過五十束,但太宰府及肥前肥後日向

三國幷以 牧馬,充」 之

シラクハ

11

11

延喜民部式曰凡諸國大祓馬若無,國造國者以,正稅,

其餘考所ナシ

二

¸葦北郡仁王木村 卽此也自 湯 浦 芬 道右至 水俣町 達

トモ

11

仁王

11

タッゲ

二里

相近恐後誤 志志〝少益城郡豐福卽此 也今 官 道 在八代

11

傳馬

按:阿蘇郡:車歸山-云7 リ及二重山-毛云官道

クハ

二〇ヲ通ズ其上登テ當二下行ベキノ界ョ二重嶺ト云古

1街道、今/坂道my云南尹!其南麓:南鄉外

リ其枝村内牧アリ里人云古牧跡ナリ

波良牧今分明ナラス盆城郡矢部莊原村アリ

砥用鄉丿聚落ヨ原町下云嵴嵴然F吒皆牧迹y

然ドモ皆牧迹ナッ

豐向

片野

自 蠶養 三里餘通 村中一至職水 三里半餘 郡:今謂”

片野川村官道之一 朽網二見國訓相近故後因 字:爲二見

朽網

傍自 福 四里餘 在 葦北郡 自 片野川 四里餘而至,此 ス

* 邑令作」敷在 葦北郡,自二 2 在 葦北郡驛傳 今現存 矣

佐色

【見 四里餘驛所今尚有之 自 佐敷 五里至 薩摩國界

薩摩國出水 左至 仁王木久木野 赴 大隅國是謂三

通然今驛路在久木野村·而與 仁王木 少相離問 里民 古道過”

仁王木 此國南北官道無 仁王以里程·量之自 佐邑驛 至 薩摩

有 水俣驛 至 大隅;其間無 球磨郡人吉也自传邑二至三人吉

球磨

驛然則仁王驛爲此所:明也 八里其間甚遠恐必中有 一驛:自

、是又直通一切片宇上郡有 長埼村 乃大道之傍近然至.. 志々水 1

長埼

大隅日向” 里牛至 農福 一里許其間大近疑 又非 宇土郡長

以上四驛未 詳自 筑後國界: 至 薩摩

兵部式曰諸國驛 傳馬肥後國 驛馬大冰红田坂本三重蛟高

高屋片野朽網水.

原體養球磨長琦豐國」令之南關之地方皆大水鄉所.管也又豐後街道熊府

東五里有,合志郡大津町 大水驛即此也 國正稅公廨各四十萬束、國分寺料

四萬七千八百八十七束、文珠會料二千束、府官公廨

至江田

熊府東郭

在

新撰事蹟通考卷之十二

110111

西有三溟海廣 牧馬若有超、群者,進上餘充太宰兵馬及當國他國驛

三室山在城正東: 一名橫嶽頂有 妙見上宮祠 杉檜,

セヨ

テヨ

然每 大雪夕 千峰萬壑積‹素凝頣華爲 八代景之一 名曰 龍峰暮雪· 延喜兵部式曰諸國馬牛牧肥後國 凡肥後國二重

リニ

龍峰在 城之寅卯:首起 永川,尾達中宮川,延袤二里蜿蜒如 臥龍

年月 者皆輯 載此部

11

雜著

久成 高陸,然則其地不久遠,可以知

延喜式 等其外不」揭,

得 破船 莫、曉:其因,蓋海中之淤泥積

【東有纟 龍峰三 室之鎭,

ル

コト

記曰城地古鹵之地年~開墾而逐爲 平陸ı吶掣揃

天明中市

代-古城主考

源號 淨德院i

八代城記

按忠廣承應二年六月八日卒年五十二法名最乘日

八年壬戌春二月八代城成也

ギボウシ

八代城記本九

主考

志

八代城記

德淵二松江

寬永九年壬申夏六月四日庚午加藤肥後守忠廣以」有

五年己未春三月十七日辛丑地震八代麥島城樓頽壞此

家光公,爲」之年

ナリ

ス

按二正方傳前ニアリ貳萬十六石餘ス忠廣除

命アリ忠廣幼穉ニシテ科ナキヲ以テ宥免シ給フ

也

カキテハ

11

斥之阻+里除驚就戲,其亦代城天清之園 · 左枕氵 曠田平沼

海潮盈則浩々 意 岸虛則去 1

トメヒダン

右帶 德潭曲江:天險之地爲,,,南服之冠:本松江德淵

之地故日 松江城或德淵城,以 白石」因叉名..

白石城,肥後丶、山田十太夫重利渡邊圖書宗綱7遣è兩

使肥後國ニ至リ美作が黨類糾斷ァ逐書ヲ呈シ

上意ヲテ悉ク臣誅戮シ或流罪セシトナリ」

南關記云元和九年右馬允下美作爭論事アリ此時

家中二分テ不和トナル右馬允方ヲ午方云美作

方牛方云此事 上聞達ｼ美作方非分極ﾘ

美作一越後其子丹後、出雲三流步è下是此事!誤|九年癸亥秋八月 右大臣秀忠公辭 征夷大將軍, 以,

國ノ時肥後7退亓京都:赴t 安藝國廣島浪居

ｼ慶安元年九月二十三 病死罪國除遷„„出羽國田河郡莊內 流,其子 豐後守 光正於

飛驒國高山 秋忠廣請 上命, 令 加藤右馬允兒正方1 徙築村之地略古城陰翳有 聖水:四時不」清秀卓拔號爲 代中觀

成引之一

日元和四年戊午八月忠廣 臣加右

東武實錄

編 年 集

四年戊午秋八月忠廣之大臣 加藤正方下川元宣等

加藤正次玉目丹波等大坂與黨之罪, 十日甲 子忠廣及

其臣甲乙三十二人召 江戶城 謝„問之|丹波等辭屈而

不得辨因收三正次等」行死刑流罪」

位東照大權「集成

現之神號1砖

三年丁巳春二月二十一日丁巳勅家康公廟贈正一

編年

二年丙辰春三月十二日 壬午阿部正之 朝比奈正重歸

駿府11避夏四月十七日丁巳從一位太政大臣前征夷大

將軍家康公薨御年識

八代一

城"有、故殘、之獸

編年

冬十一月二十九日壬寅下三分於闔國,定 一國一城制,

作之難澁セバ吾ト正重忠廣繼母ヘ本丸

移り美作ヲモ同所に置城代ヲバ他人命ズベ

美作異儀及バ正之渠ヲ手刄スベキ旨述ル

棒庵是,領掌シ美作關屋城二遷シ其妻子,質ト

ス國中正之が活達二恐懼シ悉ク其旨ヲ背者ナ

シ正之正重翌春マデ肥後ニ在テ國中非常糺ス

第三巻

鄉 忠廣因而南關内牧佐敷三城毀」之唯府城外及阿部正之力先達テ言上スル不達依」 之加藤

右馬允ヵ方理ニ決同十一日横江清四郎橋本掃

部助同作太夫三人斬罪其餘加藤美作カ方皆所々ヘ

配流加藤右馬允カ黨ヲ以テ彌國務沙汰スベキ旨

馬允下川又左衛門並河志摩森本儀太夫莊林隼人加

藤與左衛門中村將監齋藤伊豆久我棒庵加藤平左衛

棟梁トシテ加藤美作其子丹後加藤壽林中川周

防和田備中玉目丹波カ罪」之七日八日兩

日酒井雅樂頭宅へ執事奉行族且ッ阿部正之朝比

奈正重列座シテ是詮議シ委細記シ台覽二入同

十日武城:於テ忠廣幷其臣甲乙兩方三十二人,御

前ニ於テ對決遂ラル儒臣開齊永喜訴狀一牒ヲ讀

終ル毎甲乙論諍スルコト數回甲方加藤右馬允等

日玉目丹波新大船ヲ造始運用ルト云ドモ

寅卯兩年兵船トシテ秀賴助力ス大坂ョリ 齋藤

采女肥後下テ内應ス且横江清四郎大坂へ登り歸

國シテ云大坂ノ軍御所利ヲ失と京伏見 二籠城セ

ラル此上 兩ノビタマハンコト遠カルベカラ

ズトリ丹波等大二悅ビ國中疑ァ生ズト云々于

奉行人 御旨何テ詰問ス 丹波父子應答不

11011

新撰事蹟通考卷十二

先君入藩後續奉一呈之 公儀叉每歳是7 朝廷

冬

寺ノ僭掎置シ蜜柑上秀吉其味天下絕品ノ名ヲ

賜フト其後忠廣始テ上リショリ年年恒例トナル我

福

・云ドモ信ズ

時アイハラ

木豐原丿產7上下ヌ其餘、獻上三用其始不詳

國志略=其由來ヲ相傳太閤秀吉 西ノトキ大1

叉八代蜜柑卜稱x郡中尤多卜云「毛高田鄉/奈良

按:蜜柑、八代郡高田鄉:產故:高田/名

十二月十七日乙未忠廣始獻 高田蜜柑五箱於幕府,時

在: 大坂陣中 駿府政事談

記

肥後監察 ||脤呷現出伏見

十九年 甲寅秋八月二十日 庚子以阿部四郎五郎正之

紀年集成 慶長日記二

十年二月四日出

集成

朝比奈源六正重,爲: 十八年癸丑春二月二十五日甲寅藤松寂,從四位下任

侍從:賜,名之一字:名忠廣:改 藤松 肥後守

本多佐渡守

加 礤 丹 後殿

加藤 右 馬 允殿

加 藤 大 和殿

并 河 但 馬殿

下河叉右衛門殿

元年乙卯兵 拔：大坂城1

八日甲寅前右大臣豐臣秀賴1101

ヲ守テ叛逆セント企ルコトヲ正之漏聞テ忠廣が功

臣下津棒庵7招+島津家久大坂<赴>爲出航後

忠廣肥後ヲ發ショ解加藤美作必逆意起スベ

キ間渠ヲ以熊本ノ留守居トスベカラズ美作ヲバ筑

南開鸞原城7云屋/字八剩物也

後界南關屋城移

其妻

鷹原城八天正十六年,條載」之

子ァバ熊本二質トシ下川又左衛門是預ベシ美

編年集成五月二十八日條日肥後國主加藤忠廣幼稚

1. 王 家老加藤美作外舅玉目丹波大坂城内<志7通

シ兼テ大船二艘用意シテ去寅冬陣其船ヲ以根米

7 秀賴=贈ル處忠廣敢不」知」之秀賴乳母子

采女肥後下調略アリ肥後ヨリ、横江清

四郎密々大坂城中~使節-x此事發覺七天云F

毛今年阿部正之朝比奈正重在國タタ加分加藤美作

本多莊助書牒ヲ得テ忠大坂ヘ發船セ熊本城

先」是忠廣之元老 加藤美作正次 外舅玉目 丹波通 秀

賴:密運ñ漕軍糧於大坂 事頗泄露

自盡!夏陣略而不割

· 編年 集成 大坂

明計

日改元

元和娟汁三夏五月 公再起.ニ皺上セラル肥後名産ノ第一ナリ

一八代城代之事加藤右馬允被 仰付候然上渡彼地

汇有之諸侍不殘右馬允與力被 仰付但野尻

一家中諸侍國中L<役儀之事古肥後守時之半分

るべき事

一肥後國百姓分困窮之由被及 聞召古参迄岵一圓

可被差置之旨被 仰出候上渡彌土民憐愍可然候

一從隣國境目自然非分申懸族雖有之年寄中萬事分

堪忍其段可致言上候事

一水俣宇土矢部三箇所之城可爲破却然は水俣宇土

に有之諸侍妻子共熊本え引越先に候事

條々

長臣 書慶長日記

-編年集成

月二日丙寅加藤藤松至„駿府見東照公、獻"黃金

暘帳六月二十七日庚寅因 藤松幼冲 老中奉」命下, 其

日,今從 編年集成

記

松還‰熊本 = 冬十月十六日壬子以藤松孤弱,遣

清正

松為,封國入部,發,江戸 張 牟禮鄉右衛門 勝成小澤

編年

瀨兵衛正重爲,監察來肥後集 九月二十八日甲子藤

肥後文獻叢書第三卷

藤堂和泉守高虎¸治國政 曈長。記肸 十月

十七年壬子春正月藤堂高虎歸」自肥後長

酒井雅樂頭

土井大炊頭

慶長十七年六月二十七日

青山圖書助

右之條々猶肥州之被申達以其上可被相究者也仍如

件

一棒庵之知行之事最前千石分所知之由只今千石都

合二千石被下之間古肥州被出候知行物成幷之所

にて可被相渡事

一加藤美作知行三千石被下候之間中之所L而可

被相渡候事

附於矢部諸侍妻子内牧ゑ可引越候事

一加藤万兵衛事内牧城代被 仰付候知行之事 當

分於内牧城廻可被相渡候事

附此以前分與力候馬乘徒侍鐵炮之者八代へ

引越上性知行切米扶持方已下如近年有來於八

代右之允可相渡事

一右馬允知行之事近年於内牧分知高當分於八代

城廻可被相渡候事

右門蟹江與惣兵衛兩人は熊本ゑ引越可有在地

事

1100

新撰事蹟通考卷之十二

清正記作 二十四日】

國志略爲三二十八日 今從 本書 双清証記為 虎 二十四日 辛卯

藤慶長日記作 虎之助 今藤松據 編年集成 i

十年乙巳夏四月七日辛亥 公辭,,征夷大將軍,一九九

主 年十一

編年集成慶長日記

成〇卒年

1

藤

11

池院i葬于中尾山天文十九年 1

蒙傳

記 于

カ

都會之盛未』有過」焉者』實根本 之重 地云

十三年戊申冬十一月二十五日己酉宇土佐兵衛顯孝卒

タル

ナルタ

以當,形勢之勝 爲』 萬世不拔之鴻基」國自」古以來

#改卜云

ルニ

清正嘗相 城地於斯山,遂拓而爲,,,, 府城 殿館宏壯

列、奇擁、翠繩施微妙之功 城究 天地之險,眞足下

按=俗諺:隈/字【六阜大 刂阜、盛也大也畏怯

□□□□

ニソル

隈本者舊丘阜謂茶臼山,也又傳有„龍蟠虎踞之形

記古城主考

隈本城成嗌毓宜精

一筆申觸候隈本之文字之事今度御城出來候L付御

八年癸卯春二月十二日己亥 公拜 征夷大將軍 此日

考主改候而熊本~御書被成候間此以後其旨可被心得候

此段御領之中不洩樣可被申觸候恐々謹言

慶長十二年 月七日

加藤

六年辛丑八月清正營 築隈本城,始施」繩起」鍬治亂記清

六

乃美家藏

三郡之内

天

賜清正 爲國主,配相具 家領」之後

此

肥後全國|11

,

記濤正記〇

將,勿、攻,,薩摩 故收 兵各還」國順 十二月 公

故收、兵各還、國

系圖〇始名熊之助卒年九法名宗覺日等號·

ラシム

先」是島津義久歸┐順 東照公¸公以 飛檄,傳事於諸

十二年丁未春正月二十七日辛卯清正嫡子從四位下侍

從主計頭忠正卒

年清正改…隈本字,爲 熊本

理性院¡莖 八代郡宮地村悟真寺之左山草代後

加藤清正叙 從四位下任,侍從,改||名肥後守 0嫴 此

歳也怖也驚也卜毛註冫 大怯卜云7忌猛獸/熊字

十六年辛亥春正月二十一日壬戌島津義久入道龍伯薨

係圖島 夏六月二十四日壬辰國主加藤清正卒 系圖編年

十法名永運日乘號 淨 秋八月四日辛未清正之嗣子加藤舊城入:其內,在西南,爲‶一郭今呼:古城双

東北本丸之後有,,堡障跡 謂 千葉城 不詳 其何比

城海古城事十六日｜松賜„„遺頷 爲 肥後之國此月鍋島直茂奉ˋ　欽命,伐„立花宗茂於柳川城,黑田

右條々若違犯之輩出在之性速中處嚴科者也

慶長五年十一月八日

紋付ルニレリ

一對地下人百姓等非分之儀申懸事

八代矢部前二誌ス

一放火之事

一當年軍勢甲乙人亂妨狼藉之事

河内村

椰城代下人トス非ナリ重次ハ佐敷ノ城代ナリ

後三中川豐後始

金右衛門後志摩二改,或云氏之下加藤重 十一月黑田如水加藤清正鍋島直 茂俱合､軍討, 薩摩

安民記藩瀚

内家士ノ屋鋪割等詳載,之

此度清正並河氏之城代トシ

本據知､*7°C故! 不､取

所柳川丁ト云銀行ハ

按宗茂清正二僑テ當國二來り高瀬橋居慶長七

按:宇土城/事、永正元年三既記之天正十五年

病死系圖詳ナリ

或遯散他國,國中靡然而悉平請証記地志

然則爲 十月」明也故姑从 本書

1

11

代 長尾豐前善政爲"矢部城代, 行長之臣或仕 清正 | 正赴伊薩時之制札爲十一月八日

1

之爲 宇土城代 吉村橘左衛門堤權右衛門爲„„入代城/次 守,柳川城 三日:今據 諸哶三將攻柳川 薩摩征討之前也請

次:守

ルニ

行長領内數城憎伏而皆逸去 清正以 并河金右衛門氏

肥後來亍加藤家-寄食冫 宇土/城二居ル未、知孰是 1

孝高入道如水加藤清正爲„監軍,各親將」兵攻,之二十

カ子ナリ慶長五年西方

軍破テ本國山本蟄居シ後

四日甲午宗茂逖降„清正之陣 清正分 臣加藤美作正

慶長日記〇九州記爲 廿一日閑暇雜書爲 十二月

宇土顯孝退城1後成政城代7置7載籍所見>

六年六月小西行長此城7居城:定メ城郭ノ俠小

國志略朝鮮歸陣後

ルヲ以テ翌年ヨリ ・築廣修繕ヲ加

トスルの誤ナリ又城

宗茂室八同年十月腹赤村 家臣 小野 和泉鎮行

年/春上京線,

ヲ始メ清正扶助ヲ受ヶ隈本居住ス宗茂舊領ニ

復スルノ時加藤家ァ辭テ皆柳川歸ル今其居住ノ

加慶長十七年公命:依城郭7破却又

一書会此時堀内右衛門兵衛井上大九郎 奉行トシテ城解崩上使中

山勘解由同成隈本城築城天守引テ本九立今宇土

櫓下云是也又高麗門禪定寺八並河氏之力 菩提所+冠木門八乃宇

土城ノ黒門ナリショ氏之請受テ寺ノ門建柱 五等其時ノ物ナリ

破風/瓦=小西

前鋒既至北湯浦津奈木

譜九州記

葦北郡湯浦鄉上内野

清正之制札村桑原某家傳之

禁制

編者

日九藤夫森十編

2月家筆本月者

作廿傳記儀云

る八に加太日

カチマケ

松 井 佐 渡殿

有吉四郎右衛門殿

遣」使告 事於薩摩 始島津義弘赴,大･ 石田小西

之與黨,以」故義叭遣 島津忠長新納忠元伊集院久治

爲„行長,合׀力攻 清正之領城 忠長等與…相良賴房之 冬十月行長之殘
卒遁歸告曰東西之軍於關原會戰西

臣,併」兵先攻 葦北佐敷城 城代加藤重次以微勢 防 軍敗績主君亦 爲」虜將士皆死亡自」是城中哀感而

」之瀛輸未」決朧宇土城 清正 未 敢急攻之 大 無„戰心,士卒逃散者過、半於」是城代 小西長元白 清

村喜明有馬直純率,兵從,清正謝慶長五年加藤清正攻, 日行長戰敗被 捕縛 臣聞主辱 則臣死臣請自殺以

正

報」主然憐-城内士衆 殫 被-斬戮- 君以,殊惠 宥」之

1

小西行長之居城宇土

便ㇾ 男直純 隨-此役,

松井家所藏清正之書簡

大村系緇有馬 系圖 ○有馬晤

11

ルトキハ

則臣死無 遺憾 清正許」之饋以 酒食,長元喜設、醋乃

土軍記

州記 八代城代 小西

從如水幸便汇 而御狀本望L候濃州表之儀心上|開城門,與,諸士,共出而獻 城於清正 長元於氵 清正

老仕合併少殘多存候其邊御手間不入加L乙隙~|臣下川元宜宅 自刃而

被明御羨布存候此方渡手間入候渡人之存事L候是行重聞」之弃』城而走 薩摩 蕲吐薩師亦聞」之罷去

へ押寄候日雨ふ其上程近道は人數つかひ不罷 安民記

成付而八代の方へ押廻候得ば人數草駄日暮にか

かり候故城中持かためさせ候事口惜候併落去程有

間敷候條可被御心安候少し日數延候共悉可討果覺

悟に候只今分に候はば中國の面々へ各申談候事は

成間敷於~存候羨布事不及是非候上方の樣子如水

元申遣候折節差急候汇付而以書狀不申不沙汰本

意の外候尚吉左右互に可申承候恐々謹言

加 主

十月八日

新撰事蹟遍考卷之十二

正

堀内安房守氏善紀伊國牟婁郡新宮城主ナ

y秀吉=仕二萬七千石7領ヌ近歳紀伊沒落後

行長ヲ賴テ肥後來り宇土很客タリ宇土落城以

後清正扶助預ﾘ宇土城内居住剃髪ｼﾃ道

也ト稱ヌ慶長十四年病死宇土/石橋村三寶院:葬

ﾙ墓碑ノ銘=笑翁定清居士紀州室郡藤原朝臣堀内

1書曰氏善訊

安房入道于特慶長十四年,八月十五日

宮内少輔氏高

一九七

キンス

誤也

:

寺元宅之墓

軍記

正

慶長五至 小川 隈本兵出其不意 戰八代兵敗亂而還

アラチ

九州記國志略等信 送,,其符書於八代 使 吉村左近相田六右衛門 率三

L而翌日罷立是迄人數過半召連參候得共渡其元 二千餘兵,伏」途討,八代援兵,二十八日戊辰八代援兵

松井家文書

昨十六日立石方之御狀今未之刻亻郡の內

11

ソコハグ

固守 清正圍而

攻」之城兵出而挑戰主客死創居多也長元馳 密使

銘惟拔杬宅居士前鮨州肤绛枷弎九州

カベス

白

卽此人也宇土軍記此頃老年之人也

名與七耶此比年四十計

軍記云华人者行長之弟始

11

11

家號·稱 小西 秀吉

及小西飛驒如安

本名內藤姓藤 原行長

國志略作, 小西主殿助·今從字

二十日庚申淸正不.歸.隈本 直進攻 行長之居城宇

ハラ

4 安民記細川御

三

イシカキ

御返報

清末

ケミスイシカキハラ

加

松 佐渡右殿

九月十七日

伊豆

可申候恐々謹言

一九六

11

肥後文獻叢書第三卷

長等逖叛而起」兵尾一東軍 公聞」之引」兵還 江戸

武德安民記

八月前豐後國主大友義統圖」復 舊土, 義統

坐 朝鮮之役不援 行長 國除遷 長門 至」是義統謂

三成 日夫豐後墳墓所」處父母之國也 請我先往略 南

豐 三成許諾焉義統乃密至豐後,累代舊好之國士蠅

集數日之間得,,,,親兵三千 義統將」之閱三碟 原立石 九

月六日丙午分兵攻 杵築城,城代松井康之有吉立行戰

而不˩利十三日癸丑黑田孝高援來與 義統 戰,,于

原·康之等亦出」 城而衝擊其橫 義統數敗 转颾熇州詘

十五日乙卯東軍與 賊徒;大戰 美濃關原 賊軍敗績

巨魁石田三成小西行長等爲 俘囚 西軍悉亡殲飂誣太到

此日大友義統降,,,,黑田孝高 ㄘ順覸此日加藤清正欲救氵

杵築¸ 率,,家 軍數千| 發,, 隈本 十七日丁巳至三豐後玖

珠郡引地 聞-軍散義統降-孝高班 師謡類對話

以使者具可申候今度御手柄共我等一入占太慶存候

互に手前隙を明中國邊に而可懸御目候委細いづ守

殿

有四郎土 留守居城代小西隼人長元上調數長日記九州記, 又字土

內藤如安·徽毖錄作 小西飛 南條入道元宅等 高麗門安國

家諾爲

瞵姫備櫞既整 兵清公慶長十九年甲寅十月二十三日孝子敬其書達 清正 清正遣 別

|救於八代隈本之兵捕」之得,

村-申所仁而令拜見候十四日汇拜見申候邇注進狀|相濟候由承5分滿足候尤其元之叁5如水可懸

百餘御目候得共我等手前刃事汇候間自是分歸國傢猶 機張正锟林覵八代城 代小西 美作 行 重訓蟈誌醫學作日記九州記,

清正記宇土作...

小西若狹:有卷之十二

一九五

文書

菊池郡南福寺玄以長束正家是日:五奉行

長政增田長盛石田三成前田 奉„遺命¸輔翼嗣子秀賴¸秀賴

シ證書ヲ授クト云

五年庚子秀吉薨而大老東照公前田利家毛利輝元浮田

秀家上杉景勝是謂‟五大老 奉行職

サッカニ

11

按中古以來田畑町段ス秀吉諸國シテ

墨太閤記

此歳諸國檢地成4年

龍

臣

*國大明神神號 元和元年七月勅停:神號:國泰院俊山

11

臣秀吉薨

四年乙未秋七月十五日丙戌前關白内大臣豐臣秀次自

園山|譜拾昔語

三年戊戌秋八月十八日辛未從一位前關白太政大臣豐

地志略阿蘇系

令 下河元宣誅,惟光 十八日庚子元宣殺 惟光於紙 | 位權大納言足利義昭薨鋸悧慘備註䶎嗯

惟善賴 行長 居 宇土城中,秀吉不」知:其幼弱信』之慶長二年丁酉秋八月二十八日丁亥前征夷大將軍從三

寓„隈本 始清正怜 惟光兄弟幼穉而逢.殃居„„隈本,弟

ズ

アハレミ

ニシテ

秀吉,者,曰肥後一揆之首帳有 此人,也惟光時年十二

此文書二mèト+、此國、秀吉蜂須賀家政:命

天正十六年夏始テ檢地セシム然ドモ其終ヲ詳ニセ

二年癸巳秋八月先」是人或有-讒, 阿蘇 大宮司惟光於

森勘右衛門判

五月二十六日

井上彌一郎とのへ

阿波守内

天正十六年

有異儀候爲其如此候也

七月之儀阿波守之理二十日 朱 印

朱印

坂井善左衛門之刃人

井上彌藏~O^

安田與七郎とのへ

申如前夕被申付候然上以天下之御

檢地之儀L候條御國主被仰付候共藥師領之儀不可

果成續

¸編年集成秀吉家譜慶長日記 〇薨年六十二四年四月賜

田點検セシメ高ヲ極メ領地ニモ高何石何手何升

トシテ之ヲ與フ今迄領セシ田地町段畝高二直

關白様今度肥後國爲御検地阿波守、被仰付下向候

付菊池郡之内出田村南福寺藥師領六反分之内田畠

年才八歳石田三成増田長盛小西行長等忌 東照公

欲 乘、間圖 公加藤清正傾」心歸」公夏六月清正還

封國,秋七月 公親一征上杉景勝於 陸奥會津,成行

下號保安二年致仕俊房肥

1

申候也

族ノ國志略=;今度梅北宮内タシム

、

ハヤハシリチ

編年集成

113

物

クト

ヒノクマ

[浦家傳

此日坂井井上等四人獻 酒肴 始見_國兼 禮畢而後

梅北物語

梅北物語佐敷一亂物語〇 賊將名諸書各

スカラス

旦

後二來實ニナキ所 政丸又可」考據ナン十七日乙巳東鄉等逃走

11

深久論

一九四

有異同 今一從 梅北物語: 略 諸書

赴 佐敷 早且過 田浦 鄉長田浦助 兵衛正成率„農兵

百 陣 千赤松坂前,與, 東鄉等,戰而皆破,斬之

飲獻酬宗寛計„„其虚,投 杯於國兼之面, 急起斬」之國

兼已死徒 衆悉 逃亡矣燐黼幃↗此一黼謝書各有 異同 今

◆編集成室町日記梅北物語梅北一揆次第

按三田浦家傳堀川左大臣俊房嫡男檜前中納言政麻 縱座日記始宗寛自
„日奈久, 以 飛檄 告 事於隈本

呂建久三年葦北七浦7頑>子孫代々田浦猪山丿城|包 援兵,留守居城代下河又左衛門元宣叉馳 捷步1

三居è是故:田浦7以稱號下入正成、政麻呂十六|達„肥前名護屋行營,秀吉聞」之迺遣 淺野長政之子左

代丿孫也額急+

甄 溱+ 後:加藤家:仕田浦/大莊屋下京太夫幸長 東照公之臣 本多中務大輔忠勝 伐 薩

y子孫相續ㄨ叉家傳古老傳說》引元俊房任國「賊,二將至筑後北關,聞„亂平 還 名護屋 魏碑棒哦誦北

亂平,還„„名護屋¸緗率集成酶北

/内遺腹2子尹成長》亍檜前政丸下云八代古麓|秋七月秀吉遣„„淺野長政於肥後 監ņ決國事|||砗遣我

丿城主卜老年釋迦院/開山井善大師7慕e栗 藤孝君於薩摩 命„島津義久,賜 歲久于 死, 十八日

木村南河内三居住入墓、村)北松尾=尹y釋迦院|丙子歲久切腹而死主調和鞫集鬳年糕二十日戊寅秀

緣起、開山大師、八代郡司檜隈中納言政丸/貴吉下書於坂井等 褒獎其功 室町日記

肥後 國司下又今 考加檜前隊

作 褶,也政麻呂誰人ènトヨ不」知或一寶龜

延曆/比/人by或ム建久中2人トy或六國司

郡司古麓/城主トx皆無稽丿說取三不」足俊房2

村上天皇/皇子具平親王其子師房其子俊房也從

一位左大臣堀河左府

左衛門相催一揆其城以策略乘取候之

處汝等分調義彼惡逆人梅北討取候樣體矢野六太

夫言上候卽被聞召候并同意之奴原二人加誅伐其

外一揆原數百人成敗仕候事誠以無比類手柄神妙に

思召候猶淺野彈正少弼方被仰出候通木下半介可

津世錄記薩州舊傳書及世錄記國兼大隅國山｜後 賊軍少亂城兵見」之開」門衝擊賊兵不.戰潰走

北宮內左衛門國兼

勵,,守成堅,,備禦 賊軍見城之完固 不 敢近攻 松

基入道一要死計鬮三月太閤秀吉征 朝鮮, 以 清正行

右衛門矢島內藏助等賊軍自海道 來冒 八代麥島城】

文祿元年壬辰叶司春正月十五日丙子

テス

此日梅北之徒 東鄉甚

十六日甲辰坂井宗寬自 日奈久 還僞謀而亦降 國兼;

編年集成、德川御年譜、室町日記、梅北

物語、梅北一揆次第佐敷一亂物語

吉請續史略

オモムキ

公卿補任秀

以請」和求…委」城爲,臣國兼許」之遂取」城自稱 藩主:

其養子内大臣豐臣秀次爲 關白；秀次掌 兵馬權

.

十九年辛卯冬十二月二十八日庚申豐臣秀吉辭 關白

彌戒後改 彦右工門:與 密謀而厚」幣

未」歸故彌一郎與

藏安田與七二七耶後既..彌右衛門

實得ザルノ説笑ベシ

四里留

丷 後改 勘兵衛

ムナカタ

次之弟也

彌一郎

井上左衛門無 防守之術 城代加藤重次從 朝鮮之役 以 坂井善

爲」將襲_佐敷花岡城,城中倉皇

左衛門- 不.名故今站從」之

一爲 盛勝 世錄記:刑部

田之

ツォレン

薦 歲久,曰今秀吉征 朝鮮,而群國之士馬暴露

11

剃髮號„宗方, 其子攝津介賴則 天正十四年正月於

南鄉高森, 戰死因而養, 相良義陽之弟帶刀賴通 爲

、子賴通亦與 薩兵, 戰而死賴通之子水俣吉左衛門

賴元仕„加藤家 爲 水俣鄉長子孫連綿存于今,

按二宗芳事實、中尾山墓標2銘7證下ヌ~y宗

芳其先薩摩/人:>相良家族:非名;長智

※元賴方:尹><相良家/系圖家傳日野覺書等

三義陽丿弟賴通廾y宗芳子孫球磨尹家傳秘藏

丿文可以見然L;水俣家傳訊眞僞可」疑菊池傳記

宗方後三休甫二改云國志略二、宗方入道休甫

地頭

於外夷:輕兵銳卒必竭 於外 老弱罷, 於內, 君欲 圖

#大 事,今之時不可」失夫兵貴神速, 疾引、兵 走 東

肥 先據 北八代之險 集」黨整」兵歲久從」之十五日

癸卯歲久乃發,輕騎 國兼及弟刑部左衞門試體門盛行,

癸卯歲久乃發,,,,輕騎,國兼及弟刑部左衞門鵬盛宇列

宗寬國志略作 秀协 -作

行今从 坂井家記

爲,,守鎭 宗寬時趨 日奈久西里

在 城北

井上彌' 城代小西行重亦從,,行長,至,,朝鮮, 雖,, 城中寡兵 也

長 爲 前軍將 夏四月諸軍至 朝鮮i湖正設九州訑

長:爲前軍將|

編年集成室町記 六

月島津義久弟左衞門尉歲久入道 晴蓑作」亂始賊臣梅

島

國兼證書作 盛定 室町日記作 忠重 今從 岛| 浦筑後久次土一著高田,聞」之挈、鎗單騎馳 殛而突, 其

二十六年十一月1今从:本書

又一書有馬晴信大村喜明松浦鎭信各發,,家軍

合力行長,然諸書不」載」之故姑措而不」取

11

浦栖本各來降 入道麟泉本渡城主天草伊豆守種元畔,,行長之命 行長

白秀吉自帥 大軍¸往先討氵 志岐,天草種元 亦 據、城

使其將天草主水助種方木山彈正勝正二作 救志岐,

大矢野民部大輔種基 上津浦上總介某栖本八郎

親高*'皆黨」之各出」兵軍,志岐, 行長攻」城數回

不」得以拔死傷頗多焉於」是行長馳」舸請ñ援於清正,二

十九日癸卯清正親將纟 一萬餘兵 至 志岐,十一月五日

己酉清正與,,,天草之魁將木山勝正¸戰,,于城下,斬」之

麟泉不」可」支終請」命而退」城走,,,,薩摩|二十日甲子總

軍圍 本渡城,二十五日己巳城陷種元自盡大矢野上津

清正記 天草記 〇九州記爲三

ハヤフネ

トシ

11

ホンドノ

十七年己丑冬十月天草郡志岐城主志岐兵部少輔諸經

代」之五年,條可二合見

1

今ノ官道其時家中小路ナリ町跡 古町畑トス 慶長

五年加藤家領トナリ吉村橋左衛門堤權右衛門ヲ

城代ト後野尻久左衛門蟹江與三兵衛ヲシテ

ラシム ┐以下慶長十七年元和

リ右ハ熊本/大河ヲ帶と前八平坦原野ヲ受形勢袋ロ

毀テ皆新城二遷ル島賊今宿道/西村北其址アリ

後ハ近ク海ヲ続シ左ハ徳潭大入江 二

轅門,臣一仕行長逝矣墳土未」乾豐臣公來征, 薩州, 官軍次, 肥之佐

敷,時我君在,日向宗 芳 乃 奉||大 弟長誠君 臻 佐

敷,因„誹友紹巴,以通豐臣公素聞„„其名,乃 召 見宗

芳從„„„長誠君】拜謁矣豐臣公以„„„舊ˋ 賜„球磨俟 宗

芳馳„急使,以達„我君,君速發 日向,來而亦 謁 豐

臣公,公以 幼君 委託宗芳賜„宗芳以津奈木水

俣二城,表其殊節 宗水俣家傳日宗方其先出,三相良長廣之 弟 祐 長 祐
長

食 深水村 子孫因,邑爲、氏宗方名頼方稱,三河守,

ヨリ

芳少而精氵　兵法,年二十六遠

、色終身深戒有〃諫疏數十條 家傳秘藏 性好, 聯歌

惜哉盡而不」傳今僅存者獨吟千句而已天 正十 八年

庚寅八月二十一日病氵 死千家,享年五十有九葬 中

尾山, 改號, 權大僧都法印宗芳 碑南嚮者從〃遺命,

耳矣其防南之深意以」是可、觀驗不

セリ

11

テス

中尾山遊書長智碑銘日深水叄河守藤原長 智後剃

髮而稱〝入道宗芳 天文元年生其先薩 州人也來,, 此

國,也久焉然世次支干闕而莫、可、證至三宗芳,仕仁義

公頼公|所 登用, 蓋文武之良臣希世之 俊傑也義公

十八年庚寅秋八月二十一日庚寅相良家之宿老深水長

智死

新撰事蹟通考巻之十二

石墉トシ海岸ョ帶山屋

=安テ堅要!城也名和家領加悦越前守泰

行三谷丹後守行長竹萬半兵衛氏安相良領二東

右衛門尉東尾張守城代タリ其後相良大膳亮賴貞此

地/地頭トナリテ此城=居ル賴貞義陽背テ小谷

幽セラル、後深水長智水俣ヨリ兼テ當城ッ錠

ス加藤顔トナリ平野五郎左衛門長時小代下總守親

泰竹内吉兵衛屋次森本義太夫一友石田鶴右衛門伊

藤新五左衛門慶長五年マテ相續テ城代タリ慶長六

年加藤内匠同七年八木田勘兵衛杉本次郎助山田越

後三河彥右衛門同八年ヨリ筑紫四郎右衛門城番タ

平野以下城代之名據

津奈木鄉會所之舊

其後毀｣之水俣城、天正七年二

誌ス加藤顔ぇい中村將監正師城代タリ慶長十七年

釣命二依テ宇土矢部下一同:破却ス隈莊城天

正八年二記ス行長が領トナリ弟小西主殿助城代ト

ナル其後廢スルカ加藤家ノ時見エズ木山城天正

十三年二載」之小西領 伊藤與左衛門城代ト

シカキ

城ヶ疊善政=代佐敷城守

ト云佐々成政二

トス本名澁谷小左衛門

テ肥後來り後加藤家二仕7清正家幌ヲ

元和元年一國一

與ヘ加藤大和ト稱シ後ニ與左衛門下改ム

城ノ制=依テ毀」之津奈木城、同郡津奈木村ニア

リ鶴城ト名〃天然巖善政死後加藤萬兵衛却ス爪離れ行断美佐古麓城前二所々=載」之

天正十年以後島津義久地頭ヲ置テ出張/地トス

十六年小西領トナリ長臣小西美作行重 始八木戸作右

衛門ト云行長

西一里計り麥島村二平城ヲ築シメ古麓城 解

一九一

フ因テノ名二改

ヲ城代トシ後行重ヲシテ古麓

家及と名ノ一字興

・解

左衡們小

同十七年 公命依テ正直内牧城に移り此城破

下田家記一新美八加藤大和二代テ隈本歸り此年矢

月二日死法名梅天

宗林犬飼村二墓アリ

慶長十四 年五

正直代之

2名、甲斐親定黑仁田豐後守等城代タリ豐後守主

左近將監

叛テ伏誅!後菊池傳記二此始末

親房が子彌左

・云トモ年月不」記

衛門九兵衛城番ヲ勤後兄弟共=清正公=仕7愛

藤寺犬飼備後守は城代タリ小西領”結城彌

平次太田市兵衛兩城ヲ兼テ城代タリ加藤領トナリ

慶長六年正月長尾豊前善政ヲ城代ス

改知行高合テ五 百二十七石餘天

内=館ヲ構營シ筱館ト稱シ 條詳也 阿蘇黑川村

贊塚ノ城ヨリ 塚二作 移居ス右二城ヲ築テ館,警

衛トス天正ノ北岩尾二六甲斐武藏守親房

天正十三年

ス其後廢ス矢部城二城アリ一轟村ニアリ岩尾

城及龜甲城下云一犬飼村ニアリ愛藤寺城舞

鶴城ト云皆山形二因テ名阿蘇大宮司惟大矢部陣

名二啖み直政朝鮮ニテ清正ノ命二背

按=河尻城、今ノ外城町ニアリ建久中河尻三郎實

明が築所代々ノ居城也

系圖

略之 `清正其臣加悅飛驒

以城代トス飛騨名和家一族顯孝没落時肥

後殘リ加藤家仕隈府城前二所々二記清正

加藤傳城代トス筒嶽城玉名郡ニアリ大永三

年ノ條=具ニ誌ス小代家代々居」此小代下總守親

泰後清正仕此時加藤美作正次ァ城代トス文

禄二年正次蘊嶽=徒ㇼ當城一廢シヌ蘊嶽城一同郡

關村ニアリ天文二十年條二詳也去冬大津山テ

成政其族佐々藤右衛門ヲ城代トス清正領トナリ加

藤清兵衛直政城番タリ交禄二年直政加藤家ァテ

肥前唐津赴後 直政始名桑原清八清正家號ヲ授

古麓、四城各置,城代

記古

名阿蘇葦北九郡 賜加藤主計頭清正,以三宇土谷城八

代三郡賜三小西攝津守行長 球磨郡相良家之所領天草

郡天草大矢野壹岐上津浦栖本五家領」之山年年歲六

月二十七日己酉清正入部以,隈本城」爲居府,二十八

日庚戌行長就」封宇土爲氵 居城 躪黼証清正領内定,城

番所」謂河尻、隈府、筒嶽、高嶽、 内牧、 田浦、佐

敷、津奈木、水俣九城也行長領内隈莊、 木山、矢部、

野守秀行二仕ヘ本山豊前守ト改一萬石ヲ領シ二本松城主

家記

山ニアリ花岡城トモヒ名和家領時上神出

守重光ヲシテ城代タラシム相良顔永禄比佐

敷太郎武門天正頃西肥前守城代タリ加藤

領=ナリ天正十七年八月長尾安右衛門善政 押醸

城代トナリ暫ニシテ加藤重次:命シ田浦ノ

11

家代々ノ城・ 是ト混スヘカラス

佐敷城、佐敷町西ノ

交祿元年ノ條二之

代タリノ額制性其後事知レズ

加藤家領トナリ 加藤大和重次城代トス後當

二城>

城ヲ廢シ重次一佐敷ノ城代トナル 三城アリー

ノ山村ニアリ田浦

ヲシテ繼テ城代タラシム幼名清六父死後 東照公台命

右馬允

秋月筑前守種實女加藤清

允正方妻

同十七年 公命依テ八代・

城=移ｯ加藤萬兵衛正直ヲ内牧城代トス

元和元年一國一城/制依テ毀ッ田浦城葦北郡

田浦宮後村ニアリ名和家領時進惡兵衛眞春城

森本一瑞力古城考二進家事等

慶長九年可重死ス其子淸左衛門正方.

鷹原キ此城破却ス内牧城阿蘇郡内牧ニア

リ阿蘇大宮司ノ臣春丹波守盛道ヵ城ナリ加藤家

本名片岡紀姓也始

7時加藤右馬允可重城番トス 清左衛門後三流正家

後出奔シ唐津ニテ寺澤志摩守二審食シ陸奥會津二至り蒲

生加藤正次城代トス慶長五年新城同村ノ内

ガルチ

以下十七人於 小倉柳川〝自殺1

二十七日己酉立花宗茂 毛利勝信奉」命隈部親永 親安

按:拾集昔記:成政大阪:赴/神保安藝守正次7

以留守居城代トス 大和カハ臣内後成政=仕7成政其女

荒山合戰記末森 記等二正次八畠山修理大

其子清

命,成政坐-犯„制書,以„苛酷,御世民私動』凶器-賜死

國除 年集成花

11 K-IN 11

大阪 至 攝津國尼崎, 此日秀吉以, 加藤清正¸ 傳氵 嚴

」召如i

爲秀吉征西之時

傳記二從と諸說附テ考備フ

大阪,留„弟顯輝,守„宇土城,毛利勝信等述,

政伏誅後遣,正則長政親正i討, 殘賊, 藝師助』之九|秀吉之命,分三下城,顯輝不」從勝信與,諸將,圍而責」之

州記:云小早川左衛門佐隆景黑田孝高一揆7治ム 顯輝固防戰然寡兵慮」不」可久持密喻」城而走, 薩

後三淺野長政安國寺下向皆同》力><故:今佐々/摩,匿„出水|島津義弘聞」之遣 兵攻」之十六日己巳顯

輝強戰數合自

傳記藩瀚譜島津家傳〇傳記不 年月藩

楊諸唯爲 六年家傳 爲 十六年四月十六日,今

從 之名和傳 譜地志四月十四日 丙申佐々成政ラシム

編年考徵十

新撰事蹟通考卷之十二

是祈治亂記爲此年冬令贴从」之國志略

餘寇悉滅一國平均矣

1

凱照九月十六日被」誅疑月之誤也

按:拾集昔語治亂記三天正十六年三月秀吉毛利勝

信ヲ内牧生駒親正山鹿蜂須賀家政ヲ菊池二

黒田孝高御船淺野長政隈本福島正則ヲ八

天正十六年戊子夏四月先」是宇土顯孝爲、陳.非一揆

代三加藤清正7宇土:遣冫逆賊7討冫ム逸史曰成之黨,赴1 語九州閏月十五

日丁卯秀吉分肥後以飽田詫磨山本合志菊池山鹿玉

一八九

柳川,自殺九州記爲:五月二十七日,不知孰

人,謀而殺,親實;放 火於城屋 逖降 成政, 時朔風烈 照於江田莊牧野

傳記不」書:年月内古開傳記三月三日剴房於

11

諾而從」之十二月六日辛酉親行與,,,親實之侍臣駑野藏 未知 其是否

1

惠瓊網,内古閑鎭房於柳川,誅,,,,其弟鎮

11

ス

戾無、義貪欲 無 、厭 乃密圖而利ŋ親行,殺,視實親行 | 日於言 持勝院,遭害,

1

本十六年四月八

シト アクコチニテ

禦有」餘成政無,如」之何, 成政謀日 吾聞親行爲,人狠其所„望請,約而會 吉地村淨滿院 殺之

傳記南關記〇1

傳記國

帥,八千餘兵,擊,和仁親實,親實幗守,田中城(防)之邊

大口:閲„其動靜,佐々成政不」知,其故i以爲犯„我境

春親行亦棄,居城坂本 舉族來而與„親實,相保守親行

分„相良賴房 屯 津奈木 備 薩摩,義弘亦不」入 東

傳記籓韓語島津家欅〇家轉十二月二毛利勝信遣」兵捕 首

親實之姉婿也成政之兵輕, 其小城寡兵俄攻將登

肥

十日至

隨、機拒」之故成政之士卒物故者六百餘人柳川加兵之

族引滅之,餘皆股票矣

-惡甲斐宗立於益城郡六箇村

將由布大炊助惟淸死」之城外盡,攻擊之術, 而城中守

人詭 而許

驟大津山家稜據|大田黑神尾城,成政遣

チモヘラク

本城村城合戰記

十五人勝信遣„„其居城小倉 四」之

秀吉叉

ラ

志

本

ラ

11

如二

¸傳記拾集昔語異

此月關白秀吉遣 筑前國主黑田勘解由孝高豐前小

等十數溝通„„成政 成政與、之約擠城戸】急搏椴秀

鬼親宗驍勇絕倫却』者

人鬼親宗驍勇絕倫却」敵者數回終戰死家亡矣 醋

11

ジンキ

烈焰煙被」城諸軍乘」

「煙被」城諸軍乘」之奮擊賊兵皆潰親實之弟彈正親

範人家等亦起 敵後,浪煙掠¸天雄詰震¸地一揆之將甲斐宗 |

立大怖脫」身遁菊池武國鬪死 成政因而乘,勝賊兵

派土崩府城艾安也部戰讚捌散性譞 九月垅村 對城守

傳記治亂記異本城村城 九月城村 對城守

兵資糧盡大苦成政自欲」送.粮然又畏 殘寇之復戳 故

馳 急使 告„事於筑後柳川 請 救援, 立花宗茂將,兵

自赴,山鹿,入„„糧於對城 旣而軍且,歸大津山 家稜和

仁親實邊春親行相共出」兵遮 柳川之軍於平野立尾,

宗茂勇敢膽强不 敢屑,為諸

爲„諸兵殿| 親與」之戰三家軍

狼狽而走跳嫣惜齬冬十月二十八日 甲申 佐々成政自命‟島津義久,討肥
後反者,島津義弘引,兵至 肥薩界

倉城主毛利壹岐守勝

倉城主毛利壹岐守勝信安國寺沙門惠瑗 於肥 後, 制

[躪 孝高等傳 秀吉之命於隈部, 譴責其罪 十

諭叛賊

五日庚午隈部一門自服而下」城孝高送 親永及二子親

有動兼元以下

房於柳川,預„立花宗茂,親安山鹿重安

新撰事蹟通考卷之十一

按:小庵覺書城村籠城次第前後覺書九州記等親「戰其剽疾不」可以當於」是成政終得」入¸城雖」然群四

永剃髮染衣2體下 刂城7出元降叁入然卜干城村 面蟻集外無一甲之援,時阿蘇舊臣早川秀家猿渡秀貞

兵接成政急也水野勝成松原直元等見„„事危,入„萬死|

戰記抬集昔語

キ ヨリ

„山鹿 |寇於茶臼山、小貶凍地嵴

短

N

壯地也

クス

皆死之親永自度力不」及,彼二十八日乙卯親永遂與三

城之東北今

「避山鹿,逮„此舉,成政聞」之日烏合之衆不」足,懼廼

テ

11

ムカ

シコチ

1:

今日不、察則明日恐及„ 各身, 國士見」之然也悉

11

チアス

11

陣」者2日今者成政壞,關白殿下之旨命, 擅 責」國亡,

舊將,而以遂欲」奪其領地,里俗」糠及、米

ホシイマハタリ

リサラ

六日甲子秀吉戒 成政, 以, 制書五條, 成政率„„家軍, 八月七日甲子成政往伐,,親安於城村城,親安浚.壕列

入〝隈本城,終極而爲氵 居城ň 秋七月成政討„„隈部,柵與群臣」勠」力固守之二十八日庚辰甲斐親秀入道

サラヒポリチ

11

テツ

赴夕故不.取」之

傳記從テ諸說『不取

定±5℃今小代親泰城久基:賜7印證7月日至々

落城ノトキ親永モ親安等ト共ニ城村ヲ出テ柳川

親永始成政檢;考國士之領地,而後各欲」分„„與其所|宗立菊池香右衛門武國等作」亂墜,同志之軍 國士怨

領,既而下,命於麾下 親永不」受成政大忿將」討」之親|恚成政,者三萬餘人又從」之乃將、之襲„隈本城 嚮」是

永不」屈整、旅據隈府城,十日丁酉成政先遣佐々與隈部之元老有動兼元作, 文檄 密贈-國士之在 佐々

.成政姉之子也長峰氏

左衛門宗能”

前野又五郎 忠 勝,攻- 隈

【後與家號爲 同姓

府-二十六日癸丑成政將 六千餘兵,與, 國伯, 倶往而

圍」之親永之子式部大夫親安爲, 山鹿城村城主,聞、之

馳來然父子常不.睦也故持,兩端,按、兵不」進親永見

之遣„人於親安,免、和密策而約,,内外夾擊,時家老多

久大和宗員遇 擧族降,„成政, 是以攻兵備:親安,盆

厚 城圍,親永之老臣富田安藝家治亦開」門突 戰一族

築 對城於東西 分7置選兵三百餘,壓 山鹿,俾ㇾ 佐々

宗能,自„山鹿路 歸救和隈本-親率:一千餘兵,從合志

道 還氵 隈本 山本郡領主内古閑鎮房欲 討 其歸路

設 伏於今蕊,全師陷沒大將宗能死」之成政還而討,土

城忆凍齔Ş 寇兵視„成政之旌旗 躍」馬薄騎數十 潰」圍馳遁親安亦戰敗從」父俱犇城之賴

敷

印

1

一

圖 詳也

玉泉寺治亂記呔閤 記

按球磨

朱

六月二日

焚

小代下總守關城八代郡興善寺村山ニアリ故=古城主考等

興善寺城下又名和家頎1、本鄉市正忠行相良

領天文丿比云相良長每丿弟相良伊勢守長皎其子

西次郎左衛門城主タリ天正十年

西殿

於肥後國汝本地之内貳百町分扶助畢領地所付上中

下相分從成政目錄別紙請取全可知行候也

天正十五

小代文書 出田家;同交故略」之

秀吉凱旋六月二日庚申次,,肥後南關 :以 佐々陸奥守

成政,爲,,肥後國主,諸領主賜,舊領,者五十二人皆屬

成政之旗下－記治亂說,備好都

「帳 加藤

二千七十九石八斗八升九合

我也设立研商将芯飛旅舘慶長十七年四月朔日病死ヌ本

野村光勝禪寺n葬ル高塚城、天文二年丿條:記ヌ

二十三日辛亥前豐後 守護 大友義鎮入道 宗麟卒

J

孙汌嫲 啷謝銪後:小西家:從ヒ加藤家仕

リ

アキ

南 小川 蓮佛 =

加藤家侍

カ此時秀吉降テ先鋒二從と平定後八代!高田

7守ル然L八世錄記:云種山7守è、非大心°C至 河内泰平寺,遂定爲 本營 ,島津義久大畏乞」降聽

ル然レバ世錄記二種山ヲ守ルハ非ナルベキ

ユルス

テ

記世錄記爲四月二十五日:今姑从 治亂記傳記i

前平戸松浦/支族:亍島津秀吉

丁亥

逸史作 五月四日:國史略爲 五日 薩州分圖演舌

島津系圖〇世錄記秀吉自

乘、船至

右馬允トモ有

11

小川年代記:松浦 筑後守仉次、肥

11

後二十

一善内兵衛又

テ

之行:相前後恐日之誤也世錄記此前後之數條可,疑者多故不、書

11

スクハ

太閤記四月二十一日敵高塚關八代退散秀吉乃入 八代皆與: 秀吉

11

肥後交戰叢書第三卷

在, 日向國, 老臣 深水入道宗芳

房嘗屬〝島津之前軍,

奉〃賴房之弟長誠,來佐敷,因〃誹友紹巴,以通 秀吉|

按三谷山(卽千種山大丿訓讀相近氵 故三字7誤! 秀吉素聞,其名,乃召」之宗芳從 長誠 餲, 秀吉,賴房

〞城、八代郡南種山村=7y前三正平元年:記ヌ|亦速來見 秀吉】防秀吉長驅 大進而入 薩摩 至 | 出

其以後城主等不〝分明,相良領:八駿田五兵衛城代|水 領主 島津忠辰降迎她使場孫和淼結=屬y南小川村紫尾城「八日ニテ三百町小川海東ニテ二百町賜り舊城二居レ

ヘ高田郷ニテ二千石領本野村土著シ 家队代 尙相良系以„„福島正則,
爲"八代之鎭 至 佐|記九州記

相良之五月八日丙申義久削髮著„僧衣,來„泰平寺陣 謁氵

見秀吉,於｣是諸將始釋」甲西海大定跑史秀吉家識傳記治亂

編年集成太閤記九州記

證傳,:成政肥後封七元、月日諸書區々= 新撰事蹟通考卷之十一

11

十萬,則史略太

一八五

1

閟城 新納忠元討 谷山 同日至關城】

島津世錄記曰四月十六日新納忠元伊集院久春等

檢

11

1

撫而歸｣業遠近聞」之大悅服融誰記

九州記世錄路

11

ユキ

冬十月島津義久大起｣兵討,大友義統,島津義弘帥,三

宇十四日癸酉宿 高瀬願行寺備調刻讓十六日乙亥至,城外

著豐前i訊 認夏四月十三日壬申舍,肥後南關,東肥

11

比屬 八代郡

治亂記

二十八日 丁巳秀吉

○ 世 錄 記親次

1

童美作稻富將監 宮守作 陣内,今從 本書,

爲道輝,又紹元爲, 島津臣大野久高相臣犬

チ

忠元等聞」之戰,親次之宮守陣,親次敗走

オッフ

薩州兵亂記曰河上左京亮、筑紫廣門勝尾城7攻

傳記大友興庭記

11

應」之俱攻,,勝山城,筑紫廣門 爹]城降州

十五記閣

11

之羽月 1年 世錄記

國志略明詐繼此日遣兵終殺」之道 六月

島津義久使ņ島津忠長伊集院忠棟¸略 筑前 秋月種實

落セシトキ重創ヲ負ヒ肥後ノ八代迄引取終果タ

丿河上家記左京亮忠堅天正十四年丙戌七月六日死

去法名緣勢因好居士葬 八代郡河田村,導師塔福寺

墓所不分明,塔福寺在 金城

郡北小川村 其日甲辰薩將士悉退三府內,還、國‟十八日丁未

志賀親次攻阿蘇臣坂梨惟右入道紹元於坂梨城,薩

將新納忠元伊集院久春歸路次 阿蘇小國|十九日戊申

諸將來迎而拜謁令-堀尾 吉晴 守』南關心讓傳記大閤記

土顯孝居城宇土以,加藤清正,守,宇土,以,,黑田孝

高:守三甲斐親秀之御船城,以„岡本太郎右衛門,守隈

莊城,秀吉臻 八代 下˩分不戮,一人,秋毫無,犯各慰

萬餘衆兵,從„„肥後道,一軍島津家爲」將一萬餘兵

自 日向 進赴豐後 二十一日壬午 義弘至; 阿蘇南鄉 | 基居城隈本,以淺野長政 守隈本二十一日庚辰至三

野尻;十一月破,豐後半國醜醜十二月先」是義統父

大友宗麟如„京師 請„援於關白豐臣秀吉,秀吉乃使:

仙石權兵衛秀久長曾我部土佐守元親,至。豐後,十二

日壬申秀久元親與,,島津家久,戰,于戸次川,敗弊元親

之子信親等觸戰以死秀久元親逃奔十三日癸酉家乘

亅勢入‶府内,義統及宗麟退前龍王城5年集成大記

十五年丁亥春二月秀吉征 島津 發諸道兵 三月庚寅

朔秀吉親出,京師,趋,欽西,前後兵稱 三至„肥之合志 十七日攻,谷山城
守將松浦筑前守棄

以守忠元久春過高塚關至 八代會,島津征久町田

家傅征久久倍四月十七日自 小川至5

久倍 十八日發亅八

八代

【尤後1名力分明十ㄕヌ 矢部館‚‚‚濱町2頭=7) 五日庚寅合志高重遭」
害高重去年爲, 薩軍,囚幽,其國

レテ

所ニシテ疑ラク差課アラン隈莊城主天正八年 按:高森/含藏寺:墓尹銘
日雲龍院大 居士

以後「何書:千見工隈莊合戰記:甲斐伊豆守昌 神祇天正十四丙戌天正
月二十三日高森城主惟居

後:大官司/免許ヨ得亓隈莊－歸城秀吉征西 肥後全國歸氵 屬薩摩之統
下ı於」是兵勢日疆滋*出兵

卜半島決方亍薩摩二赴+家絕夕,上總介守昌|征,豐後,大友義統庸暗國勢益*襄 夏 四 月二十

11

略

按1惟前ń甲佐城居蚤/降女è n 卜前而逐死鼬 高森城生高森惟居受,大友之 恩遇 阿蘇一

島津世錄記曰十六日隈莊城主甲斐上總介且阿蘇惟 船5分ǹ 市來下總守及家軍,攻』津守城-光永宗甫 敗

前脫 甲來

11

十四年丙戌春正月七日癸卯新納忠元發, 大口, 到..御

杉內上野守殿

之於今石砦 砦破而吉利被」戮薩軍直進圍 高重

利拒

屠.” 竹迫,還

於竹迫城,三日庚子虜,高重及父親爲,

冬十二月十五日辛巳始光永宗甫棄, 津

誌略憫誌艉路

守城i降∪薩摩Ģ伊集院肥前守久春代守, 其城, 此日宗

甫輕行攻,〝其不備,取」之錄

惟光判

閏八月十六日

弟寄合之者戰死之段具分承知候誠連々首尾乍案中

無比類次弟候倍於勵忠貞者永々不可有忘却候恐々

佾忘却候恐々

謹言

忠元河上忠堅等將』兵來攻」之高重之臣石原狩野介吉

國志略竹

ニテ

チ

去 十三 至其表薩州衆取出候處於戰場杉内左馬助兄

杉内左馬助兄|

早楠文書

志高重銘叛島津, 於」是新納

非也

九月 臟誌略作調先、是合目丸衆中

閏八月十六日

載之

油斷候爲存知候恐々謹言

肥後文獻叢書第三卷

事連々之首尾此節候必以時分一廉可申顯候不可有

大宮司惟次陣内館ヲ構テ所居トス是濱御所濱

御殿濱御屋形トモ稱ス其詳ナル事阿蘇系圖二

黨悉雖」屬薩摩 惟居獨守孤城,不、從薩軍來攻二十

三日己未城陷惟居自刄書ヌ

惟光、目丸山ノ奧:隱亓未夕從í此卣後丿記ヌ

開雑記

日紹宅諸国巡覽ニ出ケル留守天正十三年九月薩軍ノ木山城沒

落ス紹宅筑前ニテ聞之歸リテモ詮ナシトテ終二筑前1止ル其子

新撰事蹟通考卷之十一

賞出入口膾炙ス故二略ス其終所不知

肥後見

書爲三右馬助故今之

レリ惟久剃髪シテ紹宅ト號ス聯歌=名アリ諸書:

後守

左近大夫惟久備マテ此に居

11

11

按御船城興國六年天文十年!條二誌ス此時!

城主、甲斐宗立ナリ 木山城木山鄉迫村ニア

阿蘇文書康永三年十月太宰少貳賴カ書狀木山

松丸城トアリ惠良惟澄正二年九月進狀二木

山鄉木山太郎左衛入道幸蓮應永十二年六月澁川滿

賴が書簡中木山遠江守アリ皆當城主ナルカ古城

主二天女比ヨリ木山備後守惟昌右馬助惟貞

助一作」頭大宮司惟豐之

11

十四日壬子御船木山津守等阿蘇顏諸城棄」守而 遁或

請」命而降地志略世

4錄記家傳

ナリ

合セルベシ

按=甲佐城天正八年二九年伊津野正俊戰死

拾集音語甲佐松尾城上居

堅志惟前が城:ナル

後田

館跡アリ今二其所の陣内ト云

城堅志田村ノ神園ニアリ大永ヨリ天正ノ始迄

惟前居」之衙阿蘇系圖=著

惟前居」之一頜乜賜= 此時ノ城主、西左衛門惟安

及母祖母,避ï 退矢部濱館 潜匿目丸山薩人亂妨矢

一八三

於今度砥用口敵取出候而放火不及是非候目丸之儀

山續之事候殊堅在所間心安候彌各相續可勵忠貞

目丸衆中

閏八月十二シゲ

親 春 判

今度薩州衆於在々所々以現形下方何も落城候眞不

及是非候然者殿様御供申如勝山楷籠候其口石をお

とし木をふせ相ふせかれ可爲候かならす追而

忠_之方之一稜可被成御扶助候由候爲其取合聊不

可存緩々恐々謹言

押方文書

部,而去亂記拎集昔語

糸圖國志略

日

阿蘇大宮司惟光幼冲舊臣等畏」難抱 護惟光其弟惟善

光永中務大輔惟宗弟刑部丞惟純城主タリ世錄記

・城岡志略ハ下陣村二

此時主將滿永宗甫トスプリトン地志略ニハ津守ト

下陣ニ城トシ津守城主光永右衛

門尉トス何とカ是ナル

リン宮 津守城天授四年條誌ス天文ノ比

孫代『今天明比木山六兵衛黒田家臣下ニテ二百石ヲ領人

甲斐宗運記トモノニ太宰府天満宮末社=煙宮ト紹宅祭

十

正壽寺跡㎝'墓銘正壽寺 二世 勝田 善 殊 庵主

於„花山,戰死生年四十四時天正十三年阿蘇古老日記日乙酉閏八月十三四五日 之間自, 薩

花山下

11

十八歳姤良新次郎久次

阿蘇古老日記十三年乙酉八月花山城攻落

騰寫恐

然紹公居士天正十三年乙酉八月 日十三日行年

脫 閈字:

押方正市允殿

惟光判

八月二十九日

死候右之墓南林寺大中樣御靈屋之脇:有之法名一

言

可勵忠貞覺悟可爲祝著候猶重々可逐禮儀候恐々謹 薩州舊傳書曰姤良新次郎 於肥後國堅志田被致戰

蘇二十三日辛亥攻, 甲佐 堅志田 | 拔」之平田 新四郎被

去十日花山取破候刻於戰場被疵候由具分承知候連

甲佐城 前

,創始良新次郎死」之如上阿蘇惟前居 前蒙,

々心懸之首尾乍案中本望候於向後不可有忘却候倍 | 島津家之恩惠 故蚉降屬 忠平, 阿蘇

押方文書

ける

傳記國志略并日天正十年島津義久花山城7築+阿

の今を覺

休作

押トシテ絹脇刑部左衛門ヲシテ是ヲ守シム甲

斐宗運在世ノ間;此城圍碁/點)如ト云手7カ

ケズ却テ常に音信シテ其勞ァ慰ス十一年七月宗運

死又未夕五十日干過世è八月二日其子親秀入道

宗立攻城兵鏖殺ス

ナカデ

而死嫁的世

シテ

11

11

テ

薩州舊傳書曰木服ナリ

7置テ阿蘇填トス木脇ヲ傳記等絹脇二作非

サ

秋七月十一日庚辰詔以, 内大臣豐臣秀吉,爲氵 關白: 秀

吉自爲天下之武將1 年

秀吉 編 八月十日戊申甲斐親秀

帥」軍俄攻„花山,而拔」之守將政虎祐昌及從兵三十餘

人血戰刑部左衛門 * + 1 祐 秀D 刑部

右衛門渡八代の内花の山城L討死也其時之辭世

詩人もうたる人も諸ともに浮世の夢按:押方文書以下墓銘等、世錄記家傳ト相符合

以テ證スペシ然レバ傳記等ノ年日大二謖レリ

閏八月島津義久在八代,忠平爲」將領數千衆˙征阿

乙酉八月摩 攻入皆々落去

新撰事蹟通考卷之十一

1

豐福ニ至リ乃チ相良家ヨリ讓ヲ得所故二守兵

秋八月十三日丁巳阿蘇大宮司惟種卒* 此月合志隆

按花山今益城郡二屬ス守山荘ニアリ此地

不取

十三年乙酉二月十四日丙辰相良忠房死嗪 此春島津

城下云

甲佐中山砥用御船7攻4甲斐宗立仁田水備後木山

傳記二十年冬トス非ナリ世錄記二十三年下

又按傳記日天正十二年三月薩師先我東肥掠略ス

始〆宇土矢崎城,攻テ中村惟冬ョ誅シ

十月也

傳記大

11

惟居亦收„餘殘兵,與,志賀兵,討„„稲富,而破˩之 阿上人遊行五世/僧大
丿靜ĭ去清淨光院5號時記 使、人請„援於豐後岡城主志賀親守入道道輝
道輝遣,

本寺開山轵遊隆信丿墓碑今存入 此寺 菊池 大友其 | 志賀掃部助朝倉
土佐守,將_兵振 高森 二十八日庚午

行一遍上人ナリ

餘古文書多夕有之

スクフ

アマシ

藤澤ニアリ故

高瀬 小代高瀬大津山臼間 野大野東鄉田 島和仁邊春

按願行寺高瀬町ニアリ時宗ニテ薩摩國浄光明

按:願行寺、高瀬町 尹y時宗二 薩摩國淨光明等來從焉洲市 冬十二月島津部將 稻富 新助 長辰

寺/末寺y貞和五年)草創開山六其阿彌陀佛他 攻 高森城,守將阿蘇臣高森伊豫守惟居許而降」之 密

寺記

義久命:高瀨願行寺住僧四阿彌陀佛¸„其首於境內, - 矣赤星統家內古閑鎮房自服而乞,降曆乃遷陣于

1

シテ

ラシ

-援中義純

馬義純 島津義久

島津中務少輔昌久,拨 重隈部親永遣」使納„款於薩摩¸於」是島津 忠平率」兵

二十三日己亥隆信與,薩軍,接戰而敗死峋 來隈本,二十八日壬申陣,山本郡吉松,合志隈部來講

誠

紹宅降乞テ軍門ニ來ル合志坂梨モ降參高森豐

後退肥後大方薩摩ニ從ケレバ宇土ョリ軍艦ヲ

漕連ネ肥前:押渡り隆信ト戰テ勝ヲ得ト云々 九州

記:八此年八月鑫城/諸城7拔+北地7征

王阿蘇領丿諸城ń義臣多/操笥7守未 薩摩

ハズ其證下二見エタリ傳記等本據ナシ故

ス今興廢記從7惟居傳記惟直作り興廢記

ń滿好下ヌ今墓 銘=從7 道輝或ń道 擇下道輝力

志賀系圖:據改」之高森、阿蘇郡 南 鄉=79

義久遣,鎌田左京亮政虎木脇刑部左衛門 祐昌, 守 八

代郡花山壘 家傳世

十二年甲申春三月龍造寺隆信討 肥前有馬原城 主 有

按小谷:賴貞分靈7祭氵叢祠尹丿相良天神ト稱ヌ | 冬十一月二日庚辰
阿蘇大宮司宇治惟將卒

二十九日己未城越前守親賢死系

リ

ホコラ

撰誕妄不」足」信故三不」取」之

從國志略

相良之老臣議而遂殺 賴貞

國志

種山也令

州記ニモ大友宗麟虐惡ッテ肥前通ス可」疑

遣使招 賴貞 止 其亂逆

セ

按鎮西要略天正七年九月宗運肥前二成求み九

球磨 上球磨郡中爲」之駭動島津忠平在, 眞幸, 聞」之

キ

陽遣」兵捕」之幽,小谷 及"義陽卒,乘」變潛遁而赴"上「親直入道宗運死孫

宿老甲斐民部大輔

ニレテ

スル

木地頭,居 津奈木城,與義陽,不平也因密通薩摩,義

密通薩摩ı義 十一年癸未秋七月五日乙將織田信長10長劉秋八月十一

日丙申立 信長孫秀

信,爲"武將,年甫三歳射兩

甫三歳任評

此月義陽之弟大膳亮頼貞圖」逆始頼貞爲„„葦北郡津奈

圖:粗載」之

編年集成

è トヨ不」知見加者之ヨ擇心叉 阿蘇系圖 甲斐系 夏六月丁亥朔明智日向守光秀弒:右大臣 兼右近衛大

アリ悉ク記=違アラズ諸説紛未タ何レカ適從ス 雄張亂記世

銀絲石村=7y嚮原合戰ノ始末諸書/載所各異同 | 道幸侃代之自」是義久又併:有八代葦北|國勢日益

田光宗,爲"八代地頭又使伊集院右衛門大夫忠棟入

尹ノ或;鯖神 嶺トヌ 甲佐城; 延元三年又天正

八年ノ條=詳也。

領」之乃附氵 與兵庫頭忠平」忠平固辭而不」受故以 平

ス

陽卒

通 肥前 將､作､亂而事發覺

津世錄記家傳

y

コペ

チ

サニ

十年壬午春正月二十日己卯相良長臣蓑田信濃守高橋

相關之圖中間故老日記九州記島津家傳世錄記

按拾集昔語九州記11八年)四月二日下又非

響原合戰記宗運軍記拾集昔語阿蘇

シムル

肥後文獻護書第三卷

宗運其首7八代三送步長臣等乃受古麓城丿左

谷殿丨邑 是ヨ首塚下云響原:千亦碑7建y是

軀ヨ葬ル丿所二塚共二法名年月日左右三家臣

等戰死丿姓名ヨ誌刻ty娑婆髮山、益城郡守山莊

駿河守宮原縫殿助等殺, 東某入道意白,前、是意白密

之氘代事師考島義通肥前將、

而嗣子忠房幼冲葛族巨臣

而嗣子忠房幼冲葛族巨臣相議獻 城地及所領於 島 津

家¸凋ñ蟄球磨郡人吉根城 國志略.

葦北郡津奈 | 信 爲武將 年酉阿蘇家國志略島津世錄記 家博◎小谷世錄

記爲谷山 小谷在 古麓城下,谷窪

系圖合見元心又要略此比肥後/事多/載」之杜

撰事蹟通考卷之十一

一七九

行 暴虐,佟傲益甚愛„侠邪| 遠„„ 廉直 双信 邪宗陽 義陽事急而不」及」戰竟敗一沒原丘,是義陽入,兩虎

領,五國1锉筑後日向

夕子二

[勢烘偃 九境„ ח ח ם

按傳:從忠平以下皆系圖詳也八景尾地未然詳

傳記先陣備„錢龜尾¸ 家傳忠平陣氵

錢龜尾,各異矣今從世錄記ı

書皆石,尾二課ル輕石尾水俣鄉ノ陣内村ニア

傳記幸久則久陣輕石尾,今从 家傳世錄記

幸久乃征久也則久乃規久也互異,字而已

能群i家傳以久陣„„熊牟禮i義

弘忠平之後名以久亦征久也

信世錄記=從フ

11

11

セラ

1

ユキモ

義久將､征 阿蘇 命 義陽;爲軍先隊,先往而討 甲斐

宗運 冬十二月辛卯朔義陽自率兵次娑婆髪山 遣 東

掃部助,攻-甲佐城-守將伊津野正俊迎戰而逐死｣之正

俊之臣伊津野某突,掃部助i 獲,其首,二日 壬辰義陽

遷 陣於響原,檢,,,,正俊之首 憩 士卒,張｣燕時宗 運 聞､

之密經,,間道 卷｣ 旗伏｣ 甲緣｣山沿.川馳出其橫

ノサキテ

熊牟禮未｣詳

11 11 KW

ズ錢亀石水俣鄉ニアリ

弘タシム

廿二

テハ

按=傳記二七年五月トス世錄記九年トス今姑宮

之地 九月 二十六日丁

亥義陽力竭勢窮請」降永約」屬 麾下,義久許」之解」兵

義陽赴 佐敷 始謁 義記世錄

逸史日 天正九年 冬十一月先」是島津·龍造寺爭肥

1

服友!

城¸薩軍竟拔„數城 盡定 昔北城阿蘇二郡

自至佐

至 佐敦」禦」之然薩軍之衆不」得,支潔退 保

詫磨東南

天草球磨七惟阿蘇一黨固守信義,從 豐後

飽田詫唐宇

【或通 方:或締肥前

‵名五郡屬龍造寺,

山本志菊池山鹿玉

ㄓ

島津義久略 薩日隅於」是東肥之群將列士鼎一立三

平:義久以„出水|爲本營, 十九日庚戌

1

11

1

11

ツテ

、將喜入攝津守季久上原門 毀長門守尚近爲」副陣-出水井河

¸本書為 九日庚戌„神社 破„寺院 故宗室大臣相怨 望群 下離乖

方 此時,龍造寺隆信起 佐賀 跋一扈肥前兩筑二島,

推 甲子 八月壬辰

朔十九日庚戌也本書

諸軍征 北Ģ俱進圍數城 義陽之將

脫十字,故補」之

蓑田信濃守高橋駿河守宮原縫殿助等防戰甚勉義陽亦

薩摩

屬

大後,於所々,戰鬥累片不˩決於是行」成分,地以高

此事里俗口碑亦皆所」言也然此

瀨川爲界

國史籍不」載」之故附而備考

陣

傳記二能群トス今姑ク家

傳記、能群卜x今 姑/家

始大友宗麟輓近 其不備,義陽之軍驚騒部伍大擾宗運蟮、兵 徑 逼 義

下野守久治謙田出雲守政近爲、副陣, 輕石尾, 四

日村ニアリ 地誌、親光次郎ト稱シ父ョ彈軍島津歳久爲將陣三熊牟禮」五軍島津 薩摩守義虎爲

世錄記日此年吉利下總守忠澄新納忠元伊集院美作

守久宜襲比々良」故安樂寺城委去而後赴高瀨」

作

志

九年辛巳夏五月宇土顯孝與甲斐相摸守親秀」戰飽

斬城主小森田親光」圍三内古閑鎮房於山本郡霜野城」

鎮房嬰」城固守薩軍不」得」昭而撤去*落去今催地

「家傳作三加保乃紳也 脱三崎字神崎今不詳

ツ

オホダカホサキ

十一月薩軍侵引掠肥後北郡,攻, 玉名郡日平城, 拔」之

授 宇土顯孝

守トアルハ護ナリ

阿蘇

キ

チ此大夫矢崎按=傳記此役天正十二年トス其誤り十二年ノ條 正忠親廣ト云隈部支族ナリ霜野城霜野村權現

ニ辨ズ叉世錄記二翌日網田城の攻ル事ヲ載然ドモ 嶽ニアリ鎮房新築」之其先基貞内村居城ヲ構

糸圖

宇土郡名和家領ニシテ名和武顯代杵築越 へ鎮房マテ代々ノ所居トス安樂寺玉名郡

詳也

後守今加悅大和守入道素心ヲシテ網田城守シ 山北鄉村名高瀨!東一里許ニアリ

城地田山ニアリ故二田平城トモ云去年春顯孝 此月佐多久政新納忠元河上忠智等討合志隆重隆重

既=島津家=服屬ス薩軍田本ヲ攻ベキ理ナシ故 守竹迫城禦」之伊集院久治先登入中堅於是新

不取 矢崎郡浦村ニアリ宇土全郡 名和家ノ 納忠堯肝付彈正忠兼寛菱刈大膳亮隆商上原尚近等奮

領テレドモ郡浦古昔ヨリ阿蘇四箇!神領 力戰斬一百三十餘級二十三日己丑隆重逐請」降

四神は故大宮司 其將ヲ遣シ其地ヲ鎭ス詫磨 服 島津家錄 十二月十三日戊申薩摩諸將發隈

文書=正平元年大宮司惟時郡浦城ヲ構コトヲ載即

古城主名和武顯家臣

此年島津義久以網田神崎三百町田」

本各還國

世錄記家傳〇綱田家傳作三太田在宇土郡神崎

田原 破 秋八月島津義久自率 大軍討 相良

義陽」分」軍五一軍島津忠平爲」將平田美濃守 光宗上

井伊勢守覺兼本田下野守親貞爲」副陣八景尾是爲三

總督軍島津征久爲」將河上三河守忠智新納武藏守

忠元爲副陣錢龜石二三軍樺山兵部大輔規久爲」將伊

按二比々良公乃千日平也一名花群城 江田莊集院十一

新撰事蹟通考卷之~一片月生海發家人上樓

▲詩=聖凡一等接飽飯姁 其傍丿川丿渡所7旦過瀬卜云 從士皆鬫死

漏接待題|自„隈本 來合」謀進討破」之急攻而陷之,惟冬逖敗死

接待所額ニテ今無漏寺ト號ル小庵アリ

大智力無 | 通路,於」是忠元政幸至 宇土, 佐多久政 河上忠智又

略ヌ

細 大智禪師偈頌聞解日今丿熊府/南:古旦過7|蘇家臣中村伯耆守惟冬與,,八代 通而斷: 宇土 隈本之

11

久之部將新納忠元鎌田政幸屠…宇士矢崎城 始守將阿

瀬ナリ故=名トス今、其寺ァ無漏寺ト云憮漏寺

11

南關記〇

冬十月十五日辛亥島津義

記作 大永五年:今从本書, 1

傳記

七年八月二十五日二十七日, 九州

冬,戰親興敗死資冬親忠遂拔„ 鑑廣之城, 而還 ニハ

11 Th

蒲池鑑廣 時城後親興率 輕騎: 來救„ 鑑廣, 與

カチワタリ

1

1

三月 傳記不: 年月日今姑从九州記

1

宗運作三月十七日,山北莊西安寺記寫

11

攻,高良山逐„座主坊,十七日乙卯資冬親忠又合」兵

千餘,

11

夏四月四日癸卯甲斐親直與,城親賢等,戰,于旦十一日庚戌城親賢與,甲斐親直,戰 于詫磨原 六

系圖 詳也

城下云甲變早川八

過モ出來テ往來雲水接待セシ也

リ

守下云其居城、甲佐鄉豐内村:7ノ松尾城叉甲佐

此等の三河

蘇家人ノ記録ニ從7

寺壽山住シ

二世

東陵光寺別源圓旨給志安國

開山

國原

Fノ類,住山多夕洞家、東明慧日

親昌死ヌ其子 鎭昌四歳執事 甲斐守昌 10誆家政

昌始而入,全部隈莊˙城築未知始

親昌始テ此城居ル

撰一宿サセth

阿蘇古老日記天文十二年五月甲斐親

來往/客僧老少?不

過èノ意

旦過下アシタニ

還住ヌ今從˩之 隈莊城六益城郡 隈莊村7 甲

六旦ヲ専ニス鎭昌早世ス守昌其家跡ァ續テ終隈莊ノ

領主トナル 早川城同郡下早川村ニアリ早川家

國志略ニ秀貞トス全阿

代々ノ居城ナリ 正俊綱誌略三秀トス父永興 嶁岩 接待シテ通ス林古例ニテ禪苑清

ニ出タリ智公在肥後比國守菊池禪學セラ

故濟家:固山一鞏嚦蛹〝石屛子介銅泳總

永德

寒巖門下ノ歷々多住山シテ禪林 榮工^此

過醤月十五日癸丑 大津山資冬 小代親忠將 逞兵 二按:飽田日詫磨:趨/途白河:徒涉尹此7旦

過瀨下云府/南口石塘/下白河入向詫磨郡世安

古旦過/旅僧7 宿冫寺尹其寺/下即 馮

戰記拾集昔語等二後大宮司ノ許蒙り隈莊=

討鑑廣之陣尋而戰于白鳥」資冬猝突

家

破

11

カニテ

此印證今水俣家傳來ス長智カ傳天正十八年!

佐藤才次郎殿

按=傳記:吉秀天文十八年三月十四日戰死トシ宗

テ

五月二十五日

秀吉朱印

邑

シテ

領天师

十日庚戌津奈木城「爲士頭然書」歳三本郷・故今取

トモ

請於宇土 宇土顯孝以大河六彌太成松式部」

傳記以三本郷武蔵守」以松大河

將精騎數百救隈莊

津野山城守正俊」各帥其衆」屬宗運」攻隈莊守昌

年天生城空而不」下惟將又遣早川越前守 吉秀伊

按=水俣/西海濱二月浦ト云所アリ故=對句トス

八年庚辰春三月始阿蘇家臣隈莊伊豆守守昌密依 宇

の浦涙とつけて射かへせり

シム

一月五日今従三停記

な

寄手はしつむ月

いふ發句あり宗方やかて

治

11

傳記〇南關記爲三五

肥後文獻書第三巻

世錄記岩群壘ヲ攻ルトキノ事トスル謬ナリ古

城主考二八九年トッ世録記二八年トス皆混課

リ水俣城水俣市北山ニアリ名和家領ニ

其臣本郷式部大輔家久守」之相良家顔ノトキ水

俣次郎春元が天正,始ヨリ長智守將タリ秀吉征

西ノトキ佐藤才次郎ヲシテ此守シメ凱旋!水

俣津奈木津奈沐城、天証雨城ヲ長智=賜フ

十六年丿條三

土顯孝通薩摩、大宮司惟將聞」之命 甲斐親直入道

宗運」伐」之守昌整」旅而三隈莊城」宗運圍攻其城」

早川吉秀及親族渡邊吉久等與 宇土援軍」會

水俣津奈木兩所之儀深水三河入道之被下候條彼者「戰而死」之宗運
聞」之馳至墼 宇土將大河成松,斬」之

折紙次第候其城可相渡候其儘百姓等刀弓鑓鐵砲本 既而宗運合」兵急
攻」城守昌窮蹙請」降惟將許」之除

主之悉念入返可申候猶木下半介可申候也

詳誌ス忠春カ墓水俣ノ南福寺山ニアリ

十八日辛卯大津山資冬與蒲池志摩守鑑廣」 議而到

筑後松延與諸將」約而瀬高龍造寺家治聞」之來

運軍記拾集昔語永祿八年三月十二日下ス共

非隈莊合戰記二天正八年二月二十八日宗運出馬

三月十日吉秀等討死同下旬落城吉秀墓銘:〇07

庚辰年三月十日庚辰チ天正八年合戰記卜符

合ス傳記=守昌此時討死シ家絕タリ然レドモ合

新撰事蹟通考卷之十一

主考華

敵志五郡/將曹其麾下屬ヌèn 卜前見工薩軍

野鵠巣丿四城ヨ攻 俱二山鹿郡ニアリ城村ニハ嫡子式部大輔

内左衛門本郷能登來隈部親永力隈府城及城村永 長智衝,其方虛,殺,忠春」殘卒恐戰而却

傳記に云深水參河守入道宗方は相良家の家臣な~

マサニナルチ

按三傳記三云此年三月島津)將新納武藏守梅北宮|攻月餘守將深水參河守長智固守攻兵殆倦勞二日乙亥

秋八月先」是島津之部將島津天草,

道開軍散i歸 薩摩i令從 家傳世錄記

家傳世

按:世錄記ń前後混淆天正八年卜又今傳記家傳

從7寶河内ń水俣鄉村名寶今豐/字7書岩牟禮

久木野村ノ丙ニアリ世錄記二久木野岩群!二壘

ドス誤ナリ

ホ

兵,至隈本i

ラシム

宇 土顯孝

記家傳

兵 帚碑記世錄

傳記

記

南關

テ

鎭辭職長子羊

七年己卯春正月大

爲豐前豐 夏四月大津山資冬畔,肥前,龍造寺隆信遣 龍造寺安

後守護業五年薙髮稱宗國

系圖大友記〇義與永

夊宗麟遣 朽網親滿房守家治,討』之資冬據 太田黑城 防｣之家治攻而不

討 城親賢,親賢攻却」之六 宇土顯孝 赤星統家合」謀|克退 筑後 躙* 五月先,是相良之將 東駿河守守 葦

責,隈本城,城親賢與,河尻重兼 約而設 伏兵,内外夾 北寶河内壘 十三日戊午新納忠元 其子 刑部大輔忠堯

擊宇土赤星崩潰而去於」是城氏之勢頗震 隣境

來攻」之十五日庚由遂拔」之叉構,,岩牟禮砦 俱置 成

離島津義久聞」之遣 鎌田尾張守政年,戴作觀清;非也

從_海道|急救中限本,叉佐多常陸介気政爲」將河上參

河守忠智上原長門守 尙 近 爲„副將ˇ 率栗野飯肥之

島津家傳世錄記◎傳記為政年一人,而

一黨又從„薩摩

伊勢守忠春圍 水俣城親安永野八家臣富田家治起 巢八多久宗員

翌八年正月河上左京來り加り九年十一月マデ

攻レドモ一城モ落ザリケレバ圍ヲ解テ引取ケル然

レドモ其頃、龍造寺勢強〃玉名菊池山鹿山本合

中經久兵限府出世錄記等ニモ不

載」之其是否考質形所故三不」取」之者也

紹巴の門人にて連歌を嗜めり天正七年八月薩州勢

島津伊勢守を大将として水俣の城を攻宗方小勢な

りといへともつよく防き勝劣なし寄手∞いたつら

に對陣し寂寞の飾り圍六をうつて日を暮し連

歌茶湯などにて軍旅の勞をなくさめりある時寄手

より矢文の中に 秋風にみなまたかつる木の葉か

委著」之正

代ノ孫也

城村城山鹿郡尾

「五年ノニモ誌」之故略ス

與利莊城村ニアリ菊池能隆!四男六郎隆經後二越

前守改此傍近地顏シ是城居ス故二城ヲ

稱號トス越前守親冬マテ此ニ居レリ親冬天文十九

年隈本城移テ後隈部領トナレリ親冬隈本

11

...

按隈府城正平二十二年條二詳也古城考地志

略等ニョルニ竹迫城志郡上之莊原口二村ノ内

ニカレリ竹迫家!始攝津守師員建久中此郡

内地頭トナリ來テ二子村ニ居ル其所今二陣内

小云其後當城ヮ築テ居館トス是ヲ合志城竹迫城叉

蛇尾城トモ云ナリ十五代孫竹迫公種大友家二從テ

孫筑後在

豐後移住ス栢糖系テ志 伊勢守隆岑

墓城北山ニアリ 永正元年二

此城年代不詳然城二移ンハ永正以前也

是ヨリ合志家全郡領シ兵勢甚強隆重隆咨五

略傳治亂記

傳記九州記

¸可¸保建„降旗¸髡編而乞」命政家聽」之二十一日壬寅

統家退,合志隆重之竹迫城 於」是政家分隈部親永

居隈府城⁂解〃 兵還肥前自是永領菊池郡移!!

隈府城,其子式部 大輔親安徙,居 山鹿城村城 勢威頗

シテ

ルニ

肥後文獻叢書第三卷

此年龍造寺隆信經略〇世錄記賢作政誤

島津義久」

城親賢以飽田磨」降

ニチ

傳記島津世錄記 家傳

按=菊池傳記此年九月島津義弘宇土城攻宇

國志略八十二月トシ其時城内

土顯孝之二從フ

叉義弘

名等詳記ス信ルニ足ラズ

及鎌田寛栖山本郡霜野城ヲ攻テ内古閑鎮房ヲ降ス

島津世錄記九州記等據秋冬大軍日向

出シ大友ト爭戰ス名將勇士皆其役二 顯孝

島津二屬スルコト耳川合戦後ニテ下二詳ナリ

薩兵霜野城攻ル天正八年也蓋シ傳記等!錯

謬故:今不」取之

高瀬小代大津山大野臼間野和仁邊春等東肥北郡諸將

皆屬隆信,炒麵

大友記

不知孰是ı惟前居甲佐

◎阿蘇者大宮

二筑

司惟將也世錄記作阿蘇惟前

治亂記世錄記

兵還三八代與阿蘇相連通盆~結!和親

家傳

固守不敢與戰 世記 義陽聞 耳川之戰薩師 大勝、引

「テトモニ

移ル次第、天文十九年條及ヒ系圖合セ ルベシ

冬十一月大友義鎮及〝島津義久,大戰,于日向耳川,敗

績由」是義鎭稍失權重 肥後將士亦多焉 友

九州記大友

記治亂記

此冬相良義陽乘、虛趨葦北 將、攻 大口城 新納忠元

チニテ

星將下軍,救„長坂 山鹿重安街,其横:破」之隆重財 帥衆五萬 討 赤星統家,十日 辛卯至 南關,徑進圍

引,敗卒,東走重安與,西肥兵,合』軍進圍ņ長坂城, 八統家於隈府城中,統家守 禦無、術衆寡難」敵永察」不

城村城合戰

前後覺書

庶流ナリ

ヨリ

ツカニ

〃

四年丙子夏西洋人來肥後大銅發煩 大友義鎮納

系圖

死類錄

チ

イシビヤ

島津勝久卒彩圖

三年乙亥秋八月二十七日癸巳山本郡地頭内古開鎮資

信長

是信長又握‰兵權, 冬十月五日壬子前薩摩 守 護

年集

續史

昭¸遷諸河内若江 既叉遷」之於紀伊

五年丁丑春三月隈部親永道„„宰臣有動大隅兼元 於肥

天正元年癸酉明”计征夷大將軍 足利義昭敵, 織田信

編年考徵九

内廉章天正六戊寅戼下 長坂城主討死願主淨正寺

按長坂山鹿郡村名隈府西二里餘ニアリ城

俗名星子源

新撰事蹟通考卷之十一

月二日丙戌守將廉正自盡城遂陷龍*家種分 有動兼

シム

元,守„長坂,肥前兵亦以, 其死傷多 引還 西前觀整

長 秋七月據 宇治眞木島,七日乙酉信長攻」之執, 義

迹村内=殘レリ平城ニテ堅要ナラズ廉正カ墓アリ

銘:星子中務亟廉正其餘八字性不分明,叉其南三

町バカリ田睦ニ

町** リ田畦三墓7 リ光雲院壽山居士此墓銘=mu„„城主廉章:落城毛隈府!同天

正六年ナリ然レドモ今姑ク傳記等所二從

上城主中務亟下此年八月下ヌ 山鹿重安、隈部

親永ヵ甥ニテ彦次郎ト稱ス彦三郎重政ヵ子ニテ兵

庫頭重行ヵ孫子代々/居城長坂/西北半里、力

リ山鹿湯町ニアリ阿蘇文書正平六年十月二山鹿城

7載卽 此也小代文書貞和六年四月下文山鹿

彦次郎アリ高瀬源寺山鹿但馬守武者が永正

阿蘇三毛交期四年交軀其 先、菊池

元年三月ノ書狀アリ

三年同人,書狀

前¸屬 龍造寺 請｣討„赤星統家｣隆信素有 東略之志,

故不｣接」 言而許諾焉秋七月隆信遣 江上家種, 爲‶上

將,後藤家信多仈氏冬爲„次將,起」軍討,赤星 赤星之

臣星子中務亟廉正守 長坂城, 拒」之合志隆重 爲, 赤 六年戊寅夏四月
龍造寺隆信遣„„長子 民部大輔 家

傳世錄記天正七八年トス二書フニ永祿

六七年ノ頃、大隅日向ノ敵多/貴久軍7分元其所

カヲ征シ兵ヲ八代マテ發ベキ緩隙ナシ叉家傳二八

代ニ兵出ス事此年始トス傳記課可」知ナ

重鄉機 *入道宗孚居｣之天正七年落城

地志略日長野壹岐守親次玉名郡米野江田萩原ヲ

相

原城 拔_之親次走,,筑後,志

三年壬申春三月三日己丑隈部親永攻 |長野親次 於 萩

按:菊池傳記:永祿五年島津義久其將梅北宮内左

二年辛未夏六月二十三日甲寅島津貴久卒

信臣,扞之合擊而大破｣ 之斬級一百餘鷄0

欽與,,龍造寺隆信¸戰 肥前筑後 也肥後將士多 從, 大

友之軍洲元龜元年庚午國明`計春大友義 鐵與,龍 造

寺隆信i戰 西肥今山 東肥將士城親冬以下多從,大友

九州

之軍 記

ヒテ

▲兵討而殺｣ 之尋而以,其兵,攻 羽月城,守將新納刑部

年

テ

11

賴兼 爲„„守將,島津部將蒲池越中守赴氵　平泉 賴兼出

地頭 鸝4 此年 大友義

韓矇蠅記

十二年己巳春正月先｣是相良義陽取十八日戊子島津貴久其子義久入,大口城, 以 新納

義昭義輝之弟也

日甲午以, 足利義昭爲„„征夷大將軍

乃請-成迭委」質九月十四日甲申大口戍兵退歸 球磨

信長家譜續史略。

戍織田信長奉,足利義昭,入„京師ı偉冬十月十八 秋八月薩軍圍,大口城,累月城中食竭援兵不｣至至」是

キ

,大口城,以深水 部大輔忠元紕姆) 爲 大口大輔忠元肝付彈正忠兼寛討却」之自」是大口城勢氣大

大島津世

緑記

夏五月島津貴遣」兵犯 八代相良義陽出„

衛門ヲシテ葦北二討入水俣次郎春元先鋒

佐敷太郎武門カ城攻テ武門屠シ同六年四

月島津中務新納武藏ァ將トシテ八代ヲ攻シム葦北

豐河内城岩群城7攻落氵麓=來責圍4同八年五

月マデ攻ヶレドモ落ザリシカ引取又云々島津家

此領ヌ親永、親次叔父也國志略:ム始、藤原重点

*居城也天文/比落去其後長野壹岐守清原

新撰事蹟通考卷之十

!錄記

故省之

維義澄之二子而義晴弟

獎二十八日甲

-秋九月義榮卒

11 A

續史略〇義維之子也義

月小無 晦

ml

十一年戊辰春二月以, 左馬頭足利義榮 爲 征夷大將

月晦日, 推,皇和 通曆 五

敗還 隈府】由』是隈部之宗叉興矣

! 傳記治亂記◎ 傳記 作

11

武德編年集成 續史略作二十四日庚申,今从三

セラル

家逞 威柄 蔑 如衆士,隈部親永與城赤星, 爲„ 菊池|八年乙丑夏五月十五日辛亥松永久秀弑 征夷大將軍

ダリルコチ

勢名,膺-大友義鎮併 東肥, 之時, 赤星親家厚」賂謂┬七年甲子夏五月相良賴房寂„從四位下,任修理大夫,

城氏有「球磨郡 投ㄠ 相良家˝ 融

島津世

テ

テ

關紀聞

1

南 關記爲

シテ

以傳記國志略 興廢記爲天文二十年前,非也五年壬戌春三月十三日丁酉宇土行興卒* 此歳日向

大友義鎭遣 佐伯惟敎田原親賢,攻,,伐之 四日辛亥城|家嗣爲,,限府城主 2

永祿元年戊午明定

八日元 夏五月先」是小原宗惟畔,,豐後

四年辛酉冬十月十三日己巳赤星親家死其子周防守統

冬十一月七日甲戌阿蘇大宮司惟豐薨*

藏二年丙辰夏四月十四日壬戌宇土行興叙 從四位下,

等今二殘レリ

弘治元年乙卯計秋八月十二日甲戌相良晴廣卒

云親永力築所嶮姐斗絕丿要地 刂本丸館跡礎

長野城山鹿郡上長野村山ニアリ返城ト

宮殿今尚存矣

所圖系

殿而非ņ舊規之制,

セリ

阿蘇家傳略〇此

ーヌ

陷宗惟自刄. 弘治二年ı紀開作 永祿二年,不、知 孰是,今姑從„„傳記 國 眞幸院地頭北原某死而後其封疆不」穩於」是相良頼

等ı義鎭以„„大津山資冬,爲 藺嶽城主,復 舊顔 離

傳記南

房伊東義祐爭 其地,夏五月北原兼親退 眞幸院 來

二年己未始菊池氏亡而大臣樹"私黨,爭」權始諛義鎮之左右,以」故親家得以爲、主,隈府城, 於、是親「足利義輝授,名一字,改纟 義頼 大成武鍰系圖

後又改„義陽

之三老,封山鹿東郡,城┐居長野, 及 主家絕礻 祀相共 足利義輝 年三十三號光院 法砦勤順达大臣。

爲„大友之麾下,亂此年隈部與, 赤星 有|故構|隙且「十年丁卯夏四月先,是薩摩大口地 頭菱 刈大 膳 亮不

恚 赤星擅¸權欲 舉」兵討|之親家聞|之大怒自率』兵 從 島津之命 島津貴久出,兵屢攻|之至,此菱刈失,勢

往而攻„„長野,夏五月親永逆擊而戰,于古川 親家大 逐遣.使納 欵於相良義陽」義陽乃遣」兵救援 島津家傳

關城ń臼間莊 關村 大津山丿藺嶽=7

フト

八田尻文書鑑元

按:地志略:宗惟、玉名郡臼間莊小原村2人也城

善光寺山ノ上ニアリ居邸趾陣内宗惟

山嶺有」杉蒼然如 嬰兒之總角髪,其中有」池是謂”

鎮護國家山,可矣

二十年辛亥秋八月大友義 鎮嘗合,,,,五國之師 二萬三千

衆,大舉自討氵 肥後之將士未」服者 其部將佐伯惟教志

賀親守朽網鑑康等齊前而征 合志,又轉、兵擊,,飽田

詫磨宇土谷城等,所」過城砦皆望」風讋服自」 是威名日

君豪族景 從九月遂定 肥後¸略傳轉記治亂記沿革圖

九州記大友興發記

以豐

後岡城主志賀安房守親守 入道道輝 爲,, 肥後國 守護

代 小原遠江守鑑元入道宗惟爲,,,, 肥後目代, 赤星安藝

守親家入道道雲爲,,隈府城主,預,, 菊池之領地

宗惟居肥筑`界關監氵 檢兩國 韓

母/墓7 刂興廢記=宅鑑元八多年肥後南關)佳人

也下早夕大友家:從元一方丿將帥卜+9屢戰功尹

リ其累功ニヨリ今度大津山資冬カ所領ノヲ舊土

傳記ハ三郎左衛門トシ國志略ハ

増封丶關城=居 4 詁前門不令黨誌宗惟

大膳亮トシ宗意トス今遠江守宗惟

チ

テセ

ナラン

フ

ナリ金峰山活龜莊嶽村二屬ス一郡鎮山タリ頂

三藏王權現/祠7 リ活所遺稿日山有 府城西一里

肥後文獻叢書第三卷

二十三年甲寅前肥後守護菊池義武隱„球磨郡,大友義

鎮聞、之遣、人迎捕之十月義武於三豐後國直入郡,自

傳記治亂記 此歲修 阿蘇宮 阿蘇

¸Š 舊制 神宮 每„„三十三

改造文龜三年以後因 騷亂, 遷, 座假殿,

年,賦„棟別

宮五十二年至」是大宮司惟豐分 甲斐親直 改引造之,然略

レトモ

1 メル

主考

記

古城任,,修理大夫,标辍卲稍

冬十一月大友義鉽還,,豐府

二十一年壬子夏五月二十一日丁未宇土伯耆守行興

所藏口宜

傳記九

州記

及按二大永享祿比ヨリ國中大略大友家二通ス此

二至テ一統ス將士名!上二親ノ字ァ冐者アリ皆大

友家日一字7與7元丿名也城親冬赤星親家隈部

親永小代親忠志親爲鹿子木親員阿蘇家臣甲斐親

直等ナリ餘推テ知ベシ

云也

津山河内守資基築」之代々丿居城下ヌ七 世丿孫河

守資冬去年大友家背テ城ヲ攻落サレ神尾城

能ル 南東二里バカリ大田黒村ニアリ大津山家ノ掛城也

以下天正十六年丿條三記入大津山家丿事尚系圖 詳也

薛岳一名巨鶴山小象山下相對7久重村訪諏神社記日東遙拜阿蘇

嶽南小代箇嶽西久重獨鈷岳北松風藟嶽叫神靈地也松風、大津山

故:藟嶽城下云叉南關 城下毛云也 應永三年大

小代文書二田島伊勢入道鹿子木三河守ト

シ傳記二八田島右京入道宗以鹿子木親俊トスレ

カ確實ナルコトヲ不」知田島右京亮重實ト云諸

書=名アリ伊勢守未ダ見所ナシ鹿子木、三河守親

員入道寂心其子民部大輔親俊其子次鑑員アリ皆隈

本ノ城主ナリ一説:寂心此頃世塵,避テ楠原ニ

寓スト云リ甲斐宗運同姓甲斐親英二送〃書中=

子木寂心ノ孫鑑員毛惡行人故被」刎」首候叉亀田郡

柿原村圓德寺跡!草堂=位牌アリ圓德寺一清寂波

大禪定門天文十九年八月十五日逝其裏鹿子木次

郎鑑員嬰災ト銘ス是義武沒落年月也然ドモ其故

不詳諸書及明徵ナシ故二本文唯家號ァテイ」名

姑〃識者ノ見解俟ノミ隈本城今府城郭中二

ステ古城下呼ブ其初詳ニセズ古城主考=菊池家

譜》引テ云菊池四代經宗甥=出田經信ト云アリ

ノニヨルトキチ義武隈本城沒落此年八月

中旬ナルコト明也故二今究テ從」之叉古城主考

球磨=往キ相良氏ァ賴テ蟄居ス 田尻 家記二

龍

亦同、之

島原赴トス然レバ始嶽村ヨリ便路就テ河內

至島原=渡り後八代來テ相良家ァ賴テ球磨

・赤タ孰レカ是ナルコトヲ不知秀信出田系圖記ス 其

後鹿子木寂心飽田詫磨玉名三郡內ニテ五百六十

町ヮ顔シ當城=居レリ大永享祿,比全盛,人也其

子親俊代城,城越前守親冬二讓テ上代城 移居ス

地志略古城主考上代城飽田郡高橋山ニアリ故 高橋城トモ云

城郭上代村ニカレリ地志略初家臣今福民部左衛門城代々

リ○國志草稿=天文二十年城ヶ城氏ニュヅル國志略云寂心子ナシ

故二城親冬ニ讓ル親冬ハ寂心力也九州治亂記寂心大友勘

氣セラレ領知ヲ城氏ニ身寄テ世ヲ終フ阿蘇古日記二天文

九年牌子木親俊病死又前誌ス宗運カ書簡牌銘等ヲ供セ考ル二親

俊天文九年父=先テ早ク死ス故二其子鑑員相嗣テ隈本城ニタリ

此役鑑自田島等ト議テ義武我城二迎ヘ兵ヲ集メ將=菊池家ヲ興

ントスズシテ以下往々見下城

十五年マデ在城ス

山上三名田尻牛

鹿子木裝系

島内田三家金峰山西北麓二八村アリ是ヲ

山上八箇村ト云右三家領」之故二山上三名字ト云

一六九

タリ

考｜城親冬其子越前守 親賢其子十郎太郎 久基天正

兵破と城陥サレ終二祖父寂心誅セラル 寂心楠原

=屏居シテ預ト云ドモ此亂因テ大友二氣セラレ家跡城地

ヲ城親冬ニュツリ寄セシナルベシ然ドモ其他校合ノ書+ク取決

トヲ得ス今姑地志略等俱布ノ說二從と私說附註シテ後ノ

トゲ

志略=此時ノ城 ハノ千葉城云古城ハ寂心力築ヶ所ナリ

ス

經信十四代!孫出田筑後守秀信始テ隈本城

先日强分啓候不預御報無曲候雖然無異所砌候條無

餘儀存候如御存知國中宗徒之衆改先非可勵忠貞之

由候條始中終以閑月肝要候於于今隈本退治可為

一兩日中候然者海陸之通路之儀稠加下知候彌不

足樣了簡無油斷候可被得其意候殊御筋目無御隔心

田尻文書

一萬田勘解由允殿

義鎮判

七月十三日

就今度義武退治一萬田次郎以同心分在陣軍勞感悅

候彌可被勵忠貞候事肝要候必追而一段可賀之候恐

一萬田文書

志賀安房守殿

義鎭判

六月二十八日

就今度入田信濃守惡行顯然加退治候刻以無二之心

底從最前預馳走候故逐誅伐候本望候然處至肥後國

義武現形之候條打續在陣軍勞御忠貞誠感悅無極

爲其賞入田拾貳名 之内三拾貫分附在事 預進 之候

可有知行候恐々謹言

肥後文獻叢書第三卷

志賀文書

按:傳記丿說;年代事實相違戾ヌ取採所氵古城

主考以下、實錄互:相符合ヌ以示徵ヌè足然

トモ古城主考田尻家記唯年有テ月日ナシ諸文書

八叉年7不」載滿願寺/文書=閏五月刀y和

通曆推實二此年五月二閏アリ然レバ八月九日

1 田尻文書於"于今|隈本 退治可」爲"一兩日之

中,又同月二十二日)小代文書:隈本落去之趣云々

小代殿

義鎭

八月二十二日

隈本落去之趣具示給候得其意候然者大野要害之事

實忠以一力去+1被取崩之由候乍不始儀誠祝著候

同十一日大津山敗北候哉彼惡黨共不討留候事無是

非候

11

小代文書

御宿所

田尻善衛門殿

佐伯治部少輔

元

八月九日

小糸遠江守

事候間於向後無他事可申通事本望候時々重疊可申

候恐々謹言

今度別而可被勵大忠之由以田尻伯耆守承候無別儀

順儀之地盤誠:感入存候然者諸勢出張之儀片時

雖可差寄候至隈本一行申拵旨候且者諸口堅固ㄷ相

調義武不拔足爲可加退治遲々之樣候於于今者方々

分治定候條近々隈本人可向人數候此節實忠深重以

馳走其國永代靜謐之才覺憑存候扶助之儀嚴重可申

談候度々如申候義武以折如此惡心之企古今無比類

候之條可討留調儀寸心無油斷候被得其意可被抽忠

新撰事蹟逷考巻之十

諸文書義武事ヲルモノ左二著テ徵證トス

小代文書

に押寄三名字と合戦牛島三郎左衛門俊政討死す去

と終に豊後勢を追拂首數百六十五討取る山之上

三名字の一族上妻新右衛門下田五郎兵衛記初上下

二十一人討死す打取所之首は一所に埋て塚をつく

金峰山之地なる道の畔に大なる塚あり其通之下名

を首塚の本と唱扨又金峰山之南の曠野を今に大將

陣と號す其後義武の御父子は牛島俊政か一子彦五

郎案内仕河内浦より島原へ御渡海有彼地に二三年

首塚銘隱 溫 泉山之

御帶留御上洛のよし云々

上其他無 異故略之

1六七

滿願寺御同宿中

就義武退治之儀小原遠江守至其堺出張之段申付候

之條諸勢急度可越山議定候每事可預入魂候肥後國

可任所存事不可移時日候於彼國中一寺可預進之候

在所柄被相開目重而承以一行可申候恐々謹言

閏五月十六日

義鎮刋

小國滿願寺文書

小代殿

義鎮判

五月九日

今度其國亂者之濫觴、田島伊勢入道鹿子木三河守

以惡心義武取持之條國中者雖不可有差事候一旦之

動亂茂非無其煩候無是非候然、彼三人可加退治段

稠敷申出候就夫實忠事對義鎮無二之御覺悟從最前

無變化承候感心無極候爲其賞判形調進之候忠貞次

弟領知之事;可申談候近日眞光寺可差遣候條諸勢

越山日限勢分等之儀可申之旨猶年寄共可申候恐々

謹言

小代殿

義鎮判

儀事肝要候猶委細親種可申候恐々謹言

卯月二十六日

.

L

は金峰山の南廣野に陣をすゑられ軍勢は嶽村

山上三名等要

田尻家記曰天文十九年庚戌菊池義武大友宗麟 御

シテ

球磨郡至り相良氏頼テ蟄居ス

又日義武か子犬房丸は老臣田島右京入道宗以方便

萬松院i法名道漁贈ı

四十シテ

,

所

十九年庚戌春二月十二日丁未 大友義鑑爲„家臣 津

輝

十八年己酉秋八月十四日辛亥阿蘇大宮司惟 豐 從

二十三年

叙„從五位下,任右兵衛佐作四月二日,令本書

系圖大成武鑑O歷名上代

十五年丙午夏六月十一日丙申名和武顯卒 秋八月

十二日丙申相良義滋卒 冬十二月二十日癸卯足利

義晴致仕以其子義藤,爲„征夷大將軍,嫁璐鉽德編年集成

改傳記日天文二十年大友宗麟肥後を打從へ義武をし

菊池の家をしめ同二十三年義武を殺し其家人

赤星親家を以て菊池の領知を預らしむ

十四年乙巳冬十二月相良義滋叙,從五位下,其子晴廣

11

塚銘

口宣

三位,

嶽村首

|家記諸古文書

十三年甲辰秋九月十六日壬子 阿蘇大宮司 惟豐叙„從内】漁舟 往„肥前島原¸藏„身於溫泉山,

身於溫泉山,沽诚往如祝

之於金峯北野,拒戰牛島俊政死」之於」是義武竊至河

11

ミフ

肥後文獻證書第三卷

義二位號見某,所､殺躪大 夏五月四日戊辰前征夷大將軍權大

納言兼右近衛大將足利義晴薨 咳譜室町日記武德編年集成○

臥, 六月十九日辛巳菊池家元老隈部親家死,秋八月

前」是田島某 鹿子 木 某 擁 凱立菊池義武„作亂據„„隈本

城 中旬大友義鎭使 小原鑑元 佐伯惟教等, 爲」將率

衆軍 攻之義武遂不｣得‶防守, 潛出 城壁,走嶽邑

逭 田尻駿河守家,大友兵二萬騎追」之をもつて隈府よりぬすみ出し鹿子木親俊と心を合

せ赤星と一戦を企けれとも國侍過半人質をとられ

心心になりけるゆゑ是非なく肥前に行有馬修理太

及び天草の志岐林專天草伊豆守を賴居たりしか

後には薩摩に至り島津義久を賴蟄居しけるとかや｣

古城主考田義武其後國中諸士ノ請:應>天文十九

年隈本城寄居セラレタル事モアリ然レドモ大友

義鎮應スル人多有テ義武攻義武隈本出テ

取合にて義武御計負一百騎斗にて嶽村に御落田尻

駿河守宅に御座ある大友勢二萬餘之軍兵を率

大將新撰事蹟通考卷之十

ニン

テ十五年也長狀天文五年二著ス所其頃義宗八代

僑居ス相符ス據之トキ則+古城主考ノ載

ル所益以テ信ヲ取ニ足レリ故二今從」之傳記編次

ス俱=其出所ヲ知ズか古城主考:甲斐

家譜》引テ永正十四年大友義長御船五百四十町ヲ

甲斐親直=與7然ドモ御船始ヨリ阿蘇ノ所領=

一六五

按=古城主考:義宗永正十七年二嗣立天文三年マ

替前々之樣無之由承及候無御心元候重朝機能

御代之事は慥に覺申候此方一家譜代之年寄共に賜

候御書さへ殊外御懇懃に被遊候于今相殘候之條適

¸統宗國訓相同故誤而

當時

八代え被移御館候之間

「已然則此後改義武

彼御老者ぇ披見可然御座候するる哉

按=御船城、前二興國六年ノ條ニモ記」之阿蘇文

書寶德!北御船惟安ト云アリ房行安房守ト稱

ショル

十年辛丑冬十一月益城郡御船城主御船房行瓴 阿蘇

八年己亥春二月二十三日壬戌阿蘇惟前叙從四位下」

洞然長狀日此年月從守護之御札等之趣何と哉覽相

武ト改幺義鑑/令弟ニテ義鎮入道宗麟/爲三 叔

父ナリ後=豐後二叛キ父兄!思ヲ忘レ敵色ヲ

立謡人ノ言不」察木野親則誅殺ス親則武

功ノ譽アル者ナリ自義武歸附人少クナリ

終=他國=奔逃シ流落無聊身トナレリ在國十五

年下云リ

名

其子惟富叙, 從五位下 2 夏閏 六月十日 丙子菊池

家老臣隈部貞明死縣

按=惟前大永三年薩摩ヨリ堅志田來り惟豐ト勢

箏と阿蘇家二二分ル等ノ事皆系圖=輯載故二此

略ス

張口宣案

古城主考日永正十七年大友義長其子重治以菊

家ァ嗣シメ二十五代屋形ト稱ス後二義宗義 五年丙申冬十二月二十日
辛未阿蘇 大宮司惟豐叙従

阿蘇家所

此日阿蘇惟前三従五位下」

リ誕忘採不足

義鎮義武をにくみ豐後によひ搦捕て首をきる

連串セズ無稽説固ヨリ信ズベカラズ國志異説ア

四位上阿蘇惟豐遣長子惟將,伐之甲斐親直爲軍帥, 既而

率衆兵」至道坂城郡房行迎來而戰 木倉房

行敗死十日壬辰親直收,,御船而還惟豐賞 功貺御船

城於親直 覺書〇傳記不」揭年月或及

【永六年者今從三本書」

爲, 永正二年在非也此歳據治亂記

の諸士うとみにくむこと甚し其後子細あつて大友

傳記曰天文二十年冬義武菊池家を繼候其後國の仕

記

11

族悉屬 大友家 治亂

二年癸巳菊池義宗續 菊池家,而後驕傻不.恤,國事,

【养滋;以下據 長狀,

自」是國無,,守護 麾下之豪

池武包卒,,,於肥前高 傳記

古城主考憑: 相 系圖

天元年壬辰明春二月十三日壬辰前肥後守護菊 三年甲午此歲菊池義宗遯,, 隈府館, 憑,, 相良義滋, 而

א

コトヲ不知

南關合戰:重創7被木野三歸死ヌ隈部系圖

週 冬圖!

織

歷名土代〇本書誤

家:讓宁宇土四年辛卯春三月九日己亥菊池重治叙 從四位下,任左

亨祿二年己丑修 藤崎宮

城 居俊ガ書簡ニモ

此城阿蘇文書給圳永祿元年

藤崎宮

「在 上京極鞍馬口北

代郡、名和家ノ所領永正元年相良

チ

武以来ハ名和家領ニテ正平十三年名和顯興八代二来り家

傳記 親

於北郡水俣,

生害

七年丁亥敕建,,筑前大分系黼台則 何Lノ所/領主夕〇年五十

五年乙酉春正月十一日辛未相良長祇按二親則對馬守ト稱ス木野但馬守相直ガ子也

夏四月九日相直力傳菊池

之傳記ノ説可」疑本據考所ナシ後人之ヲ訂セ

己酉前征夷大將軍足利義植薨 于阿波國,

系譜續史略宮 肥前千栗宮、肥後 藤崎宮

薩摩新田宮、大隅正八幡宮於山城小山莊,稱„五所別

山城名勝志神祇拾遺

兵衛佐, 足利義晴授„„名一字,改ņ義宗60十一月十一日辛酉相良長定生
害書系圖

ﾙ*不」詳八代郡大野村ヲ領シ高塚城二居ル其父相直大野

窟修ス是其證ナリ二大野高塚城又吉本坂トモ云ナリ建

高塚城大野吉本二村管内ニア

木宮内左衛門吉廣7城番ト7天正頃八相家將東上 野介其子

歸鄉助守然F盼八:徒步明應天文/比木野家大野70

ス尤疑ベシ國志略木野彌次郎親政菊池郡木野

鄉八十町,領シ木野隈部親家ヵ妹木野親則嫁シテ親政生ス據」

之

トキ親則赤木野領主ナルカタカ是ナル

淫佚不､務„„家政,且不」從兄大友義鑑,以」是國中旗下

多叛而歸 大友,此歲氏族木野親則數*諫」之義宗大怒

”`傳記略傳古城主考治亂記●國志略

斬」之自」是群臣猃* 疎矣

置に心をかけす暴逆の振廻とも多かりしかは國中

按傳記二武包沒落》大永三年トシ重治菊池/家

天文二十年大友宗麟肥後ヲ定後トス然ト

キハ則チ菊池家主ナキコト二十九年可疑重治天

以前ヨリ往々名出タリ下二見ユ傳記ノ課り知ル

大友阿蘇二家彌盛也闕

終黜,,武包 請氵 大友義鑑 立其弟重治,爲亅主重治續

傳 記略 傳 治亂記

此年據 古城主考

自亅是菊池家滋

菊池家,爲,,肥後守護

11

菊池武包孤弱昏愚而將士不..親附,此年群王宗室議而

ー乄

十五年戊寅夏五月十一日己酉前球磨郡地頭相良長每

卒 秋八月十一日戊寅大友義長卒

十六年己卯夏四月四日丁卯島津忠隆系

十七年庚辰春三月十二日庚子大慈禪寺火時

惟前一戰敗潰而與,父惟長,倶走 薩摩

長後賴相良家;而父子來 八代,寓 河田

系譜傳記古老

田書

遇」之甚優終募 土豪¸擁 惟豐將„„ 其兵,掩┐攻矢部

シテ

ニリ

十四年 丁丑 阿蘇大宮司 惟 豐討惟前破」之逐還„„矢

部,惟豐在 鞍岡,有˩年鄉士甲斐親宜以 惟豐, 爲˩主

11

義長遣„眞光寺僧及鹿子木親員田島重賢,和引解之一冬

十二月行成版

播磨運トス認吒宗 運 此年忠力時y武包當城:楯籠ル其故不審叉武包

謀ノ企7、菊池家可以征」之阿蘇惟豐兵7遣伐

一六三

著之

親泰>十三代此三居L* 大永比一小代重

發源

俱 小代重俊此城ヲ築テ居所トシ其子重泰ョリ

嶽城 玉名郡野原莊小代山/枝峰筒嶽=7因

小代山始、黒摺山下云寶治中小代重俊野原莊/地頭-爲

テ來住セショリ山ノ總名小代ト呼小代本武蔵國入

間郡郷名ナリ重俊五代兒玉相行小代郷ノ地頭トナリテ

代家トス小代山郡 西北ニアリ 多山勢起伏

峰

蟠根三里餘名所和歌手引-肥後ノ國黒摺 Y硯川長須腹赤八浦

キナリノ源此山二出故二黒摺川ト硯川黒摺 名

筒

其證甲斐系

著之

九歳淇證柙變系 深夕考狀元ノ說也故I改」之 按=本書親宜ヲ宗財

然F宜

三年癸未春菊池武包據„筒嶽城¸擧、兵阿蘇惟豐臣

甲斐親宣,擊之三月二日癸卯武包逆戰 大敗 逐脫、城

走„肥前高來 0

二年壬午春正月十九日丁卯大友親治

征夷大將軍,史

,立」之時年十一黨史略

時於冬十一月 義 晴拜

家譜系圖

大永元年辛巳明計 春三月征夷大將軍 足利義植奔,

初名義材後更 夏六月細川高國迎 義澄之子義

心+丿其說詳三天文三年,條:誌」之

八月二十

豐福之間

秋八月八日丙戌前征夷大將軍足利義澄薨 營守山,遣軍將,攻〃豐福城,
城兵防守相持 數月大友

一里許宇土

長每又親將兵往宿,

照取〃豐,置〃戍兵,於是相良

戰,于久具川,豐福兵敗績殞」命者七十餘人

八年辛未夏四月二十四日甲辰豐福之守兵與三宇土軍十三年丙子頃間
相良家失」勢封地稍*綌乘」變 名和 長

守護記九州記

之東南八代郡下松隈村”

義長嗣爲今泉在麓城

十二年乙亥相良長毎辭、職隱居今泉,子長祇嗣爲球

七年庚午秋八月六日庚寅大友親讓家於 於長子義長

系圖大友

キテ多ク大友家屬ス

長狀

系譜

蘇萬休齋 張

「部作 堅志田 非也年月據傳記

武經改, 舊名惟長, 稱 阿

11

司

1

傳記系譜坂梨惟延筆記◎傳記矢¸

岡,武經奪„„頭知,以„ 惟前 爲 神職 惟前自稱 大宮

按此文書:據考è三大友義長菊池家丿變:乘

阿蘇殿 永正六年也

十年癸酉春三月十一日庚辰武經及子惟前 率氵 薩摩國

テフ

十一月二日

長判

言

爲 菊池嗣君,武包封 爲„肥後守護

傳記略傳

セラレデ

可爲御同前候佢細定對御使僧年寄共可申候恐々 饉|部親氏長野運貞內古閑重載等奉 詫磨武安之子武包,

カ

事不付手候條御察之前候1日記此國先以無事之門目其方「洩惟豐遣」兵攻」之武經脫走 薩摩

是隈

シテ

代々忠節之仁叉、降參人相交之樣候間惣別所帶等 豐 圖、復氵 社職¸阿蘇家臣亦有,結附」之者,而事頗露

阿蘇系譜古老、

往„阿蘇¸密逐 惟

11

モ

センチ

年據阿蘇古老日記

テ

經終怖、難遯,,隈府

ニテ

ホシイマニシテ

牠武經去,, 菊池, 還 阿蘇 始武經自、繼 菊池家,

阿蘇殿 永正五年殿 七月二十三日到來

年三十二法名旭山號, 法住院i後贈 太政大臣

七月十七日

此歳肥後守護菊

親 滿 刊

續史略〇家譜作三十四日,令从,本書·義澄薨

11 =

肥筑兩州輒任所存候其方一人可爲御大慶候然者於

高良山分逗留彌方々靜謐之段申談候就中三池郡内

御 神領之事示給候 老 體 治 可申聞候當時依武略

暴 而 不､務國政,以｣是麾下乖離諸臣亦背疎矣武

¸¸ 傳記略傳阿蘇系譜此 3

下田覺畫於眕自ラ兵ァ帥來テ筑後高良山宿營シ國士誘

招ヌ東肥/北郡筑後丿諸將此時菊池家冫統下7乖

滿家院等兵,來襲,矢部館, 大宮司惟 豐退 日向 國鞍

„„豐後

磨郡地頭 系圖長狀○

新撰事蹟通考卷之十

IKI.

察存候委曲期後信候恐々謹言

定可分達候恐々謹言

阿蘇文書

就三池郡御神領之儀以前申承候條委細示給候得其

安國寺過去帳

阿蘇文書

十七日丙午前肥後守護菊池政隆於 合志安國寺 自殺

系圖傳記略傳

筑州御渡海以後於國中滅亡候

尹相傳曰間莊司某方植水所也下

政隆様一節二見え御逗留候て八代にも御光儀候如

按:隈部、今1隈府櫻馬場、玉名郡上村=

洞然長狀

生害以後一國悉被任武經所存云

阿蘇

大友親治 遣兵

「續史略 長

征家谱系圖

テ

六月大内義興奉, 義尹 ¸„京師 秋七月義尹 再補

略引

利義尹議, 在騙之黨入寇,京師,將軍義澄走 近江

永正八年朽網兵庫頭親滿贈 阿蘇山衆徒中 書

櫻馬場,攻戰而冑政隆廟汜数嶆

五年戊辰春二月十五日癸未島津忠昌卒嗪 夏四月足

蘇文書

誓書

朽網親滿率」兵次 筑後聞」之叉旋」兵陣 肥後臼間野

連判

ウスマ

隈府 繼 菊池家 爲肥後守護 改,,名武經 小應之乃挾 政隆,討,,武經 既至肥後 閏八月 大友臣

略傳傳記阿蘇

既至肥後,

チ

ユキ

11

蘇大宮司惟長,爲』嗣君」其父惟憲聽」之長誓女返書案

親 治

判

七月十九日

傳記略 阿蘇惟

ユルス

冬十二月遂廢,,政朝,城頼岑隈部武治赤星重規等八十 阿蘇殿 永正五年號,此明卅三日於矢部到來大友股狀御

高着安養寺

四人以連判誓書,迎,,惟長i惟長乃讓 祐職弟惟豐,如

筑後 密集」兵舊臣 城政元 隈部鎭治

六年己巳政隆在

夷大將軍,奏解 義澄官職 欟史略

懕 筑後,先是趨,,葦北|寓二見

永正六年政隆叉現形之間拙者如肥後目分出張以臼

間野櫻馬場陣取政隆搦取隈部衆阿蘇衆渡之間政隆

此歳菊 池 政隆

心候彼堺未斷候趣御存知之前候今程兎角雖申合候

諸篇難有其實候爲政隆對治近日至彼面一勢指遣候

間以時分御覺悟不可有餘儀候巨細對御使僧分申

筑後國三池郡之内御神領候哉就夫御使僧之趣府内

致取合候巨細定而直可申入候於以後彌不可有無沙

汰候仍如仰小代筒嶽之事對治之調法最中候御同前

故アルカ考ベキ明證ナシ

11.

元德ョリ正平ノ比:至り宇土

神山村ニアリ其始詳ニセズ

宇土軍記宇土製城八永承三

カホヤマ

年中關白道 隆築」之然

藤原道長德元年ス永承三年ヨリ五十二年前ナリ道隆此國

來ル實緣見所ナン疑ペシ宇土郡中ノ神社=八道隆ノ勸請ト云多

シ然レバ道隆此郡ニ於テ

11

剧于此, 宇土城、宇土郡城

久壽頃源爲朝姑居」之其事記 年

ラ

岬ニアリ甲佐文書守富莊地頭木原太郎源顯實カ承

¸地頭據 盛眷延

安三年正月2寄進狀

其子木原 太郎實

元三年正月請

澄力承八三年正月十八日)契約狀7y又東鑑:治

承五年肥後人木原次郎盛實尹其後/城主分明

11

按:島一揆下;天草黨 云 八 仁 未、詳惟長 父子;

又用

惟乘˵惟長也 木原城、城守富莊木原山!北

隈部之致參上彼是逐御禮猶深重可得尊意之由候之

處同三月急度御遠行之條誠ㄷ無念之次第被押愁淚

候政隆橉御相續之儀被仰置候國中樣々亂候至宇土

8城右京亮爲人體雖被召置候是沒落候如此之條

阿蘇邊之手振相替候樣候結句一兩年之中伯州宇

土之被打入候然者豐福格護等依難事成先被差捨候

之條四五年者荒終候

肥後文獻叢書第三卷

文書六箇莊本領長講堂御領於 地調所分者先度爲:料所:宛

行宇土壹岐守高俊,畢又正平十六年六月阿蘇惟澄申狀宇土壹岐入道

道光云々 ●宇土三宮神社弘安正應頌藤原隆年力寄進狀願交等

カリ高俊隆年國訓相同然レドモ弘安ョリ正平十六年二至凡八十年

餘不 長壽 非 此人,〇國志略隆年隆光林原隆朝 木野武茂木野武爲

道間武門平元年之條 其後顯實等老臣二年乙丑秋九月元老重臣相議連
署請-廢„„政朝,立 阿

帥之略 將士頗不」服熱蠟

朝後:政隆行

系圖傳記光福寺位Ⓡ銘

11

依,能運之遺命,也戲 政朝爲、人暗 劣無 將

系圖傳記 政

相議立. 菊池重安之子政朝, 爲、繼爲„ 肥後守護

1

長狀作:三月,誤寫所致

此月十五日丁未菊池能運卒

三月

千田英朝等相綴テ宇土城居ル

文明交黿比宇 土彈

本穩ナラズ眞始考ヘ回故ニ附註ス

異本菊池系圖爲 宇土掃部助忠豐之養子,

正大弼爲光

此城

實菊池持朝四子也傳詳 于菊池系圖:

居レリ爲光被誅家亡後城右京亮爲光當城

ノ藩鎮タラシム能運卒シ政朝嗣テ守護トナルニ及

テ隈府亂レ爲冬菊池二還ル根此歳名和顯忠宇土ヲ

領シ木原城ヨリ此徒以來代々ノ居城ナリ

11

K

五日宛西探題北條修理

亮英時力下知狀中以 宇土三郎高俊·尋問實否之處云々及阿蘇

11

11

詫磨衣書元德二年六月

壹岐守,含高俊入道道光下云y

六

跟通考卷之十

狀十一月相良長每連營圍 古麓城,

テ敢

長

守護職中文路也然L;能運隈府復還實訊九月二

古城主考等校 定不」精因亓九ヨ訛十トヌè

考訂由ナシ故二今古城主考等所載

テ窮セス

龜三年九月二十七日領知ノ事:就亓能運/書

按長狀二爲光父子隈府二於テ生害意ニテ

高瀬宇土ノ戰大見ニテ斬戮セラルル事ヲ不載其

所、記當時傳聞ノ誤乎尷吪 阿蘇ˈ文書 二次

【大見二村之間:

能運樣輒御入部候一節爲守護爲光御息重光嫡男宮

滿殿隈部と御座候き以上三人え御生害候而國家悉

能運樣屬御手目出成行候

然間爲御合力嶠一揆中皆同被仰付候之條八仁共自

身乘陣候此上猶於守山從國中一勢被差遣候阿蘇惟

長父子於小川在陣候惟乘舍弟竹原殿爲人體諸勢麓

台乘陣候如斯方々雖詰陣候敵城相堪候之條從隈部

爲御使正觀寺之塔守東松軒下向候而敵城之被仰繰

候之間終被任上意顯忠父子拜二月七日落城候即時

長每在城候豐福之事《同然知行候然者不經時日必

舊記寫 于系圖

原城,於」是長每永領 八代, 古麓城, 顯忠又遷 宇

洞然長狀相長家記蜂須賀舊記〇長狀六日作 七日|今從 蜂須

賀舊記 徙 木原 據古城考八代 事跡考,此年又遷, 宇土城,

據„„蟛須賀舊記 1

1

土城】

11

11

守防」之能運又遣 東松軒之沙門於八代 分,顯忠;讓

城邑長每,顯忠應」命二月六日戊戌顯忠下」城而從木

チ

永正元年甲子昨 * 春菊池能 運發 加兵 救, 相良長

小川,又爲,"介援 名和顯忠

每,阿蘇惟長將」兵來陣

編年考徵八

新撰事蹟通考卷之十

阿蘇邊之仕合更以大篇之由相聞候敵城之體∞急度

原之被付陳候同霜月城方角近被取詰候其陣中之間

洞然長狀日翌年龜三年）八月叉八代之打 渡先萩

傳記略傳

洞然長狀日同戌年八月及八代押渡至 大田溝 松

古城主考

土城;爲5

阿

云則手必雨元土人以亓候下又松尾八今八名干廢

按:國君、卽季能運也重岑、城爲冬子重安、安

アメブ

故ニ萬福院

名トス

拜進阿蘇山

上龜元年 5 七月七日 越前守藤原朝臣重岑

ル

ナフ

而已誠恐誠惶敬白

皆門

按三大田溝、古麓城之刻

#11

丁门 之様不見得候之間同十月以開陣高田城

如｣指:掌得」勝重安南陸奧守 爲治東重 楝千田 英

爲始黑木爲實 溝口資淸西牟田重家井弟高橋以下

無„殘所¸討捕强兵各獻,數百之馘,是將臣等依

逆謀,不日屬„昇平, 者乎忽大明神之擁護明鏡也 仍

當國益城郡小野村 之内重峰當知行 十四町 八段謹

奉„寄進|者也矣專祈一仰國家淸安累葉繁茂之全盛,

引籬候乍勿論倍々方々武略候殊更阿蘇惟長別而

懇望候天草一揆中之從是色々被入手候少々入眼

丿下西南:79曾經熊河7

南二引,高田溝ﾄ云北二引大田洫ﾄ云水口斗門

啓閉入是7蜘手械1云代中南北數頃/田

此水/畜所磧7遙拜製下云河2南岸高田井手

遙拜丿神社尹!磧1名之:因叉 白鷺 灘下名/

一名7鸞尾域下 天氣 霽爽~ 云F吒此 瀨鳴下半

云ドモ此

ヵ子俱菊池系圖=詳ナリ此文書ニモ能運高來=

漫步トヨ不」載叉袈裟尾原合戰,起發 等他書 三年癸亥夏六月十二日
丁未阿蘇宮火 镧燃 秋八月相

未｣見」之故二附亓考索便入熊耳山云正觀寺/山「良長毎叉督„諸軍,來屯„萩原||| 冬十月城重岑 隈部運

號袈裟尾原隈府西ニアリ玉祥寺原トモ云ナリ 治起„義兵,迎„能運於高來爲光聞」之親率」兵往逆

二年壬戌秋八月相良長毎自將」兵攻 古麓城 名和顯 | 塹高瀨 敗潰而走 宇土;能運還 隈府 旣而諸軍圍 宇

忠固守冬十月長毎解､兵而退„„高田城

尾被„著陣¸候少々從方角如以前合力候雖然國中

光不能保守,纔以」身 脫 匿„大見 諸兵追逮

竟誅爲光 洞然長狀日雖然長毎不閣晝夜策被廻惟幕中候時分

於隈部篇目出來旣能運樣 5 之年五月上旬如高木

國退之由其聞候之間則種々相調御音信候條御祝喜

新撰事蹟通考卷之九

傳記為網應此月相良長毎遣,兵刧 ┌略八代 修ı標高田

誤也

ハカ

11

1

記肥後治亂記

九日元

文龜元年辛酉明宇土爲光復叛率 黨與兵,掩┒攻

後改尹繁1

敎直之三男

膠系踰0

十二日甲午澁川右兵衛佐義基爲, 鎮西探題̀

菊池城,能運拒不.利叉戰于所々,夏五月能運敗而

走 肥前高來,爲光遂奪」國爲„„肥後守護¸ 張╋菊池略轉傳

九年庚申 夏六月二十日 癸卯相良爲續卒

諸家系圖纂

寺始、七堂伽藍!瞑尹è所:7y其北今1埜所

八其時/卵塔故=古人/墓多有」之後水害7

避テ今ノ地ヲ墾キ堂舎移其年代詳ナラズト里

人相傳親王矢創蒙リ逃避テ東谷二來終二郎

チ其所殯葬ステ考ル二寺始ヨリ今ノ山ニア

テ其後懷良薨逝アラバ寺近ノ山葬ルベシ山下水

邊ニ葬ベカラズ前説確實ト云ッベシ然レドモ亦

證験ナシ故ニ附テ考二備フ

秋八月

系圖:懷良薨後立ņ一寺,號„悟眞寺¸双寺記一云

一五七

尾原 對陣自二十日未明,凭氵 晡時, 戰伐實絕 此

類,畢偏可以奉」恃,神明,外無餘義 致敬信 之

處通 冥慮 靑鷹々而顯 旌旗之上, 當陽之化現

<書記モ出然ドモ耽略アリ此

阿蘇山萬福院文書 絍文書傳記=E拙然F吒脫略Yy此

丿八萬福院/原本也可以從」之

爰國君有…佚邪之近臣,而廻氵 非道之策 五月十三日

之夜偷」身弃二家譜代之忠臣,翌日至 石貫,給然則

耆老一同守,當家代々順次之旨,可以誘, 忠節, 之由

以„熊耳山西堂 荐 申歸鞍, 之處御返答事切已憑,

肥前守重安,率„肥筑兩州之軍士,同十九日於

云也

按長狀能運爲光二破レテ高來ニ赴ク事不

亅載今傳記治亂記等=從テ書亅之高來肥前ノ郡名

温泉山ナド リ

五木、球磨郡/村名六箇鄉、八代郡六

候御本意之儀偏L御憑之由被仰出候之間從是以

前爲續一代不忠之儀性不及是非候於長每可立御用

之通被相達候左候間八代豐福之事渡無申事候其外

少々被成御判其後者御書音等深重」 然岾同五月

球磨山越蘆北2五木越從三方八代2亂入候六鄉

悉仕拂先被達先考之素意如高田引退彼古城分結構

以軍衆然~格護候

職也嘉慶二年琳

和尚ガ開基ナリ今ハ草堂二本尊ヲ安置ス 開 山名字芳號

大 原, 加賀國人也受..法於琳光佛日,

永禪寺二世之住

堂再建百二十四世ノ輪住ト元是7中興開山下稱

嗣席天柱淸 潭和尚以來定住職 ト+儿又再立ト時加 藤家ノ臣安

明多田 毛左衛門書簡及其時/大工日雇付等/控古帳

古キ雲版アリ應永三十年癸卯永谷庵ト銘ス

永谷庵松隈中津道村ニアリ大原嗣法大

長11

木像ヨ簪復ヌ慶

郡佐敷ニアリ今

泄代沽記》胜素砒桃園蹊和尚開山丿伽藍軸柱丿礎石方六七尺/大石二村居

ヲタル今ニ將軍宮墓西畠中=殘レリ

輪番世代古記/詿=相爲續之

時也又兩家弓箭之時燒亡O七堂

九十世輪住 楞 嚴寺

叟元英和尙七堂 伽藍ヨ建

アリ今レルハニ六七箇寺ノミ

八十世/本 佳實

北朝明

丿爲菊池武朝此:建元中七年(F 諸堂落 成 大原

李芳和尚開祖トス此寺定住職ナシ末寺ヨリ輪番

住職ス開山ョリ百二十四代本二十三代

輪番世代等ノ古記今傳レリ輪ハ二年三年ヲ以テ交代ト

有之

末寺八播磨永天寺周防善昌寺豐後頤神菴薩摩善積寺及宇

土城八代葦北球磨天草/六郡都合八十

禪曹洞宗能登國永禪寺/末寺也 懷良 親王追善

タリ

アリ因テ名トス山中二溪木ヲ帶左右=民戸アリテ產業 皆紙ヲ

漉寺ノ後山八卽千古麓城山/尾續也此地/風景京東 山/地!髣

是也今改 淨土宗

七年八月法久寺時配合六代町圓應寺 『虎山貞本和尚本

堂桂淳和尚下云悟眞百十八世ノ輪住也悟真寺

建ヌ地志略:應安二年トy 一、建德文中1間下

シ又永德年中トス今元中七年古記ニョル後醍院

宗 大寺也

輪番世代古記中月存的和尚、鑫城/守山鄉北部

田村攝取寺ノ住職玲 淨 悟眞百十三世ノ輪住夕

侍者禪師

進上來迎寺

印永祿十三年庚午應鐘十三日

的

朱

A有,入寺者依 評定 畢恐惶謹言

テエレバ

當寺住持職之事被」任先規」御輪番無„ 懈怠, 可

上

輪住徵書

祖傳

庵挑瑛|｜峙月庵嗣琳光佛日 琳光嗣 大原 洞上諸

鄺聱之開山

瑩山紹瑾 瀚之開

® 瞵塋山嗣明峰素哲峰嗣 月

寺之開山

嗣子東峰正菊爲 悟眞二世 開 石頭庵宮 地村, 創三

善積寺於薩摩國山田村 後轉氵 位永禪七世住職 應

續洞上諸祖

永十八年九月寂枝葉繁茂矣 大原者曹洞始

傅悟眞寺

祖永平開山道元禪師入世法孫也道元嗣 法於 孤

泳綷↓泄灃永孤雲嗣„徹通義价 嗪 徹 通嗣

懐裴 證踠今存 悟真寺,

應永十年八月二十八日脫化年六十七

五六

光傳法脈於大原

新撰事蹟通考卷之九

洞然長狀曰其後能運樣未宮菊殿L御座之時長每

嫡女之合緣之儀被仰候隈部紀伊介朝度爲御使者

被持酒肴下着候之間時儀然々相定尤目出之通上下

申候之處重朝樣無程御逝去之處隈部相破內田高橋

山井山北寄合中悉被買出候如此之刻無念之由候而

爲續至隈庄手仕之由被仰候求磨郡老者多分被申候

はさ-とては御曹子樣へ一箇條被仰合御年雅之間

可被遊御矢之事如何之由雖訴候無御承引現形候從

狀八年己未春三月相良爲續退,,,,,八代保,,球磨人吉根城

媛,二十三日癸未名和顯忠復,八代,

長

ト炳然ナリ大野石室モ舊上世貴人 墓ニテ破

直傳八菊池

セショ相直修造ヲ加ヘタルベシ

七年戊午先」是相良爲續徇„豐福 迺間背„„菊池家„構,

隔意,菊池能運遣„„肥後豐後筑後兵,攻„豐福,拔 之爲

續失」勢天草葦北亦爲、敵所掠奪

キミナド

モト

*其下貴人/墓

アキラカ

夂 阿蘇公等2墓厂è

イシムロ

ヲサ

疊封元丿如

小栗

御小城,

L癶城下云 叉巖隱下云吐中網 彐構丶 底 1

戸隠ス故二云

今阿蘇人/岩隱穴卜云古言,傳丿然L;北宮

神塚;乃 阿蘇國 造 按:內田以下;相良家/親族向上寺、豐福/隣村

竹崎=尹 刂松覺山卜號入今三一宇,茅堂本尊1

彌陀,安置ス二見日奈久以下、前二解ス悟眞寺

八代宮地村谷ニアリ山號中宮山下云寺コリ上錮側

y=妙見中宮

十三世輪住也

天草郡|悟眞八

寺在=

悟真寺古記曰明應八年紀三月二十三日伯耆顯忠本

意至,,,,癸亥五年,長每代始永藏寺曉堂微和尙代

夫守護之一臂被相隔候能運樣有御成人御威勢之

時分豐後筑後當國衆以御一味至豐福如雲霞被寄懸

候之處被遂合戰守護衆過分討取初雖競候以多勢

被付對陣無透被相勤候殊爲向陣竹崎向上寺之尾取

構候之處終k被詰壞候之條球磨蘆北八代衆多人數

討死候依之其後八代 長落候旣蘆北之日奈久二見

迄 荒候天草 皆同敵無申 承候哉結 句從和泉水俣

<現形候眞幸敵!L成行候方々如此之條先球磨蘆

北以堅固之覺悟可開運之由長每以下知牛屎院

津汇被去渡候左候之處明應八年紀三月爲續被退八

代翌年六月廿逝去之條許之仕合言語同斷! 候

帖テ四壁トッ眼鏡砡如組上ニシテヲ以テ其

上ズ形小山ノ如シ窓口横在テクスコト

一丈計内廣〃數十席ヲ布ベシロ左=銘アリ銭刻

今差消歌ス其末文:日本肥後國八代道前鄉大野村

ネバシ

タミ

家語

按窟北太野村ニアリ 一堆ノ丘阜アリ竹樹鬱蒼

其内草堂アリ彌陀佛安ズ其下郎石室ナリ石ヲ

五年丙辰夏六月十日丙戌大友政親卒嗪 秋七月 小原

右前擁政親之弟親勝」謀」逆大友義右遣」兵斬之於

肥後國南關 * 冬十月二十七日庚子大友 義右卒鬣

六年丁巳夏五月木野相直修三八代郡大野窟」

夏四月

九州

月二十九日庚寅肥後國守護菊池重朝卒子武運嗣爲三

守護

系圖菊池傳記O

「武運後改能運 十一月十四日乙巳大友親繁

三年甲寅冬十二月以,足利義遐,爲,,,征夷大將軍,

政知之子義遐」立」之五年敗三義高「文鎮二年次改義澄 冬十

明應二年癸丑夏四月管領細川政元廢材 足利

大將軍

家

慈照院 三太政大臣秋七月以足利義材」爲三征夷

治號二常徳院噌太政大臣

義政立,弟義視之子義材,爲」嗣

二年庚戌春正月七日庚申前征夷大將軍左大臣足利義

家譜〇年五十六法名道慶

大臣足利義熙宣胤記足利

肥後文獻叢書第三巻

作小城如ク然リ故皇朝天子ノ墓山陵ト云

ウツロ

ミサキ

民夏時暑ヲ避又集テヲノ臺石トス其々トシラ地=響ク寛

政年中一人此音常石ニ非ズト土ヲ採石ヲ 其下神空

シテ深ク廣シ乃チ梯ラシヲ秉テ内二入二石ヲ甃テ壁トント

ス高サ一餘廣サ二間餘方其内地並小キ截石ノ折界アリ西口

アリ竪横三尺パカリ テ啓ズ東城迹方二石戸アリ疑クハ洞口

ナラン石戸ノ上石段アリ段上一短刀及錣金物小キ銕輪等アリ

石戸ノ前三人ノ骸骨アリ初メ里人ノ碪トセンハ組留上石

事官府白ス郡代命ッテ石上壇設以之勿復開

大小廣狹違アリト云ドモ其形容異ルコトナ

シ蓋上古陵墓制其結構内石累ノ室設外山丘ノ象

ラシム グ

キタ

サカ

クツ ヒラカ

ヒシコロ

オコス

ダミ

キリ

トリ

サラッ

1五四

此 者始不知有僧依一夏參籠之志願興建之安置彌

陀佛一尊木野但馬守相直明應六年五月十八日道榮

右石室=就テ考ル阿蘇郡手野村北宮西南二百

五十許步!畠中 石室二區アリ北宮記北宮速瓶玉

命岩所故二神塚土人及御倉穴ト稱ス巨石

以之今見二穴口塞テ見ルコトヲ得ス一穴

口方二尺計アリス飽田郡鎌尾石室山本郡小野

石室山鹿郡津袋/御靈塚益城郡陣村座敷塚葦

村古城山ツ・キニアリ其上草

北日奈久田河内石室等

森欝小堂アリ堂側=石アリ里

一五三

考卷之九

平成行候爲彼御祝儀永國寺四代普山東黨樣打六月延德元年己酉明”計
春三月二十六日甲申征夷大將軍

和融者無是非候至無其分以永代義絕之旨被仰切候|二年戊申冬十月二
十一日辛亥前肥後守護菊池為邦卒

條當國難成靜謐覺悟候歟爲續如望成就候而皆同和

狀

以前還「長亨元年丁未能夏六月相良爲續遣 永國寺 僭普

附之儀殊更阿蘇方不知行之本地等被相返於同前之一山於隈府,謝 和
宥禮, 長

管上下二村有テ小邑數十ヲ領熊水大河

左右:家居入泓四里許其間潭瀨激流珍石奇巖喬木

古樹山水ノ勝愛心 永國寺人吉城,前三

禪宗曹洞派開山祖,一徑永就和尚下 云

應永十年

二十五日示寂

相良家/菩提所也隈部、今1隈府+長狀中隈

府事ヲモ忠直家號隈部ヲモ皆隈部下書ス是隈

府/本名隈部下云ノ證也

洞然長狀日先題目阿蘇惟忠被捨舊惡於小熊野免

,上江下

江等一續1所大名7云松限、八代郡高田鄉1

亡

隈部之御登候其折節八代豐福安堵之事重朝様之懇

我無誤候處重朝惟歳惟家不快無是非候當家一家譜

代之人々我等不可捨由一味同心仁被申候間任所存

候太慶候云々

阿蘇古老日記曰文明十六年惟忠惟家義絕同十七年

文明十六年三月惟忠送 權大宮司 書日今度弓矢我

守護衆阿蘇家於"矢部幕平,合戰守護衆多望之條城爲冬隈部忠直以取合兩所之御判頂戴

按:阿蘇家錯亂叉惟忠惟 歲惟家 惟憲略

憲及用 乘相續

相同

丿間1事等家乘絕不」傳事實唵曖 今得亓考心

ラズ系圖照シ見ベシ幕平矢部莊ニアリ長狀ニ

馬門原トス本文今古老日記=M馬門村所未タ

考得ズ悛が狀ニモ馬間原ヲ載

、阿蘇文書永和元年今川了 小熊野、益 城度被逐參會其後者御知音候左候之處阿蘇一家錯亂

1

之條從守護者惟家ぇ御合力候惟忠惟乘御相續に而

無程遊去之刻候之間從八代渡惟乘之御與力既重朝

樣御發足之條多勢出張之處於馬門原此方衆遂合戰

宗徒之面々數十人討捕候儀其競城右京亮隈部上總

介當時之被捨確執國家無二之懇望以中條對馬守到

球磨八代數返被相繰候~S<共其比之宇土殿菊池

爲光守護競望之弓箭吉辰年於木原赤熊被仕損其儘

如八代被退松隈之一二年 御堪忍候彼御方如十六甲辰春相良爲續擊名
和顯忠率」兵 北佐還 宇土重朝議釋」之和解逐成矣

ニル

ツキテ マス(

說的故今措而不取

テ熊河秋月云

シコチ

11

志略有木綿葉川之

タリ

アマコトニ

地志略國夏四月宇土地頭宇土爲光欲」爲肥後二

至是耳川一西流東肥!綠河二人一南流テ熊

河トナル故二名ヶテ三方嶽ト云也熊水、五箇莊中

流南行球磨郡二到米良二至二垂トシ西シ

人吉城北フリ流下ルコト十里餘ニシテ本

郡入松隈過キ古麓至り山出浩淼トシテ高

田萩原麥島植柳等諸邨海ニ入ル舊名結八川

萬葉集續古今集後撰集爲三木

葉川夫木集及作三都芳川

後=球磨洞然長狀日翌年岬之春爲三勢仕」爲續佐敷まで被

11

「水長球磨郡ヲ流故二

候

敷テ

領球磨八代葦北天草四郡、手前件領以下三

11

11

ユウハ

ス南郷河口村ニアリ其山三源アリ一東流日向ハニテ

河名球噌上古松 熊灌漑!利漕運

熊球磨井用下效之

便甚廣相傳豐臣秀吉西薩摩征ス八代兵ヲ觀

河ニ臨天ヲ仰テ歎テ日嗟呼固鎮西ノ險也三軍徐

々トシテ逐ニ吉祥瀨渡始秀吉薩人河二防ショ

トラ懼而シテ一兵/弓ヲモノナシ是ニ於テ安然

トシテ濟レリ因テ邑人祝號シテ吉祥瀬ト名ックト

秋夜靜ル每波光曉月上下蕩漾ス明珠盤走

ルガ如シ蒼然タル一奇ナリ八代八景!一トス名ケ

三月七日甲午顯忠棄」城而退去爲續取 八代

併打下侄之處伯州被懸肱力候歟諸勢無,,待付,三月七

日沒落候卽時爲續入部候而既十六年在宅候於其內

豐編知行守護擧」兵反爲

光者守護重朝之叔父也相良爲續黨」之 重朝遣」兵伐,

名和顯忠之臣蜂須賀家親

之十六日壬申戰三木原赤熊」

匿隈

以單兵」迫爲光」爲光大敗走三八代

長狀蜂須

「賀文書十

六日及爲續黨」之據交書 見于前 守護競望及走 八代 以下據,

長狀長狀寫三千明年・爲光詳菊池系圖 木原赤熊誌于前

十七年乙巳夏五月阿蘇前大宮司惟忠卒 始惟忠

讓家於惟家」而後不相能」終構難廢惟家 惟家

投守護菊池重朝」就至鬪爭惟忠立惟憲爲三大

宮司此夏病卒惟憲紹而 滋募」兵惟家請 兵於重朝」

重朝自將而赴」援相良爲續遣」兵椕」之既而兩軍戰于

幕平 守護方軍屢敗於」是城爲冬隈部忠直捨,當時之

確執」以中條對馬守、講和爲續請下宥 宇土爲光之

撰事蹟通考卷之九

一同十一月十五日大手犬馬場合戰之時被疵之窮高

一文明十五年癸卯十月十八日夜於所々合戰之番於

陳内大手橋上粉骨事

一後醍醐天皇之爲御方先祖長年洛中内野原從合戰

以來勳功就中文明三年以來相良爲續於八代城度々

襲來候刻被碎手事

峰須賀文書

食セラレ終二八代ヲモ保木原宇土=移レ

八町嶽、城ノ後山高田城、奈良木村内平

山:尹y故三平山城下毛云古麓城/南半里餘中

熊水大河ヲサム

照考,

以下永

郡ヲモ顔ス其後次第二家相良家

11

條可:

豐福:住y後此城:徙居久七世ノ孫 顯忠也

トウ

來り初

一味無餘儀候然者山内被運人數八町陣之被懸候少

油斷候歟相崩蘆北衆少々越度候左候之間殘

黨之亂依難納先以被開陣如高田被籠候

按:島津國氕、忠國/弟系圖:詳也祁答院以下

家臣也麓城、延元々年記ヌ内河義直正平/末>

テ居レリ十三年二其主名和顯興八代郡正元年

始葦北五年四月熊河水引テ野津鏡村至り大洫鑿

橋跡ナラム大馬場春光寺門前北ニアリ木

原赤熊、益城郡守富莊/村名今赤熊、木原村 屬

ス熊河古麓城ノ左ニアリ其源阿蘇郡三方嶽二發

餘兵器等多ク出如何ナル故ニ其儘境シ

ヤ城ノ筋乃チ新井手ノ道トナルナリ

イテ

是乃千大手

台中市埋ル

ホリ

交掘橋桂桁等架カ如ク歷然トシテ地中

疏亐七百町/墾田注古麓城趾)前山家町村

アワイ

疏

按三重年、顯忠子蜂須賀家親、其家臣也俱系

圖詳ナリ陣内大手橋麓城ノ追手ナルベシ女政

蜂須賀治部少輔股

重

十二月廿七日

文明十七年乙巳

一同十六年三月七日八代沒落以來於所々辛勞之事

一同四月十六日宇土爲光井球磨勢現形之時守護勢

馳向於木原赤熊合戰之番一人飛加高名之事

右家親依忠節之次第如此加扶持加茂周防守義豐之

跡十五町井 圖師給之事本意候時領掌不可有相違狀

如件

名事

東福寺記

十三年辛丑秋八月癸卯朔菊池重朝於 隈府會詠聯

歌一萬句 菊池傳記

澁川系圖

十一年己亥夏五月二十二日戊寅鎭西探題澁川教直卒

諸家系圖纂

香烟撲袂盡簾風

萬古絃誦未終花欲暮

四海同

寒雲染出杏檀紅

泗水吹添菊潭碧

春奠貢筵陪泮宮

太平奇策至誠中

集三出

略:云桂菴玄樹和尚、京都南禪寺/住職也此頃菊

來テ五六年寄居シケル重朝命二依テ釋奠ノ

詩》作鵜総臓唱

フル武運重朝子武運ニ非ズ同名異人也

隈府町右田某ガ家其ノ聖像トテ持傳ヘリ其掛

物/裏:文明四年二月吉日孔子堂附、之藤原 武運

菊池武運八重朝,嗣子也交明十四年生年代齟語

按ヨ遺構今不分明 2逾體遺遽石灵

ドモ通當ノ遺迹ニアラズ

菊縣溫故等二説アリト云

本朝通鑑

八年丙申夏五月十四日丙辰菊池重朝會 諸臣 及僧徒

藤崎宮 詠 一千句聯歌賦」詩納」之宮殿,洄略傳傳記

九年丁酉春二月九日丁未前」是菊池重朝建 聖堂隈

菊池略傳傳記年月

府,此日始行„„釋奠

六年甲午夏四月丙辰朔島津立久卒嗪

肥後文獻叢書第三巻

聖廟ノ一家有政九州化

斯文取詰候從守護未指許候殊阿蘇惟忠依合緣之儀伯州

作是爲名代御親類四ヶ所は人數祁答院 重度自

身北原昌宅菱苅道秀何爲續以一所高田鄉宿陣候

天草志岐上津浦栖本衆是を麓え乗陳候如此雖被

栖城計 被仕成候

從夫稠敷被取分殊更文明十五年 22城方角押寄被

付陳候然爲合力島津國外名代舍弟彈正忠殿同匠

地名

山中其比は未長續御在世以被御馳走至八

代被仕居候爲其芳恩高田鄉之事 被相去 侄之條

改城格護候殊に爲續息女に合緣之儀懇望候既に以

兩使祝儀之酒肴被遣候從是茂上下著物被進然被

申結候處牛屎院 七,在陣之折節至高 田鄉 被取縣

之地名

候雖然蘆北之人數則馳續堅固ㄈ持堪候之間不及力

被開陳候不思儀之後矢候歟彼遺恨依深重爲續牛山

薩磨之在陣翌年 師走八代之以發 向一爲續八代競望之根元者伯州慮外之當 介故

候顯忠未幸松殿LC御入之時内河式部少輔供此

A兵 角､勢 累歲此冬爲續將､兵討„顯忠於古麓城,

島津及天草一黨彸」之不」得以拔退而保, 高田城,

沙彌洞然長狀

セイチアラソウ

十五年癸卯先｣是相良爲續與,, 名和顯忠, 相確執其後

新撰事蹟過考卷之九

按:菊池爲邦以下使7朝鮮三遣又是商船海寇F_尙 爲｣之次俐長鶉滋皂咖。

1

足利家譜續皇朝史略

大將軍大橋朝臣政重

五年癸巳冬十二月足利義政罷, 征夷大將軍,以子義

地ナラン

八墓碑紛失スルカ

ス

11

11

田山崎トス

應仁元年丁亥,高瀬武按:田河内千代永皆葦北郡日奈久ノ子村略傳傳記

=

此年菊池爲邦辭 肥後國守護職, 長子重朝 嗣立代』之一骸前,各劃」腹而死俱葬,千代永林中 臺北韡

黎明能登守單騎馳向 田河内 時宗林之被官專右衛門

匿 麥|射而斃,,能登守,從者十二人追不」及乃跪一拜

葦北陣

ナリ其事實今考所ナシ

城可,合見1

テ

時

11

守長安加悅飛驊守長秀蜂須賀尾張守義顯城主肴義縣

和系圖古 二年戊子春三月二十五日乙酉相良長續卒

賀舊

リ

津家

ベン高瀬大橋系圖詳

ノ城二居城來古城主考等二出 後八代城:移 リ加悅 土佐

内也故三正平十三年義高)子顯興下向2時暫夕此

ナス

系圖菊池

名ヲテ爲所ニシテ其人々ノ知ル所ニ非ザル

鐵 本鄉内藏助等ヨ豐 福/守 將下藝文明十「文明二年庚寅春正月二十日庚子島津忠國卒 但系圖

六年my明應八年> 十六年八相良爲續領」之「四年壬辰春三月初名和家臣田河内城主園田伊豆守入

其臣東播磨守7氵亍城主ㄆㄆyz轅明應八道宗林與三相良家臣千代永城主桑原能登守,有」故構_

年my六名和家復豐福7領氵永正元年名和顯忠叉 釁隙,居城之間相隔四町許此月宗林密乘」夜襲 千代

相良長每讓è然L下毛城代丿名>L 其此不难 永 能登守膽力勇悍不„„敢駭 闇 門衝盪宗林奮鬪而死

延元々年古麓。

武邦當城楯籠ㄦ下名和家領 分2教 大橋政重遣 使於朝鮮,

海東諸國記曰武教丁丑年以 武麻呂, 稱」名使 人來

朝以,遠處 不、緊」人不 接待, 丁亥 年改 名武教

來引賀觀音現像 書稱肥後州高瀨郡藤原武教菊池殿

族親為,其管下,居„高瀨 双日政 重丁亥年遣,使

來賀觀音現像前」此再度救我漂流人,書稱肥後州

也故:田

桑 原ㄌ墓日奈

河内城1日奈久城下壬云肥集灘二六園

一ノ大ナルヲ里人能登殿墓ト云及其所能登森

ト呼今千代永ノ内ニ非ズト云ドモ僅潤水

介亓北、千代永/内疑夕、卽千其時千代永

按:豐福始、八代郡:屬>名和義高以來地頭分,

海東諸國記日教信己卯年遣」使來朝書稱肥 後 州八

儲甌

ヌヌ

下`終敗死嶷池此年源教信遣„„使於朝鮮,

菊池略傳

系 三年己卯冬十二月十三日辛酉八代郡地頭名和義興卒| 遣至長子重朝, 誅』之重朝往而攻」之武邦出戰, 于城

、從父命,此年逯據 守谷城豐福城, 拒 爲邦 邦

長祿二年戊寅春二月六日甲子大友親綱卒

文正元年丙戌明計菊池爲邦二子 武邦 暴戾 不孝不

來

池殿,世々主_肥後州

賀大友親繁!一族ナリ

按筑後高良山合戦諸書見所ナシ故二附書志

11

於 高良山 討死

菊池系圖菊池肥前守爲安寛正六年乙酉四月二十日

二年丙子菊池爲邦遣„„使於朝鮮,

海東諸國記日肥後州菊池 殿丙子年遣」使來朝書稱

チ

藤原爲房歳遣 一般

親 繁 判

海東諸國記曰藤爲房乙亥年遣」使來朝書稱肥後州

志賀太郎殿

卯月廿七日

寬正六 乙丙

去世高良山別所城菊池肥前守差寄之處可然時節ラント

合

力候而爲安爲始敵數輩被討取候粉骨之至無比類候

殊御手人々碎手被疵候由承人候辛勞之至候如何樣

以而御高名之段賀可申候恐惶謹言

康正元年乙亥明計春國士締、黨攻隈府城,城且,旦

卒間舊記

志賀文書

亨德元年壬申請計夏五月二十一日癸丑八代郡地頭

名和教按信名將軍 家

寶德元年己巳明計夏四 月二十九日己卯以,足利義

成,爲„征五年戊辰代源朝臣教信約 歲遣一船

春三月二十八日甲寅相良堯賴死

其子爲邦嗣」封為守護池略傳

11

系圖

夷大長暮下,三月八日癸丑島津勝気率」兵來援 菊池 賊兵散

Ļ菊池傳記〇勝久

菊池爲

走越國弟四之子也

此年詫磨爲房遣使於朝鮮1形之剃

肥筑二州大守藤原朝臣 菊池爲邦約 歲遣纟 一二船,

庚寅年又遣」使來受主圖書,所」管兵三千餘 世稱

和家ノ八ナルベシ說名和系圖 書

之

寬正六年乙酉秋七月五日庚戌大友親隆卒

然著相長家之由來事跡書是名沙彌洞然長丨三年丙寅秋七月二十八日甲午肥後國守護菊池持朝

沙彌洞然長狀

日天交五年十一月相一族相修理賴與入道洞

池兼朝入道元朝卒

見|修 犬追物丨

文安元年甲子孟春三月八日戊午前肥 後 國守 護菊

本朝通八月二

足利家譜

戰„于紀

サッカニ

,

菊池

兪歌,而還

秋七月二十一日甲戌征夷大將軍足利義勝卒其弟義成

三年癸亥夏六月二十六日庚戌相良前續死

イキノ マッハラニ

1

アケラカチ 大内教弘 討」之菊池持朝通 教弘率」兵往與, 少貳】

院i贈氵太政大臣,

法名道惠號 普廣 冬十一月少貳教頼擧」兵反足利義勝造;

長狀年月不」書翌嘉吉三年前續死故二此年

トキチ

=揭示考=備7前續/妻、島津忠國/妹十二見

犬馬場假屋ナド云所今ニアリ里老傳古ヘ大追

物7yy所假屋、其時/諸小屋/迹yト其地今

六二見/管村下大野/内入葦北郡其比、相良家

ノ領ナリ

昭ハセテ

義敢年四十八

一前代者度々御丈追物御興行候哉殊更探題様御下

嘉吉元年辛酉向之時分島津方茂被出合於芦北二見丈追物被遊

前續時代之子細候探題様御手組候何茂御日記等明

白候題目於御家有道之儀候間連々被懸御心至

後々者御再興尤專一候哉

娟計,

系圖

1

六年甲寅春正月二十日己亥鎮西探題 澁川滿 直與,太

春三月十三日庚戌島津忠國之臣

狀

宰少貳嘉賴,戰 肥前神崎,敗死滿直子右衛門佐教直

爲 探題,冬十一月十四日丁亥前探題 澁川義俊

纂澁川

樺山某襲,足利義昭於日向國櫛間 義昭自殺初義昭

_僧住„大覺寺;爲大僧正 永亨十一年還俗密奉, 南

朝皇子某1佾宽成王,非

锘 娴 菊璚髆鼊將¸作 亂騁 分旨 於九國 之將

曹」徵」兵菊池大村等應」之而事泄露義昭出逃至」是

菊池傳記諸門跡譜〇

聞」在櫛間,分„忠國,殺」之

夏六

義昭義教異母之弟也

月二十四日己丑赤松祐弑„征夷大將軍足利義教 二

十六日辛卯諸將議迎 義教子義勝,立之浞利家辯擅皇潮史

〇筑前生 松原 破､之颶,巴二年壬戌冬十一月七日甲子以, 左近衞中將足利 義勝

爲„„征夷大將軍 鎵镛 此年相良前 續於, 葦北郡二

,足利家譜續皇朝史略〇義勝卒年十法名道春號 慶雲

嗣立

院 贈,左大臣, 義成年 財 八歳亨德二年改名義政十三日乙巳菊池家元老隈部朝豐死標

菊池傳記

按:此文書子細詳㔾式下云ト毛附亍考:備7親|爲守護

其子惟忠）此歳肥後國守護 菊池兼朝 罷長子持朝紹

菊池略傳

小早河美作入道殿

三年利家譜

如何

守滿直爲„„鎮西探題,

鎮西錯亂事方々注進狀之趣阿蘇文書

兵00眭安寫系圖ī

正長號 勝定院i贈 太政大臣

·家譜續皇朝史略〇年四十二法

阿蘇文書兩人日安

記此歳僧寰中造┐立梵宇於飽田郡柿原梅谷號 成道禪

寺

二十九年壬寅秋九月五日己未山鹿郡日輪興國禪寺火

非也令實昭據 阿蘇文書

A城逃去

久密通 兼朝將 紱君降,實昭聞」之二十四日庚申脫 三十三年丙午冬十一月二十九日戊午大友親著

菊池傳記●本書作¸„實照,

サニテ

史略

三十二年乙巳春正月二十一日壬辰島津久豐卒孫

續皇朝

國之兵與」之戰敗秋七月又戰却」之賊艦沒」海死者無 右近衛中將義量 爲,征夷大將軍11種家

花榮三代記

テル

11

テ

二十六年己亥夏六月高麗戰艦千三百餘艘寇 對馬 九「三十年癸卯春二月足利義持辭」職十八日庚午以,其子

二十七年庚子秋八月先」是河尻左馬頭實昭叛 菊 池二 月二十七日戊辰征夷大將軍參議右近衛中將足利義量

菊池秉朝將」兵自往攻」之相持月餘實昭之臣佐川田吉|卒義持重,決政事基術長德院一鮝 從一位左大臣,

薩戒記足利家譜〇卒年十九法名道

此年阿蘇大宮司惟鄉與„„阿蘇惟兼¸ 爭„ 衽 職 構

難被糺決者也每事致穩

便沙汰可仰 上裁候處或楯籠要害 或分出陣云甚

不可然所詮所對陣軍勢等悉分退散各以代官不日可

申披子細就彼落去可有成敗之旨可被相觸親著兼朝

等之由所被仰下也仍執達應永二十九年五月十八日 沙

元年戊申明春正月十八日辛丑前征夷大將軍

內大臣足利義持薨

三月管

領畠山滿家等相議奉 義持弟僧青蓮院 義圓,立」之義

圓還俗改三名義宣一七年三月初宜及改 義就

永亨 此歳澁川武藏

諸家系圖纂澁川系圖 前任義俊罷諸書

「缺」之滿直滿賴弟彌大耶行之子也

永亨元年己酉訌春三月十五日辛 酉以, 足利義

爲,征夷大將車,騎誠記足

辛亥夏六月十八日辛亥阿蘇大宮司 惟郷譲 職於

撰事蹟通考卷之九

物語抄檜垣ヵヨメル白川肥後國阿蘇山ョリ出ル

11

ト云ぅ一山城國一、陸奥國一、此白河ナリ大和

ベカラズ

合志磨鮑田諸郡經テ海二人三白河

蘇小国郷ノ涌蓋山ヨリ出ル川ニテ豊後日田郡津江莊過筑後

國〓至ル筑後川熊代川ト云是也白川源阿蘇川ト 此阿蘇川ハ異

レリ混同ス

ワイタ

テ

11

1

11

テ白河ト云豊後風

出其源二白川村アリ又阿蘇川トモ云

巓鋸/齒ノ如シ四烏帽子嶽中嶽坤ニアリ一來迎

山叉五面山下云五杵島嶽俗往生嶽ト云中嶽西二

アリ頂ニ池アリ水今調渇ス白河南郷ノ山野-

阿蘇川南郷川流

11

11

タケ

11

11

中最一/高山ナリ山東嶢山西草木ヲ生ズ三

根子嶽高嶽/東ニアリ又猫嶽ト書ス一名七面山其

ヤマ

今 今池中烟雲起ル神靈池/靈異怪變等前=所々

載之風土記ノ所謂中岳爲三五岳之最首」即チ

ト

11

山下道五嶽ト八一二中嶽是ヲ御嶽ト

稱ス靈沼其頂ニアリ神霊池ト名〃御池三池

モナリ三池相中!中御門ト云阿蘇比咩神ノ池トス北ヲ北御

門ト云健磐龍命ノトス南の發星崎ト云速玉命ノ池

是也本堂此山ニアリ二高嶽中獄/東ニアリ五嶽

土記=日石井鄉中有,河各日 阿蘇其出 肥後國小國之峰流

至此鄉即通玖珠川會爲三川名日二日田川此=阿蘇川阿

一四五

二十五年戊戌春二月二十五日丙午大友世卒縣 此

歳鎮西探題澁川滿頼罷以其子左近將監俊」爲」之

十五年戊子夏五月六日甲寅前征夷大將軍 太 政 大臣

足利義 日本史(應永二年六月剃髪法名道

義薨年五十一號二鹿苑院天山道義」

十八年辛卯秋八月六日乙未島津元卒,

二十四年丁酉夏四月四日庚申相良實長死2

道常朝卒子兼朝嗣爲守護

入系

十四年丁亥春三月十八日壬申

狀譲

夏五月三日壬辰阿蘇宮大宮司惟村讓職於子惟郷」

北ヲ繞リ流ルト云是ナリ黒川源阿蘇谷シ

手野坂梨川等ト會シ黒川村ニ至リ其下流テ内牧狩

尾等⑦歴南郷數鹿流瀧ノ下ニテ白河合阿蘇記

阿蘇其地皆山二連テ湖水也ショ健磐龍命巡視

西南ノ山ァ鑿テ水ヲ白川二ヶ故二水干落テ沃

田トナル今ュ南郷群山水涯痕アリ堀通シタ

ルヲ穿戸ト云圖書編日本ノ岡肥後ノ内二介鳥湖ト

アル印チ此ナラン

謂之白川 阿蘇記 阿蘇黒白ノ二水引テ南

11

が大渡橋幹縁琉遙出 阿蘇神地之南北而激流如

11

川ナリ水ノ色白クシテ粉ノ如シ大慈寺開山寒綴

神武欽明啓運俊德成功 統天大孝高皇 帝知周

八極,而納„天地於範圍,道貫„三星,而亘古今之統

紀,恩施一視而溥„民物之亨喜, 日月星辰無」逆 其

行,江河山岳無」易 其位賢人善俗萬國 同風ń々

玆世,固千萬年之嘉會也朕承 鴻業 亨ń有福慶i極

所„覆載,咸造在」近周爰咨詢深用嘉嘆邇者對馬壹

岐諸小島有」盜潛伏時時出 寇掠 爾源道義能 服„ 朕

ナル

ルニ

皇明資治通記日永樂四年正月遣」使齎ņ璽書褒諭

シテ

年封爲„壽安鎭國山,

シテ

月令義廣 日日本國阿蘇山 石火起接」天俗異而

禱」之有„„如意寶珠,大如„„雞卵,色靑夜有」光永樂初

テ

如意寶

隨書倭傳日有„„阿蘇山,其石無、故火起接 天 者 俗

有光云

テ

十三年丙戌航頓春明主大宗封,阿蘇山,爲 壽安鎮國

以爲」異因行氵 禱祭 有 如意寶珠,其色靑大如 雞

卵,夜則日本國王源道義 及封, 其國之山,日| 壽安鎮

神曦叉封,其國之山,日壽安鎮

國山,立碑其地上親製」文賜」之 其銘日朕惟麗

、天而長久者日月之光華麗」地而長久者山川之流峙

麗„於兩間,而永久者賢人君子之命名也朕皇考大祖

聖

按閲宗枳乃千阿蘇ノ縣、今ノ郡y阿蘇岳

五總名禿山ニテ草木ヲ生セズ故二二赤膚

金,而以分」間天下靈奇出„„玆華矣時時水滿從」南

溢流入 于白川,衆魚眞醉而死土人號日:苦水 其岳

之爲>勢也中」天而傈峙包„四縣,而開」基觸」石興

雲爲 五岳之最首,濫觴分 水寔群川之巨源大徳

巍諒人間之有 一奇形, 杳々伊天下之無雙居在地

心,故日:中岳;所､謂阿蘇神宮是也

或十五丈

11

深或二十丈

清潭百尋鋪„白緑, 而爲､質彩浪五色組 黃

計 可 縱五

ﾁ

ハゲヤマ

禿山,日„闕宗岳 J頁有:靈沼 石壁爲､垣 【十丈横百丈 1

ルニハカリ

」

「ソノアカタノヒツシサル

筑紫風土記日肥後國閟宗 縣 坤 二十餘里有

石｣榮i示千萬,嶁如廉畫珠台不 份明 大宗之

此碑阿蘇山無」之可以疑而已

命,咸珍„滅之,屹爲 保障 誓 心朝廷¸ 海東之國未

』有賢 於日本 者』也朕嘗稽」古唐 虞之世 五長迪

功渠搜卽叙成周之隆庸 蜀羌嵴 微盧彭 濮率遏 亂

略¸光 華簡冊¸傳誦至」今以„爾道義」方」之是大有

光 於前哲 者也日本王之有 源道義,又自古以來

未„之有,也朕惟繼„„唐虞之治¸„„ 封山之典, 恃命,

日本之鎮山,號„壽安鎮國之山,賜以 銘詩勒 之貞

ルニ

四四

撰事蹟通考卷之九

九州記云武朝後酒色二荒耽國事務メズ

勇ヲ恃テ備ズ大友親世兵率テ其不意ヲ攻テ菊

池ノ城ぇ陥ル武朝八代城二逃入和ヲ請ケレバ親

世永久旗下二屬セシメ九州ヲ攻從へ程ナク上洛シ

スサミフケリ

阿蘇大宮司殿

應永十二年五月十日

菊池右京大夫武朝治罰之事早屬右兵衛佐滿賴手可抽

忠節之狀如件

義之

花押殘備之

･花押也

阿蘇文書

十二年乙酉

菊池系圖武敏子武平子貞頼アリ八代

監稱ス其外菊池家二貞頼ナシ然トモ武朝其族

貞頼カ逆貴ズシテ京軍來討受且八代城名

和家/居城貞頼此城據大疑ベシ今姑ク應永記

等從テ後ノ考訂ットラ云

ハカリ

附時城中僅殘者可 五十騎貞頼臨京軍之夥多」以

爲兵勢不、可ņ復振, 竟自殺應永記本

太宰府」 千葉大村等皆應」之足利義持遣 F 大内義

弘之義弘自將來圍八代城 貞頼之兵望」 風降

11

二下

四川

而扈從將軍宮」其孫子忠節」南朝蹙弱九國

悉雖從北朝 ，唯三家始終傾心於皇室」不顧其家

安危存亡南北一統之後者不」得」止而咸降北朝

然武朝不廢義志」通將軍宮」動而圖興復

コレ據テ考」之武朝終ヲ全セズシテ反覆大友

等ガ下屈スベキ人ニ非ズ

ミナ

モトヨリツク

又親世九國ヲ討從ヘ探題二補ス非探題一澀川滿

賴其子義俊其職繼テ筑前居レリ九州記事ヲ

大友家事跡ヲトシテ著タル書ナレ其非二隨

コト如此モノアリ取捨深考ベシ或記日菊池武

時奉」詔而死」箭其子武重遵守遺訓武朝」六世

貞忠義烈世之所」稱也兄弟支族同倶委身於義阿

蘇惟澄元弘始遙應」勅興國末大宮司惟時姑雖

足利尊氏之逆」惟澄率 諸弟及上島惟賴等、不生

異心」勉王事」終身不易其長子惟村屬尊氏」吹子

惟武踵„父蹟 卒„ 于軍, 其子 惟政其子 惟兼忠亮

慤以盛衰不變 清操」及正平中名和顯興零族來

按文書云武朝治罰事未タ其終始フ詳ニセズ

武朝親世降テ永靡下トナル事他書見所ナシ

テ九州探題補セラル

本史

元年後醍醐天皇南遷,至」此五十七年南北統一矣妇

セリ

九年壬申一雙冬足利義滿求 講和,詔許」之於是

天皇乃幸„京師,傳三神器於 後小松天皇,自 元

迹氵 蜂須賀ń名和家/臣也

按:鳥越城未夕詳ㄤㄕㄡ宮地、八代郡=7 刂乃千

名和家/居城古麓2北隣也然L卜天宮地村:云城

須賀越後入道館

左少辨 判

元中八年六月二十八日

去四月二十八日於宮地鳥越合戰候時被疵之條殊必

神妙御感不少旨 征西將軍宮御氣色所候也悉之以

狀

蜂須賀文書

德二年

八年辛未

北朝明

ノ誤ナリ

但大日本史嚴島詣記和漢合符っ引テ此春義滿

如„安藝 詣„嚴島祠計-躬 筑紫,巡-察時風-命,

細川賴之,備」舟到„嚴島ņ進泊 周防岩屋,時大風連

日舟漂不得」所」屈義滿恃乘 小舸, 夜至„ 田島浦

投„„漁人家,翌日與„„賴之,會輟倶東還ΠL=m Lí

義滿周防國>來ル菊池卜戰 n -見<<讀史餘論

肥後文獻叢書第三卷

四年丁丑菊池貞賴據 八代城,作」亂少貳某 起 028 亦 起

佐滿賴,爲„鎮西探題 嚇永十三年八月落髮法名道鎮

諸家系圖簒〇溱賴義行之長子也

三年丙子此歳今川貞世罷„鎮西探題, 以„ 澀川右兵衛

家譜

應永元年甲戌明訌春正月十九日己未球磨郡 地頭 相

良前頼於„薩摩 戰死* 冬十二月十七日壬午足利義滿

辭、職以其長子左近衛中將義持,為征夷大將軍

親

因テ考將軍宮未北朝降ズ專ラ興復謀ル故二分

旨皆元中1號7用 1

按泰成元中四年比宇土居懐良系圖泰成

ノ譜中二詳ナリ元中九年ニシテ終リシ事前二見

ヘタリ然ルニ阿蘇家二賜フ再復二就テノ令旨=元

中十年トス

明德四年癸酉春征西大將軍泰成親王居 肥後 僅保

八代之一隅,圖興復,阿蘇牧書

編年考徵七

新撰事蹟通考卷之九

新撰事蹟通考卷之八

131

シ

者敕裁豈可

降ル細川頼之備州三在九國

成敗司り十月歸洛

讀史餘論日康應元年己巳三月四日足利義滿九州

霜也此間正平十三年以後二十七年者顯興入道紹覺|六年己巳式明畹商

憑 武光以來之武功,令」居引住當家分國, 之上者

中自元弘三年,至今稔弘和四年,者五十二年之星 異動煤

1

九州每度之合戰,至„于今,相引支了俊多勢陣畢就」五年戊辰年秋九月八日 己卯阿蘇山 神靈 池有 變

•阿蘇山柰

被,見知,者也加 之元弘以後者以 當家武略 致 | 前薩摩國守護島津氏八條

シカノミナラズ

是則雖丿爲 私計策 編所」存,公平, 也且度々敕使|靈池砂石濁水涌沸高一丈有餘纈 2 閏月四日癸未

スルコ

月二十三日改元

廣橋右大辨殿十一字當アリ然レドモ申狀等二

其例ナッ故不取

地頭職 办

十二日乙卯足利義滿以 小代重政,爲„玉名郡野原莊

y隈府/住某力所藏申狀寫、上高田御所其脇

有凱異同,詳著…于征西將軍系圖,

五月

品式部卿 懷良 親王薨

ń系圖三載」之故:此三略〆紹覺、名和顯

三年故大王懐良癸亥北朝永

北潮泳藤原 武朝

即天中

年也

軍宮,進引發豐後,之間一族以下亘餘儀,乎仍言上如扶持人等受图 彼明黨

語,楯„籠分領守山之要害) 唐坤擬」黜,武朝,之

條弗、迴 時日,自馳向各分追落,

春二月二十七日辛丑前征西 大將軍一

萬壽寺過去報系 劉年* 夏元中元年段玩月拍國北朝至德元

二年也二月二十七日改元

菊池武朝申狀

件

弘和四年七月日頑親王云去年薨去アリシュヘ故

大王下書ス州大王將軍宮泰成親王也具ナルコ

ト四年丁卯眺潮恊漫玩哖袘 夏五月二十五日甲戌阿蘇山神

功之次第皆宜 存知,者也然則就„忠之淺深,可以有

御成敗,何被、閣„當家代々三百餘歳忠義,被」賞近

年奉公阿黨之所望,乎亦任 理非我可以有 御沙汰 者

也將軍宮御事被」受,正平之敕裁, 爲, 故太王御代

宮,年來被、積„勞功¸御理運無„相違,上赴是鏡西宮泰成親王井菊池フ討ルベシトナリ

四月菊池肥前守長門國出テ戰利ヲ失フ七月ヨリ

八月大雨九月菊池按=此年義滿菊池ヲ討何ニヨルヤ載籍見所ナ「下無 三字】

阿蘇惟澄正平十一年2申狀:光永左近將監惟富

以下

武朝守 叡旨,奉仕將

弘和二年之比者

親善申狀之以

按:詫磨原訊今健軍原7云津守城、益城郡守

タケミヤ

俊,御合戰之間散在之官軍少々依三馳參, 御旗下凶

菊池武朝申狀

弘和二年壬戌 菊池武朝從 將軍宮, 至 豐後,

£菊池傳記爲,,,,,應安四年今从 圖書編等

圖書編、高皇帝御製文集〇明洪武十三年

贈、馬

六年庚申批潮秋七月大御所遣,,僧如瑤於明國,

菊池武朝申狀

應安六年 非也

菊池傳記九州記〇傳記爲

善申狀

守護職菊池家代々帶」之頃年惟村北朝屬

¸衆而遁,,津守城,今川等纔收,,餘衆 還 筑前 會 將軍宮自將」兵來救 越
賊軍大亂而敗績大友離丨北朝阿蘇大宮司惟村 補 肥後國守護職 如

ス故去貞治元年肥後國守護職トシ此歲新二命

ト云ト乓菊池家南朝正統ノ職7 恃勢威强

ク惟村ハタ、名ノミニシテ其命ヲ受ルモノナク職

權振コトヲ得ズ

ニチイテ

アヒス

阿蘇

澄大内義弘弟盛見等復帥„衆師¸塹„„菊池 既至 詫磨

原 武朝親將 諸軍 迎戰武朝自被」創群臣死傷頗多時五年己未朏潮髫玩秋九月六日己 亥足利 義滿以三

四年戊午15 秋九月今川貞世一族 大友親世 少貳賴

四年戊午毗嘲泳

跡ヲ多ク載然ドモ事實純繆信ズルニ不足故に不

關幷武安¸„討死 畢

11

罷出之間於 蜷打陣致合戰 武光舍弟武義入道自

リル

肥後文獻書第三卷

又大内義弘稠,強大友亂世

親善申狀作直世仲豐前豐後兩國凶 徒 相共

云者アリ其ヨリ此城=居乎分明ナラス

天正十三年條,○光永筑前下座郡之地名也元弘三年大宮司惟時

爲 下座郡地頭職 其内分 授光永名於惟富】故家號1稱 光永

西要略:文中天授頃ay應永正長比:至肥後事

然而後了俊一類大友少貳大内兄弟 數千騎寄氵 來肥

後國,之間於 詑磨原,天授四年九月日武朝十六歳之

時任運於天道,忘,命於公儀

時任,運於天道 忘〃命於公儀 雖」爲〃〃無勢馳引入多

勢陳,抽〃戰伐之勇, 一族以下鋭卒 數十人, 討死,

自身被.疵攻戰最中將軍宮有〝出陣,而被」馳引向了

鄕ニアリ阿蘇家領ニテ其一族光永家代々ノ城ナリ

人等叛而據 守山城,議.黜〃武朝 武朝班」兵討」之反

人等叛而據,守山城,議、黜,武朝武朝班」兵討」之反

賊棄¸城亡矣賦潮

新撰事蹟词考巻之八

シテ武朝十一年也由狀二自三十二歳之時」云々其

下武政卒後二水島陣事ヲ載故二今姑ヶ此年

係月日傳記ニヨル大日本史二阿蘇宮文書ヲ引

テ天授二年武朝與貞世戰于鎮西阿蘇家二此事

ヲ載セタル文書ナシ然シ了俊が七月十三日狀二

年菊池口水島原二陣をとり候訖於今は菊池勢一

人も不可出云々又同月十七日ノ狀=菊池の事は陣

同 上隈目隈部國音相

の城地味隈目城

木野城と夏

なと更

「近乃隈部事ナルヘシ

に兵根なと時分にて此城々の通路につめより候は

可落條案の中の事にて候一昨日より始て菊池

の穴川の上に候城をとりこしらへ木野以下の城

落候はんする事子細あらしと存候云々双九月六日

ノ狀にこれの事は三年田と申て木野の城に向ひ合

て候所一昨日より城をとり候て豐後勢を差置て候

水島の古城を一兩日のほとにこしらへ肥前

勢をさしおくべく候云々是等皆此時ノ事ナルカ年

號ヲ載ザルユへ考コトヲ得ズ申狀二了俊肥後二

テ水島陣挑戰數月終利アラズシテ歸ル大略符

合ス故二附テ考備 水島隈府西一里山鹿界

ニアリ臺城ト云郎チ菊池入口也

降親世還援」筑武朝亦復益發」兵到,市塚,大戰親世

敝走列城望、風敗潰武朝遂復定 筑後,轉武朝奉

將軍宮森城郡下地下皆效之大日本史作 宗

皇朝史略爲三成」其設著征西將軍系圖至肥前國府」

月日 大日本史引後愚昧一三九

菊池武朝申狀

ニナ

記

司惟武等多死」之

1

武朝申狀親善申狀阿蘇文書年

秋八月十二日戊午大内義弘幸三二豐之兵」軍 筑前蜷

打菊池武朝」兵伐」之菊池武義菊池武安阿蘇大宮

三大綱合戦」追散仲秋」畢

武元安二人

其後武朝拳」屬將軍宮」在陣肥前國府」運諸方

計策:之處今川仲秋壽相率松浦以下之凶徒」打

出博多」之間指遣肥後國守護代武國」 親善申狀此下載

菊池武朝申狀

島之後蜷打前

故係千此

掲年月然申狀此役二水

今川仲秋及松浦黨陣于筑前博多」武朝遣 肥後守護

武朝申狀葉室観申狀本書

代武國詩仲秋等狼狽散去

ㄤ州記

レテ

軍出 不意兵愕而退去親世聞」之班 兵於豐

「于筑之要川鑑安服

後武朝叉至而與田尻鑑安」戰

テ

ニフ

三年丁巳 春筑後諸將叛而應大友親世各出

兵竹井原 菊池武朝遣 合志六郎」兵先而討

俊

内

六月按二菊池傳記,,,,應安六年卞y較帥申狀毛

中ノ比下ヌ然ト干應安七日

„兩度靜謐,訖

制

く候間打立候記下

了

11

菊池武朝申狀

二年丙辰1年夏五月五日戊午 今川貞世 弟 右衛門佐

五月二十一日

判

了

へ~候恐々謹言

うに相計何さま御出陣をひそかれたく候これよ

↓相計候何御出陣~ S 石加几ォく候Z扎上「秋八月二十六日乙卯太宰少貳冬資與, 今川貞世, 戰

わさと申上候其の事等いそきくしめし給候 肥後敗死 5花菜三

かされ候はんと宮方のたくみにて候かとかほ

阿蘇大宮司殿

可申談相構細々うけ給候へく候當國南部事を[

彌 刋 也

永和元年七月十五日

狀如件

於肥後國馬門再 御舟等合戰尤心神妙也彌可致忠節

1111

候就中 宮此間阿蘇御社御參候由聞此事は承子

肥阿蘇大宮司殿

文獻叢書第三巻

後細候間、御参詣はかりと心へてつるに諸方の

勢を御籌策候由風聞候若然者能々其邊の事御了簡

僕はたとひ宮うち出させ給候と此間のやう

と存候に何程事はしとかほへ候承定候て其堺事

就中當國軍勢等忠否事就間護注進可有是非沙汰之

了俊按赤山城馬門未タ詳ナラズ馬門御船等ノ戰迹他

書見ル所ナシ故二附ス

へ候間南部を菊池口をならべてさたし候や

阿蘇大宮司殿

仲秋等來犯〃〃〃肥後 菊池武朝時歲十四將〃諸軍, 迎 戰

水島臺,破」之賦嘲申

今月三日御請文同七日到來候了 宮御參籠社事無

心元候之處小國御出候之由聞候目出度候此上者其 「

堺事心安候今一日急可有御出陣候南郡凶徒等打

出候間可加對治候處於赤山城合戰候昨日被打落候

間此次當陣勢を分菊池口河尻邊に陣をとるへ

較之時,分、叁, 勤筑州大王之御陣

武朝自纟 十二歲

武朝自〝十二歲較帥之時,

守纟 父祖行跡,從¸¸荷┐擔鎭西御大事」以來者文中之

頃了俊寄來肥後, 之時數月勵:防戰之武略於水島

陣,成〃了俊追落之功鎭西致六年、未夕武政在世/新撰事蹟過考卷之八

三七

先日重承候間委細申候其後無御音信候間諸事不審

三年也

大日本史曰足利治亂記喜連川系圖幷云此歲五月足

二五月八

御宿所

藤 原

三日

卯月二乃文中

門中將殿以上五人可有候下

武政者分」相氵 承庚申 肥後守護菊池武

榮三代記碧巖寺古過去帳〇大日本史誤作 五月 及武

政卒武朝申

【卒年菊池傳記等皆爲 應永六年十月四日,其認具著 于系圖

其子武朝嗣爲"守護

菊池武朝申狀

社參同二十一日御陣御出時來月初卯日 今月十九日 御所阿蘇文書

三年甲寅姚嘲擁夏六月二十六日 弘和四年著又八代城、延元元

年:詳y武光道猷7八代城三於對治7年月今

考所ナシ

詳 于征西將軍系圖 大御所據五條文書

書菊池五月大御所懷良親王詣 阿蘇

郡縣山鄉

背振山,三月三日癸亥戰 于山下 菊池不」利退學,

按故大王/事、林

小之籌策」服 大友少貳等於御方,二十餘年之陣 松浦起、兵至 筑前國,今川貞世大内義弘聞」之來陣

鎮西一統之大功者也

城,自令,對引治一免入道道献父子ı 之後申 沙汰大 天授 元年乙卯說明一個南朝公園補任爲五月十七 春 菊池

興國以後者武光奉」成„故大王入御, 最初於„ 八代

チ

夏秋義滿京都 武朝申狀諸文書義鎮

菊池武朝申狀

按=本朝通紀九州記菊池傳記皆此事載三代記》

九月降„義滿氵 之事」乎故不.

等敗還,鼬冬十一月十六日 壬午前 肥後守護菊池武光

六年

安利義滿自征 菊池i與, 武政, 戰, 于西國1 九月武政

ラ

秋八月二十五日己亥球磨郡地頭相良定賴死

二年癸丑批潮镰 秋七月今川貞世大門義弘 大友親 世等

幷」軍往塹 菊池三日癸卯與„武政,戰, 合志原, 貞世

降 義滿 據„後深心院關白記後愚昧記花榮三代記」

無-義滿犯 西國,之,且武政卒既在 六月,豈有1

松浦名調諧振山在夏大脚斯˙

宮嗣書故書,讓長文中中職稱

依御陣太宰府御成候畢高良山御

丁卯也

宮阿蘇山御參可有由被仰下候御供人々者藤井殿坊

十彼忠功致 度々合戰運 種々計

策,時分分, 早世之間武朝自三十二歲之時 阿蘇大宮司殿 阿蘇大宮司殿 應安五年三月六日到來

引此年 三月 肥後守 菊池 武政奉氵 懷良親王 起

兵謀」復„筑紫 與今川貞世,戰„于鎮西 阿蘇宮

此事載タル文書ナシ三代記二此事ナッ貞世未

ダ鎮西不來史謡レリ

三月三日

言

武光以下凶徒等依打出 前松本城御敵分合力由其

阿蘇文書

又按大日本史:花榮三代記吉川家傳阿蘇宮文書7

路 廻赴„松 浦 乎

戰

讀史餘論曰應安五年三月菊池今川下筑前國世振山

セブル

十三日肥前國小城郡合戰御方打勝之由注進到來 彤

花榮三代記曰應安五年二月十日筑前國兩所沒落同

チ

到來

豐西記曰應安五年今川貞世與 菊池武政戰 筑後

山崎,日田上野介詮永從貞世,戰死

寅武教與貞世,戰,干筑前三笠郡,大破 貞世之師,

崎城候+ 自入道方町俊進狀候定其趣分 申候歟 入道 | 文中元年日又
歸„遠江,四年二月十九日發„遠江赴‰九州 等¸要:筑後河 本朝通組

暦雜繪i異邦書皆誤而爲, 懷

王朝模索理性‟春二月十二日庚

冬11

チクル

十月僧祖至„明國,明主嘉」之齋„將軍宮大統曆文綺

紗羅

明史○閩書曰洪武四年賜 懷明 此冬菊池武政遣„弟武

教,討,今川貞世於筑前,貞世亦帥 大内義弘大友親世

菊池傳記

壬子刊朊明明今

之:從7阿蘇文書了俊應安四年正月二日/書狀

1今度九州之事承候間可罷下候就其者一向憑存候

最前御合力候者可爲太慶候云々叉義範七月四日

丿書簡=鎭西退治事時分可然候間先立罷著豐後高

申候歟入道

近日自長門關可罷越候云々叉應安四年八月三日同

人丿書:抑菊池次郎 去月二十六日罷越當國 候

雖然城近未差寄候用心之事可得其意候一渡海之事

中務少輔先立赤間關:下著候隨而入道罷著防州

之由雖其聞候猶可致急渡海之由今日以早舟申遣

不可有幾程候云& 是等丿書=mè此年夕〕事明

y鎭西要略:十二月十九日下„著肥前松浦 蓋

筑者宮方菊池以下各守,其所,而拒」之故:自海

聞候被御敵等排留候樣被迴籌策í、可目出候恐

謹所撰事蹟過考卷之八

按=菊池傳記二此月探題=補ストシ九州記ニ

故:唐人町下云圖書編三達加什叉哈家

著雜

三不亅 歸止亍此=居任今,伊倉町六皆 其子孫

八*七

和九年 婣字男新作立下銘又相傳明 人數 人來亍 終

|代記

|應永記大

年也

义伊倉邊田見村=弋墓尹y 曨郡林均 吾之墓元|江 赴錄西,

記转,團礡赞哦

分:大內義弘吉川經見,助之本R

代記

八 刂伊倉三明人/墓尹銘二皇明考濱沂郭公墓

唐人川ㅏ

高瀨伊倉一續丿海 濱=亍相隔7~半里|秋九月二日戊子足利義滿以,,其將伊豫 守今川貞 世入

本朝通紀明

残レル流アル

僧祖於明國,贈,,,,馬及方物車中圖書編

ヲ築キ潮留テ其内ヲ堅田トス丹倍津モ其時空田内二入今僅〓

將軍宮,秩以 爲 眞 天子也禮遇甚優武政乃奉」旨遣,

今八丹倍村下了!伊倉村屬z慶長中加藤清正 横島my海中二塘

チモラクマコトノ

祖道,,使臣趙秩於 皇朝 菊池武政輟氵 之太宰府,

一會同氵 高瀬河下

間内田合志鍋田等諸川/水一會同氵亍ハイノツ

建德調南朝公卿補任七春三月明 大

主

補任爲 七

子恆

霈方排記系圖 義

武元年二月南遊

林榮三代

申晦北主以,,左馬頭足利義滿 爲 征夷大將軍

公卿補任

寂7年六十六

〃

後高瀨津

正平十九年四月七日斧始

宮造營落成的 絕海土佐宮由來

海寓 肥

二十戊申

春正月二十詳也

北朝喹

改

1同

九國記年太略

元記池

,威稜沛然大

三年阿蘇家傳!

傳阿蘇七日己亥阿蘇

二月僧絕國人ナリ名一中津字一絶海自ラ

蕉堅道人1號ヌ十三歳天龍寺二入夢窓國師從

禪法っ學と應安元年妙佐ト同ヶ明國=渡り杭州二

寓シ秀潭和尚侍ス永和二年歸朝應永八年二月示

地志略引蕉堅稿日絕海祭„壽天錫文中予追„南遊,

寓 肥後高瀬律i絕海錄日應安元年師三十三歲明洪 | 三月二十一日辛卯豐後守護大友氏時卒冬十二月丙

按:高瀬津卜、玉名郡高瀬河口7云也此河菊池狹

元年庚戊啟元月9闕南湖公卿高瀬河下

y海=入昔、高瀬津及伊倉丹倍津三唐船來著ヌ

道了俊,爲„錨西探題恸訕

湘嶸三以„兵寡,不」得」至義滿

元和己未年仲吉日海澄縣二都男國,立二年辛亥。瞧春二月十九日癸酉今川了俊發,, 領國遠

應安五年八月トス倶=非ナリ三代記=應安三年九

月二日爲探題,十月二日自 遠江 上京十二月十六

一三五

形勢察阜ニシテ高陽地 非ス前 菊池川隈府ヨリ

ミル

カ雲上城ヲ攻トアリ深川ノ地タルヤ隈府南里パカリニアリ

菊城ト名”本據未」詳實錄亦無所見

雲上名八源平盛

テ菊城跡

城守山城下高瀬正観寺二村管内ニカカル

正平二十二年武政新築」之府城トス郭中二内裏

尾月見御殿御所小路守山御所等遺名アル將軍

宮御所 モナリシ故義宗迄十一代の居城ナリ

按=菊池城古ヨリノ官城ニテ 文武天皇二年鞠

智城ヲ修繕セシュト續出ッ菊池城内 兵庫鼓

自鳴不動倉十一宇燒失セシ事文德實錄天安二年二

記」之兵庫戸自鳴コト三代實錄元慶三年二載」之右

國史==此城 文武天皇 ヨリ以前ノ城ニテ破

壊等ノトキ國守官二言シ國二課テ修造セシム其

始書紀等漏セリ年紀悠遼今得テ知ルベカラズ

基跡不可」考則隆城深川

タカノ

11

今石標立雲

之」其痕深川村ト北宮村ノ間ニアリ

始祖太夫將監則隆菊池郡二下向深川村城築

テ菊城ト名ヶ叉雲上城ト公武政マテ十六代

地志略國志略古城主考菊池風土記等幷日菊池家ノ

肥後文獻叢書第三巻

自然下地ニテ城地ニハ堅要ナラズ菊城トハ他書二見當

ラズ一説上古城の防戦守成堅ス器資貯蔵

シ異賊襲來ノ備専トス故二運酒便利ヲテ地要害量ズ

深川土地職且川ニ近ク水陸八方便アリ古ノ菊池城 疑ラクハ

チ此ナラン日深川城跡ニ非ズ往古郡中ノ租税ヲ納ル倉舎

或

ノ也ト諸説紛紜確定スベカラズ試附註シテ考訂備ノミ・

日隈府城武政新築」之叉適當説ナシ隈部系圖

宇野持直文永元年菊池武房與家號改隈部隈

部乃城下之名也阿蘇文書正五年二隈部城載其

餘菊池ノ府城ヲ隈部書沙彌洞然長积 政十六年泳

鎮西要略 ニモ出又小代詫磨文書菊池山城トモ

アリ然レバ菊池家/居城則隆下向始 深川城ヲ

所居トシ守成堅固ナラサル故子孫内隈部二城ヲ

武光武政 至將軍宮ヲ擁テ西海底ス廼間吉

野朝廷弱卿相將士多肥後來テ將軍宮二屬從ス

於是菊池家勢威恰鎮西冠タリ故二其城!

雲上

記=菊池隆直

d

此頃兒島高德 篠塚伊賀守等來屬將軍宮菊池定 »

11

狭小ナルヲ以テ今外郭内城拓弘樓館ヲ增テ宏

之菊池城守山城軾神薬室親ト云是也據之則地

志略等説譲レリ隈部城一國守護府ナルユ

ヘ隈府トモ稱ス今熊本熊府ト云カ如シ

マノコロ

コトシ

正元年條見

アタカ

11

アタエ

ツ

サカリ

一三四

1111111

供事蹟通考卷之八

此歲阿蘇大宮司 此年菊池武政修 菊池城.

秋八月壬辰朔城伊豆守武峰

ツキ

、可 杦 然LF吒家乘絕傳ㄕヌ惜哉

光厚東某與,弘世,戰』於豐後,破」之

墓碑銘

11

十九年甲辰 湖当年春大内弘世以„ 周防長門, 叛菊 武

且ッ武光興國五年ヨリ此ニ至テ 二十四年 職迹不

秋七月三日庚午前薩摩守護島津貞八入道道繼

大平記菊

「五月トスル姑ヶ鎮西要略ニョル

又氏經が貞治二年閏正月四日阿蘇惟村へ

狀:抑*凶徒退治事廻 思慮 致,,籌策候武光未當

國居候合戰之事大友度々雖 - 催促¸候不道行」二十二年丁

二十二年丁未端鎖 夏五月二十八日癸卯 將軍宮傳勘

候間不」安_所存 候云々叉賴房注進狀 四 月 11 合戰」解由次官五條賴元

四月1合戰 解由次官五條賴元卒 冬十二月七日己酉征夷大將軍

未 落居 劇務之間 云& 是等二mèト丰云去年十月|權大納言 足利義詮薨醫院,沫各道樹道獄珠此十二月晦日

my當年夏三至武光豐後留n ト明也又氏經沒調從一位此歲菊池武光讓,,,,家於 長 子 武政:武政襲,封

按=武光家ァ讓年月考據ナシ故二姑此年=係

11

豫守護河野通直爲細川賴之一所」攻退伊

豫國 太宰府】歸,,將軍宮,又赴豐後國謁 菊池武

光,十一日丁酉至肥後國

二十一年丙午到籟 春將軍宮命 河野 通直, 與 肥後

諸將,出船軍,伐,豐後臼杵、神拔、守江、周防等海

濱賊 夏四月大友之兵攻 豐後宮熊城 菊池河野討平

之讪傳記

豫章記

爲肥後守護i

五年

承候了

左大臣

北朝貞

貞治二年卯月日

刑部大輔判

御證判爲備後規言上如件

按:右注進狀:氏房鳥屋城7守武光本國/通路

郎平被疵畢

子先」是伊二十年乙已,賴春三月二十八日丙戌將軍宮以 惟澄

本點

同二年潤正月廿五日

惟澄若黨進平五盛見討死若黨後藤太實房中尾兵衛三

之二子惟武 爲阿蘇宮大宮司 是謂,南朝大宮司,兄惟

以前條々大概如斯此外不可勝計合戰未落居劇務之|村從足利,故是日:
北朝大宮司,故秋八月二日戊

砌日數相隔者依可有公私不審先粗所分注進也早預

治秋九月 菊池武光遺, 弟武義及城 武顯鹿子木 貞員,往

責,之氏經分,子松王丸,率 少貳賴尚大友氏時宗像大

或爲 十月二

宮司等,逆 戰筑前長者原, 二十七日庚子未知孰是

武。之兵敗武顯勵」衆殊苦戰凶徒勢盡乃 敗走武 光繼

至與„武義,合」軍追至三豐後府,氏經氏時奔而退,„高崎

城,賴尚逃 松岡城,武光駐,軍於府1分,兵士,圍」之

トス

按氏經豐後:來此文書二mèト干、去康安元年

!十月三日ナルベシ是年十月トスルトキ

九月2長者原合戰前後相齟齬ヌ然LF吒亦他書考

證スル所ナシ故今姑太平記等從此藏六月

阿蘇大宮司殿

左京太夫氏經判

十月十八日

爲凶徒退治去三日下着豐後國府中參御方可致軍

忠之由相觸分國之軍勢等合戰之事御籌策候者就入

候恐惶謹言

阿蘇文書

而來從焉傳訌九州記

大平記菊池

十七年壬寅批到貞治玩年祂九 足利義詮以 斯波左京太夫

氏經,爲„鎮西探題,夏六月至ņ 豐後府, 少貳大友大悅

少貳大友大悅

肥後文獻叢書第三卷

|

若黨泉右衛門太郎高清討死若黨吉見孫三郎中間

六郎次郎源八七郎次郎被疵畢

同廿九日

六郎次郎彥五郎源内被疵

名字

分捕頸一铷 若黨進又五郎窪次郎:中間後藤次

不知

同十一日

武光一族鬼塚左衛門次郎討取之上氏房親類大窪

孫三郎若黨兵衛三郎左近太郎被疵

貞治元年十一月十日合戰之時

志賀藏人賴房當病之間雖|不|叶„起居,自去年八

月,參„住高崎城 伺ň候大將御陣,致„ 日夜警固 之

上差. 遣子息彌太郎氏房於豐後國大野莊鳥屋城,打

塞凶徒武光本國之通路致不退合戰之間連々軍忠雖

不遑注進

、之氏時賴尙罪」 謝而又降,,武光,自|此西海一統屬+南

菊池傳記

朝,將軍宮在 太宰府 |太平記

志賀賴房注進狀

ユグ

十八年癸卯 5 菊池武光踰年在„豐後, 圍 諸城, 攻

十八年癸卯结

之夏五月氏經兵疲力窠脫」 城逃去終爲、僧不、知」 所

記九州記

記菊池傳

111111

新撰事蹟通考卷之八

此年阿蘇惟澄補阿蘇宮

111

日中納言源顯信北畠中納言源信親等卿相新田菊池一

1

宮司－女書

11

1

乙酉將軍宮率 武光以下諸軍,攻, 香椎營, 少貳大友

11

十九日 庚戌武光督

筑後國地名

渡

11

ワタリ

飯盛,偵„其動靜,八月六日甲申隆顯襲破氵 飯盛, 七日

逆而隔 筑後河 前1

水良親王,從征 少貳賴尙,肥後筑後豐後大隅薩摩日向「宮將 兵至,筑前博多少貳賴尙大友氏時來拒而陣,

六國之官軍來從焉總軍八萬餘陣 筑後國 高良山柳坂|香椎 松浦黨乂據飯盛山 菊池之族城隆顯密放間於

テ

的也不可以實讒故句應,秋七月菊池武光奉 征西將軍懷|十六年辛丑或
鹹咖

北北朝康安元年地秋七月菊池武光奉, 征西將軍

跨

其時勢得失i然系圖其家

庚午繁氏於. 讚岐國,病死湘钏孫劉太平記○參考太平

「記作 延文三年,爲」得而評氵 ル

按此時鞍嶽雪ノ積ショ見テル歌武光

十一月合志定實叛,菊池 三日丙辰武光討而復降」之

春三月十三在筑前三笠郡故又謂三

傳記

菊池

五年

十五【北朝延

カマト

笠山,今竈門

山乃此也

延文承候了

四年十月廿日

進上御奉行所

按:筑後宮艹 懷良親王7斥挾間赤松玖珠八町

辻皆豐後國地名此戰跡諸書載元所武

光日向3)歸路è弋y又六月益城郡三船

隈莊甲佐/役是亦見元所頃年武光兵威熾

冫亓西海悉夕其麾下二從ヌヌ下前件丿如冫殊

七月大軍ヲ起テ少貳ヲ伐然ル二六月北兵來テ三

船等所戰フ大疑ベシ故附考備フ

夏四月足利義詮以 細川伊豫守繁 爲鎮西探題 六

月九日族將士多戰沒 懷良身被三創,武光及子武政自奮戰

當」敵十七合遂大破」之賴尙潰走而保_寳滿嶽i武光亦

以其死傷多, 凱歌而還,本國1 前三

本國,冰駛菊池傳記 樓滿獄

年庚子刻日庚子 阿蘇宮火錒 喀冬

由來記

鞍嶽は銀覆輪か今朝の雪霰梨地に見ゆる山形

鞍嶽合志郡,主山ナリ菊池阿蘇合志三郡二1作 御名嵎 賴尙來繩山鄉
耳峀山

､兵先渡而攻」之賴尙不」戰而退里許壁 筑前大原 八

月十六日丙子大戰 于大原 洞院權大納言藤原親弘春

月十六日丙子大戰,于大原¸洞院權大納言藤原親弘春

聞 松浦黨之敗 大怖空」壁潰散軍資器仗盈 積道路1

大平記菊池傳記 櫻記作 六月,毛

池傳記◎櫻記作,六月,毛

利家本太平記作十月,今从三二書

大11

1

丿城走據 菊池傳記按,

攻, 志賀賴房於豐後岡城,十餘日又往而圍 高崎城,氏

時逃」城而走武還」軍賴房子氏房出」兵戰,九重山 武

志賀氏房申狀 氏時逃

光討破」之歸 菊池

西將軍據志賀書

悉破, 其九寨, 斬首 三百餘級 「記菊池傳記 奉三征武光

奉„征西將軍宮,親率」兵先赴, 高崎城, 時聞- 賴尙集

」軍

ﾁ

十四年己亥150钝春三月菊池武光 欲- 與 少貳賴尚阿

蘇惟村,合、軍討 大友氏時,而來」知二人亦有異志,

公鄉補任足利

爲„征夷大將軍」系圖太平記

從豐西記

應」 之扼„豐前筑後之阻斷 武光之歸路,武光

11

山國久於六笠城,大友氏時逐畔 菊池¸而據„ 高崎城,

豐前國城井之領主也 金勝院本

日田上野介詮永

干系

11

守冬綱

友家之居城

在鹽後國大 宇都宮大和肥後文獻叢書第三卷

太平記名作„„宏知,非也傅在三

、豐後國日田之領主也太平記爲:肥前 刑部大

輔 諸異本太平記爲 肥田民部大輔正員,今

日田傳記

不敢屑,先往而擊,國外之子民部少輔重隆於三俣壘,

十二月二日丙寅武光援,三俣, 國久懼而棄」城與三重

隆,倶逃而匿„深山,武光旋、師氏時等見„„其鋒鋭,畏縮

不出,十八日壬午北主以尊氏之嫡子左近衛中

將義詮,」兵起 太宰府,惟村結|九寨於小國,拒„武光」乃進中尾兵衛三郎氏平朧中間藤次室朧

一去六月廿七日肥後御發向之間自最初致御共三船城

攻之時若黨中尾小三郎頼平謝進平伍盛見謝同

限 庒# 甲 佐 御 陣所々致忠節候間且預御注進且賜

御 證 刋 欲 備後證候以此旨可有御披露候恐惶謹言

ケ

一御敵高崎陣引歸候時於當國九重山致散々合戰若黨

一今年三月筑後宮井 菊池武光以下凶徒當國打入之刻

頼房城墩寄來候間既二十餘次月日夜致合戰之處彼

逆徒引退高崎城罷向候間塞所々之通路廻方便抽忠

勤訖

一去年十二月筑後宮狹間襲來之時依爲親父藏人太郎

頼房當病氏房自最前馳參赤松御陣之處宮勢退散之

間迄于玖珠八町辻致忠節

志賀彌太郎氏房軍忠事

志賀氏房申狀

ス

按:本書=、阿蘇大宮司一云名曰不」載乃 惟澄

尤長子惟村也其說系圖惟澄ｶ譜中:詳也小國九寨

今:其跡尹志賀ń大友丿一族岡、其居城今竹

田下云九重山、豐後國直入郡:尹丿今六久住下書

11110

新撰事蹟過考卷之

咕 秋七月菊池少貳攻 筑前飯盛城,一色直氏來陳三割料路建議松, "冬十一月菊池武光將,五十餘兵,討 畠

1

• 版年月卒始據 大將軍權大納言足利尊氏薨 關東市長者襴任園太曆常樂記

不､載 今姑據

氏¸爲:鎭西探題 弟右馬頭範光爲副 公卿補任皇年代略記太平記足烈

太平記九州記◎本書

本史

爲,"武光之下,故密復通 尊氏 8 夏四月戊戌 晦征夷

八年癸巳秕劇| 春正月 足利尊氏以,一色左 京太 夫直

菊池i勢 聲大振„九境ı記本朝通記

然少貳大友曾憤

太平記菊池博

2物也尙懷良親王丿系譜中詳

4自亅是鎮西將士恐,其勇勢,悉降附唯畠山治部大輔

土人字》亍王墓叉影塚下云靈牌

リテ

防拒不､利戰殆危告,急於高良山, 菊池武光馳: 到古

太平

11 X

浦¸破 一色之軍,走,大友氏時,氏時終降菊池,於』是

賴尙得､免乃貽氵 血書,謝,武光 直氏兄弟遁還 京師

直氏及大友氏時逐至而圍 古浦,賴尙

11

|

寺後寺今ム廢跡下亍悉地院 森下稱》

一色直氏與,少貳賴尙,戰 筑前三原,賴尙敗退 古 浦

11

钝春正月菊池武光至 筑後」屯三高良山

要略

或作三頭興寺 孚 名和顯興 十三年宗璨和尙八悟真寺開山大原字和尙同學,人也寺/十二年丁酉紕潮 秋閏七月十五日丁巳大風藤崎宮倒

地廢亍今其舊基7失ヌ桐齊世談:宮地村洞泉谷1 冬十月一色直氏會 „„大友氏時,據„筑前生葉城 少貳賴

傍:親王 父天皇及尊母/陵7墓建氵 叉梵剎7開 尙請„援於肥後 西

池郡正觀寺丿開山大芳恢和尙7藝祖卜<二代玉澗｜前,網

要略

九年甲午 和三 秋九月菊池武光與一色直氏,戰 肥

派正平七年菊池武光親王命依テ之ヲ營建シ菊

禪宗 臨濟 日當山 中國蟶源,陳 ㄘ此得也故書之

1

11

地志略 日 護國山顯孝寺、八代郡=凱西妟略O阿蘇惟澄正平十一年六月申狀去正平八年

11

‟戊戍姚 テ顯孝寺ㅏ名ヶ靈牌ヲ安置ス

菩提·所改建而今代町久巖

寺也下大非也久巖寺始在國 霞永十年移八代石原町明楚

古一作,小筑前國

石和尙題 大芳妖和尙之像,讚中自 正觀 遷 顯孝非顯興可知 城

有能古浦 恐此也

也又寺迹在 興善

寺村 是又誤也

二陵7:尙現存

寺,自」是里俗遂 停 顯

孝寺院,唯稱 悉地院 云

今神宮寺內二傳レリ實古雅ニシチ其時

爲„„妙見社別當神宮寺之支配,其後

永祿天正比神宮住職法印悉地院某隱 居此

國久從,,北朝守,日向國六笠城訓當,此時,朝廷

稍 衰微朝貴之 諸臣及新田之族或名和顯興多來而屬

大日

敷等付而當寺=渡 之云々

十通餘今二傳レリ

其外大友家/書筒等

コモリ

|山城國醍

相模守武

醐寺開山延

九年七月示寂

11

限 小路 銀細工【 開基密場鎭西眞言之根源而稱, 談義所,

此歳僭快承修 寶成就寺

于今 云煸坛南北共!此年高田御所,勸請下又不知

孰是;此後修需等ノ事社記－委故=略之

寺記曰玉名郡高瀬真言宗山城國嵯峨大覺寺末院不

二山平等王院寶成就寺者延喜四年聖寶僧正

驗,以」故進 獻太刀及弓箭,延八中 菊池則隆修„營

宮殿,寄附水田六十町|云所」祭神東殿中八幡太神

右神功皇后左仲哀天皇西殿合祀阿蘇健磐龍命,中

殿日 寶藏間i納 寶記錄等 南八幡宮者天平寶字

六年早稲田御所所」勸卽請宇佐八幡太神於此地:

所」祭神南殿中八幡太神 左神功皇后 右阿蘇比咩神

北間相殿合 祀健磐龍命 光仁天皇所」納寶鏡相傳

肥後文獻叢書第三卷

此年權大僧都法印快承再,立之 寺二高瀬楯應永二十年卯月二日/寄進狀探題奉行板倉美濃

守入道 宗壽ㄤ 寄 進 狀踣寶 巘新玕等王院門前犀數兩

屋敷,以上三箇

所井稻佐村内田地二町云々應永十六年四月七日右添書卯月七日己

酉巳之時板倉禪門宗壽當寺光臨其時之寄進狀也祐筆木守禪門也 同

十九日辛酉午之時高照代官河上右宗亮

守 助殿屋園太此年懷良親王建一寺於八代郡名"顯孝禪寺】

曆日文和二年正月十日入」夜五辻宰相入道來

語云直冬降 南方 舊冬被、下綸旨|云々十一月十二

較0元合戰敗續暫隱 `長州豐田城 | 通 菊池小貳

同相引憑菊池 云

七年壬辰朓潮校園朊晦祂九足利直冬歸順

本史

ベシ

」見之加 之以近鎭西 三方:分L大亂L攻

職止日ナシ然ルニ菊池二方ノ大敵ヲ受遠出テ多

年薩摩三陣ヌ疑℃要略非如」此要多⺀深考

シカノミナラズコノゴロ

按武重興國二年卒誤也又島津道鑑頌久興 國三年

既二官軍二降ル其後又宮方背クコト諸書未

鎮西要略日貞和元年己酉蛹蘭嶼 島津下野守 同出 羽

守等屬武家,而在京一族和泉次郎忠平樺山兵部亟

北鄉町田屬宮方 宗領氏久挑戰宮方 島津築„„

平佐河内,延„„菊池 同二年菊池武重軍 奧薩摩 北

郭伊豆守迎接之 武重陣 薩摩 有」年觀應二

軚 四月武重先,是拔„和泉城 略 薩北郡 在國 六年

所」陷城十有餘也於」是島津氏久立:降旗,武重求

¸質而歸„肥後;

三元

-南朝與

新撰事蹟通考卷之八

承候了判

正平六年十年十八日

按南宮,

三池助太郎賴親申軍忠事

三池頼親申狀

敎等攻」之賊逸去

逌 石見 4十一月先」是足利尊氏乞.降許」之四日庚

冬十月丁丑朔賊又守„關城,三池頼親惠良惟雄坂梨惟 此月太宰少鐵西
要略

按二山鹿城、天正六年丿條=委/載」之

按:關城、玉名郡大津山關:7故=關/城下云

惠良筑後殿

肥猪ǹ南關/東7

正平六年十月一日

守殿

勘解惠良筑後由次官判

將軍宮御氣色執達如件

勘解由次官判

正平六年十月四日

追落山鹿凶徒之時被致軍忠之條神妙者依

將軍宮御氣色執達如何

阿蘇文書

惟敎爲代官致軍忠之條神妙者

城 惠良惟澄攻拔之

關凶徒城追落之時舍弟豐前權守惟雄坂梨子兵庫助

阿蘇文書

菊池武光破直冬於筑後,直冬賴尙走,,,,筑前秋月,時

進上 御奉行所

敗歸 豐後 武光追至 太宰府。 此月 北賊據, 山鹿

貳賴尙歸順降 菊池武光 菊驌略額足利直冬

正平六年六月二十九日馳參肥後國肥猪原同十月一

日關城御合戰之時以親頑若黨等攻入千當城西城戶

口令追落之次第御見知畢其後供奉干筑後國溝口城

分在陣干瀨高上莊而致警固畢早任傍例賜御判備

後證粗言上如件

戌請-車駕還+京師-詔聽」之七日癸丑廢 北主及太

弟直仁親王:去 觀應號 奉 正平號 後叉和議敗材中 此

年懷良親王修 伊倉南北八幡宮伊倉南方村ニアリ北八幡宮伊倉

北方村ニアリ其間相隔ルコト一町バカリアリ

伊倉宮舊記曰北八幡宮者天平中 大神種麻呂所 勸

請,也或曰和銅二年 元明天皇爲 勅所 鎭祭於

斯地,也故至」今在 勅使代遺様 矣厥后天慶四年小

野好古奉」勅討 藤原純友線之日祈 勝於當社 獲 其

夏六月足利直冬太宰少貳賴尙將 數千兵 來而討 菊

池,河尻幸俊亦舉」兵應」之菊池武光接戰大破」之直冬

筑後肥後當時分對治所々訊追而可言上候恐惶謹言

按=此注進狀本書散逸シテ追書マデ遺ルヨシ故

三年月ノ誌》姑/此揭考:備菊池本城

隈部城/事ル*隈部、今2隈府y正平二十二

年ノ條辨入

惟澄此間合戰之次第同注進候此外肥後國菊池本城

當時合志入替武士分楯籠去十五日武光分發向追落

外城燒拂打取凶徒二十餘人候了同十六日追落隈部

城筑後國吉木一族等去年屬朝敵引入冬綱代官楯籠

之去八日夜當國官軍寺尾八郎相續光五郎三郎永宗

打入彼城討取守護代薩摩孫三郎男候了新田宗覺手

物里木西智手物等同合力同十六日凶徒元吉城引退

了

追言上

同注進狀

申狀建武三年九月合志太郎合志城7載入皆佐々木

合志ヨリ以前家筋ナリ詳合志系岡語ス此戦

迹他書出吵故:附錄入

肥後文獻叢書第三卷

京都代官二人遂電候間爲 征罰,前大納言 8 幷師直

可發向Ģ云~十七日一色 飛脚到來 大友少貳悉與黨

條勿六年辛卯,鐵 秋七月足利直冬少貳賴尙帥ノ師到 筑

大友氏時來會„生葉 八月與三官軍戰 筑後, 九月

後

11

朝觀

リ

冬十一月九日庚申足利尊氏以小代隆平爲 玉名 郡野

原西鄉增永名内迫村地頭職 刘幹十二月二十日辛丑尊

氏以 宇都宮公景 爲 玉名郡木葉村等地頭職,H

按三河尻幸俊菊池=降 リ從Π - 甲佐文書- 毛見人

祇園執行日記日貞和六年十月小十七日鎮西右兵衛

佐直冬被、擧氵 義兵 仍小貳大友與力之由飛脚内

到來小貳代官在京之處一昨日逐電又越中守殿桃井

刑部大輔子息兵庫介在京之處一昨夜逐電云~就之

來廿五日將軍可以有:御發向之由有:其沙汰 西

探題一色入道籠,,干肥前國草場 云

論也一色相┐憑上松浦輩幷草野等,如」形籠城

將軍爲〝發向,者定無子細,歟之旨申」之

園大曆日觀應元年十月十六日 傳聞 九州 蜂起 直冬

靡|九州之勢 大友少貳以下無,不」歸」之隨而大友

賴尙引.兵還筑前 幸俊削髮降 菊池詷

事蹟通考卷之八

悅是故迎,,直冬,欲 逞權勢 要略

西

九州記

色道猷爲 探題 掌,九國二島之成敗, 賴尙不

太平記

月阿蘇此冬太宰少貳賴尙來

令旨家傳

歸原阿蘇文書

大宮司惟時勘解由次官判

按=合志家系岡ニョルニ佐々木源氏ニテ長綱ト

云者延元年中始テ合志リ眞木村:住ス其子隆

敏其子兵木太郎隆道二男合志五郎定實而行

幸隆ナシ東鑑=治承五年至合志太郎アリ蒙古襲來

合戰繪詞書:弘安四年肥後人合志太郎十六歳小代

了者

被問食正平五年三月廿日

右惟澄率日向國高知尾莊軍勢等去十日馳越菊池同

十二日 西刻 押寄凶徒合志能登守幸澄所楯籠之菊池

陣城始合戰六日夜致軍功畢然間當手軍勢八人所

被疵也仍同十七日 西刻 凶徒等分沒落畢然者賜御證

判爲備將來之龜鏡恐々言上如件

阿蘇筑後守惟澄申軍忠事

氏以,,詫磨別當宗直,爲 玉名郡臼間莊地頭職

阿蘇文書惟澄申狀

正平五年庚寅批到懷地玩年祂二春二月十八日癸卯足利尊

編年考徵六

新撰事蹟通考卷之八

圖著之竹城天正六年條載」之一

來"肥後河尻, 直冬尊氏之 庶長子也 鼏氏弟直義 養爲 貞基於竹迫城, 陷」之

冬十

11

太平記菊池傳記O隆房貞基之傳系

力

四年己丑紕] 秋九月十三日 辛未足利左兵術佐直冬

大將;擊 宇都宮隆房 斬首一百餘級攻,,鹿子木

冬;蔿

惠良筑後權守殿

既而詫磨別當宗直促, 諸郡兵,與、之詫磨河尻立,直

コシ

元

賴

九月二十九日

此二通同日同之書阿蘇家亦有」之

豐前藏人三郎入道殿

御在所候不日而被馳參候千萬期見參其子細分申

判 殷氏也

貞和五年十一年十一日

抑道就去二十六日下向當國今明可襲來

兵衛佐事可出家候由仰遣候處落下肥 後 國 河成

只今酉刻自筑後馳參當所候硐注進之趣披露候了

惠良筑後權守殿

津云~不 日 打向在所遂索懷無爲分上洛者不及子

細無其儀者任法可致沙汰候狀如件

正平三年九月二十九日 勘解由次官判

武藏守師直

征西大將軍宮仰執達如件

上 三池一族御中

大切之士也者依

豐後文書

兵衛佐殿被落下九州之由其聞候就之自將軍家被

自最初我軍忠之次第注進之趣被經御覽了云勇敢

下御自筆御書候案文進之候若被餘手事候者任法

可有計沙汰候旦月關東近日御上洛候間重可被仰

候也恐惶謹言

九月二十八日

阿蘇文書

太平記菊

阿蘇文書 此文書略而不 寫

三池文書

本書猷作、祐叉菊池御所據

直 所、逐來„河尻津,河尻幸俊大悅居自己家

諸,子始條賴元又聞」之肥後文獻叢書第三卷

來 菊池| 奉ņ將軍宮之命, 徵

云忠節頓以可謂拔群動功之賞事可被行殊賞之由

先度被仰了道祐下國候間今 明可競來 御在

所云,以 夜 繼日可馳參多年之忠遊此節者彌可爲

假使也此一條更々不可有等候恐惶謹言

直冬補西國探題, 居„„備

子始直冬補 西國探題 居 備後國鞆 此月 高師

新撰事蹟過考卷之七

良塚ノ山陵トス然ドモ其塚城見二人!

山鹿相良日向ノ二村アルヲ以テ合附會シテ相

ヒラ ヒムキノ

因葬 日向高屋山上陵 此山陵大隅國肝屬郡

内浦鄉北方村高屋山ノ巔ニアリ皆如」斯然ルヲ今

ニヒコポデ

イタキニ

N

隅:毛有」之書紀 瓊々杵 鼎崩因葬,, 日向可 愛之山

ヒロサ

最故二神代ノ山陵日向ニアリトスルモノ薩摩大

ミサキ

贈淤大隅始羅四郡ヲ割テ始テ 大隅 國

オホスミアヒラノ

二國一古へ日向國ノ内和銅六年四月日向國肝坏

キモツキ

萜熊毛郡阿枚皆同名也

陵大隅國肝屬郡姫良鄉上名村ノ巖中ニアリ吾

平良字異ニスルノミ今巖洞東向窟中潤五

畝陵上祠,立前二小川隔テ廟アリ是ヲ鵜戸

權現ト稱ス即チ葺不合尊ナリ尊日向國那珂郡宮浦

村宇土濱=降誕ス故廟號其生土ニヨル始ヲ忘

ルコトヲ示ス或此姤良鄉混テ始羅郡事トス

嬌與始字,不」同大隅郡始

其地懸絕同所ニアラズ大隅薩

11 11 11

アヒラ

キモツキ アヒラ

按=此塚ヲ以皆極テノ山陵トス然レドモ吾平山

ハヤ

平」所」今我吾平之側有:日向村,則其證最照然

天皇葬 日向緑之中山之巔,今此山陵薩摩國高

城郡水引鄉五臺村中山頂ニアリ叉書紀彦火火出

見鋒崩越前守 武宗」

秋九月十七日辛亥足利尊氏以菊池

爲三詫磨郡六箇莊小山村地頭職

六日庚申一色入道道猷來肥後將¸„菊池御所 五

1 1111]

一記系:

二十

アマキ

カ

六箇莊詫磨郡内今村ト爲テ盆城郡味木

莊二屬ス守富以下,莊村郷莊沿革ニテ見ベシ惟

澄此年三月筑後權守=任ズ後惟時ガ跡ァ繼テ大宮

司トナル詳二系圖二著ス

詫勝文書 武宗之傳

正平三年九月日

之傍輩之日若有三申仁者可申披者也仍取

詮言上如件

テ

同今月十四日馳向六箇莊 燒┐拂御敵宅所等

其外先々守富隈牟田河尻詫磨鹿子木須屋立田山

本以下燒拂之連々所」致合戦」也九惟澄自最

初 大小之合戰數百度所討 凶徒數千人其間

自身被」疵事七箇所分 討死, 親族若黨百餘人也

詮惟澄立申荒涼軍忠」否以誓文有」御御方

恵良惟澄申狀

墓ニアルベカラズ 地誌略ニ吾平山 神武天皇

妃吾平津媛,舊跡ナラント是亦相良ニョルノ説

ナリ

葬 日向吾平山陵 蓋此也歷ñ問日向國, 無- 名,, 吾

條賴元/書7小次郎惟澄此年三月筑後權守任

ズ然レバ未ダ不」任前ニシテ此歳二月ナルコト知

11

ミサキ

按文書年揭ズ然ドモ別二恵良小次郎ヘ送五

庞作此時刊行 永正十四年 富田安キアハセスノミコト

ナラン

塔供養の事

/狀1吾平·

元判

寺記略日吾平山相良寺有 山鹿郡相良村 天台宗

足候向後者無内外可申承候由存候御同心候者可

爲本懷候 抑將軍宮此間御逗留菊池諸方事被

御籌策候彼左右己到來之間來二十七日可有御進

發筑後國候仍被下令旨候御參候者尤目出相存

子細以御使分申候恐々謹言

賴 元

アヒラ

アヒラ

惠良殿

宮御所依御願事候自去十二日御參籠吾平山候

其間如斯次第不及御沙汰候二十日菊池江 還御後

刻可參申之由用意候

正平三 同廿六日到來

六月二十三日

11

阿蘇大宮司殿

先日於御船御所參會之時申承候條日來之本意滿

阿蘇文書

勘解由次官判

二月十五日

日二十日丙戌還 菊池,

來二十七日爲對治於凶徒可有御發向筑後國期日 夏六月十二日戊寅將軍宮如 山鹿 詣吾平山 留禕九

以前必可被馳参菊池之由依仰執達如件

文書

數通アリ

阿蘇發 菊池i旨賜 分旨於阿蘇

ベシ三船御所益城一造寺系圖

11111

ミフネノ

1

肥後文獻叢書第三巻

二月二日己已足利尊氏以 龍造寺民部大輔家平|爲

玉名郡野原西鄉增永名地頭職 淝煇記龍 十五日 壬午

先」是將軍宮在 菊池,自爲」討i筑後凶徒,二十七日可

郡御船城ナルカ詳ナラズ將

軍宮宇土ノ津ヨリ御船ヘ渡御其時賴元阿蘇惟時ト

面會シタル歟此比惟時北朝二從ト云ドモス帰順!

志アリ故二二將軍宮調シタルナルヘシ賴元夫

年來惟時歸順ヲ勸メ諭ス書阿蘇大宮司殿

二月二十五日

號 醫王院 弘仁年中傳教大師所開闢 本尊千手觀

阿蘇文書武

音大師之作也正平中菊池武光加:修造 阿嫐交 武恍

乃チ此時藝守 直方 叉加修

理 寺後山數百步有 塚塋 卽鸕鷀草葺不 合 尊 之

山陵也 水味齋吾平山記日書紆尊崩:西州之宮,因

按:宇土津云宇土郡ノ海邊ヨ云

及晚陰追散凶徒令破壞了仍御敵數百人被

討死少々有之云

勘解由治官判

阿蘇大宮司殿

正平三年正月二日

也仍執達如件

抑去月廿五日大友舍弟孫次郎引率數百勢寄來當

畏分注進言上候

所有著御當國宇土津也最前被馳參者多年忠節之

惟澄注進狀

阿蘇文書

及系

軍破

行據 大

惠良惟澄等官軍馳向而與」之戰敗 三年戊子1躪籟春正月征西將軍懷良親王來…宇土津

兵構 城於

二年丁亥,钉秋八月二十五日乙未大友氏行率 數百- 幸俊

池武光 爭」勢戰,干所記守

按三宇土郡郡浦云南邊ノ海濱=y阿蘇四箇社 臣長通之地 副致去此歲河尻幸俊屬 北朝, 足利

領ノ一ノ惟時既:北朝:屬ヌ然:一色道猷詫磨|尊氏任為„肥後守護,於」是幸俊改…名於肥後守,與菊

ニシテ惟時ァ討シム疑ベシ故ニ附テ考ニ備フ

小代文書長

冬十月北主以肥後國山本莊北方,爲: 我前太政大

詫磨別當太郎殿

故:申狀;略

貞和二年十二月三日

小野、今益城/守山鄉屬入城跡、南小野村

楯籠云★早向彼所可被致軍忠仍執達如件

沙

阿蘇大宮司惟時於肥後國郡浦 墩墩招寄凶徒等

正平二年九月廿日

詫磨文書

可有御披露候恐惶謹言

云陣内城丿溪超西山:7y向坻7米山:取下尹元

卜牛、黑駁城、今丿陣內元ヌ玉明也火種山城下

モデナリ 天正十五

官軍等多被疵就中當手軍勢數十人被疵若黨一

分討死候了重囚徒近日可寄來之由其聞候以此旨

丿後山一尹明惟澄正平三年九月/申狀毛載」之

ı 河尻肥後々:不」克備鼬鐵配和阿蘇有資和五年

國小野莊相構城槨候之間官軍等馳向終日致合戰

志此時可顯其間事以經藤被傳仰之由所被仰下

要害後山也

可三八代出入斷絕之間不廻三時日」馳向坂

向城於米山之處内河縫殿允打引越於此境, 者偏

可爲三惟之計之由依、申令」蹈之處頼侖一

族對馬豐前守筑後孫次郎以下數百騎寄來之時八

代御方被」追落要害 之間竹崎左衛門太郎相共

追落彼凶徒,數十人被 疵云~其後 頼尙義直分,

八代南北,以三和談義;今宮荒尾二箇所御方城迦」

黒其後御馳越小川境篠尾構城郭之間惟

澄雖日々合戦」自三八代終以無合力者也

力

頼尙重而分三下國: 正平元年閏九月二日攻,被守

山關所」之時自小河城下合致散々合戦

追 落馬物具 日奈子井高木兄弟弓削丹次以下十

餘人討取畢次日追斗掛大野原迄;入.夜雖、支 阿

惟澄正三年九月申狀

秋閏九月惠,惟瓷及 大宰少甙頼尙 屢戰千八代

惠良小次郎殿

自 八代御方・不及合戦」之間不」能

力;其後今宮要害之時御方人々相共日々 合戰畢

次山崎向城安見崗二箇所御方 相共落」之畢其後

御敵忍 取種出黑駁城 之間此所御方片野川 出宮地古麓高田ヲ歴テ今ノ道二

合加藤家ノトキ今ノ道ヲ開クレカ是ナルコトヲ

シラズ阿彌陀峰大野原ヨリ宮原二通ル道今

阿彌陀路ト云今宮八代郡早尾村ニアリ種山同

郡ノ村名早尾ノ山越ニアリ南種山,枝村=陣内黑

淵二村アリ今黒淵/分内城跡ナシ陣内二城ア

昔陣内マデカケテ黒淵村ナルヲ城跡ノ所ュヱ後

陣内村ト名ヶタルナルベシ駁淵國音相近シ米山

-

п

大野村/地名ナリ小川年代記細集日古ノ官道

- 竹崎 小野部田 小川經テ吉本二入

豊福ヨリ南宮原邊マ

野原ヲ過キ蠣原ョリ今ノ道出 山際マテ皆海也

桐齋世談大野原ヨリ 立神二下り氷川渡り種

山二至り龍峰後七曲坂ョリ猫谷二下り向坂登

山ニアリ大野原阿彌陀峰八代郡道前鄉

トリ守山是川一部田村南隣城

菊池隈府城

明: 能因法師が歌枕二肥後守山トアル即チ此也

山御所

益城郡二入一鄉治署トナリ今又廢テ南部田村

小名トナル關ヲ置其所以詳ナラズ關跡 亦不

7 A

按義直一郎ヶ内河縫殿允ナリ八代古麓城二居

傳延元々年支綱守山八代郡豐鄉ニアリ中古

五年

1110

新撰事蹟通考 在之七

一月十六日凶徒筑後三郎寄來味木莊御船城之

~悪かほしめし候也毎事態可申候謹言

正月廿八日

判

當國合戰等事

惠良惟澄注進狀

六年乙酉1

阿蘇文書

北朝貞元年也十

戰 分」護一持遠近之官軍

卿補任爲 七月四日改元 今从阿蘇文書'

武士分.相ñ續彼武名 䟦ñ同肥後筑後 |々合「正平元年丙戌 十二月八日改元北朝貞和二年也口南朝公

佐鄉ニス

菊池武朝申狀

小熊野、八代郡道前鄉= = 今益城郡甲

年二著入

肥後守護

リ

尹丿取下大床

小駒野不」詳小駒 小熊訓相近

五年甲申永三年

此歳菊池武士以」病讓„職所領於 兄武

チ

岡領主今竹田城ナリ鞍嶽合志郡ニアリ鞍嶽

菊池城合戰請書二見ル所》故:附書ヌ

宇治惟澄判

所

按:氏泰、大友氏泰志賀賴房、大友/親族豐後國

興國六年十一月六日

先人々御中

右注進如件

判

康永二年三月二十九日 氏

著到注進之時面々可賀申候恐々謹言

一今月五日官軍等押寄小駒野城合戰攻落城畢凶

候

肥後發向之事今月二十七日注進狀今日到來爲先

一同二十八日夜凶徒小野次郎實武月御方忍取

備前介宗賴判

承り

負數十人云★御方手負少々有之

康永二年三月二十九日

間官軍等陳既寄菊池城被合戰候由各軍忠之至感悅無極

出向致太刀打合戰凶徒七人討取之畢手

徒五十餘人討取畢御方討死三人手負數十人有之

進上御奉行光 武光嗣爲_按御船城益城郡味木莊御船町ノ上ニアリ此時

城主何人ナルカ太平記應安七年御船河内守盛

安卜云月二十一日改元

去月八日有改元號正平今年渡二年汇成候也未其

堺聞候哉御心えのため今申候々八代事心と

なく候相構〈御心に入候て可有御合力ふか

立甲要害 燒引拂在家 構 城郭 之處太宰少貳賴

尙代官對馬豐前次郎井大友野津三郎藏人以下數

興國四年惟時分」成 御敵,之時惟澄相始御方押

取矢部城 同五月 田口向城, 之刻河尻詫磨以

下罷向之間武光相共致:合戰】畢其後 追ñ落甲

惟澄正平三年九月申狀

阿蘇家傳:惟時、宮方ヨ背テ 將軍方:屬入依」之

小國鄉ニテ武光ト戰テ討負タリ

阿蘇家傳

阿蘇文書

11

四年癸未]春阿蘇大宮司惟時叛而 屬 足利尊氏

旨

「年十一月之島津道勢竭逖降„官軍據,阿蘇文書與國四

阿蘇大宮司殿

自是可被仰之處御使返々目出候抑當國合戰可爲

九州安否候今度合戰及難議者其境以可爲同事候

歟然ば相構急速可有御沙汰候段延引候は不可

有正體候也公私一向憑存候尚々此後措早速候

追討道鑑不可廻踵候兼又當國宗御敵參御方候了

猶屬凶徒之輩合戰始候多可參之由内通申

候如此次第且御使存知候事定可語申歟恐々謹言

七月二十五日

鑑左衛門三郎盛光发射隵中間後藤太打死同二十七

日菊池城合戰 之時若黨 中條勘翁 由左衛門 姑

三條御勘文之狀明白也仍目安之狀如件

被射疵

左之カヒ

今月二十五日肥後國於鞍嶽山先陳致合戰若黨進

志賀藏人太都賴房軍忠之事

安

志賀文書

按:阿蘇惟時尊氏:從k正平四年又歸順x其時々

丿論旨令旨等數通7系圖=詳 リ叉以上,戰跡

諸書見元所大矢部 城未」詳田口以下六皆益城郡

地名ナリ

百騎攻來之間度々致:合戰 親類若黨分, 手負討

死 畢其後賴尙代饗庭右衛門藏人西鄉兵庫允率

筑前豐前以下國々軍勢 馳引越砥用 之間致:合

戰」手者等被」疵討死畢次 阿蘇豐後宰府 勢相共

亂入萱野村 之間終日致 合戰之處及」晩引退

畢其後賴尙取:山崎向城之時武光相共致 數箇

度之合戰 畢其後馬場三郎 宗刑部以下分」發向

味木莊 構„城郭之間馳向致 合戰 內田公藤五米

倉叉五郎於‟當手 討畢p元

以下記 正

先度進狀候參候哉抑將軍宮著御之後去六月廿

七日率島津圖書助忠國一族若黨百餘騎參御方卽

陷伊集院坺同日桑波多掃部允宗景原田又四郎人

道經道光富又五郎入道々惠分參候今月十四日顚

新車蹟通者卷之七

惠良小次郎殿

日

判

七月一矢上一族中村入道一城主參御方候了折節當國

合戰最中候間不申候事非本意候便宜候間不及委

細候每事態可中候也謹言

一常國合戰事去月七日凶徒陣廣島郡內新福寺外

城自御方燒拂候之處散々合戰凶徒多被疵候了

九日同所牛下合戰之時散々太刀打宗凶徒六人打

取候了手負は不知其數候同十九日三ヶ國凶徒加

馳谷山之敵陣候之處致合戰候凶徒島津入道道鑑

子息三郎重矢同叉三郎兩人被疵候了其外一族島

津四郎同七郎- 同豐後慶三郎被疵候了此仁

等手負候間國人手物不知其數被疵了當國心安

可被思申候

堺事此間無音候問心在く候?處無殊事上

し承り目出度候

十八興國六年七月二十四日 右 少將判

阿蘇大宮司館

薩摩國前守護島津上總入道々鑑去比打越千臺了

仍所被差遣討手也爲後措急速和泉山門可退治凶

徒者 征西將軍宮分旨如此悉之以

阿蘇大宮司殿

七月廿二

判

姓左近大夫定淮一族以下百餘騎分參候則祗候谷

山御所彼等参候後御敵坛當國滿家院内島津兵部

三郎久實城同院内厚智城、島津卒三郎家久城也

同國日置莊内若松彥太郎入道良意城也此城沒落

之時御敵手負死人數輩同莊内古垣城江田入道良

心城也同莊内南鄉城島津豐後守實忠代官城也悉

追落候了其外自薩摩山南無殘所分退治候其山

北於于干臺道鑑取陣仍今一兩日間可發向彼館候

引合八代急速卒兵船可被燒拂泉山門水俣以下候

也凡今度合戰九州安否候此度不致合力可被期

何日候哉!北合戰始候者東鄉在國司以下緣物之

可參御方之由内通申候急速可被中後措候也若及

延引候はゞ可爲難儀候恐々謹言

司

等候歟其

連々申度候之處隔渡海候之上當國合戰最中間

阿蘇文書

按:坂梨孫熊 阿蘇ノ親族尊氏鎮西沒落11

リ

南¸前守護島津 入道道鑑逃走而保三千臺

乙房大宮司殿

阿蘇

二莊地頭職 秋七月官軍拔, 薩摩之數,略 山

暦應四年九月廿六日 左衛門尉師景判

六月二十日庚申阿蘇大宮件

廿六日到來

國三年五月

肥後國阿蘇社大宮司職幷所領等事養父孫熊五月八日

後排候委細之旨期後信候恐々謹言

判

師 景

八月九日

目出度候就夫近日定可有合戰候其時相構可致电

可存知此旨候恐々謹言

征西將軍宮今月一日著御薩州津御渡海無爲誠以

退治發向候間御舍弟乙房殿:被讓與候由承候了

阿蘇文書

肥後國阿蘇社大宮司職幷所領等事南鄉之御敵為

藏家

武光以下 據

梨文書率,菊池武光以下文官武將,親征薩縻 阿蘇攻書率 菊池

傳ラス

て手を負申候

家

十七日夜南鄕の御城せQL屏の際∨攻{6候 三年壬午肌訓廾掾朊4 夏五月 征西大將軍 愎良 親王

北朝康永元年也四

二

#復職ヌ卜云F干孫熊八氏三從E惟時=敵 北

今度もいちか下入道たいふんかたらび申候しか

肥後文獻叢第三卷

六

とも上の御をん御心さしをわすれまいらせかた

く存候て最前に御方々参りぬしたかて八月朝ノ大宮司ト稱ス乙房其終所ヲシラズ其詳ナルコ

ト阿蘇系岡惟時ヵ譜中二著ス合セ見ルベシ

大宮

司去八月九日任讓狀頒堂之由承候了可注進此旨

候仍狀如阿蘇大宮司殿

司惟時補 肥後隈 牟田守富

丰大宮司惟直、多良濱合戰三天山元自殺,其

父前大宮司惟時(在京皇師7勤4此時阿蘇丿宮大

宮司ナシ孫熊尊氏二屬從ス故孫熊立テ大宮司

職 建武三年四月大宮司補任 惟縣 阿蘇－歸 大宮下文モ今阿蘇家ニ傳
7

乍思不申候非本意候也抑中納言方より如注進者

度々御忠節返々出度候則分披露仕了尙々凶徒

等退治候之樣:可有御方便候定無剣新撰事蹟通考卷之七

狀

蘇系圖北命,

申1

定申狀上下略全文記阿

後醍醐天皇御時元弘元年者曾祖父武時入道寂阿

菊池武朝申狀航十一年

日戊申肥後守護菊池武重卒養子武士嗣爲三守

セト テル

子惠良レモ

綸旨

惟

職

熊丸以下六十餘人討取畢

次市下八郎甲

秋八月三

阿蘇文

惟澄正平三年九月申狀

北坂梨惟定申

1

等 之處白石治部法橋討死畢 惠良惟澄正平三年九月申狀

カ

武重下向之後致,度々合戰 蒙都鄙之善譽

等之寄進狀有 數牒 皆爲 興國三年壬午,故今从」之

鎮西 者在國之一族等致: 妙惠誅伐之大功 尊氏

11

11

11

11

獻 忠讜,之間宸翰以下御感特絕. 比類 者也於三

者也建武二年 尊氏謀叛 以來者 武重分 參洛 直

11

者也獨依 勅謎 墜 一命 者武時入道也 忠厚尤

興國 元年庚辰

11

爲,,第一 歟云々 此條達 叡聽 之由世以無 其

鐘一本永正丙子十一月日納所契曙

四月二十八日元北朝暦應三年也〇大日本史及諸

書以 改元 係 延元四年十月五日庚寅 後村上天

皇即位之下,然關城書裏書延元五五年庚辰四月二十八日改三元興國足

利號, 唇應三年 五條文書南朝公卿補任爲,, 辰四月二十八日·阿蘇文書

有 延元五年三月四日之綸旨,玉名郡廣福卞菊池一族

下向之時於三多々良濱,合戰勵 武節 畢延元年中

興國元年十二月二十日 小鳥合戰差 遣親類若黨 此月阿蘇惟時臣市下
入 道道惠 反惟時 之族 數十人與

」之據 南鄉城 惠良惟澄弟惟賢往而攻」 之不利二十

以下記:二年八月

小鳥合戰未 :考得

二年辛巳10锗春三月十四日辛酉足利尊氏以三詫磨宗

秀 為肥後鹿子木東莊地頭職 夏六月十八日惟澄爲: 肥後守 富莊地頭書˙前交記 交

恭奉 勅詔, 同三月十三日討入凶徒將平英時之

陣,父子一族以下無.所以殘「討死畢然者元弘

一統之頃義貞正成長年,出仕 之日如, 正成言

上,者元弘忠烈者勞功之輩雖 惟多. 何存』身七日壬申終陥,其城 誅 道惠及大將孫熊大宮司,

阿蘇疾書二十七日據

入道道惠相氵 語惟時一族數十人 罷,

成御敵 楯„籠南鄉城」之間押一寄彼城|攻戰之刻

爲ň後措 豐後 肥後之大勢寄 來之 間馳ī 向中途

致：散々 合戰 惟澄 并舍弟 惟賢被」疵二人共被

切ń乘馬一族若黨數多分 手負討死 討引取御

敵數十人 其後落 彼城 之時道惠并大將坂梨孫

坂梨惟時譜中按:此國丿安國寺六合志郡久米村7丿始青原山

二月宣 遺詔 勤王十七日辛丑勅„懷良親王 圖 恢復,

太平 此歲足利尊氏奏 北主 諸國立 安國寺|

見二城,復」之進至豐後,拔 七城,歸 菊池

+

上天皇:

秋八月十六日壬寅 天皇崩皇太子 義良立是日: 後村

大日本史●崩年月據 參考太

ツ

按:南鄉城野尻城、前三解」之小國、阿蘇/鄉名

阿蘇文書五條賴元/大宮司<贈步書簡:千小國退

治事ヲルアリ

詫摩別當太郎殿

卯月二十一日

道猷

阿蘇前大宮司惟時以下凶徒打入阿蘇南鄉之間爲

退治仁木右馬助代官立田後藤七郎右衛門尉罷向

候御合力候、就公私祝入候委細彼仁可被申

恐々謹言

津宮内鄉幷多武木叉五郎枯杉以下數百人討取畢

詫磨文書

yヌ

肥後文獻叢書第三卷

曆應年中冬十一月菊池武重為..

平記八代神宮寺所藏靈牌銘

先皇修 佛事 大友氏時攻而陷 筑後妙見城| 武重

帥」兵自到 筑後,氏時聞」之退,豐後」武重責 生葉妙

草創開山、圓觀上人大丿化壽二年四月2口宜了『安

其後平治年中六條判官源為義)子護念上人

義第十

寺寓居セシゴトアリト誌ス本據不可

考 熊府真宗順正寺二此寺洪鐘アリ其銘西海

道肥後國青原山壽勝安國寺住持南汀正鵬奉掛銅

堪へ

二年國寺圓僧都トスニ改〆天台宗卜元 緣記文德天皇/勅願寺仁壽

十月初八日脫化

勝寺 繼而董 聖福 主建仁 貞治三年,

三代間郢和尚

十一月示 微疾 至 十二月二日,化

此代暦應二年足利尊氏直義兄弟心7合北王1

奏テ官寺トシ毎國建立/安國寺トスニ字ョ加テ壽

勝安國寺下>今,地伽藍ヨ遷立始寺地今四代;

堂屋敷

洞上諸祖傳曰姓平氏越前人東明嗣法爲, 弘祥寺

別源圓旨 和尚 ルコシテ

開山,居無」何 赴 凱西壽勝寺請明年卷」席

康永二年生職タリ今護法山安國寺ト

歸 弘祥 貞治三年,

之

x

天童山直翁和尚之法嗣也 皇朝延慶二年來朝住 鎌倉 建長 圓覺壽

福東勝等官寺 元應中來 肥後･居 玉名郡小原村善光寺,其後合志

郡開一建靑原

洞上諸祖傳曰相州藤氏子也開

二代月蓬圓見和尚

山壽勝禪寺：

山之嗣法元弘中開„法肥後壽

タリ

テ

開山之嗣泓

壽勝寺ト云禪宗曹洞派開山東明慧日和尚也 俗姓沈氏

119

1 1 1]

新撰事蹟涌考卷之七

其後又攻-落南鄉城 仁木右馬助義長代立田七郎

甥立田十郎,較暗生之,其外數十人

討取畢其後馳i越日向界;追氵 落野尻城¸相i語高

知 尾一族等打i越小國鄉|攻 落義長代官古子次

城郭於彼所 之刻玖珠日田以下豐後國

人等數百騎„發向」之間馳向一陣,大友一族野

惠良惟澄正平三年九月中狀

文書

鄆城 阿蘇惟時惠良惟澄攻 之陷„其城 捕,立田某20

イヅレヲ課 平此戦跡他書二見サル所ナリ故二附

夏四月仁木義長代官 立田某等援 南

西將軍系一 故略

本書 其說詳載征

按三种方原隈府/北=79黒鳥八代郡三地名

要略爲 延元二年:名和傳譜爲建武二年,今從

太宰少貳判

11

暦應元年十二月日

11

右青木掃部助見知之間主申證人畢然歸國之後依此

疵去月二十一日死去上者早爲預御判粗言上如件

レテ

ヨリ

秦愎良親王來 肥後,嚮 是 詔補

延元四年己卯鹹,鄆 噮良親王來旧肥後¸嚮是

編年考徵五

分死去上者欲預御判子細事

疵门门中間次郎界高逯實檢畢然 歸國後 光世

同十一月三日八代黒鳥合戰時子息彥太郎光世被

去十日於菊池棘方原合戰勝中間 太郎男被批 新撰事蹟通考卷之七

征西大將軍,經略西海道:勘解由次官五條賴元輔佐

之一卿相將士叉多扈從焉去年十二月至„讚岐國 是依

¸阿蘇文·菊池傳記 D 大日本史 後醍院 系圖鎮西

菊池武重之請 也

> 小代文

三年

八代黑島ヨ載鳥島字形相似ㄆy

武重聞」之出而待,合志郡鞍嶽, 五日丙寅戰 嶽下,重

11

テ

引、兵趨,九國,與大友之家人等,謀而討菊池 菊池

キ

テ

按:菊池傳記=片保多太郎菊池與市迫間十郎木野

對馬守大木刑部以内定衆トス未タ其本據ヲ

不、知故:姑/缺之

ふちはらの武重判

两人渡人三年七月廿五日

あほきたてまつる

てはちはん大ほさつのみやうせうを

幡

おひてかたくはたをきんせいしやまを

生

茂 生

家門

しやうしてもしやうのきをましか∞ん

正 法

龍華

しやうほうとともにうけのあかつきに

念願

敬

かよはんことをねんくわんすへくついしん

一なひたんしゆーとうしてきくちのこをりに

畑 禁 制

くわんれいいけのないたんしゆ一とう

せすは武重かきをすてらるべし

八月十一日癸酉北主以 權大納言足利尊氏, 爲 征夷

大將軍大日本史

公卿補任

九月先」是菊池之門葉 甲斐重村屬

北朝 亡 菊池;而請」爲肥後守護, 尊氏許」之重村迺

-云何し7元甲佐城,云歟不分明･阿蘇文書澁

川義行が狀中二甲佐嶽城ァ載今考所ナッ郡浦宇

土郡南丿海邊大 又申狀:云十月下筑前國御家人朝町孫太郎入道禪惠謹言上

宗像文書朝町禕惠申狀黨黨部所就

申狀一絕間トモアリ

11

城

こ閏七月トス今申狀二從7田#間當麻同訓ナ

冫要略

七年條

リ

按=甲佐鄉=今三城跡アリ松尾城早川城津志田

上野三郎秀村 爲„追討使趣 郡浦

カシム

鉞西要略曰聞 七月肥後郡浦官軍大起攻, 武家郡

吏,郡吏告急於一色道猷 道猷以 當麻三郎家政

次押一寄郡浦: 討┐一色少輔入道代田井間三

1

延元三年十月賴尙率 數千騎 攻引來甲佐城之時

澄僅以„三十餘騎 懸„出城外, 或討死或被」疵

惠良惟澄正平三年九月申狀

率„數千兵 寇„谷城甲佐城,惠良惟澄守拒不利,惟

澄攻,田井間家政於宇土郡浦城 家政敗死

事誌 正平十五年條;

冬十月大宰少貳賴尙

村敗退 日向

甲斐系圖九州記 岳

1

テ

1 111

新撰事蹟通考卷之六

1 建武五年三月三日筑後國石垣山合戰之時抽軍

詫磨貞政申狀年 1月

前文記:建武

建武五年三月十六日

武藤資時井菊池武重以下凶徒等打出筑後國石垣 日雙理所藏今

城今月三日及合戰之間屬守護御代衆手小代八郎

次郎重峰爲後攻馳向高良山井小田河原分警固宿

直候畢以此旨可有御披露候恐惶謹言

小代文書

テ

此歲菊池武重連戰下„數城 復„肥後,北 定筑後

磨別當太郎殿

菊池武重已下凶徒寄來肥後國合志城合戰最中之

間爲誅伐所差遣少輔孫太郎入道也催一族不廻時

日屬彼手可致軍忠更不可有遲怠之儀仍執達如件

沙彌判

建武四年六月二十九日

承候判

進上 御奉行所

詫磨文書

三年戊寅朏潮櫃應玩娩祂7春菊池武重到 筑後,三月三日

戊戌一色道猷督 諸軍 攻 筑後石垣山城,武 重 防亅之

小代詫磨文書大破

大破,一 色之軍,死創甚多焉

十四日己

以下據 鎭西要略

巓西

酉道猷及一色道新累攻 石垣山城,不、利

要略

籠宇都宮大和太郎城候間守護代宣馳申之間相1 11

一こくむのせひたうはなひたんのきをしやうす

へし武重すくれたるきをいたすといふとも

ひふらつきよのたんは武重がしよそんに

おとしつくへし

一天下の御大事はなひたんのきちゃうありと

落 去

よりあひしゆのなひたんの事

議 定

秋七月菊池武重置 :寄合内談衆 定 憲法制分 其條目

境野家`

按宇都宮大和太郎及城地今考所ナシ

詑磨別當殿

建武五年四月十一日 太宰少貳判

之事者必可有其沙汰仍執達如件

催

軍勢可發向也先不日馳向彼城可被致軍忠於訴訟

本

武重以下凶徒打出肥後國府去八九兩日及合戰引

同文書

御奉行所 承候判

建武五年四月十八日

源貞政

御披露候恐惶謹言

忠候畢然早預御一見狀欲備向後龜鏡以此旨可有

山表出贛二甲佐上宮ノ祠アリ寺藤原 資

建武四年五月十八日

アリ鼈甲山福

按甲佐嶽益城郡甲佐鄕ニアリ形勢雄偉高ク衆

披露候恐惶謹言

今月八日菊池八郎以下凶徒等筑後國豐福原打出

七月

二

小代文書某申書

以下記

、疵夭亡畢 元三年

同七月武重相共度々押一寄合志城,若黨等數多被

來戰據,詫磨交書

臥乗馬 乍.成,,徒武者 討┐小野新左衛門入道以

: 惠小代由狀道新

ナカラ

騎寄來之間掛 合山崎原 致,散々合戰 惟澄被｣切” 合志城,一色道新自率｣ 兵來戰

惠良惟澄正平三年九月申狀

守護代少貳頼尚之家人 饗庭小太郎入道以下數百|却而唇尊氏 猕 秋七
月菊池武重惠良惟澄合」兵攻,

第

1

本朝

11

大塚原瀬村ニアリ

其後當國御方菊池八代之外者大略以零落之刻惟澄

惠良惟澄正平三年九月申狀

重與:一色道新 戰 犬塚原 櫃

島挾テ小鰯二至又合ス杉島今一郷ノ會所トナ

イワシ

二年丁丑,夏河尻津ノ南ニアリ緑河ァ分テ水ッ河尻二通シ相

惟澄

自』是吉野稱:南朝 京都謂 北朝 大日本鬼太平記

城寺下云砥用以下丿戰迹皆益城郡丿地名+y椙島

神皇正統記保曆間

四月十九日己丑惠良惟澄從 菊池武

大渡川乃チ緑河ノ流ナリ建治二年僧寒巖緑河

丿官渡橋架南去北來/諸人7 利是7大渡橋

卜名夕今ń橋絕亓舟 渡丿所7大 渡川下云 八

令/渡場3

リハ上ナリ

纔率 五十餘人: 延元二年二月二十二日馳 上甲佐

嶽 相 催一族以下 攻: 隨砥用小北甲佐堅志田 三

月二十二日打入豐田莊 追 拂地下凶徒, 之處號三

書於菊池武重 招」之武重不」從報書

此月足利尊氏贈

下數十人 則攻入隈牟田莊, 之處右馬助入道代三

村以下御領詫磨數百騎 發向之間同 四月二日馳向

森崎原 三村入道竹崎新五郎平田太郎以下數多討

取之 追 渡椙島大渡川 畢同四月十九日 一色少輔

入道下國之時武重相共馳. 向犬塚原 致 散々合戰,

一色入道舍弟右馬助入道其外橘薩摩彌八國分十郎

以下於"當手 討取畢

候間肥後國野原西鄉一方地頭小代八郎次郎重峰

代宇兵衛尉屬侍所手抽合戰軍忠訖以此旨可有御

洪事蹟通考卷之六

有ケル隙ヲ得テ本國二迯下リヌ

太平記日云々十餘日ヲ經テ菊池肥後守警固

11

將士 菊

池武重亦所„禁錮,得„„守者之弛隙 密遁歸 本國 环

史 阿蘇惟時等亦歸,國訛爆惟

テ

降 天皇聽_之十日壬午車駕還„京師,鼒氏幽 天皇

ユルス

菊池八代之外大略征 鼒氏 離 冬十月足利尊氏

按三國府市田口、天平十一年)條:誌ヌ

進上御奉行所 承候判

藤原宗重

建武三年七月十六日

大將軍肥後國之府御座之間當國野原西鄉一方地

頭小代長鶴丸代六郎宗重任被仰下之旨自六月二

十八日至七月十六日市田口關所令警固候以此

旨可有御披露候恐惶謹言

關所警固事

小代文書

尹元、一色道猷也讓时代光

ル八方岳城ヲ攻落ストアル皆此城云カ

申狀:大 將軍下

チ

天文二十年大友宗麟隈部彌三郎親吹箭夕

於華山院,置,兵監衞奪„公卿以下官職 拘:諸平記

11

月二十日壬

辰逃 京師

菊池傳記云將軍は四月二十六日上洛あり是より後

島津大友少貳宗像等が家人共肥後國に亂入し菊池

一味の者ともを悉く討従へ所々に城廓を構へ住居

せり此事洛にきこえけれは菊池武重大に驚き叡聞

に達し御暇賜りて肥後の國に下りけるにいつしか

一瞬朝敵と成武重を國に入にと防けるされと武

重屑とせす打破りては通り〈終に所々の城郭

を攻略し一月中に肥後を討謐め夫より筑後に攻

入討從押領す云々

按=武重尊氏ヵ爲=禁錮セラレ本國=逴レ歸ル

ト諸書詳ナリ又武重京都二止リシ内國中ヲ

事í大友島津等家人三非入諸家/申狀毛出

如尊氏ヵ將一色仁木等ナリ傳記何ニヨルヤ疑ラ

ハ私考/說 > 故不」取』之

大日本 | 鼒氏與黨之兵堅守邊境,武重至」自豐後路 賊兵要1

阿蘇險;拒」之武重及迫間某先」卒而進擊賊衆散走武

十一月武重傳

重阿爾

重逖還 菊池 菊池略饃

金勝院本太平記十餘日

福寺文書

菊池

作 三四日:本朝通十 士 鬫 十二月 天皇奉 神器, 如 吉野,造 行宮,

1〇九

ㇿ攻

廣討死訖同九月十四日合戰之時自身被疵其外

遂合戰捨身命抽軍忠候之條明白也迄于十月十

六日城沒落期致警固之上菊池掃部助發起之間大

將肥後御向之時御共申分在陣候以此旨可有御披

露候恐惶謹言

建武三年三月二十七日合戰之時舍弟[

大友近地孫二郎京能豐後國玖珠郡合戰軍忠之條

條

志賀文書近地景能申狀

承候判

建武三年六月日

右去四月二十三日自長州赤間關御出之時分分供

奉去月十六日筑前國下座郡筑後國飼香子合戰之

時馳向菊池武敏以下凶徒等捨一命抽軍忠上者早

賜御判爲備後證龜鏡恐々言上

欲早任軍忠給御判備將來龜鏡事

安藝六郎藏人入道寂順謹言上

三池貞家申狀

承候判

進上 御奉行所

藤原重峰

肥後文獻叢書第三卷

建武三年十月九日

1名久木野鼠戸、市下高森、村山、社倉、ト云ヤ詳ナラズ申狀ニョルニ合志太郎尊氏=屬シ

菊池系圖ハンジャク

盤野

菊池北鄉/村名城跡一六八方嶽/半腹=y

一名筈嶽一郡鎭山也爲,八方一面之看故日 八方岳阿蘇文書令川了

俊カ書中=菊池ノ上ニアル城取コシラヘ云々菊池傳記

リ

欣 虎口穴河訊皆隈府/奥八方嶽丿曉=7 リ亓

ニアリテ

因…字便;

プモト

`武士譜中記之

闍今

一軍/將夕 リ寺尾「六年具載」之

隈何レヲ合志城

今石、真木、古城等也

11 11

郡津守郷ノ村1名

南郷、阿蘇郡 鄉

飛

芹、

岩神、河上ノ九城跡7其時南鄉城下云;何LY

城ナルカ不分明 合志太郎系圖=著ス合志城モ

郡中:數城7 リ竹迫、千束、須屋、久米、住吉、

竹 邇城天正

僅存シ村名トナル新實原今詳ナラズ唐川益城

其比屬 于詫磨郡1

有 曠渺 原野

ヵ

儀山 林本作』琳

記ス大林寺菊池五山一

大日堂今

按:右申狀等出所丿戰跡 諸書所」見》故!附

中央之寺也说:究

承

御奉行所

建武三年十一月二十八日 藤原景能上

10K

新撰事蹟通考卷之六

一肥後國怯入胡唐川原合戰之時抽軍 忠之處若黨

欲早任軍忠實預御證判子細事

建武三年九月十日

〆`

大友詑磨彥四郎親元謹言上

詑磨親元申狀

郎,其外數十人討取畢次筑後國豐福原合戰:先

掛 被丿切 乘馬;畢其後當國御方菊池八代之外者

キザミ 以下記:延元

大略以分三零落之 二年四月

yヌ

延元年八月十八日肥後國 唐川合戰 先懸畢次

押¸寄南鄉城 追 落一色右馬助入道代三村叉次

承候判

惠良惟澄正平三年九月申狀

一同年八月十八日肥後國唐河合戰之時稻葉叉三

郎左顏切疵□ 郎十三所切疵若黨春武四郎三

郎左カイナ被切畢分明

在此下紙切

國三奈木原合戰之時致軍忠

仍自京都神妙之由被成御感御敎書記

三月條:

詫磨宗直申狀

前文記 •

一同八月三十日於筑後國豐福原六段河原屬于合

志太郎手捨身命致散々合戰自身分生捕一人分

捕一人畢此等子細砒下聯

一五月十三日筑後10+

大將軍御手以去八月十八日於當國唐川合戰抽軍

忠訖以此旨可有御披露候恐惶謹言

肥後國野原西鄉小代八郎次郎重峰申軍忠事

右菊池武敏以下凶徒蜂起之間爲誅伐屬

進上御奉行所

承

肥後國野原西鄉一方地頭小代八郎次郎重峰自去

月二十日至于三十日屬合志太郎手於筑後國豐福

原六段河原遂警固致合戰分分捕之條勘文分明也

次今月三日於當國菊池寺尾野盤閣入虎口穴河城

等尋探御敵自分破却城等以來至于同十八日於合

志城分逐警固候畢以此旨可有御披露候恐惶謹言

建武三年九月日

藤原重峰

小代重峰申狀

右如此軍忠之次第支證分明之上者爲預御證判言

上如件

一同晦日筑後國豐福原合戰時自身被疵弓手大股

畢此等次第同時合戰之仁松浦鍋島三郎橘薩摩八

郎次郎令見知訖

彥三郎親顯分打死此等次第勘文明白也

成 防 尊氏二將會:兵庫 二十五日庚午正成與主尊氏

太夫殿御手致合戰押軍忠畢

カシム チ

一同八月月菊池武重從:脇屋 而攻 舟山 有」功義助聞

尊氏之大軍來。引」兵還三石城兵追」之武重宇都宮

公綱力戰而却、敵平 五 月 天皇詔 新田義貞楠正

燒拂在々所々同懸入山浦尋探凶徒

シテ

一同六月二日屬于大將軍御内武田分手押寄菊池

于侍所佐竹與次手於新寶原分付著到畢

一二十日武敏以下凶徒等楯籠菊池大林寺之間屬

夏四月二十八日 甲 辰尊氏帥 大軍 |嚮,京師 軚碎此

梅松論

名アリ故二今要略ヲ探

參付著到畢

一同五月十七日三池一族等相共押寄在々所々燒

拂凶徒等住宅道而大將軍筑後國府御座之間分馳

ク考アルモノハ附テ校訂備氏義侍所

謬多少悉夕不」得主取用,故=他正史下符合冫疑

|申狀鎭西要略

小代光信申狀

按鎭西要略:我國丿事跡菊池傳記及其他/西要略

尊氏之將今川藏人太夫及詫磨別當宗直小代重11

行義長二人･酸 秋八月十

| 叡山 尊氏入 | 京 師 記梅松論園大曆

皁叉如

稱 帝京師,號用建

五日戊子足利尊氏以,豐仁親王

武1母弟也讓 光明帝!

大日本史。光嚴帝同十八日 辛卯菊池武敏惠良惟澄與

11

九國望」風偃服尊氏乃留,一色入道道猷 爲„鎭西總管

太平記神皇正統

下二

軍破而旋 京師, 二十七日壬申 天

朝郵躪太平記梅松

文明

ユク

以

主夕y然F吒伯耆 卷名和傳譜等二無三信定ヨ不」之軍,大戰,湊川,正成終自殺武重弟菊池武吉亦死」之

肥後文獻狻書第三卷

10K

載故:不、取」之切吓十五年條

領,以 佐竹氏義爲侍所 - 一色入道道新, 執』 行

鎮西事』仁木義長仁木賴兼爲兩大將 守|九國 ·太平記尊

爲、留九國

今氏義以下據 國書等

無所/事最千多夕載」之然「毛其書夕加十杜選

本說:m><菊池家代々/事實其外戰蹟等齟齬訛

下文書申狀等二間朝軍談菊池系圖

鮭淋和鵰 義貞峰小代

光信詫磨親元等 戰„于肥後唐川 譓讓黙癸卯晦先」是

佐竹氏義率„筑前肥前兵 至„筑後,會氵 仁木義長

菊池武敏 此日戰, 于豐福原六段河原 惠長小代詫磨

十八日當國唐川合戰之時屬于今川藏人

新撰事蹟通考卷之六

按=内河城古麓城ヶ云撰者城名「不」知内河ヵ

城ナル故直名トス八代郡古麓村東八町嶽!枝

峰鷺尾ニアリ

或日此城暫ク征西将軍宮/居都トス故鎮西

府本ト稱シ古府本ト云今古麓トス ハ全々誤

太平記 本書爲彦三郎・而不」名義

眞據 伯耆卷 小代等皆從據 文書狀:

1

等皆從焉

11

賴行義長進責内河義眞於内河城」而陷」之小代詫磨

シテ

按二八代郡黒島城地名ニモ無」之乃チ内河城攻時

ナレバ古麓ノ城ノコトナル歟未タ其實ヲ得ズ 安樂

寺 玉名郡高瀬/東一里許ニアリ鳥栖原合志郡

ニアリ高瀬ョリ五里許東南二當ル

一同月二十九日豐後日田迫之時大將軍御供仕訖

以下記

八月

一同四月十六日十七日)

・小代光信申狀

鳥栖原合戰 時宗直抽

軍忠親類詫磨彥四郎被射訖

一建武三年四月十三日肥後國安樂寺合戰之時被

射宗直乘馬訖同新左衛門尉分捕訖

詫磨別當太郎直宗自去建武三以來所々合戰致

軍忠事

11

記磨文書宗直申狀

尋不可有其隱矣凡胚

宗古麓トス故今從テクズ」改ト此本據未タ一〇五

忠」

書二千皆

城ニアラズ國志略日麓二五城迹ア” 丸山勝尾鞍掛

要

害/地也ト今見總郭ノ名ニシテ一城々々ノ名

建武元年 天皇封功臣」名和伯耆守長年!長男伯

·名和文書

耆大夫判官義高ヲ以テ八代莊地頭職ニ補ス

因テ代官トシテ内河義眞八代城二居ラ

シム正平十三年義高子伯耆守顯興菊池武光,賴ミ

豐福其頃

一族家從ヲ率ヰ八代二來り始豐福住シ

屬三八代郡

後古麓ヲ居城トス其詳ナル事名和系圖二著」之

義眞伯耆卷二長臣内河内兵衛三郎眞信入道念四

惠惟澄申狀

が四男也彦三郎後義直二改縫殿允 正平初内河

殿允義直アリ阿蘇文書五條

左衛門尉備中守タリ

ニモ正平三年内河八代-

念四長年ノ從弟ニテ執事職タリ建武三年六月五

日山門西坂本ニテ戰死ス國志略八代事跡考:眞信

金勝院本太

入道無三其子彥次郎信定二男彥三郎宗忠 平記作 彥

三人相繼テ古麓城二居其後本鄉修理太夫城

三郎

此城谷隔テニ城アリーハ古城ト林亭右ニアリーハ

ト云春光禅寺ノ後ニアリ里人相傳7相良家增築所=シア新古別

11

附註シテ 八代城 大成武鑑二鷹峰城小代申

狀/黒島城交意皆此城ノ事ナリ其始ヲ詳ニセス

山足云上=古ノ字の冠スベキ理ナシ然

詳ナラ

按:惟澄赴 金剛山 ń元弘三年正月十大塔宮護

良親王ノ令旨ヲ得テ國ニ歸ル其事不可知

令旨今,傳做鞍岡合戰

其事不可

未詳右文書》照考二建武二年十月尊氏謀叛以後

八九國/將士彼 譎策:欺多應」之小貳入道妙

惠其主領è肥後/合志詫磨小代等悉夕小貳

常與シテ太宰府聚ル時菊池武重京師二在一族

多夕從」之武重弟武 敏兄/7守 十二月 阿蘇大

宮司及一族等卜共太宰府7攻翌三年正月菊池山

城事著 正平

二月大田 清水合戰 太平記 等三不」載

二十二年條

」之有智山合戰、妙惠討死時多々良濱大戰

建武四年二月

承

キリ二所

欲早任軍忠之實預御證判子細事

右去年二月二十七日菊池武敏以下凶徒寄來宰

之間馳向中途筑後國大田寒水致散々戰自身致

合戰被疵,助!

同二十九日於有智山城中致合

戰若黨中村丹三郎國家分討死如此次第武藤刑

部房御見知之上檢見勘文可爲分明歟然早爲預御

證判粗言上如件

二月十七左近次郎被疵嵯喞"仍勘 分明之上同時合戰之

仁絕間三郎幷當國筑地七郎入道等分見知畢有御

シ射

一同四月十七日同國鳥栖原合戰之時捨身命致散

散合戰之間親類彥次郎宗成被疵咗鵬城形同若黨

一同年三月二十三日屬于大將軍一色殿御手可馳

向同國八代黑島城之由預御教書之間以同廿五日

馳向彼城追落凶徒畢

一建武三年正月八日屬于宰府討手堀三郎入道殿

押寄菊池山城大手分追落武敏以下凶徒畢仍一

見分明也

肥後國野原西鄉一方地頭小代左衛門八郎光信度

度軍忠之事

小代光信申狀砒珅供合傳

安藝垩助殿

日

判

建武三年院宣也早相催一族馳參赤間關可致軍忠於恩賞之

可有其沙汰之狀如件

可誅伐新田義貞與黨人等之由所被下

三池文書

諸文書不｣載如何疑ベシ

イカ

耶

大平

道猷･大平記作 道･誤也義長義勝之子稱:四郎次

奉､勅守護內侍所,奉｣入 彼岸所1正平十一年六月的狀

菊池武重從義貞,迎戰大渡,不」 利逐衞車駕 而登,

山門 十一日戊午尊氏入:京師, 二月皇帥破 鼎氏於

京師 尊氏西走車駕還幺 京師 尊氏終赴 筑前 至 宗像

大宮司之館,少貳貞經入道妙惠遣 子賴尙 援之菊池

掃部助武敏聞」之率:兵三千餘;要: 筑前水木渡 賴尙

旣在„前岸 餘騎待港船而未」濟武敏進」兵三面掩至悉

殺. 其後騎 賴尙隔」水不、能還救 奔會:尊 武敏轉

、兵而攻 太宰府 貞經兵寡不」能」支遁走武敏縱」火盡

焚„„其所」備戎器 貞經保 有智山佛寺】武敏叉圍」之二

大 記

十九日丙午貞經勢竭遂自 不梅松論 武敏乘」勢攻„氏

於筑前 三月二日己酉戰 多々良濱 不」克阿蘇大宮司

惟直及弟惟成走„„肥前小城郡 終於天山 自刄 惟廣

躪 武敏敗退尋而敵將一色賴行仁木義長來攻武敏

逃而匿 深山 .

11

大平記梅松論菊池傳記 賴行公深之子稱 太郎入道

11

想記菊

テ

夕

數十萬兵」犯 京畿 天皇詔 新田義貞 名和 長年楠

正成等,防」之不」勝軍士皆潰 十日丁巳天皇避,賊

如 延曆寺 御 大宮彼岸所 梅松、阿蘇前大宮司惟時

藤原淸長請文惠惟證

11

惠良惟澄申狀所评。

惟澄軍忠之次第記,詮要,謹言上

10111

詫磨七郎之親謹言上

一建武三年二月二十九日菊池掃部助武敏以下凶

徒等寄來宰府之間筑前國有智山合戰之時若黨三

郎次郎討死候畢 寶寶 建

武五年 1

同文書之親申狀

一建武三年二月二十七日筑後國大田淸水合戰之

時 致合戰軍忠候畢

一建武三年正月八日菊池山城之合戰之時致軍忠

迫城候事

一建武二年十二月晦日新田左衛門尉義貞與

菊池掃部助武敏寄來宰府之間於中途童付致合戰

若黨等討死候畢

大友詫磨豐前太郎貞政軍忠之事

自」被」疵以來關東先代事者不」違三言上,尊氏謀

【以下記:

叛以後筑前國有智山合戰被」疵事二箇所

詫磨文書貞政申狀

八月:

11

11

最初元弘三年惟直相共分」參. 上金剛山, 之處依

下賜分旨 自 備後鞆,令:下國,阿蘇郡鞍岡合戰

11

年九月

足利尊氏同直義已下輩有反逆之企之間所被誅罰「延元元年丙子上期
対航相潮 春正月 足利尊氏帥.

文書

阿蘇時譜中間可:合見

ル梅松論叉阿蘇品 惟定申狀

ニシテ

亦

按=筥根山合戰大平記二十二日トス文書二十一

承候判

建武二年十二月二十七日

ヒシテ

カ

言上如件

牒

二年乙亥夏五月菊池武重因」徵詣京師,家族多從焉

下司職- 決斷所詫磨文書雜

右今月十一日於筥根山城攻寄垣楯際致合戰惟賴

月二十五日癸丑詫磨別當宗直補 詫磨郡神藏莊地頭

【平記菊

上島彥八郎惟賴申軍忠事

建武元年甲戌 胡春正月 天皇論」功行賞煌三

賴 武重全軍至 逯俱得 西還 平嚨菊

賴等共京師二至ル今據之

阿蘇文書

ル二

史略

日自伯州舟上波下綸旨同八月六日十月二日之綸旨|十二月十一日戊子戰 干筥根 菊池武重先登破」

渡於京都被成下云々 黜酳嚐八月惟時在京師,七月,而官軍敗…于竹下士卒星 散義貞欲 引還,患,兵少

三年四月二

數通

11

賜,,上島惟賴 同文綸旨皆傳,,干阿蘇家,其餘

承候判

判

右中將進上十一月二十五日

御奉行所

宇治如此達之

判

元弘三年七月十日

也阿蘇前大宮司惟時分發向鎌倉可致軍忠者天氣

此旨可有御披露候恐惶謹言

肥後文獻叢書第三卷

1011

惟賴叉文書正平二十四年十二月目安去元弘尊氏謀反追討之論旨有 秋七月北條時行高禱作｣亂陷 鎌倉 八月足利尊

傳記

氏奉詔往而擊 時行,時行戰敗而散走 冬十月 足利

尊氏在 鎌倉,反十一月遣 新田義貞討 尊氏以中

務卿尊良親王 爲…上將,菊池武重率三家軍及阿蘇惟時

等,從義貞¸歎评寶梅松論菊池

傳記坂梨惟定由狀

被疵腰骨

左肩上 如此致軍忠上者 爲後爲給 御一見狀

、申狀寫 阿蘇系圖惟

同」之故今从」之文書ㄨ附書證下

新撰事蹟過考卷之六

101

御家人上島彥八宇治惟賴分馳參御方候以

11

阿蘇文書

時及一族上島惟頼等至京師,

皇太子量仁親王:稱,帝於京師 競時也 二十七日庚子北

新主光

暦間記大日本史 11

時北條時益遣」兵犯三笠置山二十日癸巳北條高時以

補任神皇正統記保

1

鄉公

ニス

11

テ

及E地志略等詳也故三略入

ラ

貫以„„僧大智,爲:開山之祖 記

三年癸酉勦钉 春閏二月二十四日戊子 天皇潜出,配

按:此寺:武時武重其外代々一族家臣及匕他家,

所,二十七日辛卯至 伯耆國名和港,地頭名和長高繕

92寄進發願狀文中二年菊池武安亨德四年大江上|修船上山壘,迎,主上,守」之於三月十三日 丙午菊

野介安廣が四至界寄進狀等數十通今寺二傳レリ 池武時奉 大塔宮之分旨,起」兵此日討 鎮西探題北條

文書丿多少傳ル六此寺7第一下又當寺/事ム寺記|英時於筑前博多,不、克而死」之燃軾調 夏 五月 千種

以國分寺 爲„„行宮,高時置」兵監衞史

元德二年庚午此歳菊池武時造 廣福禪寺於玉 名郡石

寺

墓銘

春三月七日 丙子 北 條 高時

二年壬申 元號,正慶元年

四月二十八日新

嘉曆二年丁卯秋七月三日庚子 前因幡守 赤星 有 隆死

大日

而入,六波羅計垷梅松論

此歳鎌倉用:元德三

笠置山,大日本史大平

遷 天皇於隱岐 夏四月二日辛丑車駕至〝隱岐國

中將忠顯足利高氏赤松則村等併」軍攻氵 六波羅 七日

元弘元年辛未明朝廷專與, 皇子 護良 親王等, 圖」巳亥北條時揜伏,誅
京師定八日庚子新田義貞起兵於

逖 前謀 秋八月北條高時遣」兵來而議」行廢立,二十「上野,二十二日
甲寅義貞攻陷 鎌倉 北條高時伏」誅二

四日丁卯夜 天皇奉 神器,如:南都:二十七日庚午車|十五日丁巳少貳貞
經大友貞宗誅, 北條英時 於博多鳥

駕至 笠置山下,詔徵, 伊賀伊勢大和河內之兵, 召見 |飼城 北條一門悉
亡妇此日 天皇詔廢,新主 六月五

楠正成,委以,興復 九月三日丙子六波羅府鎮北條仲|日丁卯天皇還」宮
去„正慶號 悉削„新主所置官爵,

秋七月十日辛丑阿蘇前大宮司宇治惟

條高時遣、兵增 笠置之圍 二十八日辛丑城陷親王

下文武百僚皆被」執 冬十月三日乙巳 天皇還自

肥後國國之事, 元弘建武之大亂根 起于此: 故書」之以

隨時入時定ㄌ長子元亨元年畔四月二十五日 | 原俊基,送鎌倉

筑前

總黼 應中於

大日本史保曆問記大平記◎此條雖不關係此

守卜稱x正應二年紀十二月十五日法名道性狀係圖從|京師,二十三日丙午執謀主中納言藤原資朝藏人頭藤

多治見國長於

寺内=摸テ墓ヲ立

阿蘇小國鄉滿願寺北條時定隨時定宗三人

時之子也

11

正中元年甲子时九春三月十三日己亥三池貞鑑為

顯之子種時爲, 九州探題 又不」年月:

平定/後小國:住冫 滿願寺7建山城國醍醐寺7

亮北條英時:爲„鉽西探

シ醍醐ノ徑果和尚ヲ詩テ開山トシ立護山醍醐滿願

寺卜號 經果八正應二年七月二十七日寂此奉直言宗也

正平十一年六月可以爲祈願寺 卜/諭旨有」之

小國

北條松又狩宿卜時定等狩獵/地也卞云傳所

又常樂記:隨時7阿蘇遠江前司卜尹元卜+小

國三住冫 三人下毛此所:元卒夕元詳ㄤㄕㄡ故

此二附記シテ考ニ備フ

元亨元年辛酉

三人共 蒙古 襲來,時下向

及地志略載」之

天正十五年瑚山住持之時罹„佐々隈部之兵燹,諸堂

カリ

丙申以, 修理

冬十一月二十七日

住持比丘紹彝

永亨六年甲寅十一月廿一日

大系圖從五位下三年八月十九日於 鎭西 卒及大

數拾八町七段末寺十三所不

圓政

从„寺記:双

九日大日本史菊池僖記O前任政顯器年

は限八本木大道石村井手溝西は限石村之溝北は

常樂記元亨定ヵ弟修理亮卜稱x永仁二年鉀七月二十

限津留山迫下寄木升手溝寺領一所六町貳段貳丈

ほ杉村之内一所九町四段三丈ほ垣本村一所壹町

山鹿南島村大村壹所壹町以吉田大園之内野豆

惣田咸燒亡其後加藤清正寄,附小地,分三重建,其詳寺記

無,,,,考所•英時義時六世之孫久満願寺記ハ遺骨ヲ

廟アリ

時定一時賴力弟六郎又南江

1 月大日本史等問”之諸家大系元年五月二十五日隨時阿蘇遠江前司於

法名契宗

西:他界大系圖六月二十三日於 鎭西:卒、知 孰是

定宗八時法名道圓

地志略隨時之子治時法名宗運寺,

中有廟寺記不.載之故不.取

系圖時定之子定宗其子爲: 隨時:今始飽田郡鹿子木西莊下村地頭職秋九月 天皇謀

、滅北條高時,而事頗露漏十九日壬寅六波羅府鎭北條

時盆北條仲時殺,,,,應」徵之武士土岐賴兼新撰事蹟遍考卷之六

五年丙辰秋七月執權北條基時罷北條高時代之

長子 此歲菊池武修,日輪寺,

大日本

ム

五世孫時兼之子

爲 執權

カ

正和四年乙卯秋七月執權 北條時 卒以 北條基時,

大日本史 義時

煕時,爲„執權¸ 「五世孫爲時之子

大日本史●義時

應長元年辛亥明秋九月 執權北條師時卒以,, 北條

二年己酉此年藤崎宮火

曆間記大日本史

延慶元年戊申明秋七月北條貞時廢, 久明親王,立,

其子守邦王」爲」 主八月十日丙申„守邦王, 爲 征夷

大將軍 鐐記將系拔萃保

實政之子掃部助顯¸„鎮西探題

德治元年丙子脇晒绛叶冬十一月二十五日 壬辰三池

三池交書

員致定 補亀田郡鹿子木東莊下司職,

二年丁未冬十月二十二日 癸丑詫磨顯秀賜 合志郡村

吉村田地,因 蒙古合戰之功,也擔

本史

大日本史〇宗政之

子也宗政時宗之弟

九月鎮西探題北條實政罷 冬十一月以

カ

將軍執

三年辛丑秋八月執權北條貞時罷北條師時代.之

權次第

寺洪鐘銘天庵自所作的時代十三日當山中興沙門懷義誌 五世住

持紹彝時因」變寺將」及„斷絕」紹彝引氵 先例, 寫 肥

後守印證,訴„時之守護菊池持朝持朝聞」之終蕸』

朱雀天皇の御宇天慶三年當國之良吏少卿紀隆房

爲皇照上人分建立七大伽藍之一寺也其支證數通

而宮御所分旨國司代々當家武重武光武朝三代之

公驗小鳥垣本村武朝御寄進狀前探題今川了俊杉

村領主比丘尼素覺證文及杉村一圓寄進狀開山之

置文等應永二十九年九月五日寺家炎上之時悉分

燒失之際應永三十一年三月二十二日元朝具被加

御證判殊以領地之御公驗可備末代之龜鑑者也日

輪寺領内四至之界は東は限日籠寺麓山鹿大道南

九九

肥後國山鹿莊醫福山日輪寺建立之次第

其志,其訴狀日

11

力

11

寺記略日開山名懷義號 天庵 日向國小兒府之產也

大慈寺三世鐵山之高弟參侍十五年悉窘¸„底蘊,一衆

推」之稱"大慈門下之一麟,正和丙辰年菊池武時興

修山鹿郡杉村小峰山日輪寺】請三天庵,開法延元丁

丑年 後醍醐天皇降„„鳳詔,賜„„扁額, 改„„ 醫福山日

輪興國禪寺, 正平十六年三月十六日寂年 七十四當

沙 彌

十一月十五日

薩摩入道

御劒壹腰神馬壹任例自關東被獻諸國一宮候之

間當國分御劒神馬瑙 送進候可給 御請候 恐

恐謹言

秋九月北條貞時廢 惟康親王冬十月迎

後深草天皇第三皇子久明王,爲、主九日乙卯拜,征

夷大將軍 谿十一月十九日甲子先」是自鎌倉 獻 神

劒神馬於諸國一宮,肥後此日送來肥後一宮卽阿蘇也

阿蘇文書

家文

正應元年戊子明計夏四月二十五日己卯詫磨別當賴

十年丁亥春三月二十三日 庚戌宇治惟國爲 阿蘇宮大

宮司 文書

國志登社地頭職, 文書

詫磨

七年甲申夏四月四日壬午執權北條時宗卒七月長子左

將軍執權次第

馬權頭北條貞時繼爲執權 -關東評定傳

九年丙戌冬十月二十八日 辛酉詫磨別當時秀補筑前

六年癸未冬十月以„鎮西探題北條實政 爲‷長門警固,

大日

本史

肥後文獻叢書第三卷

秀補„詫磨郡神藏莊地頭及下司職

二年己丑″　鐵山鞍太‵名淨㶣法

各爲 一方宗師,大智離 法皇派 繼, 他派之

仁世叟 世糍射開山

【師化立大

鷲林開山

【世′ 愚谷名常滑大慈四

名士安大慈三

慈二

大慈五

ス

名韜由先

全身窆三本山,塔曰:靈根 有四神足,斯道

チ

動靜得」禪未斯一句威音以前置」筆而化門弟子,

貞吉日未斯二字疑未期能

大慈寺記略曰此日淨髪澡浴索､筆書､偈曰八十四年

正安二年庚子秋八月二十一日癸巳僧寒巖寂

爲¸„鎭西探題

O兼時時頼之孫 而宗頼之長子也

三年乙未夏四月鎭西探題北條兼時罷朋┏戳,太旺村史,

包㨔記將系拔萃作 六

四年丙申秋九月以長門警固北條實政復爲 鎭西探

題

帝王編年記

大日本史

ニシテ

永仁元年癸巳訌 春三月七日 癸亥越後守 北條兼時

鐐記將系拔萃將軍執權次第大日本史

按二尊覺誰人ナルコトヲ詳ニセズ此年二月

九月/書狀干有」之大慈寺毛弘安九年 閏十二

月ノ書簡二名アリ

肥後國守護薩摩入道尊覺施行

正應二十一,十九到來

九八

新撰六

事

通考卷之肥後國飽田南鄉河尻大渡大慈寺長老義尹申地頭

泰明寄進地幷 橋修造事薩摩入道尊覺注進狀披露

候之處聞食之由被仰下候仍執達如件

矢野豐後權尊殿

果圓判

如此

大慈寺井大渡橋事薩摩入道

狀

也又正安二年條」之

有. 泰明之四至界證文境内方四町 海邊牟田三十町

寄附之狀,又論旨教書等有 十七通,寫,其一二,餘略

之

稱„法皇長老 蓋以,皇子:也

+ㄦ,以下略而不」書詳:寺記·

11

1

11

之道德,下」詔賜宸翰額及紫衣 双擧爲 宮寺】

以」有長橋,也慈寺山門之前

室山門盡備成矣尹自釋迦文珠普賢三像, 安之

佛殿建立勸進帳序多寶塔建立勸

於寶殿

寺名„ 大慈, 者尹

進帳序自筆之書」今傳于寺:

南„遊明州,之日愛 大慈山之佳境 不忘„於懷 今

此大渡津偶 明州之地景 故以名、之其山號 大

其時大渡在 大 龜山 法皇聞 尹

梁,者ニテ

タリ

1

チ

創|大慈寺於大渡,不,期年,而寶殿法堂僧舍庫院

此寺

給分申沙汰可候歟恐々謹言

弘安九年閏十二月二十三日

九七

武朝申狀菊池傳記蒙古襲來合戰繪詞書參考太平記關東 評定傳保 曆間

記八幡童訓 城盛宗以下名據 繪詞書 元者蒙古牧世宗至元十二

年四月改 國號曰 元

○皇朝建治元年也

風雨海水簸蕩賊船悉漂沒十萬兵得,,,,生還者僅三人

菊

四年辛巳夏六月元兵復寇 壹岐對馬 關東及九國二島

兵防戰不」勝秋七月與 元兵, 日夜會戰殺, 千餘人 元

兵少却肥後守護城盛宗菊池武房詫磨別當時秀大野國

隆竹崎季長大矢野種保同種村等奮戰閏七月甲子朔大

當寺ノ鐘銘、寒巖15弘安 十年四月七日

造伽藍檀主左金吾源泰明開闢當山住持傳法比丘義

尹謹題

大慈禪寺長老

沙彌 判

弘安十年三月九日

肥後國飩田南鄉河尻大渡大慈禪寺長老義尹申地

頭泰明寄進地井橋修造事今年正月二十三日關東

御教書令拜見候事且任御教書之旨可存知候恐

謹言

謹上相模守殿

陸奧守判

弘安十年正月二十三日

衞門佐泰明 欽其道風 爲,,,,法場之外護,弘安元年

タッ

里越前守之女 未知孰是

11

里莊, 因氵 素妙尼之請,

爲 河尻素明之妹 又爲 古保

[營 構三日山如來寺河尻左

三年日記六月十三日條

安富莊地頭職】

三年丁丑夏六月十三日辛未相摸守 北條時宗領„ 肥後

太田美濃守三善康有建治

渡橋

洞上諸祖傳及寺記略曰開山禪師史

二年丙子此歳僧寒巖河尻大渡水路造 長橋, 名謂大

「月:今從: 帝王年記

テラチ

明 此歳河尻 泰明建 精舎於大渡橋

詞書弘安四年三十六歳~誌7元亨四年三至七「北 延 僧寒驤` 爲„開祖號 大慈寺,

六年正月二十三日地頭左兵衛尉藤原季長下書夕、

編年考徵四

1

置文二通正和三年正月十七日地頭沙彌法喜書改

元假名書丿置文 同年月日塔福寺天台宗爲 海東社之洪

今爲, 此宗寺

冤田等/文書又元亨四年三月四日社領寄進狀今傳

テ皆塔福寺ニアリ五通トモニ自筆ニテ花押同シ繪 弘安元年戊寅だ十九歳其終所,不」知繪詞書、文永弘安兩度蒙古

合戰,次第季長自ラ書著タル卷物ナリ永仁元年二

月九日下記ス今大矢野家持傳フ

二十三日己丑置„„鎮西探題,以上總介北條實政,爲、

之西海道置 探題職, 昉, 于此, 諸書題之始爲 永上元年三

名義尹號.

鳥羽天皇德院

第三皇子母皇后修明門院重子左

滕原範季女也 建保五年生天性淳懿不

不」膠,世

故,終辭」榮於„叡山楞嚴院,剃、髮習„„ 台敎, 已而又

改」衣從越前永平開山道元禪師 學 禪法 建長五

年三十七歲渡 宋國;參見天童山如淨禪師 未」究

奔馳 而還其間依道元遷化 受„ 法鐵通義价 永

元年甲子再入」宋首謀…無外於瑞巖|繼見„„退耕於靈

隱 學„虛堂於淨慈 將且徧禮 拜翩塔 歷 遊名山,

四年丁卯歸、朝寓ŗ筑前博多聖福寺 三歲六年己巳

素妙

來„肥後,居 宇土郡古保新撰事蹟通考卷之五

1祝藤井末成又有別當神宮寺,

九五

是偏大菩薩祈念深カリシ故也若勸賞有ナラバ一番

11

左兵衛尉1) 剃髮>亍法喜~號入海東今共益城

中¸懸出頸共數多取付城内<a hy揚名後代

/趾村丿上山=

城號下不後

按三季長、五郎兵衛尉卜稱入八代郡豐福鄉竹崎村

八幡愚童訓日文永十一年 十月二十日蒙古自」船下

年條

興國二

蒙古襲來合戰繪詞書/終=文永十二年六月三日竹

本之爲,日本, 之大功- 之由顯 天下之歌謠

忠勇 嫡子隆長三男秀直以下數輩致」命畢後鳥羽院

之逆謀,奉、守„劔璽,受, 安德天皇之勅命數年勵三代郡海東地頭職,

者也然壽永元曆之頃者曩祖肥後守隆直不,與"東夷| 建治元年乙亥明冬十一月 丁卯朔竹崎季長爲 八

將,又曰有隆兄武房文永弘安 蒙古合戰高名無隱会

十日於 壹岐對馬筑前所々 有,,,,軍功 討 捕蒙古大

赤星三郎有隆文永十一年十月二

11

郡 以降至武朝,十七代不」與_凶徒奉」仕朝家

記

參示給々 云物ヨ右今度勅使如」被」申將軍宮者當家之忠功者不

ス

菊池武朝申

菊池右京權太夫武朝申代々家業之事

、可以過 元弘之忠士 歟因」玆難」被↓閣,,群黨怨 云々

謹檢 當家忠貞之案内 中關曰道隆四代後胤太祖太

夫將監則隆後三條院御宇延八年中始而從下』菊池

八八幡:奉,手向 立願故=關東

甲冑?面目,餘可、遺,子孫, 思共

神恩報謝トテ當社二持參タリキ

參考大平

御代承久合戰之時先祖能隆爲, 大番役 依,進 置叔

父兩人 隨,,院宣｜進戰畢就」夫當家本領數箇所為.

平義時:被 沒倒」 畢文永弘安兩度蒙古襲來之時者

高祖武房勵 勇敢於戰場 施 佳名於異朝既抽日

乘」馬舉」旗責力、ル菊池許被打漏,自,, 死人

崎をたち八月十二日鎌倉二つく十月三日秋田城介

泰盛に就て愁訴す弛鬪東海東かなしもんし

なりよて海東を紛るへき調不 同十一月一日御

たしふこを給りてあくる正月四日だけさきにつく

同此間不

2以下不

久桁鼭蚧小盍城哪 屬入居 故:竹崎7家號 二宮 勸請年月無書記 正應比

郡:屬ヌ海東社:

正應

愚童訓

年菊池武房建」之以 寶山和尚,爲,,鼻祖 元德元年

寺記日益城郡隈莊宮地村鳳翔山淨土能仁寺文永二

菊池傳記爲,,,,弘安

後國鳳翔山淨土寺,

本朝僧寶傳曰京師建仁寺無涯和尚元亨年中住肥

記赤星有隆捕 蒙古部大將, 菊池傳記,弘安四年獎來

之時:今從,參考太平記

能仁寺 爲,,開山祖

關東評定傳八幡愚童訓菊池武朝

武房,皆有,功眕烤軑平記

古魂來合戰繪詞書 菊池

名僧行錄日寶山鐵和尚宋西蜀王之 子也嗣 大覺禪

二年乙丑此年菊池武房建 能仁禪寺

守護宗助國妇流人肥後江井藤三等防戰死」之

訓祖書網

也

父

秋七月北條長時罷八月北條政村爲,,,,執權 臥鉢駛80

1

代領」之故此後略而不」書

時之弟 長時叔

相良賴親死

系圖 球磨郡地頭相家代

八幡愚童

永元年甲子爬明计夏五月二十二日乙未球磨郡地頭|十一年甲戌冬十月五日丁未蒙古之大兵來而寇 對馬

系圖

阿蘇

同神倉莊地頭下司兩職

七年庚午冬十一月十五日庚辰阿蘇山神電池鳴動20

弘長二年壬戌秋 八月癸未晦詫磨別當時秀爲„ 詫磨郡五年戊辰春三月相摸守北條時宗爲 執權 R

本史

康王 爲‟征夷大將軍,本史關東紅定傳

子也

時之

子時宗幼冲使武藏守長時代」已爲中執權

大日本史

康元元年丙辰計卽今乘」與鞭,起鐵牛,墓在寺内,

日本史

倉,夏四月甲寅朔以九月十三日脫化年八十九偈曰辛丑非、浮己已非、休

征夷大將軍,東艦

宗尊親王,爲„„1冬十一月北條時賴以、病辭、職其

泰時之弟重

三年丙寅秋七月北條政村北條時宗廢„宗尊親王,二十

日庚戌逐逐 京師,立,其子惟康王, 二十四日甲寅以..

公卿補任東鑑大日

惟師法 弘長元年八月東渡菊池武房創 隈牟田莊淨土

要冊略Q愚童訓肥後國御家人口井藤三源

十四日 丙辰戒 壹岐`

三郎同時討死删略 口作 江今诂 畘略

二十日壬戌蒙古總軍上陸放 火筑前博多筥崎等,九國

二島之兵士戰而不」利‶菊池武房大破,蒙古之軍,斬

首五百餘級城隆賴葉室高善竹崎季長菊池康成等從

夜逃鎮西之將士追」之不」及獲„„ 賊船一艘百二十人,

武房之功,賜以甲冑ı輔之後

斬」之後賞

迎考卷之五

1

癸卯以„北條時賴請跟遣„皇庶兄三品宗親王 居鎌

關東評

嘉祐三年丁酉秋七月二十一日庚午以„„ 藤原爲佐 爲,四年壬子春二月相摸守北條時賴廢 賴嗣 三月十九日

號 山崎 有、寺名„ 願成, 天福元年地頭相良三郎長」建長三年辛亥春三月十日庚午球磨郡地頭相良長賴死

賴所」建真言宗號 傳法山觀喜壽院

上梁銘略曰西海道肥球磨郡人吉城之東北隅有」出「故以下略不書下皆倣之

●豐後守護大友家代々頷」之

ムナブタ

小代文書●小

寺,

11

補 玉名郡野原莊地頭職É(大緞屻

俊

圖改元

系

日天福元年二年戊申冬十月二十四日丁酉豐後守護大友親秀卒

玉相良長賴建｜寺於山崎4號„ 願成

寶治元年丁未2明夏奉行,以_以, 小代重

之

貞永元年壬辰明,秋八月太宰少貳藤原資賴辭 鑚西｜執權 軑。

四年丙午春史百緑

本云

「本史

11

史

11

ナリ其後廢壞ス寛喜三年聖光上人上足蓮阿來テ 爲執權 「泰時,死故其子經時

興建冫淨土/寺二改云十五世/住持運礐加藤家: 寛元二年甲辰夏四月二十八日戊戌北條經時黜, 征夷

大日本史○時氏之子也時氏先:父

草創法相宗也本立像/彌陀ń行基一刀三禮作「三年壬寅夏六月十五日丙寅執權北

卒孫經時嗣

日阿彌陀寺、大峰山 來院號ヌ他 仁治二年辛丑夏五月二十三日己卯肥後國人大町次郎

田郡泊瀬山/南大峰山:尹故:山號下ヌ行基力 通信與多多良次郎通定爭論大莊地頭職

蘇山神電池三年辛卯僧蓮阿修„阿彌陀寺

蘇家

八月八日丁卯暴風藤崎宮倒

各十二月二十六日丁卯阿

三修„藤崎宮

怪異家傳蠕記

社記〇東變肥後前

曆寬1月14

明月記阿蘇

喜二年庚寅秋七月阿蘇神靈池有 七元年戊戌計日改元 夏六月前肥後國守護藤原盛時

鳴動啊請テ寺ァ古町二 勢譽分叉今所細工町三徙|大將軍藤原賴經 以其子右近衛少將賴嗣,爲主

ス因テ大峰ノ寺ァ來迎院下號シ古町/寺ヲ古阿彌

詔以„„賴齣™爲„„征夷大將軍,陳标

陀寺下子資能 爲」三月北條經時以.病罷」職弟時賴代.之為”

六月二十三日 甲辰癸巳蛸計二年戊子冬十二月僧辨阿於 肥後往生院修„四十八

城郡杉島村:河尻/南河向其頃、河尻莊

#屬ㄡ道元 禪宗曹洞一派/始祖越前國永平寺

開山也建長五年八月二十八日寂

按:河尻、飽田郡:屬ㄝ府城丿南二里7”綠河

入 海所萬船湊輻丿津口也圖書編

口也圖書編三薩摩北爲肥

後¸註其 褰 爲 開懷世利 即千此觀音寺六

一葉,而浮-海上-風波恬如及,得著岸 自刻, 其觀

所 安„于此,以」故有南溟觀音號 其後監院之僧

畫 其像謁祖師洛南一乞」贊便題曰一花五葉開一

葉一如來弘誓深如海回同運喜 財監之僧」版其版

現藏 寺傍之民家,

11

1

タリ

11

品,忽補陀大士乘 蓮葉 泛海上少 頃 風波恬如

也以,故孤航無､恙速著肥之後州河尻津 實安貞元

年丁亥也乃入三上都寓建仁

建撕記 十三世住職日肥後州河尻津有､寺 號, 南溟山

觀音寺 本: 鼐於一葉觀音」寺僧傳謂永平祖師歸朝

本三

値„惡風於南溟 時默¸禱船上,則忽見-大慈尊乘 „蓮

洞上諸祖傳曰云々宋寶慶三年冬解」 纜發.艄天寒白-日別時念佛,

雪霏々海風俄惡波濤怒鼓一船無人色 朗誦 普門

シバラクアリテ

肥後文獻叢書第三卷

手印 诗)聖光上人開基/寺興聖光爲:念佛道場 本尊立像之彌陀長 聖光
、法然上人 又名

+ 往生院後年衰壊及>ヨ僧然譽加藤清正 歎

希慶長七年二月府古町=引移セリ享保九年

寺地改メ今池田村二代地賜り堂舍ヲ造建ス

古町/寺ョ今、古往生院ト云

又名辨阿嘉禎四年閏二月二十九日寂年

源空

京師知恩院開祖淨土宗之本寺也曆二年正月二十三日寂

高弟筑

年八十元祿十年剌圓光大師:實永八年加引賜東二字,

在 草野 淨土瓢西派本寺也聖光名辨長

五尺三寸安阿爾之作也未」知 孰是

後國善導寺/開山也

北Ü了許三ㄚIEE日行基草創中

北二丁許ニアリト

和漢三才圖會

リ或云今府中

千反畑廣丁/南法念寺,

寺証略曰往生院也

古云白河ノ邊三尹碗磨郡大江村一其

סיון

聖光上人傳曰安貞 二年 十二月 聖光上人 六十九歲

於肥後往生院四十八日修 別時念佛,時造 授

手印:此授手印于」今傳在往生院

11

圓光大師行狀翼贊日聖光坊辨長 數數 安貞二年冬

於肥後國往生院 修,四十八日別時念佛, 之時爲

戒„後昆異儀 製 作一卷之書,題號名 末代念佛授

又號

九二

1

新撰事蹟通考卷之五

九]

衰 密議」滅 北條之族天下 召」兵事洩而傳 關東津

11

三年辛巳夏五月 後烏羽上皇每憤„武臣專」權皇威滋「朝臣忠久卒*
此歲僧道元自.宋歸著„„肥後河尻

計夏六月十八日乙丑薩摩守護惟宗

改元

一日安貞次第

丁亥十二月十

將軍,倒大日本史

嘉祿六月十三日己卯將軍

ス

爲 鎌倉主 ,賴經攝政道家之三男也年甫二歲始實|大日本史

將源實朝 百練持東疑 秋七月北條義時立 藤原賴經

子僧公曉弑„„征夷大將軍 正二位右大臣 兼左近衛大

承久元年己卯昭明計”春正月二十七日甲午源頼家之|元仁元年甲申夏四月二十六日壬辰詫磨別當能

盈城甲佐鄉大澤水村/正法寺也

門權少尉藤原朝臣能直卒形跡

大友

前通ルコトヲ蔵寺ニ非

皇朝

史略

其外佛像等古代/物殘L!小西行長燒入後寛永｜波羅東西:分-.泰時時房,居』之自」是天下之事皆

11

畹 此歳北條義時置 政府於 京 都六

開基年代不詳職於古、繁榮丿精舍 > 亓

開武朝申狀

基年代不」詳記或松聖德太子,

散菊池傳記 作嗓定

大益城木山鄉小池村飯田山八合目

1

Py

官,令-,族人,兼居中京師,此也奉院宣導防 東兵 軍

1

燃 於此味冰 天台宗大聖院常樂寺一號| 東軍陥京師 大日本史 菊池能隆爲 大番役 故爲 代

承久記東鑑

‟同十月將軍九州7平定氵 歸洛yst命二依ㄕ哄 奉冫在京氵 ㄕ公 | 師 六月與官兵戰„„ 宇治勢多, 官軍大敗十五日戊辰

公|師

方家譜代栾三十六人‟内左/上座也下云々其城跡 南甘木村二了y

11

年菊池征伐トシテ下向ノトキ味木次郎四郎 久將軍二軍功

ㄕㄗ刨刀Ht昧木大班四郎 欠雍將軍屬清剿理石 | 二十二日乙丑北條義時遣„弟時房子泰時,將.兵犯 京

・益城郡ノ内ヲ領味木莊=居り味木の家號トス足利義滿麻安七

ヵ後ニハアラズ

飯田山寺、之後義時削,能隆之所領 1令規菊池碩德丿僧侶多;本尊/千手觀音、隋/世/作下云「貞應元年壬午

四年小堂7再建入正法寺、玉名郡小代山2枝峰筒|決於此 世稱 兩六波羅

嶽:T 刂今觀音嶽下云寺今、廢迹卜廾Ly戰斐宗運二年癸未冬十一月二十七日乙丑豐豐後守護前左衛

朝

薨而無」嗣既而義時專 兵馬之權 故遣„„弟北條時房

於京師,迎」之於」是天下之權一歸 北條家村詑磨郡神倉莊地頭下司職 詑唔

秀爲

鎌倉

六月十三日己卯鎌倉執權北條義時卒其子 泰時 嗣爲

執權東爋北鰷系

二年丙戊春正月二十七日 癸未以 右近衛少將

原賴經 爲„征夷大元年稚而有 老成之量:七歳讀 佛書 纔終卽誦叉諳書焉

九歳州之味木縣史源 憑 見 其幼敏而無父養而爲

、子名曰‶自然,一日憑延 飯田山寺僧, 讀 大般若

經 憑以„聰慧,雖」稚而加 僧員 諸比丘讀至 奇

字』試問」蒸蒸應對詳悉諸僧相顧歎異共字」之曰:音

義,十歳讀 法華, 六日而終十四歳從 飯田之眞俊 |

池上村,

居

チヂ

者|生葉池中,魚鱉載浮三日不」死然後收育予生似

之故自名云四歲時母與 其舅池邊寺 珍曉 童

モヘ

セテ

セシム

テ

禪

母藤氏生而數日母葉樹下,經三日】無 禽獸之

元亨釋書曰俊英字不可棄 肥之後州亀田郡人

六年戊寅先」是僧俊創 正法寺玉名郡 筒嶽 宴

此此年受」請遷 京師泉涌寺,

法國師.

早岐系圖

四年丙子夏四月二十二日乙巳源業政爲 詑磨郡六箇

莊小山地頭職

i對家之始租也

詑系〇詑

政 ㄤ 爲 鎌倉執權 大甲

建保元年癸酉叶明 春正月相摸守北條時代父

肥後文獻叢書第三卷

秋八月 大友能秀爲„ 詫磨郡別

當職傳字我其伯母往見」之以爲祥兒抱歸付」母乳養以」故

字 不可棄,或問 所由, 日十八部主中有 大不可棄

炯孫安田三郎義治肥後下

」孫源賴朝二仕7

-賴信六代按:味木縣、今益城郡甘木莊大縣訊今2郡縣吏

云古郡頭今,郡代此時分縣/名叉郡領等;

【國郡原始鄉莊

廢t>後也

「且味木郡 非 僧虎關國

沿革合見ベシ

史暗漢文ニ飾テ書タル故其實失フ定テ憑

味木莊/地頭さÀ心氵憑訊嵯峨源氏/人其子孫不

·本朝高名記=味木氏八甲斐 ※田三郎義定が後胤也義定

カタ

寺|二年冬移„崇福寺 +自崇福 歸氵 本邦 棲, 筒

嶽ň伐、松芰」荆創一伽藍 號 正法寺 當」夷,基跡

往々有三礎石 蒸 古基偶 爲_勝地 宴 居于此,

或授„密灌 或宣 戒法 往來緇徒常百餘員建保六年

本書作 裤在 筒嶽正法寺 味木縣人辨慶夢入,一

山寺,空中忽有:神僧告曰筒嶽之蒸師者五百生修

道之人也汝蓋」拜」之覺後感喜詣」寺禮講欸密此年

受」請遷 洛東泉涌寺 嘉祿三年三月八日寂年六十

二後小松天皇勅 大興正法國師,

陰軍 + 建曆元年歸朝著 長州安武郡 四月至,建仁

1

學„顯蜜之教 俊者台嶺之座主忠尋之上足也防苦學

精勤邁 於倫 十八落髮十九於 太宰府觀世音寺,

受其戒 出 關西,往來南北二京建八十年四月

率„秀贺二弟,附商舶 泛滄溟 五月初著 宋之江

代莊爲„参議藤原高保之地,

三年己巳冬十一月大友能直爲„肥後詫磨郡神藏莊地

圓光大師

建久三年壬子秋七月十二日壬午以前權大納言 源賴

正信坊湛空於肥後: 狀賛

承元元年卯明計春二月九日 乙卯流 源空之徒

內家譜等二從テ姑ク北斗トス

征夷大將軍校史

弟實朝詔以源實朝,爲

則妙見一前云北方2辰星也然下宅今靈符2畫像大

其義一±5°C今考:皆玄武?名下冫 龜蛇ヨ表ヌ然「三年癸亥秋九月七日
壬申北條時政廢 源賴家 | 立 其

夷大將軍 11

陳權狀

七曰. 搖光又曰 破軍:

日本史

11

1

建仁二年壬戌秋七月二十二日甲子以„源賴家, 爲 征

11

11日,璞又日 巨交| 時政之女 時政執､權東鑑大

或北斗七星トシ

1日.樞义日:貪狼, 左近衞權中將賴家,總 督諸國守護,時年十八母以,平

二位前權大納言右近衛大將源賴朝薨朝議勅 其長子

方木精生 靑龍 熒惑南力火精生 朱雀 大 正治元年己未明計春正月十三日乙巳征夷大將軍正

家之始祖也

壁五星之一也緝星中央土精生:系圖 相戛

摩國守護,此月赴,任家之始祖也

衆星四面旋繞而歸,向之二

島津

テ チモムキムコウ 或北方七宿料女虛危室

文書

乃北極也天之相也居 其所,不動

司 秋八月豐後守島津忠久先」是建八四年偽. 薩

阿蘇

以前ニシテ中古以來ノ事ニ非ズ又妙見或北辰

以前=>中古以來丿事:非叉妙見或 北辰跳|七年丙辰夏六月十九日 丁卯宇治惟次爲, 阿蘇宮大宮

妙見幷妙見之院等/文尹然L八妙見7祭-延暦「家之始祖也

本史 少貳

江村淨水寺 延暦二十年丿碑銘中

N

日大小熊野下ㄚ`

國史旺暦十五年/條及年中行事 公事根元

本史

史

記下類聚

則ﾁ匠丿及所二叉妙見玉琳聖ヨ始卜元卜十八

其由來ヤクシ 潮珽一淤行千北辰一深9又奉 燈口豐前 豐後二國

六年乙卯夏六月左近將監大友能直爲

守護,蒸酒10大 冬十一月天野遠景辭 鎭西奉行, 一家之始种也

十二月筑後守武藤資頼補 太宰少貳】 鎭西奉行,

乘黃: 歳星東-九年戊午相良長賴爲,,,,肥後球磨郡地頭職 孫鐗 黼眼

七星也或;辰星

白西方金精生 白虎 辰星北方水精生 玄武 五雜俎曰真武玄 武 也

與 朱雀青龍白虎 爲:四方神後世堀3地得徹蛇 建廟而鎭 北方

朱雀蒼龍白虎神滅亡而

無」祠終玄武而巳殘

三曰」璣又曰 禄存 四曰 權又曰 文曲:五曰:玉衡:又曰: オス

其所

廉貞 六曰 開陽:又曰 武曲朝¸為征夷大將軍, 冬十一月源賴朝以 肥後八

任東鑑

御史令三天下立三靈星祠」

穀也時漢興八年矣漢書日記大以昏時・到明網艦大全

曰漢武帝立 太乙祠,史記天官志曰北方玄武註北宮黑帝 其精玄武

帝等稱シ道家仙家宗トス

テ祭」之宋朝ノ頃最盛行上元大乙神 眞武上

事物紀原曰曰漢有 天下 高祖

九年百濟琳聖太子來朝之後大内家相承行」之以,二月十三, 爲:會

日云々靈符上太上神仙宅符ト題シ中央二本尊 妙見俊

蛇二駕ルヲ圖シ其上北斗七星左右七十二ノ秘符書シ下=

靈符記シ漢孝文帝信仰シテ符ヲ傳天下施ス是其始ナリト

今妙見宮別當神宮寺ノ寶トス是何頃ヨリ

版木ナル不分明正保十三年 仙洞詔シテ

霊符三十枚献セシム是ヨリ名天下顯ト

異域漢朝始

11

八代郡土北鄉八千把村竹原津自白鳳九年三年

在鎮座而移盆城郡小熊野鄉千代松峰」其趾方八

尺水晶石存于今其所謂白木平在」此九十年寶龜

二年遷八代横嶽今上宮是也記怪談妖妄信ズ

ル不足今試一説及ど所|考ヲ擧校訂便ト

ス抑妙見北斗七星祭北方玄武水徳神タリ玄

龜武蛇ナリ故二靈符!中央二妙見像龜蛇二

合類節用集日靈符道術家修法

駕ルヲ圖シ上=北斗ョ畫ク

以妙見穹本尊謂之北斗

尊星供 所」祭北斗禄存星禄存北斗第三星也 故號 星宮 推吉帝十

肥後文獻叢書第三巻

常居 後玄武 事物紀原又曰宋

多々濵因 朝廷賜多々姓食 大内邑琳聖九世孫至正恒

改今氏周防氷上山長門國桂木山鷲頭山ニモ妙見祠アリ皆大内

家勸請也其縁起モ八代以本社トス

然之今存ス元傳飛驒工造立ル所素ヨリ當時工

モトブ

多寶塔アリ小西行長モ其精巧奇絕ヲ愛テム不壞

コホタ

下宮トモ稱シ其靈時今宮地村上云神垣内二三層

ミヤトコロ

是妙見中宮ト稱ス中宮ヨリ上宮=至ル登ッ十八丁 本社:

其一社アリ緣記=肥後守平貞能永曆元年三月立

フモト

太子靈屋云後年其背堂立彌陀釋迦大日

三體ヲ安置シ妙見本地下云今是ヲ上宮ト稱ス

タマヤ

シロ

タマカ

テ本宮トシ其土封シ繞ニ瑞籬以ス俗ニ琳聖

グラス ミツカキ

アト

レバ琳聖カ祭所ト云モホ誣ベカラズ

此年殿宇此二遷

皇御時避 其國亂 投化十九年至 周防國 住 佐波郡

聖カ祭ル所

三室ノ巓ニアリ其草創詳ナラズ相傳百濟國人琳

大内家譜日琳聖百濟國 王餘璋 第三之子也 推古天

仙菩薩之大將

八代妙見上宮宮地村管内横

最掷仙中之神

國土-所以作甚奇恃也故名曰 妙見･處 於閻浮提･梁星中

見下名ク

神咒經日我北辰菩薩名日 妙見 今説擁護諸

天禧二年閏四月詔加眞武

皇朝本俘屠二起故二妙

テ

モト

11

漢書日北方七宿謂確蛇蛇日玄武北方神日本

11

地頭職補任諸家文書

等二モ見エズ因テ考當國菊池家守護職領シ諸

將皆領知菊池家受悉麾下二屬ス故二菊池家

搗考巻之五

別當職

地頭其外莊司下司別當等職アリ僉其所莊園

來住シテ其地領ス相良名和小代詫磨臼間等!

グル

ミナ

ス然ドモ皆兵

權以私兼領スルノ主ニシテ此國守護タルノ命

ナシ豐臣秀吉征西後佐々成政,封テ肥後國主ト

ス成政背」命賜」死後國ヲ分テ加藤清正小西行長

二授慶長五年清正ァ以一國ノ主トス成政以來守

言ズ國主ト稱ス然レバ守護/名菊池家ニテ

タモ

後全國ヲ併ス永祿天正間龍造寺隆信大友ト勢

ヲ箏と兵ヲ出テニ筑徇ヘ我北地ヲ犯シ二五郡

護職艹藤原爲佐藤原盛時城盛宗薩摩入道尊覺視

四人!外記傳見所ナシ建武中菊池武重肥後守護

職補代々職

其内阿蘇大宮司惟村守護職補ルト云

モ足利家ノ命ズル所ニシテ國

コトヲ得ズ河尻 菊池家亡テ天文ノ末ヨリ

幸俊亦同、之

ヲ有ッ島津義久南郡ヲ劫略シ隆信ヲ討テ殺」之

義鎮ト亟戦テ滕」之終二東肥一統如キ代々其職ヲ繼〃家アリ

代續亓詫特別當某白微莊司某

小稲而シテ應永頃ヨリ、八七

土者現眞武上帝於 皇朝者現三白木山神

目深手長足早三人形」自明州津三軀蛇著肥後

縁記曰妙見現七體故日 七體妙見又有種

變身 現上元大乙神,在、天者北斗鼐星於漢

二年丙午春二月七日乙卯源頼朝以肥後國 山本莊

授前因幡守大江廣元三 三月 大江信俊造宮殿於

八代郡赤土山麓祭妙見星」

活動其審ナル事鄉莊沿革二著」之

十二月源頼朝以天野遠景」爲三鎮西奉行」

アル村ヲ名トシ某ノ手永ト稱ス 衛門手永池田何右衛門

鮑田郡ニテハ五町阿左

ヲテ大屋形或守護様ナト重シ稱ス是ヨリ

!名絕テ諸書記載ナシ菊池沢滅後各其所

顔:據有シ或大友こと或龍造寺應ジ又島

津二屬ス是則中古地頭ノ如シ加藤家知國ト

ナリ新=郡=郡奉行ヲ任ズ古郡領ナリ又舊:在

テ鄉莊制》建一鄉一莊長置是大莊屋ト云

即+古ノ鄉長テリ諸領主加藤家臣トナリ或い

家亡ビ一國ァ去テ他家=仕7 我先君入藩後

郡奉行ヲ改テ郡代トシ大莊屋總莊屋トシ大郡

城ノ如キハ

八九長十二長「置

十二長、小郡八一二長ヮ置其會所,

分又其傍地掘テ土偶人ヲ得ルモノ間有

ツチニンキヤウ

カタハラ

三圍バカリ其木五

護居 不治

1

檀浦ニテス」海テ

ミサギ

武朝申狀○隆長秀直據 申狀 倶隆直子也

ツトナク

上古葬 皇親

リ國守郡領ト相幷テ政務分ヲ經理ス是ヨリ守護

各 其任伏)所丿莊園三居

在地頭、各

按:守護職;其國々)便地:日丿役處ヌ立

イクサノフネ

11

歸 賴朝 寶記

此月詔以 源賴朝始爲 天下總追捕

伐之今從義經訓,

六日之條

藏坊辨慶,伐」之隆直冬十一月庚辰朔源義經殺,,菊池隆直於京師先」是義

夏四月五日癸亥源賴朝以, 大納言平賴盛之領 肥後國 經叛,,賴朝,而欲」趨 西國 先使人誘-隆直及緒方惟

朝遣,,弟範賴義經 蝦」之是日大破;平族於一谷 東鑑

鑑盛衰

東鑑四月

惟榮諾」之隆直不」從故義百谏抄東

佰練妙暕 二月七日丙寅先」是勅 源賴朝,討, 平族 賴

ル所モホ誣ベカラズ故二此二附書シテ考ニ備ノミ

元曆元年甲辰期計春正月經道 伊勢義盛武

トリ其眞僑虚《埴作 偶人 易之夫以 是乃子 天皇丿陵也

不以爲 永制

天皇御 腰輿¸奔 箱崎| 公卿官人徒步從焉遂至 六

ヒトカダ

肥後文獻叢書第三卷

讃岐

國,菊池胤益 誅運 阿波材 造 行宮於屋島門本郓家物

醯 冬十二月源義仲作」亂知

二十日庚戌源義仲伏誅紅

▲之其俑7視形實其時代/塑像大 刂

、殉 垂仁天皇二十八年野見宿稱奏以

實考ヘ知ルコトヲ得ズト云ドモ

其家域丿樣平人/墳墓:非ヌ然L*其地/傳唱ヌ

球磨臼間二莊 如、故附┐與其家】八傑

文治元年乙巳明計四春二月十八日 壬申 源義經破,平

族於屋島|薤認

玉海東鑑 三月二十四日丁未義經進攻 平族

於海上,菊池隆直原田種直等浮„艨艟 連矢射」之源兵

少沮義經終鏖 平族於壇浦 養和天皇入」海而崩諸

平亡盡永野隆長砥川秀直等悉死」之菊池原田 皆降焉

玉海東鑑百練抄盛衰記長門本平家物語菊池

竊稽=里俗說曰 安德天皇議和天

「皇也

崩ス實近侍ノ卿相密護シ阿蘇郡南鄉二潜幸

行在ヲ造テ屏隱ス建久七年二崩ス世壽十七歲神立

山鷲峰寺葬り奉ル今見ル二四方石壇ヲキ上二

濱子石積大ナル檜一株アリ廻防戰而死」之,賴禘,熱菊池傳記

義經令‟下緒方惟義 此月詔以„源賴朝

使,因賴朝諸國置 守護 莊園補 地頭 自」是兵權一

知國守廢,後 綱府 地頭、丿勢强/盛=國守八名次第二衰弱朝官

阿蘇

ノ掌ル所逐二武官ニ奪無何停ラレタリ

元弘三年十一月肥後國衙ト肥後守護所別々當タル同日ノ雜

決断所/牒アリ詫摩文書ニモ建武二年肥後衙ニ當タル同牒

衙 八府下同:國府7云也其頃國 府二八誰人,居>弋守

護所及守護職人无不」詳尙天平十一年條可 合見

肥 後守

日大

二似タリ然ドモ菊池武朝申狀長門本平家物語不菊池原田防之戰于博多」不利

本平家物語

按=此書ニヨルトキ隆直平家ヲ叛テ源氏二從 九月緒方惟反平家」臼杵松浦等應」之惟義犯太宰

ソムキ

盛衰記長門

らす

史本

かはりしてけ

盛衰記日菊池二郎高直をは大津山のあけてまゐ

11

肥後ノ内ニテ筑後界ニカリタル山ニアリ天正

申

ヨリ西ニアル龍瀬川十松風關トアル郎此ナ

産直守 奉神器而越西國,擧族扈從菊池隆直守璽

大津不附テ考備フ

家物

載」之大日本史亦不」之且盛衰記二九月緒方惟

義反ス菊池隆直之ァ博多ニ討ッ檀浦合職菊池原

万十八日今大日本史長門本平

年誌誌ス

二年癸卯夏六月十八日辛亥肥後守平貞能定鎭西,而

今京師」菊池原田皆從焉平家物語爲三七月十四日 盛記

語 秋七月二十二日甲申源義仲率」兵進而據,延暦

寺總持院,二十五日丁亥平宗盛奉天皇及建禮門院

田平家ノ船二在テ源氏ァ射ル一書自ラ矛盾ス故二

山 玉名郡臼間莊大津山ニアリ因テ名トス

一名松風閼ト云名所和歌手引肥後國萬里ノ森

八月十七日己酉車駕至 太宰府

御太宰權少貳原田種直家菊池臼杵戶次松浦等衞

護焉

平家物語盛衰

記大日本史

らせよとてさき立てとほしけれと此事つひに

はか しからしと思ひて高直心ノ頃筑後二入テ今背戸ロト呼ブ 背外口ノ内

一丁餘其中程=古ノ牓標アリ左右山連嶮砧峭壁

僅北口バカリノ通路ニテ此闘アサシ塞カバ鳥ナ

ラデ越ガタキ要地也今南關北關ト云南北二關ア

ルニ非ズ關ノ南ヲ南關ト云と北ヲ北闘ト名〃關跡

六今北關屬ヌ北關邊筑後國入其故、南關紀聞

及志略詳ナリ共説孟浪ナリト云ドモ外二正

ナシ照シ考フベシ

平家物語:日壽永二年八月十七日平家、筑前三笠

郡太宰府にこそ着給へ菊池二郎高直は都より平家

の御供に傾けるか大津山の關あけて参んとて肥

後國に打越かのれか城に引こもりめせとく参以原田種直爲三筑前守」以菊池隆直爲三肥後守」

按=雲上城一盛衰記ニアリ城ノョ ト央正平二十二

直相 催九州軍士二千騎 遂合戰隆直等郎從多以被

東鑑日養和二年年四月十一日貞 能 爲, 平家使

者,此間在 鎮西,而申 下官使相 副數輩私使 稱

兵糧 廻 國郡 成 水火之責庶民悉以爲】之費仍肥

後國住人菊池次郎隆直爲」去 當時之難, 分氵 歸服

之由申』之

丽私記

五月二

六日己卯條日鎮西謀反殊甚菊池與原田¸元雖怨

敵,已和平同心欲」防 貞能之逗留 云々

百鍊 抄大 日

本史引吉記

有 鎮西之事等 菊池高直本畫寫作。高

故今改之之使給國司,配

者經﨏和行啣全無„ 謀友之儀, 云&其後 退出了又九月

經國也

高南之玉海八月四日戊申條末日頭辨經房暫談„雜事,其中

鎮西反者 家物語爲:七月十四日:令從保

曆間記長門本平家物語盛安

個皇子他以上王之出在三條高滄做世謂一起」兵而謀」除,平

氏恣橫,平清盛遣〃平重衡平惟盛等,討」之戰” 于宇

玉海盛衰記○此役難,不、係關此國

治川 以仁王賴政敗死

之事 源平亂發˙起于此 故記之

秋八月源賴朝奉,以仁王之旨,起〃兵於伊豆,九月

源義仲起 兵於信濃¸應〃源賴朝¸ 冬十二月源賴朝

東鑑盛衰記平家物語〇賴朝爲義之孫而義朝

建〃府於鎌倉子也義仲爲義之孫而義賢第二之子也

養和元年辛丑蛸計四春二月十三日庚寅宇佐大宮司公

通奏菊池隆直緒方惟義臼杵 戶次 松浦 等應〃 源賴朝

燒 太宰府本平家物甜盛衰記

二十九日丙午筑前人原田

種直募,九國兵二千墼 菊池緒方 康諾桑

壽永元年壬寅明肥後守平貞能攻 菊池隆直 於雲

東鑑日治承五年資和正二月二十九日 丙午於 鎧西，上城,數月貞能不」勝合,圍而守」之扼〃岭要,絕〃糧道

有 兵革,是肥後國住人菊池九郎隆直豐後國住人緒 隆直果而食盡 夏四月十一日辛亥隆直終降 貞能

方三郎惟能等反 平家」之故也同隆直之輩木原次郎 平家

註 永正

盛實

南鄉大宮司惟安系圖

註阿蘇 相〃具惟能 者大

元年條

野六郎家基高田次郎隆澄等也此外長野太郎山崎六

郎同次郎野中次郎合志太郎幷太郎資泰已下六百餘

騎精兵固」關止,海陸往還仍平家方人 原田 大夫種

平宗盛,討 菊池隆直

夏四月十四日己未勅

六月十五日庚申勅,肥後等十國 造 興福寺僧房11

秋八月三日丁未以前筑後守貞能¸ 爲 肥後守,討

新撰事蹟通考卷之五

」之元史類篇續弘録 按琉球上世無

攷據,其世諧圖云宋淳熙十四年舜天卽 王位 舜天

爲朝公之男子未」詳 何許人,其不 祧祖也,在位五十

年長子舜馬順熙在位十一年淳祐九年長子義本嗣在

位双十一年時民苦 疾疫 多依 英祖英祖者天孫氏

琉驪 之後也義本遜」位焉在位四十年闢」地始廣

大大德四年英祖子大城嗣中山傳信錄日舜天日本

人皇後裔大里按司朝公之男子也淳熙七年庚子年十

五屢有 奇徵 長爲 浦添按司, 人奉 其政,斷獄不

違天孫氏二十五世政衰逆臣利勇恃,寵執』權鴆其

君,而自立舜天討」之利勇死諸按司推即」位在 位

十一年壽七十二嘉熙元年丁西薨湟潮壕頑

三年也南島志日為

朝保元丙子役從」父詣,白河殿,軍散而後所」捕九月

二日流 伊豆大島 及 平氏擅、權朝政日襄 常憤々

欲」復,,祖業;因浮海上卣略 諸島之地, 永萬元年乙

酉春爲朝年二十七達到 南島 南島即琉球也爲朝膽

刳テ死ス年三十二然ル=爲朝琉球

- 諸史

豆/大島流ル居nト十五年諸島7掠略冫勢7

ト云ト干謫流,身終志7伸至7此年四月

本史日諸本保元物語皆爲此年係宮兵來攻爲朝腹

杉原本保元物語爲 安元二年 未知 孰是

不亅載司

1 改所下文 夏五月前兵庫頭源賴政奉以仁王 天皇

後白

1

安元二年丙甲春正月二十九日甲戌從五位下藤原朝臣

肥後守,紅

能賴爲

賊王亅亂舉國尊稱以爲,王曰:中山王舜天 是也此

年文治二年 也快中繼

右丿諸書:據:爲朝始琉球三至ènト、永萬元

年ナリ明年舜天生ル然ドモ生土舊鄉ノ情堪

ヘズシテ大島踊り官軍來り攻ルニ及テ身ヲ避テ

潛:西:來又琉球:赴歟一書三水俣出帆安元二

年八月ト考:爲朝琉球三至èn A 皇朝/史籍

三不、載 晡是断郤亓異邦丿書誌》 n ト 怪

怪ムベ

シ然レバ彌八ノ宮/傳説モ亦據所ナキニアラズ參

考保元物語:諸本/異同7戰死年月卒歳等實

録無 所見,下宜加哉

治承四年庚子春正月宇治惟泰爲 阿蘇 健軍兩社大宮

十四年

ムベ

11

南島人皆以爲」神莫不､服者 娶,

大里按司以觀路之妹,明年仁安元年生 子舜天 乃

徇 其地而還 大島 舜天爲遺孤 育 于母氏 幼而

岐巍乃有三父之風,及」長衆推而爲 浦添按司 方此

時,諸島兵起戰鬥不」息按司年二十二乃率 其衆 討

勇絕

玉海此年正月三日條有, 肥後國司藤原光經 而此後

嘉應元年己丑春正月藤原光經爲肥後守」

按=官本公卿補任御代郡トシ大日本史二御

代郡トス然レドモ肥後ノ郡名御代ナシ蓋シ八代

ノ誤り轉寫ノ致ス所土佐大日本史=土比鄉トス

八代妙見社縁起二八代郡北郷竹原津下記セルア

リ竹原井上村内有テ今ノ三郷/地方ナリ

此縁起虚誕ナリト云ドモ若シ據」之八代南郡!

土北ト云コトナルカ今不可得考」

仁安二年丁亥秋八月十日甲子, 肥後國 八代郡南鄉

土佐鄉等賜平清盛」爲三大功田松

語物

元保

保元元年丙子此歳遣筑後守平家貞檢注肥後國」

山

廻ナス薬草名花多佃居地ナリ相傳7耕人樵夫往々佃異見者

・リ

ヲ 應晶

ルテノ翔映景相

ヲト下トナ

山ヲニ八

傳

下山=午時水アリ大慈寺八星

泉有テ澗二流

一名ヲ午時水

暉數里二見

射今二至 飛城迎!

ト云爲朝在城

ルト云故ニタ

久住ス其阿蘇盆城八代

岡山ト名ク

ノ内ニモ爲朝ノ城ト云傳所アリ阿蘇大矢山的石

的木矢村ナド皆弓勢ョ榮シ遺迹ナリト云リ木原城

事永正元年二記ス

按=爲朝保元ノ役父爲義二從テ名譽顯シ九月伊

味スルコトナシ其内儻竊食風アレ忽チ死ス

ト云ヘリ彌八宮ト云彌八が祭レル宮ト云コ トニ

後人名」之一説ニ矢八宮トシ爲朝琉球二渡シ

キト此地!漁夫等別惜直垂/袖ニ耗テ持留シヲ

振切テ行シュヱ片袖撕離テ漁夫ノ手ニ遺タルヲ神

體トス又同郡津奈木村海邊ニモ爲朝宮ト稱ル禿

倉アリ

シミ

ヌスミグラウ

者其形容常人ニアラザルヲ観テニ出琉球=

到彌八歸ントスルニ及テ爲朝直垂ノ片袖ヲ解テ

彌八二與フ彌八水俣ニ歸テ後爲朝,仰慕シ生祠

濱村二建直垂/袖ヲ神體トス祭禮十一月十四日

ナリ供物=赤小豆飯鮮 醴獻ズ祭職日此三

種ヲ供翌年祭日始テ神扉開飯魚ヨク乾醴

北ノ水俣ノ津二往テ渡舟ヲ覚、漁夫彌八ト云

彌八宮緣起略日爲朝大島ニテ自殺ス實大島ヲ

逃テ密二九國二來肥後匿爲朝琉球二赴ント欲

二年庚寅夏四月殺 源爲朝於伊豆大島 Ž說

語元

往々肥後守光經載然レドモ拜命年月不分明故=

姑此二係ク

二

新撰事蹟通考卷之五

同

|補任

介 1

野村二屬ス當郡/名山四面一樣看

肥公補

書千亦所々二居丿就」中城

í

地志略日爲朝肥後

總追捕使 多行 不法 國來訴朝廷詔 爲義 召

之

保元物語日爲朝爲義之八男也爲」人魁 岸 奇偉意氣

大治四年己酉夏四月二十四日壬申藤原朝 臣 經定爲,

鄉莊沿革:著」之

肥後國人一

1

三重莊山本郡=7丿屋訊衍字三重莊/事

テ

台記列記久安六年十一月晦日紅條日入」夜季 通朝

天養元年後守,

十月三日條

天養元年冬

|藤原系圖

蔡年月據

保安元年庚子秋七月藤原朝臣宗道薨臨」終以„肥後國「保延三年丁巳春正月壬辰晦平朝臣清盛兼 肥後守,

後三重莊,讓„其子信通 甲子冬十月三日庚辰源朝臣國能爲肥後守,

台

大外記師安朝臣除„母喪服,之後初

來小除目肥後守信俊眞人以„„所帶穀倉院別當讓

其子主稅助信憲,依„左大將申」以前越前守國能,

任„肥臣來語曰昔父宗通卿臨」終處 分所領 田園 於諸子,

其處分帳伊通卿書」之伊通信通兩卿加署以„肥後國

三重屋莊丹波國今林莊 讓„信通卿,命„ 諸子 日所

但讓之莊母存生日莫」領」之母逝去後任:處分帳,諸」仁平元年辛未春三月源爲義逐‟其子爲朝於鎮西,

子各領」之于」時信通卿嫡子右少將行通朝臣可, 五

六歳, 父卿薨年信通卿三十 薨去九月其母逝去臨終

與,三重屋莊於伊通卿 與,今林莊於重通卿,命曰此

兩莊者先人所」讓信通卿,也而彼卿早逝汝等宜」

、領」之重通謹受」命伊通辭曰此莊者先考臨終讓與

兄卿 彼卿已薨理須」與„嫡孫¸我昔書 其處分狀 加

署了今受‥母命,將又言非法律所 許上恐 天道下

恥 人倫 不: 敢受,命矣卽召 行通朝臣,具書„事狀,

與其莊 時人稱,其孝友廉直

豪逸膂力過」人長七尺許左手偏長最善」射自 幼恃

《勇淩」人爲義知其不,可以侮此年三月逐ņ之鎮西,

爲朝時年十三居豐後,以 尾張權守家遠,爲„„後見,

就 大井出次郎則高數學劍法 而遙超」師

犬娶 肥後人阿蘇平四郎忠景之子三郎忠國女 爲」

妻稱„鎮西八郎 將、徇 九國 菊池原田鰭方等集 兵

拒」之爲朝以„忠國爲鄉導,大小二十餘戰陷」城若

干九國諸將皆降至年十五遂掠 略九國| 自稱 西

丿木原山/城不原山東/木原村二、 西八字土郡

進忠兼語曰下 向肥後國之時駿,蘇阿

在舥後,年

于此:

同書永久四年二月二十一日乙酉太宰府濟物解文之

條曰肥後守藤原忠兼拾芥抄日 白河院御宇肥後大

修 大社破壞¸Š修 阿蘇宮 依

此勅 乎故附書

按修,

桑任

朝野群載日永長元年正月十二日癸卯勅 五畿七道,

抄扶

百

永長元年丙子春三月大宮司宇治惟行修 阿蘇宮,

百錬

永承四年己丑春三月十九日辛亥阿蘇社火

治暦四年戊申夏六月二十四日甲子阿蘇山雪降五六寸

罪狀,炸

春記

長久元年庚辰夏四月十日甲午盗殺,, 前肥後守 藤原定「三年己巳夏六月二十六日 癸亥諸卿定 阿蘇社祝恒富

本史

大日本史

印丹羽某高橋醫内野某毛持丿然」;本唐土三元浙|寬治元年丁卯夏四月二十日辛丑諸卿定- 申太宰府言

弄三鑄作夕加物大心力如」此幾少毛渡ty故 リ-上阿蘇辻祝恒富爲、冤, 敵難負,正體 逃脫之事嶇鍊

文字卍辨解難氵 決亓能因法師/印:非事實今「二年戊辰冬十一月壬寅晦流"前肥後守時綱於安居國,

不可考

ホフリ

安置其印文或云橘永愷或云乞翁能因然LF宅其應德二年乙丑秋太宰府言阿蘇山雨雪村知

大日本史菊池

内猱 猊 鈕,

按三元愷肥後守卜元年月日不」載或云 一條天

編年考徵三

新撰事蹟通考卷之五

1

肥後文獻叢書第三卷

皇/朝也下故三姑夕 于此 双宇土郡宮莊古

曽部ト云村アリ相傳フ永愷當國ニ在ルトキ交友親

慕ノ人アリ歸京死去後塚立冥福ヲ修ス後二村

7千古曽部下名夕先年塚7掘亓妙法寺中:改葬入「延久二年庚戌太宰少監藤原則隆賜„肥後國菊池郡,始

詳故附 四

七九

新撰事蹟通考巻之華山雲巌禅寺ト號ス厳上二題セル巖洞三大字小篆書ニシテ

東陵書ノ三小字ハ楷書物供陵が筆迩ナリ其傍二鹿子木寂心が逆

大日本史曰橘永愷左大臣諸兄十世孫遠江守忠望之

アリ其在所村ヲ岩戸村ト云窟洞天然ノモノニシテ人巧ニ非ズ

みつのひろまへ

田郡金峯山西

物ニ非ズ今岩戸,雲巌寺二納

天か下はくらむ神のみそなれはゆたけにそだつ

擬作スル所

大武成章

スエル

ツ

後拾遺和歌集 肥後守にてくス岩

天明三癸卯年岩戸山石ノ五百羅漢

寛仁三年己未春刀伊賊冦 壹岐對馬

屈之謂莊子計無 收拾 貌

るかな

11

原時遠平爲行等私發 干戈,因定 其罪狀,

也支離八老

ミツワム

髪は白川のみつわくむまで成にけ入而侵筑前;九國之兵士防戰大破」
之賊船逃退杁知

寛弘二年乙巳秋八月十三日己丑肥後守爲愷爲三郎等」

被殺

按刀伊今夏四月遂

女兵也

サカリ

長元元年江ナド古跡殘レリ檜垣家集等二因テ考ル延

此ニモ一八居シト見ユ 窟/巽一丁餘=山下庵檜垣

手向ショショ載 然レバ

末寺

西山派京都東山永堂林寺ノ

蓮寺古府中/南ニアリ淨土

ト云傳銘文別零テ知ズ

月六日寂入

九品山蓮室寺二至テ古キ塔アリ檜垣が塔

台宗普門山下號ス行基カ開基ニテ本尊ノ

ユ云々

檜垣ト

栖雲院=住シ

貞治四年五

長谷寺ハ府中西北二丁除ノ山ニアリ天

ボル其折シモ長谷ト云所

修館モ有」之東陵ハ後テ是ヤ高キ

七

名ユ云々官ニ赴京師寺観音モ行基ヵ作ト云リ大和國 長谷寺ニ擬テ其上ノ山ヲモ泊撥

名〃檜垣謠=檜垣此長谷寓居シ岩戸二日々通と白川

喜年中生ノ女ニテ承平天慶比女壯ニテ元輔此國

二下リシ比最も老極セット見エタリ家集=

老はて、頭の水者吸支 離之兩義戊辰夏四月二十五日庚寅肥後守高階成章藤

戸ノ眞上三ノ羅漢ァ居トテ巖ヲ鑿シュ小石,筒

ヲ得タリ其筒=檜垣女形自作!六字 老女

が像安ゼリ形容瑞麗古雅淳實後世

たり侍る時あその

社に御裝束奉りけるに彼の女のよみ侍りける

岩戸及岩殿トス

窟中二安置スル所/本尊 石體觀音ハ往昔異國ヨリ渡シシ優也ト云

元末明州沙門東陵永興和尚東渡米テ洞側ニ テ

子也兄肥後守元愷養爲、子永愷爲_文章生i號,,肥後

進士」性嗟和歌」後剃髪名融因」又改能因」居攝

津古晉部 稱,古曾部入道永承四年五月十七日卒

家集きよはらのとすけの守京へのほりし

に有ける歌

拾遺歌歌集:清原元輔肥後守にて侍るとき彼國の

鼓が瀧といふ所見にまかりたりけるにことやうな

る法師のよみ侍りける鼓純在前田郡岩戸山背其晉似

名名所之一而題 尤多

音に聞ゝみの誰をうち見れはた、山川のなる

極垣家集此歌見 鼓

藤崎の軒のいはほに生る松今幾千代の子の日す

くさん

日世所謂子日遊

集

元輔家

我人モニタット云前書アリ然レバ此國二來ル

老年ナルコト疑ベカラズ改元輔任國内藤崎宮=

按寃平八年正月 宇多天皇雲林院

作子日遊

ト云句アリ 十六宽和二年七十五 灭 檜垣家集千今

按元輔肥後守ニナリ此國二下向諸書多〃 圓融

天皇朝トス然ドモ明徵ナシ故=今歌仙傳二人フ

又年,推二七十九歳=來ル拾遺和歌集=元輔赴

任ノトキ源満仲へ歌ニ老テワカル遠キ別レヲ

仲長德三

天元三年三月寂,從五位上寬和二年正月任 肥後

守,永祚二年六月卒年八十三

肥俊文獻叢書第三卷

藤原爲長十訓抄=肥

後國,遊女檜垣トアリ藤原清輔袋草子モ肥後

國遊君老後落魄ナルモノナットアリ

稲荷ナド云遊河府盛永出千

記二見女在テ十年前當テ古府中白河邊=居住ス或其宅楠木ヲ植テ垣下

ステ名又檜垣子トモ云ヘリ檜垣家集二宇佐

ノクニトシガリカクテ太宰府兼官ニテ肥後ノク

逸ナル女ナリ及暫〃筑前太宰府ニシ後本國=歸

詠歌=秀

レ

二週大百ニ三其壯ナル頃京都二云永久ヨリ檜垣女が比

女樂倡優,

エタリ唐

マ是っ白拍子ト名ク

白拍子.

舞

二年遊君ノトハニヲ女始テ・白拍子也

說=檜坦:

帶

女住・

ルセ

中

抄

果按二檜垣女當國冠註論

セズ

贅家集

垣

カヨメ

檜垣

一八野大貳純方討手使二下

ひわすれん

白河のそこの水びてちんたらむときにそ君を思

按 後撰集二八大武範二逢阪

大

るに今はわれる人もおいにたつくしのかたに

へきにあらずいさかし京へなたはふるに妻の

周防の命ふ物なとかつけていまかくいふとおもひ

∞いてしものをといひたるに

にかとでのところによひてはしめちくせんの守な

しにほともなく此くに来てふたひあひみつ

新撰事蹟通考巻之四

應神天皇左右住吉神炫神功皇后 ヲ合祀鎭座ノ

日勅使所持!藤三折三所警日神

靈若咸格アラバ枝葉生ジ奇瑞アラン印チ鞭

ヲ生ジニ枝葉レリ因テ靈時ヲ崎ト名霊鐘

ニアリー趾内/地中ョリ掘出セシ洪鏡一河伯

歌仙傳日元輔天暦五年正月任三河内權少椽 應和元

年三月任少監物、二年正月任中監物康保三年正

月爲大藏少丞」四年十月爲民部少丞十二月轉

大丞,安和二年九月二十一日寂 從五位下 十月任

河内權守天延二年爲周防守八月兼 錢長官」

1

ミヤトコロ

宮社記略日當社承平五年 勅願因テ祭」之中殿 守

五年乙未此歳飽田郡宮前鄉祀: 八幡太神 徭稱 藤崎 「寬和二年丙戌
春正月從五位上 清原眞人元輔爲,, 肥後

二保昌肥後守受領諸書見所ナシ藤原系圖大日本

史等=致忠之子保昌天徳二年生三十五年後世三正四

位下右京大夫左馬頭攝津大和丹後等守」

武略達人長元九年九月十五日卒年七十九然レバ

祇園神社;保昌!勸請ニ非ズ可」疑

ガセシ〃附于此

日 牛頭天王」此歳肥後守藤原保昌奏 朝廷鎭

祭之」始宮殿在府中坤湯原 ╷ 後遷,府中市町襄車屋

敷 天元二年又遷 朝日山 正保四年改造神

祠於今之北岡五月二十八日遷神座」

承平四年甲午造 宮柱於府中湯原 祀 祇園神

知レズ此塔ヲ里俗金子塔ト云

社記略日祭神二座素盞鳥命稲田姫此二神合祀名及

岡守家ノ室トナルトアリ碑文明ナラザル故此事

記刻華鯨ナリ其地殿宇ノ廣大ナルコト造營

注文正平十二年十一月十七日祠官中ョリ國ノ守護

菊池武光二達ス其留書委載タリ此後修造等!

事往々下二摩」之其詳ナルコト略ス

按=天慶ノ頃肥後國司紀隆房ト云アリ或い尾藤

卿トモ記ス太宰少 肥後國中七大社造建七

!唐名也

大寺草創ストトト云へり其神社寺院緣起等出ルア

隆房正史」載其由緖不分明」ト云ドモ前ヲ

以テ見トキ又故アルガ故=此附考備

及拾遺和歌集二藤原共政朝臣肥後守ニテ下向!

キ妻ノ肥前が下り侍リケレバ筑紫櫛御衣ナド賜ト

テ 村上天皇御製和歌アリ年月詳ナラザレドモ

姑眞證勅ァ奉テ此地二來り池側=先伽藍ヲ造立シ

台宗:獨鈷山功德池邊寺ト號ヌ往昔味主池 惡

79元國人7害時/國司事7 天聽三達ヌ

朝廷大和國,僧眞證:詔示此害ヨ除タト示不

寺記略日寺ム飽田郡池上村味生池/東北:尹天

イケノウ

延喜十二年壬申僧仙海修 池邊寺

同

代格

昌泰元年戊午秋八月二十三日庚申遣」使奉神寶於肥

後諸名神: 0

五年癸丑春 三月十五日 甲寅從四位下平朝臣惟範兼

肥後權守

„肥後弁 0

補任

二年己未夏四月五日戊辰肥後國始而置 彎師

二年 丙午 春正月十六日 丙申從五位下 大神朝臣良臣

爲„肥後,從四位上藤原朝臣門宗爲 肥後權守,

十二日丙寅新羅國使判官徐善行録事高興善等三十八

人乘船一艘 來„„著肥後國天草郡

スル

肥後權守ˋ　夏四月二十七日 辛巳從五位下 良峰朝臣

肥後文獻叢書第三卷

晟成爲„肥後權介亅六月二十日癸酉太宰府言去四月

六月十九日丁卯從五位上藤原朝臣是行爲 肥後守,

寬平三年 辛亥春正月辛巳晦從五位下三善朝臣清行

爲俊英國師;

天台別院肥後國池邊寺側號百地志略=昔金子ト云女此觀音信仰シテ
參詣スル

三百塚側=於正觀音像ヨ拾得其利益:依

月七日燒失畢依之僧徒,不

塚者當寺根本御座

所本尊正觀音靈像也门如佛]也元明天皇御

和銅年中草建創立者國守綱家]金子大[][]寺也

偷佛像者百塚_木之化現 造化貞元々年二

口大妙]

梵字_建武四年丁丑卯月五日勸進一

ベカラズ今其缺貽者ヲ左=載テ後考:便ス

カゲノコレル

北後三山Py妙觀山-云昔/奥院及觀音堂/跡7

其傍=塚尹y百塚!云建武四年四月五日大妙

云者ノ立タル碑アリ銘文鉷刻多ク剥銷テ全ク辨ズ

「此寺丿珍曉=就行 佛入寺/

法華千部會ヲヒラキ怠ルコトナシ是ニ於テ悪龍ノ

伽藍

害倏忽三絕諸民安堵ヌ其伽藍乃千此寺也 黃靖和五

造立和鈉五

年トス然ドモ道君首名和銅六年二筑後守トナリ肥後ヲ始メ味生

池ヿ興築夕然ロ八造立六其 y寺記八++丿誤 可: 推知·

仙海、八代郡/人叡山不動寺/相應:從示台致7

極メ歸國シテ當寺シ延喜十二年堂塔破壊セ

ル彐修營ヌ紕錮上小觸承曆頃丿住持7快珍下云

七六

七五

新撰事蹟通考卷之四

二年戊戌秋九月七日己亥有 大烏,集 肥後國八代郡一條,二月二十日丙午正四位下藤原朝臣有實為..

シ

1 11

元慶元年丁酉 夏五月九日 己酉太宰府言肥後國獲 白 仁和元年乙己春正月十六日壬申從五位上藤原朝臣時

長爲,,,,肥後守 三代實錄〇本書 又曰二年五月 十八日勅 肥後守時長

ス

許」之館(

降 一階下ñ知左右京職 追 其告身·拜」官經」年而

後權守松

ス

爲肥後守 H

三代

四年庚子夏五月十三日 丙寅從五位上 藤原朝臣 房雄

三代

山蔭兼„肥後守ı松 冬 十月十五日 辛未勅令 中 務

在原朝臣行平奏菅肥 後國 合志郡 擬大領 日下部辰吉「兵庫戸自鳴。秋八月十七日庚戌從四位上 藤原朝臣

於 所部正六位上奈我神社河邊 獲 白龜一

タツ

十八年丙申秋七月二十六日辛丑太宰府言肥 後國

白龜一,長五寸闊四寸五步 九月九日 癸未太宰權 帥 三年己亥春三月十六日丙午太宰府言肥後國菊池城境

之今不」可以考

書

ス

丙子授 肥後國正四位上阿蘇比咩神從三位

按:八代郡,倉舍宇土郡/蒲智比咩/神社共遺

按二郡倉舍

1

十七年乙未 夏六月二十日 辛未太宰府言大鳥二集 肥

云彼國風水火疾疫可」成､災故明神示 怪

十五年癸巳夏四月五日己卯肥後國正四位下阿蘇比咩-倉上 双宇土郡正六位上 蒲智比咩神社前 河水變赤如

神授„正四位上 秋七月癸亥朔先」是太宰府馳」驛言,血緣邊山野草木凋枯宛如嚴冬,神祇官陰陽寮卜筮

渤海國人崔宗佐門孫宰等漂„著肥後國天草郡 -

後國玉名郡倉上:向」西鳴群烏數百噬｜拔菊池郡倉舍

葺草,

一合不分明 二十六日丁丑勅„ 太宰府 班„幣於肥

後國境内明神 攘, 大鳥群鳥之怪, 冬十二月二十七日

趾分明ナラズ國志略二社地!事異説アリ取信ズル

三不」足神名、其所』在地名my負nト多氵凡鄉村

ノ名或名ヲ改メ字換合せ及潰し古今同

カラザルモ亦多シ蒲智郡中二似タル村名無

鑄 宛肥後國銅印一,以 舊印刷 實録

省

按奈我/神社今詳廾5℃郡中二永村79合志川

傍二村落ス今其村=神社ナットト云ドモ疑ラクか

即チ此ナラン

十七日辛卯太宰府言管筑後國出擧不」足,利弊之數, 五年辛丑春二月十五日癸巳 正四位下源朝臣 直兼 肥

請以 肥後國正稅五萬束,足 其數 消災餓 此春左衞門府生 日下部遠藤爲„ 肥後權大

十一年 己丑春正月十三日 辛未從五位下 橘 朝臣子善

阿蘇比咩神正四位下

三代實錄曰夏井八年九月配 土佐,夏井左京人十年戊子冬閏十二月二十一日庚戌授„ 肥後國 從四位

同

七年乙酉春 正月二十七日 己酉從五位上 紀朝臣 夏井 日朝震動乃崩廣五十餘丈長二百五十餘丈

爲„肥後守桐

從四位上:

*/嶽中:無之

所」居山嶺去五月十一日夜奇光照耀 十二

本書此下有,: 正四位下之四字,蓋衍文也故

正四位下當,作

位勳五等健磐龍命神

元來有:三石神 高四許丈同夜一石神 頽落府司等決|九年丁亥秋八月六日壬申太宰府言肥後國阿蘇郡正二

之龜筮,云應有‟水疫之災

按比咩神ノ嶺中嶽ラ云ナリ今見ル二石神ナル

ルニ

レツ

十二月二十六日己卯太宰府言肥後國阿蘇郡正二位勳 潔齊至誠奉幣幷轉 讀金剛般若經千巻般若心經萬巻,

五等健磐龍命神靈池去十月三日夜有」聲震動池水沸氵 以奉、謝神心消伏兵疫三月八日甲申勅遣,大安

騰空中 東西洒落其落 東方,者如」布延邊廣十許町水 | 寺僧傳燈法師位一如於肥後等諸 神社, 讀經 冬十一

色如.漿黏著草木 雖」經旬日 不消解 又比咩神嶺 月二十九日庚午從五位上在原朝臣安貞爲„肥後守,請

シテ

神懷 藏怒氣 由」是可引發 疫癘 擾隣境兵』勅„國司

大矢ト云大山アリ此裾野/繞ニアリタルナラン 八年丙戌春正月十三日 庚寅從五位下 平朝臣住世爲,,

ト是干今牧迹知L*國志略:宇土牧記7載不」足」「肥後介」二月十四日庚申神祇官奏言 肥後國 阿蘇大

探故書セズ

條

㞢メ

廢跡再興セシ歟知ルベカラズ又益城郡矢部莊

七四

同書貞觀十年閏十

肥後文獻叢書第三卷

11

「二月二十八日之「省」之又此間脫 阿蘇比咩神之五字 乎然則

上去年

拜,肥後守,母石川氏聞而哭」之人問, 其故, 答曰吾

聞肥後風俗國宰至淸身必不」全吾子其不」終乎叉日

夏井隨」使出」境肥後民遮」道悲哭如」喪,考妣

二月十四日丙寅遣」使奉 幣宇佐宮,告„肥後變異 祈

爲„肥後權介 秋七月十四日 庚午肥後國大風雨飛,

瓦拔」樹官舍民居顚倒者多人畜壓死不、可_勝計,潮水

漲溢渽 沒六郡|水退之後搜 漉官物, 十失, 五六, 焉

自」海至」山其間田園數百里陷而為」海

七三

通考卷之四

陰馬場

和 名 抄三宇土郡

大宅鄉アリ然レバ網津邊古大宅鄉内ニテ其牧

アラズ 三年條

冫院境下壬=垣内丿義二郎+菊池城内/兵庫不

下ヌ 在玩 院、周垣灭庭節有垣牆 者下註

今牧山八廳省秘錄云東西一千三百間除南北一千二百三

按=地志長濱丿山:尹元、今,馴苑: 古/牧地

ナリト云ヘ

リ

院兵庫、妙蓮寺守山》間馬場筋7院馬六甲申春正月十六日癸卯從五位下橘朝臣 朝雄 爲

場ト云守山上平力元所7元城院兵庫丿跡此「肥後介 冬十一月四日丁亥勅停„肥後國大

米藏/迹ト元土中m リ燒夕夕元米1多/出他所「三年辛巳秋八月二十一日壬戌肥後國飽田郡大領外從

尹y是乃千不動倉冫跡ル<y菊池風土記:一城「七位上建部公貞雄借,外從五位下

小野

夏五月四日己未分 肥後國爲,右中辨

聚國史

肥後權守 酮 閏二月二十四日 丙辰肥後國言菊池城｜古城所々:其例尹y院馬場:非

院兵庫鼓自鳴翌日丁巳叉鳴 夏六月二十日己酉太宰「貞觀元年己卯春正月十三日庚午從五位下大原眞人員

府言去月一日期辛大風暴雨官舍悉破靑 苗朽失 九國｜室叉爲,,肥後權介 二十七日甲申奉,授,肥後國從二

二島盡被」傷叉肥後國 菊池城院 兵庫鼓自鳴菊池城不 位勳五等健磐龍命神正二位 阿蘇比咩神 從四位上,

動倉十一宇火 敗德實錄

合志郡,始置 山本郡 十

官社` 冬十

「七日壬申肥後國從四位上阿蘇比咩神列

二月二十一日壬寅肥後守冬緒二年庚辰春正月十六日丁卯從五位上行太宰少貳按:地志略:云城院兵庫、古武器7納〆貯ル庫

リ菊池郡水島村大城小城下云所アリ山腹!岩ヲ

穿テ庫トス土人相傳7上古,武具藏ナリト不動倉

ń米穀ヨ貯置 霜年1資トy或、軍用2設下常「朝臣貞樹爲 肥後守,冬十一月二十七日癸卯從五位

: 一容易:動ヌ H - 丰故不動倉ト云同郡米原村上藤原朝臣眞數爲 肥後守,同

yト云~y是皆菊池郡城院兵庫下見當時此

城アルコトヲ不知故ナリ城院 三代實菊

池城境動倉ト云事也菊池城 天武天皇ノ二年ニアリス

正平二十二年丿條三著」之院/馬場、略:大宅牧宇土郡網津村ニアリ
然レド

宅網津十間餘周廻四千六百間餘馬數九十一四寛文十年無,故而

牧馬斃者百二十餘殘八十餘匹娅六年二月

十一日牧野火死馬八正與 前馬數 不 合

爲肥後介 二月五日戊辰從五位上紀朝臣有常

爲 肥後守 秋八月二十三日己亥從五位上藤原朝臣「二年戊寅春正月
十六日 巳酉從五位下 藤原 朝臣正峰

冬緒爲„肥後守

11

神也

造小路

十五日 丙申正五位下高階眞人峰緒

二年乙亥春 正月姓追慕 烏

國造男卒:于官:百

五世之孫貞代王之子也天安元年

工/ト

ayu

„肥後守 張書本書汉日有雄,天武天皇

博搜 11 據 ナシ姑疑隅地志略男神一火

府中三、六所/神7祀總社5號是天平年 1

按齊二年壬申春正月十一日戊寅肥後國阿蘇比咩神 加 從

四位下

シメ國分造寺事監シ橋ヲ架堤ヲ築キ

三位 國史

命神授 的

仁壽元年辛未冬十月八日丙午三年庚午冬十月七日辛亥肥後國阿蘇郡
從三位健磐

11

下高丘宿補眞雄爲: 肥後,

類聚

正五位下,調

晉男神授

書天安同

爲„肥後介

秋七月四日丁卯肥後國阿蘇郡國 造 神クニノ ミヤツコカミチ

三年丙子秋九月二十七日丁卯從五位下大原真人真室

地人ナラン

爲„官社 桐

嘉祥二年己巳春正月十三日戊辰從五位下藤原朝臣正

世爲„肥後守,外從五位下山宿禰池作爲肥後 二

月二十五日庚戌從四位下有雄王爲:肥後守 外從五位

元年丁丑夏六月十九日甲申在,肥後國,從五位上

正進„ 肥後國 阿蘇郡正三

位勳五等健磐龍命大神階 加 從二位,假衡元年甲戌夏五月二十一日甲辰從五位下橘朝臣仲

宗爲 肥後 六月二十九日壬午加 肥後國 阿蘇健

磐龍命 神封三十戶: 冬十一月二十七日戊申從四位

上清原眞人有雄爲:拾芥圃記: 聖武天皇/御時僧行基三詔》

國ァ同事也又諸家系圖簒源姓小田一流/系丿跋三中古以

來、國々於天神地祇六所神7其國/府中三

所=勸請シテ總吐下稱ス又八幡宮ヲ請シテ府!

八幡-號ヌ今尙國々三總社Py八幡宮尹小野道

風筆ノ額 天曆帝ノ勅印今=7 リ云々 今古府中1

北北岡祇園!社内=總神社アリ舊府中二在ショ

後:祇園神社ノ境内遷ヌ蓋晉男神社、是7云

江命祭レル紳也ト云ヘリ然レドモ遲男

江命ノ社、國造神社ト云是兩祇園/社内:

此神社吒本六府中曾男神下、別新撰事蹟通考巻之四

-書シ坪井村二屬ス

神大神也ト云へり此耐何頃ヨリ斷絕セシヤ廢地

即チ此

按二飽田郡二建部村アリ

今字便因テ竹部村

亻/口

祭神詳ナラズ一大年神 -素雄 叉 波比岐

部公弟益男女等五人賜姓長統朝臣,貫┐附左京三條:

モト

繁根木山壽寺ノ末

按:疋石野神社、立願寺村三

ベノキミ

十四年丁卯春三月丙申朔肥後國飽田郡人正七位上建

爲肥後守 | 後

郡一座小疋野神社

寺發

延喜式神名帳曰肥後國四座以一座阿蘇郡三座 24玉名 | 十三年丙寅春正月十三日乙卯從五位下大和真人

類聚三

置 醫師一人－代格

日庚子以„肥後國玉名郡疋石神,預„官社|價後

國阿蘇郡從四位上健磐龍神授 從三位 同月二十七

丑夏四月十七日癸巳 肥後國減, 史生一人,

「十二年乙

11

臣菊池麻呂兼„治部大輔 秋七月二十二日乙未肥後 健磐龍命神社神主永預」把」

蘇健磐龍 神從四位上, 六月從五位上 肥後守藤原朝 十年癸亥夏六月八日乙丑肥後國阿蘇郡從三位勳五等

七年庚申夏四月二十一日丙寅授 從四位下勳五等阿 | 壬申從五位下菅原朝臣梶吉爲 肥後介

任

五年戊午春三月二十七日甲申遣 人於阿蘇神社,

九年壬戌秋七月三日乙未以」有」崇遣使奉 幣肥後健

磐龍命神等諸神社,同月二十六日戊午從五位下 肥後

正平九年二月十五日

想夢乃至結諸人施與緇素悉成二世之願望化生九|秋九月二十一日癸巳
太宰府奏阿蘇郡神靈池 涸 四十

品之寶刹敬白

カルコト

續後紀八疋石ky式:八疋野ト書ヌ皆字脫漏

右志奉為聖朝文武安穩太平四海九州萬民豐樂普

興セシメ中村ニテ高五十石神領寄附セシ

御賓前

レガタカリショ延資六年 綱利君命シテ再

肥後國宇土モ殆知莊鎮守三所大明神

勸道俗之助成新發梟鐘之響願上驚和光聽下覺妄

國家穩平 夏四月十四日辛丑肥後飢賑 給之

按交德實

介橘朝臣眞直轉 筑後權介,較作 八月十一日

八年人奏･議復用 普

洪鐘一口

奉施波朝廷置, 其職 同年以 大納言乃ﾁ

此寺ニアルコト知レザルヨシ其銘

ﾁ

派薩摩國福昌寺婼芋邈三宮社/洪 鐘7y如何大元故

认知:就是今一本從姑夕此年三 神官三宮某家 二

藤原隆年菊池爲光名和武灦加藤清正又大隅國長年寺

寄進狀アリ未本書ヲ見ズ眞悟辨シ難シ

11

!色道猷仁木義

井取 -國造性誥清廉堪 時務者-爲 大小强幹聰敏工 書 算

11

紀其郡司

■其郡司、國造等/内/ オ7選元任」之 孝德天皇

按:緣起一:和銅六年又永承三年/勸 請下又不

主帳蛙ヨ置都亍是ヨ郡司ト云皆其本土,人7以元,稱三宮神社 8

年正月郡/大中小7定〆改元大頗霞少領主政 钅 四年丁丑此歲宇土郡
祭, 八幡太神 春日住吉三坐神

詳 稲置 縣 主等ノ職尹y 孝德天皇/大化二

五月十二日癸亥太宰府司公廨アガタシ

混 肥後國, 峒

建久六年廳宣有 肥宿稀·公及後稱 宿禰·歐示

君

繼明使,肥後守粟田朝臣飽田麻呂 相率入,京 • 夏

肥 直 多朝臣同祖

承和元年甲寅春三月十六日丁卯勅在 アタヘハ

11

太宰府 唐人張

ヨリコロ

皆莊園就テノ役人ナリ

或八作和氣,書紀 景行天皇皇 姓氏錄曰右京皇別火 多

按:少領、郡司)叉郡領下千云上古八國造」下

輸„私物 濟-飢民 價

今世/郡代職,如双其後頒家:云尹親王公卿

續後

七O

ミチ

ヒハオホノ

ヒノキミムマチサ

ベノフクマス

讀<><惜哉又肥後丿寺院/國史:出加毛/淨

然ȅ全文不」備別天長/碑、字形小消

肥後文獻叢書第三卷

水寺外無:所」見眞上_乙肥公馬長共:今考所>

十年癸丑春三月肥後國葦北郡少頭外從八位上他田繼

道叙,三階,同郡白丁眞髮 部 福祗賜 出身,焉以, 各

子豐戸別皇子是火國別之始祖也 直

朝臣同祖灭 曰 大和別

君之事註 崇神天皇條下君後改」公又甲佐交書

神八井耳命後也

等/菜地私田其家/代官7遣其地7檢注ヌ是7

名次元領家卜云莊園丿法熾行元、三隨ヒ稍

其職失シ文治元年地頭置二及テ郡領私官益衰

弊有卜毛無力如夕 遂:云其7職7罷其年月、諸書

漏セリ今考ベキ據ナシ及莊司別當下司等アリ

元來班„六國, 至„ 天長

八年 依„民部省所請者爲 主政主帳 令曰凡郡司一郡不得併用同姓續紀和銅六年五

月詔日郡司大少領以終身 爲、限非 遷代之任類聚國史曰凡郡領

家大化元年任 諸郡,擇, 其有勞子孫･製」 之延曆十七年三月以三郡微

有‶弊詔以廢 普弟, 才 類聚三代格弘仁二年詔郡領者難

藤原園入 新撰事蹟通考卷之四

其二燈樓臺之碑比响在

北彌勒〇〇之堂

東佛像[[redacted]妙見之院

右、正面ノ銘也碑ノ左三大字/文

延曆廿年二月廿三日

見幷及一千七百善神][

寺矣

[〇〇六千四百[redacted]卷 前

]犯用者妙

□□內典

_仍獎善] 淨水寺田 [益城與宇土

仍井善门

夫不人獨登々者法々不獨弘々者人然玄奘法師早

苞四忍先悟三空智通 累神測未形 六塵回迫出

掩 古以無封门门法之陵_慨深之訛謬遠涉百

舟千航國仰 萬里之山川積雪门地驚心迷天西域

菩提三藏五乘之教梵本經論一千六百五十七部

南大門幷碑文開

堂之右

其一南向藥師

テ精ヶ見銘文アリ之ァ摺膽テョリ人其古碑ナル

ト7 知予交政七年十一月往示寫之

スリワシ

郡間_宮门门料田林七所

六九

延曆天長以前ノ碑訊 皇朝諸國十餘碑:過伏

天長三年二月三日

面方字性彼此二見エタリ其終三千三百八十

八町是淨水寺布薩田如件釋迦院者僧藥蘭之秘伽

藍成如件

y□□、

冫元其内三字7彫正面、四至界/銘-見土右

此碑銘文磨滅シテ完ラズ三方銘アリ皆界引ヲ

1

ヒキ

北向站 康|

其四科研東次 康平七年十一月十日於

願主道入

南无如法妙法蓮華經

*碑之東 次 相並

,北向在 燈樓臺

其三

井善和上

御願造奉

燈樓一基

延曆廿年

七月十四日

眞上 乙

肥公馬長

化僧藥蘭

ズ

山爲„肥後守夏四月十九日丙午從五位下菅原朝臣

清人爲肥後介 秋九月二十七日壬午大枝朝臣永山

堂下稱Σ釋迦院/支配ㇴノ 妣寺碑銘以前寺大v釋院ノ記

リ

寺記日淨水寺六谷城郡甲佐鄉軨 上江村:79今

其寺村/小名7淨水寺村卜云延曆二十三年釋迦院

釋迦院紀二

開山井善四十九院造立其最初/寺也靜、花峰室

ニティ花畑小焼排天長二年三月自ラ藥師佛ヲ鍋 刻シ

本尊トス昔境内廣ヶ寺領モ多大寺ナリシ

西行長が爲焼却セラレ今僅=草堂一宇殘テ藥師

爲„肥後介 組殘缺

弘仁三年壬辰春正月十二日辛未從五位下大枝朝臣永

四年己丑春正月二十三日庚子從五位下豐宗宿禰廣人

二年丁亥秋九月菊池郡造城野社 祀 松尾神

カウ

因||連歳水旱疾疫田園荒廢,也園大

肥後國淨水寺預定額寺

五年戊申冬十月三日乙卯美濃國菩提寺伊豫國彌勒寺

記大同元年丙戌春正月二十九日癸巳從五位上高倉朝

史紀略

篠忌寸豐次附 于左京和

社

十四年癸卯冬十月二十一日壬寅坐,,肥後國阿蘇郡,從

正本後

ヨリ不待辨シテ可」知ナリ

二十四年乙酉秋八月二十一日丁巳肥後國人從六位下

〃

藥蘭下井善、別人同人非x藥蘭公

五年條

爲肥後守SE

在天長

同

-華蘭後==善改云下云々淨水寺碑 文:據「四年癸巳春二月二十一日甲辰以, 大枝朝臣 永山 又

紀殘缺

時ノ國司7妙道下云

政麻呂

轉,刑部大輔,以,從五位上紀朝臣咋麻呂¸爲„肥後守,

卯伏天長十年2

以爲」之令,那代

肥後文獻叢第三卷

郡司八其本土,

政麻呂ノ貴族

照見･中略O國

本後

異邦/人歸化/僧淨水寺碑石見出夕元後

寺記 八藥蘭7省丰井善字;蘭溪號獨秀 西頎道

人叉稱 無爲子| 卜誌老僧徒無稽ノ誣妄虛誕固

殿繼爲„肥後守] 冬十一月六日乙未免„肥後一年租,

四位下勳五等健磐龍命神恃奉」宛 當國封二千戸, 此

神炎旱之時祈卽降」雨護､國救」民靡」不.賴」之唧本酸

天長二年乙巳秋閏七月四日乙亥太宰府言肥後國阿蘇

郡神靈池無 旱潦增減,而無、故涸渇二十餘丈延暦中

有比怪

二m ル 一延暦二十年

足 寺迹境内二古碑四アリ文化初年釋迦院,僣始

撰事蹟通考巻之四

故テ禪瑞當寺退院ス法印秀傳ト云者住職トナリ

心寺之

闢

建創メ寛文二年二造改テ山派禪トス

山東

雲居和尚之語來テ此寺=居郡邑勸化シテ寺院再

其後又荒廢無 住 職 萬治二年陸奥國ノ僣

陸遠近四十九院ヲ造立シ自ラ藥師

11

ヒニノ

七十五坊立

出釋迦ト稱シ寺ヲ大恩教主名後山境ヲ闢テ

七十五坊之遺構今 飽田郡中牟田村妙覺寺 什物

`佛牙舍利舘狀略曰釋迦如來齒骨一顆舊 金海山釋

迦院開山之靈響也罹:寇火三山内悉燒亡時學頭職杉木 坊 季繁瀸算

歯及地藏畫像逃三寺寓居有」年是以今額與妙覺寺現住法印

快元:永爲: 當寺之重慶長五年三月十五日秀繁判及阿蘇家有

金海山大恩寺眾徒中僧都秀俊法印豪送 大宮司惟將 書狀之

則有頭職・山中有

枝坊大衆 其證信然

!像ヲ刻テ本尊トス益城八代二郡

所々有 其寺 法門丕啓道聲

震賽海西靈藍タリ天正末小西行長ガ火災掛

寺院悉ク回錄ス事急ニシテ本尊ノミ隱シ得タリ加

藤家合國,後舊基二小堂ヲ立本尊安置シ元和二

年二月堂舍,建加藤忠廣田園高六十二石,施入

四年 綱利君山林方八町莊田三十

石賜テ永久寺產トス五年十一月五元蔵六年三月有

ノ所」知ナリ可惜小西ガ一姫二僭徒逃走什寶記錄

散燒失シテ唯殘レルモノ礎石焦土ノミ故二古

+來歴等知ル者ナッ禪瑞再興/後所,傳書老農!

諳記ナド綴集テ一軸トナシ釋迦院縁記下題スト云

善カ 大師等

八此

然二其後述作二前代ノ寺

善以來住職ノ名ヲ問答テ云弉芬馥タリ故=幼名ヲ藥蘭ト云八代郡司檜前中納言

大師也下双笑地

復錄

例アリ弉善ハ稱!祝日善生時奇光室=盈異香

起

玉ヒケレバ叡感アリテ大師ノ號賜り釋迦院ヲ以テ

テ祆シム弉善加持シリケル御惱忽チ平愈シ玉

勅願所トス 勅願所大師等ノ安語蟒龍子が地 志略

四五代前2

シニシ弉

桓武天皇不豫遠弉善ョ召シ詔シ

善 承和三年九月六日寂

ズニ代以下、名 死年月墓所分明ナラズト云り是寛政

テ今ノ住持

三千三百八十町或開山以來住職代々

モ

附會,記一一近世ノ傷作ナリ或記云訛種山村農家所撥

始末興禪瑞緣記:

相釋迦院古大伽藍ナリ古寺靈場ナルコトの世

按=釋迦院緣記子が見所三ッアリ一寛文中禪

端が著ス所一文化初年淨水寺ノ碑文ニテ率合

天台宗=復シ延暦寺ノ末院トナル寺中七奇アリ堪

有鳥日佛法非三谷深山之靈地」棲形類鸚

編入」夜而鳴其如」謂佛法:故名又日 三三島

麻呂爲 肥後介ı 垌

庵,泉邊締金像!釋迦,安置シ逡二所=就テ

鞠建ス殿堂已=成テ山ァ金海ト號シ院ヲ涌

十六年丁丑春正月十三日庚子後五位下多治比真人今

ムスピ

丼善駭テ是,抱其溫ナルコト人膚ノ如シ乃チ小

! 紀殘缺

後介, 正本後

三年ノ條=詳ナリ

古今未夕蹐ル者非ヌ井善遙見」之ヨ大怪

モ靈沼中岳ニアリトス阿蘇山神靈池等,事應永十

十ヵタタ

タナビク

御池ト云然ドモ神池此池ニ非ズ筑紫風土記二

ï名國按:神靈ナカ

,事主 旱疫ı証昧櫹觀啜

紫雲丿駹入元尹!此山峰巒峻峙下亓

スルアリ此山峰巒峻峙トシ

釋迦院 古綠記 日院八代郡道前鄉白山嶽ニアリ

二F

減其名日 神池 水旱經¸年未嘗增減,而今無」故涸

屬 柿迫村

此年僧娑善造„„釋迦院

十五年丙子秋七月太宰府言肥後國阿蘇郡山上有,

紀紀略

後守,故今從 紀略

沼

十四年乙亥秋九月二十二日乙卯以,肥後 爲„大國, 後

則其後癸丑日任 肥

11

1

五月七日庚戌正六位上紀廣濱授 從五位下,而無-爲 肥後守之交, 然

日本紀略O按公卿補任日本逸史印本後紀等作 五月庚戌,然正本後紀

人

癸丑從五位下紀朝臣廣濱爲 肥後守

等定等於宇佐宗像阿蘇三神社 讀經爲:三神』 七

11

十三年甲戌春三月六日戊寅遣 少僧都傳 燈大法師位|夏五月十日爲,右兵衛督„肥後守如,故詞

守,秋七月二十四日戊子後五位下百濟王元信爲„肥「十八年己卯春二月二十日甲午從四位下紀朝臣兄原

後

肥後文獻叢書第三巻

十餘丈考‟之ト筮池ń阿蘇山五嶽内中嶽三尹 刂今六三池

又御池トモ云叉杵島岳二池跡アリ水今調渇ス俗古

冬十月二十七日甲申從五位下多治比宿稱眞淨蔿 肥

總開頑♯善、同鄕北種山村梅林/人也父7

權藏下云寶龜八年正月二十九日生幼冫 穎悟聰敏

深ヶ佛ヲ慕と年十三途二父母ヲ辭テ緇 此歳鄕

丿靈山=登ルニ上=霊泉アリ紫氣泉面ヲ掩丼善近テ觀二量

三尺バカリノ純金!釋迦像赫然トシテ涌出セ

新撰事蹟通考卷之四

50

九年庚午(二月二十五日壬辰加„置肥後國掾一人,

聖化 而更立」名號„舍利井 道俗歸敬而爲 化主

元亨釋書日舍利尼者肥之後州八代郡人也天平勝寶

三年十一月十五日其母生,一肉團,猶如明月 夫妻

共懼盛„箱捨山谷,七日後往見之若、卵破中有三女

以下同 靈異記

子父母大悅收育里閭聞」之歎 未曾有故略而不調

圓光院記日禪宗臨濟灣以後也一舍利尼者八代郡

松江村人紳生面:捨 之於砥石山麓黼爲」尼後 此山

結,一宇草庵 宴坐兀然而居焉今圓光院卽此也後入

唐而終不」歸以誕生日 爲„滅日】尼始棄„„ 肉團, 所

栽」櫻今是謂„„舍利櫻 後人其傍建」碑銘玉卯塔

按三豐福ń今丿豐福今公益城郡三屬又貽7 十年已未春二月二十三日甲午從五位下藤原朝臣未茂

4+ 靈異記、弘仁年中古書》世=稀 刂元 爲肥後守,H

亨釋書í千下靈異記:據事ヨ略冫7飾著夕北

略シ女ヲ飾テ著タ

書さLí靈異記7以示證下ヌ~y故:今之三從7

又圓光院丿記、未靈異記7不」見元亨釋書7本

下亓後世僧徒丿偽撰見:足7℃豐福(砥石山

二至ル其間六里六)元亨釋書二八代郡2人下》

テ豐服以下,略セリ故附會シテ八代郡松江村ノ

三月十日丙午正五位下粟田朝臣鷹守爲„ 肥後

* 五

三年10

肥後守竹棍冰域作

有本 今從本書

延曆元年壬戌秋九月六日乙酉 從五位下 綆朝臣本周

續紀O本或作..

按=西仲島未タ不」考

事著:

11

著肥後天草郡西仲島,體

シテ

得„得通 諸高名智者傕,之一向問試尼終不.屈乃知

河女喜娘等四十一人漂,

大伴繼人前遣唐大使藤原清

シテ舍利尼が舊迹トス胡ベキノ甚シカラズヤ

此月十九日辛丑從五位下大伴宿禰村上爲„„肥後會5

三年壬子冬十月十一日戊午肥後葦北郡人家部島吉八

代郡人高分部福郡理各獻 白龜

六年乙卯春三月二日乙未始置, 肥後少目二

從五位 下肥後守 藤原朝臣 是人,

九年戊午夏六月遣,

廣瀬龍田二社 冬十一月十三日 乙卯遣 唐判官

11

サグリン

タカワケベノフグ

人肉團7砥石山y=捨下冫 霆圓光院

ラフ

甲子春三月十四日乙酉從五位下多治比真人乙安

爲„肥後守二年辛亥秋九月十六日己亥從五位上佐伯宿補助爲

寶龜元年庚戌夏五月九日庚午正五位上大伴宿禰立

爲‟肥後守˘ 十一日壬申伊豫肥後兩國神護景雲三年

以往正稅未納皆悉除免 秋八月五日甲午肥後葦北郡

人日奉部廣主賣獻| 白龜十七日丙午益城郡入山稻

王同獻„白龜 冬十月九日 丁酉廣主 賣山稻王賜」爵

人 十六級絕十匹綿二十屯布四十段正稅一千束 二

十六日甲寅正五位下肥後守大伴宿禰駿河麻呂淑正五

位上, 十二月二十八日丙辰從五位下紀朝臣大化爲„„

肥後介

聯

淵之所上古海中

藏屋鋪藏!前ナド云遺

也其說可以照見元和八年八代城註

名刀形、近世今/濱藏7船倉ト云所:移ty跡

シテ往昔/正倉院ニアラズ正倉令義解美久良

ト訓リ正稅ヲ納ル公ノ倉ナリ

レハ

村日 德淵村 今郭中

ス

11

ブ モト

遺跡アリト然レドモ今德淵

德淵在今之八代城南 其傍 肥後守】 冬十一月十五日丁酉舍利尼生組
鯝題識

トヨフク

11

弘仁华中藥師寺

景戒所､著 日肥後國八代郡豐服 鄉人 豐服

ヒロキミカ

11

ドモ

爲､町相傳 舊'熊河之分流後漸湮壅而爲小浦 及其上有 小潭 謂 瓢

蕈潭 至､築 八代城 疏 二淵之間 爲 城聖之外防又爲 海運魚

鹽之利 名曰 前川 寛永十一年春掘 前川之上 到 熊河通 舟樣之

便･是曰 新川 後又以石凳磧 新川口 止 其流然霖说 洪水熊河

澄則越,磧而流通德11

クラ

廣公之妻腰妊寶龜二年辛亥十一月十五日寅時產生

一肉團,其姿如｣卵夫妻謂爲非｣祥入｣等以藏,,置之

山谷中,經三七日,而往見｣之肉團殼開生 女子】焉父

母取｣之更哺乳養見聞人合國無｣不､奇 經 八箇月

テルニ

カラテ

アヤシマ

不俄長大頭頸成合異」人無.頤身長三尺五寸生知利

口自然聰明七歳以前轉 讀法華八十華嚴,默然不

逗終樂,,出家 剃除頭髮著袈裟」修 善化人無

人不,信其音多出聞者爲其體異/人無」無、嫁

唯出『尿有」竇愚俗」之號曰:猴聖¸ 時詑摩郡國分

僧又豐前國宇佐郡矢羽田大神寺僧二人嫌 彼尼

言汝是外道哪些嬲」之神人自」空降以」粺將 棠 僧

僧恐叫終死也大安寺僧戒明大德任彼筑紫國府大國

師,之時寶龜七八箇年 比頃肥前國佐賀郡 大領正七

位上佐賀君兒公設 安居會請戒明法師,令」講 八

十華嚴 之時彼尼不、闕坐衆中 聽講師見」之呵嘖

之,言何尼濫交尼答」之言佛平等 大悲故為,一切衆

生 流 布正教 何故別制」我因舉」偈問」之講師不」

テニス

y=

ニッカム

事蹟通考卷之四

シムラシム

六三

11

推 甲子 五月癸亥期無 淵 邊 其

シテ

リ

11

陣列 廣可 七丈,向」南而去及日暮「不」知去

-

LF宅和名抄:鱏1 一名赤魚卜ry n L鯛丿事

レド

神護景雲二年戊申春二月十日乙酉外從五位下山村

キカミナ

赤+魚ky蘚1字7用匕或、江魚叉石魷魚下ヌ然

11

テ

六年壬寅春正月六日戊子從五位下百濟 王理伯 肥

後守價

子弟六十二人水手四千九百二十人,皆免, 三年田租

悉赴〃弓馬 兼調 習五行之陣,其遣所兵士者便役 造

兵器 10

和夕儿

天平寶字五年辛丑秋七月二日甲申仰 肥後國,造備

甲刀弓箭,各有」數 冬十一月十七日丁酉肥後等八國

酒海道國 檢 定船一百二十一隻 兵士一萬二千五百人

11

十七年乙酉夏 五月二日 己未肥後國無姓人賜所」願

姓 H8

賑恤 5

八十餘所壓死人四十餘人幷加

内省 肥前

ヒサグ

也卜元今三至>腹赤村7漁民鯛7釣灸元以自

リアト

天皇長渚/腹赤:御舶7寄>L氵 時myノ遺風 百七十餘區人一千五百二十餘口被汨水漂沒 山崩二百

按 腹赤魚á 景行天皇御時:濫觴7 茂中天皇 地震八代葦北天草三郡官舍幷田二百九十餘町民家四

ス

事見 于

十八年年條:

他=鬻是7腹赤鯛卜云此國名產丿一丿其後天平

十五年太宰府始元之7獻伏以往每歲元日丿節會:

腹赤贄國史所々載」之類聚國

腹赤魚ヲ供ス以テ恒例トス

史延曆二十五年五月己卯停,

謝國雜贄腹赤贄等 以息民肩;也日本紀略天慶三年正月 丁卯朔元

會以:賊起:不」御」殿四到腹赤奏:百錬抄及玉海日元曆元年 正月辛卯

朔以亂不

朝廷陵夷丿後此奏永/廢絕x寬永年中忠

獻 腹赤贄

利君阿野大納言實顯=就亓腹赤鯛7 後水尾上皇

三獻× 上皇深/嘉納ヌ 双按:公事根源:宇土

ズ

郡長濱卜x如何訛>弋叉魚事鱒下y或、腹/

ル分畢竟腹赤村my出èi卫地名:因示腹赤鯛腹

赤魚下八云也腹/赤+魚云 7 ト 八非叉或曰

:

風土記可.謂, 爾倍魚 爾倍;贄故三腹赤贄下

云

肥後國雷雨

十六年甲申夏五月庚戌攤。好五月榮獲期無

智人足爲 肥後介: 秋七月十一日壬午肥後萃北郡,

刑部廣瀨女 赤眼白軀、白髮尾 因而授」位賜

物 十九日庚寅太宰府言肥後國八代郡正倉院北

蝦蟇按:正倉院/迹今廢不存井澤長秀 云德冬十二月十日丙戌從五位下阿部朝臣子島爲„肥後守,

日本靈異記爲

應仁文明

在詑摩郡

間兵罹テ久ク廢跡トナリショ亨祿中河尻大

慈寺五十世住職天佐忍和尚一宇ョ建テ其跡ァ殘

シ貞亨中大慈寺僧實堂玄理者佛殿造立ス

寺左後四十步許畠中二大ナル石アリ柱居ヲ

彫所謂七層塔軸柱ノ礎ナルヘシ近傍林中及畠

等古瓦出今世國分寺ト稱テ好古徒」之國

分尼寺遺跡分明ナラス

11

國分寺詫摩郡今村ニアリ

ニモ

桜二國分寺ヲ造年月紀明證ナシ故二元享科書

″天平九年トシ樵談治要二十三年和漢合運圖

二九年立國分寺十一年造三國分尼寺其餘諸書

一定ナラス是紀二明交ナキ故ナリ續及類聚三代

格等考ル天平九年二始十二年二作終十三年春

寺田及僧尼員數二寺ノ名ヲ定ラレッ卜見然レ

バ全備十三年ナルコト不可」疑其護國寺名ル

モノ國分寺滅罪寺卜名ルモノ國分尼寺也肥後

肥後文獻叢書第三巻

江家次第日元日節會腹

拾芥 抄亦 同

違」期

若

年中行事奏 腹赤贄 條日官曹事類云供 腹赤魚 事

始」 自 大足彦天皇御代歟肥後國風土記於長渚

濱得」之棹人釣之其名日 若遲參者七日奏」

之

公事根源元日節會條日腹赤の贄とて魚を筑紫よ

奉るなり昔は蝿て節などに供しけるにや腹赤の

様とてくいさしたるを皆取渡して食けり景行天

皇の御宇筑紫の國宇土の長濱にて海人是を釣て奉

其後聖武天皇の御時天平十五年正月十四日太宰

府より是を奉りけるよりして年ことの節會に供す

べきよし定め置れたるなり腹赤とはますと申魚の

事なり

11 H

天正十五年癸未春正月十四日甲寅太宰府始供腹

赤魚」

オホミゴトモチノツカサ テス

編年考徵二

新撰事蹟通考卷之四

*二

新撰事蹟通考卷之三

下別々當タル雑訴決断所同日牒アリ其頃

蘇文書元弘三年十一月肥後肥後守護所

國衙

ト

無漏小路 未-知孰是

車屋敷。 等名殘レリ阿

宅邊後世謂 室小路二一作

室小路 地志略曰室氏系圖云室左兵衛督交居

國造小路室小路

11

チ

小路

寺二一同移古町

護在」

本覺寺ニス

古町加藤清正興

府中二護國寺アリシトキ裏門/木也

護國寺今在 熊本

11

地アリ

是ヲ前朱雀二表ス北岡ヲ後玄武トシ白河ヲ左青龍

トシ高橋道ヲ右白虎トス相傳フ今ノ二本木

ヤシキ

之狀當國衙内府中々皆日此所

四神相應!地也ト云リ

11

九月府中内宮寺阿蘇文書菊池武朝

建武五年

其遺基今古府中稱ス是國守治府ナリ

之條載」之可照考

國府田郡宮寺村二在

不書之

11

史ナキ故連綿セズ諸書拜任年月知タルハ是

下誌ス尊卑分脈諸家系圖纂大系圖等共餘諸

書肥後守名出タル多ト云ドモ年月ノ記ナキハ

國守停廢事文治元年

ベノ狀ニモ國府ヲ載タリ市田口今市田橋邊ヲ

府中在廳邸ヨリ南蓮寺ョリ北二昔澤不動院安樂

廳屋敷在國造小路與室小路

間里民謂角井御所

自二本木出宮寺村:之際高橋街道小路日

町車屋敷 在府中

市町裏

六1

尼寺水田一十町」僧寺必令」有二十僧」其寺名爲

金光明四天王護國寺 尼寺一十尼其名爲| 法華罪

寺

テ

ズメヨ

ニハ

天下造釋迦牟尼佛尊像高一丈六尺者各〝一軀ㄙ幷

大盤若一部云々者 宜令天下諸國各敬造七

重塔一區と云々又毎」國寺施封五十戸水田一十町

テ

ナル

續紀日天平十三年正月十五日丁酉故太政大臣家藤

原朝家返上食封五千戸、二千戸依」舊返賜其家」

三千戸施三入諸國國分寺 以造丈六佛像之料上

叉日天平十三年三月二十四日乙巳詔日去歲普分 11

十三年辛巳諸國置三國分寺二宇」

府ノ北ニアリ然レバ府館アリテ關締ョ置タル事

明也拾芥抄飽田郡ニ府アリ印チ此ナリ和名抄

益城郡二國府トス今盆城府跡ナシナリ

シャ

全文著建武三年條大

將軍斥一色道献

事

又今川了俊が阿蘇大宮司

ノニ

11

國守等ナシ館舍有テ何役人ノ居シャ守護所

誰云何處ニアリシカ今不詳及小代文書二建武

三年大將軍肥後之國府御座之間市田口關所警固1

無」事則罷

云叉國司卜干云也 L 孝德天皇御世三至

有、事則命

ラズ國造世々其國在テ國政ァ掌ル國異

事アルトキ則チ宰ヲ任シ往テ治シム是國宰ト

11

ハリマ ミコトモチ

11

11

義御命持也謂-承_ 天皇之大命 持往而治- 其國- 書紀神功紀新羅

ミコトモチ

11

チテ

今言使宰訓爲 美許登母知 司亦同名

チサムルナリ

テ

ノリカ

使 三韓 自稱爲、宰 表

按:國司始、臨時7宰官也

ミツカヒ セ

書紀敏達紀註 王人奉,命爲,

ノニツカヒ

位下田中朝臣三上 爲肥後守,

誤

以外 從五

十一年己卯夏四月庚申

11

推 甲子 四月壬戌朔無

スニチ

并在

庵室待」我過.日自有 傷心之恨 望我違」時必

致 喪明之泣 哀哉我父痛哉我母不」患一身向」死

之途,唯悲 二親在」生之苦 今日長別何世得」覲乃

歌略

作 歌六首

之

ナリ

セリヌ

歳以„天平三年六月十七日爲„„相撲使,某國司官

姓名從｣人參 向京師跟爲、天不幸在」路獲 疾卽於

肥後文獻叢書第三卷

任 東國國安藝國佐伯郡高庭驛家 身物故 也臨終之時長歎息

日傳聞假合之身易」滅泡沫之命難」駐所以千聖已

去百賢不」留況乎凡愚微者何能逃避但我老親|東國國司 大化元年任
畿內國司 同二年也任 群國司 者既在

其以前 然則 孝德天皇大化二年國悉皆任終乎紀文無明

司後

徵 故今從 諸書所,記姑爲孝德天皇之御世:識者訂」之

國守三改4肥後/國司7守三革4年月今考證

按守亦與｣司同群國一同不,更一二々僾」之乎 紀中或有

所ナシ

諸國司守 所庚申 支于必有:1造乃國司名也後改云,守也其註上古以 國守 皆云 國造 至 皇極

天皇時ı始改 國司 歷代皆云:國司:至: 文武天皇 改 國司 日國

於韓 蓋古之典乎如 宰仁德紀遠江國司上表崇峻紀河内國司推古紀 國司 國造勿、歛

其

百姓 清寧紀播摩國司古事紀作 針 間 宰是皆臨時,所、任也

始詳ナ六國史:出加干)往々下載」之 宇多天皇以降

等紀三見元*丿此歳三昉"此後 光孝天皇迄

官

官 少目一人 和史生三人 皆來國 府二居當國守

之遙,也

大掾一人炸,少掾一人有,大目一人撫

以爲 兼官:曰:

11

其國 執 政務 權者其身在 京都:

國也大國、守一人介一人

有 權介 按椛大略遙投也正者居氵

官尹 リ置」之大國上國中國下國/等7 リ肥後大

續紀等實録無、所以見

守權守アリ其下介塚目三

守,此說據」何書紀

スケセウサグワン

テ

11

11

11

-職原抄曰 成務天皇四年始定 國造 國

11

テ

ツ

11

ニモ

セ

シルカ

11

チ

國司:二年正月宣 新制之詔 其二初修 京師 置 畿内國司郡 司關基

斥候防人驛傳 造鈴契界 山河 京每、坊置」長四坊置,令督ï 容奸

非 定 郡大中小 置 大頷少領主政帳 據」之則諸國一同不』置」之

司:群

始テ每國二司ヲ任シ年限ヲ以交代ス

書紀大化元年八月

11

*

五九

新撰事蹟通考卷之三

十八

本書傳寫之誤也

ノナリ

大伴君熊凝者肥後國

アラズ通記梨原新殿 粄嵇屏醸犊是宇佐ヨ刂移ヌ肥後my迎1

心,歌六首弁序

迎亓宇佐祀ル然Lム神靈丿始示見訊此國菱

形地ナルコト益明ナリ又本朝通紀二天平勝寶元年

十二月自„肥後, 初而迎,, 八幡太神於大和國平群郡

續紀日此年十二月十八日 戊寅迎„ 八幡太神於平群 使

郡,是日入、京大日本史日此日還 宇佐八幡大神於

ス肥後ヨリ迎:

萬葉集日筑前國司守山上憶良敬和爲 熊凝¸述 其

オグラ

凝爲

11

相撲

田神ナリト云首名ヲ祭ル神ナルカ

十三年

11

ホコラ

滄海, 同功德¸瑋山稱„獨鈷 寺號 池邊

事著 延喜

1

按二史二據ル二此年始テ宮柱》作り神靈ヲ肥後二

又國中二所々大明神ト稱スル小祠アリ里俗

十二年二月神靈始見„„於肥後菱形池 憑語曰八幡大

神而無, 造營之文 託宣集叉日聖武帝神龜元年遣」

使開, 小倉山,造宮殿,二年正月遷 神坐奉 神戶,

建 彌勒寺及鐘樓,云其鐘樓彌勒寺今見在三宇佐宮

蓋此年始而造鷹居社 至 神龜二年,移 宇佐, 鷹居

社爲 宇佐宮 決而可以知也但,日本紀無„ 明文, 至三

天平九年,始載„筑紫住吉八幡二社,故參考諸書

書,于此

ソノカミ

池邊寺觀音講式云以往有 深廣池 湛„ 冷水 宛等

下略池邊寺

和漢三才圖肥後部明神祭神道君首名在所テ

シテ

續紀日正五位下道君首名少治 律分 曉 習吏職

カリントキ

謬妄不」足」探宇佐託宣集神皇正統記并日欽明帝三

是也又日欽明帝十二年正月神靈始見一書矛盾其說 國中張

, 肥後

日仁德帝遣」使造,營於宇佐郡馬城

大日本史日按造,神宮 諸說紛紜 石清水八幡緣紀 六年癸丑夏五月二日甲子制,畿内七道之諸國郡鄉 名

日仁德帝遣」使造 營於宇佐郡馬城峰, 宇佐八幡宮,務用 佳字 秋八月道君首名爲,筑後守 兼治和銅六年八月出爲,,,,筑後守,兼治 肥後, 勸,, 人生之

業 叉興,,,, 築陂池 以廣,, 灌漑 肥後味生池筑後 往

往 陂池是也養老元年四月二日卒

不,,分明,

按=味生池一飽田郡池上村ニアリ今淤塞シテ田

ナル古記=池邊寺前ヨリ戸坂新村=續テ池跡ア

之條：

天平三年辛未夏六月十七日甲午大伴君熊作 淝前 益城郡人也 年桜二葦北ニテ津大ナル佐敷ナリ球磨郡及に薩

磨日向大隅二至ノ街道幅湊ノ地ニテ津ロヲ京泊ト

肥後國葦

北津

シロキズヒト

テ

推古天皇十七年己巳夏四月四日庚子太宰府言百濟國

肥後ニテ山鹿日輪寺合志橋田寺盆城飯田山等之

數寺日羅開基寺トス然レドモ日羅 皇朝歸ゴ

「九十月ノ間ナルベシ書紀ノ本書考ベシ其年

十二月晦日殺サル其間二百日=不足九國二島

遠及ビ數箇寺院草創スルコト甚怪疑ベシ

書紀二據二日羅武勇士ニシテ僭ニ非ズ葦北郡

產ニシテ百濟者ニアラズ一言句佛法事ヲ

謂ズ聖徳太子=調タルコト見エズ政事ヲ述テ 天

皇諫メ軍法ヲ説下記セリ又時代事書紀外

紀典ナシ聖徳太子傳曆平基親撰書佛法歸依!

人扶桑略記僧皇圓元亨釋書僭虎闗が著ス所

暑安作不足」信

及按僧史日羅百濟僧諸國寺院建所多シ

地藏也

肥後文獻叢書第三卷

地

僧道欣惠彌首」爲十一人 俗 人七十五人泊 和銅五年王子造鷹居社於豐前宇佐郡八幡太神

於肥後,奉…祀之

千貞六年之

〇肥後牧地事

紀四年庚子春二月十七日丙寅定 諸國牧地放牛馬」

續

按大野城筑前御笠郡ニアリ基肆城肥前基肆

郡鞠智城 肥後菊池郡ニアリ鞠智城事正平二

十二年條二之

一本紀

鍬二十口稻一千束水田四町復戶調役以慰久苦

書紀〇皮石

唐地上

今合志郡

文武天皇二年戊戌夏 五月二十五日 甲申勅 太宰府

治大野基肆鞠智三城」

ツキエ

持統天皇十年丙申夏四月二十七日戊戌肥後國皮石郡

王生諸石授„„位追大貳,幷賜絁四匹 絲十 約布二十端

坂東太郎乘高山未詳

二見ヱズ故二姑此二附考

河勝肥後來ル書等舊史

11

狹布山謂佐敷太郎坂國志略赤松津奈木佐敷之三坂皆

路

太郎坂大郎郎垂尾之轉語也誤矣太郎第一之稱廣大之

義也關左俗付利根川・

チ

11

西國筑石治田至於火國闢布山路及乘葛山

ヒノクズ

ヒサクサシキノ

ツクシ

和漢三才圖會日 推古天皇十五年大 連 秦河勝往,

オキムラシハタノ

五

新撰事蹟通考卷之三

臣等 往 難波館 視 彼 爲人┳天皇不」許太子密

皇子 御„„之微服 從:諸皇子|入」館而見日羅在床

11

11

聖德太子傳曆曰敏達天皇十二年秋七月百濟賢者葦

北達率日羅隨 我朝召使吉備海部羽島 來朝此人

勇而有』計身有 光明如火焰 天皇詔遣 阿部臣

目、物部贄子大連、大伴糠手子連等 問 國政於日

羅 太子聞-日羅有 異相 者- 天皇日兒望隨 使

北

北 悉召 日羅眷屬 賜 德爾等;任」情決」罪是

哈農蠖國務費 日 羅於葷

一姬島也

テ

於」是大伴糠手子連議曰聚居一處,恐生 其變 乃

以„妻子,居„于石川百濟村 水手等居|于石 川大伴

收,, 縛德爾等; 置 于百濟阿田村 乃遣使於

居 于石川

雕以其妻子水手等,

シム

解其甲 奉 於天皇乃營館 於阿桑市,使」任

日羅,而後間,國政 十二月晦日百 濟國之 德爾等

偷計殺 日羅, 天皇下」詔令收 葬於小郡西畔丘前,

娜

奉:爲國家,使於海表 火葦北國 造刑部 靭部阿利

斯登之子臣達率日羅 聞 天皇 召 恐 畏來朝乃

ツクリテムロツミチ

11

謂

墓在 大阪天滿同心町

今豐後國.

北君等受而皆殺投 彌賣島 入: 日羅之房 日羅跄」地而合掌 白日敬禮救世觀世

音大菩薩傳燈東方栗散國王云~人不得」聞太子修

容折 磐而謝日羅大放 光明】如 火熾光 太子 亦 眉

間放」光如„日輝之枝 須臾卽止太子謂,日羅曰子命

日羅,更蘇生曰此是我驅使奴等所」爲非 新羅也生之後必生:¸世傳日羅現勝軍地藏 及愛宕山神卽日羅之靈也愛宕山在 山

墓也

【城國葛野郡:有、寺號白雲寺˙祭神二座伊冊火產靈本

五七

馬場村=草堂尹‟勝軍地藏ヨ安置此乃日 羅 方

舊

按日羅力慕今不」詳或云日奈久鄉,久 多良木

名上天 方

彼爲 弟子:常拜 日天,故身放 光明冤仇不」離斷

扶桑略記´元亨

日亦同、之

【命而賽捨11

畢而死太子乍聞謂,左右,曰日羅聖人也兒昔在」漢

言

シテク

不.得」解明日太子還」宮冬十二月晦日夕新羅人殺,

盡 可以惜被」害聖人猶亦不」免吾亦如何淸談終夕

セン

テマ

望,四觀者指 太子 日那童子也是神人矣于, 太

子服„麤布衣 帶、綳與„馬飼兒¸ 連」肩而居日羅

人指引太子驚去日羅遙拜:脫履, 而 走諸大夫等大

奇出」門而見卽 知太子,太子隱坐易」衣而出日羅迎

再拜兩段大夫亦驚謝」罪再拜修義而入太子辭讓直

日此年神靈始現肥後菱形

池,又同書應神天皇之跋曰造 宇佐宮 事諸書或爲

欽明天皇三十二年 今推』竅事實,欽明朝始而 神

n

按本朝通紀和漢合運圖八幡本記宇佐宮緣記幷云大

神始亓跡ヨ豐前宇佐:乖-宇佐宮緣記二菱形池

宇佐郡ニアリ山アリ形子菱ノ 如シ故ニ名トス

山:自然/池PV山2名:因示菱形池下稱x宇佐

ニモ菱形!池有ベクレドモ後二設タル名ニテ大

本朝神社考日欽明天皇三十二年冬肥後國菱形池

邊民家丿兒三歲十元三神託氵子宣/朕?是人王十

六代譽田八幡麻呂也

暦代記曰八幡大菩薩は應神帝の霊なり初肥後國に

現し後豐前國に移し給ふ

本朝編年録に云肥後國菱形池より豊前國宇佐に遷

す辛卯三十二年なり

か清和の御時石清水に遷り住せ玉ふなり

肥後文獻叢書第三卷

神出現/地;此國:尹元 卜明也右:載元神皇正

統記、北畠谁后源親房/著所公事根元世諺問答、

一條大閤藤原兼良/撰集皆博覽廣識/名尹元神

道有職精ケレバ登此説據ラザランヤ大日本

史=宇佐託宣集》引テ世,新羅滅 内官家國,先考天皇謀」復任那不果

而崩不」成, 其志,是以朕當奉」助„„神謀 復興任那

弘仁私記

今在,百濟 火孽北國造阿利斯登子達率日羅

云達率冠

名按達率百濟國軍官之名也冠官音同故弘仁私記誤而爲,冠 武備志

田夷傳百濟國達率宿於中華言 將軍- 是乃日羅於 百濟自: 其王

所、受:行

日羅行 到吉備兒島屯倉 朝廷遣„„糠手子連 而慰燧

焉復遣 大夫等於難波館,使」訪 日羅, 此時H羅

甲乘」馬到 門底下 乃進廳 前 進退 跪 拜歎恨日

於 檜隈 宮

積 宮 御 寓 天皇之世, 我君大伴 金村大

官也

中

略賢而有」勇朕與其人,相謀乃遣」使喚„日羅

ントスチ

ウチツ

書紀日十二年秋七月丁酉朔詔曰 屬 我先皇天皇之

イタツテア

敏達天皇十二年癸卯詔而召 葦北國 造阿利斯登子達

率日羅於百濟:日羅乃歸朝

肥後ノ菱形池山本郡吉松莊圓臺寺村ニアリ池!

西二窟アリ白龍窟ト云其内甚廣ク深サ量ルベカラ

ズ窟前=小祠アリ菱形八幡宮ト稱ス

十二年冬·今此年二月據 大日本史

五年條

靈見„„,于世,而造„宮柱,在 和銅五年;其說見和銅

正統記以下不」誌 年月·神社考爲 三

五六

11

新撰事蹟通考卷之三

裔此後絕テ見ル所ナシ阿蘇家記:大宮司/家元阿

蘇公裙字後點)

姓ニシテ代々國造ニモ任ジタリショ

中古宇治姓:改メ來リシ故ニ近世大宮司惟が代

舊復ノヨシニテ阿蘇公姓二改ム大二說アリ詳

モト

キミ

按=書紀阿蘇仍君註:未」詳也或云仍衍字ナ

リ外ニ例ナシ側二本乃ノ字ョ附阿蘇乃君ト云=

ナシタルヲ印本二直二本文二書入タルカ未詳

宣化天皇元年丙辰夏五月辛丑朔遣A阿蘇仍君,

加』運河内國茨田屯倉之穀-双其筑紫肥豐三國屯倉

在縣隔」

赤」

三宅鄉アリ是其痕ナラントト或云飽田郡宮寺古府中

ノ北二春日村アリ屯倉遺蹤乃此村ナリ然レド

モ未詳

〃

公田ナリ是ヲ司ル者屯田司ト云屯倉其入刀納

口屯倉

屯倉ノアル所後世或郡トナリ或

六鄉トナル春日部屯倉地志略日和名抄詫摩郡

所

ル

ヤケ

按=屯田=役テ佃シムル民ァ田部ト云市田乃チ

エタチタツクラ

ミヤグラ

王子餘昌遣,其弟恵豕赴云々此歳遣阿部臣佐伯連

三十二年辛卯春二月 也!三字後人ノ疑ヲ書入タルモノナリ阿蘇君ノ後

世諺問答日欽明天皇の御宇に初て神と現れ肥後國

菱形池に迹を垂後々は豐前國宇佐宮にぷり玉ひし

五五

公事根元曰八幡大菩薩は人王十六代應神天皇の御

事也譽田天皇とも號し奉る欽明天皇の御宇に初て

神と現して筑紫肥後國菱形池と云所に跡を垂玉ふ

後には豐前國宇佐宮に鎭り給ふ

我は八王十六代磐田の八幡暦なりとの紛ひき田

は元の御名八幡は垂跡の號なり後に豊前國宇佐宮

に鎭り玉ふ

アムタ

神皇正統紀日欽明天皇の御時始めて神とあらはれ

筑紫乃肥後の國菱形の池と云所にあらはれ給ふ

國菱形池」

弟

應神天皇之神靈始而現

アラハル

ナカツ

本紀日筑紫郡兒火

奉勇士一千 送至氏津守其要害

書紀本書註曰百濟

テリ

11

大

等發筑紫舟師」護三王子惠」及遣筑紫火君」

今本火

オミ

欽明天皇十七年丙子先」是百濟王聖明爲 新羅所 殺

阿蘇系圖語ス故二此二略ス

安閑天皇二年乙卯夏五月九日甲寅置 火國春日

1

日:御木國,

11

按:此後國造」名諸史孫建島松命定 賜國造

家南,其高九百七十丈朝日之影蔽,,肥前國藤津郡多

天皇

舊事記日志賀高穴穗宮御宇天皇 | 神祝命十三世

筑後風土記張日三毛郡云。昔者陳木一株生,於郡

此朝以,建島松命 爲天草國造:

當,,夕日暉, 覆 阿蘇山也天皇日是樹者神木故其國|成務天皇五年乙亥
秋八月詔分 諸國郡境 定 造長 總

宜､號御木國

後正史見所ナシ

按三葦分,,,,乃千北郡丿詳:鄉莊沿革:辨入此

彥命子三井根子命定賜國造|

タフレタルキ

書紀日秋七月辛卯朔甲午到 筑紫道後國御木 居

舊事記曰葦北國造鸛向日代宮御宇天皇島 吉備津

秋七月四日甲午車駕到 御木國,

此朝以三井根子命:爲,,,, 分國造.

其祀三令傳 于阿蘇家

久安六年正月宣

年併一祭三坐:爲 四神乎

スフヒシタ

是爲:1神名 明也然則後天養元

アラチ

y

11

ドモ

11

郡浦村 祭神】阿蘇比咩神也

其餘不」詳供 僧常福寺司H

1書 神武天皇一坐:社帳天養元

11

11 4

羊建仁二年十一月天福二年二月神領郡 浦神社在 宇土郡

浦神社在三宇土郡

系圖

補 健軍大宮司 其子惟經繼,,其職

其後事肥後文獻叢書第三巻

五四

不

年正月祭 一宮十一宮五宮三座

後加 祀 神武 天 皇然正平十六年牒俘神者甲佐宮之祖母神也甲佐

神彥御子神而其祖母神者乃阿蘇比咩也又甲佐宮之三股有 郡浦神:

按:書紀風土記大:異uy今風土記/文:從御木

筑後今ノ三池郡ナリ荒山郡中周溫ル二知人ナ

成云玉名郡內二荒山アリ瓜誤字ニテ

荒瓜山ナルヲ後二字便:佐尾ノ字二轉ス然レド

荒尾山三池南 里バカリニ有テタ日下ニ非ズ

方位違ヘリ叉山鹿郡岩野村二 00 38 55 男嶽女嶽下云

高山アリニ峰幷峙ッ三池/遠キ遼二見ユペシ三池

/東:當元卽千古昔/荒仉山此>>下未」詳

國造/末孫 敏達天皇十二年國造阿利斯登其

高田行宮,時有„„ 僵 樹, 長九百七十丈焉百僚蹈 其

樹,往來云~天 皇 問」之曰是何樹也有,一老父,曰是

樹者歷木也嘗未」僵之先當 朝日暉,則隱 杵島山

良之峰,暮日之影蔽,肥後國山鹿郡荒仉山 云~因而

三不」見之

新撰事蹟通考卷之三

旨等有 數十

其社領 日 阿蘇四箇神領,也

11

甲佐神

四箇神頜等綸旨令

阿蘇在」云:三攝社 甲佐健軍郡 浦三神社是也合

タケミヤコホノウラ

行者 古者皆在 山上,今謂,古坊中,天正中阿蘇家

飄零之時悉散走慶長中再興時構„營黑川村 今坊中

是也

日下坊

鏡珍坊密教坊圓教坊幸密坊 以上十七 坊 稱

以上五坊

坊圓達坊

日 三上坊】

坊鏡觀坊鏡一坊幸寶坊 ň 那羅延坊陽泉坊極樂

以上四坊:

年中寺社散亂之時當坊之住職契雅一

成道坊娯樂坊新樂坊了覺坊

以上七寺.

日:中坊二

以上六坊.

日下坊

境坊實門坊福性坊 以上二十坊稱 衆徒 道場

善性坊淨教院萬樂坊

禮德坊大德坊成實坊妙

長中再興時賞 其功 擬 上坊

人殘止而有. 神佛奉仕之勞 慶

リテ

職權 遂爲 栥頂

長善坊

11

陽泉那羅延之三坊補,行者,以來衆徒二十坊行者十

七坊也叉分上中下三等,所」謂其坊員者成滿院萬

以上六坊卽棟梁寺也學

福院大寶院 福滿坊得善坊 學頭坊

頭古者非 朱頂山之

學頭職也後年依其

以上七坊日:上坊,長善始中坊也天正

麓上揚村,曰下宮 祭神阿蘇彥御子神也後合, 祀

以上八坊了實坊

坊了忍坊鏡善坊妙圓坊慈眼守富莊地頭木原太郎源顯實砥用小北兩山客進狀承久三年正

月其子太郎實澄守富莊内居合田 寄附契狀 文治四年 五月 小一統等

任 顯實寄進狀 可以停止國衙課役 旨解狀涎元二年 五月 阿蘇大宮

有 大宮司職 阿蘇大宮司兼」之惟次之二 男惟 盛分

五三

【承平四年條

修宮殿 合 祭十二宮, 云當社亦

原保昌

,保昌之傳在:

11

摩郡健軍村 祭神一座健磐龍命神承平 中肥 後守藤

神頜註進目錄等其外文書數十渌傅 阿蘇家

司惟時寄進狀正平五年八月河尻肥後守幸俊依 神頜居合田押妨 神

官供僧解狀同六年十一月因 甲佐社怪異 大宮司代 高階敎耦等注進

狀同十二年二月河尻參河守入道廣覺依 神領居合田押妨 甲社雜

掌申狀同十六年八月名和顯興因: 神頜小河雨鄉亂妨 神官 供僧送 :

郡浦社衙 牒永亨七年四月菊池持朝寄狀又以十子

11

干今

及神官寺而巳殘矣上宮之供僧者龜 甲山 福城寺存 三

甲佐宮古文書建久六年二月廳宣同年三月解狀承安三年正月

レリ

リ

加 修造,當社古者社官僧房有:數多」好呷今一祝

十八日甲佐嶽供 養 寶德二年 九月阿蘇大宮司 惟忠

十六年五月祭」之大非也

【佐神者速

瓶玉命異母弟而孝元天皇二

入

正平十一年神殿修理同年十月

別記日甲

一宮及郡浦神,稱„甲佐三社 鎮祭年月不詳

社在益城郡甲佐鄉,在,甲佐嶽上1日,上宮, 在, 其

カミアゲ 11

七八九十祝國造社祝金凝社 祝以上十二人謂 之神

チ

以„家職 連綿坐列自… 祝 至六祝, 又稱, 大夫,

ホチリ

セリ

社家有„神官權官之別,神官者以 藤次 次叙權官者

燒亡後天文二十三年内宮司惟豐分? 甲斐宗運 新

建」之然略殿而非, 舊制,今尚存矣

今宮殿者交龜三年

シテ

1

鴨

サシム

校引量年紀:

チ

11

三十三年一度平均賦„棟別¸„作宮殿

棟別者大宮司

11

古者宮殿宏大有,樓門回廊,四方上下有‶桓表

百二

トリキ

11

GED 11

承曆二年阿蘇宮神領四境之國宣弘長二年十二月三

社大神寶御裝束調進之廳宣其外就 祇,論旨分旨

鎌倉以來下文教書 寄進狀等 數十通傳 大宮司家及

坊中

式神名帳日肥後國阿蘇郡三坐一 · 健磐龍命神社

* 阿蘇比咩神社國造神社

異修造等事往々下載」之阿蘇山及神靈池之事詳 于應永十三

延喜

年之條 阿蘇家之事等大有,說悉收一載系圖之跋 可..照考,

別著、之阿蘇宮位階靈池變

神八井耳命,是謂諸神社, 也

健磐龍命以下阿蘇家事系圖

肥後文獻叢書第三卷

十二人山部 權大官司

姓姓笠家「家宮川

羌家是日:權官列 神官左權官右 嚴儀之時天宮祝

左 北宮祝右著,中坐二祝權大宮司中司(三人是稱”

社家頭三役,其外神人坐等有 供僧者以 次|坐„神官

之後,青龍寺而同山正覺院傳法也

在 黑川村 延曆寺末寺

達 之於守護職 守護職及賦.國中,出、之文明四年之造營守護菊池

重朝之書翰有 過 及其時相長爲續宇土爲光高瀨秦朝詫摩重房肥

前德堡九名和天草等納 棟別料於菊池家

文書及其以前造營柿別之文書等有 數過

阿蘇宮供僧昉 干此爲„ 供僧之法頭一和上, 其

僧房後爲三十五坊,今皆廢而唯青龍寺而已現存山上

之僧房始」自一西巖殿寺 今爲三十七坊,其始建 六

坊:今稱, 之於棟梁寺, 其外之三十一坊者六坊之徒

弟住職之寺院也故曰門葉寺,其大衆古者稱,衆徒

者十七坊稱, 行者‶九坊稱 講衆, 者十一坊也中古

講衆,分„六坊i爲 衆徒 實門禮門禮性之六城也五坊入行者一枚體力頓
及永正九年有˩故 中坊衆徒極樂

了實鏡珍密教圓

性之六

1

,

‵實禮德大德成實妙境

堂 印僧正:

爲„„ 開祖 是日經坊本

惟行建˩ 之請„僧慶圓

後號 蘇

永長二年二月大宮司

11

今村

天宮祝

北宮祝矢村社祝

以上

¸阿蘇山之祝也

二家姓山部

部家

家山

【部家號宮川

職檢校諸神社祝擬大宮司

理

、以上四家姓山

權擬大宮司

預

家號宮川

姓:

年國龍神之裔也

年稱社祝

官

草部

【姓家號共*11

祠官內笠忠基, 定 阿 蘇山祝 是

11

阿蘇山祝是謂天宮 祝

行冫牛岁ホ才哼-一本 欽明御宇祭 山上, 之 時以!

11

宮司惟行修,,山上宮殿 以, 古例分-祠官笠忠久,爲,

土記全文載 于應永十三年之條,可合見

永長元年三月大

11

セ

據 永長修造之交,在山上:明也故從本書 風

ル二

、足、信 然 筑紫風土記曰云々故日:中岳;所謂宗神宮是也X下記

11

儿二 LF无

11

上代:今地爲 本社 山上無 神社 今在 山上:者後世浮屠所」設而不

本自:

11

神社i 欽明天皇十四年三月祭,三神於山上:

11

11

惟人 司, 祀奠, 其後配引享 國造神 爲: 阿蘇三坐之

ラシム

アハセマツリシ

爲 阿蘇國造景行天皇巡狩之 時詔, 速瓶玉命子

シテ

造宮殿

今之宮地本社是也

或此時修

知 孰是

孝靈天皇九年六月祭,其靈,爲 國津神

1

1書矛盾不

クニツカミト

之子也又一彥八井耳命乃吉見 神也

吉見神女,生. 速瓶玉命

神武天皇七十六年封 而來 阿蘇 娶草部

社傳吉見神阿蘇南鄉人彥八 #耳命

セラテ

11

乃都亦相同

比咩神也

健磐龍命者神八井耳命之子

津助語也宿」曰,

阿蘇社傳日阿蘇津彥乃健磐龍命神阿蘇津媛乃阿蘇

非寶書,故不以

已此引風土記者疑

11 11

崇神天皇以. 速瓶玉命,

九宮; 合社 1殿 而在

一宮南 故日 南四宮

而在二宮北 故

之 妃也此四宮

造神弟一子惟人也母

雨宮宮新宮北,而向､南

叉在 奧一殿 祭天照皇大神 神武天皇

シテ

此宮殿在 南四宮之東南;而』向北

北四宮之東

天皇也在::

十二神

金凝神

北宮之第一坐也北宮事系圓 載」之

一殿 綏靖

彥神比防之弟

朝新 十宮彌比咩神 ㎝ 十一宮 阿蘇國造

若維新彥之明新

比阼神雕之七北洋神 九宮

七宮新彥神斕 八宮新彥神國神

神北宮之第二座也

曰. 北四宮

六宮若

五宮彥御子神

國11

與 六八十宮合社一殿

國 神四宮比咩御子神

11

「俱向 東

11

也此宮與 五七

三宮國龍神

二宮阿蘇比咩神

一殿在北

南

比咩神父吉見神

二年五月宣旨始有 十二宮名,

11

其次第一宮健磐龍命神

按爲 十二座,年月無 考據 建仁

11

11

上本堂而阿蘇山僧房之始也 本社所、祭神凡十二坐

住山上,逐造建一宇紺堂, 安 置十一面 觀世 音摸

像 稱 神之本地;號 雲生山西巖殿寺, 是乃今之山

11

八月叡山僧慈覺之徒最榮受 大宮司友孝之 許, 居

シテ

天宮祝事 鎌倉之下文有 數牒,

神宮今廢矣其後天養元年

11

大宮司下諸神祝上 云々其餘就:

建久五年八月賜 大宮司惟次 鐐倉下交 天宮祝忠次座席可、著･權

シフミニ

日:天宮麢 代々相;;續其職 云々 銳明之比有 笠忠基等名,又可

肥前風土記日高來郡昔者鄉向日代宮御宇天皇璟

天皇在,長渚濱之行宮,

按:L腹赤贄/權與其事詳三天平十五年1

條二著ス

御船左右游魚多之棹人吉備國朝勝見以､釣鈞」之

多有」所」獲卽獻:天皇･勅日所」獻之魚此爲何 魚

朝勝見奏申未」解其名正似耳歷 御覽日俗

見多物」卽云三爾倍佐爾今所」獻魚甚此多有可

、謂爾倍魚,今謂爾倍魚,其緣也

紀引」之一

彥天皇誅„球磨囎唹 還駕之時泊 御船於濱

ףת

風土記】

シオホタラシ

肥後本

先」是皇船泊長濱

ルナカス

按:玉杵名邑、此國今,玉名郡7云說前:鄉莊

革/部之7誌ヌ一說三津頰、玉名郡南關嶽

二住ション見ユ然レドモ未ダ詳ナラズ

紀

其所之土蜘蛛津頰

ツチク モツ ツラ

肥前國今渡„ 日癸亥自„„高來縣 .

玉杵名邑, 時殺三

六月三夕力!

ナノムラ

郡原始,故略､之

五月壬辰朔從„北發 船到火國

書紀〇全交載 于國

ミフネタチシテ

日玉名郡長渚濱在„郡西,昔 大足

故 號 其國,日 阿蘇

日代宮御宇天皇發 玉名長渚濱 幸 此

烱四望 原野曠遠不､見人物 卽歎忽然不」見因號 阿蘇郡 斯其 縁 也二
神社見在 郡以東 云々按

肥後風土記亡絕而不」傳僅存者釋日本紀及仙覺 萬葉抄引 三四條而

ト/无ト

テ

マツル

日此國有,人乎時有二

神:化爲､人日吾二神阿蘇津彥阿蘇津媛見:在此國;何無､人乎既而

11

キナリ トテアソンデ

書紀日六月丙子到 阿薄國 也其國郊原曠遠不見

人居 天皇日是國有」人乎時有二神, 日 阿蘇津

十六日丙子到 阿蘇國

ト通シ 皇朝須ト訓犬乃今/長須古、腹赤邊

マテヲカケテノ總名ヲ長洲浦長洲濱ト云ナリ

阿蘇津媛;忽化」人以遊詣之曰吾二人在何無」人耶

阿蘇社日記引肥後風土記日 昔者 向

チ

バカリ

四皇子宮下亓長洲=尹y 天皇/皇子四人7祀1

云リ長洲沖洲ョリ一里許南ニアリ腹赤村御腰

掛石下云尹 リ土人相傳 天皇警跟ノ所敢穢

ズ泉アリ極テ清潔御供水ト云衆皆畏敬ス疑

行宮ノ迹蓋此邊夕風土記:長渚濱トz渚云洲

按:長渚濱行宮ノ遺蹤今不」詳竊:考:腹赤村

沖洲 景行天皇祭レル祠アリ名石宮ト云及

在 肥後國長渚濱行宮 號, 此郡 日云

如間眞 貴久奇 母神左備居賀許禮能水島

キシゴトマコトタフトクアヤシクモカ

萬葉集 長田王被 遣 筑紫 渡 水島,時歌

11

11

島

無』水不」知所爲·則仰」之祈于天神地祇 忽寒泉

從„崖傍 涌出乃酌獻焉故號 其島,日 水島,其泉猶

今在 水島崖1

タタ

チヒダリチ

書紀日四月壬申自 | 海路| 泊 北小島, 而 進食時

11

シデミオシス

十八年戊子春三月天皇將」向、京以巡狩筑紫國 夏四

月三日甲子到 熊縣郡 召 熊津彥兄弟兄熊應」命

弟熊不」來乃遣」兵誅」之十一日壬申自 海路 泊於

北小島,

11

鹿

賜_火國造.

書紀日天皇遂幸筑紫 到豐前國, 冬十月到„„ 豐後

アンキウ チ

門

11

冬十二月以„市鹿 賜:火國造

イチカ ヤ

- 至ル窟中宏少數十人ヨ容入其形勢魚鱗/連ル

カ如ク乳房!垂タルカ如シ所謂土折豬が住所

也

國,十一月到,日向國 起 行宮 是謂 高屋宮 十二

月癸巳朔丁酉議」討┬熊襲, 熊襲梟帥女市乾鹿文弒

、父而降 天皇惡,其不孝之甚, 誅」之以,其妹市召山部阿弭古之粗小左

分」進 冷水 適此時 石貝=似タリ山丘ョリ出色白”海汀ニアル色黑

四九

、形寄居蟲丿如/肉下殼下色力íy生夕è貝

リ

カラ

打背

期

貝殼事ニテ石貝ニアラズ田浦ヨリ出ル

按:水島、八代城/西南一里可/海中二尹小嶼

11 寒泉石罅m” 涌出入潮/盈虚:依亓水口高下

天下2名水其右:出è千丿y上古、葦北郡

内ナリシャ今、八代郡高田郷二屬セリ野坂浦一葦

北海 無慮テ斥云名ナリ皆名所ニテ題詠甚タ

富!肥後地志略等:多/載」之叉各地志略:野坂浦

云今湯地7云佐敷、湯浦ト/間尹名所示

古歌/多キヲ榮トシテ叉歌坂

占丿野坂

丿浦口地此y:肥後國志略:云葦北郡田浦/北

濱三石貝尹 刂里人空背貝下云藤原俊頼/歌:蘆北

の野坂乃浦のうつせいせそなくていく代へぬ

らん此ニ云ゥッセ貝い右ノ貝ニテ野坂浦乃其

石貝アル 所ヲ云ト二説幷適從シ難シ 空背貝

萬葉集

ウツセガレ

11

ガラ

リト

仙覺萬葉抄引„肥後風土記 日球磨乾七里海中有

、島名日 水島,島出 寒水 逐、潮高下

サシノ

ミチヒ

バカリ

葦北乃野坂浦從船出爲而水島爾將去很立

聚„徒黨¸居 高羽川上,四日土折猪折,隱„住於緑野

チチチリヰ チリ カクレスンデ ミドリ

婪 屢略 人民 是居 於御木 川上,三日 麻剝|潛

ハギ

カズム

響 聚 屯 結於狹川上,二日 耳垂,殘賊貪

ヤプリテムサボリ

ストナヒアツマリ

11

歸¸德矣唯有賤 賊者,一日"鼻垂,妄假|名號,山谷

11 h

アヤシャツ

11

向而啓之曰願無 下』兵我屬類必不」有 違者,今將

ズ

其徒衆甚多一國之 魁 帥也聆 天皇之使者至,則參

ミツカヒル

ヒトコノカミナリキイテ

ヤカラ

部君祖夏華,令」 察,其形有女人,日„神夏磯媛

ני

ナツワナ

南 望 之詔„群鄉,日於南烟 氣 多起必賊

留 之先遣多 臣 祖 武諸木國前臣 祖 菟名。

トホツヤタケモロキグサキノ

ママリテ ツシ

ミセ

ニケムリサハニタ ツ

ミンナハシテ

未朔己幸„筑紫 九月戊辰到„周芳國娑磨,時天皇

11

スハウノ マニ

ソムキテミツギタティツラズ

景行天皇十二年壬午秋九月益城郡有」 賊曰, 土折 猪

折,隱„住綠野川上天皇遣„武諸木等,悉捕誅」之

年條及上阿蘇系圖二載」之

舊事記曰阿蘇國造瑞籬宮朝火國造同祖神八井耳命

孫速瓶玉命定氵 賜國造¸辣羝汪命線 景行天皇十八

此朝以„速瓶玉命¸爲„阿蘇國造

終:、亡絕冫僅三殘步者、出雲7國造

〃〃〃

スト

郡領牙亅職任之三代實錄貞觀三年十一月詔日 老德天

肥後文獻叢書第三卷

後世三至

皇世國造之號永從停止其何據誤ル否知77

リ國造神職巫如ニシテ其號フテ家ヲ傳ヘ

書紀日天皇十二年秋七月熊襲反之不 朝 貢八月乙

中二隔、川有亅謂擯城゛ 巉嚴屹立兩城相望矣日,城因險岩形,爲亅名又

其水源=窟7y穿 窟 下云諸嶽群山東西峭

恰天雲ノ毀謡スルカ如シ其道懸絕釣橋ヲ涉テ窟

ウダノイか

疏:遠回ņ甲佐靈嶽西南,而碧潭如、藍謂之綠河

川下馬尾川等諸水納七里川御船川中瀨川等=

會シ西北流レ詫摩郡飽田郡宇土郡繞リ流レテ

海入肥後三河,一也三河卜、白河黑河綠河7云

白河黑河/事八應永

大慈寺開祖寒巖和尚が大渡橋幹縁

十三年 二記入

山,其故未、詳

益城郡矢部莊祇用鄉甲佐鄉 7 歷江原

其日: 內大臣

11

テ

トテ

メリ

日向之奈須高千穗 發源有 其山故謂內大臣 川,也鬼城有目九山

蟠根十三里餘 跨盒 城阿

丿下三元內大臣川-合流L

11

內大臣山屬 矢部莊目九村

按:菟狹川、豐前國御木川、筑後國=7高羽川

國地未タ詳ナラズ綠野川北國ニアリ今 野ヲ省

亓唯:綠河ト云其源阿蘇郡南鄉河口山發氵鬼城

1

リ

三人,乃率己衆,而參來悉捕誅」之

マウ

麻剝之從 仍賜 赤衣禪及種々奇物 分」搶 不服 之

アカキヌハカマ

ツ

不」從三皇命」願急擊」之勿、失於」是武諸木等先誘

據幷要害之地也故各領:眷屬」爲一處之長, 皆日

クハニチ玉

川上,獨恃山川之險,以多掠_人民,是四人也其所

ムデ

四尺

新撰事蹟通考卷之三

奈產命兒遲男江命定 三國造」

チム

舊事記日火國造瑞籬 宮朝大分國造同祖志貴多

ハミツカキノミ

此朝以遲男江命」爲三火國造」

エノミコト

ノクニノミヤツコト

オホキメノキミ

ス

不出古事記火君大分君阿蘇君等十九姓神八井

耳命之孫也阿蘇君ノ事 宣化天皇元年條二誌

ソチ 字三年十月

ノ裔孫絕テ國史=

11

アリ淨水寺ノ碑銘延暦中肥公馬長アリ

續紀天平寶

ノキミムマチサ

健緒組肥前風土記二賜姓名,日火君健緒純」

君姓ナリ書紀 欽明天皇紀二筑紫火君略ト

名峰之事前載千國郡原始故略」之

11

討 詩平之

11

,肥後風土記肥前風土記◎全文及朝來

朝來名峰悉

テ ヒノキミトモノオヤタケチクミニ

打機頸援二人蔭峰頂、常逆皇命 不二敢從 天

ウチサルウナサルト

11

崇神天皇之御世肥後國益城郡朝來名峰有土蜘蛛」名

アサク ナノミネー ツチグモ

編年考徵一

新撰事蹟通考卷之三

皇勅肥君等 健緒組」伐」之健緒組到レシゴト書紀舊事記二出國造久邇能美夜都許

天下諸姓著 君字者換公

字故其以後の某公ト也

其後肥公之國造定賜國々之堺及大四七

國造帶郡領ﾄﾝ寄三言神事動

三月官符云昔者國造郡領職員有別無敢違慶雲三年以来令二

セ

公務自今以後宜改二舊例國造

11

テ

延暦十七年

以來國造郡領ヲ帯ス延暦十七年舊復ス

縣小縣之王職原抄等國造始

成務天皇御世トスルハ二書見誤レルカ二書/明白ナラサル

が故ナリ國造ノ始前二見エタリ其成務! 朝非ルコト明ナリ

孝徳天皇大化二年新制シ毎國國司置諸國

國司任ズルニ及テ職始テル國司政掌リ

國造、其下=立テ神事ヲ勤ム又其人選テ郡領=

任ズルアリ郡領=任者八神事二預ラス慶雲三年

類聚三代格

11

長縣色置稲笂井賜表古事記日成務朝定 大國小國

11

11

11

11

天皇五年秋九月令三國以國郡立造

封ズル所最モ多シ

舊事記國造本紀 六十四國造書紀成務

紀有..

11

ト訓ズ久仁津古久邇都久利ト云ベカラズ其職神

祇祭祀ァ掌リテ民事ヲ治ム 成務天皇御時其

クニックリ

ニッコ

ミヤツ

11

叉按=國造神武天皇二年椎根津彦命ヲ以テチ

國造トス是其始ナリ其後追々諸國國造任でラ

ル始府中在廳屋舗!北國造小路西ニアリショ

祇園神社承平

今祇園神社境内二遷ス 四條著

按祇園神社!封國造神社アリ遲男江命祀

見扇三日向高屋山上陵」今

此陵大隅國肝屬郡内浦郷北方村高屋山ノ巓ニアリ是乃チ古ハ薩

摩マデヲカケテ日向ト云フナリ然レハ日向ト云名ノナキ以前

熊ト云が大隅薩摩マデカケ

故二舊熊襲!國ノ

タル大名ナルコトヲ知ルベキナリ

名僅=殘テ日向ノ内二入後ニニッ二分レ

熊郡郡トナリテアリショ郡鄉等名二字書

スル

イダキノミサンキ

記 總名トナルナリ

熊

H

書紀曰天津彦彦火瓊々杵尊

11

リ

稍後二至其大名廢テ日向ト云名ソ其

國

オホナ

因葬.,日向可愛之山陵,天

カリン故=熊曾トハ云ナリ熊鷲熊

鷹熊鰐ナドモ皆猛キョ云稱ナリト然レトモ書記

景行天皇十二年十二月議討熊襲十三年五

月悉平 襲國 十八年四月到„熊縣 肥後風土記

景行天皇誅 球磨贈於 而巡 狩筑紫國,據」之考

ル=熊熊鷲ナドノ熊ニアラズ球磨ト贈於ナル

ッ本熊ト曽八一國ニシテ上代二八日向

ノ南ヨリ大隅薩摩迄ヲカケタル總名ナリシカ

セ

ナカバミナミ

11

コチ

北

リテ

シテ

按古事記傳=熊管管國ニテ今ノ

熊ト云肥後國球磨郡ト別曾ノ國ノ梟師・

云モノイト猛11

肥後交獻叢書第三巻

火日向綠之中山之 巓 陵今比陵薩摩國高城郡水引鄉五臺村

中山之ニアリ書紀彦火火出良村米庶流也

▲領之其家菊池之村小河村銀鍰谷村是汨米長山晒籣谷 米其家

シロミニ

上村岡本村宮原村奧野村久米村湯前村多良木村須

惠村深田村菟田村永池村目良村木上村一武村西村

東村田代村大畑村簗瀨村蓑毛村深水村川邊村平川

村晴山村田代村初神村萬江村山田村大村間村薩摩

瀬村西裏村林村原田村中神村渡村大牟田村松谷村

毎床村一勝地村大瀬村神瀬村上酒汁尼射湘頂下板屋

鄉名和名抄有球玖久米人吉東村西村千脱六鄉」久米

東村西村今有其名村相良家今之所居城地曰人吉

其餘不詳建久中相良長頼爲此郡地頭職 ｜代々續其

職¸鄉莊制今不」得‶其詳】鎮村四十六

二見エタリ

タル

地接ズト云ヘドモ郡迎 ・分極 其地廣ニョリ中間二郡

ラ別二建シュエ今ハ隔リタリ始熊骨一シテ一國ノトナリ

置是ヨリ贈於大隅國ノ郡トチル球磨、其前=

ヨリドコロ 今球磨

モ肥後二入タルカ年代今考ベキ據ナント

ツト

ノ内肝坏贈於大隅始四郡ヲ割テ初テ大隅國ノ

アヒラ

イモツキ チ

字ァ添テ贈於トスル也其後和銅六年四月日向國

チ

ソヘ

ベキュ定ットキ熊球磨トシ韻ノ音於ノ

四六

栖本剛三十

海村深海村宮河内村平浦村

早瀬村龜浦村魚貫村牛深村八玉村内野原村山浦村

1村,

玉

福運木村都呂々村下津深江村小田床村高濱村大江

村今富村崎津村

大江領村,

伊津小次郎貞弘 本砥乃本渡也佐伊津即才津也

口村櫨宇土村食場村龜川村楠浦村大宮村小宮村北

高根村諏訪崎村大田尾下大田尾村

本渡村

町 山

惠耳惟澄正平二年申狀中有三天草郡本砥島地頭佐

11

本渡

11

久富村白木河内村 卡年卡用白木河内村客狀

町田村下田村

碇石村中田村立原村宮地岡村今村益田村市野瀬村

廣福寺有, 天草種國之正平二

平床村一

鬼池村御領村才津村廣瀬本村和泉村下河内村新休

村本村

荒河内村城木場村上野原村井手村下内田村二江村

御領領村

郡之四 五

後襲入,日向國,熊屬„肥後,而爲」郡也

郡始日:熊襲國 古事記熊曾國

謂 建日別 是也

タテヒ 11

ワケト

チ

東諸國記同圖載„天草津

球磨郡

郡之事出,國史,者編年考徵集_錄之,外邦之書武

備志有三天草港 登檀必究肥後國圖有 天草山,海

北之西,

11

西,延袤二十餘里幅或一里或三四里環, 列八代

111

ナカレ

【水】里餘是謂:三角湍門

尾,,薩摩西南 |

之

スミセト

宇土對 宇土郡三隅浦 其間海

11

スミノ

日本渡瀬戸i倶瀬戸内廣一里許

1

天草者一郡一

11

首起

本

11

一島而有:二迫度一日:柳瀨戶, 一

1

í

上村登立村

:

タセト

11

楠浦村敎良木村内河内村今和泉村合津村阿村中村

大矢野領:九村

童村御所浦村

間戶村樋島村所豔黼 高戶村浦村棚底村宮田村大

¸別島爲一村

下浦村馬場村打田村湯船原村古江村下河内村犬河

内村大浦村須子村赤崎村上津浦村下津浦村志柿村

詫靡文書,應安三年九禇 礅 姬浦村二

大島子村小島子村觀靡 這應按年九月

志加木岛子村 天草那

村船津村丸島村 | 小津奈木村初野村大迫村村| 二江領六村

「在此所 又延喜式所 載水俣驛卽此也驛儼傳今尙存

陣内村

亂橋、上原、町原等十數村皆鄉村帳」載、之

¸有町屬此村,曰水俣陣町 古水俣鄉 以降,至今治

水俣啥所 11

町:領三十三村,

干冰报

11

以上十村中古以來津奈木鄉領邑○此外日野、

赤崎 O

村河内村雕"小津奈木村平國赤崎村赤崎村

津奈木村四村附

津木奈會所

藏谷、馬出野、城道、豐尺、大河内飛松、大鷺浦野角

上内野下内野等有二十六村 皆鄉村帳 不、載之

一頜色O此外平生

鄉頜色

大野村桑澤見村 大久野川村

11

以上三村佐

馬場村小鷺浦村福浦村

6 岡村百木河内村U杜

寺河内,

三村附

モンキ

瀜癢鹇

11

湯浦本村翀岾俠湯浦會所

野々木河内、下白木等二十一村,皆鄉村帳不、載」之

有宇戶伏木、兼龙、桑原河內、才木、檗浸、漆河内、

11

ハカリ

キ

肥後文獻叢書第三巻

井手向村垣内村财附” 鶴來山村計石村白岩村6 計

市野瀬村上白木村告村長澤村三村附市野澥, 以 上十

村 袋村

【三村中古佐莊領邑 此外

野湯寺河内村

R”山川村

津奈木,

附 平國

冲站,*中尾村濱村松岡村中村 上門

瀨川村

之富岡 和治牖 内田村年柄村上津 深江村坂

志岐村 和名抄作記志岐

草志記惠家高屋五鄉 志記今尚存其餘無, 遺名, 其後

制不詳今爲公領¸置 志岐、二江、御領、一町田、

本渡大江、久玉、栖本、大矢野、九組 天草鄉」組

其長謂 大莊屋,也

|記

郡舊一國之名而 成務天皇之御宇以 建島松命 | 爲

天草國造 *後爲郡屬,肥後,鄉名和名抄有 波太 天

ニシテ

モト

圖書編阿麻國撒

天草郡

和名抄安萬久佐

11

場寺床中度數等六村博鄉帳不」載之

久木野

中古湯浦鄉領邑○此外寒川大河内越小

久木鶴村 頷 一村

會所在 久木野

鄉村帳不頭載」之○延喜式有 肥後仁王驛,卽今水

俣鄉仁王木村此也其 詳 雜著部記之可合考,

ナルコ

11

11

中鶴、仁王木、薄原、大鹿倉、桑生等有:二十餘村

スキ

以上十三村上古以來水俣鄉領邑O此外南福寺 早 栗

姍标津 長野村深川村寶河内村睏 葛渡寶又作、

村 石坂

村帳不｣載」之

加フ

才木漆河内鄉

村大泥田、才木、市瀬、告、漆河内丿五村7佐

敷:加入上久野川、大野、桑澤見三村/湯浦 11

ツゲ

佐敷會所

按二見、寛文十一年八月省」之其領 邑7皆田浦

加7大野、寛文四年十一月領邑/吉尾2一

11

田浦二見佐敷湯浦大野津奈木水俣久木 野八手永¸ 寛

文中省,二見大野,爲 六手永ı

色敏村,

1

佐敷莊樣 树水俣鄉 | 樣 湯浦鄉 嫤村有四鄉一莊,今制置,

丁領小

十六

乎

七鄉,其後制日奈久郡 津奈木鄉

年脩 鎌瀨村鄗多

野角野川地方不合

畔,河内

内有大野村.

野行

可以用:二字,事見于前 前後

巨大也湯浦11

今村名無野行,不可以考

ハタリ

内村 其他無 地名

☆譜? 桑原版主的有 桑原河 伴 伴之上下脫, 一字, 那鄉等名

佐敏莊内有

今無名,

其以前爲,郡

鄉名和名抄 有,,,, 北

11

敏達天皇十二年爲, 火葦北 推古天皇

11

知也

而爲吉郡也

西巡至：

北 興 可>オホキタ

爲, 於保伊多,類也大分本於保岐多也伊多附」訓音便假名也書紀爲

11

ルノ

11

モト

舊事記○分與,北通和名抄筑前鄉名新分註, 爾比岐多 豊後郡名大分

郡上古與,,, 肥後 | 別國而 景行天皇御宇置 葦分國造 | 田浦江利花

ニシテ

天 皇後隸,,肥後,治,日奈久或有、書日南後比奈子日奈來皆久訓、古

十七年爲」 肥後國葦北 然則雖」有

鄉.

郡無 川

川田十二村日奈久 鄉領邑C

此外日奈久下有..馬越下鹽屋千代永等村,二見下 船津、洲口白島上

大野、田子崎、内野等有:數村,久多木下 鶴 喰葉木、與奈久、瀨戶

石等有:村 田浦下有:猪山、宮後、赤松波多島等村,大河内下”

内木場高田村 田浦二入同十三年八月手永ヲ皆廢シ管

四三

下知狀載 葦北莊佐敷久多長木

松生村 乙千代村 道河内村

オホニタ

小田浦村宮浦村海浦村田 大泥田村一

奈久 鄉頜邑】

中古以來治考在于此有､町此村所、管寬永未置 藩衛府 延

喜式作佐色 卽古之驛跡也至本府, 十八里二十一丁餘驛傳令

尙存詫摩文書文保二年七月鐮倉,

部黑岩、上、箙凝等有, 數村,皆鄉村帳不」 載､之

11

11

11

ニツルハミ

ス シラタウ

コシ

11

大河内村吉尾本村白石村

二村附 大河内, 以上

[至 本府 十六里十九

横居木村田浦村

十二

有少町日沆村町

1

キ

「咩于編年考徵 敏達天皇

野村井牟田村| 多良木村

俗說云此村本百濟歸村事

二村附三 11

モトクタラ

便爲二見 通 官道 即古之驛迹

11

田河内村二見村

11

11

【延喜式有: 肥後朽網驛,後因: 字

下大

クタミノ

11

肥前風土記有 葦北火流浦可日奈久浦 至本府

11

ナル

チョメリ

中古日奈久鄉治 于此,有、町聚落海濱゛ 有 溫泉

日奈久村

石爲、池明曆二年三月命 有司 建大厦於池上, 浴

P 會所在 田浦村

二村太田鄉領邑

鹿上鏡村 鏡

西

河田村岩崎村

鏡村賄ゅ犬野鄉領邑

「犬中野:

下村

中【附 西河田 此

以上四村小

小平津野理俗小

野津會所

之頜邑

道後鄉

駁城 黑駁北村枝村也〇以上六村

小路村北村今村南種山村

惠惟澄正平三年由狀載 種山黑

11

前鄉試色

四浦皆領 子村數十:

立神村北種山村河俣村栗木村柿迫村下嶽村村俗

タテカミ

大野原 阿彌陀峰 卽地此

城與八代 之界也

河上村

大野村

正平三年申狀追一至

川,北曰:小川町

道隔 砂

ﾁ

11

吉本村 田鄉色

「犬「善寺村

早尾村拵村

興ｶ._此二村小

此一村太

種山會所今在

松崎村高子原村 明曆萬治之間新墾之地也

此二村道前鄉頷邑〇二村

ｶウゴ

树 猫谷村日置吉王丸

村聯盟。

附

キ

片野驛卽此也

東河田村 吉王丸村南吉王丸新牟田村

片野川· 延喜式

片野川村北片野川村町下片野川村中片野川村

鎌瀬村中津道村 坂林意湖等子村等二十四村

三村附上松求摩 其餘額 藤本 宮地村上

肥後文獻叢書第三卷

村上日置村福正原其證詳 于前 弘仁年中所著 日本靈異記爲:入代

二毛

鄉頜色

南町通 宮

〃一所小隈野村幹一所鞍日四浦在比種仙坂新田村 以上十村道

岡谷川村岡中村岡

島村 中 小路村之木多

北郡

和名抄阿

11

ズ

村何比盆城二入タルカ先代郡制ヲ改時砂川以

北ノ地一悉ク割テ盆城郡内二加ル歟今詳ナラ

村叉長祿五年正月菊池爲邦/寄進狀八代郡海東

今附„野津村 爲 枝村

イツ

一所種山村一所鏡村一所大野

書簡有 法道寺村,此村

ニモ

楠村今潰廢而合:吉本村･地名而已殘矣

賴尙

一所法道寺村

レリ

有„„八代莊鞍楠村5綸旨寫名和系･鞍

11

少貳

間等之地

【武二年綸旨

之

楠村

皆略町段之數,

名和交 書建

八代莊之內道前鄉田數 □ ` 一所野津村

此下各書 1

小川.

阿蘇文書康永二年四月教書,坪付:肥後國

南北

「那豐福鄉 甲佐文書建久六年國宜亦爲,, 八代北鄉

代郡/內也

11

按:益城郡/小熊野四海東豐福my南、古六八

【上六村道後鄉色

外牟田村宮原村

有」町通 官道 ●以

上七村道前鄉色

上土村上有佐村下有佐村内田村↓

11

年墾開之村也OK.

アラサ

+1

1

島村東鹿島村 漉 野津村高野道村 枷 野

野新地村

四二

新撰事蹟通考巻之二

【於太宮司惟時,有 教書,及大野石室銘道前郷大野窟明

,頜村二道前

田

頜村十九○阿蘇文書康永二年四月既"八代莊内道前鄉

先代之見圖帳有,高田鄉

即可,此

1

代莊小井九鄉三箇塬村小犬附院際顧賀舊記載入太

ニモ

益城郡詳 前

軍 高田鄉‹慶長十四年.

ニシテ

五鄉 其後之制高田

小川

文明十五年相爲

今爲､村二村其屬

ナリ

領村八 洞然長狀

豐福

郡中無 木行之地名 或日木讀爲」兒行者註往也訓, 伊双,即中古

小犬鄉也然以 方位 考」之自 豐福 小川里自 小川 至肥伊1

一里自肥伊,至. 高田 二里餘小犬者肥伊之側而肥伊高田之間

相雕 遠然則今之興善寺河田片川等之地方疑木行鄉所,管也

11

ルニ

11

ィヌ

ハテ

添 肥之韻音之字,二字而訓,崑 和名抄假名付, 比伊, 傳寫之訛也

ムヒト

ニテ

チ

11

11

名爲‶太加多,今云 古宇多,也

1

11

地也鄉名和名抄有:高田

チ

務 在三郡南,今尙儼存矣和名抄假

11

ス

郡自、古屬„肥後,無„變革¸蓋八代也 者國之 權輿根本

圖書編牙子世六

八代郡

11

和名抄夜豆志呂

11

my石津鄉甘木莊下云惠良惟澄正平二年九月1

申狀:六六箇莊石津村下7丿簡淇比摩郡一屬

盼, 何L丿頃丿鄉名不詳

·熊野

鄉下云 拾集昔語:御船近鄰/村々7昔

ニモ

按=中山鄉)上江下江中間一續1大名7小熊野

舊記

三道今之氷川乃肥伊之遺名而宮原村傍近之所也說前辨 國 郡原始 伊

二村入, 八代城郭Ði爲丿町然 負 城築以前村地 納 租稅

【故入村炫求磨田深水鮎返等子村四十八村,

木々上松村葉木村

子村

二村附 下松求摩 其餘領:古

ス

キ

.

五箇町 一

麥島村萩原村古麓村下松求磨村今泉村

推 本府町,爲:

河原村

員,其餘城下有:本町二町等數町,商家 二十 許戶

大村井上村下井上村₩ #長田村 「鄉領色

11

以上十村三

レドモヒテ

此

德淵村平

于 松江村横手村田中村古閑村上野村海士江村野

カウッケ アマカエ

燧須賀舊記作 鳥柳 又一作 小柳 Q以上八村 高田:鄉自、古領色高

田無、村北八村皆在,熊川南 其總名曰高田在八村, 高田鄉之名出三

1

11

豐原村本野村高下村西高下村啊 高大福寺村植柳村

カウダ

ホン

河内村村大社神領寄進建武二年之綸旨,

敷河内村

奈良木村

11

チ

出雲國大社有 伯耆義高八代莊地頭分内數

シキカハチ

11

綿 而尚于今存:四十五村

高田トシテ

ス

會所在 豐原村 當鄉自､古連

種山

田、外牟田○岡小路

北村、鳥、綱中西村野津加

岡谷川、興善寺

上土、岡小路、西河

海士江、新牟田、吉王九南吉王龙猫谷 五村種山二

北片野川、下片、野川、中片野川、長

河東

按=興善管十九村其屬村ヲ分チ十村高田二入

種山野津四手永,寛文中省興善,爲三三手永

後記載入代道後1

修､之

,氵 高 田興善

有六鄉 今制置應,領村十二〇蜂須賀舊

頜色甲佐平村

_此一村甲

訌 针对

アセチ

崎村貫平村庵室村竹迫村桑津留村福良村帜五十村

アンシッ

村岩上村金木村水上村迫村内園村峙原村用來村小

ヨウライ

夏水村下福良村越早村大辻村勢井村權正村興正寺

ゴンノカミ

ナツサウ

海原村長野村内山村桑木野村石野村柏川村藤木村

中村下田村名越谷村古閑村柑子野村栗崎村北村常

岩尾野村田

中古以來莊治署在 于此,

有› 湔屬 北村 種 無嗰原町 小夏村 小長野村 早楠村安掛村越早津村一谷村津留村河原畑村舞鹿

野村目磨村 大窪村 御前濱村 土喰村 口原村原町村

有、町屬 砥用原町

砥用 1 五十一村

會所在 砥用原町

按:此手永豐福莊/六村守山鄉ノ八村甲佐鄉1

六村都合二十村中山手永/内小熊野ノ三村、本

八代郡内ナリ其證前二見タリ又八代郡末ニ

記」之又古保山曲野大野 松橋萩尾 河内等)地方

皆宇土郡内ナリ其他郡二入何年ニアルコ

トヲ詳ニセズ

極豐田莊之領色

該尾村浦大

【解文爲 宇土郡勾野 大野村松橋村 界

≡與字上郡高 萩

村

宇土高

マカ

甲佐文書建久六年二月

證書爲,八代郡内海東村 ●以上六村甲佐鄉頷邑

吉保山村曲野

マカノ

書 海頭,阿蘇交書長祿五年正月菊池爲邦之領知

肥後文獻叢書第三卷

耳、御頷町爲､上河内村禮頤疵 神園村萱野村岩下村 ㎜ 卍ì 馬場

年解文盈城上郡堅志田村建長

草野等村 鄉村帳不｣載,

有 池田高木佐俣出目石原下

㎝ 小莚村今村坂貫村九尾村椿村拂川村坂本村中村

大岩野村小岩野村長尾野村松野原村木早河内村野

以上十八村中古以來

中村白石野村鶴村原田村小市野村罡鎮䉶ō此殮

三年神領注進目錄所載之

下江村中間村上江村安鄉站

.志田町,O甲佐文書建久五

二毛

附 大澤 此村聚落曰堅

村中小路村大澤水村堅志田村

11

11

ニハサミ

安見村巢林村絲石村山崎村 哔莧峣喻體野響力0以上四村

惠惟澄申狀延元正平間載,

中山會所在 堅志田町,

*領 三十二村

田莊頜色

窪村鰐瀬村陣内村土鹿野村

以上七村豐

西木村島田村六田村鮏缸酎沈目村塚原村藤山村尾

莊治署在 于此莊,隈事見于前

守富莊領 隈莊村

宮地村

以上十四

有､町至熊府,三里二十町餘中古隈

ルモ

舊 職 木 村後誤而爲 古開村北田尻村 三十 町村三十町

志々水 古之驛跡也

中野村南田尻村平原村木原村阿高村東阿高村

11

モトミキミツ

榎津村I本札村 涛藤 廻江村 廻江村] 嚅蘼 志之水村

廻江會所

マイノエ

四

新撰事蹟通考卷之二

平野村坂本村�の蝣附‟蓍町村千原村啊 著 長村丹生宮

富莊領邑

村莎崎村椛江村

築地村出水村 今村吉野村

以上七村守

コウサキ

【中有|杉島村:

上杉島村 杉大町村 國町村薦 江

杉島村

附

惠長惟澄申狀

十五村

杉島

所在 杉島村:

N

年九月神領注進目錄水越名所々載

甘木莊頜色

11

水越村

ﾁ

11

頜, 村南木倉村西木倉村柳氧北木倉村南上野村東上野

村陑喃西上野村北上野村印「南田代村北田代村小

御所

襴 高山村牛灝村今城村 4梅木村橫野村邊田見

【五條賴元書載,

甘木村 高野村下高野村御船町村

11

中古甘木

有､町阿蘇文書

*領三二十村:

11

•會所在 木倉村

白石村田吉村小原村下市村轟村中古財來雒邑

菅村小藏村新藤村犬飼村長野村

以上七十五村矢部

コガラ

千瀧村南田村牧野村白小野村津

濱町矢部町・古宅部鄉

:

原村長田村葦屋田村上司尾村下馬尾村濱村

町屬I

ジョウシノ

原村入佐村今村網卡 桐原村畑村下大川

村片平村大野村梅木村杉村寺河口村原村山田村市

此村稱中古矢部莊皆治 于此

留村荒谷村目丸村福莊領

以上八村守山鄉頷色

九月注進狀同

三年九月申狀等 小野 卽此也

●守山今南部田村僅

名殘有:八幡大神宮,稱,守山八幡 其所小名曰 守山村,能因歌枕名

所之守山惠其惟澄申狀正平元年載 守山關所等,皆曰:此地,也又中

古守山鄉 .

古八代郡小川鄉治著 小川町附卣 此村,小川年

「代記細集小川町應子村數十: 以上

十九村北一村甲佐鄉頜邑〇甲佐文書建長三

古町始三十六戸至此爲,五十四戸,寬交七年八月改新古爲‟會砂川,北日
,

吉本町,屬„入代那種山,

文書建久六年立劵書八

三九

季長正應六年正月海頣宮 置 交

海東村北海東村西海東村

甲佐文書建長二年神頜目 竹崎

西小川.附 北小川村 東西二村鄉村帳不載」之

南海東村東

年神領目錄有, 南北小川,又有東小川 附 北村 有..

1

代北鄉南小川北小川建長二

甲佐南小川村

九十八軒,隔 11

チ

百

115

11

十四年二月立」之木背有其銘 新町寛永十年六月建 三十一戸

永二十七年建恵比須堂同三

1

治:于此

ニッ

北小川村

1

11

11

レリ

チ

新田村

11

、之恵惟澄正平二年下 中小野二村鄉村帳不,載

新田村 鸝 北小野村小野村

附 江

俗日,南小野,又有..上中小野

カミナカ

竹崎村

名和兵,戰 于久具川,乃此也

南部田村北部田村河江村江頭村南

以上六村

エカシラ ナン

内田村

洞然長狀永正八年相長兵與H

11

【服又作‟向古驛傳亦在 于此,尙雜著部可見合

下江

トヨフダ ,古代郡豐福鄉中古鑫城郡豐編莊皆治 于此,福作毛.

豐福村

哼

河江會所

【五村隈莊之頷邑

村高村赤見村釋迦堂村碇村七島村

【附碇村 以上十

所卽此也始出自 中山鄉岩下:

小鹿村上揚村寒野村豐内村

x

甲佐町屬 此村 中古甲佐鄉治

1

甲佐1 ji十二村

會所今在 早川村,

郡:入其何1比ènトヨ不」詳

按=鯰沼山津ノ二手永六皆古詫摩郡ノ内也益城

古閑

村廣崎村沼山津村中牟田村西牟田村 東牟田村

沼山津 •以上十五

村木山鄉之領邑

附

三村

-知狀甘木莊內志名子村

志那子桑原合环牂應安三年九馬水村 總頭村 福富村日志【六箇莊內
志那子 桑原安永云々

腰尾村 宮園村安永村 詫麼文書應永六年 三月下知狀

有少

山

キ

11

村木山町村

11

テ

有町中古木山鄉治所〇惠耳惟澄注進狀肥後六箇莊

11

戰:子肥後唐川 卽此也

爾 *小谷村戶次村馬場楠村曲手村唐川村

惟澄申狀等延元元年八月井村帶

福原村迫

原文書恐長

マカテ

ツキ

河原村杉堂村上陣村下陣村平田村寺中村田原村

ジチウ

「頜:二十八村

沼山津

會所在:木山町

「隈莊領邑

村上下中間村

, 益城郡甘木莊 故上島及屬 益城郡隈莊

以上三村

テ

村木崎村赤井村

以上四村木！和名抄詑摩郡上島鄉卽此

肥後文獻叢書第三卷

上島村

【山鄉頜邑

「也康永三年三月少貳賴尙

奉文六箇莊内上島據」之則後停鄉爲戀村屬詫摩郡大箇莊六

萬瀬

筒莊又廢而爲、村入本流 町北 加藤清正改 流橫貫 市中;掘·新河,而埋古道其外有:中横田、有「木山鄉據」之則木山從 六箇屬 六箇莊發而後置 木

鄉野村中島村北中島村 金内村 田小野村上

小色許多

名連村上河井野村成君村河内村横野村上田所村下田所

村下河井野村尾野尻村小野尻村男成村稻生原村篠

石六地藏 其銘大永 仁田尾村 高月村佛原村 大河村平野

二年飯蓋備中守

11

牛瀬村鶴底村河口村鄉原村安方村井牟田村

此村有:

11

本字飯蓋

ハイフタ

石村下名連石村色數村

三村瀬小川俣村山出村 麻生村

11

萬坂村藤木村勢井村柚木村猿渡村三筒葛原村木鷺

矢部會所在袯部濱町

1

以下未」詳

夕

安、大町、安平、坂谷、麻生原村鄉 村帳不

日載」之O阿蘇甲佐文書寒野、有安、舟津、津々高柳若園等村女

多載」之津々

11

七村甘木莊領邑O

町村古閑村上早川村下早川村糸田村。

附:下早川, 以上

田鄉頷色

山村三箇村

甲佐鄉頷邑

芝原村山出村八

让叶射中此二村豐

吉田村田口村埔府頗村津 志田村船津村世

鄉,今岩下村是也

部田,

仁田子村 下横部 田村 横田村 卡槓

J町自、河北屬三中山

,其後分

1

ㄓㄓㄚㄚ

故又曰岩下町 今隔·綠川 南日中山岩下村北日,甲佐岩下町, 綠川

11

新撰事蹟通考卷之二

載 津守保,者多保事解 于前此鄉古屬 詑摩郡,見 于前

村镇 木山鄉

●健軍文書天福二年二月神領注進爲 津守保,阿蘇譲狀等

11

所不可以混

三村及

惟澄申狀正平三年載 矢部莊

十三

津莊

鄉

矢砥〇古宅部鄉也惠長

,領村七十五元代莊內友知小北,因而友知小北爲在八代郡,然此交入代莊四及

11

レトモハ

テ

砥用

11

入豐田莊 卽此也

甲佐鄉

延元二年二月載 甲鄉

中山鄉

シシテ

ンヌ

豐田莊

ニハル

’=

福莊

11

11

テ

11

ル

11

11

ニモ

ト

ニス

カ

⺼廳宜 守富, 承久三年 正月木原

其後制守富莊

宅部乃今矢部也

,領村二十一〇甲佐文書 建久六年二

十九○正平二年九月恵長推澄注進狀木山太郎左

道幸蓮本領肥後

甘木莊

八箇莊木山鄉地頭職事云々

其外今不分明,

,頜村二十三〇阿蘇文書建久十

實證客進狀有三守富莊 阿蘇家興國

隈莊

正平頃:守富莊事一文書有許多 年九月圓之沽券書誌.. 岳

牟田御莊 隈莊七所神杜拜殿鐘銘有交永五年二月岳牟田御莊 詫磨文

書貞和六年正月下文亦爲, 岳牟田莊 阿蘇文書興國三年六月綸旨 喂

牟田莊 惠耳惟澄正平三年申狀廷元以來所々載..隈牟田莊據」之視

豐

世之則始云 ·岳牟田莊中改隈牟田莊後省 牟田二字,爲隈莊,

¸頜村六〇日本靈異記爲, 八代郡豐服鄉, 延喜式爲 向

守山鄉

皆此地而古屬八代郡 此郡河江手永及八代郡部可合見

頜村八○甲佐文書建久六年 頜村十九○玉海元曆二年九月二

二月解文北限 守山莊界,

十五日條日伊豆國馬宮莊亂初之

頃不丿知 御領i寄 進當國走湯山 了北條進退有」恐被』進 其替,而八條

院御領肥後國豐田莊所以給」預也件所領家有:御沙汰, 云々惠耳惟證
申

狀延元二年三月討1. ,領村三十一〇惠耳惟澄申狀

.領村五十●甲佐文書承安三年正月木原顯實寄進狀有 砥用小

北兩鄉 建長文永比阿蘇文書載 砥用小北兩鄉,多有,之又正

平三年二月令旨爲 砥持鄉 小北今不」詳康永三年八月 少貳 賴尙書中

爲,用小北事而非

一部守三七

林村 小坂村陣村秋唯村 甘木莊頜色 小池村砥川

屬 木倉手永

以上十三村

摩郡

而矚 詑下牟田村烱‵井寺村櫛島村材 #北甘木村 ″

犬淵村上中間村高田村上鯰村六箇村下六箇村

文書建保四年四月建長八年十月下交其 餘載, 肥後 六箇莊小山村

有 數通 又惠耳惟澄水平三年申狀載 六箇莊,然則其比一莊 之治所

【領二十村,

1

又按萬治元年丿帳:豐内木倉鯰横田沼山津矢部

河江杉島砥用廻江中山丿十一手永卜y其内豐内

横田2下三寬文四年省」之下註㐅叉享 保十九年

ノ帳二六甲佐中島加テ十一手永トシ後二中

島ヲ廢シ其管村皆矢部手永二合入

按此郡甚廣冫故:分元上下下ヌ鯰以下/五手永

7上益城,云杉島以下/五手永7下益城ト云甲

佐文書建八六年丿立券三益城上郡堅志田村ト尹

リ然レ郡ヲ分ツコト其ルヤクシ

年十一月注進狀正平三年九月申狀及詫磨文書亦多載 味木莊

六鄉六莊 今制置„„鯰沼山津甲佐矢部木倉杉島河江砥

用廻江中山十手永

有

1

作¸味俱讀爲 阿麻 元亨釋書俊疠傅爲, 木縣 惠惟興國六

ニモ

$11

テ

九〇甘叉

領村三十

手永有 坂本村

鸚勐蛔朧檥醣畸髗陑 永尾村松合村大見村大口村] 麻子接加西阪本盆城麻部富神宅部入鄉」

領有丿町與, 高瓦町,一續而

坂本兮中山杉島

1

及 御 朝來名峰之賊,見風土記唔较越野鄉名和名抄 有 當

田村小曾部村 御頠村柏原村黼 御高良材

宮莊頜邑

有、町郡自」始屬11

ı 崇神天皇御世誅夷此郡

九月准,,,,熊府町,然受 郡之沙 不、更

以上六村.

馬場村 段伊牟

萬志岐

原村宇土町屬此村商家百餘戸寶曆七年

益城郡 和名抄

11

「四村古保里莊色

【山田小田等村,鄉村帳不」載之

目村松山村下松山村

以上十村北浦莊鎖色●此外,赤瀬

馬瀬村石瀬村段

附 松山, 以上十

村飯塚村

村布古開村松原村小松原村 松江部惠里

年之條

村善道寺村境

A汁五網引村新開村城塚村伊津野村鶴見古保里村 立岡村三日村佐野村上古村曾畑

「里莊治所

11

「濱᷾ 事詳編年孝微

サンニチ

中古古保チチカ

戸田浦村喃 長濱村

ナリ

町於宇土顯孝|太田

公事根元載 宇土長

頜三三十村,

松山會所在 松山村

也◎以上十一南浦莊頜色

網

浦之二手永」

【太田加保三百

1

島津1

¸阿蘇文書11

アトフ

「漸々開墾而終爲村落 今農戸五十餘

皇宮莊槨對南浦愧北浦有„四莊 今制置 松山郡

|

波多村大田尾村三

村

保里

海中之小島也周回五里二十町餘本荒蕪

十一年六月由狀中載地名

原箇神領一,故久安六年正月廳宣以下 越村宮Il鮒浦上村長崎村手場村里浦村郡浦村

11

莊治所

祺今發師 其後制古保里

,頷村十四〇惠耳惟澄正平

11

圖書編爲 昏陀

宮莊村 椿原村石橋村神山村 神原村 栗崎村打

1

宇土郡

郡自¸始屬„肥後,無„變革¸鄉名和名抄有„諫染櫻井林

和名抄無假名附

中古宮

NV

領二十八村i

會所在 郡浦村

郡浦

有數十村 鄉村帳】載

松野村關田村若宮村幸野村米野

村帳不、載、之

11

11

黑仁田等數村 鄉

有城神山、筑籠、岩熊、塚原、

莊頜邑

「網津村陣村上村七日市色 ●此外

七村南浦P

六

肥後文獻叢書第三卷

村鳚"田原村黑川村田萩原村

市原村坂下村土田村長田村小屋村波居原村岳湯村

以上小國鄉領邑 此外

村篠原村笠岩村以上三村 北浦 莊鎖大宅四鄉-無中村前越村村附”

載 郡浦之事 交書阿蘇家多有七中村前越村

,古

久安六年廳宣有 三角浦,"

細田村

「即此義久䀹i

乃網田也加保未 詳

塚村¸„肥後¸無„變革新撰事蹟通考卷之二

上中村下市村梯上下中村下積村二子石村吉田村

高森彨 簿 十二村

不會所在: 高森

下略而不､書

▫テ

會所

南鄉之領邑故以

11

後田村栃木村久木野村 下久木野村 中證 編者云小國力

附久木野, 自布

布田村小森村長野村下田村東下田村河

倉之下

錦野村鳥子村

岩坂村

11

阿蘇文書建仁三年三月大宮司惟次爲

村領 十三村

布田燴所在: 布田

鄉者古阿蘇鄉之内而爲:四分一,

小里、湯浦、倉原、竹原、是爲:西鄉 野中、赤丹、阿蘇品、井手、

小野田、是爲三北鄉一今豆札屬北坂梨,狩集方屬,尾籠, 赤丹、阿蘇

品屬,野中,據」之考」之則今之南

‷府十四里卡

チ

坂梨手野、豆札、尾籠、狩尾、狩 集方、是爲 東鄉 小倉、綾野、

カリダマラヒ

一村今屬 豐後國直入郡久住手永〇建武三年三月阿蘇社領帳南 北

チ

村阿蘇鄉領邑○波野以下十一

菅

倉村七野産山村田尻村山鹿村

二村附 産山 〇以上二十二

クラ

仁田水村 射雕 赤仁田村片俣村大利村小地野村篠

村附

セジ

村里俗付 此村 云南梨

水村

米村 波野村瀧書弘安十年十月下文有南坂梨北坂梨村村野中村宮地村
兹緻 四分一村 梨村

坂

野尻會所在

阿蘇岩坂鄉預所代.有.外牧村翔 烏山村志屋村上田村田中村手形野村
宮原村

三五

明里

滿願寺村馬場村中原村北里村下城村宇土村杖立村

仁村附"西里村城村湯田村黑淵村室原村 西村奧

泰之讓狀領地有: 長野中村下田瀨田 荒木上久木野下久木野大野柏

草部十村皆南鄉之內而今瀨田入: 合志郡 荒木在:上久木野之內,

11

十五村 鄉村帳,載」之〇正治二年十二月大宮司惟

村向津留村

二村附 野尻 〇此外有社倉小崎木江芹口馬場等三

矢津田村味鳥村黼喉草部村岩神村黼 草野尻村永野

此外有小倉高畑下山等三

十一村 鄉村帳不、載,之

二十八丁 理菅尾村名荷園村川口村小峰村假屋村

町,界,日向國 至

早猶村柏村花寺村樺村仁村 大野村

此村内有:周見原

11

ササナチ

村,領 十村

尾繪所在尾

色見,

載之O阿蘇文書嘉祿二年二月北條泰時狀中載, 色見:山為, 今山

屬下

11

カ

此外有谷合、津留、冬野、本市、中園、下色見等數村, 鄉村帳不

和吉田竹崎村白川村市下村高森村 喃 村山村色見村

シキミ

三三

手野村尾籠村酬手井手村 中原村 下原村翔附後,爲」郡也鄉名和名抄有,,,波良

11

和名抄有:日

1

11

之皇孫健磐龍命封 治 此地˝ 後祭„ 其靈爲 國神

ヨル

不、載之

クニッカミ

ゼラレテ ム

村 鄉村帳

人在何無」人耶故號,,,,其國 日 阿蘇 始 神武天皇

11

【外有 永草乙姫宇戸宮原成川綾野黑流等

ニケテ

リソ

11

村

附,山田,〇以上二十村阿蘇鄉頤 色 其

車歸村的石村狩尾村折万村内牧村随 小里村小

11

チナリトアソンデ

郡本與„肥後別國而 崇神天皇御世置, 國造, 以,速

ニシテ

紫風土記闕宗

11

阿蘇郡

チサト

和名抄阿曽筑

代頷:二十村,

11

屋蜈乎

女會所在 内牧町

【後停復 小國,爲 1手永

手永1

國始分爲 北里馬場二手永

メテ

文書貞和四年十二月下文有:千田莊重富名南加治尾,尾與®屋 字相

於二

11

小

布田 高森 菅尾野11

夙 南鄉

米野、爆屋、牟田11

千田莊領邑〇此外有 堂

月承久三年十一月下載.南鄉,

分田村 藤井村中富村川崎村 附中富 ○以上十五村 | 油狀梃岏南鄉

莊治所¯廣

◎惠耳惟澄

宮村野村 小柳村 分田村下

中古千田』

領村三十八

阿蘇

アンダ

日之一鄉也

米野村上廣村酬 *岩原村鄉原村郦 * 持松村千田村

_今阿蘇谷

中富會所

等村 鄉村帳不」載之

原村柿原村石尾村林楮原11

以上十八村臼間莊頜邑◎此外有中

村莊寺村高久野村安原村杉树* 坂上村東坂上村田| 知保鄉 又阿蘇郡有知保鄉 隣郡而鄉分 二而西屬 阿蘇 東屬, 臼杵

山口後阿蘇知保悉入:臼杵,阿蘇郡之地減今日,日向高千穗:即此也正平三

年九月惠惟澄申狀載 阿蘇郡鞍岡 鞍岡今 ¸郡中無 衣尻 有 野

臼杵郡有之、據之則其頃迄阿蘇郡所、管也

誤寫所 致乎

小國鄉

四鄉 其後制阿蘇鄉懷村四

十二

頒村四十二〇阿蘇文書建久六年正

、下原、正觀寺、小島等村 鄉村帳不､載｣之詫磨｜今制置„„內牧坂

之七瓶玉命,爲､之事 景行天皇十八年 六月到 阿蘇國

也其國郊原曠遠不」見人居, 天皇日是國有｣人乎時

有:二神謂„阿蘇津彥阿蘇津媛,忽化」人以遊詣曰吾二

園村湯浦村西湯浦村 瘍小池村竹原村藏原村西町

村役犬原村射附” 黑川村山崎村| 小倉村今町村

创小山田村小野田無原村 保 杵郡

謂‶阿蘇津彥,乃是也名 阿蘇 之義綠」之其後合 肥|梨梨町

新撰事蹟通考卷之二

本村

未

上四村附八年天正十五年條,故不敢 此

平原村清源寺村

腹赤村

ハラカ ¸腹赤村事載 編年考徵 景行天皇十

荒尾町簘„三十村

【六月所頜付有大

大野莊頜色

新劇腑的山田村中尾村前原村

以上二十八村

國會所今在„長須

村友田村古閑村開田村 * 築地村

11

託磨文書康曆元年

|村附

下村,

頭波下村濱田村溯 下村鍋村屐村中程村 三村附: 上

田貫村,

二村附

牖野口村木村事多載」之

11

村

木村小濱村↓ 永德寺村龜甲村

文書中村繁根

11

ヲシテ

市村秋丸村立願寺村岩崎村子的印子,和光隆

【藤原某寄進狀載 石貫河床,床又有作 德

坂下村河床村

11

二村臼間莊頷邑O廣福寺文書正平十九年

坂下會所

田、岩尻、大屋、東下津 等村.鄉村帳不J載之

○此二村千田莊頷邑○此外有三河部、請、箱谷、藤

野村 中富手永

田莊領色

村; 用木村

【萩原村姬井村

以上六村江

二村附米野,其米

晶造寺系圖貞和四年二月龍造寺家平爲..野原西鄉永地頭,地志

寄附之狀,又有天授二年大野別府岩崎·

村一分地頭岩崎式部省隆貞之寄進狀,

正司之直隷,五箇

町之一而萬舶輻輳之要津也向著 續年考徵應安元年條,甲佐文書建

武二年四月菊池武吉寄進狀有三大野別府中村,又清源寺繁根木福

寺山下村 高道村 滑石村 土器屋村對啊”

高道

有〃小沛三池交書正平六年小市 三池交書正平六年十 長田村宮尾村 沖須村下沖須村腹三折地村金山村樺村府

壽永二年條及南關記

關東村關外目村關下村駐村 赤坂

三村附

南關事尙詳 編年考徵

ナリ

上長田村久重村長町村や一里でたい間

有、町謂南關町| 界 筑後國北關

十村東鄉莊領邑

今村

長田

岩村上岩村

舢板楠村上板楠村 鮰 大田黑村上津原村平野村

附 岩村On-二下板

村中和仁村上村附 山十 町村 上十町村 中十町村*

「肥猪

野田村苧生田村吉地村東吉地村和仁村上和仁

月申狀載 肥後關城肥猪原

小原村相谷村

肥猪村二村附

有十

南關會所

「梅田小野屋村鄉村帳不让載之

井手!

11

二村附三平山村

以上皆野原莊領色◎此外有.赤崎向野

原萬田村喃 大島村小井手村中井手村下井手村

有.„野原西鄉同九名之内荒尾,

搢永名

宮内村 萬田村

荒尾村

トウマル

詫磨文書康暦元年六月譲状中

莊西鄉

11

略此西鄉爲菊池郡,誤矣小代文書貞和六年十一月下 交有: 野原

小代文書應永十四年五月

【付載 野原西鄉内倉名

藏滐村

ニモ

牛水村 一部村増永

11

11

「又長須事記 編年考微 景行天皇十八年 條,

村水島村長須

有J町聚落海濱民家一千餘戶多以、漁爲、業

「莊治所

菰屋村宮崎村永方村"含高濱

河登村野原村

中古野原

「北鄉領色

白木

立山村田村 地門

村原倉村

以上五村山

二俣村

二村附

「此,後因,,,寺名 稱」村山北名終廢

臼木村上臼木

西安寺村

始云山北村 中古山北鄉治署在于

村,領 三十四村,

11

田爈所在:伊倉北方

小田內田坂下荒尾南關中富六手永

年十二月下載 千田莊

所

千田莊”

有一鄉八莊,今制置

11

北領村十七O詫磨文書貞和四

之

1月玉名郡東鄉莊吉地村·双一書記 東網莊

事註 下江田村

久井原村吉地村古賀神社洪鐘銘 亨德二年十江田莊

¸領村 * 江田

11

頜肥後國玉名莊西鄉

711

鄉莊

,頜村三十三〇廣福寺文書正平十七年八

11

中院中納言狀中有…

1

名莊

鄉云者,頜 坂上坂下之二村,應仁二年死

書與國七年 閏七月

11

上

シテ

11

鑑壽永三年四月條有, 肥後臼間莊 詫磨文書觀應元年二月下文載,白間

11

11

野原莊文書多夂書 野原東鄉野原西鄉,亦有」之

伊倉莊

十三 * 保,保之事著 于前,又小代文書應安嘉慶比:載 伊倉

莊,者多焉又一書爲

頜村二十九○詫磨交書正和五年三月讓

伊倉莊憲鄉.亦有之 「狀爲,,大野別府內尾崎村 清源寺 文書菊

池武尙之客進狀爲 大野別府中村 其後至應永, ...頜村三十0小

野原莊

頃,小代交書皆爲 別府,別府之名義解,于前,

代文書憲治二

年小代重俊補,,野原莊地頭職,有:鎌倉之下文,其餘載頜村二

臼間莊

ト

ルモ

大野莊

11

ニルモ

ス

,頷村二十九〇清源寺文書宇佐公美之寄進狀爲 伊

肥後文獻叢書第三卷

島村 伊倉北方「食莊治署今又建會所於此町,自熊府,五

伊倉莊頷莊,又此地藤原秀鄉之末裔有、任..臼間莊司, 者- 而子孫襲
„„其職,因更

以„臼間莊司,命其後孫有臼間莊司善, ¸頷村十一〇 阿蘇交

玉月菊池武照寄 進狀有. 玉名郡東鄉莊內

福寺文書元中六

年二月菊池武照客進狀載,河床富尾,

田鄉中古之江田莊此也

村瞷 紅白石村日平村蟎浦

他尙詳著種著部取古配江原口11

古驛迹

江田村

富尾村

11

式

延喜此一村大野莊領邑O廣村東鄉

村米渡尾村高野村八米野村志口永村竈門村

以上十三

カマカド

書多載」之

原村 江栗村下津原村西下津原村醐燒米

廣福寺領交.

【玉名莊邑

前原村内田村 長小田村久井

田村上小田村

以上十一村

玉名

村下社家村附 迫間村青木村溝上村 月田村下小

村山北鄉領色

莊治署

玉名村

寄石貫村北石貫村 名

中古玉名

附石

安樂寺,以上八,

11

木葉村十二月宇都宮公景爲此所地頭職, 下交傳,佐田家,

村山口村㎝ 希安樂寺村生見村群村 津留村下村和村

稻佐

1作:虎齒,有」市自、府至.此四里二十四丁觀應元年,

111

11

內田會所

邑

里二十七丁

以上二十九村

千田河原村

牖 伊小野尻村 小島村 濱村晡 豁

田村向津留村

村横田村大園村北牟田村河島村寺

東北張村西

,

村

張 村

中北 此村聚落曰:唐人町,中古伊

横田村伊倉南方村櫻井村片諏訪村宮原村野部田村竹

崎村尾田村部田見村立花村青野村航 伊小 天 村

111 11

新撰事蹟通考卷之二

土懼棄所居 潜投„肥後州也 望加知,也望加山

鹿知字ナリ教直鎮西探題澁川教直也

+

マカ

11

居 肥前州阿也非知线有小城,總„治九州之兵馬

對馬島人宗大膳等言初教直助 大内, 及 小二復

源教直蜮 妩黼號

|或稱:九州都元師

九州總管

又海東諸國記曰九州節度使トアリ何比廢置ノ莊名ナルヤ不分明

山鹿郡和泉莊云々 相良寺記泉新莊内田村

邑賊津頬῀ 缾幹

時誅 此爲」界阿蘇宮神領所付載,玉名郡日置, 今此郡無日 置村,恐

即此村也交政二年穿, 當郡江田村鶯原三寶寺藩籬側,得,,,,紫銅小版,有

銘玉名郡人權擬少頜小初位下日置郡公今藏

シテ

大町

部

111 1

驛即此也尙雜著之部可:合見,

‟村之條 1

江田

八鄉其後制山北

ナラン

關村内有三大津山一古大水鄉大水 註于江田

邑亦無名稱, 町莊,今村名無. 大町,

大水舉:其一,今

11

二毛

チ

以上四鄉小 東鑑仁治二年載,,肥後大

延喜式肥後驛傳

11

11

寺,是以因有三玉名郡日置字,附註而備考訂,

爲太石津下 宅宗

タイシツ

タリ

日置

有

¸山鹿郡方保田之内有,日置一村,與„ 此郡千田莊藤井分田,

11

下郡,之類也O地誌略引ñ俗諺,日昔謂土車莊,嵯峨

天皇之時改,,玉名郡,其說怪談益世傳之謬說而已

鄉名 和 名 抄

シ

1

11

シモ

下 毛野省 毛字1大和國郡名 葛 城上下省城字,書 葛 上郡 葛

1

カツラキノ

シモツケ チ

カツラギノカミカツラギ

多萬伊奈,音便之假名也今又云 多萬奈許者誤也〇省」字例國名 上 毛野

ケル

カミツケ

11

【多萬岐奈 和名抄附

名定二字,之時省杵字 周玉名,也

ニタルハ

雖､省､字訓如」舊日:

11

時誅此モトノ

1編年考徽

邑賊津頬 鮑轻咬著"後以此邑,名､郡郡鄉等

ツツラヤ

郡自」古屬肥後,無„變革|始日玉杵名邑景行天皇

タマキ ナムラト

萬伊奈

玉名郡

和名抄多

11

鄉莊沿革下

新撰事蹟通考卷之二

此故唯山町

1

宗方村竹林寺村長坂

湯町

附湯

11

自亅古鄉之治署在

* 溫泉鄉中古山鹿莊皆治:于此.

山鹿

ス

¸會所在.湯町,領三十四村 古

宮崎対有三莊,今制置 山鹿中村二手永

古溫泉鄉之地.

與訓, 竟轉爲】登字乃古緒線鄉也

其後チノ

制山鹿.

利 テ

11

,領村二十九〇

乃中古尾與利莊是也

【隣此郡南 恐卽 此也

クハチコミ

緒與、樓山本郡有伊知坊村

...

「讀相同疑重復也皆此那無地名

小野津村神西

11

¸納網誤字乃朽網也有引來民訓

チクタミ

11

因郡名謂山鹿,是乃附會俗說不」可以信

池有夜開鄉 課而

夜關

手

テ

中之鹿冬日來三溶于此,見、煖、身知、有溫泉¸那無此地¡隣郡菊

,

テルチ ルルコチ

シテ

郡鄉等名定三二字,之時,溫泉鄉,訓如故稱由與地志略曰昔山

司

ヨミハモト

今湯町卽此也有三溫泉,故爲‟名和名抄假名唯爲,由因考始湯鄉而

ニテフメ

11

チ

11

而見筑後風土記全文鄉名和名抄有„來民钟著入

郡從」古屬„肥後 無 變革景行天皇世山鹿郡之名始

夜萬加

11

ハンシャ

池田村宮原村 阿佐古村 白木村小

肥後文獻叢書第三卷

古城野

木野本分村

「鄉治所

ハンジャク 以上二十五村北通鄉領邑O

楠村寺小野村虎口村斑蛇口村

小代重峰建武三年九月由狀

載,寺尾野、盤閻久、虎口穴河等,穴川半尺之枝村也。

此外有.„高田、蟹穴、羽根木大林等村,鄉村帳不｣載之

山鹿郡 和洺抄

同捻也訓,與留1伊智

¸頷村十八〇尾與利之與自然誤ı

【尾登國瀨村 靈仙村|枋山鹿莊頷色

二村附

按五條文書應仁二年十月菊池重朝之傾知/證書

11

帳不、、之

內、等村 鄉村

村皆瀨村矢谷村威村雌的名一太晅啈

¸六村附∪多久,以上十六村宮崎莊頷邑

チドシ

下內田,

2鐦 上長野村下長野村多久村椎持村星原村茂田

シヒモチ

簡今川了俊之狀等書, 唔平,

下內田村邊田目村長谷川村

上ニバス

田〇阿蘇文書菊池武光之書

1

內

津袋村莊村上內田村相良村

アヒラ ,附,久原 以上十

リョウゼ

附

田村下吉田村高橋村下高橋村石淵村樹 久原村

山鹿町湯町也

上吉

村

下御宇田村蒲生村翔御

山鹿新町隸此村,但日

ミウタ

村,玉名郡古日置鄉之治所

中村古閑村方保田村

上御宇田

方一作｣片此村之枝有,日置

ミウダ

11

11

11

十九村

中村町

會所今在山鹿新

村尾登利莊頜色

附,四町,以上十

寺村城屋敷村小群村平山村下宮村小坂村上

芋生村下芋生村岩野村三楠木村”*四町村柏木村

山鹿莊領邑

城村堂原村鵰 石村杉村寺島村津留村

保多田村坂田村西牧村椿井村麻生野村鍋田村熊入

以上十六村

六年四月敎書載」之

村南島村中町村志々岐村

小原村

本字志職小代文書貞和

ハシシキ

1110

新撰事蹟通考卷之一

懷琳中通埋村"北通槲树有三鄉,今制 置三

河原深川二手永

其後制

1

恐非」是也今姑試擧而備 博搜,耳

野水鳥夜間等間,皆輯 郡西

ハサマリ

、載之

是亦自訓讀相似 後竟轉

今在,蟹穴村, 鄉村帳不

11

カニアナ

シテ

シテ

或云辛家有., 加惠村, 乃辛家之轉誤也子養

11

柏村原村分 二村,乎

-名稱

柏村,疑後廢而爲、村

甘地稱

11

鄉今廢而爲」村在,,隈府東南,今書, 、郡東原

養上11

カヒカミアマ

誤和名抄關亦開字而誤寫所,致

水島鄉

子

地名,

辛家

ニテ

申モ

_今有 夜間村,而訓,也計,間開字之,

郡中今無シテ

„ 木野

島 和四年葉室親善

鄉名和名抄有 城野 略等日深川村有„菊花形之池, 故郡名爲 菊池,妄誕不經不丿足„信據,

國名郡名等風土記明』記名義,令泯滅而不」傳可以考無‧明證¸惜哉

鄉令廢而爲、村

-發而爲、村在喂

キ

1

11

11

チ

謂„„菊理媛,神名有」之故和名抄假名爲„„久々知地志略國志

11

字菊池

11

ククヒメト

天皇二年條

今云„岐久知,後頹 音便,也菊皆訓,久々,皇國之例也神代

トニレタル

11

郡自古屬肥後無„變革始日 鞠智

久久知

菊池郡

和名抄

以上十一村北鄉之領邑O此外有„,群村,上古閑、灰塚、積雪、

城村、堀田、猪目、佐野、三万田、等村植鄉村帳不」載」之

弘狀載 :夜闢

理

柏原

輪足,和名抄作 理¸蓋寫誤」之 村内有 n

五海村,古加伊、吳訶井清濁之違而字之轉化上甘

字也然此三村燐 木

村甲佐町村野村頓山针

長野入申狀載,,,,菊池藴方原合戰,

二九

道 稈方村

村龍德村

原村 木山村岡田村山崎村水次村袈裟尾村玉祥寺村道場村米

宗衛文書曆應元年十二月

朝與今川貞世,戰 于水島臺,乃此地也

瀨戶口村邊田村流川

古水島鄉卽此也〇天授二年五月菊池武

村

長町村荒牧村水島村

薦此一村南

村以上十四村

村染土村高島村加惠村西鄉村五海村黶 高野瀨村

深川村大琳寺村立石村北宮村村田村西寺村野間口

村,領四十村.

村姬井村岩本村伊萩村妙見村赤星村出田村廣瀨村

西迫間村市野瀨村山鄉館站

木柑子村以上十四村

以上二村北

通鄉頜魚

鄉頜色

四町分村原村 木庭村 今村 藤田村 下河原

村中通.

新古閑村大塚村西寺屬深川手永

宮園輟

以上

「而爲、間故至今書, 夜間,云也計也

三村附凱西寺村,其

廣瀨古村

角村夜間村

11

¸間 無 計訓開讀而日」計卽開字誤

村土豐水村登與津之轉語也

【即此也

片

地村輪足村

柿*亘理郷

ワタリ

トリヨウダ

ת

正観寺村

始日:隈部,以 菊池家府゛ 稱 隈府,其詳 著于辐年

考徵正平二十 ハサマ

東迫間村雪野村伊倉村生味村 平野村 大

二年之條,

ナルチ

ナルコト

【喂府町 此村 菊池家之府城跡而市戶百餘繁榮之地也

河原會所合在隈府町,

「領„三十三村.

久禮村下津久禮村柳水村弓削村石原村吉原村小山

大津村

*

落日大津

大津ﾁ

領三十七村

大津的所在三大津町

1

竹二

手永 1

十八

11

麒钤,小川山道鳥島口益鳥取縣六鄉其後制中鄉

尉二北鄉像树下鄉梯咐二有三三鄉,今制置 大津 云加宇志者泥„字音,誤者也

1

鄉名和名抄有:合志

シテ

11

故和名抄亦假名爲 加波志,令

弘生村内云三

二毛

11

11

1

四月條全著 編

續紀和銅六年五月詔諸國那鄉名著好字,依此

1 後改字合志,一

11

郡自」古屬„肥後-無„變革¸始日„皮石

書紀〇特統天皇十年

加波志

合志郡

和名抄

十今不」詳

何頃/莊名

ナラン

⺅少口

11

按山城國加茂皇大神宮神領帳日肥後國山本郡吉

有:後古閑、小畑、船底、仁王堂、梅木谷、大浦、寶田、

仁連塔、小道、前原、加茂等村,鄉村帳不､載之

村賀村 平島村 色 出村 大塚村山城村二田村葦原村

宮原村 草葉村 小野村 岩野村有水村石川村古閑村

附･吉松, 以上二十一

順 石 大井村今藤村吉松村平井村

村山本東莊領邑 此外

フタダ

シキデ

肥後文獻叢書第三卷

竹村灰塚村

町村 陣內村中島村森村吹田村大林村

附, 大林, 以上二十四村下鄉領邑 阿蘇文書元仁安 2

松莊神田一所今加茂村有, 皇太神鉈,

加茂村乃其神 田也

詔 換. 好字爲合志,也然 訓 如､本謂加波志

小合志 有 小

村靳津 引水村翻,大塔迫村入道水村上津

久米村富村村吉村

合志村吉村田地三町於詫磨顯秀,有下知

【阿蘇山文書交龜三年十一月富納中將信勢領

知内富納田地一段有寄,引進阿蘇宮,之狀4

富納村

ﾁ

狀ı1

住吉村

詫磨文書德治二年十月爲:蒙古合戰賞,賜

11

鄒+内島村小野崎村橋田村打越村林原村坂井村

二村中

殖生鄉即此也續紀 持統天皇十年有„皮石郡壬生諸石人,合志川

上生壬生之認乃諸石之所、居也川芥爲‟書瑣屑之俗書不,足以採

田島村南田島村駙;田高江村福本村永村平原村1

トシテ

郡山

池村須屋村鹿水村江良村弘生村鳥栖村上生村

上莊

竹迫上莊 1

二子村中林村後川邊村 平島村大

爲,一村,故云氵

三村附

莊本自: 竹迫分

油古閑村原口村野付村御頂村上莊村的道町屬,此村上

ハルクチ

頜 三十三村,

竹迫會所今在 福本村,

タカバ

中陣内、下陣内、等村,鄉村帳載之

○此外有大堀木、馬場、立野、片保、小足、

11

坂村高永村妻越村小原村高柳村湯船村平村dz鄘I岜

七村

城村眞木村平川村中窪田村杉水村河邊村上鮒

ジャウ

11

瀬田村

貞比鎌倉下交瀬田爲, 阿蘇南鄉内而作, 世田又勢多1

シテ

三村附

御領村中代村川久保村津留村 附ı 町村下町村苦

十三村山本西莊色

船島村伊智坊村】髂半山郡慈恩寺

二村附„下野,〇以上二,

チ

正院山中村阶下野村叡北谷村頓

浦村

夜

コトヲ知ベシ

推」之乃今味取 也然則古之三重鄉亦卽此也尙雜著部三重驛之條可

味取町子通

ルチ

11

清水村下大清水村 鈴麥村平原村内村

其聚落謂1

中古此郡、神倉莊六箇莊安富本莊書ニモ大箇荘内桑原

村邊田野取新町, 和名抄載𪆐田郡砧木鄉

屬ス然レバ

1 タリミッ チキノサコキトメ

津守鄉ノ治府鯰/内六箇、中古一莊ノ治署 姚

ニス

11

正院 ·在 植木町,

領四十四村

二莊 今之制置,正院一手永

叉右文書等=據考è:益城郡今1鯰沼山津

ヘドモ今分明ナラズ故=略ス

二力

其他11

合志那有 上生村·訓宇和村々名々ヲ載スルモノ多シ

佐野

11

ト

安元年之條,今郡中無„地名,尙註

今無,此地名ı殖生

高原 鳥田山本年

11

郡土1

末名寺名

ノル 寺

伊口傳助所領江津寺

三重莊於其子信チ

チ

ミヤウ

遏臨終 讓 肥 後

北方領家職,皆是郡稱/莊也

11

狀應永十四年所領附三重

鄕名和名抄有三ト

年十月少貳賴尙狀載山本莊

トリノス

11

按詫磨文書貞應三年下知狀正和五年保二年讓| 河龐乙王九橋宗賴,有...沽券狀11

,氏綱書,山本西莊下司 小代交書貞和三

1

其間等村,共鄕村帳不」,之

名山本,

1)

カ

11

等村,田迎有. 西笛田四才町、

三代實錄〇東鑼11

文治元年賜山本莊於大江廣元,詫磨文書

建久十年三月讓,與宗形氏綱私領詫万西鄕內 田 畠 等 於

台記別記藤原宗

等神藏莊內木部鳥栖陣村土

呂木得丸名得永名外通,即此也全文載,干編年考徽保

名所島三村二當タル

天正十六年正 国寺恵理が亂妨浪藉ヲ禁スル制札ノ山北

西安寺ニアリ其比マテハ寺名村アリシト見二今八郡中及

二毛寺、寺名

村名ナン

夫˙隣 此郡¸殖宇

惠也上殖國音相通轉謬而爲上生,即此也

隣郡合志有..佐野村,附田村名無:本井,和名抄/

本井

老鄉,其後

島村,與, 此郡,近恐此村也 假名爲„毛止夜萬,如何

制東嶺村上西懶附二有,手永丿地方、古多/此郡/内也鯰/内上島沼

山津津守和名抄出タル磨郡上島鄉

六箇莊内小山村六筒莊内安永

阿蘇鐙田村小吉松村滴水村荻迫村木留村圓臺寺村那智

五村附„滴水ı O滴水之屬有植木, 元綠元年建:市

肆,置„驛傳,名氵 味吃 酾 平野村 西山村 舞尾村鞍掛村一木村田原村大

村

ニテ詫磨=/三莊:後

六箇盆城入安富分テ本莊安富莊トナシタ

ルナリ尚益城郡館沼山津村村合考テ其詳ナル

官路,令按味取恐三重之轉化延喜式有.„肥後三重驛,以道路里程¸

本郡葛毛止

山本郡和名抄郡始合志郡之地貞觀元年五月三合志之西,置,一郡,

【女王寺莊」之

長溝村

本村大江村渡鹿村八王寺村

福磨文書延文四年下

本山村九品寺村

本莊村

此村屬有寶町迎町、寬永二十年除

11

本莊

村,中古安富 本莊即此也

チ

會所在 本莊村.領二十三

俱地名無、之

神倉

便,誤,加美久,乎詫磨文書自. 延慶正和頃,載„„安富神倉之二莊

者多焉今二莊

有三莊,今制置„„本莊田迎二手永

11

モモト

11

11

三宅,‟八鄕,其後制本莊

呂木村等於楠宗賴,書,

合類節用集下井在„詫

酒井波良下井

氏綱有‟沽„讓淡島鄕内土々.

11

シモツイ

【久十年三月山本南莊下司職宗形

陣下陣唐川等十三村,

漆島

津守

_ 羯今屬„„益城郡i領 平田上p 今本莊村内有„淡島|詫磨文書建 | 田迎

11

11

賴尙之奉文誌 六箇莊内上島,

ニハス

カ

.

與„„上島義廣,就 上島鄉地頭擔領職爭論事,有.. 凱西探顚北條英

時下知狀, 又康永三年三月少

1

11

【令廢而爲、村屬 益城郡隈莊i阿蘇文書嘉曆元年十一月上島惟幸

上島

11

th

城郡今之沼山津、鯰等地方也

小色無 桑原 惠篋惟澄正平二年九月注進狀子守八郎惟一六筒莊内桑

原鄉地頭職云々又詫磨文書建武五年三月 太宰少甙頼尙 之狀中桑原
安

永小山云々據」之則桑原疑

肥後文獻叢書第三卷

古本莊領邑°

有„„數牒,益城郡

鹿掃瀨杉村神合恒以上七

郡,今三鄉俱郡中無地名

,領村十五〇詫磨文書應永十四年

安

領知所付神藏莊内本莊號, 安富,

領村十二〇太田康有日記建治三年六月條載,肥後安富莊,即此

富

也全文組年考徵誌」之又詫磨文書康永三年安富莊號„詫磨本莊

クラ

5頷村+1〇三宅屯倉俱訓 美也計, 神倉亦本美也計之訓後依字

今入美夜宜交其外古書又健軍秕華 表 皆作 健

有`湖日:江

產„鱸鮒鯉ˋ 及生「那屬¸¸„府町,爲..市正司之直隸,

不

【蘆 雪潺邊水合,空蓬瀛何必玉壺中一

【附田井島,以上四村安富莊領邑 此外

本莊有:中長溝下長溝前牟田西村平野

斷風同„岸下松.

ゾシモノ

條古路人間外酸,上牟田村‵‵重臺島村

下牟田村

ラン

1

今書 田井島,大知禪師偈頌題 臺島

スル

11

二年讓狀等重富,爲神倉莊今屬,

四村神 重富村

也所島村以上四村神

ﾁ

多其下流尾合中瀨川..綠川 登壇必究日本圖肥後載 江津 卽此

詫磨文書眞應三年五月下知狀交保

以上ﾆｵﾁｱﾋ

11

、苔稱:水前寺苔,其源出纟 成趣園清泉,其餘水脈甚

和,其所、據未、詳

其故未 詳

「津,村名因,之

,軍訓美夜ı 中心

江津村

神水村

11

夕 附„健軍,神讀爲:久

軍軍,軍訓 今書 竹宮, 阿蘇文書治承四年以降口

テ

倉莊,. 本莊

1

健軍村

領知所付國分屬„„神

,

11

磨文書應永十四年七月

中間,

間村八反田村 田迎村國分村

以上七村本莊領邑 詫

鳥栖所々出鳥栖今不詳.

笛田村西牟田村||蕗出中

木部村

¸詫磨文書承元以來大部

在

會所在:旧迎村.

个村之計可合見

「詫書建保承久以來書, 六筒莊内小山鄉六箇莊内小山村,

山村

キヌル

【阿蘇文書文龜三年十一月菊池家狀中有小山砥島長峰上島

11

11

春武,者多

今村南部村下南部村 長嶺村戸島村小

頃 載,與安

邑O詫磨文書自:正和嘉曆

↑世安村春竹村別所村

田村

、屬 春竹,以上村安富莊領

牓示崎村植樹高江村近見村 十禪師村平

以上八村中ハウジ

六

邑●此外有三富尾、

中島村山下村屬中今新開村方近村以上八村河尻莊領

鄉雒邑

小島村妻之地有小市

柏川了-海楼大友村上代村下代村藥師

町村町村

拟上十时村駐跏

爲,,國中五筒町之一

1

尾崎

村柹原村.

上作活

京町村池田村 龔凉德王村西原

京町村池田村囑凉岩立村活龜村

今

池田三十三村

池田會所在池田村,

數村,不載,,鄉村帳,

村 此外有 麻生田、萬石、長峰、馬出、上野、中尾、田上、古

市、坂下、豆/尾、田畑、柚木、北迫、亦水、古閑、莊村、太郎道、龍福

寺、五町、釜尾、等

峘4岩戸村河内村鹽屋村 〇以上嶽村面木村 平山村 近津村

村

村‟対

鹿子木村村莊鬫萬樂寺村河東村東門寺村大多尾村

出羽村野出村

以上 七村鹿悠梦 オモノキ

ヒガシ

慶長十六年入.„飽田郡,又云絲山傍近有三小絲山、原口、大岛井、立

前原、尾當、井上、津留、八村,‟載郷村帳,里俗是日絲 山八村

11

楠原村山村

モト

馬下村梶尾村

詫磨文書建武二年九月,詫磨別當宗直、爲三

マケ

田郡大浦代地頭職」有:雜訴襻斷所牒 大浦今

在. 西梶尾村之

以上十九村立田鄕之屬村〇野史

內,皆代不詳

「錦山楠原楠古閑三村本山本郡內

子木 莊頷船津村 白濱九村活

龜莊頷村椎田村權藤村五町新開村土河原村拾三村正保

村大保村妙實村白石村上白石村濱口村牟田口村

以上十九村河尻莊頷色◎此外有.„中椎田南

「椎田西正保南正保數岩立村活龜村 G三村屬三井芹村中

井芹村中尾村 灞 汫 牧崎村 宮內村

島崎村活龜莊 頷色

以上十二村 池上村谷尾崎村谷村

兩村谷村 屦？高橋

坪井川之下流有町

流有町 松尾村中松尾村下松尾

半田村鮰田今村砂原村孫代村迎五古 村囑奧古閑村西新開村內田新開村上內田村

二五

郡從 _古屬肥後,無„變革,鄉名和名抄有„ 桑原始

郡中

方丈村平木村走潟村西走潟村南走潟村以上倶河

名抄

詫磨郡和

ハシリカタ

'鶉森村二十町村二町村五町村 八町村惟重村

村

牟田

野田村中牟田村今村 小岩瀬村海氏村錢塘村道

,屬中

准異邦錢塘陂

故事,爲"名云

後1

大慈寺,住」之弘安中散, 錢財訊 集、民築陂塘氵 爲田

1

11

錢塘

·所在.道古閑村,頷二十二村〇相傳寒自宋國,歸朝之

會

村, 鄉村帳不、載之

澁江村

田鄉頷邑

島村島新村 烏 荒尾村 刈草村 今村池畑

屬島

十一村飽

跟進 古町村八島村蓮臺寺村新土河原村起 以上

卽此也

【本木町,屬此村 詫磨書 建武五年九月氵 府中

11 蓮 臺

内宮寺, 1

崎宮寺村

此村. 古國府之跡】群 ·編年考徵,村東有〝町日

横手村戶坂村春日村 久末村 田崎村 阿彌陀寺村

横手機手村,頷三十村

會所令在三田崎村,始在

不頣載„„鄉村帳ı

長道、北岛、數村,

之讓狀中鹿子木西莊下村地頭職云々叉詫

木東莊南山室,山室今屬 立田鄉】

制大窪村莊

鹿子木立田鄉

御

11

應永十四年七月所領付載 鹿子 我

,頜村七〇三池交書元亨四年二月三池員致

徵天平十一年之條, 【養驛亦乃此也尙著,雜著,

領村

スケベキミ

室園村龜井村鄘室高平村津浦村打越村山室村上

所事,尙詳于編年考 I 今在熊府東,入„„府中,古蠶

十二鄉,其後

三年八月有„„飽田町頜建部君貞雄 恐此 地人也

ナリ

也小代交書建武此載, 市 田口關

壺又作 坪井之屬有建部村,三代實錄 貞觀

「下立田,

村 壺井村

二村附 ミツボ

11

今屬:隣郡山本 釜尾子村 ¸府南口有,市田橋,即市田郷遺迹

11

上立田村郷之治邪弓削村下立田村陣内村宇留毛

屬有:河内村,可此

名村,不､可｣考,

栗北天田水門

中古立田.

村,頷三三十五村

クリキダ

¸俱今郡中無此, 【金峰山之西 海邊 今五町

11

【相通即 此 也 然其南有蠶養郷 甚近恐 非也

會所今在 山 室

ダシクハナリ スチゴナラントドモ

11

之制,下皆效｣之

今郡中無 加幡,或云今府立田口有 木幡神社 木加

手永 也

<

11

¸諸郡略、之謂. 今

誌,,,宮内鄉,又此地詫磨文書交和二年二月下文肥後國藤崎莊有之

トモ

11

11

分,,郡於附其下,其官署曰:會所,其所」管名謂,

11

テ

ス

チ

今之宮

11

元年之條

郡自」古屬,,肥後,無,,變革, 鄉名和名抄有宮前

此郡置 四人治 千五町池田横手錢塘四村,

爲,,,安岐多 1

國,鄉莊因 故制 寛永十年革 大莊屋|爲總莊屋

亀田郡

アキタ

和名抄假名附

11

部

有二鄉三莊加藤家領闔

乃因,先代之遺制,用"鄉莊, 今尙然矣然至 地理管轄|之證書,河尻在綠河下流津口┳市戶一千餘諸國商船之大湊也 今除,郡

田賦等事, 悉爲 手永之支配, 其委曲尙下著 郡々之|屬,官府市局之直隸而爲五次町之,

四十九〇阿蘇文書永和二年今川了俊奉 足利義滿之命,有河尻莊附

11

チテ

レド

村邑稱,某手永 同十一年奉 欽命 上鄉村帳 其時

11

二十三

二十一

寛永十年河尻莊

,鄉長,是謂‶總莊屋,其所„„宰司

八月下知狀鹿子木東西莊彨該領一村

ﾁ

11

總莊屋ト改ムト何日元十可疑

東莊五郎九名地頭詫磨別當某,田島屋敷相論之事-又同文 書明 德元年

組ﾄ云寛永九年 御入國後組ヲ手永大莊屋ヲ

磨文書載 元德二年二月西花門院御領肥後鹿子木東西莊雜掌源盛與氵

11

肥後文獻叢書第三卷

先君新置大覺寺親王家之御云々

1.尙著„干編年考微安貞元年條,

內, 承平中宮前鄉建Ģ藤崎宮,自｣是宮前之名轉而爲,宮內,故藤崎 宮 記

四¸屬„加幡 小垣 私部

川內

有下田,

下田 ｢市田

日 植木町 1

鶴羽田村飛田村新撰事蹟通考巻之一

建武比莊トナリシ後ナレドモ昔ノ謂慣

イヒナラハン

編附ス府ノ置廢何年ナル歟基跡モ分明ナラズ

其人悉

地ナト諸文書出

崎ハトリック中村築後府廢テ莊トナリ其屬村然レハ國府ニモ其屬村アリト見二大

按守護地頭等編年考徵文治元年ノ條二具二

著」之郡稱」莊者東鑑二山本莊八代莊トアル是

也郡内有鄕莊飽田郡ニ範田鄕立田鄕河尻莊

等アルノ類ナリ或有某莊内稱某鄕」者と阿蘇

文書:六箇莊内桑原鄕又六个莊内木山鄕詫磨文

書六箇莊之内小山鄕磨西鄕神倉莊ナトアル

是也更」名今何々寺村ト云モノ多シ其村有」

之寺院ァ以村名トシ古名終二廢スルノ類其餘字

ヲ改メ分潰等校訂及所其郡々ノ下ニス

小代文書及詫磨文書:元弘建武!比玉名郡大野

莊,大野別府ノ内何村ナドアル多未ダ其來由ヲ

詳ニセズ長瀬眞幸云肥後、國廣シテ地海崖=接

ス高瀬伊倉等、邊僻樞要ノ所一國ノ大湊ナリ古

唐船舶ス故二成署大野置テ國府不

及ァ補と異賊海寇/備禦トス是ヲ別府ト名ク

其府直隷テ用途/雜費資ル村々ヲ大野別府

ノ内某村ト云院磨友書建武五年攘狀中二府中ノ内宮寺

造非違戸或

逋逃則責五保」コレニヨルニ保今ノ五人組

テ是ヨリ起タル名ナリ今天草郡ニテ鄉ァ志岐組

本渡組等云が如シ

作國内糜然戰伐殆無虚歳大必併」小強必兼」弱自」

滋 檳亂 境界無極也及に加藤

是而郡鄉之古制分割

清正爲肥後全國主」定„郡境」因」舊建„鄉莊制 ˌ 云

按先代ノ水帳租税帳等7閲=何郡何村トバカ

有テ郷莊不載但八代郡植柳村慶長十二年

ノ見圖帳同郡西高下村慶長十四年帳アリ入

代郡高田郷植柳村高田郷西高下村トアリ又同郡

萩原村古帳アリ其内今ノ御代手永ト云御

11111

先代ニ郷ト唱或莊トモ云ショシナリト見ユ

先代建郷莊之制」ト云今據」之井田衍義二昔

シテ

女ぐ

ルニ

トナヘ

シテ

中世以降舊族世家之士各割據其領地」尋而兵亂屢

オコリ

テフルキニ

マス(

ズ

ンド

トシテ

テ

家相保長其一人以禁約

郡鄉保トアリ令日凡戶主 家長」爲之而五

トトキハ藷保清源寺文書二玉名/伊倉莊ヲ

伊倉保ト書ス郎鄉莊!義ニテ神皇正統記=國

テ文書等モ大野別府内何村ト書シナルベシ

叉阿蘇文書=盆城ノ津守鄉津守保書

資"豪族所々二起テ終諍亂

基端トナルコト舊記二多ヶ見ユ 後三條御

宇延久元年新立莊園停止!宜下アリト云ドモ

白河鳥羽ノ御時ヨリ新立地彌盛二後々ノ

人主停廢ノ事詔アリナガラ讓位後ニ至テ

カヒエカネア

莊園ト云此類後年漸々ト廣クナリ莊園多ク持チ

之荘園園説文所以樹 果

終二其名ヲカリ千百ノ町段アリト云トモ猶是っ

11

ス然ル後世至其制次第二弛叉後宮湯浴

料ナドモ外家二沽譲り成田子孫寺院

ススルノ類アリ湯浴料外家二受テ湯浴料ト

稱シ難又寺院ニテ功田

ザルユヱ是等ヲ

ユルミ

其所,正税ヲ受ルマデニテ地皆國司ノ吏務ナ

シ凡位田職田其身退職薨卒スレバ返還收公

ネング

世三中功傳三世下功傳子

田云

皆コレ官符賜リ

今日大功世々」上功傳三三

11

別勅=賜ヲ賜田ト云充 後宮湯器料皇子賞有功」功

肥後文獻書第三巻

名テ私料ト云コレ官ヨリ賜フ田ニアラザル故ナ

リ是ョ莊園ト名ヶ莊韻會田舎也田舍之宅

可桑謂三富有者近隣莊園ヲ買得兼併ル故二富者

富貧者一增々非ズ鄕ニモアラズ混空二買得ル故境界ノ定リモ

ナク其領内ニテ國律ニモ拘ズ 横行據有

恣

ス是ヲルヲ名假源頼朝莊園地頭置テ其

驕暴7制 六十餘國掌握ス今郡鄕ノ間ニ某莊

ト稱スル所アル昔ノ莊園ノ遺風ニティットナ

ク在名ニナリタルナリ百錬抄=寛喜二年九月十

二日庚子禁諸國新置」莊」云々 據」之トキハ鎌倉

將軍ノ時モ以後新規ニ莊ヲ置コトヲ禁ズ

文治元年源頼朝國衙補守護、莊園置地頭以來郡鄕

之制益廢矣我國郡有三 者」郡内有鄕莊或

有稱某莊内某鄕者も不二一定鄕莊村名或更」名改

成分或潰古今不同亦多焉今悉不可考定也

ハニカ

ホリニ

ヨル

11

11

カリ

11

ヒダスラ

カハラ

付テ莊園ヲ離ス加旃新立企ル世トナル如」

ナサ シカノミナラズ

二田地ヲル故二口停廢事ヲ云トモ何彼

是莊園常ニナリ年々盛二二八國守知所百

ガートナル是ヨリ國守モ任ニ赴コトナク眼代》

シテ其部ヲ治シムルニ至ル是故二莊園郡ニモ

院御領ト稱シ定レル御封ノ外二田園ァ貯ラシ崩

班ノ後遺詔ヲ以テ男女ノ親王或奸臣寵女等

分賜ル是ヲ院御分云叉執政大臣兎角

1111

新撰事蹟通考卷之一

11 1

重シ因テ賜ヲ職田町左右大臣三十町之知

以上職 日職田太政大臣四十

11

按:肥後國/事、風土記泯夕L*知è卜ヨ得

宀

令 一归位田价…品仄汁掛上媪六計劃大納言

正一位八十町從一位七十四町之類也!

口宣,改、之

神皇正統記新野問答:詳其略日 皇朝古云

起ニテ

知行所ナドノ

【地故曰采地,也

1

11

11

采官也因,官食」

テ

緊器

ム

百錬抄日延久元年二月二十三日庚申可以停ņ止寛德

ヤシロ

出雲風土記日大原郡斐伊鄉屬 郡家 樋速日子 命

ヤヒ

チヒニ

何世,

司

ㄉㄚㄉㄥ

其郡々,其餘古之鄉名無載籍 建置廢止復未」詳」在

タコセルコトチ

今廢而有三不」可」考者 或有-混亂他郡 者-下註 于 此國至 先代,有
三此遺制,

シテ

行スル

公

トモニ

此國和名類聚抄拾芥抄等所」出鄉有ņ 九十九, 其鄉名後世郡鄉外有
,,,,,莊園,延久元年 勅而停」之然逐不」

11

莊沿革上

名二字二改シコト神

三年也此事延 喜式二出èト云ト干年月日不載

續紀八叉洩」之蓋闕文也始 好字ヨ著日ト詔7

リシ紀和銅六年トス式必嘉名トア

ル是也火ヲ肥二改メ皮石ヲ合志二更ルノ類ナ

然レバ其後神龜三年マデニ諸國追々改シト見

エタリ延喜ノ式二幷用三二字」必取三嘉名トアル

モ式ヨリノ定リニテハナク以前ヨリノ究式二

載タルモノナリ

鄉長一人 1 五十戸卽五十家也

凡戸以三五十戸｜爲x里毎ノ里置i

11

元年ナリ一字三字等日分

チ

著郡々條

ラタム

續紀及分義解日郡有三三等,四十里以下爲"大郡,

三十里以下四里以上爲 中郡 三里以下爲 小郡,

大寶二年制„„新分,改」之爲„„五等, 二十里以下十

六里以上爲三大郡, 十二里以上爲 上郡, 八里以

上爲:中郡,四里以上爲下郡二里以上爲,小郡

坐 此處,故云」樋神龜三年改三字斐伊 叉日屋代鄉

始日,社神龜三年改,字屋代 又日右件鄉名者依靈

龜元年式,改」里爲」鄉其鄉名者被„神龜三年民部省

ベカラス出雲風土記=據二里ヲ鄉二啖シ霊龜

二年以後新立莊園 縱雖¸¸彼年以往,立券不」明蠹害

者同停止之由宣下按莊園訊今ノ采地

等 位田職田等ノ制アリ五位以上位階二依テ田地ヲ

:火前國卜見工 安閑天皇 紀二火國

宣化天皇紀二筑紫肥豐三國卜書 敏達天皇ノ

紀二火葦北トシテ一定ナラズ 推古天皇十七

年=至テ始テ肥後下記ス續紀和銅六年五月詔畿

内七道諸岡郡鄉名著好字、延喜民部式諸國部

内郡里等/名幷用二字」必取 嘉名此詔二因

好字=換テ肥トシ前後二分テニ字トスト云ベケ

レドモ推古天皇御世既肥後卜見工 持統

天皇ノ紀=肥後國皮石郡トアルトキ其以前

ハヤ改シャ紀中紛トシテ究カタク我國風

年代不詳諸史考所ナシ書記!

ラズ

載之國造編年老徵 崇神天皇條二著」之故略二千此

其

ス

ツイテ

按=分」之置前後國」未ダ何ノ世=在コトヲ詳

四郡始者別國而各置國造後隸肥後ｌ爲｣郡也

ノミヤツコチ

コシテ

ツイテ

火後改肥字分前後爲三二國」又阿蘇葦北球磨天草

x

11

考ヲ俟ノミ近世龍燈漁火ノ

論アリ是精ク見深ク改ザルノ妄説ナリ

不知火ト枕詞!白麗ト今龍

三物各異ナ

肥後交代書第三巻

ル乎尚識者ノ博類聚國史延暦十七年詔昔難波朝廷

置 ニセズ字ァ更阿蘇等四國肥後屬郡トナル

阿蘇等ノ四國各國造『置コト編年考徵及其郡々ノ部中二

神功 皇后

紀又按古保里古名ニ非ズ本韓語ヨリ出今朝鮮

語=郡縣ァ斥テ古保里ト云書紀 繼體天皇紀

二韓國ノ地名二熊備已富里又背評アリ許其國

方言ニシテ郡ヲ云ナリ故二許富利 皇朝

郡爲十四郡以至于今無分割併省」其詳

11

ルマデ

ナルコト

肥後之郡制舊十三郡貞觀元年分 合志 郡, 而置 山本

赤效之郡二評字ァ用所アリ續紀衣語氷高

評等尹元是也衣評、薩摩國頴娃郡氷高評、紀伊

國日高郡ナリ

ナラ

11

キカ

ユヒコホリ

ホリ

ホリ

按書紀孝徳天皇以前 景行天皇ノ紀=尾張國

年魚市郡 雄略天皇紀二近江國栗太郡等ヲ載

又 孝徳天皇ノ後縣ヲ書ルモ多アリテ縣郡交用

書紀郡,置年月明ナシ故二紀中一定ナ

大神宮儀式帳日難波朝廷天下立,評

コホリチ

11

天皇

千國自是始也

諸郡

ニシ

始11

郡者古之縣也至孝徳天皇世」改」縣日」郡而隷之

ス チ

コホリハ

土記及古書傳ザレバ考知ルコトヲ得ベカラズ好

古ノ士誰ヵ慨嘆セザランヤ

新撰事蹟過考巻之一

考本居宣長が古事記傳ニモナホシラヌヒノ説ニ

ノ夜見 古今節候ノナルベシ加茂真淵が冠辭

アラハ

シラ

ノ筑紫ト云枕詞ー此縁ナリト云リ井澤長

秀が地志略 ニモ 天皇ノ時事ヲ引テ彼火の不

知火ト云書紀二五月トアレドモ今七月晦日

ת

天草海濱山々其夜見者群ヲナス

里俗相傳此龍

リニ

アカツキ

天下ノ一奇觀タリ厥明潮ノコロヨリ出旦

從テ消沒ス是ヲ世=龍燈ト云八代宇土葦

現出ス延袤十里餘其様一帶萬點連珠ノ如!

アケ

ナガレ

又按二八代郡ノ海面=怪火アリ毎歳八朔ノ暁

火村ナリ火保ト訓火火出見尊等ノ如シ後火ノ

字ァ忌テ本村トス本モ赤穂トヨム豐モ赤穂/轉

化ナリ然レドモ火邑ノ火ヨリ出タル肥國ニテ火

邑後=肥伊鄕トナリタルニテ保ノ義ナキコトヲ

知ルベシ

ヨムホ

デミノミコ

+

燈海

リ哲ク鏡村ノ堤上徘徊シ然トシテ來テ悟眞寺前ノ松掛

リモ亦時トシテ然ルコトアリ是ヲ龍燈松ト云悟眞寺鐘名

供

事八編年考體明府八年ノ條著)其火何ノ頃ョリ出

シヤ古書=見ザレバ審ナラズ然ル二此火不知

火ト名ヅケ 景行天皇ノ時ヨリノ火トシシラ

所ム齎棉種」試令下諸國上植」之出こ類聚國史歌書不知火ト正書タルモノナク火ニッキ

テノ哥ッモ見所ナシテオモフ 天皇ノ時!

一九

紫國波安多麻毛流於佐倍乃晢等聞食 其他

シノク

トキコシメス

マモルチサ

宿禰家持長歌:天皇乃等保能朝廷等

廷等之良奴日筑

トシラ ヒノツク

スメラキノト

保乃朝廷等斯良農比筑紫國爾泣子那

農比筑紫國爾泣子那須衛又大伴

ミカド トシラ ヒノツクシノクニュ ナクコ

是 葉集筑前守山上臣憶良挽歌二大王能等

オホキミノ

紫」序語トナリタル歟さ

日筑紫トハ是ヨリ出」 知孰

綿ノ多ク白キヨリ出タル白縫ニテニ欲」謂三筑

成日古事記=筑紫國謂白日別白

ハ今ノニアライ棉ハ延暦十八年七月天竺ノ人以

」是始也

二見

11 X

庫」云々筑前國古い特綿多ク產ズル事舊史所々

トリワケ

白縫筑紫乃綿者身著而未者伎溯杼暖所見續紀

神護景雲三年三月始每年太宰綿二十萬屯輸 京

ヒノツクシノワタハ ミニッケイマ

・アタカニ ミュ

濫觴ニ取疑ベシ萬葉集沙彌滿誓詠綿歌

カ

時火モ主シラヌ火ナレバタ 不知火トイハバ

可ナリ是ァ今ノ龍燈故事トシ又筑紫/枕

シ

定ム然レドモ天皇時火海上火ニ非ズ御

船ヨリ岸ノ方二見エシ邑邊/火ニテ白髪山ノ火

ナドト同怪火ナルベシ紀文歴然タリ 天皇!

ノノノ字添タルモノナリ肥前國基肄郡備中國都宇郡

出雲國斐伊鄉等基郡津郡嬰鄉ナルヲ是皆韻ノ音ノ字添テニ

ノ音ノ字ァ添テニ字トナセル多シ

ヘバ紀

下夕一番ノ名の二字二書二足ザルが故其

于

ヒトコエ

鄉名等皆二字ァ用必嘉名ヲ取ベキ定ナルニ

此 事

ヒス

名ナシ火流日奈久讀近ケレ今日奈久浦ナル

カ 火邑、和名抄=八代郡肥伊鄉アリ凡テ國

ヒナカルヒナ・ク

又按=葦北小島編年考徵二著ス火流浦葦北郡

ベキカ乃風土記ノ同ジ事ヲ云ルニテ可

知ナリ

ノ交知に非人火」故名其國日火國

チイプコーチ

コニシリアラズヒトノヒニコレケテ

倶全交載于編

鹿文賜火國造」 年考徽可併見

ゴト見タレバ書紀

ェ

按=書紀=名其國日(火國之ニョレ此時始

テ名ッケラレシ體ナリ然レドモ 崇神ノ御宇

二既ニ名ッケラレシコト前二見エ叉舊事紀

嘲淀火國造書紀ニモ亦 景行十二年二以市

п

之火也然不得主知非人火故名其國日

火國

ノク

マシカドモ シナレソノクニチヒ邑 也國人對 日 是八代縣豊 村 亦尋其火是誰

ムラソト クニヒトコダマチスコハ

ノクニトヨノムラトマタカノ ヒハタカヒゾ・

火往之 卽得因著､岸天皇問其火 光 處,曰何謂

ヒチユキシカハヤガテキシ ニ トヒ玉フカノヒノヒカレルトコロチナニチフ

ツキ

肥後文獻叢書第三巻

カリキコニヒトノヒナラコトチシリ

肥後國志略火邑、今ノ高田郷本村豐村

シ皆無稽謬妄信ズベカラズ又一高田本村モト

ホムノ

11

不知火崎ト云今ノ松崎村此ナリ八代古跡略記

不知火崎今ノ植柳村也ト然レドモ松崎

明暦二年新墾地植柳中古ノ新田倶ニモト海

中ナリ不知火崎名正史不出豐村前ノ如

シラス ヒサキ

豐原村トス名勝略記:火邑ァ氷川トッ豐村ァ

盆城郡ノ豐廨村トス國志略及云 皇船著岸ノ地

アイハラ

即

ホムノ

ノミ名殘レル歟然レバ今ノ宮ノ原村邊古火ノ

村ナルベシ

・中古以来柴田書紀二豐村トアル一誤

ナリ其ュエ 天皇著岸地火邑豐村兩所アル

ベカラズ且風土記和銅六年勅ニヨリ國々ヨ

其國事蹟記テ獻ゼシ書ナレバ尤之二從ベシ

リ出タル火川ニテ 後の後二村名廢テ川

伊鄉ノ川上り斐ノ字古事記二肥トナドノ如舊火邑ョ

シ書紀ニハト

地詳ナラズ今氷川ト云川アリ出雲國ノ

メヒノ韻ノ音ノイノ字ァ添テニ字トシ鄕名トナ

ヒイトハズレ

シタルナリ然レドモ其肥伊モ ヒトヨムペシ

例多シ

字トセリ其肥伊本火邑ナルヲ好字二換テ肥=改

モト

景行天皇誅三熊襲」巡狩諸國」行幸火國,是等皆火國

ミユキス

クマソチ

合されば日向國の無き方ぞ古本なるべき然るに右

の如く日向國の加りたる本は舊事記によりて後人

のさかしらに改めたる物とこそ思はるれ抑日向國

の此に入らざることは上代に其地はなほ肥國と熊

管國との内にありて未別に一國には立ざりしほど

の傳なるべし及其細證に云上に筑紫島を有面四」

と云て肥國を其一ッに取れり然るに國圖を考るに

肥前と肥後とは海隔とて地接かず正しくニッに分

れたれば面一ッには坂がたき國形なり故考るに右

に引る書紀風土記などの火國の故事は地名に依る

に皆肥後國の地なりしかれば肥國と云しは初はた

肥後の方のみにて肥前の地は本は筑紫國の内な

しがや後に肥國には屬しにやあらむ肥前は筑

前筑後と地接きて此三國は面一ッに取つゞき國

形にて肥後とはく離れたればなりされど此らは

上代のことさだかには辨へがたしたってゝろみに

驚かしおくのみなり

ツ

ツキ

作りされ如此ては上に有三面四」云々とある數に

ブルマキ

シヒネワケト

チ

カタ

には肥國速日別) 日向國謂豊久士比泥別

ハヤヒワケト ムカノクニチ

云々幸三火國渡海之間日沒夜暗不知所」著忽有

火光 遙親行前 天皇勅棹人」日行前火日行前火

見直指而往隨」勅往之果得」著」崖卽勅日火燎之處

此號 何界 所、燎之火亦爲″ 何火 土人奏言此是火

國八代郡邑但未審火由于時詔二群臣」日燎

誅球磨贈而巡筑紫國之時從北火流浦

發船幸„於火國,度】海之間日沒夜冥不.知」所」著忽

言此是火國八代郡火邑也但不知火主,于、時天

詔群臣日今此燎火非是人火所以號 火國 ˛ 知

七

著遙 火光天皇詔挾抄者日直指火處因指」

カギトリニノリ玉フ タニヒノトコロチサセトカレサシテ

ノアカタニ

スニトホグヒノヒカリシニキ

ミナデシテイテマスヒノクニコニヒクレニキ イトクラクシテハテム
トコロ シラ

申自海路泊於葦北小島」云々五月壬辰朔從葦

書紀日景行天皇十八年四月壬戌朔甲子到 熊縣 壬

北發船 到 火國於是日沒也夜冥不知所」

其爾

シカルユエチ

應勅而往果得」著崖天皇下』詔日何謂邑國人奏

ユエハナックル

サクコハ

11

11

ソソ

ホーニ

ユクニテ

「火光」遙麗行前天皇勅棹人日直指火處

ニミュユクサキ

肥前風土記日纒向日代宮御宇大足彥天皇 銀行天

イテマス

トキ

t

11

1

火非俗火 火國之由知所然

ヒノムラナリ

肥後風土記日景行天皇誅 球磨贈唹,兼巡 諸國

シテ

シテ

111 テ ユケト

ユグニ

名義之濫觴也

大和本紀日崇神天皇紀伊國より御船を出し筑紫の

地を巡ります海上に日暮てほとりをしらす舳艫の

國名風土記日崇神天皇夷國征伐のとき梶取に向て

宜く彼は何の火ぞや船頭申さく更に知らぬ火也依

しらぬ火の筑紫とSふ叉御船押浮て彼火見えし

歳の八代に漕付仍て前に火の見えしかたは火

の前と號し後に火の見えし所をば火の後と號す然

を後に火の字を改め肥の字を書なり

11

天皇條及阿蘇系圖二著ス

と

蟲類 此人恒居二穴中賜

賤號日土蜘蛛 健緒純ノ事編年考徵 崇神

11

タウダ

可三合見 1

此山道

古此所マデ八代郡ノ内

リ

山云ト記セ

娑婆髪

神

鄉莊沿華

歟一説ニル

レバ志良伽之浪加美ト讀ミ後二上ヶ谷二轉誤

シラカミ

シラガ

此ナリ然レドモ北種山二白上ナシ枝村二白谷村

アリ其後ノ山ヲ白谷山云風土記=假名付ナケ

肥後獻簑書第三巻

益城郡鯖リ鯖神嶺ト云小川町 北十丁許ニアリテ矢部砥

甲佐堅志田等ヨリ小川ノ官道ニ出ル便路ナリ

蓋上世遼邈其詳ナルコト得テ知ベカラズ 土蛛

蜘釋日本非善隣國寶記曰二神 伊諾

伊冊 相談生三八島其三日

國謂建日向日豐久士比泥別」熊晉國謂建日別二

本居宣長古事記傳=云肥國と云より十三字今は

眞福寺本及一本に依り此處舊印本及延佳本など

クマソノクニチブタケピ サケト

クニチ ヒタケ』 ムカヒトヨク ジ ヒネ

毎面有」名故筑紫國謂白日別豐國謂豐日別肥

カレックシノクニ ヒシラピ ワケト トヨクニチ ヒトヨヒワケ

オモゴトニ

オモヨツ

古事記日次生三筑紫島」此島亦身一而有三面四

ヒトツニシテ

ツクシノシマチ

11 11

日別是肥國後日肥前肥後同

神皇 正統

レノナリニ

ヲ知シム火國ヲ前後に分ッコトハ右ノワケニ非

編者云先字當作

ズズ

按書紀及其ノ正史 崇神天皇西巡ノ事ナシニ

・説妄誕取足ズ故附書シテ其非ナルコト

に吹付ぬ此時御船の前に著たる所を筑前と云後に

著所を筑後と云火の前に見えし所を肥前と云後に

見えし所を肥後と云

11

前後を失ふ時に左の方の後に火見右の方の前に

火見ゆ天皇楫取者に刺してかれは何ぞやと問玉

答申さくしらざる火なりと申す夫よりしらぬひ

のつくしと名付く然るに難風忽吹て御船を磯に吹

つけるを漸にして又押出すに強くしてまた荒磯

H

新撰事蹟通考巻之一

者磯城瑞 籬 宮 御 宇 御間城天 皇

世

ミツカキノミヤニアメカシタシロシメズミマキ スメラミコト

肥前風土記曰肥前國者本與_肥後國,合為一國

11

テ

火從、空 下 燒、山亦惟火 下之國可」名 火

釋日本紀”

ヒノヨリ ソラクダリヤキツルモヤマチモアヤシヒノクダレルクニナレバペシナツクヒノクニ

11

拂 賊 徒 頗無西眷、海上之勳誰人比

双

ハラヒテマダドモチ ルナシ ニシノカタノウレヘイッシキコトタレカナラプモノアラシマタ

既畢參上朝廷 陣行狀奏言云々天皇下詔曰剪

スデニチヘテマキノボリテミカドニアリサマチマチシキ

ノリタマハクキリ

稍々降下著 燒此山、建緒組見」之大懷驚怖 行事

ヤケ ツキミコノヤマニ

ミオトロキ テマツロコト

イタリ

郡白髮山日 晩 止宿、其夜虛空有]火、自然而 燎

ヒクレシカバヤトリツ

オノヅカラニモエツ

オホソラニ

皆悉 誅夷、便巡ņ國裏兼 察 消息、乃到 八代

トゴトニタヒラダス スナハチメグリクチチ アルカタチチ

* 祖 建緒

遣」誅 彼賊衆;建緒組奉」敕 到來

ミコトカップ

オヤ アクミニツカハシキトリニカノアタドモヲ

峯 項ń常逆 皇 不 敢降服; 天皇敕

子ノイタヾキニソムキテミコトニ

ザリキ スメラミコト

マツロハ

蛛?名曰 打熳頸瑗、二人率, 徒衆百八十餘人

チノウチサルウ

クモ

フタリ ヰテモヤ ソノト モガラチカクシ

アサクナノミネ

昔崇神天皇之世、肥後國益城郡、朝來名峰、有土

肥後風土記日、肥後國者、本與 肥前國,合為一國、

ツチ

ヒトグリナリキ

11

也、 崇神天皇之世、始名氵 火國

肥後地

夫肥後也者、天府之國、而 駣 舊與, 肥前, 一國

志略

モト

ニシテ

國郡原始

新撰事蹟通考卷之一

近

可,"横二丈,坑叉六丈許矼梁/如> 古ノ白髪山即

バカリ

上山アリ山腹ニ天満天神ノ祠アリ石門高サ六

ヨム

シ即チ此也 白髪山ハシラが山下訓ベシ八代郡

今其山ナッ肥後國志略二八代郡北山村

ト

ח

按:肥後見聞雜記:益城郡福原村:朝來名山,

云アリ其山ノ奥二石窟アリ大石ヲ以四壁トシ長

三四丈/石亍覆下窟中數十人7入,y恰毛

石城ノ如ク人巧物ニ非ズ今人跡到ルコト罕ナ

y里人鬼/岩屋下呼噗郡中外:朝來名下云山十

卽擧,,健緒組之勳,賜 姓名 曰 火君健緒 純 便 遣

治,此國,因､火日,,火國,後分 兩國爲前後

チテ

ミトヤカデシム

/午:

匕日所｣ 奏之事未曽､所､聞火下之 國 可､謂火國

セル

威靈¸,何得„然 之,更擧熄火 之狀奏聞天皇勅

エデンシカルコーチマダ テカバリピチ

サマチマチセリ

臣辱被„聖命,誅,西戎,不､霑 刀刃 梟師自滅自

1

アダトモラ スアラズ

就„此山,燎之時‶健緒組見 而驚怪參„上朝廷,奏言

11

カマリヒノ如シ

キムマキリテ

朝廷勅遣. 肥君等祖健緒組,伐｣之於｣鉉健緒組奉

勅悉誅引滅之｣兼巡„國裏 觀„察消息,到„„ 於八代郡

白髪山,日晩止,峯其夜虚空有｣火自然嫖稍々下降

デ

人,帥 徒衆一百八十餘人,拒捍皇命不肯降伏,

テトモノ チ

ヒデオホミコーニス

肥後 國 益城郡 朝來名 峯 有ņ 土蜘蛛打猴頸瑗二

系圖附錄五

卷之三十

系圖附錄四

卷之三十一

系圖附錄三

卷之二十九

系圖附錄二

肥後文獻叢書第三卷

五條 宇都宮

島津

大友

少貳 龍造寺

一四

新撰事蹟通考總目錄

系圖之六

卷之十八

系圖之五

卷之十七

系圖之四

卷之十六

系圖之三

卷之十五

系圖之二

卷之十四

系圖之一

卷之十三

雜著

編年考徵十

編年考徵九

卷之十二

卷十 一

編年考徵八

編年考徵七

卷之十

自明德四年至:龜三年,

系圖之七

卷十九

自:永正元年,至三元龜三年,

1

卷之二十

系圖之八

自天正元年,至„同十五年,

卷之二十一

系圖之九

自天正十六年,至 寛永九年1

卷之二十二

系圖之十

卷之二十三

菊池

菊池

系圖之十一

卷之二十四

系圖之十二

卷之二十五

系圖之十三

相良

卷之二十六

家臣

名和

蜂須賀

系圖之十四

阿蘇

阿蘇

卷之二十七

系圖附錄一.

卷之二十八

111]

征西將軍 後醍院

春 天草黨 山上三名字

河尻 大野 臼間 和仁 邊

大橋 宗

鹿子木 三池 竹迫 合志

葉室 小代 大津山 内古閑

隈部

城 出田 赤星 高瀬

詫磨

附早岐

阿蘇家臣 甲斐、北里、早川、

阿蘇夏雪蛇年

大鳥群鳥上元慶二年

怪詞十七年

阿蘇山變積織

肥後文獻覆書第三卷

大風雨,鐵+

菊池城變祆安二年

總

卷 一

國郡原始

卷之二

鄉莊沿革下

錄

卷之三

編年考徵一

卷之四

編年考徵二

卷之五

編年考徵三

卷之六

編年考徵四

卷之七

編年考徵五

卷之八

編年考徵六

卷之九

自正平五年,至三元九年,

自莚元四年,至三正平四年,

自弘安元年,至三元三年,

自延久二年,至建治三年,

自天平十五年,至治曆四年】

自:崇神皇 至三天平十三年,

鄉莊沿革上

1 ii

事蹟通考目安

霜野城

矢崎城

網田城

八八早川城

二八年年年年

三八

山鹿城峒

城三年

萩原長野

天正十六年

隈本城

同二十年

天正十六年

大永三年

七六年正年錄年交正永年

長五年

木原城宇紅

延元年

五年

城四

高田日奈久正十三年

豐福城

津守城 天授四年天

裡山十五年

天正〈十年

南鄉城天証元年

御船甲佐嶽城興國六年

峒

天正十六年

文明十五年 天正十六年

城誕玩

正平二十年 穴元年

玩

八代城延元元年

菊池城改武天皇二年 天安 年 貞觀十七年

元慶三年

著雜六

驛傳

二重牧,

窟继

大野關

河尻城計

田浦城5

川城誕黑駁城津奈木城垌

古戰場

鳥栖

原

|二延元延

年元年元

城土城幕平 汝明十

七年

矢部城桐十三年

犬塚

原

筑後國豐

同國香

合志原

十六年

筑前國蜷打年

筑前國生松原嘉吉

九年

堅志田城調計

木山城垌十三年

稗方原涎元

筑前國大原

雷雨地震

天平十

六年

神靈池變涎暦十五年

见喜二年

元中五年

11

暦仁元年 七年 元中四年

天長二年

和七年 貞觀六年

蝦蟇陣列 二年

-神護景

木原赤熊文明+

年

水島臺

++

同國長者原

七年

三年

唐川 5

佐敷城峒

十六年

三年

寺肥後文獻叢書第三卷

寺

瀨佐

年年二社嶽代神

河

高 和

神

十年朝天

七承

社

常淨 院妙武

樂水

社六建五天三天

年年長年

女四承 社 自社年同上同

年觀伊藤蒲會宇菱

邊

崎

土

宮宮

二安二延延

年貞年喜年曆

六正五承

年年

晴晴

神三宮宮

宮三欽十景

二天四承十明行

年安年和二天天

年皇 皇

年慶

甲川蘇山 山 山津嶽津

上同十同三大上同三應三同年同元安

年二年永 年永年二二年貞

++

故

熊廟

大鼓大 長穿火跡

渡瀑宅 渚窟邑

野遺湖

牧

交趾元正二建

六頁一天

年明九女三年年治 ˙年觀年平

十年明年永

十景原國

二行始郡

6年天

+

皇

年十

大大:

赤知

山

魚火

上同二

年龜

遺上同闕闕三寬古

古 三 天同上同

元延二壽年和碑 宅+

年元年永

五天皇安八

年長二閑年年

龍金熊白丹

山

津

八元九天五女上同上同五正元延

年和年文明

年年元

++

+

相廣

行 國 孝 福輪

~~寺寺寺寺寺寺寺~~

三天七七正三正二元五正二女

年正年明年年年年年永=

++

年營

成寶安

大

願慈成

寺寺就寺 寺寺寺

入明十應 寺 二元元元弘元天

年應三永六正元年享年安年福

年三年挙

年天

新撰事蹟通考目安

閩書

高皇帝御製文集

登壇必究

皇明資治通記

大明一統志

宋志

漢書

福王寺過去帳

碧巖寺過去帳

圓德寺位牌銘

後醍醐天皇御位牌銘

淨水寺碑銘

悟真寺記

淨土能仁寺記

滿願寺記

寶成就寺記

日輪寺記

安國寺緣記

阿彌陀寺記

大慈寺記

往生院

國分寺記

正觀寺記

相良寺記

廣福寺記

飯田山緣記

釋迦院緣記

願成寺棟札

懲毖錄

圖書編

深水宗芳墓標銘

光福寺位牌銘

& 萬壽寺古過去帳

安國寺過帳

史記

隋書

明史

月令廣義

國官

國造

郡領

地頭

人物

健

山川

舍利尼

能因

朝來名峰

元年

水島 十八年

始郡

火流浦

F

同天皇

總計三百四十二種

目安

元長二寶皇崇

年元年龜/神

朝天

元文十天皇崇

年治年長/神

朝天

·二年

寬和

三年

仁平武備志

五雜組

菱形池欽明天皇

味生池和翔

-二年

海東諸國記

神靈池涎嚼十五年

應永十三年

九

元年

鴈迴山軒

天皇

野坂浦峒

綠河 十二年

景行天皇

白髪山銅

嘉應二年

源爲朝

元年

檜垣女 年

日羅

敏達天皇

守護

文治

國司守天師十

志賀家文書

佐田家文書

藤崎宮文書

甲佐宮文書

阿蘇家文書

名和家文書

北坂梨惟定申狀

惠良惟澄申狀

菊池武朝申狀

薩州舊傳書

山上三名字記錄

悟真寺古記

下田覺書

坂梨惟延筆記

同古老日記

阿蘇系譜

沙彌洞然長狀

名和傳譜

將軍家譜捉利織田

肥後文獻叢書第三卷

大內系圖

大成武鑑

海東文書

藩翰譜

豐後文書

相良家記

阿蘇家記

宗像大宮司文書

阿蘇權大宮司文書

早楠村文書

阿蘇家傳略

牧秀廣夢記

石貫廣福寺文書

阿蘇山衆徒注進狀

高瀬清源寺文書

阿蘇山奇瑞記

菊池正觀寺文書

玉泉寺記

小國滿願寺文書

蜂須賀舊記

日本靈異記

西安寺記錄

神咒經

葉室親善申狀

同泩進狀

五條家文書

仁和寺御傳

·阿蘇宮文書

日本高僧傳

阿蘇山文書

名僧行錄

郡浦宮文書

續洞上諸祖傳

小代家文書

絕海錄

三池家文書

圓光大師行狀翼贊

僧官補任

天台座主記

詫磨家文書

池邊寺觀音講式

池邊寺緣起

聖光上人傳

大智禪師偈頌聞解

建撕記

洞上諸祖傳

本朝僧寶傳

元亨釋書

東寺長者補任

釋家官班記

諸門跡譜

聖德太子傳曆

山北西安寺文書

菊池南福寺文書

高瀬願行寺文書

高瀬談義所文書

押方家文書

祭主家文書

山上三名字文書

峰須賀家文書

一萬田家文書

新撰事蹟通考引用書目

肥前國人/著夕元九州軍記下云書7 リ肥後國1

九州治亂記

九州記

佐敷一亂物語

梅北一揆次第

梅北物語

響原戰記

甲斐宗運記

隈莊合戰記

竹迫落城記

田中落城記

大津山事記

小庵覺書

籠城次第前後覺書

城村城合戰記

城村葦北事跡考

葦北陣迹遺草

””

又起衰記古蹟略記等アリ杜撰!書取ニ足サルノ

八代人境考

八代事跡記

考

小川年代記細集

八代城小川年代記

山本郡霜野雜記内古閑傳記玉名郡山鹿郡アタ

リノ事ヲ誌セシュ中原雜記中村淨心覺書合志郡

合志川芥等ノ書アリ皆取ニ足ズ

菊縣溫故

菊池風土記

南關記

南關紀聞

拾芥圃記

田賦考

事跡取ヘキ所ナシ

大友興廢記

日田傳記

島津家傳

薩州分國演舌記

閑暇雜書

中山傳信錄

萬葉仙覺抄

後撰和歌集

新葉集

歌仙傳

名所和歌手引

袋草子

新撰姓氏錄

帝王系圖

諸家系圖纂

平氏系圖

足利系圖

大村系圖

松浦系圖

㞢

秋月系圖

宗系圖

有馬系圖

藤原氏系圖

源氏系圖

尊卑分脈

皇胤紹運錄

大和物語

檜垣家集

十訓抄

李花集

清原元輔家集

拾遺和歌集

萬葉集

南島志

薩州兵亂記

島津世錄記

豐西記

鎮西要略

女院小傳

武家盛衰記

俗說贅辨

花押

白石伸書

讀史餘論

應仁記

上月記

豫章記

室町日記

船上錄

南朝軍談

梅松論

祇園執行日記

元弘日記裏書

太平記

承久記

蒙古襲來合戰繪詞書

長門本平家物語

源平盛衰記

肥後文獻叢書第三卷

平家物語

後宮略傳

義經記

加茂皇太神宮神領帳

祖書網要刪略

本朝神社考

保曆間記

八幡本記

參考大平記

關城書裏書

阿蘇秕日記

阿蘇社傳

櫻記

祇園社記

吉野拾遺

伊倉八幡宮記

宇土三宮緣記

花榮三代記

武德編年集成

行在或問

德川御年譜

應永記

赤松記

末森記

沿革圖說

慶長日記

大閤記

菊池略傳

佐々傳記

新野問答

肥後國志草稿

和漢三才圖會

肥後治亂記

本朝高名記

肥後見聞雜記.

合類節用集

貴女抄

錦囊移

宮中秘策

廳省秘錄

拾集昔語

拾玉雜記

肥後古城主考

肥後國志略

肥後地志略

菊池傳記

清正記

關原記大全

駿府政事談

武德安民記

水俣彌八宮緣起

妙見社綠記

城野松尾社記

藤崎宮記

阿蘇宮由來略

宇佐宮綠起

八幡愚童訓

神祇拾遺

皇太神宮儀式帳

*

但撰事蹟通考引用書目

· 義解

延喜式

本朝通紀

皇朝史略

逸史

編年要略

歷代皇記

皇代記

椿葉記

神皇正統記

日本紀略

類聚國史

三代實錄

續日本後紀

續日本紀

古事記傳

舊事記

引用書目

古事記

拾芥抄

江家次第

百鍊抄

樵談治要

日本書紀

日本後紀印本

正本殘缺

南朝公卿補任

文德實錄

釋日本紀

大日本史

扶桑略記

續神皇正統記

大鏡裏書

職原抄大全

和漢合運

古曆便覽

玉海

薩戒記

台記別記

日次記

皇記

皇年代略記

太田康有建治三年記

帝王編年記

善隣國寶記

日本逸史

國名風土記

史徵

豐後風土記

續皇朝史略

山城名勝志

本朝通鑑

東鑑脫漏

類聚三代格

關東評定傳

和名類聚抄

鎌記將系拔華

五

扶桑見聞私記

將軍執權次第

參考保元物語

東鑑

肥前風土記

出雲風土記

大和本紀

常樂記

宣胤記

圜大曆

台記

御堂關白道長記

朝野群載

皇和通曆

和漢年契

歴名土代

公卿補任

世諺問答

年中行事

公事根元

一諸文書舊記等に載る所某と某の地に戦こと分明な

る者は是を本文に係全長きるのは下に低書して

其徴を著す叉戦地及び年月を載るといへども敵人

の名を出さず諸書校合によりどころなきるのは

一凡他國の戦跡といへども此國の人これに預る者は

書菊池武重 京師の役或は筑前國多々良濱同

國大原筑後石垣山豐後國高崎等の類是なり

一系圖は類本又は實録等によりて之を考訂す類本な

きものは疑ありといへども姑舊文にしたがう

一喪葬分日凡百官身亡者親王以下三位以上 稱」薨五

位以上皇親稱」卒六位以下達二於人稱死今これ

にふ

ブル

一凡國家の制度物に係るものは大小悉く以てこれ

を書す菊池家の治亂盛卒歳相良名和阿蘇及び菊

池の元老重臣の死書」其餘取捨類を以て推べし

一凡此書南朝を正統とす故に南朝の年號を用ゆ北朝

の年號は其下に註して合覽に便りす

鎮西探題亦九國二島の成敗を司る故に其進退こ

れを書す島津大友少貳龍造寺は各我國内を兼顔す

るの主故に卒年等皆載」之検閲に備ふ

肥後文獻叢書第三巻

一名山大川故迹名所城地等は其本篇目の出る所に

就てこれを抄書し又是を附註す詳略は其宜に従ふ

天保十二年辛丑春正月集録終 八木田政名

一神社佛寺の興造修建悉地志略に出故に不書然

共大社舊祠古寺霊場或は諸書の略或は差謬ある

∞の其梗概を誌す

其本年の末に是を附書して後の攷に備ふ

一古今を鑑る者は史なり史を徴するものは文書なり

文書を證とする者は花押な~然に文書∞赤一概に

信べからす其時代により文體書法のあるを考へ

叉花押墨色を見て其真贋を知るべし菊池郡東福寺

圓通寺八代郡海士江の西雲寺文書の類深く考べき

のみ

新撰事蹟通考凡例

一凡此書首に國郡原始鄉莊沿革を著し次に編年考徵

を擇次に諸家系圖を附す書編一章事長き∞のは本

文其大概を書し其要を擡書を下に低書す然とも

是を參取

し載て其闘を補ひ以て異聞を博む

もっとも

ほろびうせ

一古は列國各史官あらて時の事を記ことを掌る故に

舊記典籍頗る多し和銅中勅を奉て諸國風土記を上

國内の古事來歷悉く載之中葉以降朝廷陵夷し

諸國の府衙皆廢す爾後國郡滋々糜弊し應仁以後

は干戈相踵攻伐已歳なし古書舊錄∞盡く紛散亡失

しるす

凡例

新撰事蹟通考

せり此國の遺事∞亦逸て今存するものは僅に六

國史に載る所及び釋日本紀僊仙覺が萬葉の抄に引

肥後風土記三四條のみ其他根據する所炁少し故に

其後の事は日本紀略大日本史以下菊池佐々傳記等

の群書に據て是を鍛揚し或は舊族世襲の家及び名

山靈區の所藏文書記録を捜索てこれを選定す又街

説といへども其誌すところ正∞のはの旨意に關係ず然と源頼朝覇府を鎌倉に建つ天

下の大勢此に至て一變す爾來今に至り賞罰黜陟

號令制法悉く將軍の帥府に出づ故に代々將軍除拜

薨卒等これを記して書の綱要とす北條義時鎌倉の

執權となりて軍國の機務を掌る其命する所諸國皆

奉」之因て義時以往其職に居る∞の其任罷を書す

三

づから

一凡此書我國の事蹟を主とす幕府他邦等の事は此書

叉直に其條末に細註す其眞傷明晰なる∞のは全く

取捨を用ゆ此例にあらず

あきらか

一引用の書數本而して其事矛盾或は異説あるものは

正史實録によりてこれを校合し若繆あるものは

更に訂補を加ふ疑ありといへども攷ふべき書なく

して決することを得ざるものは倶に幷存し或は暫

某の書に従とし各條の下に按を設てこれを低書し

一凡此書本據なきものは取らず故に一條ごとに必其

出る所を註す

詳審にせず或句を摘章を省き其精要を経てこ

れを載本書を照し考ふべし

つまびらか

つみ

書或は事實に盆なくして繁冗重複するものは略し

證書弾く是を載擧るに非ず世に多く流布する所の

天保名和辛丑三月穀旦

謹識

臣

矣、臣眞民竊伏讀之、謹叙 其意 如此云、

ンテル

カニテ

シト

治‶國之用, 者豈謂 小少哉非, 程‶子所謂天下無之不以欠. 事之比,可.
觀

11

ンヤ

チ ル

キモ

機之暇從容把此編靜供清覽 則足 坐以快 指掌之明, 也然則其有.補於

カニセハ

テ

也苦、積,思也久而其業至今日, 而大‶成也、伏願 臺下當,護 持重‶寶
之旦萬

ラン

チ スルノ

11.

チ

衰、昭¯々乎如､在目¯中,矣、嗚-呼簡而盡矣、明而備矣、於是乎、八木田氏之用力

力二

ルカ

ルヤ ラチ

11

ハル

11

續¯興¯廢綱擧目張、辨」 誤歸正上下數‶千百¯年之間、提揭闔¯那之名物興

原¯始郡邑之沿¯革、以至城池戰-壘神社寺-院之舊、故家世族系譜之斷-

テルマテ

々焉明¯通熟察、而後可以施,其用, 而-已矣夫如 斯書則凡我東¯肥建國之

トシテ

〃

カ

十二年眞民新撰事蹟通考序

シテ

謀永¯圖以不、遑旰食,也、必先擧 其所 重寶之照 而置 之胸‶中指之掌上

マアラ

1

スツ

11

スル

、

是以、人-君日-夜黽-俛以求,所以護持其重實,之道與百執事 揆度 良

スル

ㄩ必軾 ¯版者 所以重人-民,也、先王寶、之、聖人重、之、其寶極矣、其重至矣、

ナリンスル

ンスルレリ

ンス トシ チ

チ

三焉、日土地人民政‾事、故先王營營 宮 必先建 社稷、 所以重 土地, 也孔子

リンスル

ナム

チ

上 臺下使臣名和眞民賜伏 一辭 書, 其首臣 恭惟、孟子日、諸侯之

ツル

ルコチ テ

人事日系圖 設 凡例十有四條、引-用書三百四-十二種‶繕寫以

ル

新撰事蹟通考其爲,書 三大部地理日郡國原-始、鄕-莊沿革天-時日

11

タテ 手不. 廢抄録者數‾十年如一日,云、天-保十二年辛丑正月、始成 、書、名日

11

フ

メテス

シト

至斷-碑殘 簡之遺 一旁搜博采、莫不蒐閲而盡之也、蕎

冠而至, 今

而至今

ルマテ

レチ

故家舊族之事蹟旁證之乎世史家-乘稗官之諸書又躬履歴而親聞見

ハラ

藩八 木 田氏政 名、世爲武職之士至政名以其餘力; 考„ 索邦内郡縣城 ¨壘

11

テ

新撰事蹟通考序

終

肥後文獻叢書第三卷

目

11

次

和田嚴足集補遺

和田嚴足歌集

同附錄

民草婦利

菊地風土

記

新撰事蹟通考

肥後文獻叢書第三卷目次

1

·七〇二頁

…六六四頁

六五八頁

六三一頁

四七六頁

頁

識

者

編

明治四十三年二月

一同補遺は、彌富濱雄氏が、宇野氏の編せる嚴足集に漏れたるを補ひて、本叢書の爲めに、特に寄せ

られたるものなり、委しきことは其跋文に見ゆ、

り、其の名の足は泉樽の借字にて眞震は酔態を云へるなりといふ、

ツル

マユリ

イッタリ

一和田殿足集は、宇野東風の編する所、家の集、寄鏡述懐、二十日草、酔のすさ等の四種より成る、

足は父の名を眞震、通稱を震七郎と云ふ、弓削平八の二男にて、和田團四郎に養はれて其の家を

繼げり、長瀬眞幸に従ひ皇典歌文を學び、同學中島廣足と雙璧と稱せらる、酒を嗜みて酔郷を愛せ

一八代蘆北の歌は、 編者の名を詳かにせず、書中に伊形質の歌あり、且つ其の體、亦民草婦利と相似た

り、或は赤質の編する所に係るか、今姑らく民草婦利の後に附す、

を以て釁に上り、藩3亦常度を以て之れを規せざりしたいふ、天明七年六月、四十三歳にて歿せ

り、其の遺著に靈雨山人集あり、本叢書第五巻に登録す、

例 言

1

一民草婦利は、伊形質の編する所、民間の風俗を歌ひ、其の歌意を説明せしものなり、質は字を大素

通稱を莊助と云ひ、靈雨山人と號せり、詩歌を善くし、國史に通せり、天質高朗にして人間に局促

するを屑とせず、藩學時習館の師員と爲りしも、城下に住するを好まず、遠く跡を北鄙に届け、時

一新撰事蹟通考は、八木田政名の撰する所なり、政名は通稱を十郎助と云ひ桃水と號せり、世~細川家

に仕ふ、早歳志を發して肥後の史蹟を捜索し、六十二歳の時に至り、本書を成せり、持て時君泰殿

公に上る、公其の勞を嘉して御紋附縮緬の羽織を賜ふ、弘化四年十月五日、六十九歳にて歿せり、

一菊池風土記は、澁江公正の撰する所なり、公正は通稱を宇内と云ふ、菊池の人なり、父を公豐と云

ふ、父子竝びに儒雅を以て安永寛政の際に聞ゆ、公正菊池勤王の故土に生れ、其の流風餘澤、久うし

さに竭きんとするを悲み、其の文献のすべきものを考えて此書を作れり、一家の私撰、固よ

漏なしとせざる∞、 鄉人を以て鄉事を記す、其間自ら親切懇到、他の企及ぶべからざるものあ

り、其の家世の如きは、具さに本書巻末に見えたれば此には記せず
、

一本巻には新撰事蹟通考三十一巻、菊池風土記八巻、民草ふり一番
、同附録一巻、和田殿足歌集一巻、

同補遺一巻、都べて六種四十三巻を探したり、其の解題大要左の如し、

肥後文獻叢書第三巻例言

216.4

398

V. 8

肥古城野藤

武

獻

貞東

吉風男

同

編

文

東京 隆文館蔵

箴

版

書

三巻

阿巴志

貞車

笙

箴

版

後

獻

}

1

1

!

THE LIBRARIES

COLUMBIA UNIVERSITY

JAPANESE COLLECTION